

荒砥前田 遺跡

一般国道 17 号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その 1）報告書

古墳時代前期集落遺跡の調査

2 0 0 9

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 17 号バイパス、通称「上武道路」は埼玉県深谷市と本県前橋市を結ぶ基幹道路として、県道前橋大胡線までの区間が開通・供用されております。

上武道路の通過地域には多くの埋蔵文化財が包蔵されています。道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査が実施され、国道 50 号までの区間で 35 もの遺跡の内容が明らかになりました。

平成 11 年からは国道 50 号以北の建設工事が始まり、当事業団が主体となり埋蔵文化財の発掘調査を進めております。本書はそのうち、平成 12 年から 15 年にかけて発掘調査を実施した、前橋市荒口町にある荒砥前田 遺跡の発掘調査報告書です。

荒砥前田 遺跡では、赤城山南麓の台地縁辺の微高地で、古墳時代前期の集落を中心とした遺構が多数みつかりました。谷部では古代から水田がつくられていたことも判明しました。また、女堀の掘削排土の一部を調査しました。これまで報告してきた今井道上 遺跡や荒砥北三木堂遺跡とともに赤城山南麓地域の古墳時代の農耕集落研究等に資する重要な調査成果を得ることができました。

発掘調査から報告書刊行まで、国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、一方ならぬご指導・ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のため多くの人々によって有効に活用されることを願い、序といたします。

平成 21 年 9 月 11 日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須 田 栄 一

例 言

1. 本書は、平成 12 年度・13 年度・14 年度に発掘調査を実施した一般国道 17 号(上武道路)改築工に伴う荒砥前田 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 荒砥前田 遺跡は、群馬県前橋市荒口町 217～221、1090～1095、1112～1115、1116～1120、165-1、166-1 番地他に所在した。遺跡名は、昭和 56 年度に荒砥南部圃場整備事業にともなって発掘調査された「荒砥前田遺跡」に隣接する同じ遺跡であることから、 を付して命名した。
3. 発掘調査は、国土交通省の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期 間 平成 12 年 4 月 3 日～平成 13 年 3 月 31 日

平成 13 年 4 月 1 日～平成 14 年 3 月 31 日

平成 14 年 7 月 1 日～平成 15 年 2 月 4 日

管理指導 小野宇三郎(理事長)、吉田豊・赤山容造(常務理事)、神保侑史(事業局長)、住谷進・萩原利通(管理部長)、能登健・巾隆之(調査研究部長)、小山友孝・中沢悟(調査研究課長)、大島信夫・植原恒夫(総務課長)

事務担当 小山建夫(総務係長)、高橋房雄(経理係長)、須田朋子・吉田有光・森下弘美(係長代理)、片岡徳雄・田中賢一(主事)

今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、

松下次男、吉田 茂(補助員)

調査担当 12 年度 石塚久則・小島敦子・関根慎二(主幹兼専門員)、金子伸也(専門員)、池田政志(主任調査研究員)、金井仁史・今泉晃(調査研究員)、前田和昭(嘱託員)

13 年度 小島敦子(主幹兼専門員)、今泉晃(調査研究員)

14 年度 田村公夫・今井和久(専門員)、平方篤人・岡部豊(主任調査研究員)

4. 発掘資料の整理および報告書の作成は、国土交通省の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成の期間・体制は次の通りである。

期 間 平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日

平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日

平成 21 年 4 月 1 日～平成 21 年 6 月 30 日

管理指導 高橋勇夫・須田栄一(理事長)、木村裕紀・津金沢吉茂(常務理事)・相京建史(事務局長・資料整理部長)、萩原勉(総務部長)、笠原秀樹(総務部長・総務 GL)、西田健彦・飯島義雄(調査研究部長)、佐藤明人・石坂茂(資料整理部長)、大木紳一郎(資料整理第 2 GL)、石井清・佐嶋 芳明(経理 GL)

事務担当 須田朋子(係長(総括))、斎籐恵利子(主幹(総括))、柳岡良宏(主幹(総括))、矢島一美・田口小百合(主幹)、斎籐陽子・高橋次代(主任)

今井もと子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・武藤秀典(補助員)

編集・本文執筆 小島敦子(主席専門員)

遺構写真 調査担当者

遺物写真 佐藤元彦(係長(総括))

遺物観察 縄文土器：原 雅信(普及情報GL)、弥生土器：大木紳一郎(資料整理第2GL)、
土師器・須恵器：小島敦子、陶磁器：大西雅広(主任専門員(総括))

縄文石器：岩崎泰一(主任専門員(総括))、中近世石製品：小島敦子

板碑：新倉明彦(主任専門員(総括))、骨歯：檜崎修一郎(専門員(総括))

保存処理 関 邦一(係長(総括))、小材浩一・津久井桂一・多田ひさ子(補助員)

器械実測 田所順子・伊東博子・岸 弘子(補助員)

遺物整理および実測図作成

木暮芳枝・吉澤照恵・南雲繁子・生巢由美子・大嶋 緑・宮澤房子(補助員)

デジタル図版作成 五十嵐由美子・高梨由美子・下川陽子(補助員)

デジタル写真図版作成

牧野裕美・市田武子・安藤美奈子・酒井史恵・廣津真希子・荒木絵美

矢端真観・横塚由香(補助員)

委託業務 発掘区内土壌のテフラ・植物珪酸体・花粉分析：古環境研究所

出土炭化材の樹種同定：パレオ・ラボ

巴形銅器の自然科学分析：別府大学文化財研究所(平尾良光教授受託研究)

5. 石材同定は飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。

6. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言を得た。記して感謝の意を表します。

赤塚次郎、伊勢屋ふじこ、倉澤正幸、堤 隆、能登健、平尾良光、深澤敦仁、峰岸純夫(五十音順・敬称略)
群馬県教育委員会、前橋市教育委員会

また、整理作業においては当事業団職員 原雅信、大木紳一郎、神谷佳明、徳江秀夫、大西雅広、岩崎泰一、
新倉明彦、齊田智彦の助言を得た。

7. 記録資料と出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

1. 荒砥前田 遺跡内のグリッドの座標値は国家座標(座標第 系)を用いて測量した。1 - 98 - A - 1の
座標は、旧座標で $X = 40.90\text{km}$ 、 $Y = - 60.70\text{km}$ 、新座標にすれば概ね $X = 41.25\text{km}$ 、 $Y = - 60.99$
kmである。

2. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用した。

3. 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を使用している。

4. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞ
れにスケールを付した。

遺構図 住居 1 : 60 住居炉・竈 1 : 30 掘立柱建物 1 : 80 土坑・井戸 1 : 40

遺物図 土器 1 : 3 土器拓影 1 : 3 石器・石製品 1 : 3 または 1 : 2 大型石器 1 : 6

小型石器 1 : 1

5. 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版とも一致する。

6. 図中で使用したスクリーン等には以下のことを表す。

遺構図 灰・炭  焼土  粘土  攪乱 
遺物図 繊維包含縄文土器  石器磨り面  写真のみ掲載遺物

7. 竪穴住居の平面図のうち、床面の図を上あるいは左に配置し、掘り方面の図を下あるいは右に配置した。
8. 竪穴住居の横断面図は平面図の下方に編集したので、反転トレースしたものがある。特に、北側から記録した東西方向の断面図については、これによる。したがってこれらは土層断面の写真と一致しない。また、竈の断面図は四分法で記録し隣り合った部分を反転合成したので、同様に土層断面写真とは一致しない。
9. 遺物写真図版の倍率は、土器は原則として 1/4、石器のうち礫・剥片石器は大きさに応じて 1/3 あるいは 1/2、石鏃等の小型のものは 1/1 に近づけるようにした。
10. 遺物の重量の計測にあたっては 6000 g までは 1 g 単位、20kg までは 50 g 単位、20kg 以上は 100 g 単位の秤を使用して計測した。
11. 各地図の使用は以下のとおりである。

- 第 1 図 国土地理院発行、20 万分の 1 地勢図「長野」・「宇都宮」
第 2 図・第 7 図 国土地理院発行、2 万 5 千分の 1 地形図「大胡」
第 3 図・第 6 図 前橋市発行、平成 5 年・昭和 49 年測図現形図 47・57
第 5 図 『群馬県史』通史編 1 付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡』第 5 図を修正して使用。

12. 各遺構の記述にあたっては以下のような点に留意して記述した。

住居 位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形にほぼ分類して記載した。規模は遺構確認面での上場で計測した。() を付した数値は復元値である。なお、竈付設住居では竈の部分を含んでいない。面積は床面積とし、住居の下場でプランメーターの 3 回平均値を計測した。方位は北方向に最も近い主軸あるいは壁の方向を計測した。床面は傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。本遺跡の埋没土中にあるテフラについては、それぞれの名称と記号を併用した。特に写真図版では記号を用いている。使用したテフラの名称・記号・降下年代は下記のとおりである。[浅間 B テフラ = As-B(1108 年)、榛名二ツ岳火山灰 = Hr-FA(6 世紀初頭)、浅間 C 軽石 = As-C(3 世紀末)] 炉・竈はそれぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。柱穴の規模は長径×短径×深さで示した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。所見では各住居の調査から考えられることながらあれば記述した。また出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載したが、表現は不統一である。縄文時代は土器型式名、古墳時代については前期・中期・後期の大別で表記した。

その他の遺構 土坑・溝・墓等については、住居に準じて記述した。

谷部・低地部の遺構 谷部・低地部は、その幅によって呼び分けた。1 区は荒砥川低地に注ぐ小支谷であることから谷部、2・3 区および 4 区は荒砥川の形成した低地部の一部であることから低地部とした。発掘調査ではそれぞれの谷部・低地部で、火山灰や洪水堆積物層を鍵層として遺構面を検出した。報告でもこの鍵層ごとに遺構面を記載した。記載は各鍵層下面の状況を説明し、次に各面で検出した個別遺構について詳述した。遺構の記載については住居等に準じて行った。それぞれの谷部・低地部の共通土層断面(付図 1・3 と第 168 図) には大文字の断面記号を付し、鍵層は共通の色で表した。各面の遺構の断面記号は共通断面記号と区別するため小文字を付けている場合がある。

目 次

序

口絵

例言

凡例

第1章 調査に至る経過

1. 国道17号改良工事と発掘調査 1

第2章 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

(1) 遺跡・調査区・グリッドの設定 3

(2) 基本土層と遺構確認面 6

(3) 発掘調査の記録 9

2. 発掘調査の経過 10

3. 整理作業の経過 12

4. 整理作業の方法 13

第3章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と地形

(1) 赤城山南麓の地形 15

(2) 荒砥前田 遺跡の立地 16

2. 周辺の遺跡分布 16

第4章 1区の遺構と遺物

1. 概要

(1) 1区谷部 25

(2) 1区微高地部 27

2. 1区谷部の遺構と遺物

(1) 溝群 27

(2) 第1洪水層下面 32

(3) 浅間Bテフラ下面 39

(4) 第2洪水層下面 40

(5) 榛名二ツ岳火山灰下面 47

(6) 浅間C軽石上下面 49

3. 1区微高地部の遺構と遺物

(1) 土坑群 61

(2) 井戸 61

(3) 溝 61

(4) 黄色砂層下面 65

(5) 土坑 66

(6) 竪穴住居 67

第5章 2・3区の遺構と遺物

1. 概要

(1) 2・3区微高地部 83

(2) 2・3区低地部 83

2. 2・3区微高地部の遺構と遺物

(1) 井戸 85

(2) 復旧溝 92

(3) 浅間Bテフラ下凹地 92

(4) 土坑 92

(5) 竪穴住居 104

(6) 掘立柱建物 221

(7) 溝 226

(8) 竪穴状遺構 228

(9) 畠跡 230

(10) 縄文時代の遺構 231

3. 2・3区低地部の遺構と遺物

(1) 第2洪水層下面 233

(2) 第3洪水層下面 242

(3) 第4洪水層下面 246

(4) 浅間Bテフラ下面 249

(5) 第5洪水層下面 250

(6) 第6洪水層下面 250

(7) 黄色砂質土面 250

第6章 4区の遺構と遺物

1. 概要

(1) 4区低地部255

(2) 4区台地部255

2. 4区低地部の遺構と遺物

(1) 第2洪水層下面257

(2) 第3洪水層下面266

(3) 浅間Bテフラ下面266

(4) 第5洪水層下面272

(5) 第6洪水層下面275

3. 4区台地部の遺構と遺物

(1) 権現山277

(2) 墓地280

(3) 洪水層上面296

(4) 古墳時代遺物包含層302

(5) 褐色土上面311

第7章 女堀

1. 概要314

2. 3区的女堀316

3. 4区的女堀317

第8章 遺構外の出土遺物

1. 概要328

2. 弥生土器について328

3. 縄文時代の遺物331

第9章 自然科学的分析

分析の目的と試料採取地点340

1. 荒砥前田 遺跡1区における自然科学分析342

2. 荒砥前田 遺跡2・3区低地部における自然科学分析362

3. 荒砥前田 遺跡2・3区微高地部における

自然科学分析383

4. 荒砥前田 遺跡4区における自然科学分析391

5. 荒砥前田 遺跡古墳時代住居出土炭化材の

樹種同定418

6. 荒砥前田 遺跡2区21号土坑出土炭化材の

樹種同定422

7. 群馬県荒砥前田 遺跡出土の巴形銅器に

関する科学的な調査425

8. 荒砥前田 遺跡出土人骨431

9. 荒砥前田 遺跡出土馬歯434

10. 荒砥三木堂 遺跡出土人骨436

第10章 発掘調査の成果と課題

1. 調査の成果438

2. 古墳時代前期の土器編年442

3. 古墳時代前期の集落構成とその変遷453

4. 2区12号住居出土巴形銅器について463

5. 古代の水田開発について465

6. 女堀の掘削年代について467

参考文献469

遺物一覧表471

遺物観察表478

報告書抄録522

写真図版

付図1 1区谷部共通土層断面図

付図2 1・2区微高地部全体図

付図3 4区低地部共通土層断面図

付図4 4区低地部第2洪水層下面全体図

付図5 4区低地部浅間Bテフラ下面全体図

付図6 4区台地部権現山墓地全体図

挿図目次

第 1 図	群馬県地勢と荒砥前田 遺跡	1	第 70 図	2 区 3 号住居 (1)	116
第 2 図	上武道路と荒砥前田 遺跡	4	第 71 図	2 区 3 号住居 (2)	117
第 3 図	荒砥前田 遺跡の発掘区	5	第 72 図	2 区 3 号住居 (3)	118
第 4 図	荒砥前田 遺跡の基本土層	7	第 73 図	2 区 3 号住居出土遺物 (1)	119
第 5 図	群馬県中央部の地形と荒砥前田 遺跡	15	第 74 図	2 区 3 号住居出土遺物 (2)	120
第 6 図	荒砥前田 遺跡の立地と周辺の発掘された遺跡	17	第 75 図	2 区 3 号住居出土遺物 (3)	121
第 7 図	荒砥前田 遺跡周辺の遺跡	19	第 76 図	2 区 3 号住居出土遺物 (4)	122
第 8 図	荒砥前田 遺跡周辺の古墳時代の遺跡分布	23	第 77 図	2 区 3 号住居出土遺物 (5)	123
第 9 図	1 区全体図	26	第 78 図	2 区 4 号住居 (1)	125
第 10 図	1 区谷部南端溝群出土遺物 (1)	28	第 79 図	2 区 4 号住居 (2)	126
第 11 図	1 区谷部南端溝群出土遺物 (2)	29	第 80 図	2 区 4 号住居 (3)	127
第 12 図	1 区谷部南端溝群出土遺物 (3)	30	第 81 図	2 区 4 号住居出土遺物 (1)	128
第 13 図	1 区谷部南端溝群出土遺物 (4)	31	第 82 図	2 区 4 号住居出土遺物 (2)	129
第 14 図	1 区谷部第 1 洪水層下水田	33	第 83 図	2 区 5 号住居 (1)	131
第 15 図	1 区谷部第 1・第 2 洪水層下水田断面図	35	第 84 図	2 区 5 号住居 (2)	132
第 16 図	1 区谷部浅間 B テフラ下面	37	第 85 図	2 区 5 号住居と出土遺物 (1)	133
第 17 図	1 区谷部浅間 B テフラ下面牛跡	39	第 86 図	2 区 5 号住居出土遺物 (2)	134
第 18 図	1 区谷部 37 号・43 号土坑土層断面	40	第 87 図	2 区 5 号住居出土遺物 (3)	135
第 19 図	1 区谷部第 2 洪水層下水田	41	第 88 図	2 区 5 号住居出土遺物 (4)	136
第 20 図	1 区谷部第 2 洪水層下水田面 19 号・20 号溝土層断面	43	第 89 図	2 区 6 号住居	138
第 21 図	1 区谷部第 2 洪水層下水田の溜井と水口	44	第 90 図	2 区 6 号住居炉と出土遺物	139
第 22 図	1 区谷部第 2 洪水層下水田人足跡と牛跡	45	第 91 図	2 区 7 号住居 (1)	141
第 23 図	1 区谷部第 2 洪水層下水田出土遺物	46	第 92 図	2 区 7 号住居 (2)	142
第 24 図	1 区谷部 Hr-FA 面 23 号溝土層断面	47	第 93 図	2 区 7 号住居 (3)	143
第 25 図	1 区谷部 Hr-FA 面	48	第 94 図	2 区 7 号住居炉と出土遺物 (1)	144
第 26 図	1 区谷部 As-C 混土上面	51	第 95 図	2 区 7 号住居出土遺物 (2)	145
第 27 図	1 区谷部 As-C 下面	53	第 96 図	2 区 7 号住居出土遺物 (3)	146
第 28 図	1 区谷部北支谷土層断面	55	第 97 図	2 区 8 号住居	148
第 29 図	1 区谷部 25 号・26 号溝と北支谷出土遺物分布図	56	第 98 図	2 区 8 号住居と出土遺物 (1)	149
第 30 図	1 区谷部浅間 C 軽石上下面出土遺物 (1)	57	第 99 図	2 区 8 号住居出土遺物 (2)	150
第 31 図	1 区谷部浅間 C 軽石上下面出土遺物 (2)	58	第 100 図	2 区 9 号住居 (1)	152
第 32 図	1 区谷部浅間 C 軽石上下面出土遺物 (3)	59	第 101 図	2 区 9 号住居 (2)	153
第 33 図	1 区谷部北支谷出土遺物	60	第 102 図	2 区 9 号住居炉と土坑	154
第 34 図	1 区 11 号井戸	61	第 103 図	2 区 9 号住居出土遺物 (1)	155
第 35 図	1 区 16 号・17 号・21 号・22 号溝と出土遺物	62	第 104 図	2 区 9 号住居出土遺物 (2)	156
第 36 図	1 区微高地部北半表土直下面	63	第 105 図	2 区 9 号住居出土遺物 (3)	157
第 37 図	1 区 36 号・39 号・40 号土坑	66	第 106 図	2 区 9 号住居出土遺物 (4)	158
第 38 図	1 区 27 号住居 (1)	68	第 107 図	2 区 9 号住居出土遺物 (5)	159
第 39 図	1 区 27 号住居 (2)	69	第 108 図	2 区 9 号住居出土遺物 (6)	160
第 40 図	1 区 27 号住居炉と出土遺物	70	第 109 図	2 区 9 号住居出土遺物 (7)	161
第 41 図	1 区 28 号住居炉	71	第 110 図	2 区 9 号住居出土遺物 (8)	162
第 42 図	1 区 28 号住居	72	第 111 図	2 区 10 号住居炉	163
第 43 図	1 区 28 号住居出土遺物	73	第 112 図	2 区 10 号住居 (1)	164
第 44 図	1 区 29 号住居と出土遺物	75	第 113 図	2 区 10 号住居 (2)	165
第 45 図	1 区 30 号住居と出土遺物	76	第 114 図	2 区 10 号住居出土遺物	166
第 46 図	1 区 31 号住居 (1)	78	第 115 図	2 区 11 号住居	168
第 47 図	1 区 31 号住居 (2)	79	第 116 図	2 区 11 号住居炉と出土遺物	169
第 48 図	1 区 31 号住居出土遺物 (1)	80	第 117 図	2 区 12 号住居 (1)	171
第 49 図	1 区 31 号住居出土遺物 (2)	81	第 118 図	2 区 12 号住居 (2)	172
第 50 図	1 区 31 号住居出土遺物 (3)	82	第 119 図	2 区 12 号住居出土遺物 (1)	173
第 51 図	2・3 区全体図	84	第 120 図	2 区 12 号住居出土遺物 (2)	174
第 52 図	2 区 1 号・2 号・4 号・5 号・6 号井戸	86	第 121 図	2 区 12 号住居出土遺物 (3)	175
第 53 図	2 区 7 号・8 号井戸と出土遺物	88	第 122 図	2 区 14 号住居 (1)	177
第 54 図	2 区 9 号井戸と出土遺物	90	第 123 図	2 区 14 号住居 (2)	178
第 55 図	2 区 3 号・10 号井戸と出土遺物	91	第 124 図	2 区 14 号住居出土遺物	179
第 56 図	2 区復旧溝と浅間 B 軽石下凹地	93	第 125 図	2 区 15 号住居 (1)	180
第 57 図	2 区土坑 (1) と出土遺物	95	第 126 図	2 区 15 号住居 (2)	181
第 58 図	2 区土坑 (2) と出土遺物	98	第 127 図	2 区 15 号住居竈	182
第 59 図	2 区土坑 (3) と出土遺物	100	第 128 図	2 区 15 号住居出土遺物 (1)	183
第 60 図	2 区土坑 (4) と出土遺物	102	第 129 図	2 区 15 号住居出土遺物 (2)	184
第 61 図	3 区土坑群と出土遺物	103	第 130 図	2 区 15 号住居出土遺物 (3)	185
第 62 図	2 区 1 号住居 (1)	105	第 131 図	2 区 16 号住居 (1)	187
第 63 図	2 区 1 号住居 (2)	106	第 132 図	2 区 16 号住居と出土遺物 (1)	188
第 64 図	2 区 1 号住居 (3)	107	第 133 図	2 区 16 号住居出土遺物 (2)	189
第 65 図	2 区 1 号住居出土遺物	108	第 134 図	2 区 17 号住居 (1)	191
第 66 図	2 区 2 号住居 (1)	110	第 135 図	2 区 17 号住居 (2)	192
第 67 図	2 区 2 号住居 (2)	111	第 136 図	2 区 17 号住居炉と出土遺物	193
第 68 図	2 区 2 号住居 (3)	112	第 137 図	2 区 18 号住居 (1)	195
第 69 図	2 区 2 号住居出土遺物	113	第 138 図	2 区 18 号住居 (2)	196
			第 139 図	2 区 18 号住居出土遺物	197
			第 140 図	2 区 19 号住居 (1)	199

第 141 図	2 区 19 号住居 (2)	200	第 211 図	4 区洪水層下面 7 号・8 号土坑	298
第 142 図	2 区 19 号住居出土遺物	201	第 212 図	4 区洪水層下面出土遺物	298
第 143 図	2 区 20 号住居 (1)	203	第 213 図	4 区台地部洪水層上畠と 4 号・5 号・6 号溝	299
第 144 図	2 区 20 号住居 (2)	204	第 214 図	4 区 4 号・5 号溝・洪水層上畠土層断面	301
第 145 図	2 区 20 号住居 (3)	205	第 215 図	4 区台地部古墳時代遺物の分布と褐色土面の遺構	303
第 146 図	2 区 20 号住居出土遺物 (1)	206	第 216 図	4 区古墳時代遺物包含層出土遺物 (1)	306
第 147 図	2 区 20 号住居出土遺物 (2)	207	第 217 図	4 区古墳時代遺物包含層出土遺物 (2)	307
第 148 図	2 区 21 号住居と出土遺物	209	第 218 図	4 区古墳時代遺物包含層出土遺物 (3)	308
第 149 図	2 区 22 号住居	210	第 219 図	4 区古墳時代遺物包含層出土遺物 (4)	309
第 150 図	2 区 22 号住居出土遺物	211	第 220 図	4 区古墳時代遺物包含層出土遺物 (5)	310
第 151 図	2 区 23 号住居	213	第 221 図	4 区 7 号溝と出土遺物	312
第 152 図	2 区 23 号住居出土遺物	214	第 222 図	4 区 8 号溝と出土遺物	313
第 153 図	2 区 24 号住居	215	第 223 図	4 区 9 号土坑	313
第 154 図	2 区 25 号住居	216	第 224 図	荒砥前田 遺跡の女堀と 1981 年調査区	315
第 155 図	2 区 26 号住居 (1)	218	第 225 図	3・4 区女堀平面図	319
第 156 図	2 区 26 号住居 (2)	219	第 226 図	3・4 区女堀土層断面 (1)	321
第 157 図	2 区 26 号住居炉と出土遺物 (1)	220	第 227 図	3・4 区女堀土層断面 (2)	323
第 158 図	2 区 26 号住居出土遺物 (2)	221	第 228 図	3・4 区女堀排土下面平面図	325
第 159 図	2 区 1 号・5 号掘立柱建物	223	第 229 図	3・4 区女堀出土遺物	327
第 160 図	2 区 2 号掘立柱建物と出土遺物	224	第 230 図	遺構外出土遺物 (1)	330
第 161 図	2 区 3 号・4 号掘立柱建物	225	第 231 図	遺構外出土遺物 (2)	333
第 162 図	2 区 12 号・13 号・15 号溝と出土遺物	227	第 232 図	遺構外出土遺物 (3)	334
第 163 図	2 区 1 号・2 号竪穴状遺構と出土遺物	228	第 233 図	遺構外出土遺物 (4)	335
第 164 図	2 区 1 号不明遺構と出土遺物	229	第 234 図	遺構外出土遺物 (5)	336
第 165 図	3 区 1 号竪穴状遺構	230	第 235 図	遺構外出土遺物 (6)	337
第 166 図	2 区畠跡	231	第 236 図	遺構外出土遺物 (7)	338
第 167 図	縄文時代遺構確認トレンチ配置と 2 区 41 号・42 号土坑	232	第 237 図	遺構外出土遺物 (8)	339
第 168 図	2・3 区低地部共通土層断面	235	第 238 図	荒砥前田 遺跡分析試料採取地点	341
第 169 図	2・3 区低地部第 2 洪水層下水田	237	1- 図 1	1 区の土層柱状図	344
第 170 図	2・3 区低地部第 2 洪水層下水田 水口と足跡	239	1- 図 2	1 区の土層柱状図	345
第 171 図	2・3 区低地部第 2 洪水層下水田断面	240	1- 図 3	1 区における植物珪酸体分析結果	358
第 172 図	2・3 区低地部第 2 洪水層下水田出土遺物	241	1- 図 4	1 区における植物珪酸体分析結果	359
第 173 図	2・3 区低地部第 3 洪水層下水田	243	1- 図 5	1 区における植物珪酸体分析結果	360
第 174 図	2・3 区低地部第 3 洪水層下水田断面と出土遺物	245	2- 図 1	2・3 低地部の土層柱状図	364
第 175 図	3 区低地部第 4 洪水層下水田断面と出土遺物	246	2- 図 2	2・3 区低地部における植物珪酸体分析結果	373
第 176 図	2・3 区低地部浅間 B テフラ下水田	247	2- 図 3	2・3 区低地部における植物珪酸体分析結果	374
第 177 図	2・3 区浅間 B テフラ下面・2 区 10 号溝断面	249	2- 図 4	2・3 区低地部における植物珪酸体分析結果	375
第 178 図	2 区第 5・第 6 洪水層下面	251	2- 図 5	2・3 区低地部における花粉ダイアグラム	381
第 179 図	2 区第 6 洪水層下水田耕土下位土層断面	252	3- 図 1	2・3 区微高地部の土層柱状図	386
第 180 図	3 区低地部黄色砂質土面	253	3- 1 図 2	2・3 区微高地部テフラ組成ダイアグラム	386
第 181 図	4 区全体図	256	3- 図 3	2・3 区微高地部における植物珪酸体分析結果	390
第 182 図	4 区低地部第 2 洪水層下水田 水口	258	4- 図 1	4 区第 6 地点 (権現山東西断面) におけるテフラ分析資料の層位	399
第 183 図	4 区低地部第 2 洪水層下面 2・3 区人足跡	259	4- 図 2	4 区の土層柱状図	400
第 184 図	4 区 1 号溝土層断面と出土遺物	261	4- 図 3	4 区低地部における植物珪酸体分析結果	405
第 185 図	4 区低地部第 2 洪水層下水田復旧溝	262	4- 図 4	4 区低地部における植物珪酸体分析結果	406
第 186 図	4 区低地部第 2 洪水層下水田・畠断面	263	4- 図 5	4 区花粉ダイアグラム	415
第 187 図	4 区低地部第 2 洪水層下面出土遺物	266	4- 図 6	4 区花粉ダイアグラム	416
第 188 図	4 区低地部第 3 洪水層下面	267	7 図 1	群馬県荒砥前田 遺跡出土の巴形銅器の鉛同位体比	429
第 189 図	4 区低地部第 3 洪水層下面耕作痕跡	269	7 図 2	群馬県荒砥前田 遺跡出土の巴形銅器の鉛同位体比	429
第 190 図	4 区低地部浅間 B テフラ下面確認遺構	271	7 図 3	群馬県荒砥前田 遺跡出土の巴形銅器とこれまで測定された弥生時代の巴形銅器の鉛同位体比	430
第 191 図	4 区低地部第 5 洪水層下面水口と出土遺物	272	7 図 4	群馬県荒砥前田 遺跡出土の巴形銅器とこれまで測定された弥生時代の巴形銅器の鉛同位体比	430
第 192 図	4 区低地部第 5 洪水層下水田	273	8 図 1	4 区 2 号集石出土火葬人骨出土部位図	431
第 193 図	4 区低地部第 6 洪水層下面出土遺物	275	8 図 2	4 区 2 号集石出土火葬人骨出土部位図	431
第 194 図	4 区低地部第 6 洪水層下面	276	8 図 3	4 区 21 号集石出土火葬人骨出土部位図	433
第 195 図	4 区台地部権現山土層断面	277	9 図 1	28 号土坑出土馬歯の埋葬時復元予想図	434
第 196 図	4 区台地部権現山現況図	278	9 図 2	荒砥前田 遺跡 28 号土坑出土馬歯出土部位図	435
第 197 図	4 区権現山表土出土遺物 (1)	279	10 図 1	荒砥北三木堂 遺跡 2 区 90 号土坑平面断面図	436
第 198 図	4 区権現山表土出土遺物 (2)	280	第 239 図	壺の分類 (1/80)	443
第 199 図	4 区 2 号集石と出土遺物	281	第 240 図	甕の分類 (1/80)	445
第 200 図	4 区 3 号集石と出土遺物	283	第 241 図	その他器種の分類 (1/80)	447
第 201 図	4 区 4 号集石と出土遺物 (1)	284	第 242 図	土器の編年 (1/120)	450
第 202 図	4 区 4 号集石と出土遺物 (2)	285	第 243 図	住居分類とその変遷 (1/300)	454
第 203 図	4 区 5 号 + 17 号集石と出土遺物	286	第 244 図	荒砥前田 遺跡の集落変遷	457
第 204 図	4 区 11 号集石と出土遺物	287	第 245 図	荒砥前田 遺跡周辺の古墳時代前期集落	461
第 205 図	4 区 13・14・15・16・19 号集石と出土遺物	289	第 246 図	荒砥前田 遺跡 2 区 12 号住居出土巴形銅器の復元	464
第 206 図	4 区 20 号集石と出土遺物	291	第 247 図	荒砥前田 遺跡周辺の古代の水田	466
第 207 図	4 区 8 号 + 21 号・22 号集石と出土遺物	292	第 248 図	女堀掘削排土と浅間粕川テフラ	467
第 208 図	4 区 9 号 + 23 号集石と出土遺物	294			
第 209 図	4 区 10 号・18 号集石出土遺物	295			
第 210 図	4 区 4 号・5 号・6 号溝土層断面	297			

表目次

第 1 表	上武道路発掘調査遺跡一覧表(7工区その1)・・・	2
第 2 表	荒砥前田 遺跡検出遺構一覧表	12
第 3 表	周辺遺跡の概要	20
第 4 表	荒砥前田 遺跡 1 区谷部浅間C軽石上下層遺物包含層出土数一覧表	55
第 5 表	2 区 1 号掘立柱建物柱穴計測表	221
第 6 表	2 区 5 号掘立柱建物柱穴計測表	222
第 7 表	2 区 2 号掘立柱建物柱穴計測表	222
第 8 表	2 区 3 号掘立柱建物柱穴計測表	226
第 9 表	2 区 4 号掘立柱建物柱穴計測表	226
第 10 表	荒砥前田 遺跡 4 区古墳時代遺物包含層出土数一覧表	305
第 11 表	荒砥前田 遺跡遺構外遺物出土数一覧表	329
第 12 表	荒砥前田 遺跡出土弥生土器一覧表	331
第 13 表	荒砥前田 遺跡出土縄文土器一覧表	332
1- 表 1- 1	テフラ検出分析結果	351
1- 表 1- 2	テフラ検出分析結果	352
1- 表 2	屈折率測定結果	352
1- 表 3	荒砥前田 遺跡 1 区における植物珪酸体分析結果	357
2- 表 1	テフラ検出分析結果	368
2- 表 2	屈折率測定結果	368
2- 表 3	荒砥前田 遺跡 2・3 区低地部における植物珪酸体分析結果	372
2- 表 4	荒砥前田 遺跡 2・3 区低地部における植物珪酸体分析結果	372
2- 表 5	荒砥前田 遺跡 2・3 区低地部における花粉分析結果	380
3- 表 1	火山ガラス比分析結果	385
3- 表 2	重鉱物組成分析結果	386
3- 表 3	屈折率測定結果	386
3- 表 4	荒砥前田 遺跡 2・3 区微高地部における植物珪酸体分析結果	389
4- 表 1- 1	荒砥前田 遺跡 4 区におけるテフラ検出分析結果	398
4- 表 1- 2	荒砥前田 遺跡 4 区におけるテフラ検出分析結果	399
4- 表 2	屈折率測定結果	399
4- 表 3	荒砥前田 遺跡 4 区低地部における植物珪酸体分析結果	407
4- 表 4- 1	荒砥前田 遺跡 4 区における花粉分析結果	413
4- 表 4- 2	荒砥前田 遺跡 4 区における花粉分析結果	414
5 表 1	荒砥前田 遺跡住居跡出土炭化材樹種同定結果	420
5 表 2	荒砥前田 遺跡住居別の検出樹種	421
6 表 1	荒砥前田 遺跡出土炭化材樹種同定結果	422
7 表 1	群馬県荒砥前田 遺跡から出土した巴形銅器の破片の化学組成	427
7 表 2	群馬県荒砥前田 遺跡から出土した巴形銅器の破片の銅同位体比値	427
9 表 1	荒砥前田 遺跡 28 号土坑出土馬歯計測値	435
10 表 1	荒砥北三木堂 遺跡 2 区 90 号土坑出土歯 齒冠計測値	437
第 14 表	荒砥前田 遺跡遺構面対比表	441
第 15 表	荒砥前田 遺跡土師器組成表	449
第 16 表	荒砥前田 遺跡周辺の古墳時代前期集落一覧	459
第 17 表	荒砥前田 遺跡周辺の 818(弘仁九)年地震に伴う洪水層下水田一覧	465

写真目次

PL- 1	1. 赤城山南麓と上武道路(東から)
	2. 荒砥前田遺跡から見た 4 区(東から)
	3. 荒砥北原遺跡から見た 4 区(西から)
	4. 荒砥宮下遺跡から見た 4 区(北から)
	5. 女堀荒口地区前原から見た 4 区と権現山(東から)
PL- 2	1. 荒砥前田 遺跡発掘区と荒砥川(南から)
	2. 荒砥前田 遺跡発掘区全景(南から)
	3. 発掘調査前の 1～3 区(南から)
	4. 発掘調査前の 4 区(東から)
	5. 発掘調査前の 4 区権現山(南から)
PL- 3	1. 1 区谷部東壁土層断面 A-A' 北部(西から)
	2. 1 区谷部東壁土層断面 A-A' 南部(西から)
	3. 1 区谷部東壁土層断面 A-A' 中央部(西から)
	4. 1 区谷部東壁土層断面 A-A' 中央部(西から)
	5. 1 区谷部東壁土層断面 A-A' 北部(西から)
	6. 1 区谷部西壁土層断面 B'-B''' 南部(東から)
	7. 1 区谷部西壁土層断面 B'-B''' 中央部(東から)
	8. 1 区谷部西壁土層断面 B'-B''' 北部(東から)
PL- 4	1. 1 区南端溝群全景(西から)
	2. 1 区南端溝群底面(西から)
	3. 1 区南端溝群底面(東から)
	4. 1 区南端溝群東壁土層断面 A'-A'''(西から)
	5. 1 区南端溝群東壁土層断面 A'-A'''(西から)
	6. 1 区南端溝群砂礫層堆積状況(西から)
	7. 1 区南端溝群砂礫層堆積状況(西から)
PL- 5	1. 1 区第 1 洪水層下水田全景(西から)
	2. 1 区第 1 洪水層下水田アゼ(南から)
	3. 1 区第 1 洪水層下水田アゼと 18 号溝(南から)
	4. 1 区第 1 洪水層下水田アゼ(南から)
	5. 1 区第 1 洪水層下水田アゼと水口(南から)
PL- 6	1. 1 区第 1 洪水層下水田 18 号溝土層断面 d-d'(南西から)
	2. 1 区第 1 洪水層下水田水口全景(北から)
	3. 1 区第 1 洪水層下水田アゼ土層断面西部(東から)
	4. 1 区第 1 洪水層下水田上層耕作痕全景(南から)
	5. 1 区第 1 洪水層下水田上層耕作痕(南から)
	6. 1 区第 1 洪水層下水田上層耕作痕先端痕跡(南から)
	7. 1 区第 1 洪水層下水田上層耕作痕土層断面(東から)
PL- 7	1. 1 区 As-B 下面全景(西から)
	2. 1 区 As-B 下面東壁土層断面 A-A' 北部(西から)
	3. 1 区 As-B 下面東壁土層断面 A-A' 中央部(西から)
	4. 1 区 As-B 下面東壁土層断面 A-A' 南部(西から)
	5. 1 区 43 号土坑土層断面 A-A'(西から)
	6. 1 区 As-B 下面牛蹄跡検出状況
	7. 1 区 As-B 下面牛蹄跡
	8. 2 区南端 As-B 下面全景(西から)
PL- 8	1. 1 区第 2 洪水層下水田全景(西から)
	2. 1 区第 2 洪水層下水田東壁土層断面 A-A' 北部(西から)
	3. 1 区第 2 洪水層下水田東壁土層断面 A-A' 中央部(西から)
	4. 1 区第 2 洪水層下水田東壁土層断面 A-A' 中央部(西から)
	5. 1 区第 2 洪水層下水田東壁土層断面 A-A' 南部(西から)
PL- 9	1. 1 区第 2 洪水層下水田(東から)
	2. 1 区第 2 洪水層下水田アゼ(東から)
	3. 1 区第 2 洪水層下水田面と 20 号溝(南東から)
	4. 1 区第 2 洪水層下水田 19 号溝全景(南から)
	5. 1 区第 2 洪水層下水田 20 号溝全景(西から)
	6. 1 区第 2 洪水層下水田 19 号溝と 1 号溜井(北から)
	7. 1 区第 2 洪水層下水田 20 号溝全景(南東から)
PL-10	1. 1 区第 2 洪水層下水田 1 号溜井全景(南から)
	2. 1 区第 2 洪水層下水田 1 号溜井土層断面 f-f'(南東から)
	3. 1 区第 2 洪水層下水田 1 号水口全景(南から)
	4. 1 区第 2 洪水層下水田 1 号水口土層断面 i-i'(西から)

	5. 1区第2洪水層下水田2号水口全景(北から)	PL-19	1. 1区27号住居炉掘り方全景(東から)
	6. 1区第2洪水層下水田2号水口冠水状態(北から)		2. 1区27号住居1号土坑土層断面E-E'(南東から)
	7. 1区第2洪水層下水田2号水口土層断面k-k'(南から)		3. 1区27号住居1号土坑全景(南から)
	8. 1区第2洪水層下水田2号水口土層断面j-j'(東から)		4. 1区27号住居2号土坑土層断面F-F'(東から)
PL-11	1. 1区第2洪水層下水田人足跡・蹄跡検出状況(西から)		5. 1区27号住居P2土層断面(南から)
	2. 1区第2洪水層下水田馬蹄跡(西から)		6. 1区27号住居掘り方土層断面(東から)
	3. 1区第2洪水層下水田牛蹄跡(東から)		7. 1区27号住居3号土坑土層断面G-G'(西から)
	4. 1区第2洪水層下水田牛蹄跡(東から)		8. 1区27号住居掘り方全景(東から)
	5. 1区第2洪水層下水田耕土土層断面e-e'(南東から)	PL-20	1. 1区28号住居全景(東から)
	6. 1区第2洪水層下水田アゼ土層断面(南から)		2. 1区28号住居土層断面A-A'(南東から)
	7. 1区第2洪水層下水田アゼ土層断面(南から)		3. 1区28号住居土層断面B-B'(東から)
	8. 2区南端第2洪水層下水田19号溝土層断面(東から)		4. 1区28号住居遺物出土状況(南東から)
PL-12	1. 1区Hr-FA面全景(南東から)		5. 1区28号住居1号炉全景(南から)
	2. 1区Hr-FA面検出状況(東から)		6. 1区28号住居1号炉土層断面D-D'(南から)
	3. 1区Hr-FA面土層断面A-A'(西から)		7. 1区28号住居1号炉掘り方全景(東から)
	4. 1区Hr-FA面23号・24号溝(東から)		8. 1区28号住居2号炉全景(南から)
	5. 1区As-C上面全景(西から)	PL-21	1. 1区28号住居2号炉掘り方土層断面F-F'(北から)
PL-13	1. 1区Hr-FA面23号溝土層断面a-a'(南西から)		2. 1区28号住居2号炉掘り方全景(東から)
	2. 1区As-C上面全景(西から)		3. 1区28号住居1号土坑土層断面G-G'(西から)
	3. 1区As-C上面25号・26号溝土層断面E-E'(西から)		4. 1区28号住居掘り方土層断面A-A'(南から)
	4. 1区As-C上面27号溝土層断面(東から)		5. 1区28号住居掘り方土層断面B-B'(東から)
	5. 1区As-C上面25号溝全景(西から)		6. 1区28号住居掘り方全景(東から)
	6. 1区As-C上面27号溝(左)24号溝(右)全景(西から)		7. 1区29号住居全景(東から)
	7. 1区As-C上面25号溝全景(西から)		8. 1区29号住居土層断面A-A'(東から)
	8. 1区As-C上面27号溝(左)24号溝(右)全景(西から)	PL-22	1. 1区29号住居炉全景(東から)
PL-14	1. 1区As-C下面全景(西から)		2. 1区29号住居炉掘り方土層断面(南東から)
	2. 1区As-C下面26号溝全景(西から)		3. 1区29号住居炉掘り方全景(東から)
	3. 1区As-C下面26号溝全景(東から)		4. 1区29号住居掘り方全景(東から)
	4. 1区As-C下面26号溝全景(南西から)		5. 1区30号住居全景(南東から)
	5. 1区As-C下面北支谷全景(南から)		6. 1区30号住居掘り方土層断面A-A'(東から)
	6. 1区As-C下面北支谷・26号溝遺物出土状況(南から)		7. 1区30号住居炉土層断面C-C'(北西から)
	7. 1区As-C下面北支谷土層断面b-b'(南から)		8. 1区30号住居掘り方全景(南から)
	8. 1区As-C下面北支谷土層断面a-a'(西から)	PL-23	1. 1区31号住居遺物出土状況全景(東から)
PL-15	1. 1区微高地部黄色砂層下北半土坑群(南から)		2. 1区31号住居全景(東から)
	2. 1区11号井戸全景(南から)		3. 1区31号住居北東隅遺物出土状況(東から)
	3. 1区微高地部全景(南から)		4. 1区31号住居遺物出土状況(北から)
	4. 1区16号溝全景(北から)		5. 1区31号住居P1壺出土状況(東から)
	5. 1区16号・17号溝全景(南西から)		6. 1区31号住居P1壺出土状況(西から)
	6. 1区17号溝土層断面A-A'(北東から)		7. 1区31号住居南壁際壺出土状況(北から)
	7. 1区17号溝土層断面B-B'(南西から)		8. 1区31号住居中央部炭化材(C71)出土状況(東から)
PL-16	1. 1区17号溝土層断面C-C'(西から)	PL-24	1. 1区31号住居炉全景(東から)
	2. 1区17号溝土層断面D-D'(南西から)		2. 1区31号住居炉掘り方土層断面(北西から)
	3. 1区21号・22号溝全景(南から)		3. 1区31号住居炉掘り方全景(東から)
	4. 1区22号溝全景(北西から)		4. 1区31号住居1号土坑土層断面E-E'(東から)
	5. 1区21号溝土層断面(南から)		5. 1区31号住居2号土坑土層断面F-F'(南から)
	6. 1区21号・22号溝土層断面A-A'(東から)		6. 1区31号住居P2土層断面(東から)
	7. 1区22号溝土層断面(北から)		7. 1区31号住居掘り方土層断面A-A'北半(東から)
	8. 1区22号溝土層断面(北から)		8. 1区31号住居掘り方全景(東から)
PL-17	1. 1区微高地部黄色砂層下水田全景(西から)	PL-25	1. 荒砥川の低地に埋没する遺構群(南から)
	2. 1区微高地部黄色砂層下水田1号アゼ(東から)		2. 荒砥川の小支谷に臨む古墳時代集落(北東から)
	3. 1区微高地部黄色砂層下水田2号アゼ(東から)	PL-26	1. 2区1号井戸土層断面A-A'(北西から)
	4. 1区微高地部黄色砂層下水田3号アゼ(東から)		2. 2区2号井戸土層断面A-A'(南東から)
	5. 1区36号土坑土層断面A-A'(南から)		3. 2区5号井戸土層断面A-A'(南東から)
	6. 2区38号土坑土層断面A-A'(南から)		4. 2区6号井戸土層断面A-A'(南西から)
	7. 1区39号土坑土層断面A-A'(北から)		5. 2区7号井戸土層断面A-A'(東から)
	8. 1区40号土坑全景(北から)		6. 2区8号井戸土層断面A-A'(南東から)
PL-18	1. 1区27号住居全景(東から)		7. 2区9号井戸土層断面A-A'(南東から)
	2. 1区27号住居土層断面A-A'(東から)		8. 2区10号井戸土層断面A-A'(南東から)
	3. 1区27号住居土層断面A-A'北部(東から)	PL-27	1. 2区復旧溝全景(南から)
	4. 1区27号住居土層断面A-A'南部(東から)		2. 2区復旧溝確認状況(南から)
	5. 1区27号住居土層断面B-B'(南から)		3. 2区復旧溝土層断面A-A'溝3(南から)
	6. 1区27号住居土層断面B-B'西部(南から)		4. 2区復旧溝土層断面B-B'(南から)
	7. 1区27号住居炉全景(東から)		5. 2区As-B下凹地全景(東から)
	8. 1区27号住居炉土層断面D-D'(北から)	PL-28	1. 2区1号・2号土坑土層断面A-A'(北から)

	2. 2区1号・2号土坑全景(北から)		5. 2区1号住居P4土層断面(西から)
	3. 2区3号土坑土層断面 A-A'(南から)		6. 2区1号住居1号土坑土層断面 F-F'(西から)
	4. 2区3号土坑全景(南から)		7. 2区1号住居1号土坑全景(南から)
	5. 2区4号土坑土層断面 A-A'(南から)		8. 2区1号住居2号土坑土層断面 G-G'(西から)
	6. 2区4号土坑全景(南から)	PL-37	1. 2区1号住居2号土坑全景(西から)
	7. 2区5号土坑土層断面 A-A'(南から)		2. 2区1号住居石鏃出土状況(東から)
	8. 2区5号土坑全景(南から)		3. 2区1号住居黒曜石剥片出土状況(南から)
PL-29	1. 2区6号土坑土層断面 A-A'(南西から)		4. 2区1号住居掘り方土層断面 A・B・C(北から)
	2. 2区6号土坑全景(南から)		5. 2区1号住居掘り方土層断面 A・B・C(東から)
	3. 2区7号土坑土層断面 A-A'(南東から)		6. 2区1号住居掘り方全景(東から)
	4. 2区7号土坑全景(南から)		7. 2区2号住居全景(東から)
	5. 2区8号土坑土層断面 A-A'(西から)		8. 2区2号住居土層断面 A-A'(南から)
	6. 2区8号土坑全景(南から)	PL-38	1. 2区2号住居土層断面 B-B'(西から)
	7. 2区9号土坑土層断面 A-A'(南から)		2. 2区2号住居遺物出土状況(西から)
	8. 2区9号土坑全景(南から)		3. 2区2号住居P1土層断面(東から)
PL-30	1. 2区13号土坑土層断面 A-A'(北から)		4. 2区2号住居P2土層断面(東から)
	2. 2区13号土坑全景(北から)		5. 2区2号住居P2遺物出土状況(東から)
	3. 2区20号土坑土層断面 A-A'(北から)		6. 2区2号住居P2底面遺物出土状況(西から)
	4. 2区20号土坑全景(北から)		7. 2区2号住居P2完掘状況(東から)
	5. 2区23号土坑土層断面 A-A'(南から)		8. 2区2号住居1号土坑土層断面 F-F'(西から)
	6. 2区作業風景(南から)	PL-39	1. 2区2号住居1号土坑全景(東から)
	7. 2区16号土坑土層断面 A-A'(西から)		2. 2区2号住居炉全景(北から)
	8. 2区16号土坑全景(北から)		3. 2区2号住居炉土層断面 E-E'(西から)
PL-31	1. 2区26号土坑土層断面 A-A'(西から)		4. 2区2号住居炉掘り方全景(南から)
	2. 2区26号土坑全景(南から)		5. 2区2号住居掘り方土層断面 A-A'(南から)
	3. 2区27号土坑土層断面 A-A'(南から)		6. 2区2号住居掘り方全景(東から)
	4. 2区27号土坑全景(南から)		7. 2区3号住居全景(東から)
	5. 2区28号土坑土層断面 A-A'(南から)		8. 2区3号住居遺物出土状況(南から)
	6. 2区28号土坑全景(南から)	PL-40	1. 2区3号住居土層断面 A-A'西部(南から)
	7. 2区28号土坑遺物出土状況(南から)		2. 2区3号住居土層断面 A-A'東部(南から)
	8. 2区30号土坑土層断面 A-A'(西から)		3. 2区3号住居土層断面 B-B'南部(東から)
PL-32	1. 2区31号土坑土層断面 A-A'(南から)		4. 2区3号住居土層断面 B-B'北部(東から)
	2. 2区31号土坑全景(南から)		5. 2区3号住居南西隅遺物出土状況(北東から)
	3. 2区10号土坑土層断面 A-A'(南から)		6. 2区3号住居南東隅遺物出土状況(北から)
	4. 2区10号土坑全景(南から)		7. 2区3号住居北壁際遺物出土状況(南から)
	5. 2区12号土坑土層断面 A-A'(東から)		8. 2区3号住居南東部遺物出土状況(北東から)
	6. 2区12号土坑全景(北東から)	PL-41	1. 2区3号住居南東隅遺物出土状況(西から)
	7. 2区14号土坑土層断面 A-A'(東から)		2. 2区3号住居P1遺物出土状況(北から)
	8. 2区14号土坑全景(西から)		3. 2区3号住居P2遺物出土状況(北から)
PL-33	1. 2区22号土坑土層断面 A-A'(南西から)		4. 2区3号住居P3土層断面(南から)
	2. 2区22号土坑全景(北から)		5. 2区3号住居P4遺物出土状況(北から)
	3. 2区15号土坑土層断面 A-A'(西から)		6. 2区3号住居1号土坑土層断面 E-E'(西から)
	4. 2区25号土坑土層断面 A-A'(南から)		7. 2区3号住居2号土坑土層断面 F-F'(西から)
	5. 2区21号土坑土層断面(東から)		8. 2区3号住居P6土層断面(南から)
	6. 2区21号土坑焼土検出状況(南から)	PL-42	1. 2区3号住居炉確認状況(東から)
	7. 2区21号土坑全景(北から)		2. 2区3号住居炉全景(西から)
	8. 2区21号土坑下部焼土土層断面(南から)		3. 2区3号住居炉土層断面 C-C'(西から)
PL-34	1. 3区土坑群全景(南から)		4. 2区3号住居炉土層断面 D-D'(南から)
	2. 3区土坑群土層断面 A-A'(南から)		5. 2区3号住居炉掘り方全景(南から)
	3. 3区土坑群土層断面 B-B'(東から)		6. 2区3号住居西壁焼土(東から)
	4. 3区土坑群遺物出土状況(南から)		7. 2区3号住居東壁付近焼土土層断面(西から)
	5. 3区土坑群遺物出土状況(南から)		8. 2区3号住居掘り方土層断面 A-A'東部(南から)
PL-35	1. 2区1号住居全景(東から)	PL-43	1. 2区3号住居掘り方土層断面 B-B'(東から)
	2. 2区1号住居床面全景(東から)		2. 2区3号住居掘り方全景(東から)
	3. 2区1号住居土層断面 A-A'・B-B'南部(東から)		3. 2区4号住居全景(東から)
	4. 2区1号住居土層断面 A-A'・B-B'北部(東から)		4. 2区4号住居土層断面 A-A'(南から)
	5. 2区1号住居土層断面 C-C'東部(北から)		5. 2区4号住居土層断面 B-B'(西から)
	6. 2区1号住居土層断面 C-C'中央部(北から)		6. 2区4号住居1号土坑遺物出土状況(東から)
	7. 2区1号住居土層断面 C-C'西部(北から)		7. 2区4号住居南壁際遺物出土状況(東から)
	8. 2区1号住居西部攪乱土層断面(北から)		8. 2区4号住居東壁際遺物出土状況(南から)
PL-36	1. 2区1号住居炉跡掘り方全景(北から)	PL-44	1. 2区4号住居南東隅遺物出土状況(北西から)
	2. 2区1号住居P1土層断面(西から)		2. 2区4号住居炉全景(東から)
	3. 2区1号住居P2土層断面(西から)		3. 2区4号住居炉切り取り保存作業
	4. 2区1号住居P3土層断面(西から)		4. 2区4号住居炉切り取り保存作業

	5. 2区4号住居P1土層断面(西から)		5. 2区7号住居P4土層断面(南から)
	6. 2区4号住居P2土層断面(東から)		7. 2区7号住居P5土層断面(東から)
	7. 2区4号住居P3土層断面(東から)		6. 2区7号住居P4土層断面下層(南から)
	8. 2区4号住居P4土層断面(西から)		8. 2区7号住居P6土層断面(南から)
PL-45	1. 2区4号住居1号土坑土層断面E-E'(西から)	PL-53	1. 2区7号住居P8土層断面(北から)
	2. 2区4号住居2号土坑土層断面F-F'(西から)		2. 2区7号住居P10土層断面(南西から)
	3. 2区4号住居3号土坑土層断面H-H'(西から)		3. 2区7号住居P11土層断面(北から)
	4. 2区4号住居4号土坑土層断面I-I'(西から)		4. 2区7号住居P12土層断面(南から)
	5. 2区4号住居5号土坑土層断面(東から)		5. 2区7号住居1号土坑土層断面E-E'(東から)
	6. 2区4号住居掘り方土層断面B-B'(西から)		6. 2区7号住居1号土坑全景(北から)
	7. 2区4号住居掘り方掘削痕(北から)		7. 2区7号住居掘り方土層断面A-A'(東から)
	8. 2区4号住居掘り方全景(東から)		8. 2区7号住居掘り方土層断面B-B'(南から)
PL-46	1. 2区5号住居全景(東から)	PL-54	1. 2区7号住居掘り方遺物出土状況(南から)
	2. 2区5号住居土層断面A-A'(南から)		2. 2区7号住居掘り方全景(東から)
	3. 2区5号住居土層断面B-B'(東から)		3. 2区8号住居全景(東から)
	4. 2区5号住居南東隅遺物出土状況(西から)		4. 2区8号住居土層断面A-A'(東から)
	5. 2区5号住居南壁際遺物出土状況(東から)		5. 2区8号住居土層断面B-B'(南から)
	6. 2区5号住居北壁際遺物出土状況(西から)		6. 2区8号住居北東隅遺物出土状況(北から)
	7. 2区5号住居炭化材出土状況(北から)		7. 2区8号住居南東隅遺物出土状況(北から)
	8. 2区5号住居床面炭化物層断面H-H'(西から)		8. 2区8号住居炉全景(南から)
PL-47	1. 2区5号住居炉全景(北から)	PL-55	1. 2区8号住居炉土層断面C-C'(西から)
	2. 2区5号住居炉土層断面C-C'(東から)		2. 2区8号住居炉土層断面D-D'(南から)
	3. 2区5号住居P5土層断面		3. 2区8号住居炉掘り方土層断面C-C'(西から)
	4. 2区5号住居P6土層断面(南から)		4. 2区8号住居炉掘り方土層断面D-D'(南から)
	5. 2区5号住居P7土層断面(南から)		5. 2区8号住居1号土坑土層断面G-G'(東から)
	6. 2区5号住居P8土層断面(南から)		6. 2区8号住居掘り方土層断面A-A'(東から)
	7. 2区5号住居P9土層断面(西から)		7. 2区8号住居掘り方土層断面B-B'(南から)
	8. 2区5号住居掘り方土層断面A-A'(南から)		8. 2区8号住居掘り方全景(東から)
PL-48	1. 2区5号住居掘り方土層断面B-B'(西から)	PL-56	1. 2区9号住居上層遺物出土状況全景(東から)
	2. 2区5号住居掘り方全景(東から)		2. 2区9号住居土層断面A-A'北部(西から)
	3. 2区6号住居全景(東から)		3. 2区9号住居土層断面A-A'南部(西から)
	4. 2区6号住居土層断面A-A'(南から)		4. 2区9号住居土層断面B-B'東部(北から)
	5. 2区6号住居土層断面B-B'(東から)		5. 2区9号住居土層断面B-B'西部(北から)
	6. 2区6号住居壺出土状況(東から)		6. 2区9号住居上層遺物出土状況中央部(東から)
	7. 2区6号住居遺物出土状況(北から)		7. 2区9号住居遺物出土状況南東部(北西から)
	8. 2区6号住居炉遺物出土状況(東から)		8. 2区9号住居上層遺物出土状況(西から)
PL-49	1. 2区6号住居炉全景(東から)	PL-57	1. 2区9号住居上層遺物出土状況(西から)
	2. 2区6号住居炉焼土下面全景(西から)		2. 2区9号住居南壁際遺物出土状況(西から)
	3. 2区6号住居炉焼土土層断面C-C'(西から)		3. 2区9号住居床面遺物出土状況全景(東から)
	4. 2区6号住居炉焼土土層断面D-D'(東から)		4. 2区9号住居遺物出土状況(南から)
	5. 2区6号住居炉掘り方土層断面C-C'(西から)		5. 2区9号住居遺物出土状況(東から)
	6. 2区6号住居炉掘り方土層断面D-D'(南から)	PL-58	1. 2区9号住居遺物出土状況(西から)
	7. 2区6号住居P1土層断面(北から)		2. 2区9号住居遺物出土状況(東から)
	8. 2区6号住居P3土層断面(南から)		3. 2区9号住居遺物出土状況(南東から)
PL-50	1. 2区6号住居P4土層断面(南から)		4. 2区9号住居床面全景(東から)
	2. 2区6号住居掘り方土層断面A-A'(南から)		5. 2区9号住居炉全景(東から)
	3. 2区6号住居掘り方土層断面B-B'(東から)		6. 2区9号住居炉土層断面C-C'(東から)
	4. 2区6号住居掘り方全景(東から)		7. 2区9号住居炉土層断面D-D'(南から)
	5. 2区7号住居遺物出土状況全景(東から)		8. 2区9号住居炉掘り方全景(北から)
	6. 2区7号住居床面全景(東から)	PL-59	1. 2区9号住居P1土層断面(南から)
	7. 2区7号住居土層断面A-A'(東から)		2. 2区9号住居P2土層断面(南から)
	8. 2区7号住居土層断面B-B'(南から)		3. 2区9号住居P3土層断面(南から)
PL-51	1. 2区7号住居炉全景(南から)		4. 2区9号住居P2土層断面下層(南から)
	2. 2区7号住居炉上層土層断面D-D'(南から)		5. 2区9号住居P4土層断面(南から)
	3. 2区7号住居炉焼土下砂検出状況(東から)		6. 2区9号住居1号土坑土層断面E-E'(西から)
	4. 2区7号住居炉掘り方上層土層断面D-D'(南から)		7. 2区9号住居1号土坑全景(西から)
	5. 2区7号住居炉焼土下砂層下面(南から)		8. 2区9号住居2号土坑土層断面F-F'(西から)
	6. 2区7号住居炉掘り方土層断面D-D'(南から)	PL-60	1. 2区9号住居2号土坑全景(西から)
	7. 2区7号住居P1土層断面(南から)		2. 2区9号住居3号土坑土層断面G-G'(東から)
	8. 2区7号住居P1土層断面下層(南から)		3. 2区9号住居掘り方土層断面B-B'東部(北から)
PL-52	1. 2区7号住居P2土層断面(南から)		4. 2区9号住居掘り方土層断面J-J'西部(南から)
	2. 2区7号住居P3土層断面(南から)		5. 2区9号住居掘り方土層断面J-J'東部(南から)
	3. 2区7号住居P2土層断面下層(南から)		6. 2区9号住居掘り方全景(東から)
	4. 2区7号住居P3土層断面下層(南から)		7. 2区10号住居全景(東から)

	8. 2区10号住居土層断面 A-A'(西から)		3. 2区12号住居掘り方全景(西から)
PL-61	1. 2区10号住居土層断面 A-A' 南部(西から)		4. 2区12号住居発掘作業風景(南から)
	2. 2区10号住居西壁際遺物出土状況(北から)		5. 2区14号住居全景(東から)
	3. 2区10号住居北壁際遺物出土状況(西から)		6. 2区14号住居土層断面 A-A'(南から)
	4. 2区10号住居北西隅遺物出土状況(南東から)		7. 2区14号住居土層断面 B-B'(南西から)
	5. 2区10号住居南壁際遺物出土状況(西から)		8. 2区14号住居炉全景(南から)
	6. 2区10号住居床面全景(東から)	PL-70	1. 2区14号住居炉掘り方土層断面 C-C'(北から)
	7. 2区10号住居炉全景(北から)		2. 2区14号住居炉掘り方土層断面 D-D'(東から)
	8. 2区10号住居炉土層断面 C-C'(西から)		3. 2区14号住居炉掘り方全景(東から)
PL-62	1. 2区10号住居炉掘り方土層断面 C-C'(西から)		4. 2区14号住居 P 1土層断面(南から)
	2. 2区10号住居土層断面 D-D'(南から)		5. 2区14号住居 P 2土層断面(南から)
	3. 2区10号住居炉掘り方土層断面 D-D'(南から)		6. 2区14号住居 P 4土層断面(北から)
	4. 2区10号住居炉掘り方全景(北から)		7. 2区14号住居貯蔵穴土層断面 G-G'(西から)
	5. 2区10号住居 P 1土層断面(西から)		8. 2区14号住居掘り方土層断面 B-B'(西から)
	6. 2区10号住居 P 2土層断面(東から)	PL-71	1. 2区14号住居掘り方土層断面 A-A'(南から)
	7. 2区10号住居 P 1土層断面下層(西から)		2. 2区14号住居掘り方土層断面東壁際(南西から)
	8. 2区10号住居 P 2土層断面下層(東から)		3. 2区14号住居掘り方遺物出土状況(北から)
PL-63	1. 2区10号住居 P 3土層断面(東から)		4. 2区14号住居掘り方全景(東から)
	2. 2区10号住居 P 4土層断面(西から)		5. 2区15号住居遺物出土状況全景(西から)
	3. 2区10号住居 P 3土層断面下層(東から)		6. 2区15号住居中央部土層断面(北から)
	4. 2区10号住居 P 4土層断面下層(西から)		7. 2区15号住居南東部遺物出土状況(西から)
	5. 2区10号住居南壁炭化材資料 C9 採取状況		8. 2区15号住居掘り方全景(北から)
	6. 2区10号住居掘り方土層断面 A-A'(西から)	PL-72	1. 2区15号住居南西隅炭化材出土状況(北から)
	7. 2区10号住居掘り方土層断面 B-B'(南から)		2. 2区15号住居南壁際粘土出土状況(北から)
	8. 2区10号住居掘り方全景(東から)		3. 2区15号住居床面全景(西から)
PL-64	1. 2区11号住居焼土・炭化材遺物出土状況全景(東から)		4. 2区15号住居竈検出状況(西から)
	2. 2区11号住居土層断面 A-A'(西から)		5. 2区15号住居竈遺物出土状況(西から)
	3. 2区11号住居土層断面 B-B'(南から)		6. 2区15号住居遺物出土状況(東から)
	4. 2区11号住居北東隅遺物出土状況(北から)		7. 2区15号住居竈全景(西から)
	5. 2区11号住居南東隅遺物出土状況(北から)		8. 2区15号住居竈袖土層断面(北から)
PL-65	1. 2区11号住居床面直上埋土土層断面 B・E(南から)	PL-73	1. 2区15号住居竈掘り方土層断面(西から)
	2. 2区11号住居床面直上埋土土層断面 A・F(西から)		2. 2区15号住居竈袖土層断面(西から)
	3. 2区11号住居土層断面 H-H'(南から)		3. 2区15号住居竈掘り方全景(西から)
	4. 2区11号住居床面全景(東から)		4. 2区15号住居貯蔵穴土層断面 G-G'(北から)
	5. 2区11号住居炉全景(東から)		5. 2区15号住居貯蔵穴全景(西から)
	6. 2区11号住居土層断面 C-C'(東から)		6. 2区15号住居掘り方土層断面 A-A' 東部(北から)
	7. 2区11号住居土層断面 D-D'(北から)		7. 2区15号住居掘り方土層断面 A-A' 西部(北から)
	8. 2区11号住居土層断面焼土下面全景(北から)		8. 2区15号住居掘り方土層断面 B-B' 南部(西から)
PL-66	1. 2区11号住居掘り方全景(東から)	PL-74	1. 2区15号住居掘り方土層断面 B-B' 北部(西から)
	2. 2区11号住居掘り方土層断面 A-A'(西から)		2. 2区15号住居掘り方全景(西から)
	3. 2区11号住居掘り方土層断面 B-B'(南から)		3. 2区16号住居全景(西から)
	4. 2区11号住居床下焼土土層断面(東から)		4. 2区16号住居土層断面 A-A'(西から)
	5. 2区12号住居遺物出土状況全景(東から)		5. 2区16号住居土層断面 B-B'(南から)
	6. 2区12号住居土層断面 B-B'(西から)		6. 2区16号住居土層断面 A-A' 南端部(西から)
	7. 2区12号住居土層断面 A-A'(南から)		7. 2区16号住居1号土坑土層断面 E-E'(西から)
	8. 2区12号住居高杯出土状況(東から)		8. 2区16号住居1号土坑遺物出土状況(西から)
PL-67	1. 2区12号住居巴形銅器出土状況(東から)	PL-75	1. 2区16号住居炉全景(西から)
	2. 2区12号住居東壁際出土状況(西から)		2. 2区16号住居炉焼土下全景(東から)
	3. 2区12号住居南東隅遺物出土状況(南から)		3. 2区16号住居土層断面 C-C'(西から)
	4. 2区12号住居南東隅遺物出土状況(南西から)		4. 2区16号住居土層断面 D-D'(南から)
	5. 2区12号住居床面全景(西から)		5. 2区16号住居炉掘り方土層断面 C-C'(西から)
	6. 2区12号住居1号焼土全景(南から)		6. 2区16号住居炉掘り方土層断面 D-D'(南から)
	7. 2区12号住居1号焼土土層断面 C・D(南西から)		7. 2区16号住居掘り方土層断面 A-A'(西から)
	8. 2区12号住居1号焼土土層断面 C・D(北東から)		8. 2区16号住居掘り方土層断面 B-B'(南から)
PL-68	1. 2区12号住居2号焼土全景(南から)	PL-76	1. 2区16号住居南東隅粘土土層断面(南から)
	2. 2区12号住居2号焼土土層断面 E-E'(南から)		2. 2区16号住居掘り方全景(西から)
	3. 2区12号住居炉全景(東から)		3. 2区17号住居遺物出土状況全景(南から)
	4. 2区12号住居炉掘り方全景(東から)		4. 2区17号住居床面全景(南から)
	5. 2区12号住居1号土坑土層断面 H-H'(東から)		5. 2区17号住居土層断面 A-A'(西から)
	6. 2区12号住居1号土坑全景(東から)		6. 2区17号住居土層断面 B-B'(南から)
	7. 2区12号住居3号土坑土層断面 J-J'(北から)		7. 2区17号住居炉検出状況(南から)
	8. 2区12号住居3号土坑全景(東から)		8. 2区17号住居炉掘り方土層断面 C-C'(西から)
PL-69	1. 2区12号住居床下焼土土層断面(南から)	PL-77	1. 2区17号住居炉掘り方土層断面 D-D'(南から)
	2. 2区12号住居掘り方土層断面 B-B'(西から)		2. 2区17号住居炉全景(北から)

	3. 2区17号住居1号土坑土層断面 E-E'(西から)		3. 2区20号住居2号土坑土層断面 H-H'(東から)
	4. 2区17号住居2号土坑土層断面 G-G'(北東から)		4. 2区20号住居掘り方P1土層断面(西から)
	5. 2区17号住居2号土坑全景(北東から)		5. 2区20号住居掘り方P4土層断面(西から)
	6. 2区17号住居掘り方土層断面 A-A'(南西から)		6. 2区20号住居掘り方P2土層断面(東から)
	7. 2区17号住居掘り方土層断面 B-B'(南東から)		7. 2区20号住居掘り方P3土層断面(東から)
	8. 2区17号住居掘り方全景(西から)		8. 2区20号住居掘り方全景(南から)
PL-78	1. 2区18号住居遺物出土状況全景(東から)	PL-86	1. 2区21号住居全景(東から)
	2. 2区18号住居土層断面 B-B'(南から)		2. 2区21号住居土層断面 A-A'(南西から)
	3. 2区18号住居南西隅遺物出土状況(北から)		3. 2区21号住居土層断面 B-B'(西から)
	4. 2区18号住居床面全景(東から)		4. 2区21号住居掘り方土層断面 A-A'(南西から)
	5. 2区18号住居P1土層断面(南から)		5. 2区21号住居掘り方土層断面 B-B'(西から)
	6. 2区18号住居P2土層断面(南から)		6. 2区21号住居掘り方全景(東から)
	7. 2区18号住居P1土層断面下層(南から)		7. 2区22号住居遺物出土状況全景(東から)
	8. 2区18号住居P2土層断面下層(南から)		8. 2区22号住居床面全景(東から)
PL-79	1. 2区18号住居P3土層断面(南から)	PL-87	1. 2区22号住居土層断面 A-A'(北西から)
	2. 2区18号住居P4土層断面(南から)		2. 2区22号住居南東隅遺物出土状況(西から)
	3. 2区18号住居P3土層断面下層(南から)		3. 2区22号住居北東隅遺物出土状況(東から)
	4. 2区18号住居P4土層断面下層(南から)		4. 2区22号住居掘り方土層断面(南から)
	5. 2区18号住居掘り方土層断面 A-A'北部(西から)		5. 2区22号住居3号土坑遺物出土状況(北から)
	6. 2区18号住居掘り方土層断面 A-A'南部(西から)		6. 2区22号住居掘り方全景(西から)
	7. 2区18号住居掘り方土層断面 B-B'東部(南から)		7. 2区23号住居遺物出土状況全景(東から)
	8. 2区18号住居掘り方全景(東から)		8. 2区23号住居炭化材出土状況(東から)
PL-80	1. 2区19号住居遺物出土状況全景(西から)	PL-88	1. 2区23号住居炉全景(東から)
	2. 2区19号住居床面全景(西から)		2. 2区23号住居炉土層断面 C-C'(南東から)
	3. 2区19号住居土層断面 A-A'(南から)		3. 2区23号住居炉掘り方全景(東から)
	4. 2区19号住居遺物出土状況(西から)		4. 2区23号住居P4土層断面 A-A'(南西から)
	5. 2区19号住居遺物出土状況(北から)		5. 2区23号住居掘り方土層断面 B-B'(南東から)
	6. 2区19号住居南東隅遺物出土状況(北から)		6. 2区23号住居掘り方全景(東から)
	7. 2区19号住居炉周辺部灰分布状況(東から)		7. 2区24号住居全景(南から)
	8. 2区19号住居炉全景(北から)		8. 2区24号住居掘り方土層断面 A-A'(南西から)
PL-81	1. 2区19号住居炉上層土層断面 C-C'(西から)	PL-89	1. 2区24号住居炉痕跡全景(南から)
	2. 2区19号住居炉上層土層断面 D-D'(南から)		2. 2区24号住居炉土層断面 C-C'(南から)
	3. 2区19号住居炉土層断面 C-C'(西から)		3. 2区25号住居全景(南から)
	4. 2区19号住居炉土層断面 D-D'(南から)		4. 2区25号住居炉全景(南から)
	5. 2区19号住居P1土層断面(南から)		5. 2区25号住居炉土層断面 C-C'(北から)
	6. 2区19号住居P2土層断面(南から)		6. 2区25号住居炉掘り方全景(南から)
	7. 2区19号住居P1土層断面下層(南から)		7. 2区25号住居掘り方土層断面 A-A'(南西から)
	8. 2区19号住居P2土層断面下層(南から)		8. 2区25号住居掘り方全景(東から)
PL-82	1. 2区19号住居P3土層断面(南から)	PL-90	1. 2区26号住居全景(南から)
	2. 2区19号住居P4土層断面(南から)		2. 2区26号住居1号炉全景(西から)
	3. 2区19号住居P3土層断面下層(南から)		3. 2区26号住居1号炉土層断面 C-C'(南東から)
	4. 2区19号住居P4土層断面下層(南から)		4. 2区26号住居1号炉土層断面 D-D'(南西から)
	5. 2区19号住居掘り方土層断面 A-A'(南から)		5. 2区26号住居1号炉掘り方土層断面 K-K'(南東から)
	6. 2区19号住居掘り方土層断面 B-B'(西から)		6. 2区26号住居1号炉掘り方土層断面 D-D'(南西から)
	7. 2区19号住居炉掘り方全景(北から)		7. 2区26号住居1号炉焼土下面全景(西から)
	8. 2区19号住居掘り方全景(西から)		8. 2区26号住居焼土土層断面(南から)
PL-83	1. 2区20号住居遺物出土状況全景(南から)	PL-91	1. 2区26号住居焼土下面全景(西から)
	2. 2区20号住居床面全景(南から)		2. 2区26号住居2号炉全景(北から)
	3. 2区20号住居土層断面 A-A'北部(西から)		3. 2区26号住居2号炉土層断面 F-F'(北西から)
	4. 2区20号住居土層断面 A-A'南部(西から)		4. 2区26号住居2号炉土層断面 G-G'(南西から)
	5. 2区20号住居土層断面 B-B'西部(南から)		5. 2区26号住居2号炉焼土下面全景(北から)
	6. 2区20号住居土層断面 B-B'東部(南から)		6. 2区26号住居P1土層断面(南西から)
	7. 2区20号住居P2周辺遺物出土状況(東から)		7. 2区26号住居P2土層断面(南西から)
	8. 2区20号住居南東隅遺物出土状況(西から)		8. 2区26号住居P3土層断面(南西から)
PL-84	1. 2区20号住居炉全景(西から)	PL-92	1. 2区26号住居P4土層断面(南西から)
	2. 2区20号住居炉掘り方全景(西から)		2. 2区26号住居1号土坑土層断面 J-J'(南から)
	3. 2区20号住居炉土層断面 C-C'(西から)		3. 2区26号住居床面下焼土検出状況(東から)
	4. 2区20号住居炉土層断面 D-D'(南から)		4. 2区26号住居掘り方土層断面 A-A'(西半)(南東から)
	5. 2区20号住居炉掘り方土層断面 C-C'(北西から)		5. 2区26号住居掘り方土層断面 A-A'(東半)(南東から)
	6. 2区20号住居炉掘り方土層断面 D-D'(南東から)		6. 2区26号住居掘り方土層断面 B-B'(北半)(南西から)
	7. 2区20号住居P1土層断面(西から)		7. 2区26号住居掘り方土層断面 B-B'(南半)(南西から)
	8. 2区20号住居P2土層断面(東から)		8. 2区26号住居掘り方全景(南から)
PL-85	1. 2区20号住居P4土層断面(西から)	PL-93	1. 2区1号・5号掘立柱建物全景(東から)
	2. 2区20号住居1号土坑土層断面 G-G'(南西から)		2. 2区1号掘立柱建物P1土層断面(南から)

	3. 2区1号掘立柱建物P2土層断面(南から)	PL-102	1. 3区第2洪水層下水田6号溝土層断面E-E'(南から)
	4. 2区1号掘立柱建物P2土層断面C-C'(南から)		2. 3区第2洪水層下水田アゼと6号溝全景(南から)
	5. 2区1号掘立柱建物P3土層断面(南から)		3. 3区第2洪水層下水田溝沿いのアゼ(北から)
	6. 2区1号掘立柱建物P4土層断面(南から)		4. 3区第2洪水層下水田6号溝全景(北から)
	7. 2区5号掘立柱建物P1土層断面(南から)		5. 2・3区第3洪水層下水田全景(南から)
	8. 2区5号掘立柱建物P2土層断面(南から)	PL-103	1. 2区第3洪水層下水田土層断面B-B'(南から)
PL-94	1. 2区5号掘立柱建物P3土層断面(南から)		2. 2区第3洪水層下水田縁辺部(北から)
	2. 2区5号掘立柱建物P4土層断面(南から)		3. 2区第3洪水層下水田面(北から)
	3. 2区2号掘立柱建物全景(北から)		4. 2区第3洪水層下水田全景(南東から)
	4. 2区2号掘立柱建物P1土層断面(南から)		5. 3区第3洪水層下水田土層断面d-d'(西から)
	5. 2区2号掘立柱建物P2土層断面(南から)		6. 3区第3洪水層下水田9号溝土層断面E-E'(南から)
PL-95	1. 2区2号掘立柱建物P3土層断面(北から)		7. 3区第3洪水層下水田土層断面f-f'(南から)
	2. 2区2号掘立柱建物P3と3号住居の土層断面(南から)		8. 3区第3洪水層下水田9号溝全景(南から)
	3. 2区2号掘立柱建物P3遺物出土状況(北から)	PL-104	1. 3区第3洪水層下水田アゼと9号溝(北から)
	4. 2区2号掘立柱建物P6柱痕検出状況		2. 3区第3洪水層下水田アゼ(北から)
	5. 2区2号掘立柱建物P6土層断面(南から)		3. 3区第3洪水層下水田水田面(南から)
	6. 2区3号掘立柱建物全景(東から)		4. 2区低地部土壌分析試料採取第2地点(南から)
	7. 2区3号掘立柱建物P1土層断面(南から)		5. 3区第4洪水層下面土層断面a-a'(南西から)
	8. 2区3号掘立柱建物P3土層断面(北から)		6. 3区第4洪水層下面全景(西から)
PL-96	1. 2区3号掘立柱建物P4土層断面(西から)		7. 3区第4洪水層下面平坦面全景(南から)
	2. 2区4号掘立柱建物全景(北から)		8. 3区第4洪水層下面足跡(西から)
	3. 2区4号掘立柱建物P1土層断面(西から)	PL-105	1. 3区第4洪水層下面畝状遺構全景(南から)
	4. 2区4号掘立柱建物P2土層断面(西から)		2. 3区第4洪水層下面アゼ土層断面b-b'(南西から)
	5. 2区4号掘立柱建物P3土層断面(西から)		3. 2・3区As-B下面全景(南から)
	6. 2区12号溝全景(北から)		4. 2区As-B下面全景(北から)
	7. 2区12号溝土層断面A-A'(南から)		5. 2区As-B下面土層断面B-B'(南から)
	8. 2区12号溝土層断面B-B'(南から)	PL-106	1. 2区As-B下面西壁土層断面A-A'南部(東から)
PL-97	1. 2区13号溝土層断面A-A'(西から)		2. 2区As-B下面西壁土層断面A-A'北部(東から)
	2. 2区15号溝土層断面A-A'(東から)		3. 2区As-B下面10号溝全景(北から)
	3. 2区1号竪穴状遺構土層断面A-A'(南から)		4. 2区As-B下面10号溝土層断面A-A'(北から)
	4. 2区2号竪穴状遺構土層断面A-A'(南から)		5. 2区As-B下面全景(北東)
	5. 2区2号竪穴状遺構土層断面B-B'(西から)		6. 2区As-B下面縁辺部(北東)
	6. 2区2号竪穴状遺構掘り方全景(南から)		7. 3区As-B下面北部低地全景(南西)
	7. 3区1号竪穴状遺構土層断面(北から)		8. 3区As-B下面北部低地土層断面a-a'(南西から)
	8. 3区1号竪穴状遺構全景(北から)	PL-107	1. 2区第5洪水層下面全景(北から)
PL-98	1. 2区1号不明遺構土層断面A-A'(南から)		2. 2区第5洪水層下面全景(南から)
	2. 2区1号不明遺構全景(東から)		3. 2区第6洪水層下水田全景(北から)
	3. 2区As-C混土下畠土層断面(南西から)		4. 2区第6洪水層下水田全景(南西から)
	4. 2区As-C混土下畠全景(南東から)		5. 2区第6洪水層下水田土層断面B-B'(南から)
	5. 2区縄文時代試掘トレンチの分布(北から)		6. 3区第6洪水層下水田全景(南から)
	6. 2区82-J-17G遺物出土状況(東から)		7. 3区14号溝全景(南から)
	7. 2区41号土坑土層断面A-A'(南から)		8. 3区黄色砂質土面全景(北から)
	8. 2区42号土坑土層断面A-A'(南から)	PL-108	1. 4区の調査区全景(南から)
PL-99	1. 3区微高地部全景(北から)		2. 4区西壁土層断面(南から)
	2. 3区微高地部縄文時代試掘トレンチの分布(北から)		3. 4区西壁土層断面(南東から)
	3. 3区44号土坑土層断面(北から)		4. 4区西壁土層断面(南東から)
	4. 3区第1洪水層確認状況全景(南から)		5. 4区西壁土層断面(南東から)
	5. 2区第2洪水層下水田全景(南から)		6. 4区西壁土層断面(南東から)
PL-100	1. 2区第2洪水層下水田全景(南から)		7. 4区南壁土層断面(北から)
	2. 2区第2洪水層下水田土層断面B-B'(南から)	PL-109	1. 4区第2洪水層下面北半全景(南西から)
	3. 2区第2洪水層下水田2号・4号・6号溝全景(北から)		2. 4区第2洪水層下面南半全景(南西から)
	4. 2区第2洪水層下水田5号溝全景(北から)	PL-110	1. 4区第2洪水層下水田1～3区画全景(北東から)
	5. 2区第2洪水層下水田アゼ(北から)		2. 4区第2洪水層下水田2区画全景(南から)
	6. 2区第2洪水層下水田アゼ(南西から)		3. 4区第2洪水層下水田検出状況(西から)
	7. 2区第2洪水層下水田縁辺部(北西から)		4. 4区第2洪水層下水田作業風景(西から)
	8. 2区第2洪水層下水田水田面(北から)		5. 4区第2洪水層下水田足跡検出状況(南東から)
PL-101	1. 2区第2洪水層下水田1号水口全景(西から)		6. 4区第2洪水層下水田足跡掘り下げ後(南東から)
	2. 2区第2洪水層下水田2号水口全景(東から)		7. 4区第2洪水層下水田2・3区画の溝(北東から)
	3. 2区第2洪水層下水田3号水口全景(東から)		8. 4区第2洪水層下水田2・3区画の水口(南西から)
	4. 2区第2洪水層下水田人足跡検出状況(南から)	PL-111	1. 4区第2洪水層下1号溝全景(西から)
	5. 2区第2洪水層下水田人足跡(南から)		2. 4区第2洪水層下1号溝遺物出土状況(東から)
	6. 2区第2洪水層下水田人足跡(南から)		3. 4区第2洪水層下3区画3号集石検出状況(南西から)
	7. 2区第2洪水層下水田牛・馬蹄跡(北から)		4. 4区第2洪水層下3区画3号集石下面(南西から)
	8. 2区第2洪水層下水田牛蹄跡(北から)		5. 4区第2洪水層復旧溝6・7・8区画全景(北東から)

- PL-112 1. 4区第2洪水層復旧溝4・5区画全景(西から)
2. 4区第2洪水層復旧溝4・5区画境界部(北から)
3. 4区第2洪水層復旧溝6区画の復旧溝(北から)
4. 4区第2洪水層復旧溝7・8区画全景(南東から)
5. 4区第2洪水層復旧溝7・8区画復旧溝(南西から)
6. 4区第2洪水層復旧溝8区画復旧溝(南西から)
7. 4区第2洪水層復旧溝8区画1号集石(南西から)
8. 4区第2洪水層復旧溝8区画2号集石(南西から)
- PL-113 1. 4区第2洪水層復旧溝8区画と鼠9区画全景(北から)
2. 4区第2洪水層復旧溝8区画(北西から)
3. 4区第2洪水層下畝9区画(西から)
4. 4区第2洪水層下畝9区画(西から)
5. 4区第3洪水層下面全景(南東から)
- PL-114 1. 4区第3洪水層下面西南部全景(南東から)
2. 4区第3洪水層下面西南部全景(北西から)
3. 4区第3洪水層下面西南部全景(南西から)
4. 4区第3洪水層下面南端低地部(東から)
5. 4区第3洪水層下面耕作痕全景(南西から)
6. 4区第3洪水層下面区画(北から)
7. 4区第3洪水層下面耕作痕検出状況(南から)
- PL-115 1. 4区第3洪水層下面南東部全景(南東から)
2. 4区第3洪水層下面南東部(南から)
3. 4区第3洪水層下面東端部(南から)
4. 4区第3洪水層下面東端部土層断面(南から)
5. 4区As-B下面全景(北西から)
- PL-116 1. 4区As-B下面西半部全景(南東から)
2. 4区As-B下畝全景(西から)
3. 4区As-B下畝(北から)
4. 4区As-B下畝土層断面(東から)
5. 4区As-B下畝土層断面(西から)
6. 4区As-B下畝(東から)
7. 4区As-B南端低地部(北から)
8. 4区As-B下面検出の土坑と溝全景(東から)
- PL-117 1. 4区2号溝全景(南から)
2. 4区3号溝全景(西から)
3. 4区2号溝全景(北から)
4. 4区3号溝全景(西から)
5. 4区1号土坑全景(南から)
6. 4区2号・3号・4号土坑全景(北から)
- PL-118 1. 4区As-B下面北東部全景(東から)
2. 4区As-B下面北東部(南から)
3. 4区As-B下面北東部(北から)
4. 4区As-B下面北東部(南から)
5. 4区As-B下面東半部全景(南から)
6. 4区As-B下畝(北東から)
7. 4区As-B下畝の畝(東から)
8. 4区As-B南端低地部全景(北東から)
- PL-119 1. 4区第5洪水層下面全景(南東から)
2. 4区第5洪水層下水田全景(北西から)
3. 4区第5洪水層下水田全景(東から)
4. 4区第5洪水層下水田のアゼ(北西から)
5. 4区第5洪水層下水田水口(南から)
- PL-120 1. 4区第5洪水層下水田土層断面F-F'(西から)
2. 4区第5洪水層下水田発掘作業風景(南から)
3. 4区第6洪水層下面全景(南東から)
4. 4区第6洪水層下面全景(北東から)
5. 4区第6洪水層下面流木出土状況(東から)
6. 4区第6洪水層下面流木出土状況(東から)
7. 4区から北方を臨む(南東から)
- PL-121 1. 4区権現山調査前全景(北から)
2. 4区権現山調査前全景(北から)
3. 4区権現山調査前全景(東から)
4. 4区権現山調査前全景(北上から)
5. 4区権現山表土下面全景(東から)
6. 4区権現山表土下面全景(南から)
7. 4区権現山集石検出状況(南西から)
8. 4区権現山1号・2号集石検出状況(南西から)
- PL-122 1. 4区権現山集石検出状況全景(北西から)
2. 4区権現山2号集石検出状況(西から)
3. 4区権現山2号集石全景(西から)
4. 4区権現山2号集石骨片出土状況(西から)
5. 4区権現山2号集石掘り方全景(西から)
- PL-123 1. 4区権現山3号集石検出状況(西から)
2. 4区権現山3号集石全景(西から)
3. 4区権現山3号集石骨片出土状況(西から)
4. 4区権現山3号集石骨片(西から)
5. 4区権現山4号集石(左上は3号)検出状況(西から)
6. 4区権現山4号集石全景(南西から)
7. 4区権現山4号集石掘り方全景(南西から)
8. 4区権現山4号集石の位置(南西から)
- PL-124 1. 4区権現山5号+17号集石検出状況(西から)
2. 4区権現山17号・18号集石全景(南西から)
3. 4区権現山17号・18号集石全景(南から)
4. 4区権現山17号集石五輪塔・銭貨出土状況(南から)
5. 4区権現山17号集石下層骨片・銭貨出土状況(西から)
6. 4区権現山17号集石下層骨片・銭貨(東から)
7. 4区権現山11号集石全景(東から)
8. 4区権現山11号集石掘り方全景(西から)
- PL-125 1. 4区権現山13号集石全景(西から)
2. 4区権現山13号集石掘り方全景(西から)
3. 4区権現山14号集石全景(東から)
4. 4区権現山14号集石掘り方全景(東から)
5. 4区権現山15号集石全景(北東から)
6. 4区権現山15号集石掘り方全景(北東から)
7. 4区権現山16号集石全景(北東から)
8. 4区権現山16号集石掘り方全景(北東から)
- PL-126 1. 4区権現山19号集石全景(北から)
2. 4区権現山19号集石掘り方全景(北から)
3. 4区権現山20号集石全景(東から)
4. 4区権現山20号集石掘り方全景(北から)
5. 4区権現山8号+21号集石検出状況(南から)
6. 4区権現山8号+21号集石全景(西から)
7. 4区権現山8号+21号集石掘り方全景(南から)
8. 4区権現山8号+21号集石掘り方全景(西から)
- PL-127 1. 4区権現山22号集石全景(西から)
2. 4区権現山22号集石掘り方全景(西から)
3. 4区権現山9号+23号集石検出状況(西から)
4. 4区権現山9号+23号集石全景(西から)
5. 4区権現山1号集石出土状況(南西から)
6. 4区権現山6号集石出土状況(南から)
7. 4区権現山7号集石出土状況(南から)
8. 4区権現山土層断面B-B'(南から)
- PL-128 1. 4区4号溝全景(北から)
2. 4区4号溝遺物出土状況(北から)
3. 4区5号溝全景(東から)
4. 4区6号溝全景(南東から)
5. 4区6号溝全景(北西から)
- PL-129 1. 4区洪水層上畝南半検出状況(東から)
2. 4区洪水層上畝南半完掘状況(東から)
3. 4区洪水層上畝全景(東から)
4. 4区洪水層上畝全景(北から)
5. 4区洪水層上畝全景(東から)
- PL-130 1. 4区古墳時代グリッド調査区全景(南から)
2. 4区古墳時代遺物出土状況(南から)
3. 4区古墳時代遺物出土状況(南から)
4. 4区古墳時代遺物出土状況(西から)
5. 4区古墳時代遺物出土状況(東から)
- PL-131 1. 4区褐色土面グリッド調査区全景(東から)

	2. 4区7号溝全景(東から)	PL-154	2区3号・4号住居出土遺物
	3. 4区7号溝底面(西から)	PL-155	2区4号・5号住居出土遺物
	4. 4区8号溝全景(東から)	PL-156	2区5号住居出土遺物
	5. 4区8号溝底面(西から)	PL-157	2区5号～7号住居出土遺物
PL-132	1. 女堀荒口地区前原1区から前田4区を望む(東から)	PL-158	2区7号・8号住居出土遺物
	2. 女堀荒口地区前田1区の調査(西から)	PL-159	2区8号・9号住居出土遺物
	3. 女堀荒口地区前田2区の調査(南から)	PL-160	2区9号住居出土遺物
	4. 女堀荒口地区前田3区全景(北から)	PL-161	2区9号住居出土遺物
	5. 女堀・前橋市荒子町より西を望む(は荒砥前田遺跡4区)	PL-162	2区9号住居出土遺物
		PL-163	2区9号住居出土遺物
PL-133	1. 3区女堀全景 調査前の4区を臨む(南東から)	PL-164	2区9号住居出土遺物
	2. 3区女堀全景 南を臨む(北西から)	PL-165	2区10号・11号住居出土遺物
	3. 3区女堀全景(北西から)	PL-166	2区11号・12号住居出土遺物
	4. 3区女堀埋没土層断面 G-G'(北西から)	PL-167	2区12号住居出土遺物
	5. 3区女堀土層断面と1号溝全景(北西から)	PL-168	2区14号・15号住居出土遺物
PL-134	1. 3区女堀排土検出状況(北西から)	PL-169	2区15号住居出土遺物
	2. 3区女堀排土土層断面 G-G' 北部(北西から)	PL-170	2区15号～17号住居出土遺物
	3. 3区女堀排土土層断面 G-G' 中央部(北西から)	PL-171	2区17号・18号住居出土遺物
	4. 3区女堀排土土層断面 G-G' 南部(北西から)	PL-172	2区19号・20号住居出土遺物
	5. 3区女堀排土土層断面 G-G' 南部(北西から)	PL-173	2区20号住居出土遺物
	6. 3区女堀排土土層断面 H-H'(南西から)	PL-174	2区20号～22号住居出土遺物
	7. 3区女堀排土下面全景(北西から)	PL-175	2区22号・23号・26号住居出土遺物
	8. 3区女堀排土下面平坦面全景(北西から)	PL-176	2・3区第1・第2・第3洪水層下面出土遺物 4区第2洪水層下面出土遺物
PL-135	1. 3区女堀排土下面7号溝全景(西から)	PL-177	4区1号溝第2・第5・第6洪水層下面出土遺物
	2. 3区女堀排土下面8号溝全景(西から)	PL-178	4区権現山出土遺物
	3. 3区女堀排土下面8号溝土層断面(南から)	PL-179	4区権現山集石出土遺物
	4. 3区北端低地部トレンチ(西から)	PL-180	4区権現山集石出土遺物
	5. 3区低地部北端トレンチボーリング調査(西から)	PL-181	4区権現山集石出土遺物
	6. 3区土壌分析試料採取第8地点(西から)	PL-182	4区権現山集石出土遺物
	7. 3区土壌分析試料採取第4地点(東から)	PL-183	4区権現山集石出土遺物
	8. 3区土壌分析試料採取第5地点(東から)	PL-184	4区台地部古墳時代包含層出土遺物
PL-136	1. 4区女堀全景(北西から)	PL-185	4区台地部古墳時代包含層出土遺物
	2. 4区女堀全景(南東から)	PL-186	4区台地部古墳時代包含層・7号溝出土遺物 3・4区女堀出土遺物
	3. 4区女堀全景(南から)	PL-187	3・4区女堀・遺構外出土遺物・縄文土器
	4. 4区女堀北部全景(南から)	PL-188	遺構外出土縄文土器
PL-137	1. 4区女堀西法面と底面(南から)	PL-189	遺構外出土縄文土器
	2. 4区女堀埋没土層断面 C-C'(南から)	PL-190	遺構外出土石器
	3. 4区女堀埋没土層断面東壁4区共通 F-F'(西から)	PL-191	遺構外出土石器
	4. 4区女堀埋没土層断面 C-C' はぎとり部分(南東から)	PL-192	遺構外出土石器・弥生土器
	5. 4区女堀排土土層断面(南東から)		
	6. 4区女堀排土土層断面 E-E'(南から)		
	7. 4区女堀排土土層断面 B-B'(南東から)		
	8. 4区女堀排土土層断面 B-B'(南から)		
PL-138	1. 4区女堀排土土層断面 A・B(南西から)		
	2. 4区女堀排土土層断面 A-A' 北半(西から)		
	3. 4区女堀排土下面全景(南東から)		
	4. 4区低地部女堀排土下面全景(北西から)		
	5. 4区権現山南東部女堀排土下面全景(南から)		
PL-139	1区南溝群出土遺物		
PL-140	1区南溝群出土遺物		
PL-141	1区南溝群出土遺物		
PL-142	1区谷部25号・26号溝出土遺物		
PL-143	1区谷部25号・26号溝・北支谷出土遺物		
PL-144	1区谷部25号溝・北支谷・16号溝・27号住居出土遺物		
PL-145	1区28号～31号住居出土遺物		
PL-146	1区31号住居出土遺物		
PL-147	1区31号住居出土遺物・2区1号不明遺構出土遺物		
PL-148	2区7号～10号井戸出土遺物		
PL-149	2区10号・21号・25号・28号土坑出土遺物 3区土坑群出土遺物		
PL-150	2区1号・2号住居出土遺物		
PL-151	2区2号・3号住居出土遺物		
PL-152	2区3号住居出土遺物		
PL-153	2区3号住居出土遺物		

第 1 章 調査に至る経過

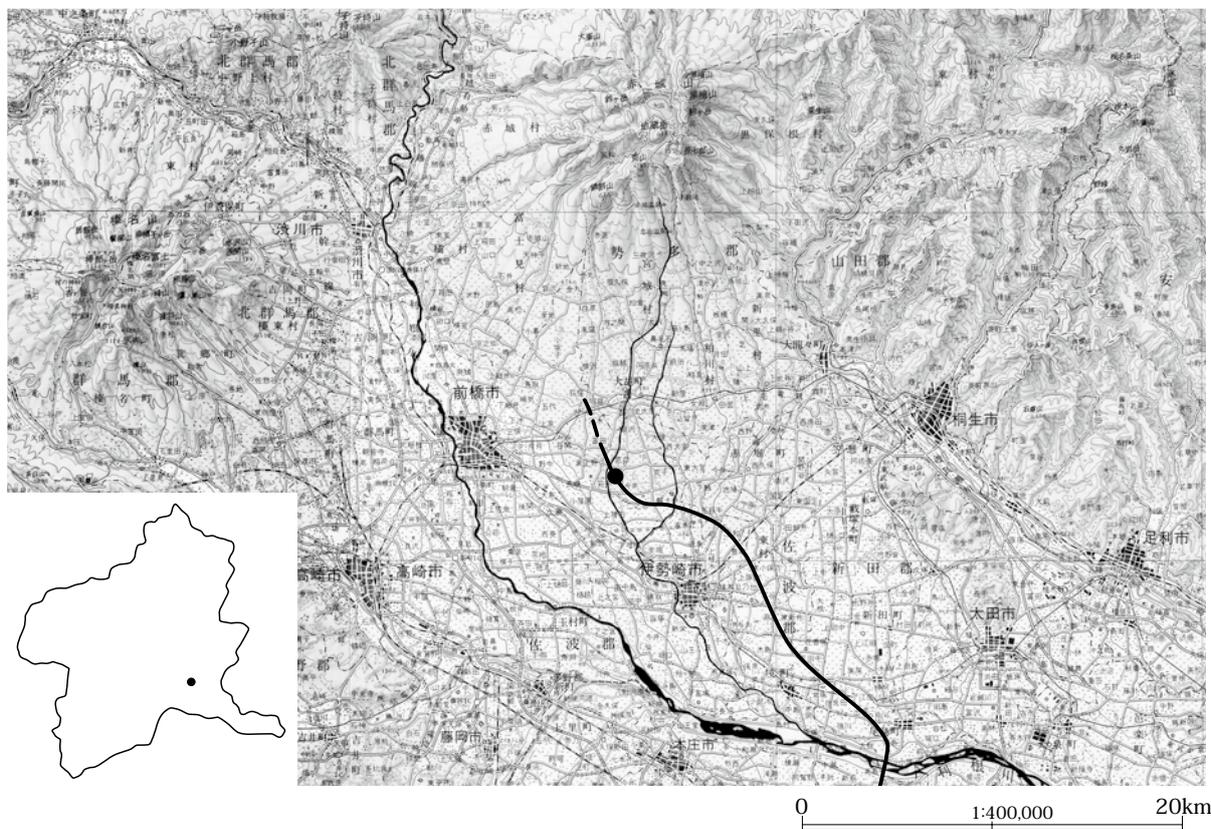
1. 国道 17 号改良工事と発掘調査

荒砥前田 遺跡は群馬県前橋市の東南部荒口町にある。JR 両毛線の駒形駅から北北東に約 3.7km の距離に位置する(第 1 図)。遺跡のある地域は前橋市街地の東に広がる農村地帯である。赤城山南麓の裾野にあたり、緩斜面の火山山麓性の台地とそれを開析する谷地形が入り組んだ地形を見せている。

遺跡は、国道 17 号の改良工事に伴って発掘調査が実施された。群馬県内の国道 17 号の改良工事は、埼玉県の高谷バイパスから前橋市田口町の現道に接続する通称「上武道路」建設として実施されている。上武道路は県内の平野部を斜めに縦断する基幹道路であり、すでに平成元年度に前橋市今井町の国道 50 号線までの 1 期工事が完了し、供用が開始された。

2 期工事に先だって昭和 48 年度から昭和 63 年度の 15 年間にわたって、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が実施された。調査された遺跡は 35 遺跡、面積は延べ 534,000m²に及んだ。これらの整理作業は昭和 56 年から平成 7 年度の 14 年間、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、旧石器時代から近世にわたる遺構・遺物が 26 冊にのぼる発掘調査報告書にまとめられている。

国道 50 号以北の工事(7 工区)は平成 11 年から開始された。上武道路が通過する地域は埋蔵文化財包蔵地が多くあり、考古学的にも注目される地域である。国道 50 号以北の道路建設工事に先立ち、当時の建設省(現国土交通省)関東地方建設局と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地



第 1 図 群馬県の地勢と荒砥前田 遺跡

第1章 調査に到る経過

を道路建設の対象区域から除外することが不可能であり、かつ事業の実施によって埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託されることとなり、平成11年4月1日付けで3者の協定書が交わされた。協定書では、国道50号から前橋市堤町までの調査に関する基本的事項が確認され、整理作業を含めた発掘調査を平成18年3月31日までに終了することとなった。

発掘調査は協定書に基づき、平成11年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が「国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その1)」として受託し実施した。本事業全体で発掘調査された遺跡は、当初、国道50号に接する今井道上 遺跡から菅野 遺跡までの12遺跡で、表面積は20万9000㎡に及んだ。

事業の進捗に伴って、平成11年4月1日付けの協定書は変更の必要が生じ、平成16年11月10日付けで新しい協定書が締結された。新協定書では、当初7工区(その1)に東半分が含まれていた菅

野 遺跡について、同一遺跡であることから7工区(その2)の協約に移行・統合し、7工区(その1)の調査期間を、整理期間を含めて平成22年3月31日までとすることに改めることとなった。最終的な7工区(その1)の各遺跡の発掘調査は第1表の通りである。

出土遺物等の整理事業は、平成11年の協定書に基づき、平成15年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東地方整備局の委託を受け、開始された。平成16年以降は平成16年11月10日付けの新しい協定書によって、整理事業が進められた。この間、荒砥北三木堂・富田下大日・江木下大日遺跡の整理事業の一部を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託している。

荒砥前田 遺跡の整理事業は、平成19年4月1日～平成20年8月31日で、個別の遺物接合・実測・写真撮影・トレース作業と、各遺構の図面の修正・トレース作業を終了した。平成20年9月1日からは入稿用デジタル原稿に向けた本文執筆と組版作業を実施した。

第1表 上武道路発掘調査遺跡一覧表(7工区その1)

遺跡略号	遺跡名	調査区	調査担当者 ()内は嘱託	調査期間
J K 36 B	今井道上 遺跡		飯塚卓二・小島敦子・今泉晃・佐藤理重	13.4.1 ~ 14.3.31
			洞口正史・新井英樹	14.6.1 ~ 14.9.10
J K 37	荒砥北三木堂 遺跡	1区	新倉明彦・龜山幸弘・(小宮山達雄)	12.4.3 ~ 12.9.30
		2区	飯塚卓二・小島敦子・今泉晃・佐藤理重	13.4.1 ~ 14.3.31
		3区	石塚久則・小島敦子・関根慎二・金子伸也・池田政志・金井仁史・今泉晃・(前田和昭)	12.4.3 ~ 13.3.31
			山口逸広・石原良人	15.10.1 ~ 15.12.25
J K 38	荒砥北原 遺跡	1区	小島敦子・今泉晃	13.4.1 ~ 14.3.31
		2・3区	小島敦子・関根慎二・池田政志・金井仁史・今泉晃・(前田和昭)	12.4.3 ~ 13.3.31
J K 39	荒砥前田 遺跡	1区	小島敦子・今泉晃	13.4.1 ~ 14.3.31
		2・3区	石塚久則・小島敦子・関根慎二・金子伸也・池田政志・金井仁史・今泉晃・(前田和昭)	12.4.3 ~ 13.3.31
		4区	田村公夫・今井和久・平方篤行・岡部豊	14.7.1 ~ 15.2.4
J K 40	富田細田遺跡		児島良昌・津島秀章・山村英二・(黒澤はるみ)	11.4.1 ~ 11.9.30
J K 41	富田宮下遺跡		飯塚卓二・児島良昌・津島秀章・山村英二・久保学・石田真・西原和久・(黒澤はるみ・小宮山達雄)	11.8.2 ~ 12.3.31
			中沢悟・坂口一・徳江秀夫・根岸仁・新井英樹・西原和久	12.4.3 ~ 13.3.31
J K 42	富田西原遺跡		女屋和志雄・安藤剛志・青木さおり	11.9.1 ~ 12.3.31
J K 43	富田高石遺跡		飯塚卓二・女屋和志雄・安藤剛志	12.4.3 ~ 13.3.31
			女屋和志雄・青木さおり	13.4.1 ~ 13.9.30
			洞口正史・新井英樹	14.4.1 ~ 14.7.5
J K 44	富田漆田遺跡		飯塚卓二・女屋和志雄・木津博明・児島良昌・田村公夫・安藤剛志	12.4.3 ~ 13.3.31
		旧石器	女屋和志雄・木津博明・吉田和夫・青木さおり	13.4.1 ~ 14.3.31
			洞口正史・新井英樹	14.4.1 ~ 14.5.15
J K 45	富田下大日遺跡		木津博明・児島良昌・田村公夫	12.4.3 ~ 13.3.31
			木津博明・吉田和夫	13.4.1 ~ 14.3.31
J K 46	江木下大日遺跡		女屋和志雄・洞口正史・木津博明・吉田和夫・新井英樹・高柳弘道・青木さおり	13.4.1 ~ 14.3.31
			洞口正史・新井英樹	14.8.1 ~ 14.10.25

第2章 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

(1) 遺跡・調査区・グリッドの設定

上武道路は赤城山南麓を斜めに横断し、発掘区は7工区(その1)だけでも総延長が5 kmにもおよぶ(第2図 PL 1)。

赤城山南麓には多くの帯状開析谷が発達しており、上武道路の路線は台地と谷地を交互にくりかえして通る地形になっている。加えて本地域には埋蔵文化財が豊富で、台地上はほとんどが遺跡であり、谷部にも埋没水田等が検出される。したがって遺跡が連続的に分布することになり、遺跡の区切りをどこにするか、遺跡名をどうつけるかが調査上の問題となった。

これについて調査担当者間で原案をつくり、前橋市教育委員会と協議した結果、今回の調査では一つの台地とその南側に接する谷地を含む一単位を一遺跡とすることとした。また既調査の遺跡には同名称をつけ後ろに「」を付すこととした。

今回の調査遺跡についても、同遺跡内で荒砥南部園場整備事業に伴う発掘調査が昭和56年に実施されており、すでに「荒砥前田遺跡」が調査されていた。したがって、今回調査された遺跡には同名称に

を付して「荒砥前田 遺跡」とした。今回の調査範囲は、荒砥前田遺跡調査区の南西側の荒砥川低地内の微高地部分である。南側には同じく昭和56年に荒砥南部園場整備事業に伴って調査された荒砥北原遺跡と、平成12年度に上武道路建設に伴って調査された荒砥北原 遺跡がある(第3図)。

荒砥前田 遺跡内の調査区は、調査の進行単位ごとに南側から1、2、3、4区を設定した。1区は南側の荒砥北原 遺跡3区と接する谷地から、既存の用水路までとした。1区の北半部は北側に続く微高地部、南側は谷地になっている。この谷地は上幅23 mの荒砥川の支谷で、遺跡北方1.5 kmの地点に

谷頭がある。本書では、1区を微高地部と谷部に分けて報告した。

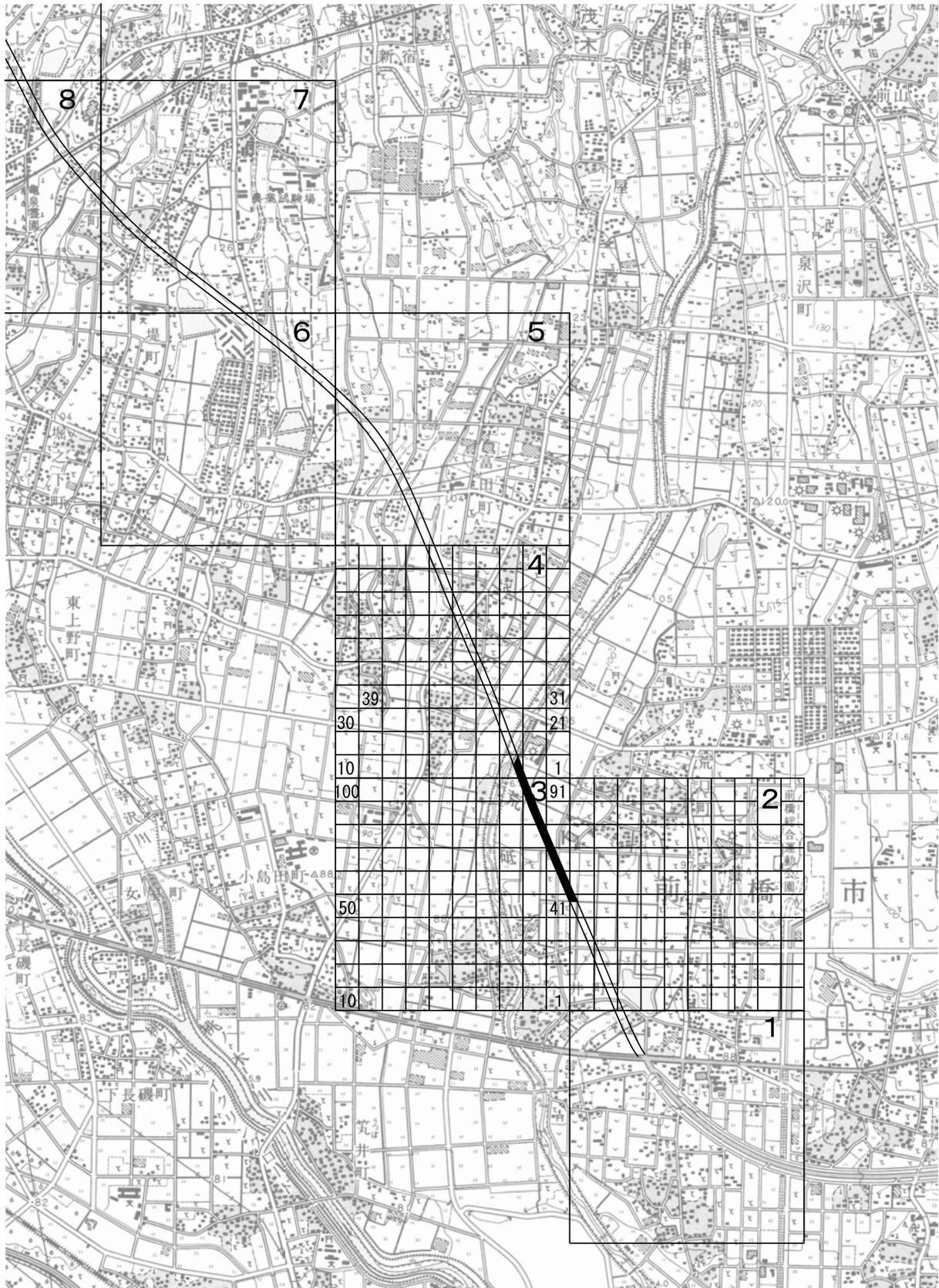
2区は1区との境の用水路から、3区との境の既存道路までとした。ほぼ全体が荒砥川低地内の微高地で、北西端部に荒砥川の沖積地の端がかかっている。また南端には、1区からつながる谷部の斜面が確認された。なお、2区北西部にある既存道路に挟まれた小さな三角形の部分(第3図)は、発掘対象地であったが、調査の掘削深が大きくなることが予想されたため、安全確保の観点から、調査区としないこととなった。

3区は2区との境の既存道路から、4区との境の既存道路までとした。2区とは一連の地形や遺構が検出されることは予想されたが、既存道路および排土置き場の確保等の調査工程上の理由から分割して調査した。3区の南西部には2区北西部で確認された荒砥川沖積地の東端がかかり、北端には女堀の西岸が検出された。

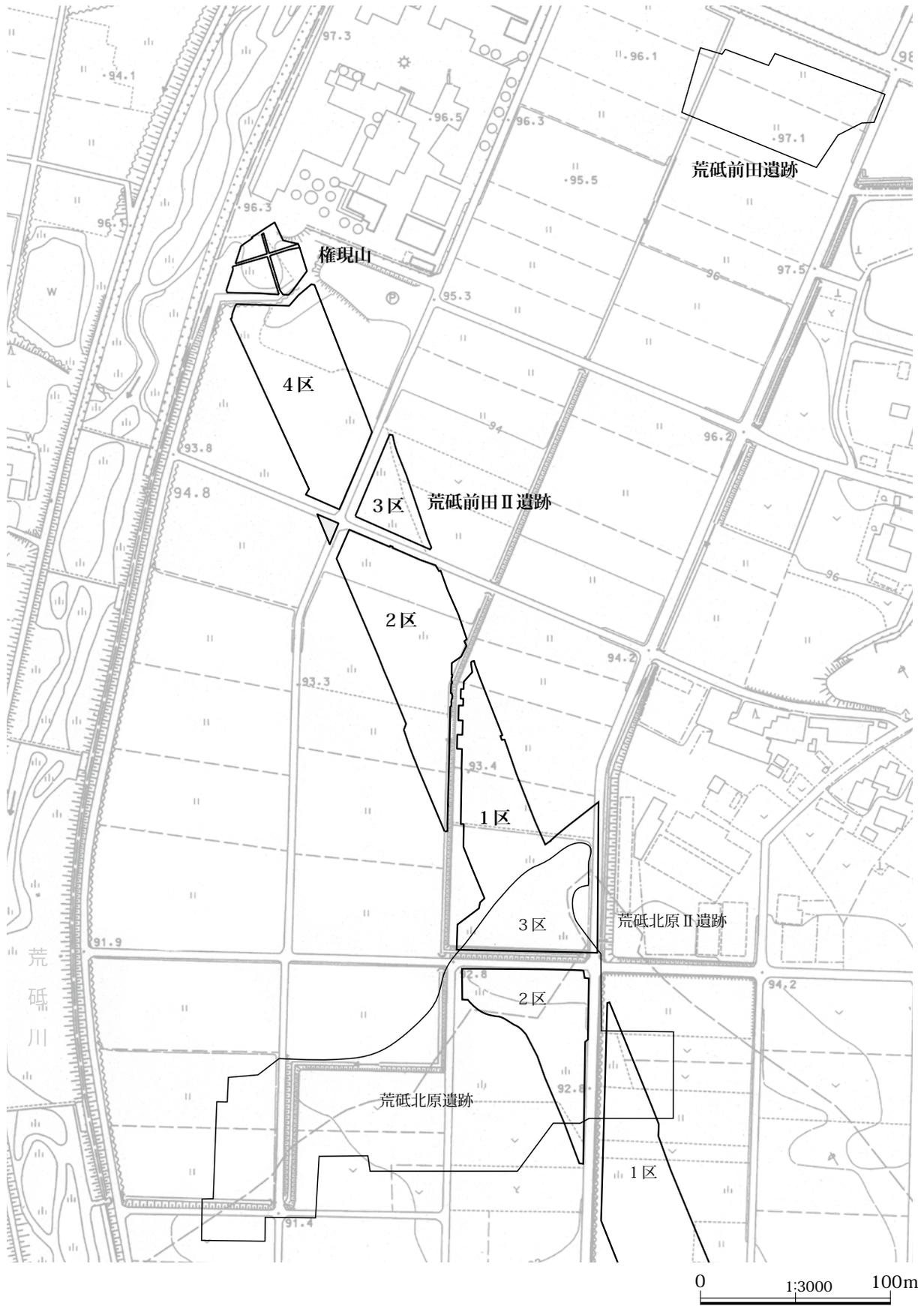
本書では2区と3区の連続する低地部は、一括して2・3区低地部として報告した。微高地部分については、それぞれ2区微高地部、3区微高地部として報告した。

4区は3区との境の既存道路から荒砥川までとした。4区は一部で産業廃棄物の廃棄がおこなわれ、遺構面を破壊する攪乱が顕著であった。また、荒砥川に最も近い部分では、女堀の掘削排土と推定される土山(通称権現山)が残されており、土層断面の詳細な検討の後、土山を除去して下面の調査も行った。そのため大規模な土砂移動が必要となったことから、権現山は既存水路を境に別工程で調査した。本書では、荒砥川低地の部分を4区低地部、権現山のある自然堤防部分を4区台地部として報告した。

なお国土交通省との調整では、工事区全体の現道に区切られた最小単位に連番をつけた地区名を用いた。しかし、これは考古学的な遺跡の動向とは関連



第2図 上武道路と荒砥前田 遺跡



第3図 荒砥前田 遺跡の発掘区

第2章 調査の方法と経過

しないので本報告書では用いないこととした。

平面図を記録する測量用のグリッドは、路線上の遺跡相互の関連性が把握しやすいように、1000 m四方の大グリッド - 100 m四方の中グリッド - 5 m四方の小グリッドの階層的なグリッド網を設定した。グリッド名称は各階層で異なる。1000 m四方の大グリッドは全線を1～9でカバーした。グリッド呼称が煩雑になるので、報告書の記載や個々の図面では大グリッドを省略している場合がある。中グリッドは大グリッドを100個に区切り、南東隅からZ方向に1から100までとした。小グリッドは中グリッドの中を5 mずつ区切り、東から西へAからT、南から北へ1～20とした。グリッド呼称は南東隅の交点をあて、独立した単位の100 m中グリッドと5 m小グリッドを並立して「98 - A - 1」のように呼称した。

荒砥前田 遺跡は、大グリッド3の中グリッド71・72・81・82・92・93と、大グリッド4の中グリッド2・3にある。遺跡内のグリッドの座標値は、国家座標第1系を用いて測量し、1区の3 - 72 - A - 1が旧座標でX = 41.800km、Y = - 61.100km、新座標にすれば概ねX = 42.155km、Y = - 61.392kmである。4区の4 - 3 - A - 1が旧座標でX = 42.000km、Y = - 61.200km、新座標にすれば概ねX = 42.355km、Y = - 60.492kmである(第2図)。

(2) 基本土層と遺構確認面

荒砥前田 遺跡の基本土層は、各調査区の谷部・微高地部では異なっている。それぞれの基本土層の詳細については各区の記述(第4章～第6章)のなかで述べたが、概要は下記のとおりである。第4図に各区の代表的な土層断面柱状図を示した。

1区谷部(第4図)では、沖積土層の上に攪乱を受けた盛り土が1.5 m近く堆積していた。これは昭和56年の圃場整備事業に伴って切り盛りされた土砂である。沖積土の間には、上位から第1洪水層、浅間Bテフラ(As-B)、第2洪水層、榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)が挟在しており、さらに下位には浅間C軽石(As-C)が純層に近い状態で堆積していた。谷

部内の遺構確認は第1洪水層直下面、浅間Bテフラ直下面、第2洪水層直下面、榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)直下面、浅間C軽石(As-C)混土層内、浅間C軽石直下面でおこなった。このうち榛名二ツ岳火山灰は残存範囲が東部と谷の北岸にある小支谷内に偏在しており、テフラ下面の記録は一部分にとどまった。第1洪水層の時期は浅間Bテフラより新しいが、詳細は不明である。第2洪水層は、浅間Bテフラと榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)の間にあり、その時期は6世紀初頭から1108(天仁元)年の間である。赤城山南麓地域では818(弘仁九)年の地震に伴う山体崩壊とそれによって引き起こされた洪水堆積物が確認されている。第2洪水層はこの堆積層である可能性が高いと推定される。

また、1区の谷部の南東縁に沿って南側の台地上を削る幅20 m程の流路群が検出された。この流路内には砂および小礫のラミナ堆積の重なりが顕著で、北から南へ順次堆積した様子が看取された。底面の一部には人工的に掘られた部分があり、元々は谷地脇の用水路と考えられる。しかし、埋積の様子は特殊であり、北側が埋まりながら、南側に広がっていったと推定される。埋積土層内には近世から現代の遺物が混在しており、新しい時期の地形改変と考えられる。

1区の北半部は黄色砂壤土性の微高地で、2区および3区東半部につながる地形である。1区微高地部(第4図)では、厚さ40cmほどに圃場整備事業に伴って切り盛りされた土砂が堆積しており、その下位に黄色洪水砂層が堆積していた。ここでは、黄色洪水砂層直上と直下、As-Cを混じる暗黒褐色土を掘削した地山上面で遺構確認をおこなった。ここで検出した黄色洪水砂層は色や形状の類似から、1区谷部の第2洪水層と共通する可能性がある。

2区微高地部の基本土層は、1区北半部と基本的に同様であるが、1区にあった黄色洪水砂層は確認できなかった。2区もすでに圃場整備事業が実施されて用水路西で一段低くなっていることから、黄色洪水砂層は削られてしまったものと推定される。し

たがって2区微高地部の遺構確認はAs-Cを混じる暗黒褐色土を掘削した黄色砂壤土上面(地山)のみでおこなった。この微高地は3区東半部にもつながっており、3区も同様な遺構確認面で調査した。本書では2・3区微高地部として一括して報告した。

2区北西部には荒砥川沖積地の東縁がかかっている。この低地は3区西部から北部にもつながっており、同様な土層堆積を確認した。本書では2・3区低地部として一括して報告した。

2区低地部(第4図)では、厚さ30cmほどの圃場整備事業に伴って切り盛りされた土砂が上位に堆積し、その下位に第2洪水層、第3洪水層、浅間粕川テフラ(As-Kk)、浅間Bテフラ(As-B)が沖積土に挟まって堆積していた。これらの直下面には遺構の残存が予想されたので、それぞれの直下面で遺構確認をおこなった。ただし、浅間粕川テフラ(As-Kk)の堆積は1cm以下で、下位の浅間Bテフラ(As-B)との間層も1cmほどで非常に薄いため、直下面の精査は実施しなかった。また、一部に第5洪水層、第6洪水層が検出され、その下位でも遺構確認をおこなった。なお、第1洪水層は調査が先行した3区微高地部で検出したが、後に重機のキャタピラ痕跡と判明したものである。これは記録対象とはしなかったが、層名は混乱を避けるため変更しなかった。

3区低地部(第4図)では女堀が谷を横断する部分を調査した。堆積土の上半部は圃場整備事業に伴う土砂と女堀の埋没土である。女堀底面下位には、第4洪水層、浅間粕川テフラ(As-Kk)、浅間Bテフラ(As-B)が堆積していた。遺構確認は女堀底面、第4洪水層直下面、浅間Bテフラ(As-B)直下面でおこなった。浅間Bテフラ(As-B)より下位は厚さ40cmほどの泥土と砂の互層で、自然堆積物と判断し遺構確認はおこなわなかった。これらの堆積土中のテフラ分析からは、榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)より後の土層という見解がでている。さらに下位には人頭大の礫層を確認した。

4区は3区低地部につながる低地部と、荒砥川の自然堤防と推定される台地部(通称権現山)がある。

4区低地部(第4図)では、厚さ1mほどの圃場整備に伴う土砂が堆積し、その下位に第2洪水層、第3洪水層、女堀排土、浅間粕川テフラ(As-Kk)を多く含む土層、浅間Bテフラ(As-B)、第5洪水層が間層をあけて堆積していた。また北東部の最下層には帯状低地があり第6洪水層が部分的に確認された。遺構確認は、第2洪水層直下面、第3洪水層直下面、女堀排土上面、女堀排土下面、浅間Bテフラ(As-B)直下面、第5洪水層直下面、第6洪水層直下面でおこなった。なお第4洪水層は、3区で検出された土層に対応する洪水層が確認できなかったことから、名称を使用しなかった。

4区台地部(第4図)は、中グリッド2・3の15ラインあたりで低地部から立ち上がっている。ローム層は確認できなかった。荒砥川の自然堤防と推定される。ここでは、低地部とは異なった地層堆積となっていた。上層は圃場整備事業でも削平を免れた通称権現山で、厚さ20cmほどの表土下には高さ3~4mにおよぶ女堀排土が残存する。その下位には浅間Bテフラ(As-B)を多量に含む暗灰色砂質土、灰色砂質土、As-Cを混じる暗黒褐色土、地山と考えられる褐色砂質土が堆積している。4区低地部で女堀排土下に堆積していた浅間Bテフラ(As-B)は鋤き込まれたものと考えられる。したがってその下位の洪水層は低地部の第5洪水層に対比できる可能性もある。遺構確認は、表土直下(女堀排土上面)、女堀排土下面、洪水層直下面、褐色砂質土上面でおこなった。

(3) 発掘調査の記録

発掘調査にあたっては、図面・写真および調査所見メモを記録した。

図面は各遺構の断面図と平面図を作成した。平面図は竪穴住居・土坑等の遺構は20分の1、溝跡等については40分の1の個別平面図を地上測量委託し作成した。断面図は遺構図に対応する縮尺で発掘作業員が実測した。実測図のうち断面図は、平面図と同様なデジタルデータ化を目的に、スキャニング

第2章 調査の方法と経過

を委託した。1～4区の低地部については、重層する遺構確認面ごとに主として航空測量による図化を委託した。断面図と一部の遺構平面図は実測および平板測量を委託した。

各遺構の埋没状況については、土層観察用のアゼを十字に設定し、すべての遺構で土層断面図を作成した。断面図の土層の注記は調査担当者各自の観察に委ねたので、色名の記載や硬度について不統一な部分がある。特に純堆積でないテフラの同定は実施していないため、土層の注記では確定できる場合を除き、「白色軽石」との記述にとどめた。1～4区の低地部分に堆積するテフラ層については、遺構・遺物を理解するにあたって必要不可欠であるので、土壌の自然科学分析を委託し、記載した。

遺構写真は35mmモノクロフィルムとカラーライドフィルムおよび、ブローニーモノクロフィルムを用いて撮影対象・撮影日・撮影方向を添付し、地上撮影した。大型遺構や谷部は高所作業車から全景写真を撮影した。また、谷部の各遺構面の全景写真、2区古墳時代前期住居群の全景写真は、空中写真撮影を委託した。撮影した写真はベタ焼きを遺構ごとに35mmとブローニーを網羅して整理し、撮影対象・撮影日・撮影方向を記入したネガ検索台紙を作成した。

調査所見メモは調査担当者ごとに書式は異なるが、野帳や遺構平面図に直接、遺構調査時の所見を記載した。また、2区古墳時代前期の遺構から出土した炭化材については樹種同定を委託して実施した。

2. 発掘調査の経過

荒砥前田 遺跡の発掘調査は、1区が平成12年10月から平成13年8月まで、2・3区が平成12年6月から平成13年2月まで、4区は平成14年7月から15年2月まで実施した。この間の調査体制は複数の調査班が対応しており、調査工程により隣接する他遺跡の調査も平行して実施している。各区の調査経過の概略は次の通りである。

[平成12年度]

- 6月 1日 調査準備開始。
- 6月 5日 3区表土掘削開始。
- 6月 7日 3区女堀調査開始。
- 6月 8日 2区表土掘削開始。
- 6月15日 3区女堀精査。土層断面写真撮影。
2区遺構検出作業開始。
- 6月21日 3区女堀全景写真撮影。
- 6月22日 3区女堀測量。
- 6月29日 3区女堀全景写真撮影。
- 6月30日 3区女堀排土除去作業開始。
- 7月 4日 2・3区谷部第2洪水層下面調査開始。
- 7月12日 2・3区谷部第2洪水層下水田全景写真・航空測量写真撮影。
- 7月13日 2・3区谷部第3洪水層下水田調査開始。
- 7月17日 3区女堀排土下面調査開始。
- 7月18日 3区女堀排土下面全景写真撮影。
- 7月19日 3区女堀排土下面測量。
- 7月27日 2・3区谷部第3洪水層下水田全景写真・航空測量写真撮影。
- 7月28日 3区第4洪水層下面調査。
- 8月 1日 2区浅間Bテフラ下面調査開始。
- 8月 2日 3区第4洪水層下面全景写真撮影。
測量。
- 8月 7日 2・3区浅間Bテフラ下面調査。
- 8月 8日 2区微高地部遺構確認作業開始。
- 8月 9日 2区微高地部住居・土坑・溝調査開始。
- 8月11日 2・3区浅間Bテフラ下面全景写真・航空測量写真撮影。
- 8月17日 2区第5洪水層下面調査開始。
3区黄色砂質土面調査開始。
- 8月21日 2・3区谷部土壌分析試料採取。
- 8月22日 3区土坑群調査開始。
- 8月25日 2区第5洪水層下面全景写真撮影。
測量。
- 9月 5日 3区最終面全景写真撮影。測量。
- 9月14日 3区縄文時代遺構確認トレンチ調査。
- 9月18日 3区調査終了。

2. 発掘調査の経過

- 10月19日 1区表土掘削開始。
- 10月24日 1区微高地部洪水層下水田全景写真・航空測量写真撮影。
- 11月6日 1区微高地部住居調査開始。
- 11月22日 1区谷部第1洪水層下水田調査開始。
- 11月29日 1区微高地部溝全景写真撮影。測量。
- 12月8日 1区谷部第1洪水層下水田全景写真・航空測量写真撮影。
- 12月9日 1区谷部第1洪水層下水田畦・耕土断ち割り調査。
- 12月13日 2区古墳時代前期住居群全景写真撮影。
- 12月14日 1区谷部浅間Bテフラ層まで重機掘削。
- 12月19日 1区谷部浅間Bテフラ層下面調査開始。
- 12月22日 1区谷部浅間Bテフラ層下面全景写真・航空測量写真撮影。
- 1月11日 1区谷部第2洪水層下水田調査開始。
- 1月19日 1区谷部第2洪水層下水田土壌分析試料採取。
- 1月22日 2区谷部第6洪水層下水田調査開始。
- 1月23日 2区微高地部縄文時代遺構確認グリッド調査開始。
- 1月24日 1区谷部第2洪水層下水田全景写真・航空測量写真撮影。
- 2月5日 2区調査終了。
- 2月14日 1区谷部榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)面調査開始。
- 3月5日 1区谷部榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)面全景写真撮影。測量。
- 3月7日 1区谷部浅間C軽石(As-C)上面調査開始。
- 3月16日 1区谷部全景写真・航空測量写真撮影。
- 3月26日 12年度調査終了。
- [平成13年度]
- 6月11日 1区谷部調査再開。1区谷部浅間C軽石(As-C)混土および中段部溝掘削開始。
- 7月4日 1区谷部浅間C軽石(As-C)混土および中段部溝全景写真・航空測量写真撮影。
- 7月11日 1区谷部発掘壁土層断面注記作業。
- 7月17日 1区谷部中段部溝埋積砂礫層記載作業。(上武大学伊勢屋ふじこ教授)
- 7月18日 1区谷部中段部溝土層断面補測。
- 8月7日 1区調査終了。
- [平成14年度]
- 7月8日 4区確認調査。
- 7月9日 4区調査準備開始。
- 7月22日 4区表土掘削開始。
- 8月6日 4区低地部南半第2洪水層下水田検出。
- 8月9日 4区低地部南半第2洪水層下水田全景写真・航空測量写真撮影。
- 8月12日 4区低地部南半第2洪水層下水田復旧溝精査。
- 8月20日 4区台地部(権現山)調査開始。
- 8月22日 4区台地部(権現山)表土除去面全景写真・航空測量写真撮影。集石遺構の調査開始。
- 9月3日 4区低地部北半第2洪水層下水田全景写真・航空測量写真撮影。
- 9月9日 4区低地部北半女堀調査開始。
- 9月13日 4区低地部女堀全景写真・航空測量写真撮影。
- 9月17日 4区台地部(権現山)女堀調査開始。
- 9月19日 4区低地部南半第3洪水層下面調査開始。
- 9月26日 4区低地部南半第3洪水層下面全景写真撮影。
- 9月27日 4区低地部西半浅間Bテフラ下面調査。
- 10月5日 4区台地部(権現山)南西の1/4を掘削。
- 10月9日 4区低地部東半女堀排土掘り下げ。
- 10月10日 4区低地部西半浅間Bテフラ下面全景写真・航空測量写真撮影。
- 10月11日 土壌分析試料採取。4区台地部(権現山)南西部女堀排土下遺構無しを確認。浅間C軽石混土面精査。
- 10月12日 4区低地部西半第5洪水層下面調査開始。
- 10月23日 4区台地部(権現山)南東1/4を掘削開始。
- 10月24日 4区台地部(権現山)南半洪水層下確認。

第2章 調査の方法と経過

- 10月28日 4区低地部東半浅間Bテフラ下面調査開始。
- 10月31日 4区低地部西半第5洪水層下面と北東半浅間Bテフラ下面全景写真・航空測量写真撮影。
- 11月6日 4区低地部南東部浅間Bテフラ下面と第3洪水層との関係精査。
- 11月8日 4区低地部南東部第3洪水層下面全景写真撮影。
- 11月9日 4区低地部女堀排土掘削開始。
- 11月13日 4区台地部(権現山)南半洪水層下畝全景写真・航空測量写真撮影。
- 11月15日 4区低地部女堀排土下面全景写真・航空測量写真撮影。台地部(権現山)北西1/4を掘削。断面図測量。
- 11月16日 4区台地部(権現山)掘削。北半排土下面遺構無しを確認。洪水層下畝・溝調査。
- 11月21日 4区低地部南東部浅間Bテフラ下面調査。
- 11月22日 4区台地部(権現山)洪水層下面全景写真撮影。
- 11月28日 4区低地部南東部浅間Bテフラ下面全景写真・航空測量写真撮影。
- 11月29日 4区台地部(権現山)浅間C軽石(As-C)混土調査。遺物多数検出。
- 12月2日 4区低地部南東部第5洪水層下面調査。
- 12月12日 4区台地部(権現山)最終面全景写真・航空測量写真撮影。
- 12月18日 4区低地部南東部第5洪水層下面全景写真撮影。
- 1月6日 4区低地部第3洪水層下面調査。
- 1月10日 土壌分析試料採取。
- 1月16日 4区低地部南東部第6洪水層下面全景写真撮影。4区調査終了。

3. 整理作業の経過

荒砥前田 遺跡は、縄文時代から近代までの遺構・遺物が検出された複合遺跡である。これらの発掘調査成果・出土資料の整理作業および報告書編集作業は平成19年4月1日～平成21年6月30日に実施し、平成21年度に報告書を刊行した。

平成19年度の整理作業は、遺物整理、遺構図面の修正編集トレース作業、遺物写真の編集作業をおこなった。

遺物整理は、縄文時代から近世にかけての遺構から出土した土器や石器の遺物類収納箱79箱分を対象とした。概ね4月から11月に、土師器・須恵器類の分類・接合・復元作業をおこない、報告書掲載遺物を選択して写真撮影をおこなった。12月以降は三次元計測器や長焦点の実測用写真撮影を併用しながら、実測作業をおこなった。縄文土器・弥生土器・陶磁器・軟質土器についても、下半期に分類および観察作業をおこない、実測遺物の選択をおこなった。

遺構図面については、上半期に修正編集作業をおこなって、9月からデジタルトレース図作成を実施した。個別遺構については掲載データの個別編集まで終了した。

遺物写真は、写真室でデジタル写真撮影を行い、デジタルデータ処理のためのファイル名の整理、サイズ調整をおこない、画質調整作業および組版作業に着手した。

平成20年度は 報告書掲載遺物の実測図作成および遺物観察作業、遺物図面のトレースおよび編集作業、遺構写真の補正および写真図版のデジタル編集作業、観察記録や所見等の本文原稿執

第2表 荒砥前田 遺跡検出遺構一覧表

時代	縄文時代		古墳時代							古代				中世		中世以降時期不明				近世以降		
	土坑	竪穴住居	掘立柱建物	土坑	竪穴状遺構	畝	溝	水田面	自然河川	土坑	復旧溝	溝	水田面	水田面	女堀	溝	土坑	井戸	ビット	集石墓塚	土坑	水田面
1区		4		1			6	1	2			2	1	1		3	2	1				1
2区	2	26	4	1	3	2	3	1			1	3	1	1		3	26	10			1	1
3区				1	1		2							1	1				4			
4区				1			2			2		3		1	1	3	4			14		

筆、全体のデジタル組版をおこなった。

報告書掲載遺物の実測は、昨年度からの継続で上半期に実施した。特に大型遺物と陶磁器、大型石製品の実測図作成をおこなった。8月には拓本作業をおこなった。遺物実測作業と平行して遺物図のデジタルトレースを実施した。

遺構写真についてはネガをスキャンしてデジタルデータ化し、デジタル撮影した遺物写真とともに、補正作業・レイアウト作業を実施した。

9月以降は、デジタルデータで報告書の組版作業を開始した。本文・遺物観察表等の原稿は上記作業と平行して執筆した。1月から3月は作成した印刷原稿データの推敲・校正・編集修正を繰り返し実施し、次年度のデジタル出稿作成のための編集作業を行った。

平成21年度は印刷原稿データの校正を繰り返し、原稿整理をおこなった。

また遺物管理台帳を作成し、活用に備えて遺物や資料類の収納作業をおこなった。

4．整理作業の方法

(1) 遺物整理

土器は遺構ごとに接合記録を作成しながら接合を行った。接合作業は接合状況および遺構内の遺物出土状況を平面図および写真と確認しながら実施した。遺構内から出土した遺物は該当するグリッド取りあげ遺物とも接合を試みた。

次に遺物出土状態や個体数・形態差等を勘案し、報告書に掲載する遺物を選択した。今回選択した土器・土製品は667点である。選択できなかった土器は遺構・出土位置ごとに種別・器種(縄文土器は細別型式まで)を分類し、出土遺構ごとに計数し、収納した。

報告書掲載土器は復元し、写真撮影をおこなった。遺物写真は当事業団写真室でデジタルカメラを用いて撮影した。

遺物実測図は等倍で作成した。完形に近い土器は

三次元計測システムで測点し、その印刷出力図を補測・製図した。破片土器は当初から人力で復元実測を行った。今回実測対象となった土師器には刷毛目整形や磨き整形が施されたものが多かったが、それらの幅や単位・方向・重複関係に留意しながら実測した。また、縄文土器・弥生土器破片は断面実測し、縄文原体や文様が読み取れるように留意して採拓した。土器のトレースはアドビ社イラストレーターによりデジタルトレースした。拓本と染付陶磁器の絵については墨入れして作成したものをスキャンして線画トレースと合成してデジタルデータとした。

土器の観察は表形式にまとめた。色調は『標準土色帖』を用いて記載し、口径・底径・高さは実測図から計測した。胎土は特徴的な夾雑物を中心に記載した。特徴は文様および整形技法の特徴を記載した。

石器類は遺構の内外から出土したが、出土位置を確認しながら、石器・剥片・碎片・礫・礫片に形態分類した。石器は報告書掲載対象として抽出し、剥片・碎片・礫・礫片は出土位置ごとに計数し収納した。石器のうち小破片は掲載対象からはずした。このうち石器は、概ね縄文時代、古墳時代、中世以降の遺物に分けて、器種分類と石材同定を実施した。

縄文時代の石器の総数は46点である。このうち35点は実測し、11点は写真のみ掲載した。これらの石器は古墳時代住居の埋没土や中近世の遺構埋没土から出土しており、遺構との関連は無いことから、「第7章遺構外の遺物」にまとめて、器種別に掲載した。

古墳時代の石器は64点で、そのほとんどが1・2区微高地部の古墳時代住居から出土した。これらは遺構出土遺物として、各遺構の遺物図に掲載した。

中世以降の遺構出土の石器・石製品は59点で、五輪塔や板碑の大型石製品が4区権現山に集中して出土した。これらも基本的には遺構出土遺物として、各遺構の遺物図に掲載した。

石器の実測図は等倍で作成した。石器を長焦点カメラで撮影し、その印刷出力図を補測・製図した。トレースは墨入れでおこない、スキャンして縮

第2章 調査の方法と経過

小しデジタルデータ化した。石製品の拓本も同様にスキャニングして縮小しデジタルデータ化して、線画に合成した。

石器の観察は表形式にまとめた。石材の同定は群馬県地質研究会の飯島静男氏に依頼した。長さ・幅・厚さは実測図から計測した。重さは6kgまでは1g単位、20kgまでは50g単位、20kg以上は100g単位の秤を使用して計測した。

金属製品および関連遺物は当事業団保存処理室でレントゲン撮影をして残存状態を確認した上でクリーニングを行った。出土したすべての金属製品を実測・写真撮影し、報告書に掲載した。内訳はキセル2点、巴形銅器1点、鎌5点、刀子1点、不明3点、鉄滓8点と、銭貨21点である。

金属製品の実測図も長焦点カメラで撮影し、その印刷出力図を補測・製図した。トレースは墨入れでおこない、スキャニングして縮小しデジタルデータ化した。巴形銅器については、原料産地を推定するための自然科学分析を委託して実施した。

以上のような作業を通して、資料化し、何らかの形で本書中に掲載した資料は880点である。資料の内訳は土器・土製品667点、石器170点、鉄および関連遺物17点、銅製品3点、銭貨21点、ガラス瓶3点である。これらのデジタルデータ化した遺物実測図はアドビ社のインデザインにより組版し、印刷原稿とした。

(2) 遺構図面整理

遺構図は、すべての図面に通し番号を付し、台帳を作成した。今回の発掘調査で作成された遺構図は684枚である。これらの遺構図は平面図と断面図の照合・修正作業をおこなった後、CADデータのある平面図についてはアドビ社のイラストレーターにより修正編集した。また現場で手実測した断面図は、原図をスキャニングしてデジタルトレースした。

遺構断面図の土層注記は若干の用語統一を行ってデジタル入力した。イラストレーターで作成した

個々の遺構デジタルデータ・土層注記・土層番号・土器番号等をアドビ社のインデザインにより組版して、報告書印刷原稿として編集した。

遺構全体図もCADデータをアドビ社のイラストレーターにより、折り込み図あるいは付図として編集した。

(3) 写真整理

遺構写真はすべてのネガに通し番号を付し、台帳およびネガ検索台紙を作成した。今回の調査で撮影された遺構写真は、35mmモノクロフィルム219枚、ブローニーモノクロフィルム302枚である。

報告書に掲載する写真を選択して、ネガをスキャニングし、アドビ社のフォトショップにより画像補正をおこなってデジタルによる印刷原稿データを作成した。デジタルカメラで撮影した遺物写真も同様に倍率を揃えて画像補正し印刷原稿データを作成した。これらのデータと、キャプション原稿をアドビ社のインデザインにより組版して、報告書印刷原稿として編集した。

(4) 報告書編集・刊行

以上のような作業で作成した図および写真と、調査所見の詳細な事実記載に努めた本文をインデザインにより組版して、印刷原稿とした。印刷原稿データの部内校正を入念に行い、修正・加筆を実施して入稿した。

第3章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と地形

(1) 赤城山南麓の地形

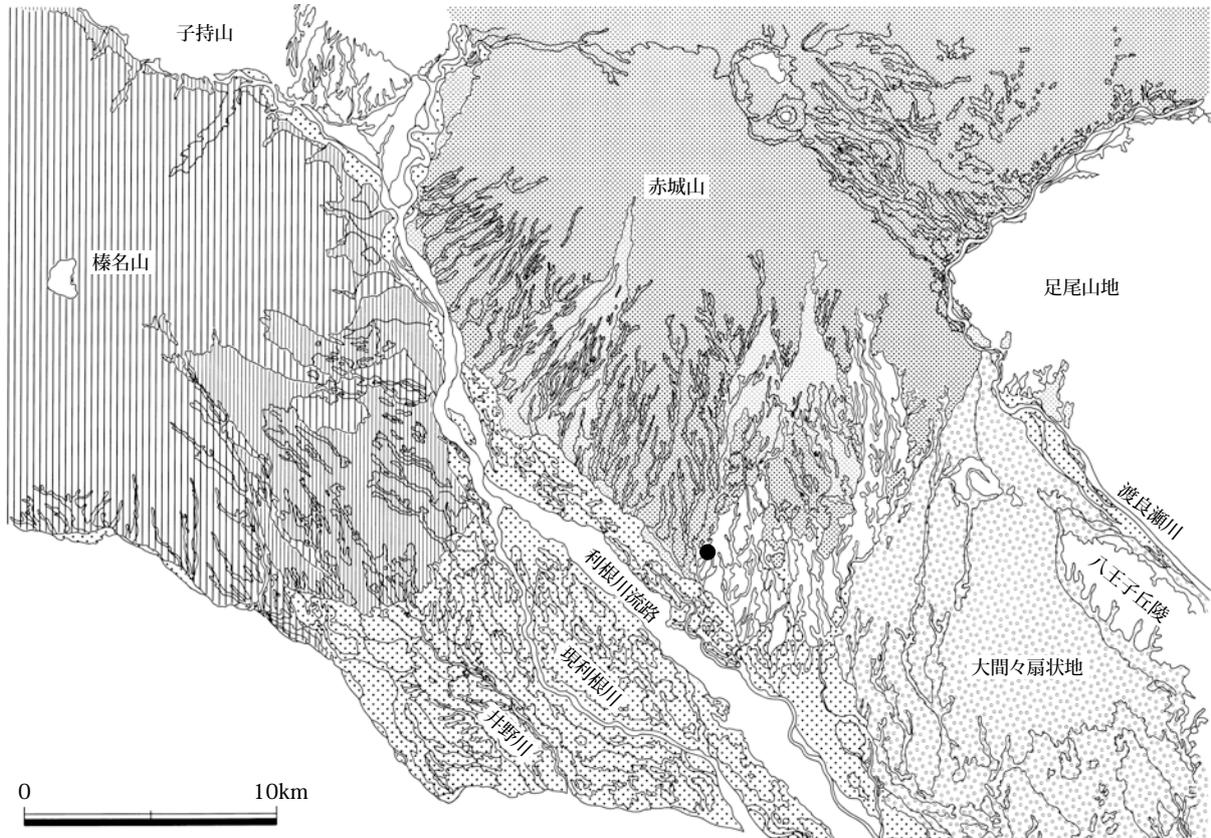
荒砥前田 遺跡は、県北の山地と南東平野部が接する群馬県中央部に位置する。県央地域には西に榛名山、東に赤城山があり、その裾野には丘陵性の台地が広がっている。遺跡はこのうち東側に位置する赤城山の南麓に形成された火山麓扇状地端部にある。

赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山で、3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った火山活動はなく、火山山麓扇状地の形成期となっている。山麓の扇状地にはさらに新期の扇状地が一部にのるが、遺跡の西側を流下する荒砥川以西は同じ赤城山の山体でも基底に大胡火砕流が堆積する古い地形面である。(第5図)。

赤城山南麓には荒砥川、宮川、神沢川、江龍川などの中小河川が流下している。これらの河川や台地端部からの湧水により火山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に荒砥北部地区では帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。

赤城山南麓の微地形はローム台地、砂壤土からなる微高地、沖積地に分類される。ローム台地は火山麓扇状地の原形面に関東ローム層が堆積した台地である。いわゆる暗色帯の堆積が認められ、旧石器時代の文化層が包含されている。

ローム台地に付随するように存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降雨災害等によって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。縄文時代後期以降の遺跡



第5図 群馬県中央部の地形と荒砥前田 遺跡

第3章 遺跡の立地と環境

はローム台地あるいは、この微高地に分布する。本地域では微高地を形成する再堆積土の下層から検出される縄文時代早期の遺跡も存在する。沖積地は前述した山麓を開析する谷地形内にあり、古墳時代以降の埋没水田が検出されている。

(2) 荒砥前田 遺跡の立地

荒砥前田 遺跡はこのような赤城山の南麓末端に近い、標高90～93m前後の地点に立地する。遺跡周辺の地形は後期更新世前半に形成された山麓扇状地で、山麓に水源をもつ小河川と山麓に谷頭をもつ細長い低地とその支谷が、樹枝状に台地に入り込んだ様相を呈している。

これらの樹枝状に広がった多くの帯状低地は、谷内の小流水を集めながら、主要河川につながっている。荒砥前田 遺跡のすぐ西側を流れる荒砥川は、標高920m前後の山頂近くに水源をもち、流域長23km余りの、荒砥地域の主要河川の一つである。

荒砥前田 遺跡は、この荒砥川左岸の沖積地と沖積地内に北東から南西に展開する微高地上に立地する(PL 2)。微高地(1区～2・3区微高地部)は、南側の荒砥北原遺跡や荒砥北原 遺跡があるローム台地より一段低い地形面で、幅の狭い谷(1区谷部)を隔てた北側にある。現状では水田化され、地図上では沖積地内と見えてしまうが、古墳時代前期に竪穴住居群30軒が選地していた微高地である。

この微高地の北側と南側には帯状の低地があり、複数の洪水層やテフラ層に覆われた遺構面が確認され、各時期の低地の土地利用の変遷が判明した。南側の1区谷部は、台地と微高地の間を開析する幅の狭い谷で、2層の洪水層と浅間Bテフラ、榛名ニツ岳火山灰、浅間C軽石層等に覆われた遺構面が確認された。このうち浅間Bテフラを除く面で、水田あるいは耕作痕を検出した。浅間C軽石直下で小規模な谷側方の谷頭と遺物集中部が検出され、北側微高地の古墳時代前期の集落との関連があると推定された。一方、南側のローム台地上にある荒砥北原遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓群が調査されてお

り、谷地を挟んで居住域と墓域が立地する両遺跡の有機関係を想定したい。1区谷部では生産遺構は検出されなかったが、浅間C軽石上下層でイネおよびヒエ属型の植物珪酸体が検出されており、1区谷地下流部が当時の生産域となっていた可能性は高い。古墳時代前期における居住域・墓域・生産域の揃った農耕集落立地の典型といえよう。

北側の4区低地部は幅の広い荒砥川の沖積低地で、浅間Bテフラ降下以前の洪水層直下でイネおよびヒエ属型の植物珪酸体が検出されており、生産域として土地利用されていたことが判明した。しかしこれらの洪水層の時期は不明であり、谷の開発時期は明らかでない。4区台地部の権現山下層で古墳時代中後期の遺物が出土したことから、谷の開発が古墳時代である可能性も考えられる。

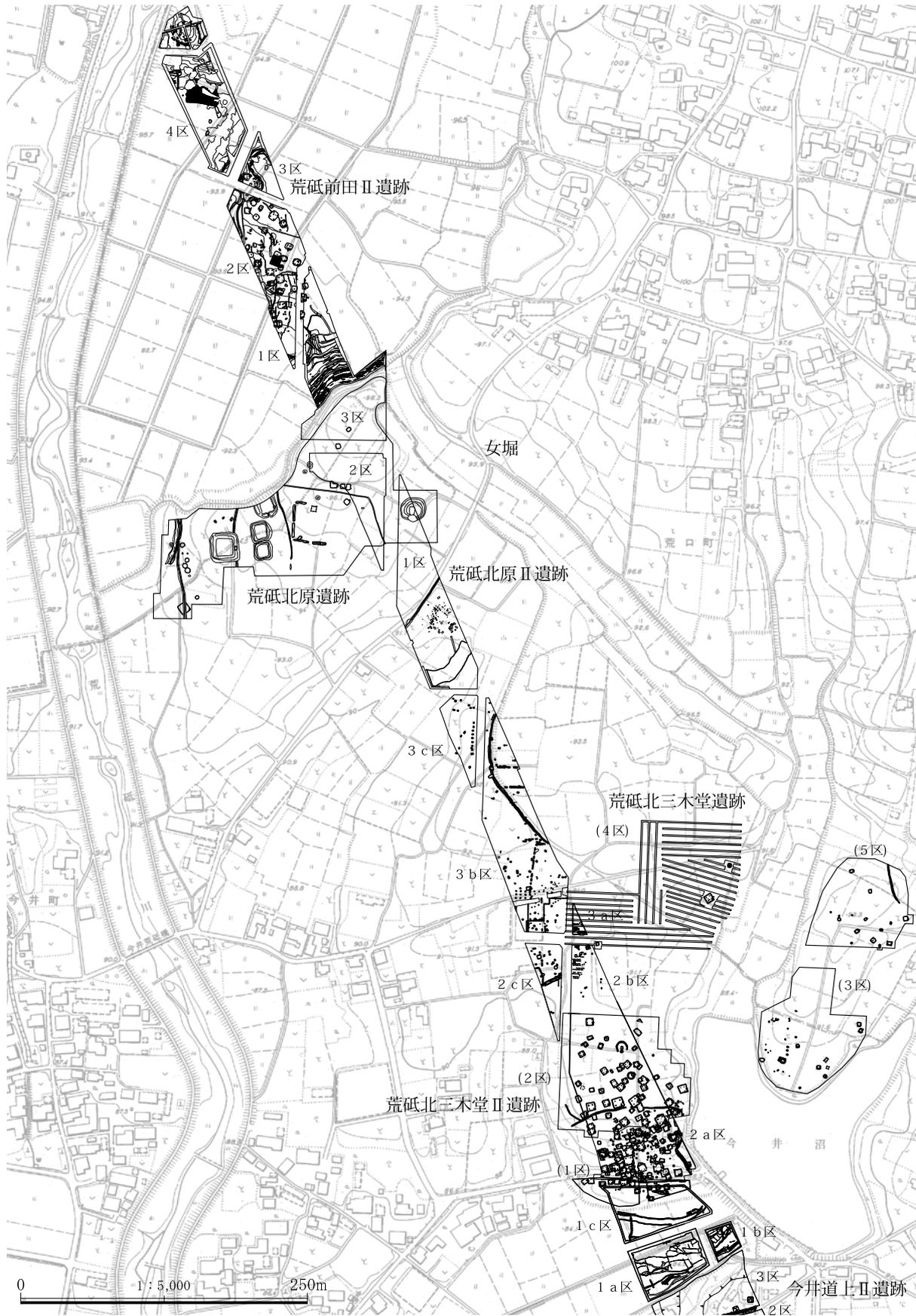
浅間Bテフラ降下以降の第2洪水層の頃には、低地内は低平に埋積が進み、水田化が進んでいたと推定される。微高地上でも女堀以外の古代・中世の遺構はほとんど検出されなかった。1区微高地部では洪水層下で水田が見つかり、古代以降微高地部全体が開田されていた可能性が考えられよう。

2. 周辺の遺跡分布

荒砥前田 遺跡がある地域は、赤城山南麓の農村地帯である。前述したように火山性の山麓扇状地で、湧水と地表面の侵食によって刻まれた開析谷が発達しており、数条の小河川が流下している。本地域には農耕集落を成立させる基盤が整っていた。

しかし、本地域は火山性地形特有の保水性の乏しい地質で、流下する小河川の水量のみでは水確保は困難である。農耕地拡大が不可欠であった古墳時代以降の農耕社会発展過程にあつては、人々の生活は用水確保の歴史でもあった。そして農業用水確保の歴史は近年まで続き、大正用水や群馬用水の掘削によって農村として安定した発展を遂げたのである。

ここでは荒砥前田 遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために、周辺の遺跡分布および歴史的環



第6図 荒砥前田 遺跡の立地と周辺の発掘された遺跡

第3章 遺跡の立地と環境

境についてふれておきたい。遺跡分布図を示した範囲は、西は荒砥川、東は神沢川に挟まれた荒砥地域で、北は標高 120 m 付近、南は荒砥川・神沢川合流点に便宜上限った(第7図)。また、2区微高地上に古墳時代前期の集落を検出したことから、古墳時代の荒砥地域については、範囲を広げて地域動向を概観した(第8図)。

(1) 縄文時代の遺跡分布

群馬県では標高 250 ~ 400 m の丘陵性地形のところ縄文時代前期の遺跡分布が卓越する傾向がある。標高 80 ~ 150 m の荒砥地域はこの丘陵性地形の末端部分にあたり、中期の遺跡分布が多くなる台地地形も広がっている。したがって縄文時代の遺跡はやや小規模な前期の遺跡と、比較的大きな中期・後期の遺跡が分布している。

荒砥前田 遺跡では、縄文時代の遺物は少量出土したが、遺構は検出されなかった。周辺では北三木堂 遺跡(38)、今井道上 遺跡(48)、荒砥宮田遺跡(24)、荒砥北原遺跡(45)、荒砥上ノ坊遺跡(47)、柳久保遺跡群下鶴谷遺跡(28)、荒砥上諏訪遺跡、荒砥二ノ堰遺跡、熊の穴遺跡等で縄文時代の遺構が調査されている。これらの遺跡では1~数軒の竪穴住居や土坑を検出している。遺跡の立地は赤城山南麓の小河川の支流の台地縁辺や、開析谷の谷頭周辺であり、飲料水の確保がその前提と考えられる。

なお、本地域の縄文時代全体の遺跡動向については『今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団埋蔵文化財調査報告第350集2005)に詳述されているので参照されたい。

(2) 弥生時代の遺跡分布

荒砥地域の弥生時代の遺跡数は少ない。荒砥地域で弥生時代の遺跡が見られるようになるのは中期後半である。荒砥北三木堂遺跡(38)、荒砥島原遺跡(69)、萩原遺跡(78)、荒砥前原遺跡(84)で弥生時代中期後半の住居群が、頭無遺跡(27)、荒口前原遺跡(37)、鶴ヶ谷遺跡(41)、荒砥宮川遺跡(63)の

4遺跡で土坑が検出されている。住居が検出された遺跡はいずれも2~数軒の住居群で構成されており、この時期の集落が小規模であったことを示している。

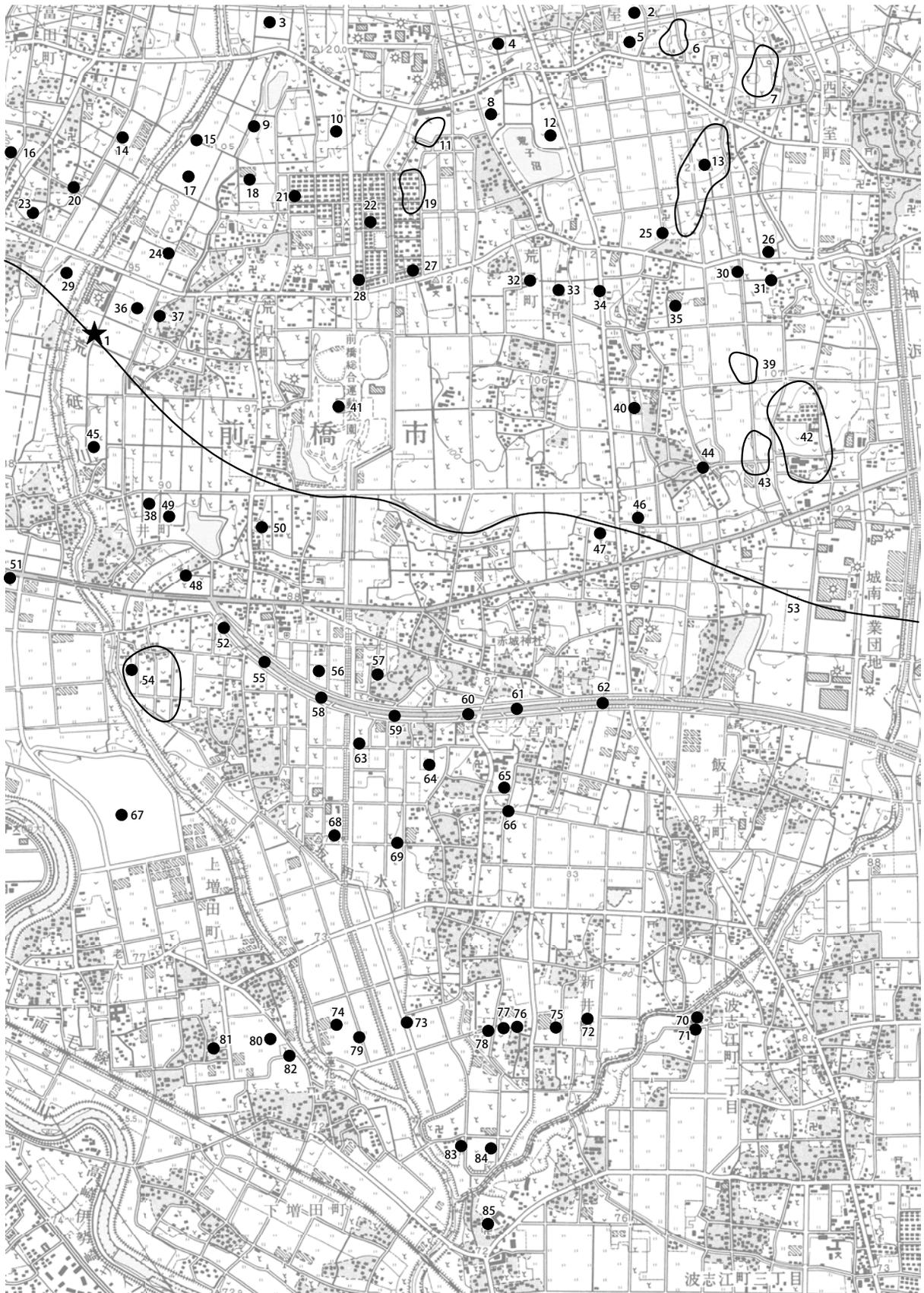
後期の遺跡は荒砥前原遺跡で住居が、荒砥大日塚遺跡(50)で土坑が、荒砥北三木堂 遺跡(38)、下増田越渡 遺跡(74)、萩原遺跡(78)で遺物が出土したと報告されている。荒砥地域には櫛描波状文を主文様とする樽式土器と縄文を主文様とする赤井戸式土器の両者が出土する。後期前半の遺跡はほとんど確認できない状況であり、後期とされている遺跡もほとんど弥生時代終末期の遺跡である場合が多い。従来赤井戸式や樽式土器を単純に弥生時代後期とみることが多かったが、古墳時代初頭まで残るこれらの土器群があることが知られるようになっている。近年では赤井戸式土器は埼玉県北部の吉ノ谷式土器の分布が古墳時代初頭に広がったものとする研究者もいる。いずれにしても荒砥地域の弥生時代後期の遺跡については再検討の余地がある。

弥生時代中期後半の遺跡は、標高 80 ~ 100 m 付近の帯状低地沿いでいくつかの低地が合わさる地点に散在している。この立地は水田耕作を目的にしたものと考えられるが、このような立地が群馬県西部地域のように後期に継続しないのはなぜか、荒砥地域の遺跡分布を考える上で大きな課題となっている。

荒砥前田 遺跡では、弥生時代の遺構は検出されていないが、弥生時代の土器は少量出土した。特に弥生時代最終末の東海東部あるいは南・東関東系の遺物が出土している。当該時期外来系土器は東海西部あるいは北陸が顕著であるが、東海東部あるいは南・東関東系の要素も散見される。

(3) 古墳時代の遺跡分布

荒砥地域の古墳時代前期の遺跡は弥生時代後期の遺跡に比べると激増することが知られている。弥生時代中期竜見町式土器を出土した住居を検出した遺跡が5遺跡、後期と報告された遺跡が5遺跡であるのに対して、古墳時代前期の遺構を検出した遺跡は



第7図 荒砥前田 遺跡周辺の遺跡

第3章 遺跡の立地と環境

第3表 周辺遺跡の概要

凡例 住居 溝 土坑 遺物のみ出土ただし墓域欄では 周溝墓、古墳、生産域欄では 水田、畠(畑)、
平安時代生産域欄では As-B 下水田、 818年洪水層下中近世欄では、遺構・遺物の検出を表す。

遺跡名	縄文時代							弥生時代	古墳時代						奈良時代	平安時代	中世	近世	備考				
	草創期前半	草創期後半	早期	前期	中期	後期	晩期		中後期	前期	中期	後期	前期	中期						後期	前期	中期	後期
1 荒砥前田 遺跡																							
2 中畑遺跡																							
3 北原遺跡																							
4 上西原遺跡																		勢多郡衛と付属寺院と推定される遺跡。					
5 北田下遺跡																							
6 明神山遺跡																							
7 伊勢山古墳群																		伊勢山古墳を含む古墳 16 基。					
8 川籠皆戸遺跡																							
9 諏訪遺跡																		As-B 以前の溝。方形周溝墓 13 基。					
10 大久保遺跡																							
11 荒子小学校校庭遺跡																		古代須恵器窯跡。					
12 堤東遺跡																		方形周溝墓 2 基 (前方後方形 1)。平安小鍛冶。					
13 阿久山古墳群																		古墳 22 基。					
14 おとうか山遺跡																							
15 諏訪西遺跡																		時期不明古墳 2					
16 富田西原遺跡																		旧石器					
17 荒砥諏訪西遺跡																							
18 荒砥諏訪遺跡																		As-B 以前の溝					
19 中鶴谷遺跡																							
20 東原遺跡																		古墳 11 基。中世墳墓群、寺院。					
21 諏訪遺跡																		As-B 以前の溝					
22 柳久保遺跡																		旧石器					
23 宮下遺跡																		中止墓坑、寺院					
24 荒砥宮田遺跡																							
25 下境 ・ 遺跡																		中世寺院、中世墓					
26 富士山 ・ 遺跡																		直径 38 m の円墳。近世塚。					
27 頭無遺跡																		旧石器					
28 下鶴ヶ谷遺跡																		古代炭窯					
29 富田細田遺跡																							
30 稲荷山 遺跡																							
31 地田栗 遺跡																							
32 荒砥中屋敷 ・ 遺跡																		平安小鍛冶、As-B 以前の溝					
33 荒砥下押切遺跡 ・ 遺跡																							
34 舞台西遺跡																		古墳 4 基、埴輪円筒棺 1、甕棺 1。					
35 舞台遺跡																		舞台 1 号墳を含む古墳 3 基。					
36 荒砥前田遺跡																							
37 荒口前原遺跡																							
38 荒砥北三木堂 遺跡																							
39 西大室丸山遺跡																		古墳時代巨石祭祀。					
40 荒砥荒子遺跡																		古墳時代中期方形区画遺構。					
41 鶴ヶ谷遺跡																		中世墳墓。					
42 天神山古墳群																		古墳 39 基。					
43 上軽沼遺跡																		弥生住居 1、古墳住居 15、古墳 1					
44 葭沼遺跡																							
45 荒砥北原遺跡																		方形周溝墓 2 基。As-B 上畠。					
46 元屋敷遺跡																		古墳住居 16					
47 荒砥上ノ坊遺跡																		方形周溝墓 4 基。As-B 上畠。					
48 今井道上 遺跡																							
49 荒砥北三木堂遺跡																		中世墓坑。					
50 荒砥大日塚遺跡																							
51 今井白山遺跡																							
52 今井道上道下遺跡																		古代方形区画溝。平安小鍛冶。中・近世道路状遺構。					
53 女堀																		古代未完成用水路					
54 今井神社古墳群																		今井神社古墳他、古墳 3。					
55 二之宮谷地遺跡																		奈良時代溜井。					
56 荒砥洗橋遺跡																							
57 荒砥宮西遺跡																							
58 二之宮洗橋遺跡																							
59 二之宮千足遺跡																		As-C 下水田以降 7 期の水田。古代小鍛冶。中世墓坑。					
60 二之宮宮下西遺跡																		中・近世墓坑					

2. 周辺の遺跡分布

遺跡名	縄文時代						弥生時代	古墳時代						奈良時代	平安時代	中世	近世	備考				
	草創期前半	草創期後半	早期	前期	中期	後期		晩期	前期	中期	後期	前期	中期						後期	前期	中期	後期
61 二之宮宮下東遺跡																						
62 二之宮宮東遺跡																		Hr-FA 下水田以降 7 期の水田。古代小鍛冶。				
63 荒砥宮川遺跡																						
64 荒砥天之宮遺跡																		溜井				
65 荒砥青柳 遺跡																						
66 荒砥青柳遺跡																						
67 中原遺跡群																						
68 荒砥宮原遺跡																						
69 荒砥島原遺跡																						
70 中野屋敷																						
71 波志江中野面遺跡																						
72 新井大田閑 遺跡																						
73 下増田越渡 遺跡																						
74 下増田越渡 遺跡																						
75 新井大田閑遺跡																						
76 萩原 遺跡																						
77 萩原 遺跡																						
78 萩原遺跡																						
79 下増田越渡遺跡																						
80 下増田常木遺跡																						
81 上増田島遺跡																						
82 下増田常木 遺跡																						
83 新土塚城																						
84 荒砥前原遺跡																						
85 八坂遺跡																						

60 遺跡余に増えているのである。これらの遺跡は集落と考えられるが、その分布は荒砥地域のほぼ全域におよんでいる。

本遺跡周辺の古墳時代前期の集落(第8図)は、荒砥川左岸台地の開析谷に接して、北から北原遺跡(3)、丸山遺跡、荒砥諏訪西遺跡(17)(集落・方形周溝墓群)、諏訪遺跡(9)(方形周溝墓群)、荒砥宮田遺跡(24)、荒砥前田 遺跡(1)、荒砥北原遺跡(45)が分布しており、まとまった数の住居や方形周溝墓群が検出されている。荒砥川左岸台地上には、大泉坊川流域に面して北から富田高石遺跡、富田西原遺跡(16)、富田宮下遺跡(23)が近年調査されている。

また、宮川流域では上流部に柳久保遺跡(22)、中流部に鶴が谷遺跡(41)、下流域に荒砥島原遺跡(69)がある。宮川には奥行き長い開析谷が入り込んでいるが、北側の大きな開析谷の流域には前方後方形周溝墓の群在する中山A・B遺跡や東原B遺跡、村主遺跡が調査されている。また中流域に大型の前方後方形周溝墓が調査された堤東遺跡がある。宮川下流域の開析谷には荒砥上ノ坊遺跡(47)がる。

江龍川上流域では熊の穴・熊の穴 遺跡、大道遺跡、明神山遺跡(6)、小稻荷遺跡などがある。

古墳時代前期の生産域を示す遺跡も検出されている。二之宮千足遺跡(59)や二之宮宮下東遺跡(61)では浅間C軽石に埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡(64)G区や荒砥宮川遺跡(63)の微高地上では浅間C軽石を鋤込んだ畠が確認されている。荒砥上ノ坊遺跡(47)では浅間C軽石に埋没した畠が検出されている。

古墳時代中期の集落(第8図赤)としては荒砥川左岸台地の開析谷に接して丸山遺跡、北原遺跡(3)、荒砥宮田遺跡(24)、荒砥前田 遺跡(38)がある。宮川上流域に柳久保遺跡群(22)がある。これらは古墳時代前期から継続する遺跡である。荒砥川左岸台地上の荒砥北三木堂遺跡(49)や宮川下流域の荒砥天之宮遺跡(64)は5世紀後半になってから集落の形成が開始された遺跡である。このような遺跡は前期の遺跡の間や、周辺の開析谷に新たに出現している。

また荒砥周辺地域には、古墳時代中期の方形区画

第3章 遺跡の立地と環境

遺構が4基検出されている。江竜川右岸の微高地上にある荒砥荒子遺跡(40)、荒砥川の一支出の右岸台地縁辺で検出された丸山遺跡、桂川右岸の台地縁辺の梅木遺跡、貴船川右岸の台地上に検出された筑井八日市遺跡である。全体像が明確でない遺跡も含まれているが、これらは5世紀代の有力者層の居宅の可能性が考えられている。

古墳時代後期の集落(第8図赤)は、荒砥諏訪西遺跡(17)、荒砥北原遺跡(45)、柳久保遺跡群(22)、大久保遺跡(10)、北原遺跡(3)、丸山遺跡、新山遺跡などをはじめとして多くの遺跡をあげることができる。これらの集落のなかには古墳時代前期・中期から継続するものと、中期からあるいは後期になってから居住が始まる遺跡とがある。これは生産域の拡大にともなった居住域の変遷を示していると考えられる。

以上のような遺跡分布やその変遷から、次のような古墳時代の集落変遷が導き出される。古墳時代前期の遺跡は、谷頭周辺や小河川縁辺に立地するが、なかでも小河川とその支流の合流点に面した台地縁辺に立地する遺跡が多い。またこれらの遺跡はそれぞれの水系ごとに500～1000mほどのほぼ一定の間隔をおいて立地している。このような遺跡すなわち集落の立地は、河川合流点の比較的広い地点＝発展性のある地点を生産域として、小河川の流水や谷頭からの湧水を効率的に利用した農業経営をおこなっていたことを示していると考えられる。

これらの古墳時代前期の集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統集落」となる。このような前期から継続する集落は居住域の範囲を台地内部に変えながら継続する。これは水田耕作地を台地縁辺の傾斜地部分に拡大していくからである。

それと併行して、中後期には、新たな地点に「第一次新開集落」の形成がなされる。それまで遺跡ではなかった地点に集落がつくられるようになるのである。荒砥天之宮遺跡(64)では、溜井掘削によって農業用水を得た古墳時代中期から始まる集落が調査されている。このような「新開集落」成立の背景

には従来からの河川灌漑の整備とともに、溜井の掘削や灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられるのである。

これらの分布を第8図に示したが、地域内の生産域となる開析谷沿いに集落の密度が増えていく過程を看取することができる。そこには標高差や地点別の分布差等では説明できない複雑な様相がみえている。各地点地点において、農耕地拡大過程における生産域の諸条件に規制された集落立地があったものと考えられる。

一方、荒砥地域の古墳は450基を超え、群馬県のなかでもひとときわ多い分布状況を示している。しかし荒砥地域においては前期古墳の存在は知られていない。前橋天神山古墳や華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある主要古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は5世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。

古墳時代前期の集落には墓域が居住域に付随している。住居群に隣接して周溝墓が築造される事例が多い。前述の諏訪遺跡(9)や荒砥諏訪遺跡(18)、荒砥北原遺跡(45)のように居住域とはその占地を区別し、群在する状況が普遍的に見られる。その荒砥北原遺跡(45)は、今回報告する荒砥前田遺跡の古墳時代前期集落の墓域と考えられる遺跡である。荒砥川の支谷を隔てた微高地先端部に方形周溝墓が4基検出されている。また、荒砥地域では上縄引遺跡で1基、阿久山遺跡で1基、堤東遺跡(12)で1基、中山A遺跡で1基、東原B遺跡で4基の合計8基の前方後方形周溝墓が検出されている。荒砥川左岸の富田高石遺跡でも前方後方形周溝墓1基が検出されている。これらの前方後円形周溝墓の存在は、古墳時代前期の支配構造を解く鍵として注目される。

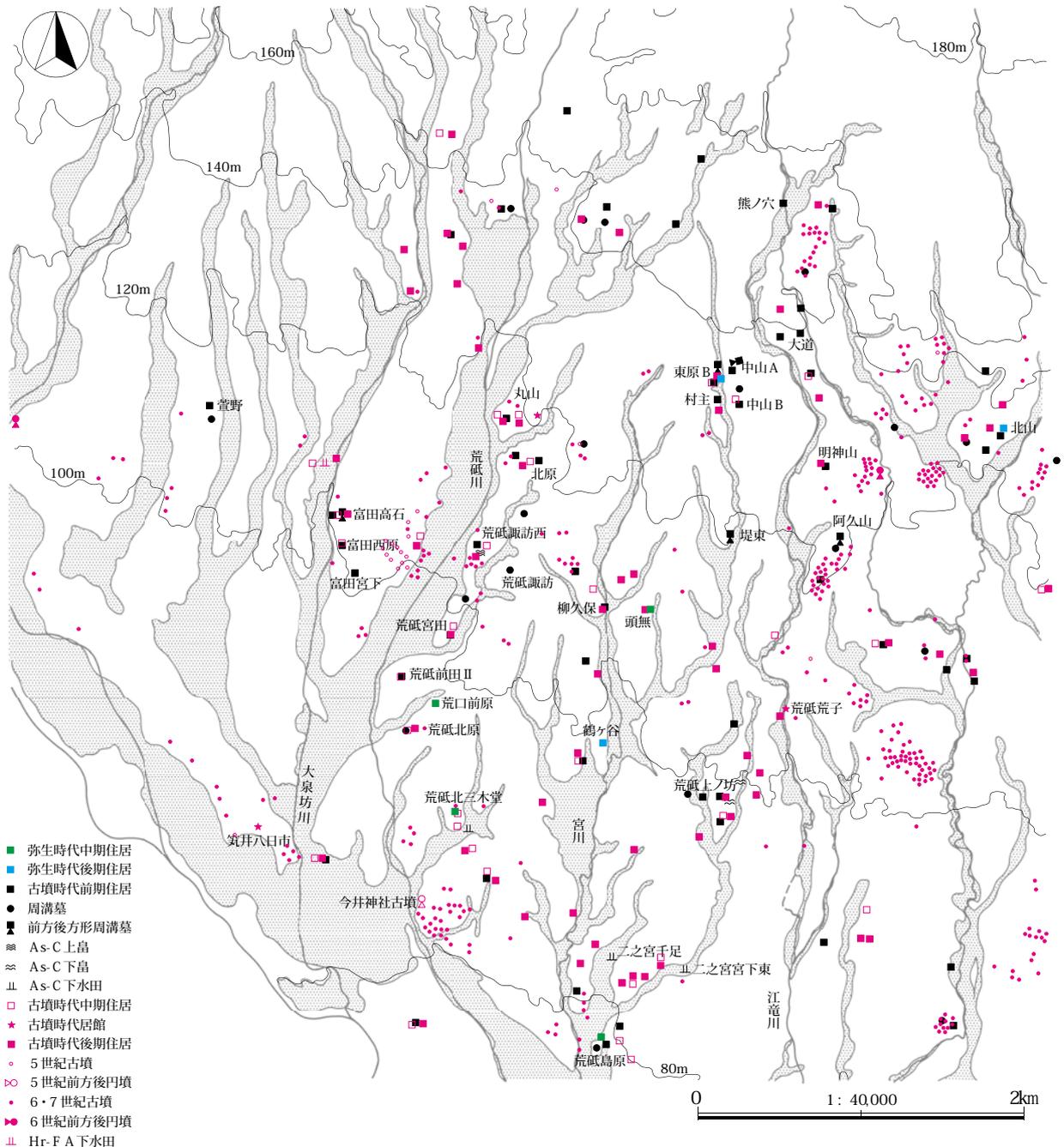
次の5世紀前半の古墳は周辺には伊勢崎市御富士山古墳・赤堀茶臼山古墳があるが本地域には未確認である。5世紀後半の前方後円墳では、今井神社古墳(54)、舞台1号墳がある。特に今井神社古墳は、荒砥前田遺跡から南1kmの至近距離にある。

この時期には小円墳がいくつかの地点で造られる

ようになる。荒砥川右岸には5世紀後半とされる直径29mのおとうか山古墳がある。南側の東原遺跡では6基の5世紀後半の円墳が調査されており、初期群集墳の形成が開始されているのがわかる。荒砥宮川・宮原遺跡でもそれぞれ4基、2基の5世紀後半の小円墳が検出されている。また新山遺跡でも5世紀後半の円墳が1基調査されている。現在のところ、本地域の5世紀後半の小円墳の分布は、荒砥川

流域に偏在しているように見える。

6世紀になると、前方後円墳が東大室町五料沼周辺に、江竜川中流域の台地上に帆立貝形古墳がつかられるようになる。特に大室古墳群には首長墓と考えられる大形の3基の前方後円墳がつくられた。一方小円墳は6世紀、7世紀と小地域ごとに立地、形成内容を変化させながら群集化が進行している。群集墳の分布は地域全体にあるが、特に江竜川の東側



第8図 荒砥前田 遺跡周辺の古墳時代の遺跡分布

第3章 遺跡の立地と環境

の地域では、古墳群の分布する地点が集落と離れて集中するように見える。本地域の古墳分布の特徴は現在わかっている範囲でという限定付きであるが、5世紀前半の古墳が未確認であること、江竜川をほぼ境にして西側より東側に濃密であること等があげられる。このような偏在傾向の背景についてはまだ結論が出ていない。群集墳の北の限界は標高150m前後であり、集落の分布と一致している。古墳時代の「里棲み集落」地域の範囲がここまでであったのであろう。荒砥前田遺跡や荒砥北三木堂遺跡の古墳時代集落も、このような古墳時代の地域社会のなかで位置づけられるべきであろう。

(4) 古代・中世の遺跡分布

荒砥地域は古代、勢多郡に属していたと考えられている。上西原遺跡(4)では8世紀から9世紀後半に機能していたと考えられている方形区画内の礎石基壇建物や掘立柱建物などが検出され、瓦・瓦塔・塑像・墨書土器などが出土している。この遺構は官衙遺構とそれに付属する寺院遺構と推定されている。勢多郡衙とも目される遺構が荒砥地域にあることは、ここが古代の中心的な存在であったことを示唆している。荒砥地域の奈良・平安時代の集落遺跡は、住居分布域を多少変化させながらも、古墳時代後期(7世紀を含む)から継続する例が多い。これは古墳時代以降拓いた水田耕作地を継承して、集落が営まれることを示している。また古墳時代の遺跡のない地点にも遺跡は分布するようになり、さらに集落域の密度が増していくのが奈良・平安時代である。

その背景には生産の場である水田域の拡大があると考えられる。富田西原遺跡(16)、宮下遺跡(23)、富田西田遺跡(29)や、荒砥大日塚遺跡(50)、二之宮谷地遺跡(55)、二之宮千足遺跡(59)、二之宮宮東遺跡(62)、荒砥島原遺跡(69)、荒砥天之宮遺跡(64)、萩原遺跡(78)などの多くの遺跡で浅間B下水田が検出されている。本地域では、開析谷に設定される発掘区のほとんどで、1108(天仁元)年に降

下した浅間Bテフラに埋没した水田跡が検出されているのである。(『荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第336集・2004 第7図参照)谷内が全面開田されていたかどうかは発掘区に限られているために不明だが、12世紀初頭までには、相当な面積の水田耕作地の開発が進められていたことがわかる。これらの生産域を開発・維持していたのは古墳時代以降、古代に継続する農耕集落群であったのであろう。

群馬県地域は、1108(天仁元)年に浅間山が噴火したことによって甚大な災害を被った。降灰は高崎・前橋地域で40～50cmと推定されている。この火山灰直下からは前述のように水田跡が検出されるが、荒砥地域では、用水系が被災して生産不能になった水田域の上層に火山灰を鋤き込んだ畠が、荒砥前田遺跡(36)で見ついている。この畠は女堀(53)の複数の地点の掘削排土下からもみつかり、広範囲に水田稲作から畠作への転換が行われていたことを示している。

女堀は、赤城山南麓に掘られた総延長12.8kmの農業用水路である。荒砥地域を横断するこの用水路は、1108(天仁元)年の噴火後、刈名荘の再開発のために掘られたと考えられている。調査では工事途中とみられる遺構がみつかり、掘削工事が中断・失敗したことが判明した。

中世の集落遺跡についてはわかっていないが、平安時代の集落分布と中世文書に残る地名が一致することから、遺構に残らない形で一般農耕集落は継続していたと考えられている。本遺跡から2kmほど南の二之宮町地内では複数の館の存在が確認され、二之宮環濠遺跡群と呼ばれている。二之宮宮下西遺跡(60)や二之宮宮下東遺跡(61)、二之宮宮東遺跡(62)で中世の館とみられる堀や掘立柱建物・礎石建物が検出されている。また東原遺跡(20)、鶴谷遺跡、下境遺跡、荒砥北三木堂遺跡などで、火葬跡や14世紀代とみられる墓が検出されている。断片的ではあるが、荒砥地域の中世史解明へ向けて有効な考古資料が蓄積されてきている。

第4章 1区の遺構と遺物

1. 概要

1区は遺跡の南端で、荒砥川左岸の微高地を開析した帯状の谷部と北側の緩斜面部にあたる。地形単位である微高地部と谷部に調査区を分けて調査を実施した。

個別の遺構は谷部と微高地部に分けて報告するが、その他に、1区谷部と南側の荒砥北原 遺跡3区との間に溝群がある。これは谷部南縁の台地上にいずれかの時期に掘られたもので、今回の調査でも洪水砂に埋積した溝の重なりが検出された。この溝群からは近世・近代の遺物が多数出土した。これは1区南端溝群として報告した。

(1) 1区谷部(第9図 PL3)

1区谷部では沖積土の間に洪水層やテフラ層が存在していることから、これらを鍵層として重層的な調査を行なった。遺構確認面としたのは、現代から古墳時代前期までの地層の間に挟まれた、第1洪水層・浅間Bテフラ層・第2洪水層・榛名二ツ岳火山灰層・浅間C軽石を多量に含む黒色土層の5面である。なお、洪水層名称は各発掘区で別個に付しているものもあり、完全に対比されたものではない。

第1洪水層下面(第14図)では、砂礫層に覆われた水田面と付随する水路と推定される18号溝を検出した。この洪水層は下位に1108(天仁元)年に降下した浅間Bテフラ層があることから、それよりは新しいと考えられるが、時期の詳細は不明である。水田面は方形あるいは台形に整然と区切られ、水路は谷内の南側に寄せて掘られていた。田面には多くの鋤先痕跡が検出されたが、詳細な断面観察からこれらは上層からの耕作痕跡と判明した。

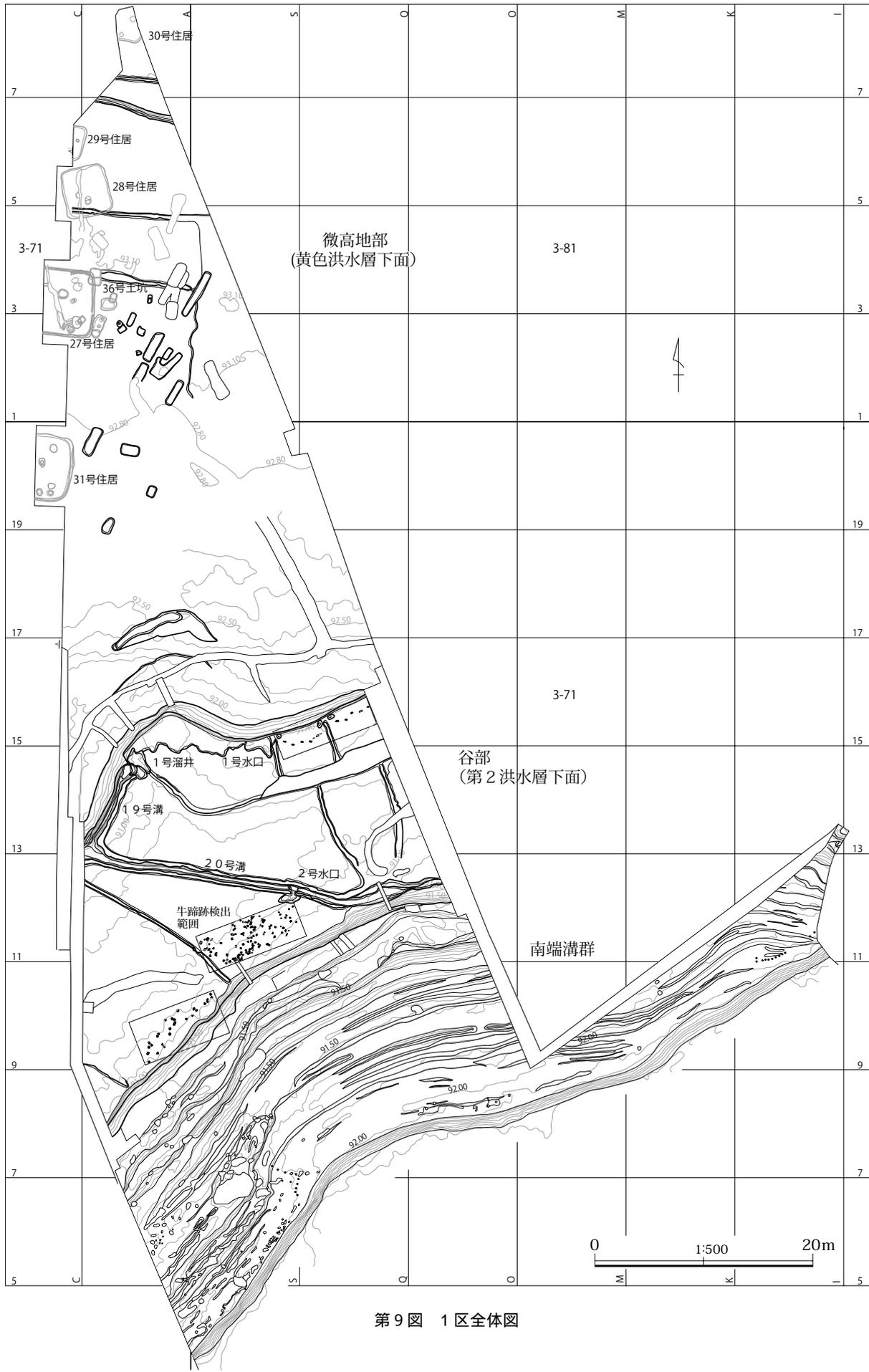
浅間Bテフラ下面(第16図)では、水田区画は検出されなかったが、72-B-12グリッドで牛の蹄跡と推定される小孔が集中して見つかった。また、浅

間Bテフラの純層を切って掘られた43号土坑が確認された。37号土坑は浅間Bテフラ下面で確認したが、埋没土中に浅間B軽石粒を含んでおり、降下より新しいと判断された。12世紀初頭にはこの谷の水田耕地は放置されていたと推定される。

第2洪水層下面(第19図)では、黄色の砂礫層に覆われた水田面と付随する水路である20号溝、谷部右岸に掘削された1号溜井とそこから伸びる19号溝を検出した。19号溝は2区南端でも延長部分が検出されている。また田面からは本水田と同時期の人足跡と牛蹄跡が見ついている。水田の時期は下位の榛名二ツ岳火山灰降下以降、上位の浅間Bテフラ降下以前ということになるが、被覆する洪水層は818(弘仁九)年の地震に伴う洪水層に対比できると推定される。また、水田耕土中および溜井や溝から出土した土器は破片であるが、8世紀ころのものと思われ、この水田の耕作時期を表していると考えられる。

榛名二ツ岳火山灰下面(第25図)は、火山灰の残存が限られていたために、記録できたのは東部の一角と谷部の北側に支谷状に突き出た谷頭部分の2カ所である。谷部東壁共通土層断面A-Aでは榛名二ツ岳火山灰が皿状に堆積しているのが観察できたが、火山灰直下の遺構は検出されなかった。また、同遺構確認面で23号溝を確認しているが、これは榛名二ツ岳火山灰より新しい遺構である。北側支谷でも一部で榛名二ツ岳火山灰が塊状に堆積していたが、不明瞭であり、直下面での遺構確認はできなかった。

浅間C軽石を多量に含む黒色土層の調査(第26・27図)では、25号・26号溝を検出した。これらの溝は、谷部のほぼ中央を流下し、谷に沿った緩やかな蛇行を示していることから、自然流路と考えられる。時期は浅間C軽石降下前後の古墳時代初期と推定される。25号溝は浅間C軽石を多量に含む黒色土を掘り込み面とし、26号溝はその下位の黒色



第9图 1区全体图

粘性土から掘り込まれている。また 26 号溝の一部の底面には浅間 C 軽石が堆積しており、降下以前の可能性が高い。また北側支谷の谷頭部底面には浅間 C 軽石の純堆積層があり、谷口部には半完形の土器が集中して出土した。北側微高地の当該期集落との関連性があるものと考えられる。しかし、発掘区内ではこの時期の水田等の生産遺構は検出されなかった。

(2) 1 区微高地部 (第 9 図 PL15)

1 区微高地部は谷部の北側緩斜面から微高地南端部にあたる。既存用水路を隔てて 2 区微高地部とつながっている地形面である。

表土直下面 (第 36 図) では、黄色小砂礫からなる洪水層とそれを切って掘られた長方形土坑を検出した。時期は不明である。また緩斜面では 16 号・17 号溝と 16 号溝より古い 11 号井戸を調査した。16 号・17 号溝とも時期は不明であるが、谷部の水田への用水路と推定される。

黄色洪水層の堆積は 1 区微高地部の北部に限られていたが、その直下から東西方向の 3 条の畦と 1 条の溝を検出した。この小砂礫の時期は不明であるが、1 区低地部の第 2 洪水層と外観は酷似しており、同時期にあった水田の可能性も考えられる。また、1 区と同じ谷の上流で、北東 1.3 m にある荒砥前田遺跡 (昭和 56 年発掘調査)・荒砥宮田遺跡 (昭和 58 年発掘調査) でも同様な洪水層に埋没した水田面が検出されている (2004 群埋文第 336 集)。これらの水田面は東西方向に長い区画や、水田標高の合致することから、同時期の水田面の可能性が高いと考えられる。

浅間 C 軽石混土下の黄色砂壤土上面 (付図 2) で、竪穴住居 5 軒、土坑 1 基を検出した。いずれも古墳時代前期の遺構で、2 区の集落の東縁をなす住居群と推定される。また微高地縁辺では 21 号・22 号溝、40 号土坑が検出された。溝の時期は概ね住居と同じで、谷頭に向かって掘られていた。40 号土坑の時期は溝より新しいが、不明である。

2. 1 区谷部の遺構と遺物

(1) 溝群

1 区南端溝群 (付図 1 第 10 ~ 13 図 PL 4・139 ~ 141 遺物観察表 P.478・479)

位置 1 区 3 - 71・72 - I ~ B - 3 ~ 11 G

重複 谷部第 1 洪水層との新旧関係は不明であった。

形状 南西 - 北東方向に並ぶ溝の集合体。中でも谷側 (北) の 2 本の溝が明瞭であった。溝は埋没したローム台地の表面に刻まれ、波状の起伏の峰を連ねてみると都合 12 本の列が判別できた。平面的には大きく湾曲し、その曲率は南側で接する台地の崖と協和的であった。溝の底はポットホールがあるものの全体的には平滑であったが、西端部は異なった。すなわち、ポットホールが集中し、線状に繋がっていたり、合体して大きな穴を作っていた。

規模 調査長 75.0 m 最大幅 22.0 m

最小幅 20.0 m 深さ 0.12 m

埋没土 どの溝でも下底は砂礫層 (粗砂が主体) であったが、溝を埋めた堆積物の主体は粘質な細粒物質であった。わずかな粒径差を手がかりに堆積構造を識別すると、いずれも北から南に向かって傾斜し、北から南に順に埋まったと推定できた。

遺物と出土状況 砂礫層中に多量の遺物が含まれていた。埋没土中から縄文土器破片 6 点、土管破片 30 点、土師器破片 20 点、須恵器破片 1 片、陶器破片 109 点、磁器破片 79 点、(軟質)土器破片 138 点、ガラス瓶 3 点、砥石 8 点等が出土した。近世の遺物が最も多いが、近代・現代の遺物も含まれていた。特に最南端の流路には現代の遺物が目立って出土していた。

所見 通常の溝の埋没土とは状況が異なっていたので、上武大学伊勢屋ふじこ先生 (河川地形学) にその堆積構造について、所見をいただいた。

「溝を埋めた堆積物の堆積構造は河川堆積物の構造そのものである。中でも濁りとなって運搬される浮遊土砂起源の細粒物質の割合が大きい。これは浅い谷地という流域の条件を反映している。

溝の底にはポットホールが認められたが、基盤となるローム層が適度に固結していること、勾配（約1/200）があること、その上を水だけでなくわずかに砂礫が混じって流れて摩耗材の役目をする事など、ポットホールが出来やすい条件があったと考えられる。ポットホールが西端部に集中していることは、発掘区域よりも下流にその原因があるのかもしれない。すなわち下流から谷頭侵食が及び、侵食最前線となっていることが考えられる。

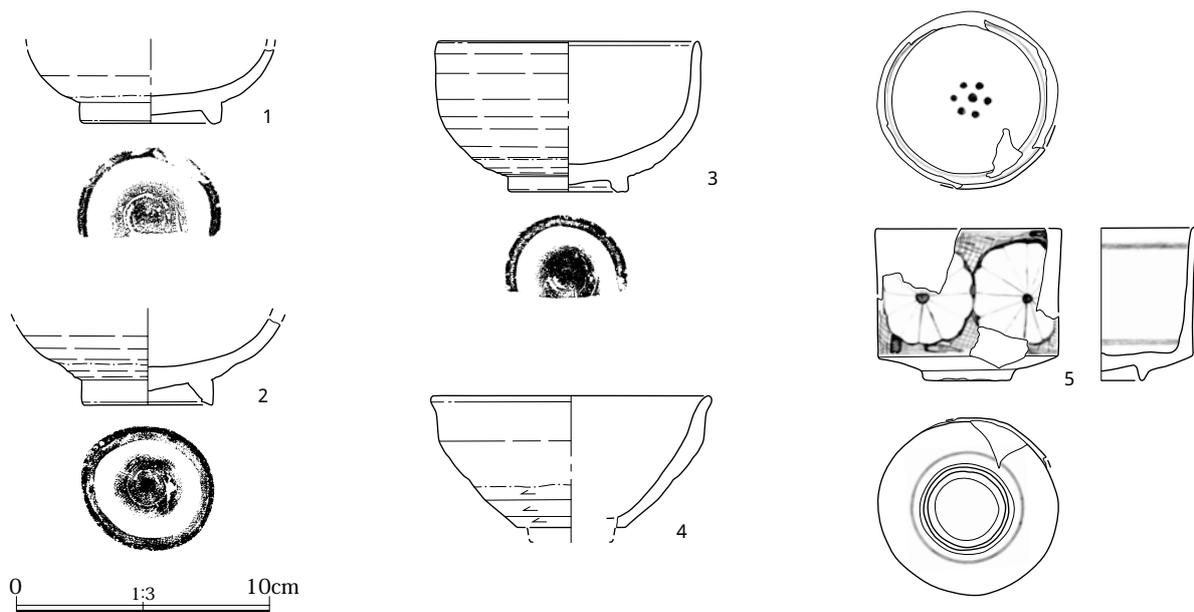
いずれにしても、溝は自然の水流の作用で埋積され、埋積物の堆積構造は、埋積が北から南に向かって進行したことを示している。

では溝そのものは自然の河川であったのだろうか。幅20mの規模で一つの河川だったとすれば、湾曲に対応して外岸側が相対的に深くなり、断面形が非対称になることが期待されるが、両端での比高は約60cmと小さい。これにはローム層が基盤となっているために高低差のない平滑な河床であったという説明も出来る。そして、溝の列は一種の縦筋模様ではないかというわけである。谷側の深い方で峰の間隔が広く、台地側の浅い方に向かって狭くなる傾向は縦筋が水深対応現象であることと矛盾しない。しかしながら、この位置に幅20m規模の河川を想定することは古地理からみて難しい。

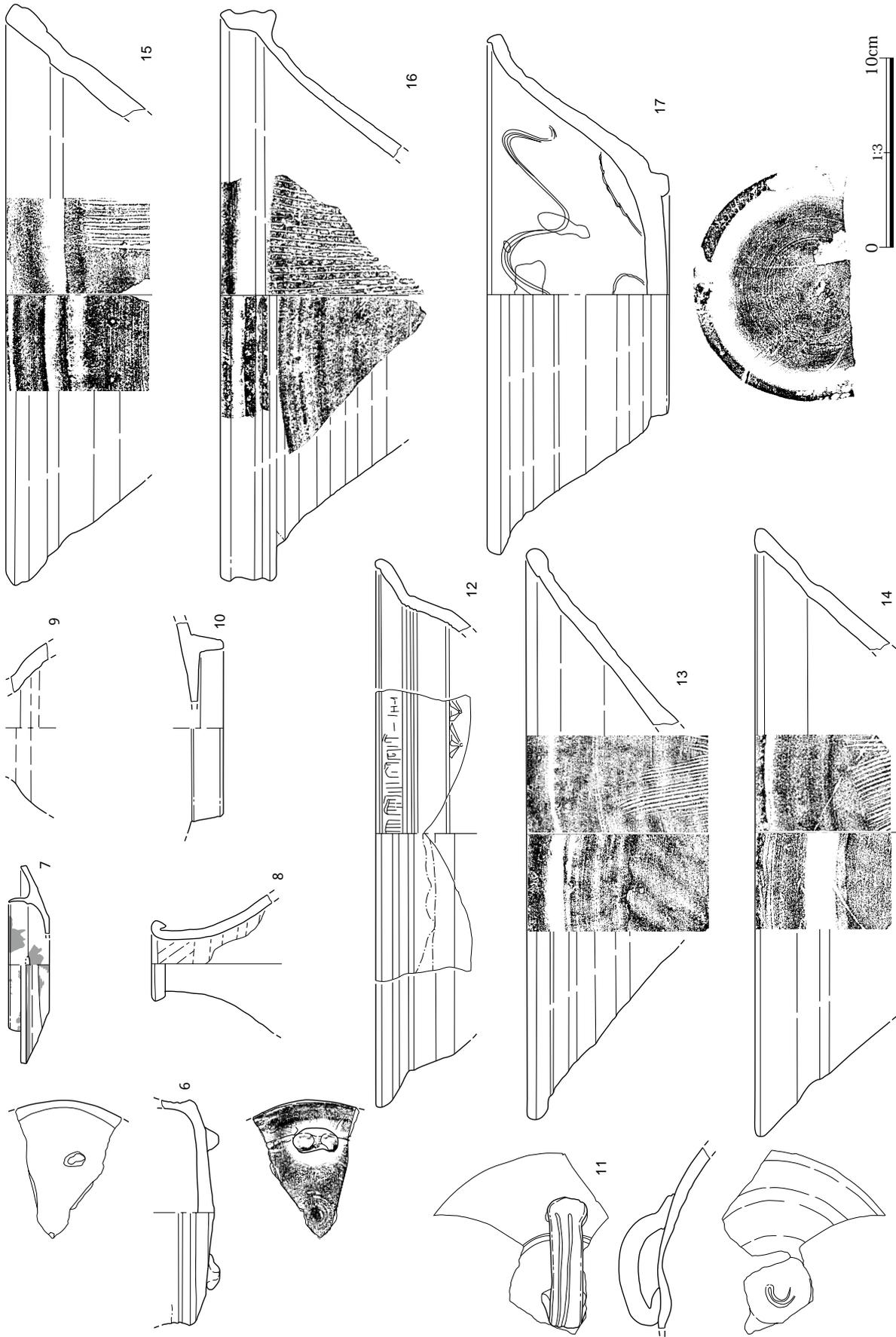
では、溝の一つひとつが河道跡に対応するとすれば、小規模な流れが南側に接する台地の崖を削り、かつ元の流路に平行する平面形を維持したまま移動を繰り返すことが求められる。このような河道変遷は果たして存在し得るのだろうか。

結論的には、ローム台地の端を人工的に削っては水路を次第に南側に移動させていったと考えている。河川は流量と供給される土砂量、粒径に応じて川幅を維持する性質がある。一時的に幅の広い水路を掘ったとしても、少しづつ堆積が生じて水流は元の幅に狭まっていく。水路が埋まったとすれば台地の崖を削るよりも、埋めた堆積物を掘り出す方が容易であろうが、そうではなく新しく台地側を削って水路を広げていった。崖を削って幅が広がると、水流の右岸側（北）で堆積が生じて古い水路側は埋められる。この繰り返しの中で、水路底はその高度を少しづつ高めていったことになる。」

結論 本溝群は谷内に配水する水路として、台地上縁辺に掘られた用水路である。最初の掘削は遺物の時期から近世以降と考えられる。最南端の溝は昭和58年の圃場整備工事直前まで使われていた。埋没土層と列状の溝底面が現代まで使われてきた用水路の変遷を示しているのだろう。

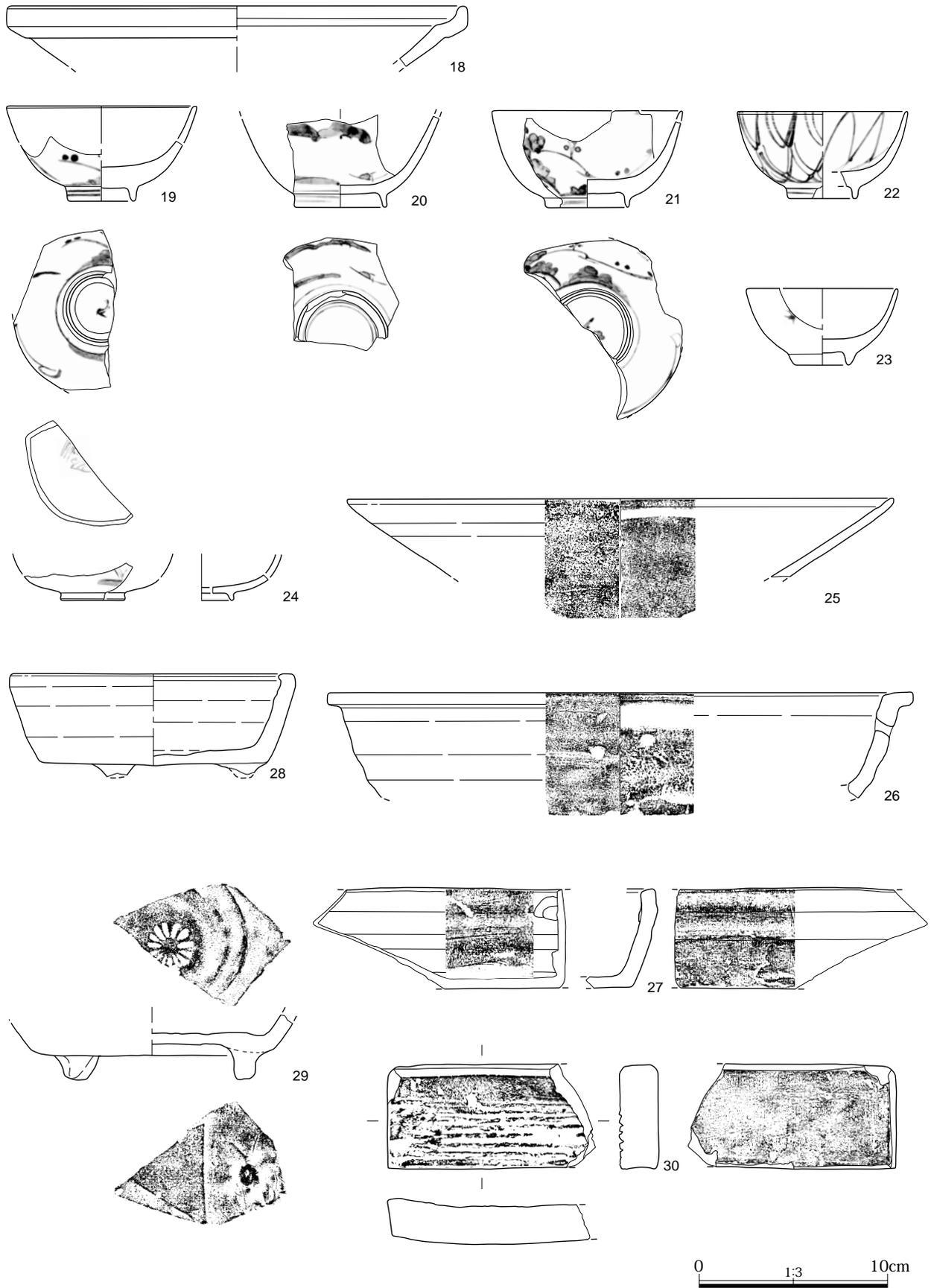


第10図 1区谷部南端溝群出土遺物（1）



第11図 1区谷部南端溝群出土遺物(2)

第4章 1区の遺構と遺物



第12図 1区谷部南端溝群出土遺物(3)



第 13 図 1 区谷部南端溝群出土遺物 (4)

第4章 1区の遺構と遺物

(2) 第1洪水層下面

1区第1洪水層下水田

(付図1 第14・15図 PL 5・6)

1区の谷部、3-71-P~T-10~20G、3-72-A~C-7~15Gにわたって、第1洪水層に埋まった水田面が検出された。水田面を覆っていた第1洪水層は、厚さ10~15cmの灰色砂層である。浮遊物が静かに堆積したような細砂からシルトの堆積が顕著で、洪水が引いていく時のやや動きのある流れを示す粗砂が堆積する部分もある。谷全体に堆積しており、下位の水田面を覆っていた。洪水層の堆積時期は不明であるが、1108(天仁元)年に降下した浅間Bテフラより新しい。

検出された水田区画は、全部で6面である。田面は谷の方向に対して縦長、あるいは横長に区画されており、形態はほぼ長方形あるいは台形である。かろうじて全形が把握できるのは2、3、4の3区画であった。各水田面の規模は、2が168.8㎡、3が118.13㎡、4が215.0㎡で、大きさはほぼ一定している。アゼは幅60~70cm、高さ10~15cmで比較的大きく、アゼの形状を保っていた。2区画と3区画の間、3区画と18号溝の間、4区画と18号溝の間、4区画と5区画の間に水口が検出された。水田耕作土は浅間B軽石を含む褐色あるいは黒色の砂質土である。耕土の植物珪酸体分析は実施しなかった。

給配水は、谷部南側に寄せて掘られた18号溝によって行われていたと推定される。18号溝は谷内の最高位に配置された用水路で谷側には幅60cmほどのアゼを伴っている。谷の北側微高地部傾斜地にある17号溝は本水田面より新しい溝である。また、用水路を隔てた西側の2区最南端で、同じ層位と推定される砂層で埋まった11号溝を検出した。走向や規模が第1洪水層下水田と合致しないので、伴う溝でない可能性もあるが、調査工程が異なり、精査することができなかった。

水田面のほぼ全域には、耕作痕跡が検出された。これは断面図(付図1)および写真(PL6-7)に示し

たように、洪水層の上位から掘削されていることが明らかである。水田に伴うものではないが、この耕作痕跡の範囲や列方向は第1洪水層下水田のアゼ方向に近似しており、洪水被災後の復旧や再開発が同地割の中でおこなわれたことを推定させる。

遺物は土師器壺破片が出土したのみで、第1洪水層下水田に伴う遺物は出土しなかった。18号溝からも縄文土器深鉢破片が出土したのみである。

1区18号溝(第14・15図 PL 5・6)

位置 1区3-71・72-P~B-7~12G

重複 無し

形状 南台地縁辺に沿った南西-北東方向の溝。地形に即してやや彎曲する。東端・西端ともに調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.3m高い。

規模 調査長 42.0m 最大幅 0.68m

最小幅 0.20m 深さ 0.21m

断面形 浅箱形

埋没土 灰色微細砂と黄色細砂のラミナ堆積の互層で埋まっていた。

遺物と出土状況 縄文土器深鉢破片1点が出土しているのみである。

所見 1区第1洪水層下水田に伴う用水路である。谷の側面の最高位に水路を回している。時期は不明である。

2区11号溝(第14・15図)

位置 2区3-72-D~F-12・13G

重複 無し

形状 地形の傾斜に平行した、ほぼ東西方向の溝。ほぼ直線の走向で、東西両端は調査区外に伸びる。底面は東半部がやや低くなっているが、ほぼ平坦で、その標高は西端が東端より0.32mほど高い。

規模 調査長 7.0m 最大幅 2.0m

最小幅 1.32m 深さ 0.17m

断面形 浅い皿形

埋没土 黄褐色砂質土や褐灰色砂で埋まっていた。

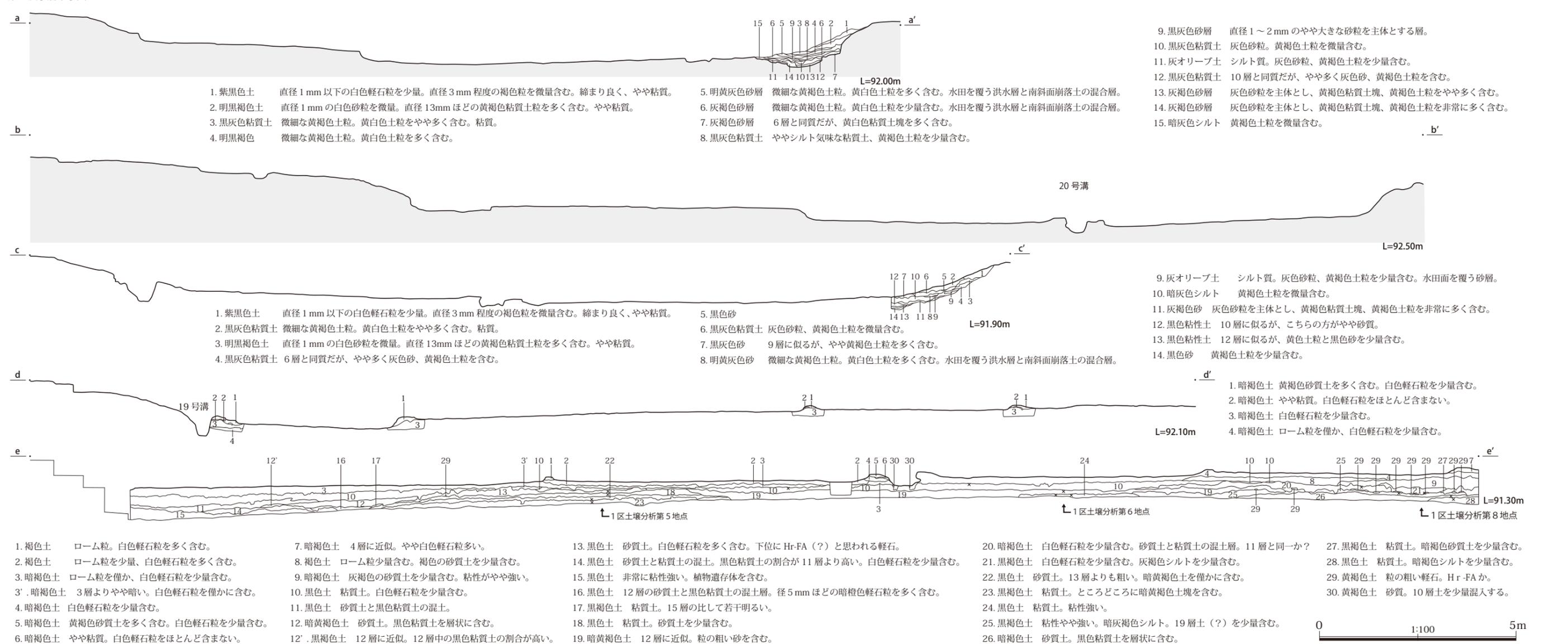


第14図 1区谷部 第1洪水層下水田

第1洪水層下水田



第2洪水層下水田



第15図 1区谷部 第1・第2洪水層下水田 断面図



第16図 1区谷部 浅間Bテフラ下面

2区

遺物と出土状況 遺物の出土はなかった。

所見 具体的な時期は不明であるが、台地縁辺に掘られた用水路であろう。

(3) 浅間Bテフラ下面

1区浅間Bテフラ下面

(付図1 第16・17図 PL7)

1区の谷部では、第1洪水層の下位35cmのところ厚さ10～12cmの浅間Bテフラがほぼ全面に検出された。水田面の検出を目的にこれを除去したが、水田面は検出されなかった。土壌分析の結果でも、浅間Bテフラ下の黒色土中にはヨシ類の植物珪酸体が卓越し、イネの植物珪酸体は浅間Bテフラ直下層で800個/gと低い密度で検出された。浅間Bテフラが降下した1108(天仁元)年頃には、1区谷部での水田耕作は一時的に行われていなかったと推定される。谷内南縁には、幅0.4m、深さ5cmほどの蛇行する溝が検出されたが、自然表流水の痕跡と推定される。

一方で、牛のものと推定される蹄跡が72-B-12Gで16個検出された。これらは浅間Bテフラの軽石層がそのまま埋積しており、浅間Bテフラ直下の痕跡と判断した。

また、谷の北西部で37号土坑、北側部で43号土坑が検出された。37号土坑、43号土坑ともに浅間Bテフラ下面で検出したが、テフラ層を切っており、浅間Bテフラが降下した1108(天仁元)年より新しい遺構である。

浅間Bテフラ下面に伴う遺物は出土しなかった。

1区37号土坑(第16・18図)

位置 1区3-72-C-14G

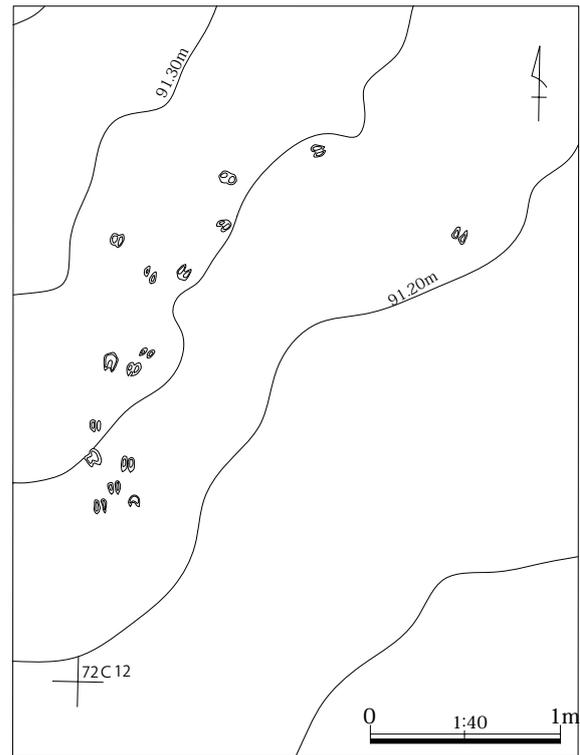
重複 無し 形状 楕円形

規模 長軸0.96m 短軸0.84m 残存壁高0.44m

長軸方位 N-5°-E 断面形 深い皿形

埋没土 浅間C軽石と推定される黒色土で埋まっていた。

底面 ほぼ平坦である。



第17図 1区谷部浅間Bテフラ下面牛蹄跡

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 谷の北緩斜面の上位で検出された。出土遺物もなく、詳細な時期や機能は不明である。

1区43号土坑(第16・18図 PL7)

位置 1区3-71-R-S-14・15G

重複 無し

形状 細長方形

規模 長軸8.9m 短軸1.68m 残存壁高0.20m

長軸方位 N-70°-E

断面形 浅い皿形

埋没土 黒褐色粘質土で埋まっていた。

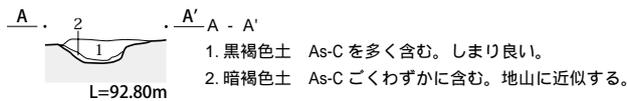
底面 凹凸がある。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

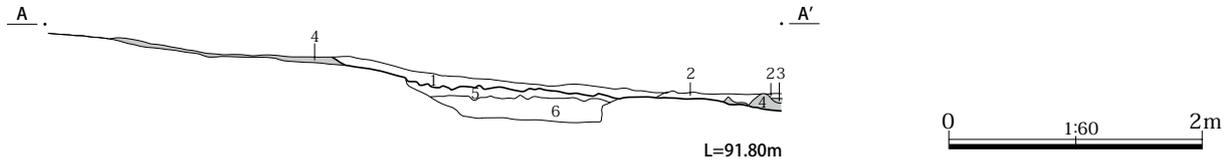
所見 谷の北緩斜面の上位で検出された。上位の水田耕作が浅間Bテフラ層まで及んだ痕跡と考えられる。底面が不明瞭で、図面や写真記録時には下層の第2洪水層まで掘削が及んでしまった。掘削時期は浅間Bテフラ降下以降、第1洪水層堆積以前ということになる。土坑の機能は不明である。

第4章 1区の遺構と遺物

1区 37号土坑



1区 43号土坑



A - A'

1. 黒褐色土 上層水田面の耕土、2層よりやや明色。
2. 黒褐色粘質土 上層水田面の耕土。
3. As-B 火山灰
4. As-B 軽石層 黒褐～黄褐色軽石粒層。
5. 黒褐色土 しまり良くやや粘質。白色砂を全体的に少量含む。
6. 暗黄褐色砂層 第2洪水層。上層よりやや粗い(1mm程度)粗い(1mm大)やや粗い(1mm程度)微細(~1mm以下)の4層に分層可。

第18図 1区谷部 37号・43号土坑土層断面

(4) 第2洪水層下面

1区第2洪水層下水田 (付図1 第19～23図
PL 8～11 遺物観察表 P.479)

1区の低地部の全域で、第2洪水層に覆われた水田が検出された。水田面は洪水層に覆われて良好な状態で残存していた。自然地形にそった不定形な水田区画9面と、谷上流からの用水路1条に加えて、谷側面に掘られた溜井1基と水路1条が検出された。

水田面を埋めていた第2洪水層は灰黄褐色の砂および小礫で、厚さ10～20cmで谷全体にほぼ水平に堆積していた。水田に伴う水路や溜井の中にも同様な砂礫層が入り込んでいた。水田面は下位の谷地形に影響されて、谷の中央部がやや凹むが、概ね耕作当時の水田面の状況を示していると判断された。第2洪水層の堆積した時期は、下位に榛名二ツ岳火山灰があり、上位に浅間Bテフラがあることから、6世紀初頭以降、1108(天仁元)年以前ということになる。

水田の耕作土はやや粘性のある黒灰色土である。直径5～20mmの白色軽石粒を多く含む。洪水層直下の耕土の植物珪酸体分析では3800個/gの比較的高い値でイネが検出された。

アゼは明瞭に残っていた。アゼには単独のものとして水路の両岸に沿ったものがある。単独のアゼは概ね

上幅0.25～0.35m、下幅0.40～0.45m、高さ0.1～0.2mほどの大きさである。溝に伴うアゼは、全体で上幅1.15～1.25m、下幅1.28～1.45m、高さ0.1～0.15mで、中央に上幅0.7mほどの水路が配置されていた。

水口は7カ所で見つかるが、アゼの端にあるものがほとんどで、アゼの途中にあるのは2号水口として図化した地点のみであった。7カ所のうち2カ所の埋没土層断面を記録した。両者とも水田面を覆っている砂礫層と同じ層で直接埋没していた。2号水口では、用水路と考えられる20号溝の下流側に礫が据えられており、水田面への効果的な給水を意図したものであろう。

水田区画は9面が確認できた。形態はほぼ方形であるが、自然地形に即した区画であることから、3と6の境には彎曲があり、7は三角形になっている。このうち全形が判明したのは区画2、3、5、6、7、の5区画である。それぞれの面積は22.6㎡、82.4㎡、53.2㎡、166.8㎡、117.6㎡で大きさは一定ではない。比較的谷幅は広い上流側東半分は谷の幅を2列にして、そのなかを区切っている(1～6)。またやや谷幅が狭くなる西半分は、谷幅全体を一区画にしてさらに横に区切る区画(7～9)になっている。その境にあるのが20号溝で、谷内を斜めに横切っ



第19图 1区谷部 第2洪水層下水田

て水路を谷の東側から西側に移動させている。

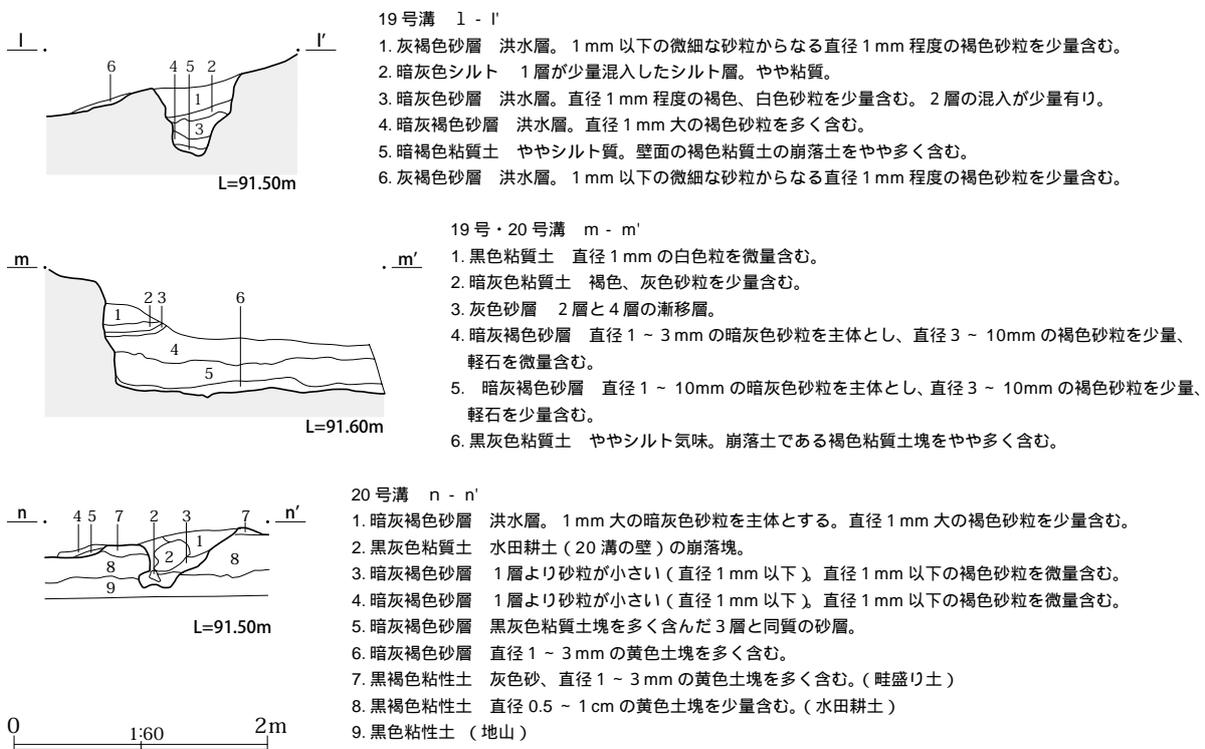
区画1～3の南側はアゼの北端が不明瞭で、アゼに相当する高い部分の幅が1.6mほどある(PL 9-2)。アゼ道のような部分であった可能性はあるが、詳細は明らかにできなかった。また区画3の北半部は洪水層に覆われた面に凹凸が著しく一段深くなっていた。この凹面を覆っていたのも同じ洪水層であったことは確実である。

水田の用水および給配水は、20号溝、19号溝および1号溜井によって行われていた。水田区画1～6は上流からの掛け流しによって配水されていたと推定される。区画6はその給排水系の末端ということになる。20号溝は谷上流から東側面に沿って掘られた用水路で区画6の南側で谷を斜めに横切って谷西側に移動し、19号溝と合流している。区画7～9はこの20号溝の2号水口から給水し、アゼの東端に設置された水口によって下流へと配水されている。20号溝は谷の西側にある小支谷谷頭近くに掘削された1号溜井の水を、19号溝を通じて補給し、谷西側の用水路として、下流に給水することに

なる。1区は谷内の給配水系統の変換点にあたり、多くの調査情報を得ることができた。

1号溜井は最も湧水の期待できる支谷の分岐点にあり、谷内の水田用水を補給する目的で掘られている。ほぼ中央に深い湧水孔を設け、土坑状の部分からあふれた水が19号溝に流れていく仕組みである。19号溝と20号溝の合流点の土層堆積には切りあい関係がなく、同様な砂礫層が連続して堆積していたことから、同時に使用されていたと判断した。1号溜井からの水を補給した20号溝は、2区南端でも検出された。下流部でも水量と配水系統を調整しながら、谷内西側の用水路が配置されたと推定される。

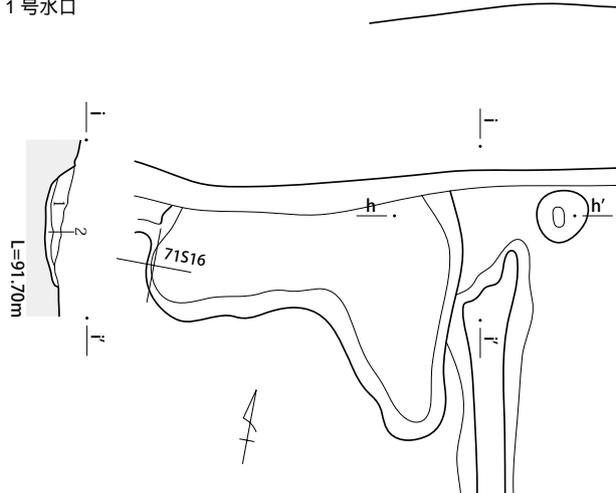
水田面の3カ所で、人足跡および牛と見られる蹄跡を検出した。人足跡は区画1・2の北端を西から東へ歩行したと推定される状況で検出した。また牛と推定される蹄痕跡は、区画7の南部と区画8の南部に集中して確認された。区画7の蹄痕跡は大きさや深さが一様でなく、数も多くて重複しており、動きを復元できる状態ではない。区画8の蹄跡は、数は少ないが歩行方向を推定できる状況ではなかった。



第20図 1区谷部第2洪水層下水田面 19号・20号溝土層断面

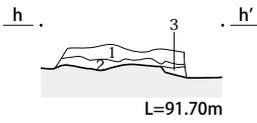
第4章 1区の遺構と遺物

1号水口

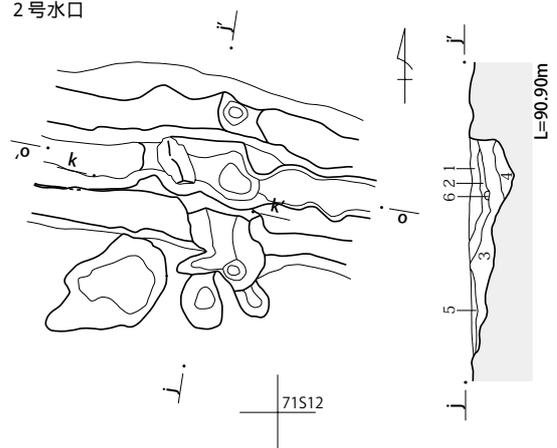


h - h' · i - i'

1. 褐色砂 洪水層。直径1mm以下の褐色砂層を主体として、灰色砂層が混入する。
2. 灰色砂 洪水層。直径1mm以下の、より微細な灰色砂粒を主体とする。
3. 灰褐色砂 洪水層。直径1mm以下の灰色、褐色砂粒を主体とする。



2号水口



k - k' · o - o'

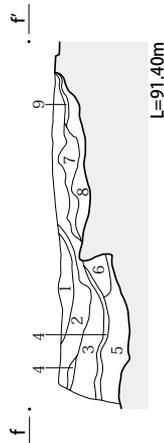
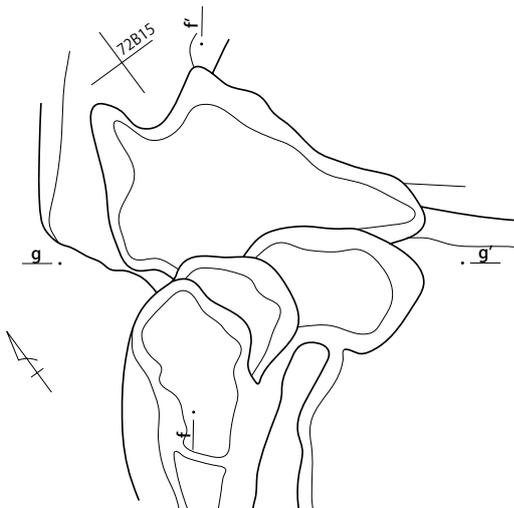
1. 灰色シルト 砂を少量含む。
2. 灰色砂 粒子がこまかい。
3. 黄色砂礫 直径1～5mmの小砂利を多く含む。
4. 黄色土粒と灰色砂の混土（地山の黄色土）
5. 黄灰色砂礫 直径3～7mmの礫を多く含む。
6. 黑色粘性土塊



j - j' · k - k' · o - o'

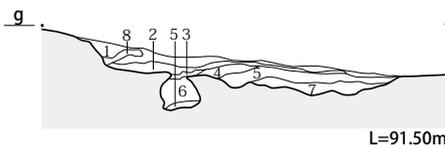
1. 灰色シルト 砂を少量含む。
2. 灰色砂 粒子がこまかい。
3. 黄色砂礫 直径1～5mmの小砂利を多く含む。
4. 黄色土粒と灰色砂の混土（地山の黄色土）
5. 黄灰色砂礫 直径3～7mmの礫を多く含む。
6. 黑色粘性土塊

1号溜井



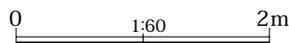
f - f'

1. 黄色砂層 粒径がこまかい。
2. 黄色砂礫層 直径2～7mmの小砂利が多く含まれる。
3. 黄色砂層 1より粒径が荒い砂。
4. 灰色シルト
5. 灰色砂質土 直径1～2cmの黑色土塊をごく少量含む。
6. 灰色砂礫層 直径2～7mmの小砂利を多く含む。直径5～7cmの軽石を少量含む。
7. 黄色砂礫層 直径2～7mmの小砂利が多く含まれる。
8. 灰色砂
9. 灰色シルト



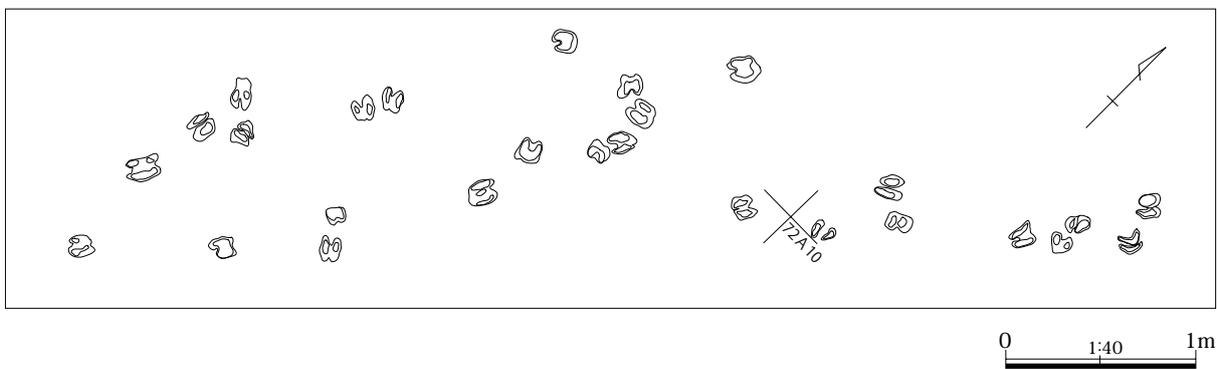
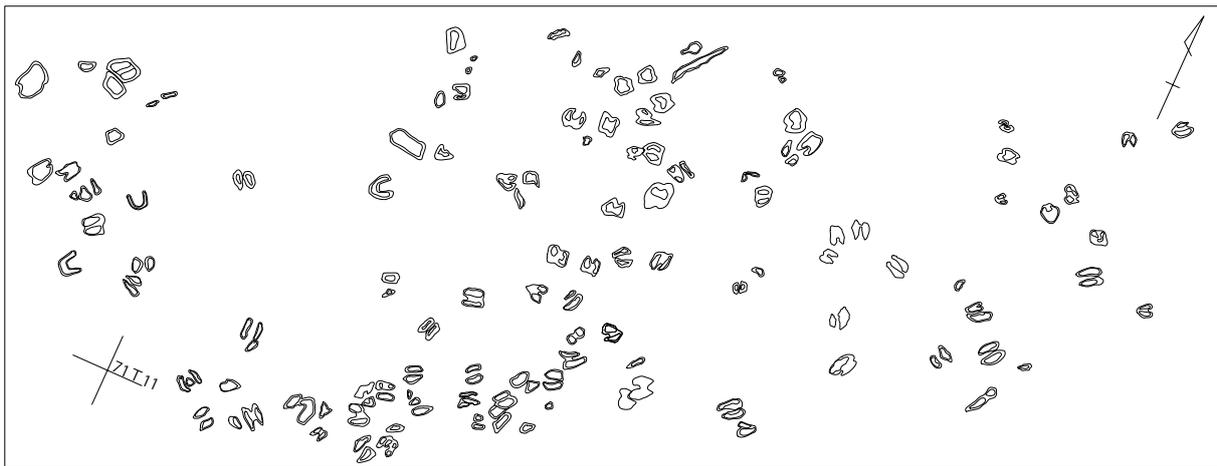
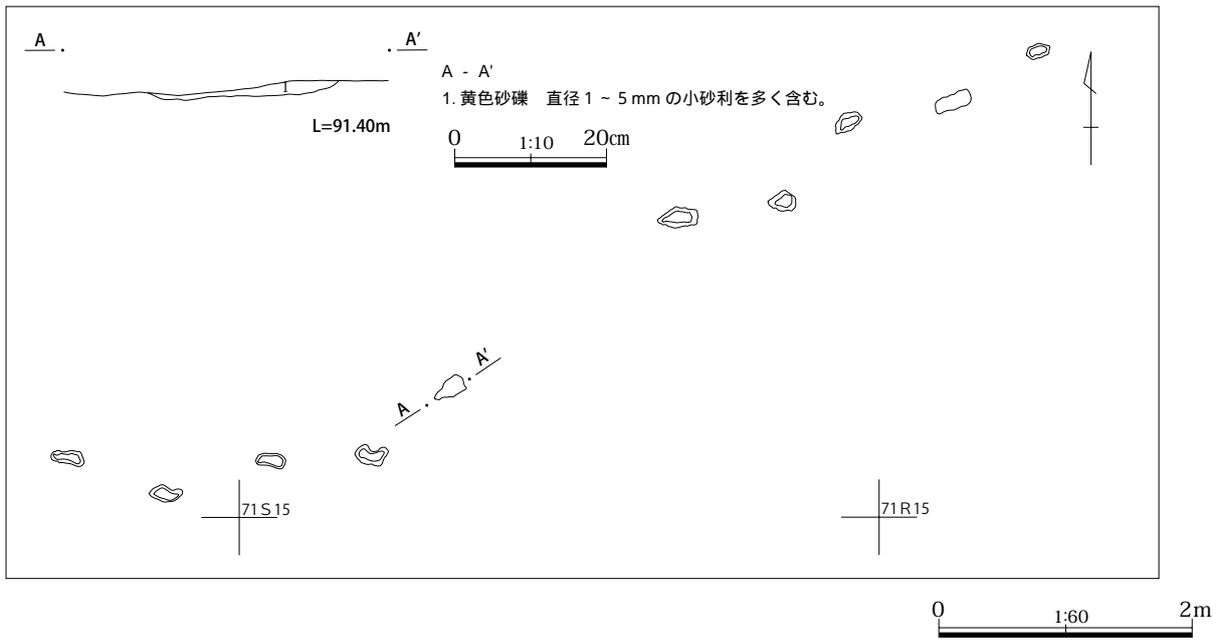
g - g'

1. 黄色砂層 粒径がこまかい。
2. 黄色砂礫層 直径2～7mmの小砂利が多く含まれる。
3. 黄色砂層 1より粒径が荒い砂。
4. 灰色砂
5. 灰色砂礫層 直径2～7mmの小砂利が多い。直径1～2cmの黑色土塊。直径0.5～1cmの黄色土塊。直径1～2cmの軽石をやや多く含む。
6. 灰色砂礫層 直径2～7mmの小砂利を多く含む。直径5～7cmの軽石を少量含む。
7. 灰色砂層 直径2～3mmの黑色土塊。黄色土塊をごく少量含む。
8. 黑色粘性土 地山の崩落)



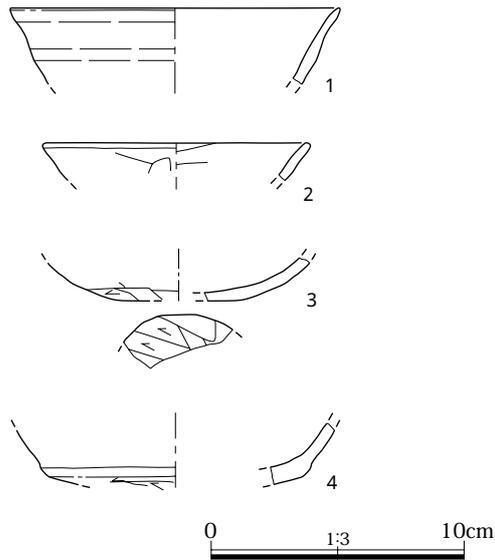
第21図 1区谷部第2洪水層下水田の溜井と水口

2. 1 区谷部の遺構と遺物



第 22 図 1 区谷部第 2 洪水層下水田人足跡と牛蹄跡

第4章 1区の遺構と遺物



第23図 1区谷部第2洪水層下出土遺物

水田面に牛と思われる蹄跡が見つかったことで、農作業に畜力が使用された可能性を考えることができる。

本水田の出土遺物は非常に少ないが、水田に直接かかわる遺物として、第23図に図示した土器4点と土師器甕破片1点、坏破片1点が出土した。須恵器坏(1)は水田耕土中、土師器坏(2)は20号溝底面、甕(3)は1号溜井埋没土中、坏(4)は19号溝埋没土中から出土した。7世紀代のものと見られる土師器坏(4)を除いて、8世紀後半から9世紀の時期のものと考えられ、第2洪水層下水田の埋没時期を示唆する遺物として重要である。

1区20号溝(第19・20・23図 PL 8・9

遺物観察表 P.479)

位置 1区3-71-P~T-12G

1区3-72-A・B-12G

重複 無し

形状 谷の東縁から西縁に谷内を斜に横断する東-西方向の溝。ほぼ直線である。西端は3-72-C-13グリッド内で19号溝に合流する。東端は発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、その標高は西端が東端より0.36m低くなっている。溝の両端には下幅0.4m、上幅0.3m、高さ0.1~0.15mのアゼが設けられている。

規模 調査長 31.60m 最大幅 0.8m

最小幅 0.52m

アゼ上からの深さ 0.36~0.41m

断面形 不定形なU字形

埋没土 暗灰褐色砂で埋まっていた。中位には地山の黒灰色粘質土塊が崩落して埋没していた。

遺物と出土状況 遺物は土師器破片6点が出土したのみである。図示した土師器坏(第23図2)は溝底面出土した。接合できなかったが同様な坏破片が2点出土している。

所見 第2洪水層下水田の用水路である。田面を覆っているのと同じ洪水層で埋まっていた。発掘区内で谷を横断し、溜井の水を補給した19号溝と谷の北岸で合流する。71-S-12Gには水口があり、区画7の水田面に配水している。出土遺物の時期から溝の時期は8世紀後半から9世紀ごろと考えられる。

1区19号溝(第19・20・23図 PL 8・9

遺物観察表 P.479)

位置 1区3-72-A・B-13・14G

2区3-72-E-10・11G

重複 無し

形状 72-A・B-14Gにある1号溜井の南側に接続された北西-南西方向の溝。ほぼ直線である。2区的最南端で延長部が検出された。さらに南端は発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、その標高は南端が北端より0.11m低くなっている。溝の東端、谷側には下幅0.46m、上幅0.36m、高さ0.09~0.16mのアゼが設けられている。

規模 調査長 2区南端部を含めて23.4m

最大幅 0.92m 最小幅 0.60m

アゼ上からの深さ 0.43m

断面形 不定形な箱形

埋没土 暗灰褐色砂で埋まっていた。中位には地山の黒灰色粘質土を多く含む。

遺物と出土状況 遺物は土師器破片7点が出土したのみである。図示した土師器坏(第23図4)は溝埋没土中から出土した。

2. 1 区谷部の遺構と遺物

所見 第2洪水層下水田の用水源である1号溜井の下位南側に接続された用水路である。田面を覆っているのと同じ洪水層で埋まっていた。谷部上流から流れてくる20号溝と谷の北岸で合流する。出土遺物のうち図化可能な遺物は古墳時代7世紀代と見られる土師器坏のみであった。しかし、同時に埋没していると見られる埋没土の堆積状況から、本溝の時期は20号溝と同じ8世紀後半から9世紀ごろと考えられる。

1区1号溜井(第19・21・23図 PL 8～10
遺物観察表 P.479)

位置 1区72 - A・B - 14 G

重複 無し

形状 4基の不定形な土坑が集まって、全体が皿状の凹地になっている。ほぼ中央に深い湧水部があり、そこから19号溝に接続している。

規模 長軸 2.4～3.0 m 短軸 1.5～2.7 m

残存壁高 0.16～0.60 m

長軸方位 N - 23° - E

断面形 皿形

埋没土 黄色の砂礫、灰色の砂礫・砂で埋まっていた。

底面 凹凸が著しい。

遺物と出土状況 遺物は図示した土師器甕(第23図3)のみである。稜の緩やかな底部の破片で、器壁は薄い。

所見 第2洪水層下水田の用水源の1つとなった溜井である。本水田は通例の自然谷頭湧水灌溉あるいは小河川灌溉に加えて、溜井灌溉を附加した水田であり、1号溜井は、農業水利技術史を研究する上で重要な遺構となろう。

(5) 榛名二ツ岳火山灰下面

榛名二ツ岳火山灰下面

(付図1 第24・25図 PL12)

1区谷部の東部の一角と谷部の北側に支谷状に突き出た谷頭部分の2カ所で、榛名二ツ岳火山灰下面を確認した。火山灰の残存が限られていたために、

図面および写真に記録できたのは上記の範囲である。谷部東壁共通土層断面 A - A' で榛名二ツ岳火山灰が皿状に堆積しているのが、トレンチ調査で確認できたので、それを鍵層にして、周囲へ火山灰層を剥いていったところ、直下面としては検出できたが、遺構は検出されなかった。

しかし、土壌分析の結果では、複数の地点の榛名二ツ岳火山灰直下からイネの植物珪酸体が3000～3700個/gの高い密度で検出されている。遺構としては検出できなかったが、榛名二ツ岳火山灰が降下した6世紀初頭に1区谷部で稲作がおこなわれていた可能性は高い。

北側支谷でも一部で榛名二ツ岳火山灰が塊状に堆積していたが、不明瞭であり、直下面での遺構確認はできなかった。

また、同遺構確認面で23号溝、24号溝を確認した。いずれも榛名二ツ岳火山灰より新しい遺構である。23号溝は榛名二ツ岳火山灰より上位から掘り込んでいることが遺構確認面でも視認できた。24号溝は土層断面では第2洪水層より古く榛名二ツ岳火山灰より新しい層序が確認できた。地山面まで掘り込んでいるために、図化は下位の浅間C軽石上面とともに実施した。

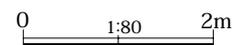
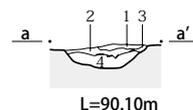
1区23号溝(第24・25図 PL12・13)

位置 1区3 - 71 - P～T - 11～13 G

1区3 - 72 - A・B - 9・10 G

重複 無し

形状 谷の南側斜面中位に掘られた北東-南西方向の溝。走向は谷の縁辺の形状に沿っている。両端と



a - a'

1. 黒色シルト
2. 灰色砂 黒色土、直径1～2cmの黄色砂質土塊を多く含む。
3. 黒色砂質土
4. 黒色土 粘性が強い。直径0.5～1cmの黄色砂質土塊をごく少量含む。

第24図 1区谷部 Hr-FA面23号溝土層断面



も発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、底面の標高は北東端が南西端より 0.58 m 高い。

規模 調査長 40.00 m 最大幅 1.36 m
最小幅 0.80 m 深さ 0.13 m

断面形 浅い皿形

埋没土 上層は黒色シルト・黒色土塊を含む灰色砂で埋まっていた。粘性の強い黒色土で埋まっていた。
遺物と出土状況 埋没土中から土師器壺甕の胴部破片が 30 点出土したが、図示できる遺物はなかった。
所見 本溝は榛名二ツ岳火山灰面で調査したが、土層観察からは榛名二ツ岳火山灰より新しく、第 2 洪水層より古い遺構である。底面は下位の調査でさらに深いことが判明し、27 号溝として記録した。(P L 13) 出土遺物からは古墳時代後期と推定されるが、詳細な時期は明らかにできなかった。

1 区 24 号溝 (第 26 図 PL12)

位置 1 区 3 - 71 - O ~ T - 9 ~ 12 G
1 区 3 - 72 - A・B - 7 ~ 9 G

重複 無し

形状 谷の底面南縁に掘られた北東 - 南西方向の溝。走向は谷の縁辺の形状に沿っている。両端とも発掘区域外に伸びている。底面はやや凹凸があり、浅くなっているところや途切れているところがある。底面の標高は北東端が南西端より 0.57 m 高い。

規模 調査長 41.00 m 最大幅 1.40 m
最小幅 0.52 m 深さ 0.14 m

断面形 浅い皿形

埋没土 ローム粒、灰色砂粒、共に多く含む暗褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 本溝は榛名二ツ岳火山灰面で調査したが、土層観察からは榛名二ツ岳火山灰より新しい遺構である。図化は浅間 C 軽石上面でおこなった(第 26 図)。

第 2 洪水層との関係は土層から厳密には判明しなかったが、本溝は上層の第 2 洪水層下水田の田面では確認できなかったため、第 2 洪水層よりは古い遺構と判断している。

(6) 浅間 C 軽石上下面

(付図 1 第 26 ~ 33 図 PL12・13 ~ 14)

1 区谷部では浅間 C 軽石の純堆積層が全面で残存している状態ではなかったため、浅間 C 軽石を多量に含む黒色土層上面と、下面の二つの面を遺構確認面として調査を実施した。谷北側の支谷底面では浅間 C 軽石の純堆積層が一部に薄く残存しており、その直下で古墳時代初頭の土器がまとまって出土した。

浅間 C 軽石を多量に含む黒色土層上面の調査(第 26 図)では、23 号溝の底面(27 号溝)・25 号溝を検出した。24 号溝は上位の面で確認していたが、第 26 図には底面を図示している。

25 号溝は、谷部のほぼ中央の最も低位の地点を、谷に沿った緩やかな蛇行を示して流下していることから、自然流路と考えられる。浅間 C 軽石を多量に含む黒色土を掘り込み面としていることから、掘削時期は浅間 C 軽石降下後の古墳時代初期と推定される。

一方、26 号溝(第 27 図)はその下位の黒色粘性土から掘り込まれている。底面の一部には浅間 C 軽石が堆積しており、降下以前の可能性が高い。また北側支谷の谷頭部底面には浅間 C 軽石の純堆積層があり、谷口部には半完形の土器が集中して出土した。北側微高地の当該期集落との関連性があるものと考えられる。しかし、発掘区内ではこの時期の水田等の生産遺構は検出されなかった。土壌分析では、本層位相当の土壌からは第 4 地点で 700 個 /g の低い密度でイネの植物珪酸体が検出されているが、他の 3 地点ではイネの植物珪酸体は検出されていない。ヒ工属型は第 10 地点で 800 個 /g の密度で検出された。古墳時代初頭の北側微高地の集落の生産域は谷内ではなく、荒砥川沖積地に近い谷口にあると推定される。

1 区 25 号溝 (付図 1 第 26・29 ~ 31 図 PL12・13・142 ~ 144 遺物観察表 P.479・480)

位置 1 区 3 - 71 - P ~ T - 12・13 G
1 区 3 - 72 - A・B - 10 ~ 12 G

重複 下位に 26 号溝がやや北にずれて先行する。

第4章 1区の遺構と遺物

形状 谷の最低位の中央を、蛇行する。東西両端とも発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、その標高は西端が東端より0.36 m低くなっている。

規模 調査長 35.6 m 最大幅 3.72 m
最小幅 1.60 m 深さ 0.33 ~ 0.45 m

断面形 U字形

埋没土 上層は黒色土と灰色砂、灰色シルトがラミナ状に堆積した層で、下層は黒色土、灰色砂、灰色シルトがラミナ状に堆積した層で埋まっていた。

遺物と出土状況 下位の26号溝と一緒に掘り下げたために、上半部に含まれていた遺物はどちらの遺物が確定できなかった。これらの遺物はグリッドごとに浅間C軽石を混じる黒色土中出土の遺物として一括して取りあげた。その総数は238点である。25号溝出土と判断して取りあげた遺物は土師器・弥生土器破片合わせて90点である。

遺物接合作業は上層部のグリッド取上の遺物と下位の26号溝出土遺物も対象として、一度に実施した。25号溝出土として図化掲載した遺物は、土師器壺(第30図1・2)、甕(3~6)の6点である。

所見 地形にそって蛇行する溝形状と、谷部中央の最低位を流下していることから、自然河川と考えられる。北側微高地上の古墳時代前期の集落と同時期の遺物が多数含まれており、生活エリア内であったことは確実である。

1区26号溝(付図1 第27・29~32図 PL12~14・142・143 遺物観察表P.480・481)

位置 1区3-71-P~T-12・13G

1区3-72-A・B-11~13G

重複 上位に25号溝がやや南にずれて後出する。26号溝の南法面は25号溝に壊されており、残存していなかった。

形状 谷の最低位の中央を、ほぼ蛇行する。東西両端とも発掘区域外に伸びている。底面はほぼ平坦で、その標高は西端が東端より0.36 m低くなっている。

規模 調査長 35.0 m 最大幅 2.56 m以上
最小幅 1.80 m以上 深さ 0.55 m

断面形 底面の平らなボール形

埋没土 上層は浅間C軽石を混じる黒色シルト、下層は浅間C軽石を非常に多く含む黒色土で埋まっていた。特に最下層はほとんど浅間C軽石の純堆積層に近い。

遺物と出土状況 上位の25号溝と一緒に掘り下げたために、上半部に含まれていた遺物はどちらの遺物が確定できないまま、グリッドごと一括して取りあげた。その総数は238点であった。また、26号溝出土と判断して取りあげた下半部出土の遺物は土師器破片307点である。

遺物接合作業は上層部のグリッド取上の遺物と上位の25号溝出土遺物も対象として、一度に実施した。26号溝出土として図化掲載した遺物は、土師器高坏(第31図10)、壺(11~13)、甕(第32図14~21)の12点である。また25号・26号溝のどちらの遺物が判断できない遺物で図化したのは、土師器壺(第30図7・8)と台付甕(第31図9)である。

所見 地形にそって蛇行する溝形状と、谷部最低位の中央を流下していることから、26号溝も自然河川と考えられる。北側微高地上の古墳時代前期の集落と同時期の遺物が多数含まれており、生活エリア内であったことは確実である。

1区谷部北支谷(第27~29・33 PL14・143・144 遺物観察表P.481・482)

位置 1区3-71-P-13~16G

1区3-72-A・B-13~16G

重複 無し

規模 長軸18.4 m 短軸9.2 m 残存壁高1.5 m
長軸方位 N-9°-W

断面形 ボール形

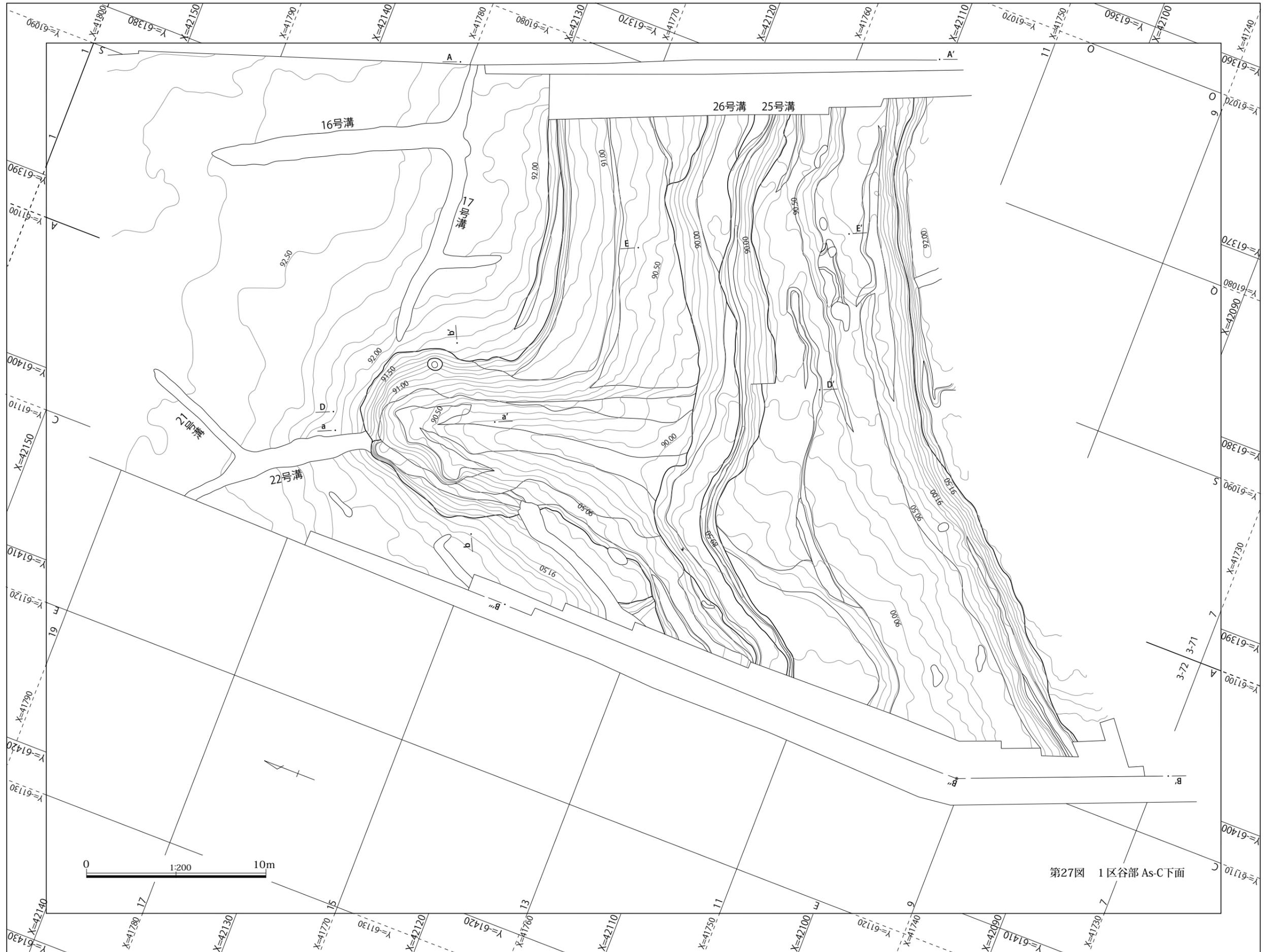
埋没土 浅間C軽石を含む黒色土で埋まっていた。特に下半部には浅間C軽石を多く含む、最下層には純堆積層が残存していた。

底面 緩やかに中央部に向かって傾斜している。底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 北支谷にあたるグリッドの浅間C



第26图 1区谷部 As-C混凝土上面



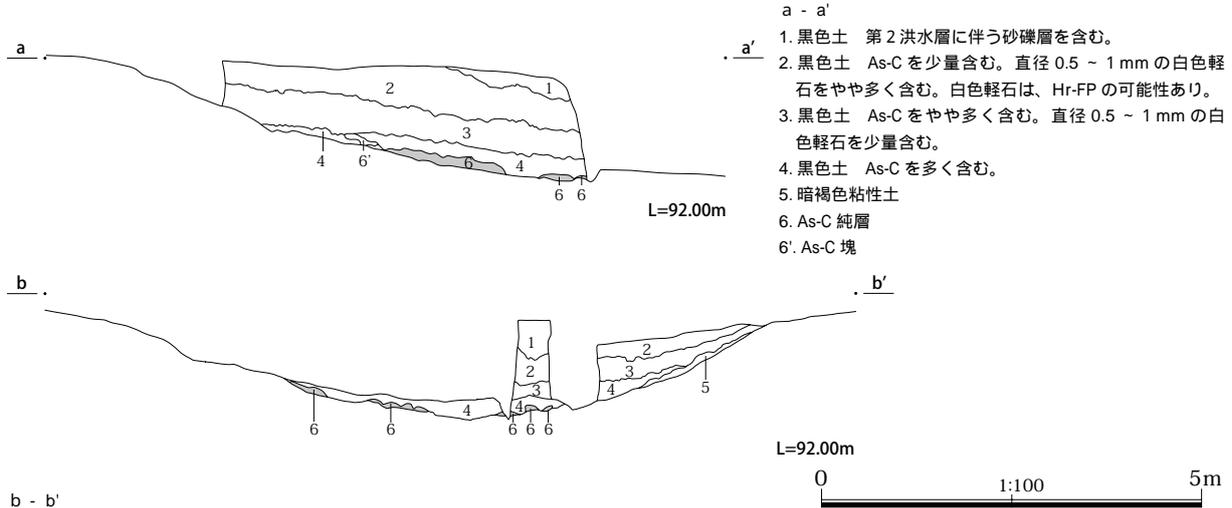
第27图 1区谷部As-C下面

2. 1 区谷部の遺構と遺物

軽石を混じる黒色土中出土の遺物は 811 点で、特に支谷の谷口と 26 号溝に接する 71 - T - 13 G・72 - A - 13 G では、浅間 C 軽石直下の土器が集中して出土した。

れる。調査時には少量の湧水が確認された。浅間 C 軽石直下面には遺物が集中して出土したが、谷内出土遺物のなかでは古手の土器が出土している。微高地部の 17 号溝や 22 号溝がこの支谷谷頭を意識した位置に掘られている。

所見 谷の北緩斜面で検出された自然地形と推定さ

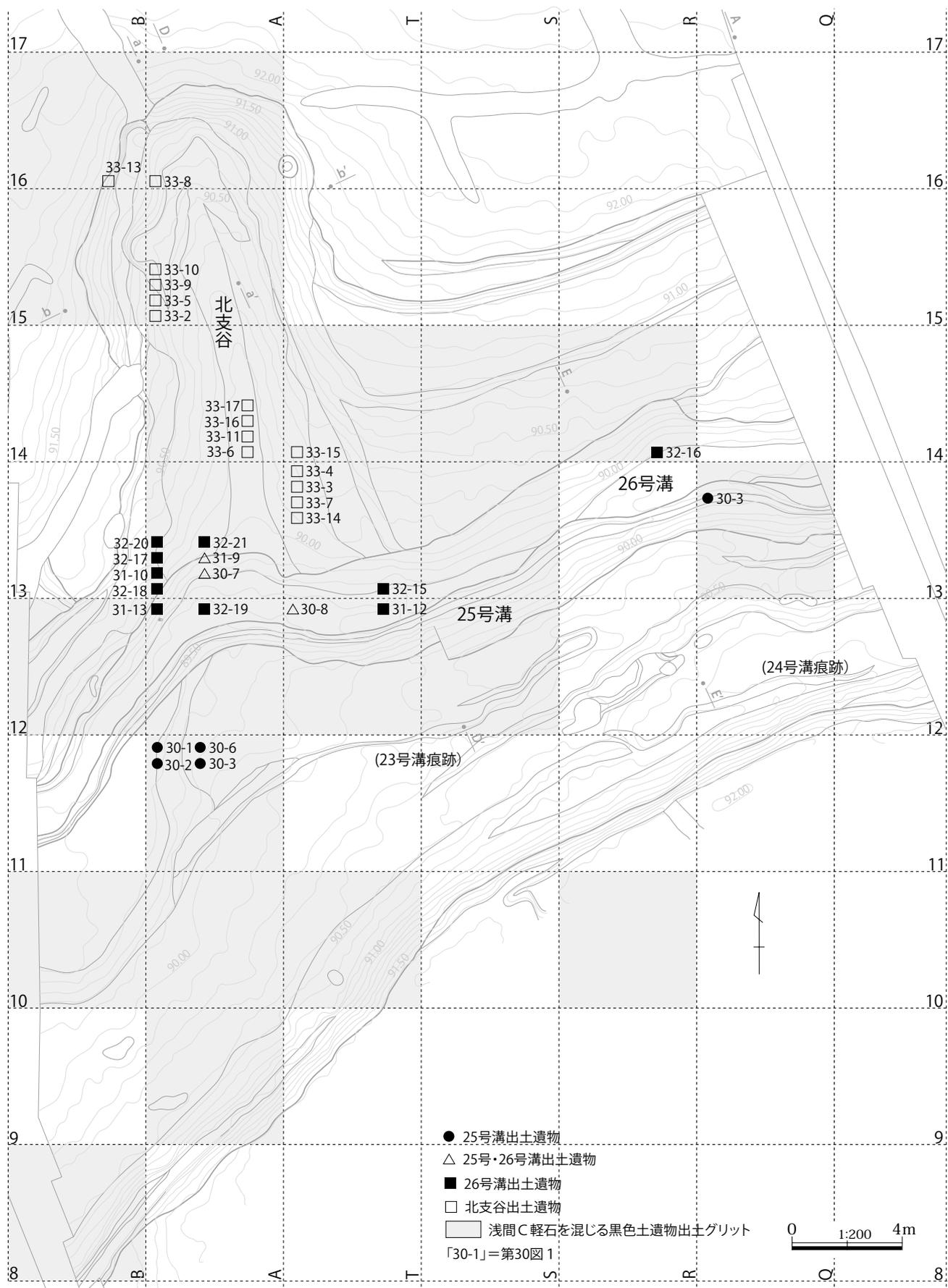


- a - a'
1. 黒色土 第 2 洪水層に伴う砂礫層を含む。
 2. 黒色土 As-C を少量含む。直径 0.5 ~ 1 mm の白色軽石をやや多く含む。白色軽石は、Hr-FP の可能性あり。
 3. 黒色土 As-C をやや多く含む。直径 0.5 ~ 1 mm の白色軽石を少量含む。
 4. 黒色土 As-C を多く含む。
 5. 暗褐色粘性土
 6. As-C 純層
 - 6'. As-C 塊
- b - b'
1. 黒色土 第 2 年洪水層に伴う砂礫層を含む。
 2. 黒色土 As-C を少量含む。直径 0.5 ~ 1 mm の白色軽石をやや多く含む。白色軽石は、Hr-FP の可能性あり。
 3. 黒色土 As-C をやや多く含む。直径 0.5 ~ 1 mm の白色軽石を少量含む。
 4. 黒色土 As-C を多く含む。
 5. 暗褐色粘性土
 6. As-C 純層

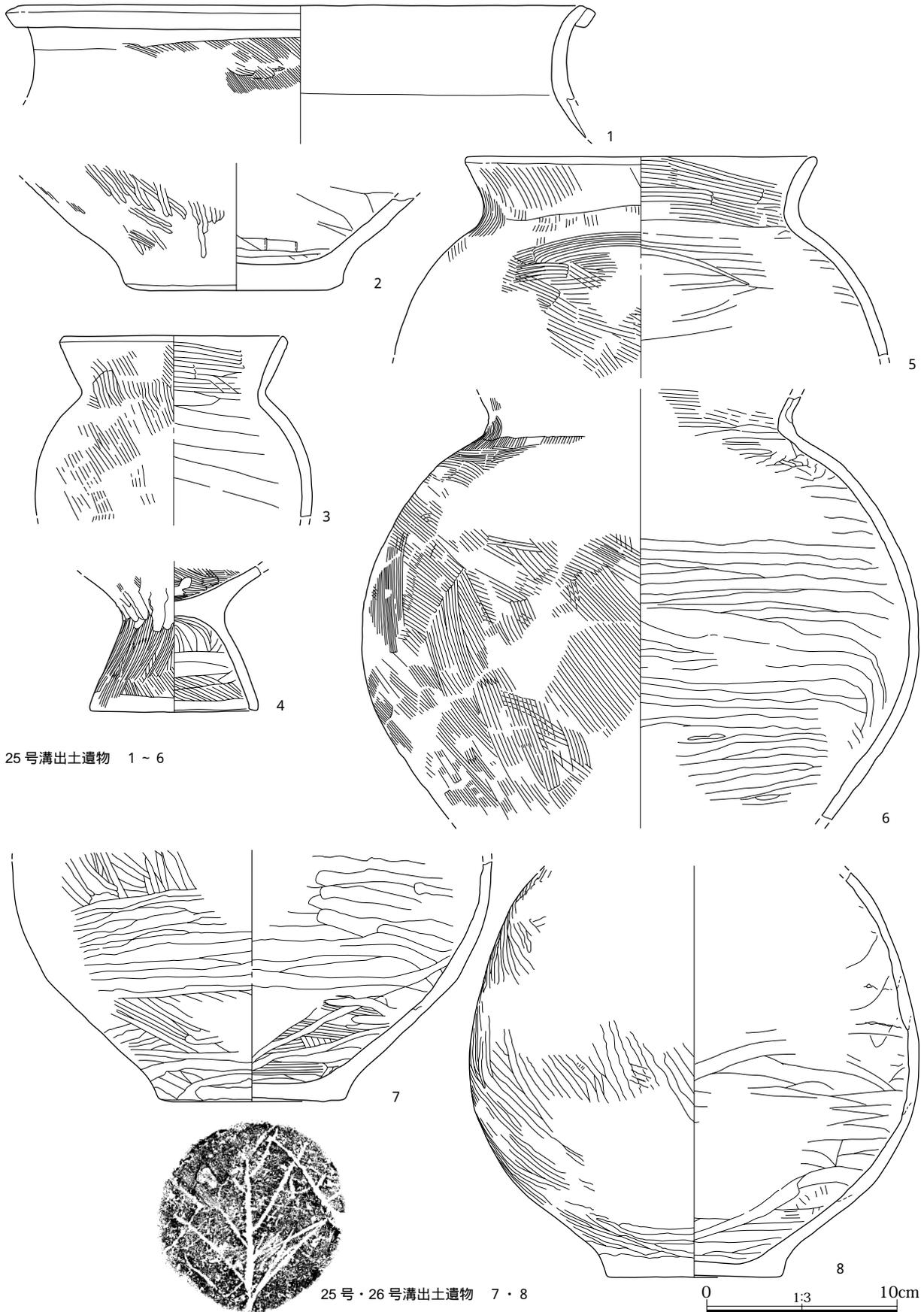
第 28 図 1 区谷部北支谷土層断面

第 4 表 荒砥前田 遺跡 1 区谷部浅間 C 軽石上下層遺物包含層出土数一覧表

グリッド	地点	層位	縄文 土器	弥生 土器	土師器										須恵器		石					小計					
					壺	甕	S 字甕	台付甕	埴	鉢	高坏	小型器台	坏	蓋	坏・椀	甕	碎片	剥片	礫片	礫	石器						
3 71 Q 13	低地	C 混黒			1	3			1													1					
3 71 R 10	低地	C 混黒			3	3						2														1	
3 71 R 14	低地	C 混黒			12	6	1				3																
3 71 S 12	低地	C 混黒			2																						
3 71 S 13	低地	C 混黒			3	4																					
3 71 T 10	低地	C 混黒	1		3	1																1					
3 71 T 12	低地	C 混黒			4	1	2																				
3 72 A 8	低地	C 混黒			2	4			1																		
3 72 A 10	低地	C 混黒							1																		
3 72 A 11	低地	C 混黒				84	6	1		2																	
3 72 A 12	低地	C 混黒			6	2	1																				
3 72 B 10	低地	C 混黒			10	21					3																
3 72 C 10	低地	C 混黒					2					1															
小計			1	0	46	131	10	4	0	8	3	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0					208
3 71 T 13	北支谷	C 混黒			59	56	9	4			13																
3 71 T 14	北支谷	C 混黒			6	18		1																			1
3 71 T 16	北支谷	C 混黒	1		16	10		1						4			1										
3 72 A 13	北支谷	C 混黒			5	12		1	1		5																
3 72 A 14	北支谷	C 混黒		1	53	51	16	1		1	52										1						
3 72 A 15	北支谷	C 混黒			41	51	1	4			3																2
3 72 A 16	北支谷	C 混黒			25	40	5	2			8				1						1						
3 72 A 16	北支谷	C 直下								61																	
3 72 B 15	北支谷	C 混黒				14		1		1	1																
3 72 B 16	北支谷	C 混黒			2	62		4	79	1	1	1									1	1					
小計			0	2	207	314	31	19	141	3	83	1	4	1	0	1	1	2	1	3	2	5	0				813
合計			1	4			41	23	141	11	86	1	4	1	0	2	1	3	2	5	0						1021



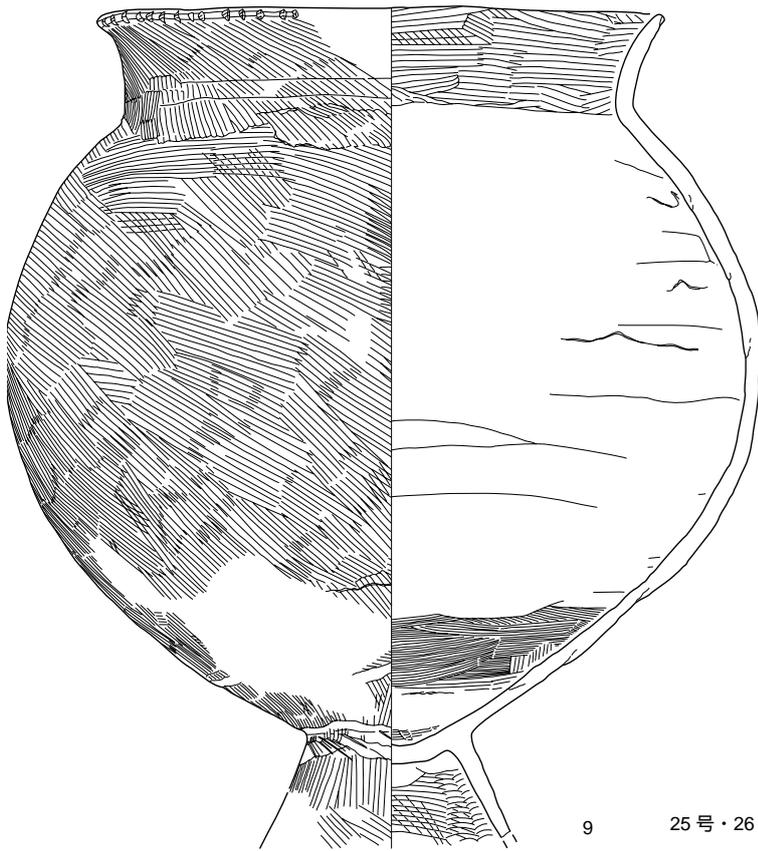
第 29 図 1 区谷部 25 号・26 号溝と北支谷出土遺物分布図



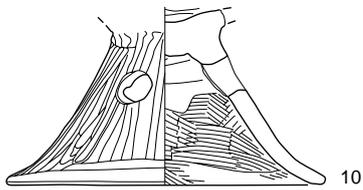
25号溝出土遺物 1~6

25号・26号溝出土遺物 7・8

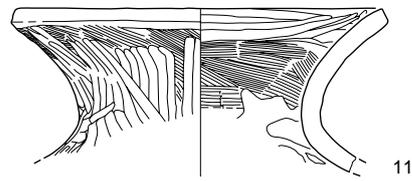
第30図 1区谷部浅間C 軽石上下面出土遺物(1)



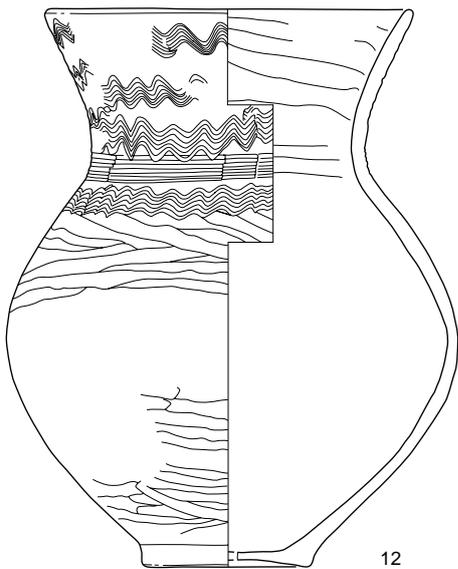
9 25号・26号溝出土遺物 9



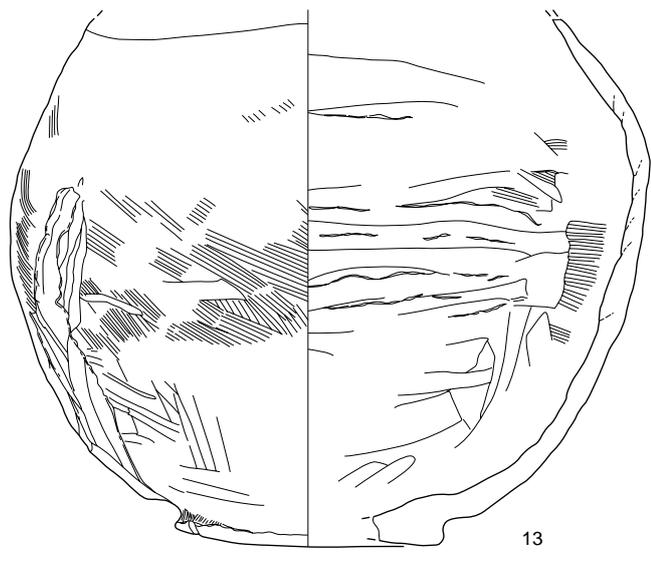
10



11



12

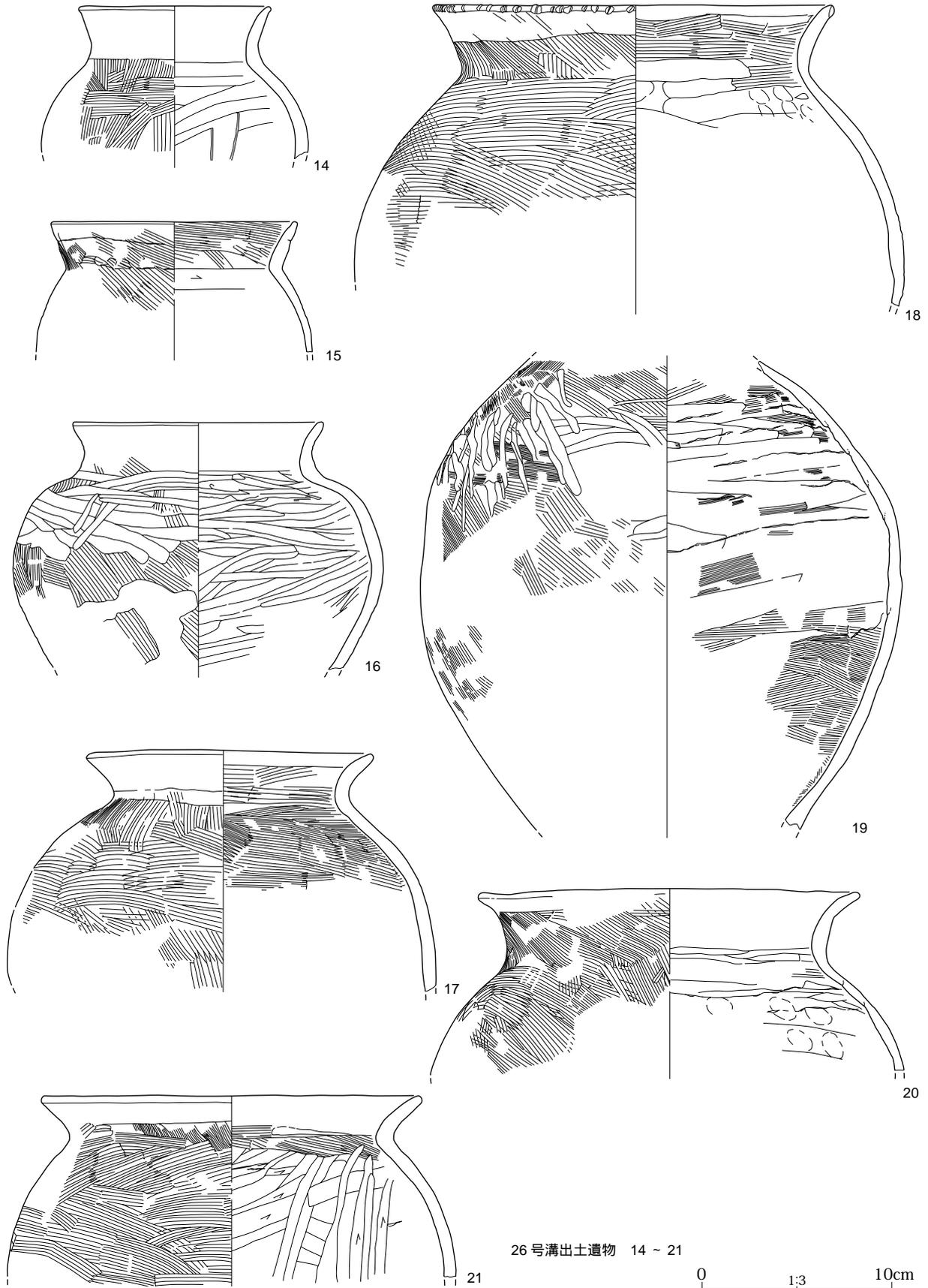


13

26号溝出土遺物 10 ~ 13

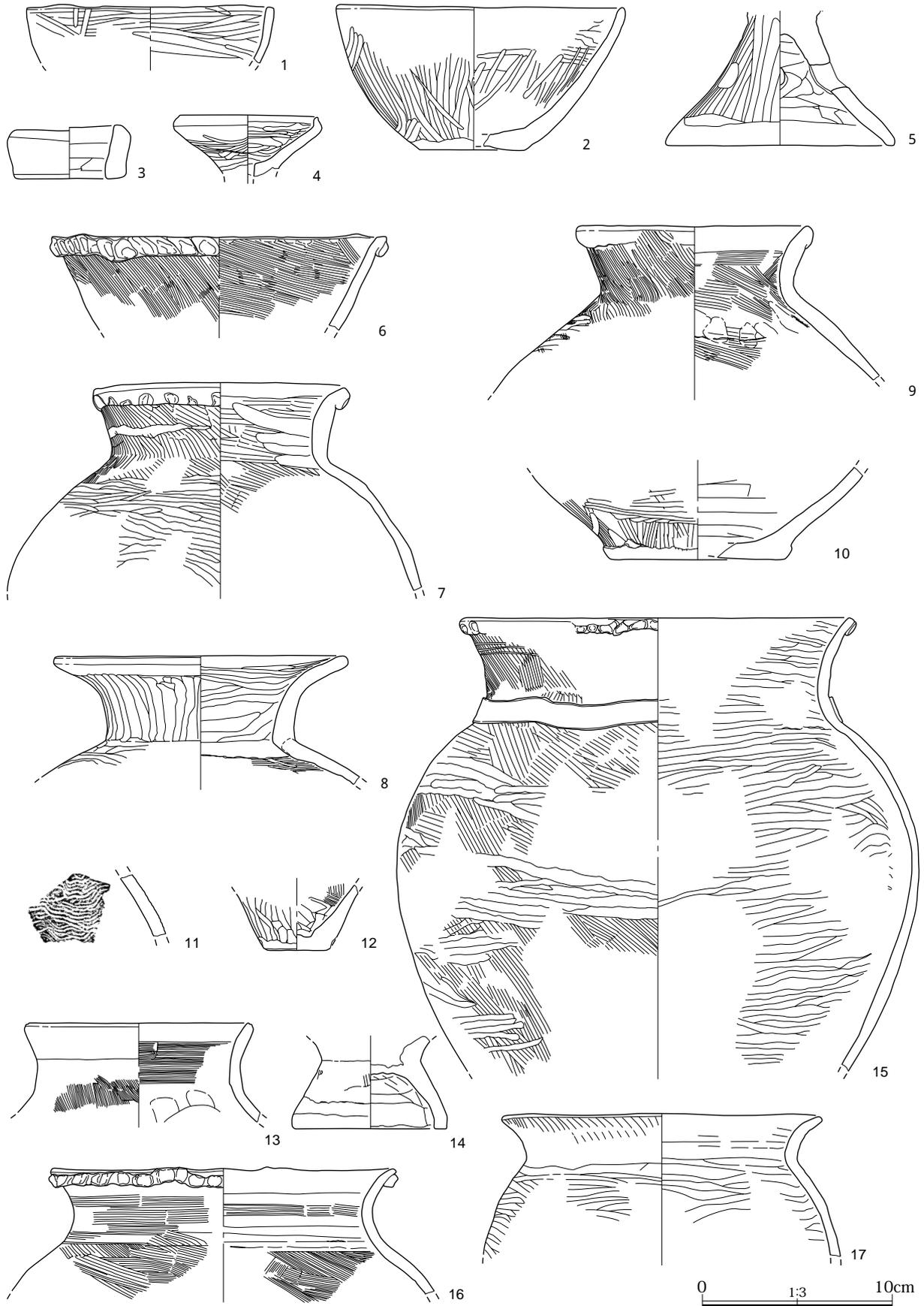
0 1:3 10cm

第31図 1区谷部浅間C軽石上下面出土遺物(2)



第 32 図 1 区谷部浅間 C 軽石上下面出土遺物 (3)

第4章 1区の遺構と遺物



第33図 1区谷部北支谷出土遺物

3. 1区微高地部の遺構と遺物

(1) 土坑群 (第36図 PL15)

表土直下面で、黄色小砂礫からなる洪水層とそれを切って掘られた長方形土坑28基を検出した。個々の土坑について詳細な記録はとらなかったが全体図および全景写真を記録した。

土坑の大きさはまちまちであるが、一様に細長い長方形あるいは帯状を呈する。長軸方向もほぼ一定でN-27°-Eがほとんどであるが、いくつかN-23°-Wの土坑が混在している。出土遺物はなく、時期は不明である。一定の方向性をもっていることから、地割に沿った耕作あるいは貯蔵に関わる遺構と推定される。

(2) 井戸

1区11号井戸 (第34・36図 PL15)

位置 1区3-71-T-19G

形状 不整楕円形 重複 1区16号溝に先行する。

規模 長軸 1.00m 短軸 0.78m

残存壁高 1.57m

長軸方位 N-75°-E

断面形 上方がラッパ状に開く筒状である。また確認面から0.5~0.7m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 白色軽石を含む暗黒褐色土で埋まっていた。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

(3) 溝

1区16号溝

(第35・36図 PL15・144 遺物観察表P.482)

位置 1区3-71-R-17~20G

1区3-72-A-20G

1区3-82-A-1G

重複 南端で17号溝と接するが、新旧関係は不明である。11号井戸に後出する。

形状 微高地南部の緩斜面縁辺に掘られた北西から南東方向の溝。北半がやや西に彎曲する。北端は3-82-A-1G内で確認できなくなる。南端は17号溝と交わるが、調査では新旧関係あるいは同時存在を確認できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.63m高い。

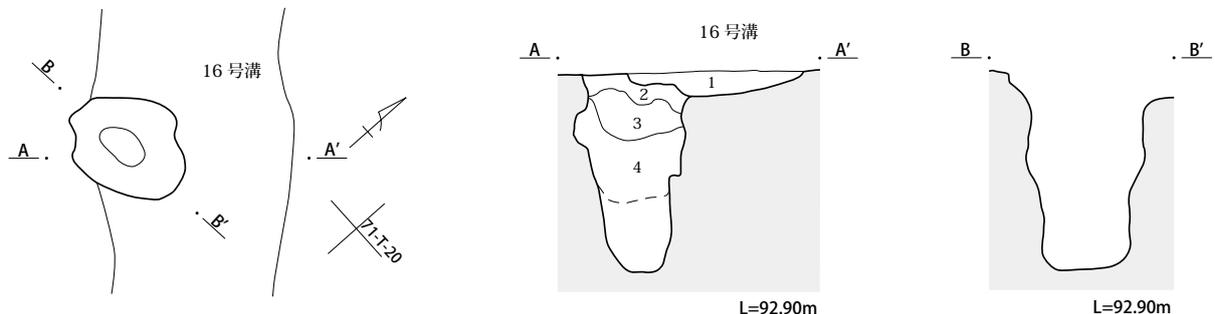
規模 調査長 31.0m 最大幅 1.5m

最小幅 1.10m 深さ 0.10~0.25m

断面形 皿形

埋没土 白色軽石・褐色砂粒を多く含む砂質明黒褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片11点、陶器破片7点、軟質土器破片6点、砥石2点が出土



A - A'

1. 明黒褐色土 白色軽石をやや多く、褐色砂粒を多く含む。やや砂質。
2. 暗黒褐色土 白色軽石を少量。黄色砂質土を微量含む。
3. 暗黒褐色土 白色砂粒を少量含む。しまりなく軟質。
4. 暗褐色土 白色、黄褐色砂粒を少量含む。軟質。

第34図 1区11号井戸

第4章 1区の遺構と遺物

した。陶器は瀬戸・美濃系の江戸時代のもので、軟質土器は江戸時代と見られる焙烙および鍋の破片である。土器は小破片で図化はしなかったが、砥石2点を図示した。

所見 出土遺物から近世以降の溝と推定される。谷部へ向かっているのので、排水用の溝か。

1区 17号溝 (第35・36図 PL15・16)

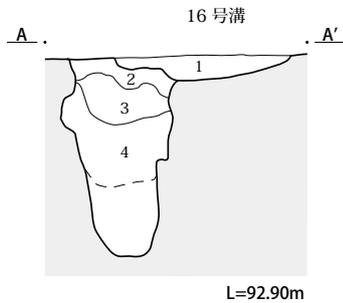
位置 1区 3 - 71 - O ~ T - 13 ~ 16 G

1区 3 - 72 - A・B - 13 ~ 16 G

重複 東部で16号溝と接するが、新旧関係は不明である。谷部第1洪水層下水田に後出する。

形状 微高地南部の緩斜面に沿って東から南西に掘られた溝。谷部の緩斜面端部にあり、谷の輪郭に沿って掘られている。北半がやや西に彎曲する。東西両端が発掘区外に伸びている。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.31m高い。3カ所に南へ延びる小溝を検出した。これらの小溝は土層の観察から17号溝と重複関係がなく、同時に使われていた可能性が高い。

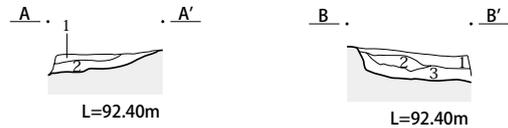
1区 16号溝



A - A'

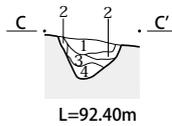
1. 明黒褐色土 As-C 軽石をやや多く、褐色砂粒を多く含む。やや砂質。
2. 暗黒褐色土 As-C 軽石を少量。黄色砂質土を微量含む。
3. 暗黒褐色土 白色砂粒を少量含む。しまりなく軟質。
4. 暗褐色土 白色、黄褐色砂粒を少量含む。軟質。

1区 17号溝



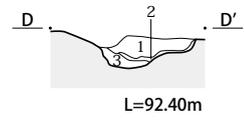
A - A'・B - B'

1. 黒褐色土 白色、褐色砂粒をやや多く含む。やや砂質。
(溝 c 1層と同一)
2. にぶい黒褐色土 白色砂粒少量含む。やや粘性有。(溝 c 2層と同一)
3. 暗灰褐色土 黄褐色土を塊状にやや多く含む。



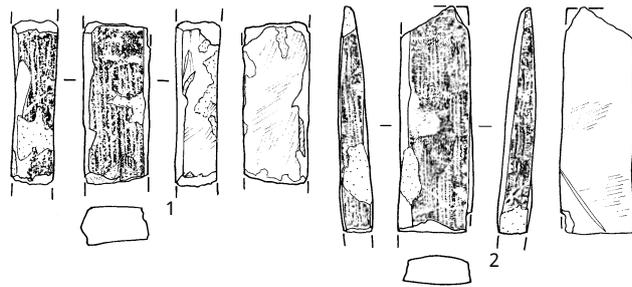
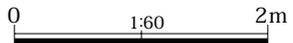
C - C'

1. 黒褐色土 白色軽石粒、白色、褐色砂粒やや多く含む。やや砂質。
2. にぶい黒褐色土 白色砂粒微量含む。やや粘性有。
3. 暗灰褐色土 白色、褐色砂粒を少量含む。軟質。
4. 暗灰褐色土 黄褐色土を塊状にやや多く含む。

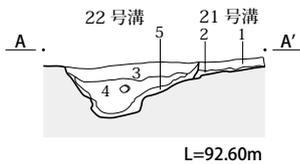


D - D'

1. 黒褐色土 白色軽石粒、白色、褐色砂粒やや多く含む。やや砂質。
2. 暗灰褐色土 白色、褐色砂粒を少量含む。軟質。
3. 暗灰褐色土 黄褐色土を塊状にやや多く含む。

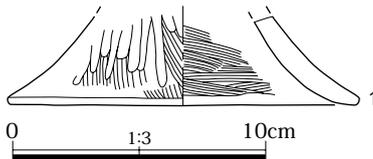


1区 21号溝

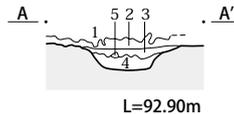


A - A'

1. 黒色土を含む。
2. 黒色土と黄灰砂質土の混土
3. 黒色土 As-Cをやや多く含む。
4. 黒色土 As-Cを少量含む。
5. 黒色土と黄灰色砂質土の混土。

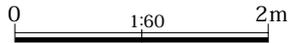


1区 22号溝

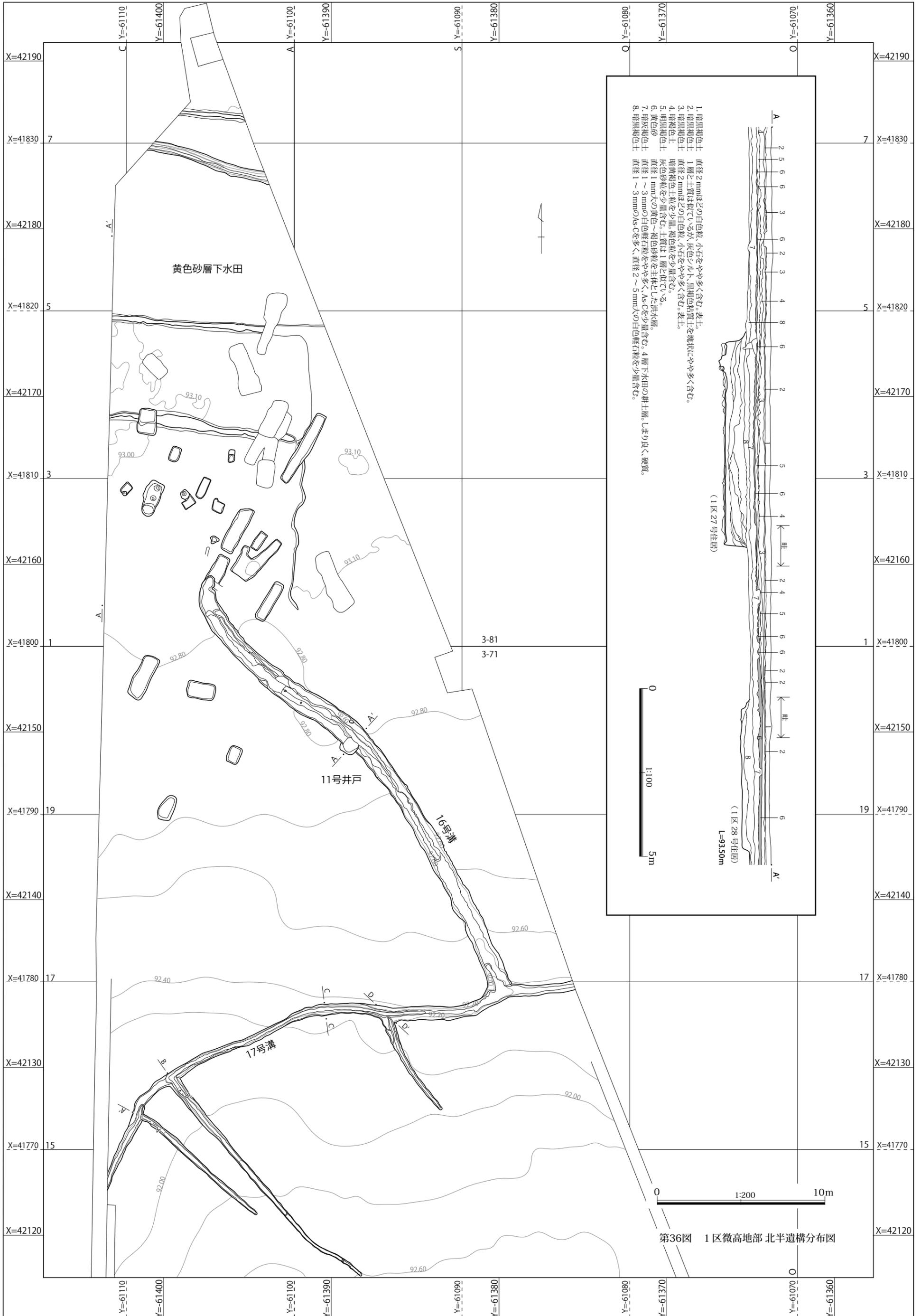


A - A'

1. 黄灰色土 As-Cを多く含む。
2. 黒色土 As-Cを多く含む (C混土)
3. 黒色土 As-Cをやや多く含む。
4. 黒色土と黄灰色砂質土の混土
5. 黄灰色砂質土 塊。



第35図 1区 16号・17号・21号・22号溝と出土遺物



1. 暗黒褐色土
 2. 暗黒褐色土
 3. 暗黒褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 明褐色土
 6. 黄色砂
 7. 暗灰褐色土
 8. 暗黒褐色土
- 直径2mmほどの白色粒、小石をやや多く含む。表土。
 1層と土質は似てゐるが、灰色シルト、黒褐色粘質土を塊状にやや多く含む。
 直径2mmほどの白色粒、小石をやや多く含む。表土。
 暗黄褐色土粒を少量、褐色粒を少量含む。
 灰褐色土粒を少量含む。土質は1層と似てゐる。
 直径1mm程度の黄色～褐色土粒を主体とした排水層。
 直径1～3mmの白色軽石粒をやや多く、As-Cを少量含む。4層下水田の耕土層。しまり良く、硬質。
 直径1～3mmのAs-Cを多く、直径2～5mm程度の白色軽石粒を少量含む。

第36図 1区微高地部北半遺構分布図

3. 1区微高地部の遺構と遺物

規模 調査長 33.0 m 最大幅 0.95 m
最小幅 0.50 m 深さ 0.10 ~ 0.50 m
小溝の規模 幅 0.2 ~ 0.8 m、
長さ東から 0.6 m、1.6 m、0.9 m

断面形 U字形

埋没土 上層は白色軽石・砂粒を含む黒褐色土で、
下層は白色・褐色砂粒を含む灰褐色土で埋まっていた。
遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 出土遺物がなく時期は不明であるが、第1洪水層より新しい。谷部北側の最高位に掘られた溝であり、地割あるいは排水の機能をもつ溝と推定される。

1区21号溝

(付図2 第35図 PL16 遺物観察表 P.482)

位置 1区3 - 71 - T - 19 G

1区3 - 72 - A・B - 17 ~ 19 G

重複 北端で16号溝に先行する。南端では22号溝に先行する。

形状 微高地南部の緩斜面縁辺に掘られた東から南西方向の溝。3 - 72 - A - 19 Gで南南西方向に屈曲する。ほぼ直線で屈曲部は緩やかである。南端は22号溝と交わるが、土層観察から22号溝が新しいことが判明した。底面は屈曲部から南側はやや深くなる。その標高は東端が南端より0.33 m高い。

規模 調査長 18.6 m 最大幅 0.6 m
最小幅 0.3 m 深さ 0.05 ~ 0.18 m

断面形 皿形

埋没土 浅間C軽石を含む黒色土で埋まっていた。
遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片9点が出土した。土師器高坏脚部(第35図1)を図示した。
所見 出土遺物から古墳時代前期の溝の可能性が高いが、機能については不明である。

1区22号溝(付図2 第35図 PL16)

位置 1区3 - 72 - B - 16 ~ 18 G

重複 21号溝に後出する。40号土坑に先行する。

形状 微高地南部の緩斜面を北西 - 南東方向に、支谷谷頭に向かって掘られた溝。ほぼ直線で、北端は

発掘区外に伸びるが、2区でその延長部を確認できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.86 m高い。

規模 調査長 11.1 m 最大幅 1.44 m
最小幅 0.48 m 深さ 0.15 ~ 0.55 m

断面形 U字形で上半部は斜めに開く。

埋没土 白色軽石・砂粒を含む黒褐色土で埋まっていた。最下層には黄灰色砂質土が堆積していた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片65点が出土した。

所見 出土遺物は古墳時代前期の土師器がほとんどで、埋没土も2区の古墳時代前期の住居と共通することから、本溝の時期は古墳時代前期と推定される。支谷谷頭に接続されていることから、谷部利用と関連する遺構と考えられるが、湧水や流水の痕跡は認められなかったため、水利機能を持つとは考えにくい。機能については不明とせざるを得ない。

(4)黄色砂層下面(第36図 PL17)

1区微高地部の北半部で、黄色小砂礫が厚さ5 cmほど堆積していた。その直下から東西方向の3条のアゼと1条の溝を検出した。ここでは微高地部で検出された黄色小砂礫層を黄色砂層と呼ぶ。

溝はアゼを埋めていた黄色小砂礫と同様な砂礫層で埋まっていたが田面区画1を横切る位置になり、不明な点が多い。溝の規模は幅0.68 m、調査長7.6 m、深さ0.38 mである。

アゼはほぼ東西方向で3条検出された。規模は概ね下幅0.5 m、上幅0.25 m、高さ0.05 ~ 0.10 mである。北から3本目のアゼは下幅が1.16 mのところもあり、不定形であった。南北方向のアゼは概ねグリッドのAラインに沿った位置に西端のみ確認できた。東側は圃場整備事業の際に削平を受けていると見られ、残存していなかった。全体形状がわかる区画はなかったが、その規模は南北幅が12 mと6.3 m、東西は12 m以上となる。

この水田を埋めていた黄色小砂礫の外観は、1区谷部で検出された第2洪水層と酷似している。離れ

第4章 1区の遺構と遺物

た地点であるので断定はできないが同時期に堆積した洪水層の可能性があるとするれば、この時期に微高地上の水田化が達成されていたことになる。

(5) 土坑

1区 36号土坑 (付図2 第37図 PL17)

位置 1区 3 - 82 - B - 3 G

重複 無し

形状 隅丸長方形

規模 長軸 1.38 m 短軸 1.12 m

残存壁高 0.44 m

長軸方位 N - 90° - E

断面形 箱形

埋没土 白色軽石・浅間C軽石を含む暗黒褐色土で埋まっていた。

底面 平坦である。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 27号住居の東側に壁方向を同じくして検出された。出土遺物がなく時期を特定することが難しいが、埋没土の共通性や遺構の軸線の一致から古墳時代前期の遺構と推定される。

1区 39号土坑 (第37図 PL17)

位置 不明 重複 無し

形状 不明

規模 幅 0.75 m 残存壁高 0.57 m

長軸方位 不明

断面形 箱形

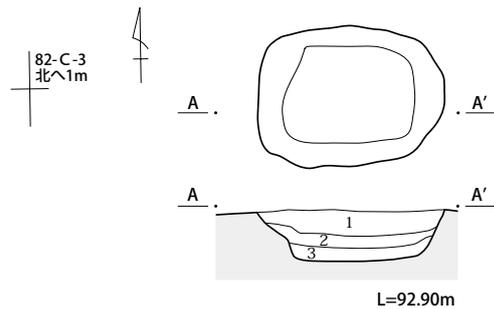
埋没土 上層は白色シルト・灰色砂粒を含む暗黒褐色土で、下層は浅間C軽石・焼土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 凹凸が著しい。

遺物と出土状況 土師器壺破片が1点出土したのみである。図示はできなかったが、古墳時代前期の土器である。

所見 遺構平面図の記録が漏れてしまった。出土遺物や埋没土の共通性から古墳時代前期の遺構と推定される。

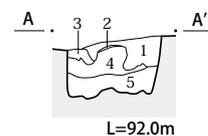
1区 36号土坑



A - A'

1. 暗黒褐色土 直径1～3mmのAs-Cと直径1～7mmの白色軽石粒を多く含む。しまり良く、やや硬質。
2. 暗黒褐色土 直径1～3mmのAs-Cを少量、暗黄褐色土を少量含む。
3. 黒褐色土 As-Cを微量、暗黄褐色土を少量含む。やや軟質。

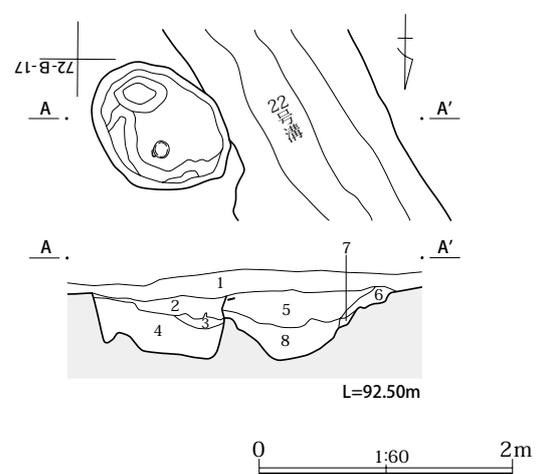
1区 39号土坑



A - A'

1. 暗黒褐色土 暗灰色砂粒を多く含む。
2. 暗黒褐色土 白灰色～暗灰色シルトを多く含む。
3. 暗灰色シルト 2層に混入しているもの同一。
4. 黒褐色土 As-Cを少量含む。しまりなくやや軟質。
5. 黒褐色土 微細な焼土粒を少量含む。

1区 40号土坑



A - A'

1. 黒色土 As-Cを多く含む。
2. 黒色土 As-Cを少量含む。
3. 黒色土 As-Cを微量含む。直径2～5cmの黄灰色砂質土塊を少量含む。
4. 黄灰色砂質土
5. 黒色土 As-Cをやや多く含む。
6. 黒色土 As-Cを少量含む。
7. 黒色土 As-Cごく少量含む。黄灰色砂質土を少量含む。
8. 黒色土 As-Cを少量含む。

第37図 1区 36号・39号・40号土坑

1区40号土坑(付図2 第37図 PL17)

位置 1区3-72-B-17G

重複 22号溝に後出する。

形状 楕円形

規模 長軸1.21m 短軸0.90m 残存壁高0.52m

長軸方位 N-46°-W

断面形 箱形

埋没土 白色軽石・浅間C軽石を少量含む黒色土で埋まっていた。

底面 北東部に凹凸がある。

遺物と出土状況 遺物が3点出土しているが、所在不明で詳細を報告することができなかった。

所見 出土遺物が不明なため、時期を特定することが難しいが、埋没土の共通性から古墳時代前期の遺構と推定される。

(6) 竪穴住居

1区27号住居(付図2 第38~40図 PL18・19・144 遺物観察表P.482)

位置 1区3-82-B・C-2・3G

形状 西側は発掘区域外で全形を調査することができなかった。隅丸正方形と推定される。

規模 長軸6.18m 短軸(6.06m)

残存壁高 0.65m

床面積 計測不能 長軸方位 N-3°-E

埋没土 浅間C軽石・黄褐色土粒を含む黒色土・暗黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央北寄り、支柱穴P1の南西側に炉が検出された。炉は長径1.98m、短径1.76mの円形に近い楕円形に2cmほど窪んでおり、厚さ0.10mの焼土が形成されていた。焼土の周囲には比熱が少なかったために灰白色粘土が残存しているところもある。焼土下層の土層観察から、炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.18m掘り込み、黄褐色土を埋填し、灰白色粘土を周囲がやや高くなるように置いて作られていると推定される。焼土上面には土師器壺・甕の胴部破片が7点出土したが、炉の使用状態を示すような状況ではなかった。

支柱穴 P1・P2を床面で検出した。4本支柱穴と見られるが検出されたP1・P2は東側の2本である。それぞれの規模(長径×短径×深さ)は、P1が0.78×0.75×0.46m、P2が0.70×0.60×0.37mである。P1・P2ともに床面では不整楕円形で確認したが、掘り方面では整った長方形に掘られていることが判明した。

周溝 周溝は調査できた北-東-南壁沿いでは確認できた。西壁沿いも含めて全周していたと推定される。幅は概ね0.15m、深さは0.02~0.05mである。住居内土坑 2基の住居内土坑を検出した。1号土坑は床面では長径0.8m、短径0.7m、深さ0.38mの楕円形で検出されたが、掘り方面で住居南壁方向に平行な整った隅丸長方形として認識できた。掘り方面での規模は長軸0.80m、短軸0.68m、深さ0.38mである。北西部を上幅0.2m、下幅0.46mのアゼ状の高まりがぐるりと弧状に囲んでいた。土師器壺破片1点、甕破片3点が埋没土中から出土したのみである。

2号土坑はP1-P2間よりやや内側のP1寄りで検出された。長径0.55m、短径0.39m、深さ0.47mの楕円形である。

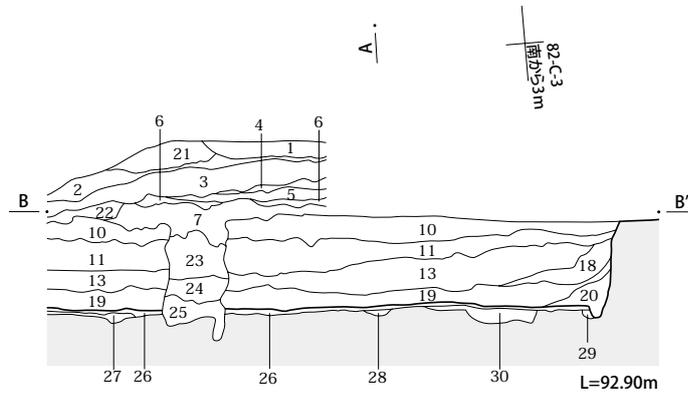
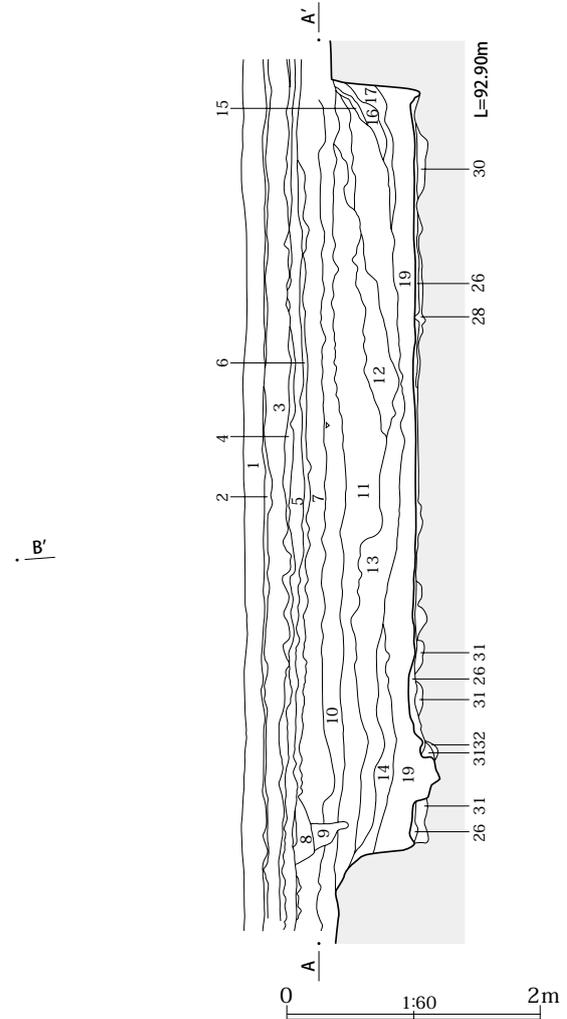
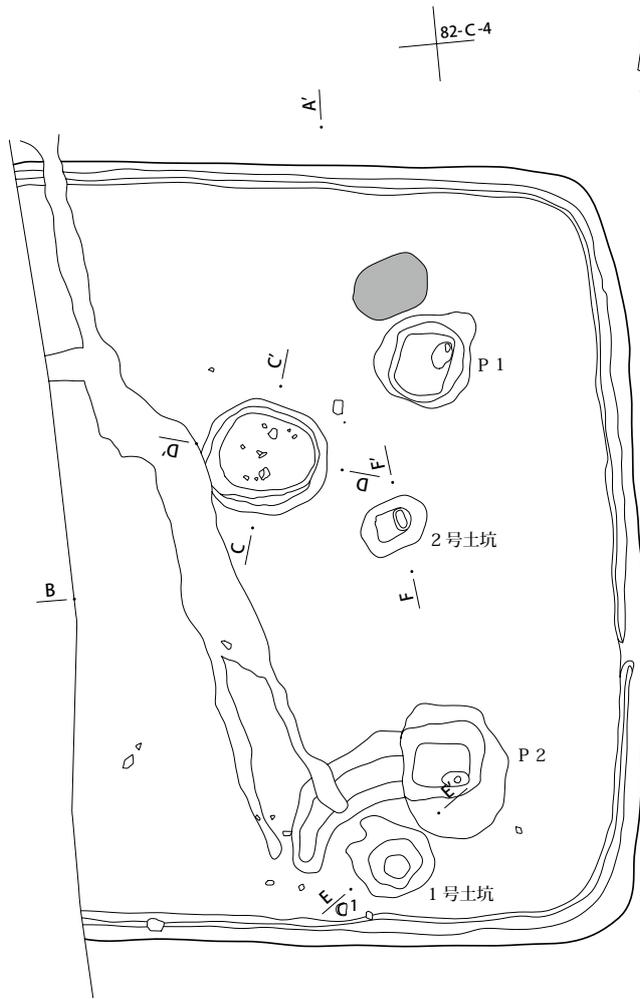
床面 床面は中央部が硬化し、四周が掘り方面を反映してやや下がっていた。北壁から南東隅に向けて、住居に後出する地割れが床面を壊していた。P1北側には粘土塊が床面に出土した。

掘り方 支柱穴の外側を結んだ線の外側の四周が、幅0.6~0.8m、深さ0.02~0.1mの溝状に掘り込まれていた。その外側に周溝が巡る。貯蔵穴と思われる住居内1号土坑と床下で検出された3号土坑はその溝上で検出された。

3号土坑は長軸0.88m、短軸0.60m、掘り方面からの深さ0.38mで、長軸が住居壁に直交する隅丸長方形である。底面下場は北側にある。1号住居内土坑の周囲に巡る高まりのすぐ西側に接した位置になる。

遺物と出土状況 炉および炉周辺と住居内土坑周辺に遺物が出土した。床面直上で出土した遺物は少な

第4章 1区の遺構と遺物



A - A' · B - B'

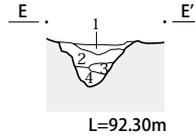
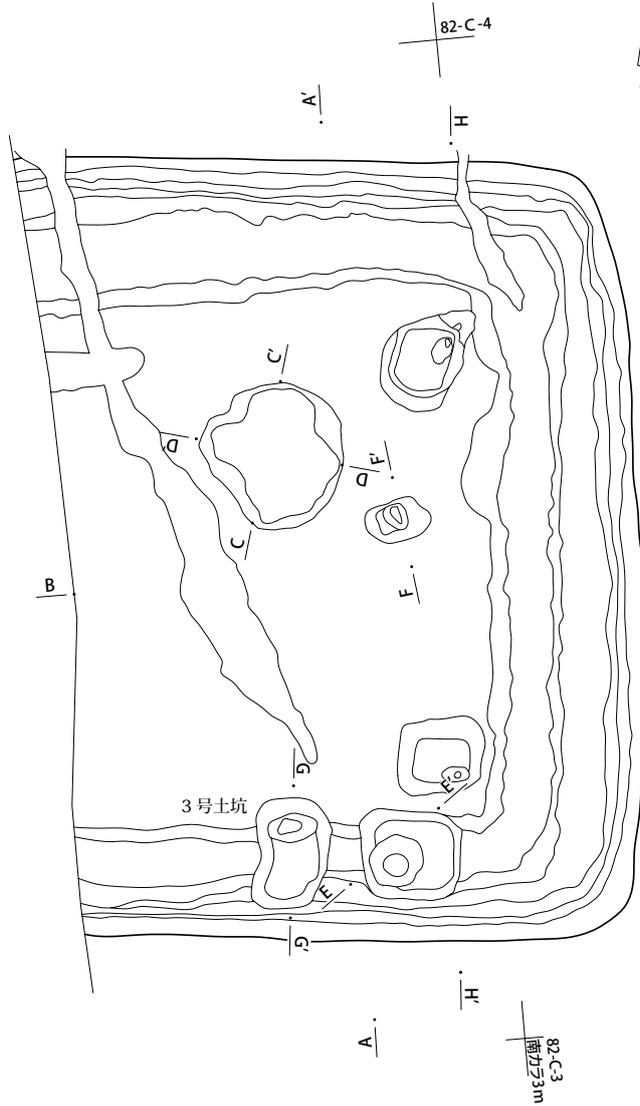
- 12. 黒色砂質土 As-C 及び、直径 3 ~ 7 mm の白色軽石粒を少量含む。やや砂質。
- 13. 暗黄褐色土 As-C を微量、黄褐色土をやや多く含む。
- 14. 暗黒褐色土 As-C を微量、黄褐色土を少量含む。
- 15. 暗黒褐色土 褐色粒を少量、暗黄褐色土を微量含む。
- 16. 暗黄褐色土 基本的には 13 層と同質。暗黄褐色土を少量含む。
- 17. 黒色土 As-C を少量、暗黄褐色土を微量含む。
- 18. 暗黒褐色土 As-C を微量、暗黄褐色土を少量含む。
- 19. 暗黒褐色土 暗黄褐色土塊をやや多く含む。鉄分の凝固が多い。
- 20. 暗黒褐色土 19 層と似ているが、暗黄褐色土塊の混入が認められる。
- 21. 暗褐色土 黄褐色土塊、黒褐色土塊 (As-C 混入) を主体とする攪乱層。
- 22. 明黒褐色土 As-C をやや多く、7 層を塊状に多く含む。攪乱層。

- 1. 暗黒褐色土 1 層と土質は似ているが、灰色シルト、黒褐色粘質土を塊状にやや多く含む。
- 3. 暗黒褐色土 白色粒、小石などを含む。表土。
- 4. 暗褐色土 暗黄褐色土粒を少量。褐色粒を少量含む。
- 5. 明黒褐色土 灰色砂粒を少量含む。土質は 1 層と似ている。
- 6. 横色砂質土 直径 1 mm 大の黄色 ~ 褐色砂粒を主体とした洪水層。
- 7. 暗灰褐色土 直径 1 ~ 3 mm の白色軽石粒をやや多く、As-C を少量含む。4 層下水田の耕土層。しまり良く、硬質。
- 8. 暗黒褐色土 10 mm 前後の小礫を多く含む。攪乱層。
- 9. 黒褐色土 7 層を主体として、8 層が少量混入。攪乱層。
- 10. 暗黒褐色土 直径 1 ~ 3 mm の As-C を多く、直径 2 ~ 5 mm 大の白色軽石粒を少量含む。
- 11. 明黒褐色土 As-C を少量。暗黄褐色土を全体的にやや多く、褐色粒を少量含む。

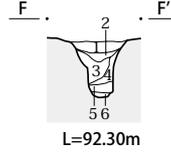
- 23. 明黒褐色土 地割れによる崩落土。土質は 1 層と同一。
- 24. 暗黄褐色土 地割れによる崩落土。土質は 13 層と同一。
- 25. 暗黒褐色土 地割れによる崩落土。土質は 19 層と同一。
- 26. 暗黄褐色土 黄褐色土粒と黒褐色土粒を主体とする。硬質 (貼り床)。
- 27. 暗黄褐色土 土色は 27 層と同じだが、踏み固められておらず軟質。
- 28. 灰褐色土 黄褐色土を全体的に少量含む。やや砂質。
- 29. 灰褐色土 黄褐色土を全体的に少量含む。やや砂質。
- 30. 暗黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。しまり良く、やや粘質。
- 31. 黒褐色土 硬質な黄褐色土塊を多く含む。やや粘質。
- 32. 暗褐色土 やや硬質な黄褐色土塊と暗褐色粘質土塊を主体とする。

第 38 図 1 区 27 号住居 (1)

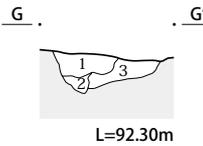
3. 1区微高地部の遺構と遺物



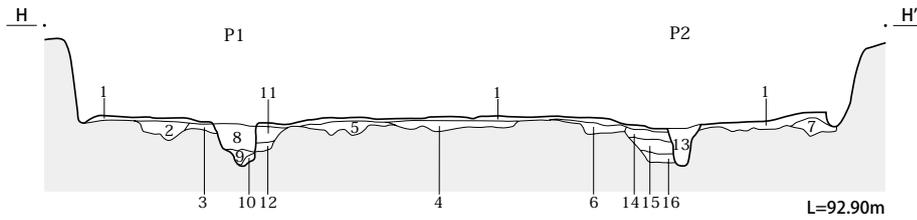
- 1号土坑 E - E'
1. 黒褐色土 直径1～7mmほどの黄褐色土塊をやや多く含む。
 2. 黒褐色土 1層と似ているが、黄褐色土塊の混入が少量。やや粘質。
 3. 暗褐色土 黄色、灰色粘質土塊を少量含む。粘性有り。
 4. 暗黄褐色土 黄色、灰色粘質土塊を多く含み、粘性強い。



- 2号土坑 F - F'
1. 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。やや粘性有り。
 2. 黒褐色土 黄褐色土粒を少量、黒色土を微量含む。炭化物、土器を包含する。粘性強い。
 3. 暗褐色粘質土 黄褐色土粒を少量含む。しまり良く、粘性やや有り。
 4. 黄褐色土 黄褐色土を主体とする層。軟質。
 5. 黒褐色土 黄褐色土塊をやや多く含む。やや粘質。
 6. 暗褐色土 暗褐色粘質土を主体として黄褐色土塊を多く含む。粘性強い。



- 3号土坑 G - G'
1. 黒灰色粘質土 黄褐色粘質土塊、白灰色粘質土塊を多く含む。粘質。
 2. 黒灰色粘質土 黄褐色粘質土塊、白灰色粘質土塊を少量、軟質な黒色土を少量含む。
 3. 灰褐色粘質土 黄褐色粘質土塊、白灰色粘質土塊を少量含む。やや粘質。



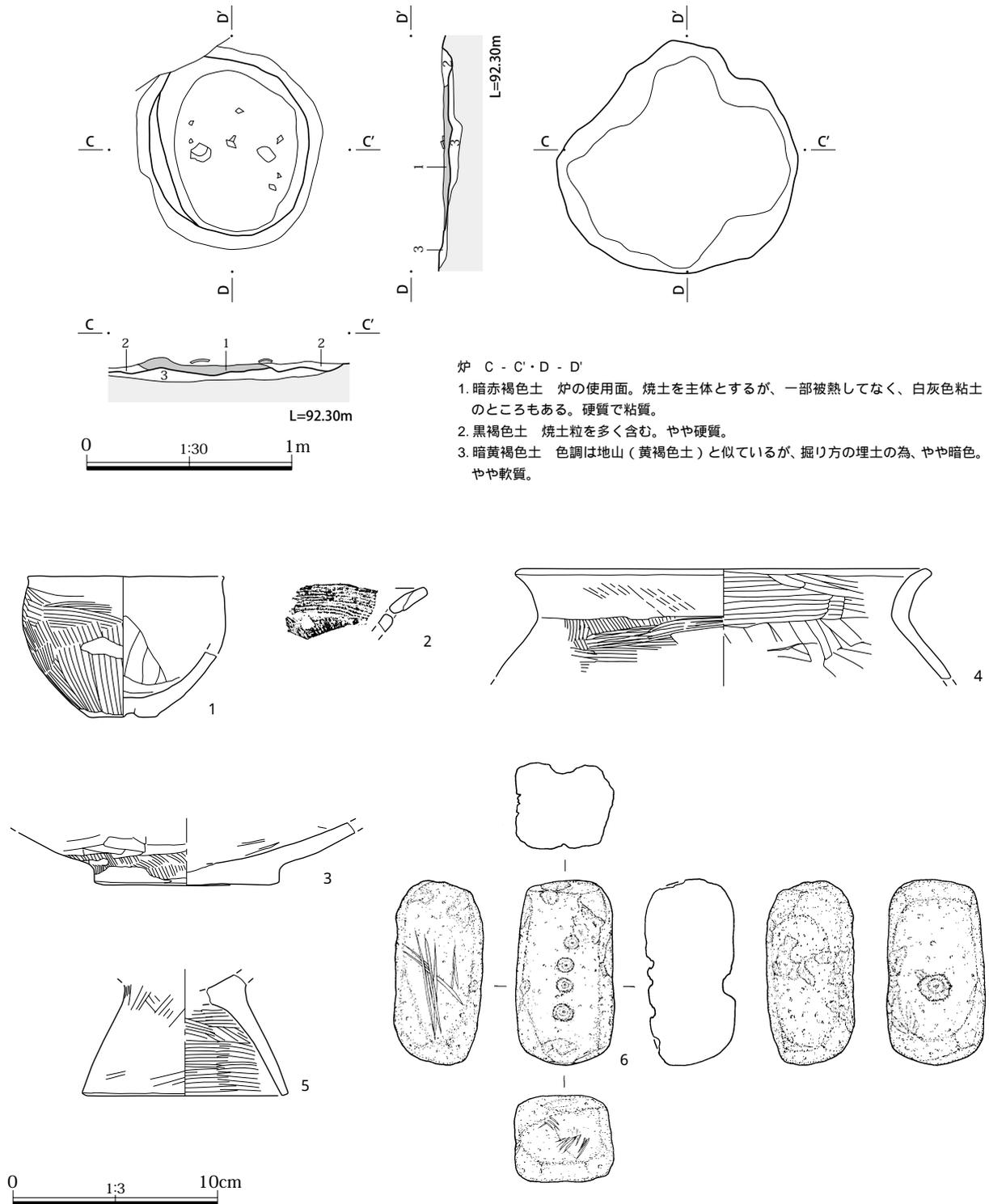
- H - H'
1. 暗黄褐色土 黄褐色土粒と黒褐色土粒を主体とする。硬質(床面)
 2. 暗黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。しまり良く、やや粘質(掘り方で確認された溝状のフク土)
 3. 暗黄褐色土 暗褐色粘質土塊を少量含む。やや粘質。
 4. 黒褐色土 黄褐色土を少量含む。
 5. 灰褐色土 黄褐色土を全体的に少量含む。やや砂質。
 6. 黒褐色土 黄褐色土を少量含む。
 7. 黒褐色土 硬質な黄褐色土塊を多く含む。やや粘質。
 8. 暗黒褐色土 黄褐色土塊を少量含む。軟質。
 9. 暗黒褐色土 8層に暗褐色粘質土塊を少量含む。
 10. 暗黄褐色土 暗黄褐色土中に暗褐色粘質土塊を多く含む。粘質。
 11. 明黒褐色土 黄褐色土を多く含む。しまり良い。
 12. 黒褐色土 黄褐色土粒を全体的に少量含む。
 13. 暗黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。やや軟質(柱痕)
 14. 黒褐色土 微細な黄褐色土粒を多く含む。ややしまり良い。
 15. 黒褐色土 直径10mm大の黄褐色土塊を多く含む。しまり良い。
 16. 黄褐色土 暗褐色粘質土を多く含む。粘質。

第39図 1区27号住居(2)

第4章 1区の遺構と遺物

い。図示した土師器鉢(第40図1)は貯蔵穴南側の床面直上で出土した。その他の2~6は埋没土中から出土した。ここで図示した遺物の他、縄文土器破片1点、土師器破片180点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。掘り方で検出された3号土坑の底面は、下場が北側=住居内側に偏っており、階段状の施設を想起させる。入り口に関連する遺構の可能性はある。



炉 C - C'・D - D'
 1. 暗赤褐色土 炉の使用面。焼土を主体とするが、一部被熱してなく、白灰色粘土のところもある。硬質で粘質。
 2. 黒褐色土 焼土粒を多く含む。やや硬質。
 3. 暗黄褐色土 色調は地山(黄褐色土)と似ているが、掘り方の埋土の為、やや暗色。やや軟質。

第40図 1区27号住居炉と出土遺物

1区28号住居(付図2 第41~43図 PL20・21
・145 遺物観察表P.482・483)

位置 1区3-82-B・C-4・5G

形状 隅丸長方形

規模 長軸 5.22m 短軸 4.62m

残存壁高 0.35m

床面積 15.84m²

長軸方位 N-12°-W

埋没土 浅間C軽石・黄褐色土粒を含む暗黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや南寄りに1号炉、西寄りに2号炉の2基の炉が床面で検出された。

1号炉は長径0.77m、短径0.55mの楕円形に1.5cmほど窪んでおり、厚さ0.04mの焼土が形成されていた。焼土上面は固く硬化していた。焼土下層の土層から、炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.07m掘り込み、暗褐色土を埋填して周囲をやや高くして火床面をつくっていると推定される。

南側で少量の土師器破片が出土した。

2号炉は東半分が地割れによって壊されていたが、長径0.60m、短径0.32m以上の不整形と推定される。厚さ0.04mの焼土が形成されていた。焼土下層の土層から、炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.08m掘り込み、暗褐色土を埋填して火床面をつくっていると推定される。2号炉の焼土上面および西側で土師器破片が多く出土した。

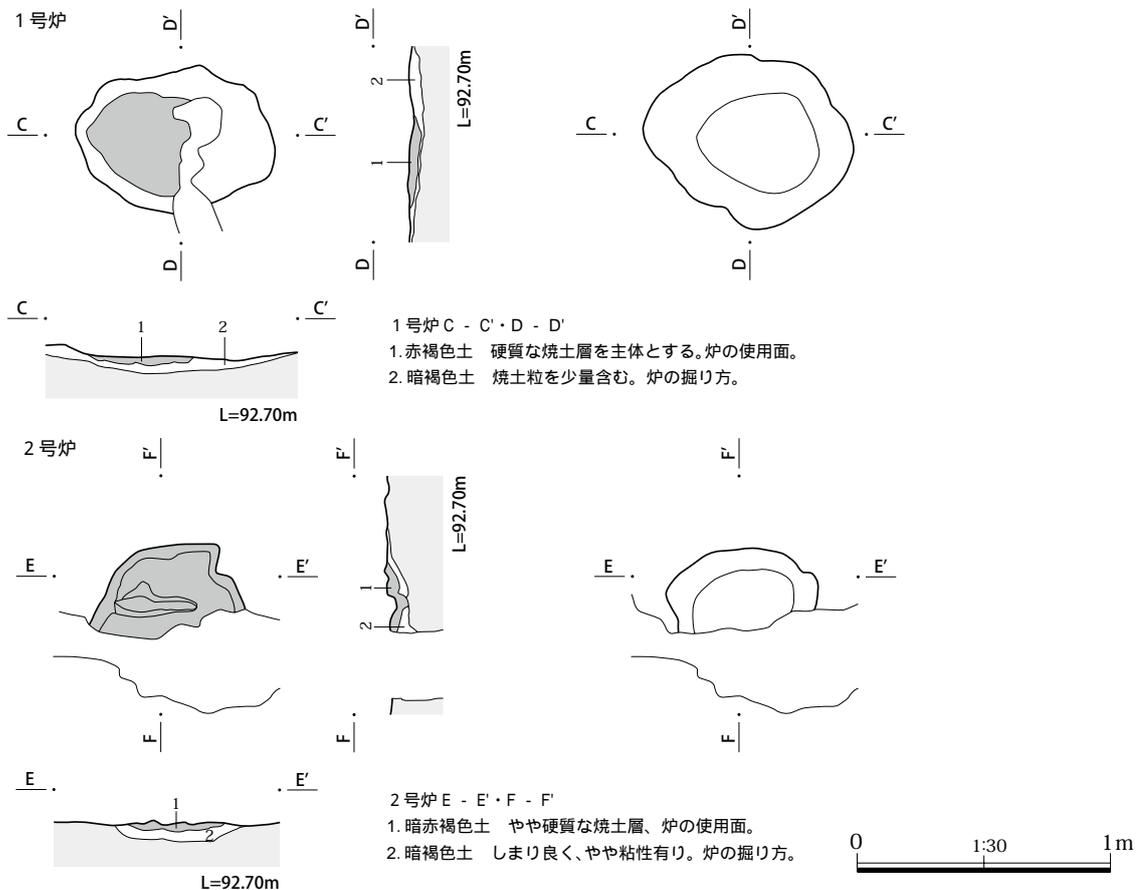
柱穴 柱穴は検出できなかった。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面では土坑は検出されなかった。

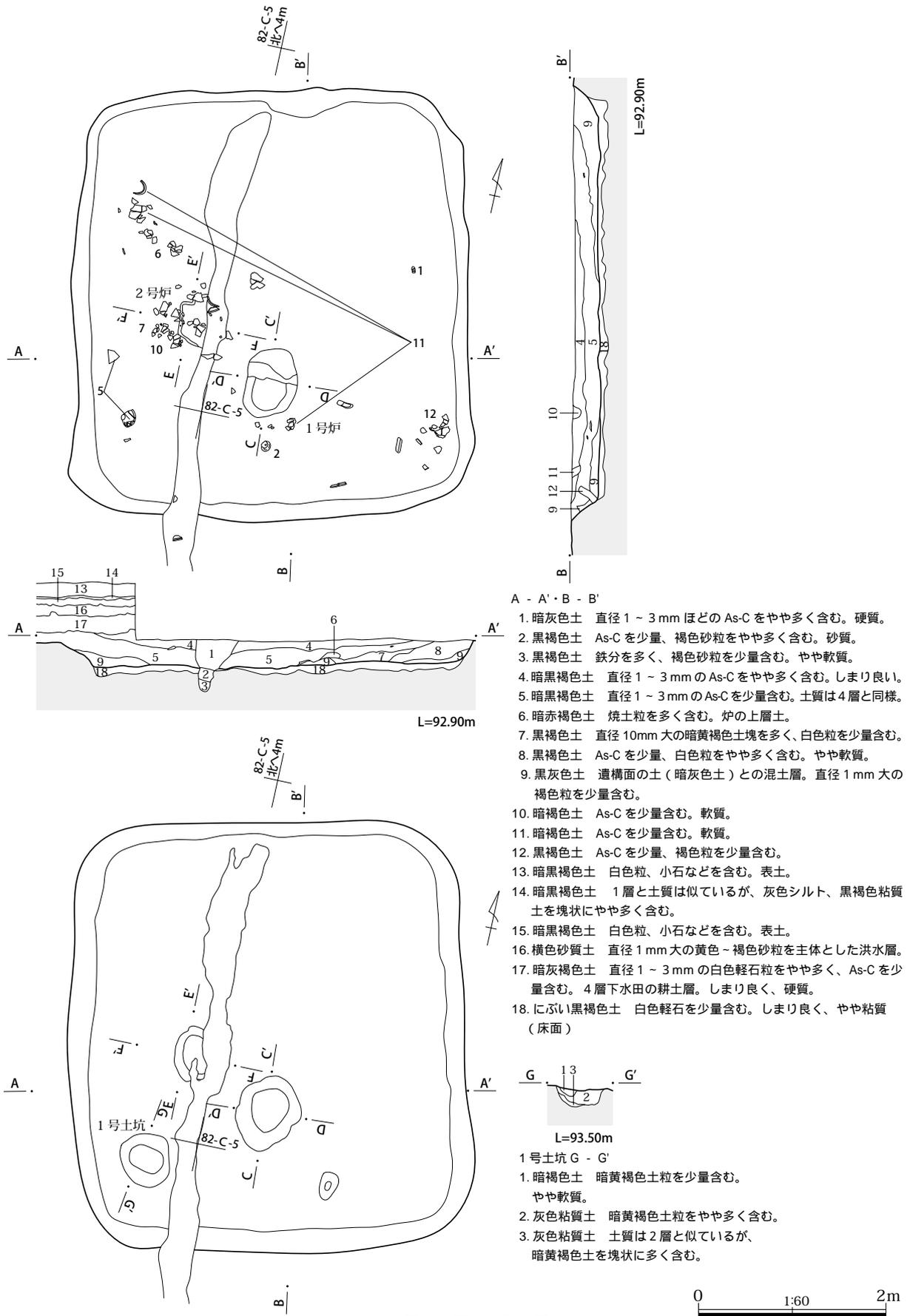
床面 床面は平坦で中央部がやや硬化していた。北壁から南壁に向けて、住居に後出する地割れが床面を壊していた。

掘り方 底面はやや四周の壁沿いが深くなっている傾向があった。南西隅で1号土坑を検出した。1号土坑は長径0.60m、短径0.58m、深さ0.27mの楕円形である。



第41図 1区28号住居炉

第4章 1区の遺構と遺物



A - A' · B - B'

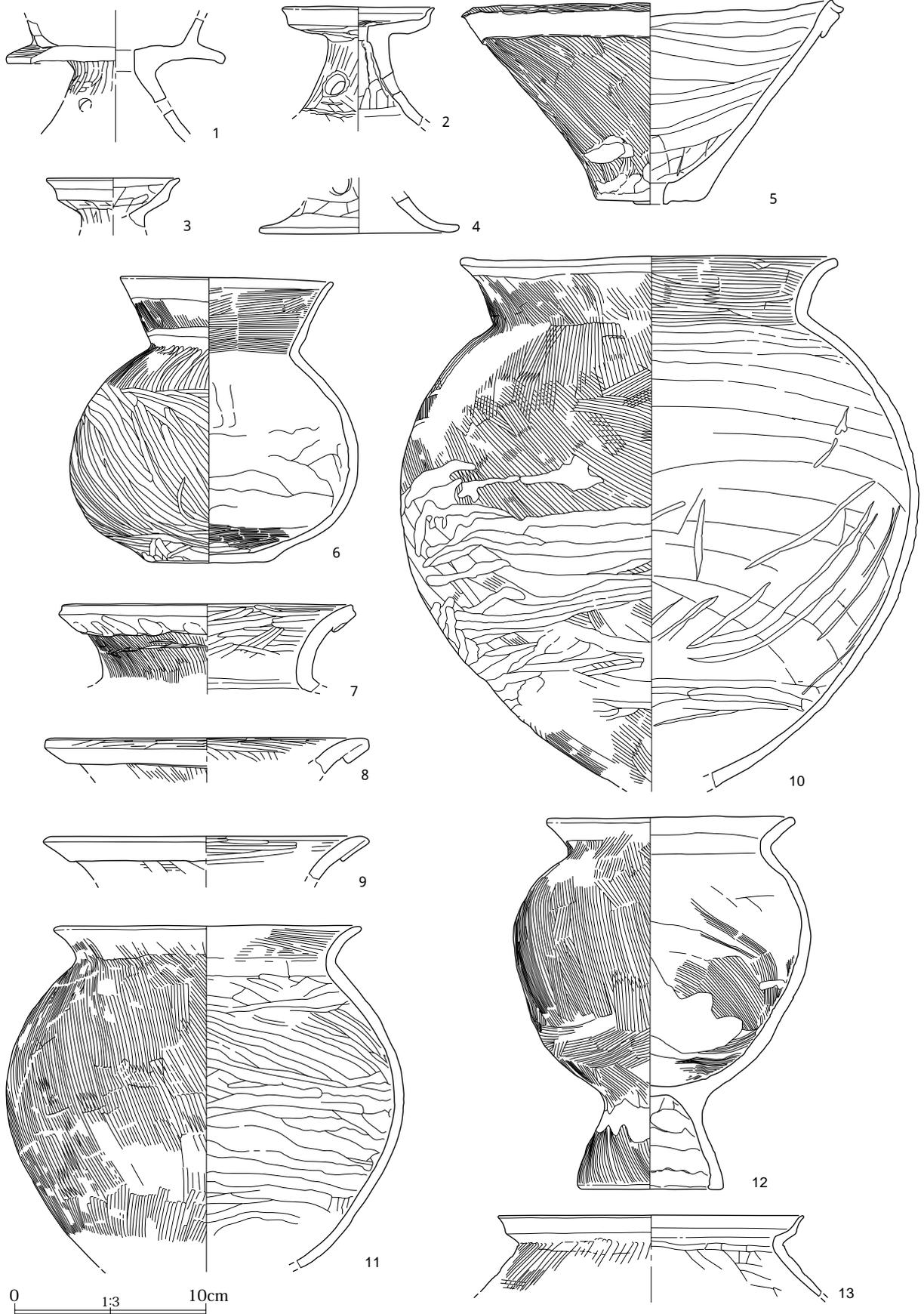
1. 暗灰色土 直径1～3mmほどのAs-Cをやや多く含む。硬質。
2. 黒褐色土 As-Cを少量、褐色砂粒をやや多く含む。砂質。
3. 黒褐色土 鉄分を多く、褐色砂粒を少量含む。やや軟質。
4. 暗黒褐色土 直径1～3mmのAs-Cをやや多く含む。しまり良い。
5. 暗黒褐色土 直径1～3mmのAs-Cを少量含む。土質は4層と同様。
6. 暗赤褐色土 焼土粒を多く含む。炉の上層土。
7. 黒褐色土 直径10mm大の暗黄褐色土塊を多く、白色粒を少量含む。
8. 黒褐色土 As-Cを少量、白色粒をやや多く含む。やや軟質。
9. 黒灰色土 遺構面の土(暗灰色土)との混土層。直径1mm大の褐色粒を少量含む。
10. 暗褐色土 As-Cを少量含む。軟質。
11. 暗褐色土 As-Cを少量含む。軟質。
12. 黒褐色土 As-Cを少量、褐色粒を少量含む。
13. 暗黒褐色土 白色粒、小石などを含む。表土。
14. 暗黒褐色土 1層と土質は似ているが、灰色シルト、黒褐色粘質土を塊状にやや多く含む。
15. 暗黒褐色土 白色粒、小石などを含む。表土。
16. 横色砂質土 直径1mm大の黄色～褐色砂粒を主体とした洪水層。
17. 暗灰褐色土 直径1～3mmの白色軽石粒をやや多く、As-Cを少量含む。4層下水田の耕土層。しまり良く、硬質。
18. にぶい黒褐色土 白色軽石を少量含む。しまり良く、やや粘質(床面)

G - G'

1号土坑 G - G'

1. 暗褐色土 暗黄褐色土粒を少量含む。やや軟質。
2. 灰色粘質土 暗黄褐色土粒をやや多く含む。
3. 灰色粘質土 土質は2層と似ているが、暗黄褐色土を塊状に多く含む。

第42図 1区28号住居



第 43 図 1区 28号住居出土遺物

第4章 1区の遺構と遺物

遺物と出土状況 床面近くから比較的大形の土師器破片が2基の炉の周辺に集中して出土した。土師器小型器台(第43図2)は1号炉南縁床面上3cm、土師器壺(6・7)、甕(10)は2号炉周辺床面直上で出土した。甕(11)は北西部床面上3cm出土の破片と1号炉南縁床面上7cm出土の破片が接合した。また特殊器台(1)は東壁際床面上3cm、台付甕(12)は南東隅床面上6cm、有孔鉢(5)が西壁際床面上3cmで出土した。図示した遺物の他、土師器破片147点、礫片2点、棒状礫2点が出土した。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。床面で2基の焼土面が検出された。同時に2カ所が炉として使用されていたかどうかは不明であるが、いずれも掘り方をもち、上面に厚さ数cmの焼土が形成されていたことから、炉として報告した。

1区29号住居(付図2 第44図 PL21・22・145 遺物観察表P.483)

位置 1区3-82-B・C-5・6G

形状 西側の大部分は発掘区域外であり、東壁沿いの一部しか調査することが出来なかった。全形は不明であるが隅丸方形と推定される。

規模 軸長 計測不能 残存壁高 0.23m

床面積 計測不能 長軸方位 N-20°-E

埋没土 浅間C軽石・褐色土粒を含む暗黒褐色土で埋まっていた。

炉 東壁沿いに炉が検出された。炉は長径0.33m、短径0.24mの楕円形で、厚さ0.02mの焼土が形成されていた。焼土の下層にも比熱が及んでいた。焼土下層の土層から、炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.06m掘り込み、暗褐色土を埋積して作られたと推定される。

柱穴 調査範囲では柱穴は検出されなかった。

周溝 調査範囲では周溝は検出されなかった。

床面 床面は中央部がやや硬化していた。

掘り方 底面は平坦で、壁沿いがやや掘り込まれており、中央部が高くなっていた。

遺物と出土状況 北東隅で土師器高坏(第44図1・

2)が床面上5~10cmで出土した。また北東部床面上5cmで土師器壺(3)が、南西部床面上7cmで鉢(5)が出土した。甕(4)と台付甕(6)は埋没土中から出土した。図示した遺物の他に、土師器破片17点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。調査できなかった部分が多く、情報に乏しいが、南北長3.2m前後の小型住居と推定される。

1区30号住居(付図2 第45図 PL22・145 遺物観察表P.483)

位置 1区3-82-A・B-8G

形状 住居の大部分が発掘区域外で、南東隅を調査できたにとどまった。

規模 軸長 計測不能 残存壁高 0.21m

床面積 計測不能 長軸方位 計測不能

埋没土 浅間C軽石を含む暗黒褐色土で埋まっていた。炉 住居南東部と推定される位置に炉が検出された。炉は長径0.66m以上、短径0.50mの不整楕円形で、厚さ0.04mの焼土が形成されていた。焼土の下層の暗褐色土も比熱を受けていた。焼土下層の土層から、炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.08m掘り込み、明黒褐色土を埋積して作られていると推定される。焼土周辺には土師器破片が4点出土したが、炉の使用状態を示すような状況ではなかった。

柱穴 P1を南壁際で検出した。小型で壁に近い位置に単独であることから主柱穴とは考えにくい。規模(長径×短径×深さ)は0.44×0.41×0.34mで、不整楕円形を呈する。周辺で土師器破片が少量出土した。

周溝 調査範囲では周溝は検出されなかった。

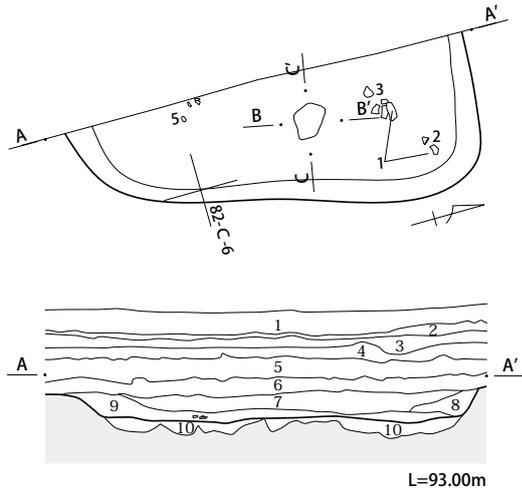
住居内土坑 調査範囲では土坑は検出されなかった。

床面 床面は平坦でやや中央部が硬化していた。

掘り方 底面は平坦で、P1以外の施設は検出されなかった。

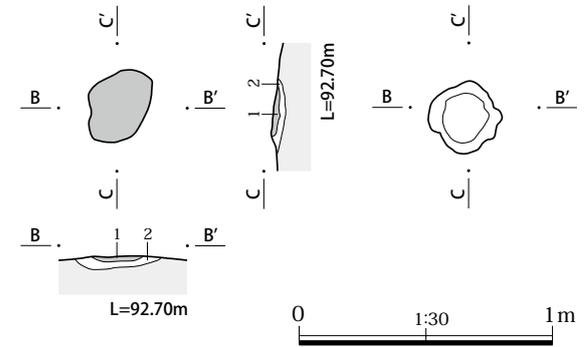
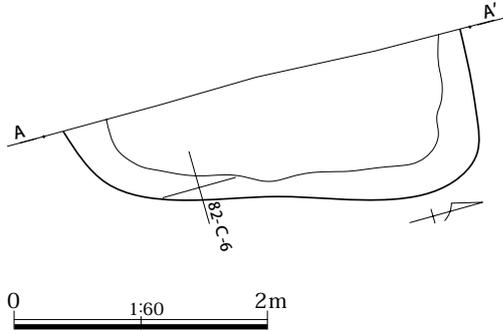
遺物と出土状況 炉北縁焼土上面2cmでS字甕(第45図2)が出土した。小型高坏(1)は埋没土

3. 1区微高地部の遺構と遺物



A - A'

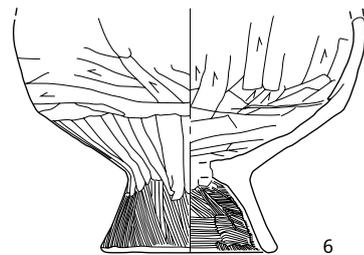
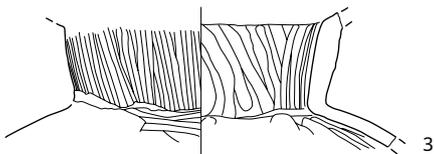
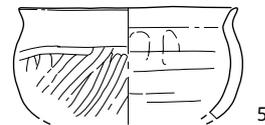
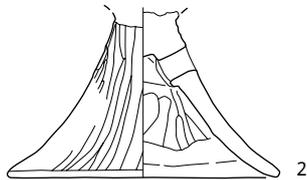
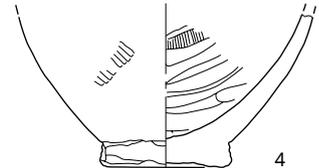
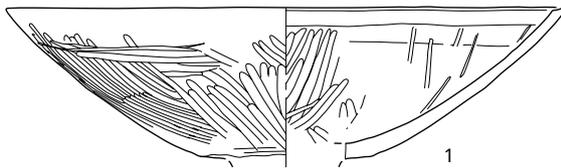
1. 暗黒褐色土 白色粒、小石などを含む。表土。
2. 暗黒褐色土 1層と土質は似ているが、灰色シルト、黒褐色粘質土を塊状にやや多く含む。
3. 暗黒褐色土 白色粒、小石などを含む。表土。
4. 横色砂質土 直径1mm大の黄色～褐色砂粒を主体とした洪水層。
5. 暗灰褐色土 直径1～3mmの白色軽石粒をやや多く、As-Cを少量含む。4層下水田の耕土層。しまり良く、硬質。
6. 暗黒褐色土 直径1～1mm大のAs-Cを多く、直径1～3mmの白色軽石粒を少量含む。やや砂質。
7. 黒褐色土 直径1～3mmのAs-Cをやや多く、褐色砂粒、暗横褐色土を共に少量含む。
8. 黒褐色土 7層に似ているが、As-Cの混入が多い。
9. 暗黒褐色土 As-Cを少量含む。しまりなく、軟質。
10. 暗黒褐色土 上層に比べてAs-Cの混入が微量であり、しまり良い(床面)



0 1:60 2m

炉 B - B' · C - C'

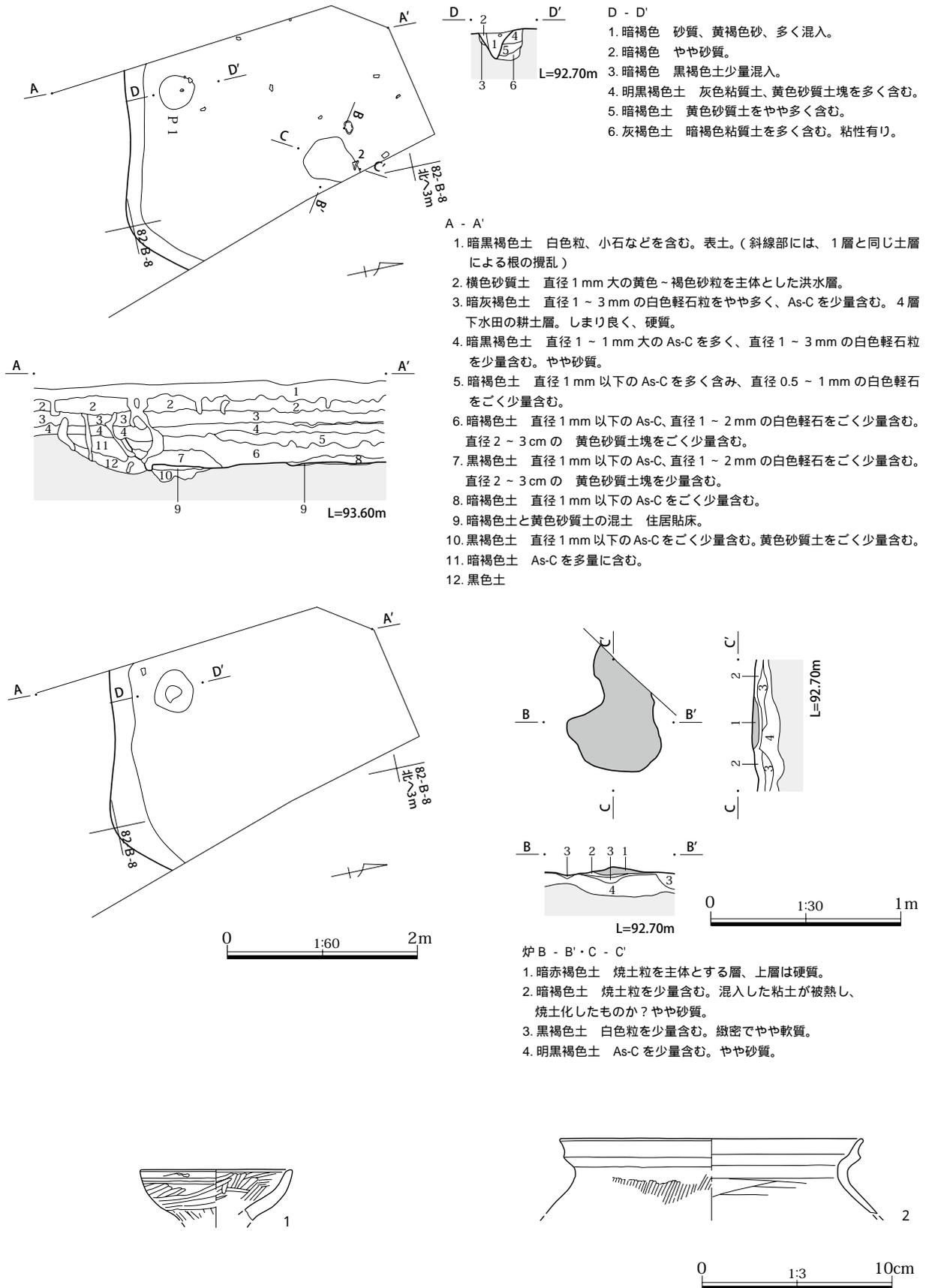
1. 暗赤褐色土 炉の使用面。硬質な焼土層を主体とする。
2. 暗褐色土 しまり良い。全体的にやや被熱している。



0 1:3 10cm

第 44 図 1 区 29 号住居と出土遺物

第4章 1区の遺構と遺物



第45図 1区30号住居と出土遺物

中から出土した。図示した遺物の他に、土師器破片56点が出土した。またP1北西部で縄文時代のものとされる削器(第235図79)が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。調査できなかった部分が多く、情報に乏しいが、住居の方位を復元して考えれば、南壁がN-70°-Wほどであろう。

1区31号住居(付図2 第46~50図 PL23・24・145~147 遺物観察表P.483~485)

位置 1区3-72-C-19・20G

形状 住居の西半が発掘区域外である。隅丸正方形と推定される。

規模 長軸(6.20m) 短軸 6.12m以上

残存壁高 0.62m

面積 計測不能 長軸方位 N-5°-E

埋没土 浅間C軽石・黄褐色土粒を含む暗黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央北寄り、支柱穴P1の南西側に炉が検出された。炉は長径1.79m、短径1.02m楕円形で、0.05mの凹みに粘土を敷き、その中央部の直径0.36mほどの範囲に厚さ0.02mの硬く焼き締まった焼土が形成されていた。焼土の周囲の粘土にも比熱が及んでいた。焼土下層の粘土は掘り方面に直接置かれていた。炉の周囲からは多くの土師器が出土したが、炉の使用状態を示すような状況ではなかった。

柱穴 P1・P2を床面で検出した。これらは4本支柱穴の東側の2本である。規模はP1が、0.86×0.70×0.46m、P2が0.53×0.52×0.39mである。P1・P2ともに形状は不整円形である。

周溝 調査範囲では周溝は検出されなかった。

住居内土坑 2基の住居内土坑を検出した。1号土坑はP2の南側に隣接して検出された。長軸が南壁に平行する隅丸方形で、規模は長軸0.63m、短軸0.52m、深さ0.54mである。西縁に土師器壺(第48図9)が出土している。

2号土坑は炉の長軸を延長した南壁際で検出された。長径0.67m、短径0.52m、深さ0.34mの楕

円形である。前述した1号土坑の西側に並ぶ位置にある。内部から土師器甕(第49図15)が、南縁から砥石(第50図27)が出土した。

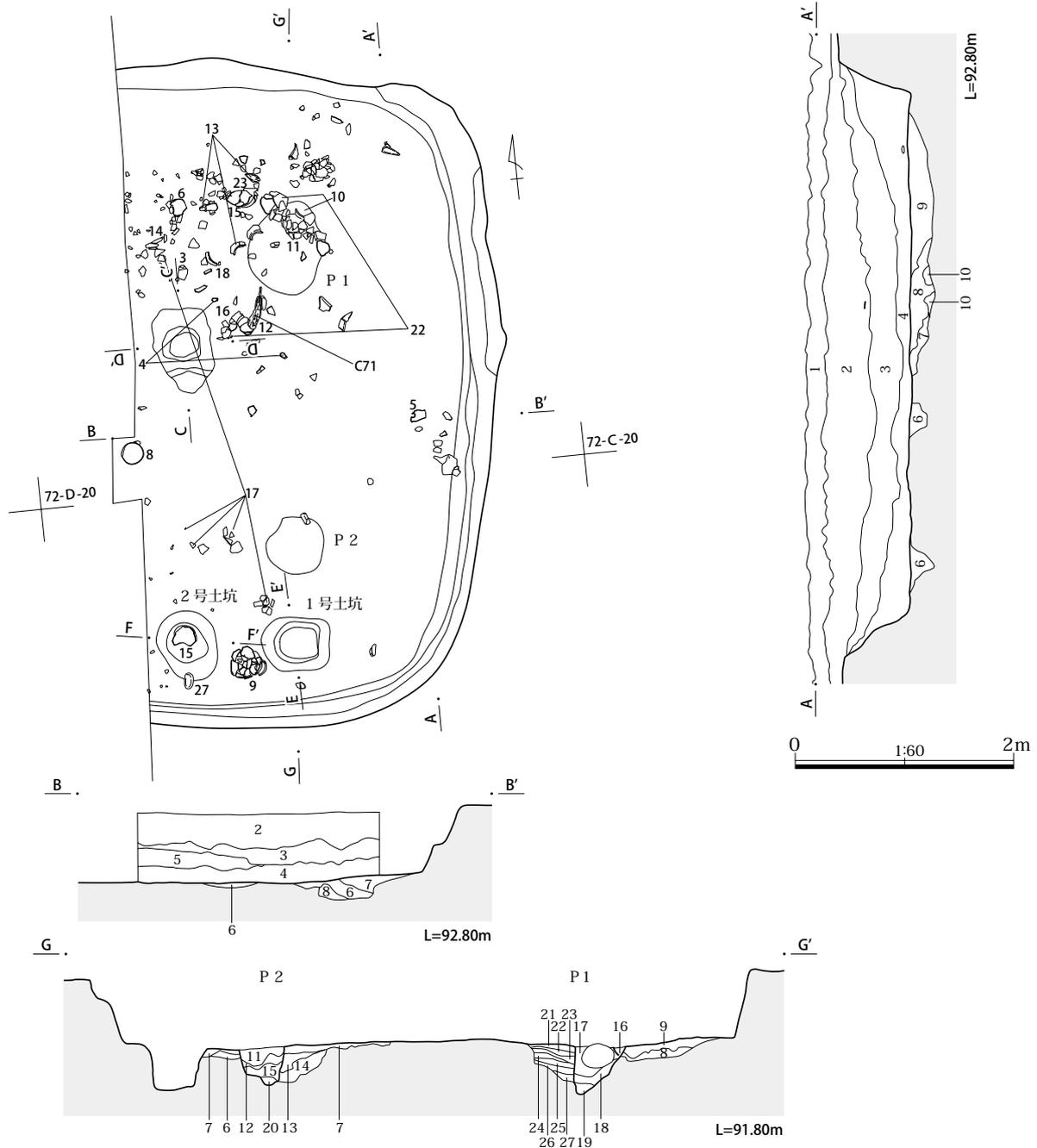
床面 床面は硬化していたが、北半分が特に著しい。四周は深く掘り込まれた掘り方面を反映してやや下がっていた。北壁から南東隅に向けて、住居に後出する地割れが床面を壊していた。P1北側には粘土塊が床面に出土した。

掘り方 四柱穴の外側を結んだ線の外側の四周が、幅0.6~0.8m、深さ0.02~0.1mの溝状に掘り込まれていた。またP2周辺も1.7m×2.0mの範囲が深く掘り込まれていた。P2の北西に隣接してP3が掘り方面で検出された。P3の規模(長径×短径×深さ)は、0.69×0.50×0.37mである。

遺物と出土状況 遺物は住居北東部と南壁際に集中して出土した。土師器小型手捏ね壺(第48図4)は炉北東部の床面上3cmで出土した。炉の周囲からは土師器甕(12・13・14・16・18)等が出土した。壺(10)はP1内からほとんど完形で出土した。また壺(9)は1号土坑と2号土坑の間の床面上3cmで出土した。また接合の歪みが大きく実測できなかったが、もう1個体壺が出土している(PL146)。台付甕(第50図22)は中央部およびP1北東側床面直上の破片が接合した。甕(17)もP2西側床面直上の遺物と中央部の破片が接合した。第50図26の砥石は埋没土中、27の砥石は南壁際床面上6cmで出土した。また北東隅床面上3cmで磨製石斧が出土している(第234図58)。図示した遺物の他、土師器破片285点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。2号土坑は、南壁中央の壁際に掘られており、1区27号住居の斜めに掘られた3号土坑との位置の共通性から考えれば入り口に関連する遺構の可能性はある。本住居と1区27号住居は掘り方の形状や全体の規模が近似しているが、1区27号住居の隅は比較的角張り、本住居は隅が丸く掘られている。このような形態差が何を表すかについては、今後の検討課題である。

第4章 1区の遺構と遺物

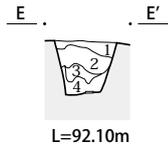
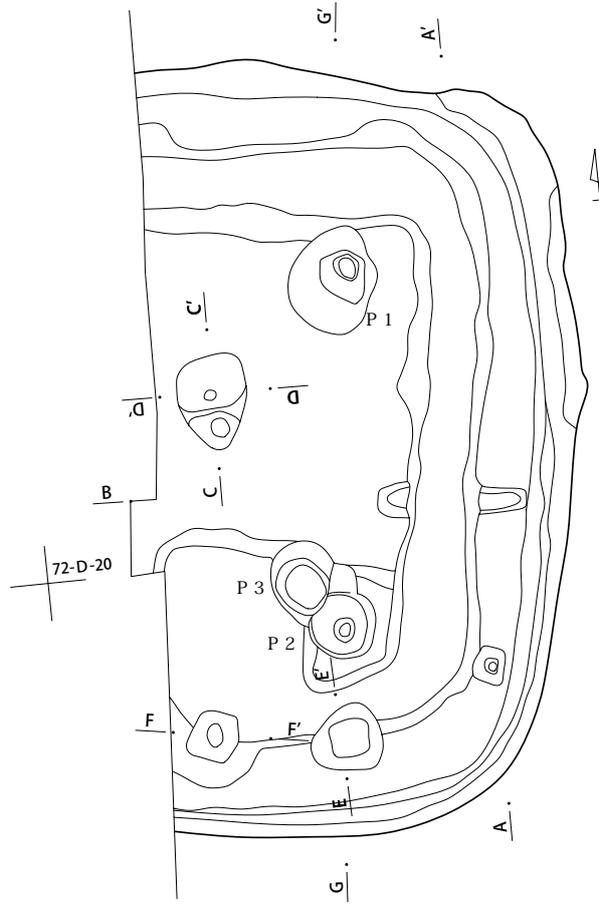


A - A'・B - B'・G - G'

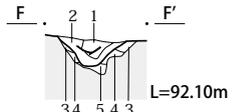
- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 赤黒褐色土 As-Cをやや多く含む。 2. 黒褐色土 As-Cを多く含む。 3. 暗褐色土 As-Cを少量含む。直径1～3cmの黄色砂質土塊をやや多く含む。 4. 黒色土 黄色砂質土粒を少量含む。 5. 黒色土 直径0.5～1cmの黄色砂質土塊を多く含む。 6. 黒褐色土 直径5～7mmの黄色砂質土塊をごく少量含む。 7. 黒褐色土 直径0.5～1cmの黄色砂質土塊を少量含む。 8. 黒褐色土 直径0.5～3cmの黄色砂質土塊を少量含む。 9. 黒褐色土 直径1～3cmの黄色砂質土塊を多く含む。直径0.5～1cmの黒色土塊をごく少量含む。 10. 黄色砂質土塊 11. 暗黒褐色土 灰色シルトを少量含む。しまり悪く、やや軟質。 12. 黒灰色土 灰色シルト、黄褐色土粒を多く含む。 13. 暗灰色土 灰色シルト、黄褐色土粒を主体とする。 | <ol style="list-style-type: none"> 14. 灰色粘質土 地山の塊層。 15. 暗灰色土 13層と同質だが、やや粘質。 16. 黒色土 白色砂粒を少量含む。やや軟質。 17. 黒灰色粘質土 黄褐色土を少量含む。粘質。 18. 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。軟質。 19. 暗黒褐色土 暗褐色粘質土を多く含む。粘質。 20. 黒色土 暗褐色粘質土塊を少量含む。軟質。 21. 黄褐色土 暗褐色粘質土を微量含む。しまり良く、硬質。 22. 暗褐色粘質土 黄褐色土を微量含む。粘質。 23. 黄褐色土 暗褐色粘質土を微量含む。しまり良く、硬質。 24. 暗褐色粘質土 黄褐色土を微量含む。粘質。 25. 黄褐色土 暗褐色粘質土を微量含む。しまり良く、硬質。 26. 暗褐色粘質土 黄褐色土を微量含む。粘質。 27. 黄褐色土 暗褐色粘質土を微量含む。しまり良く、硬質。 |
|--|--|

第46図 1区31号住居(1)

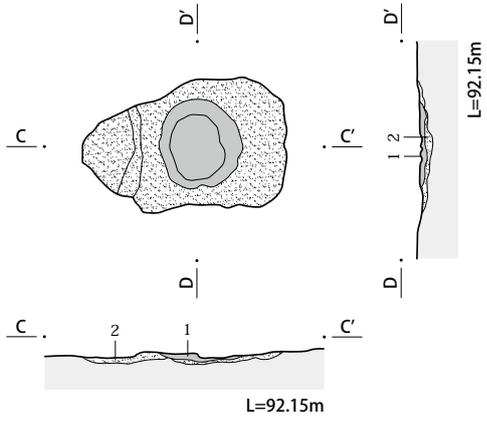
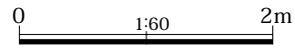
3. 1区微高地部の遺構と遺物



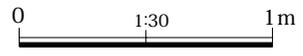
- 1号土坑 E - E'
1. 黒褐色土 黄褐色土粒、白色砂粒を多く含む、しまり良い。
 2. にぶい黒褐色土 白色砂粒を少量含む。灰色シルトを微量含む。やや粘質。
 3. 暗黒褐色土 2層と似ているが、混入が微量。
 4. 暗灰褐色土 掘り方、覆土である暗灰褐色土を主体とし、直径10mm前後の黄褐色土塊をやや多く含む。粘質。



- 2号土坑 F - F'
1. 黒褐色土 直径10mm前後の黄褐色土塊をやや多く、褐色粘質土を少量含む。
 2. 暗黒褐色土 褐色粘質土を少量含む。しまり良く、やや粘質。
 3. 明黒褐色土 黄褐色土粒を多く含む。床面同様。固く踏み締められている。
 4. 暗褐色土 暗褐色粘質土塊。黄褐色土粒を主体とする。やや粘質。
 5. 暗褐色土 4層より黄褐色土粒の混入が少なく、粘性強い。

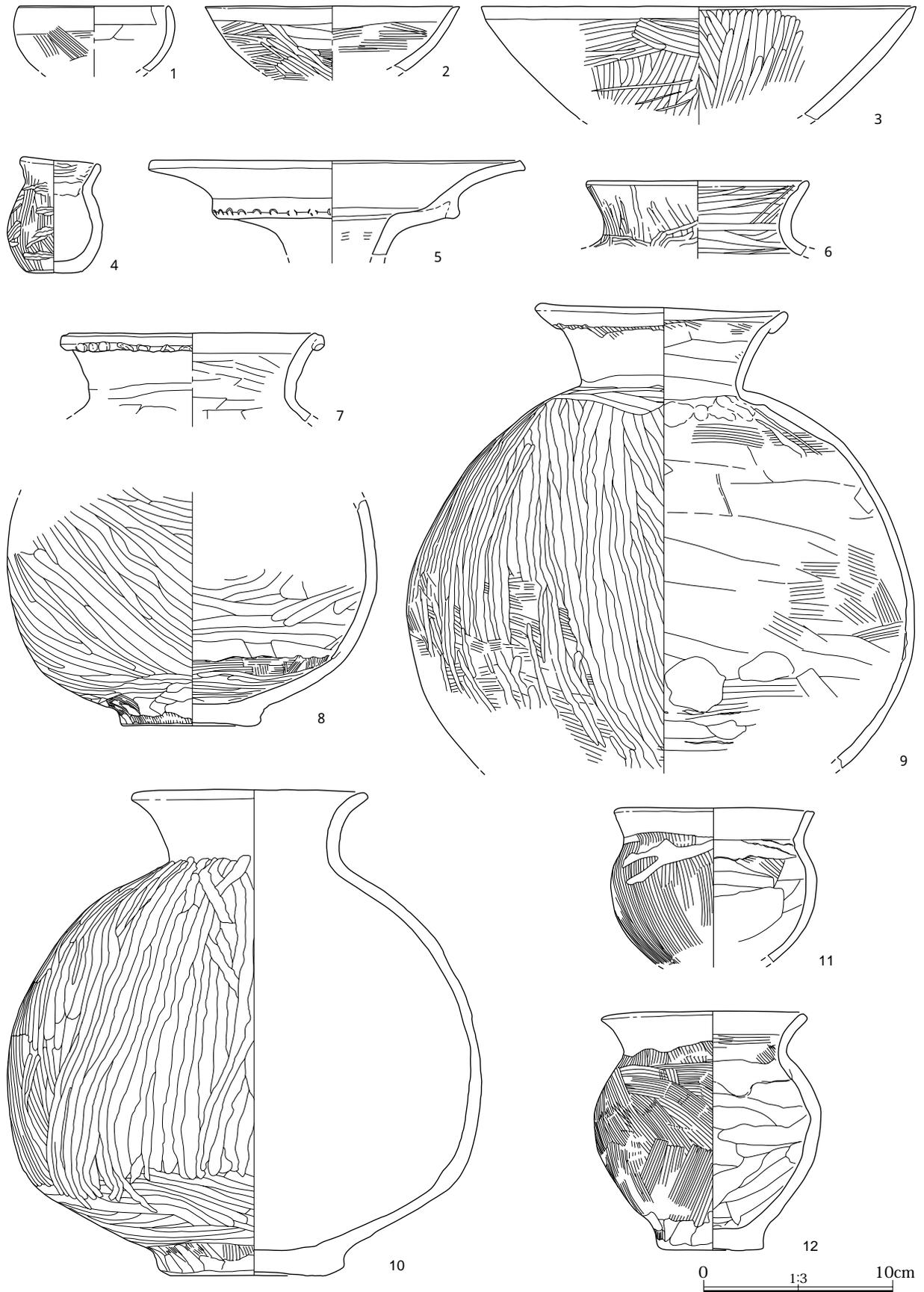


- 炉 C - C'・D - D'
1. 硬質焼土
 2. 被熱粘土

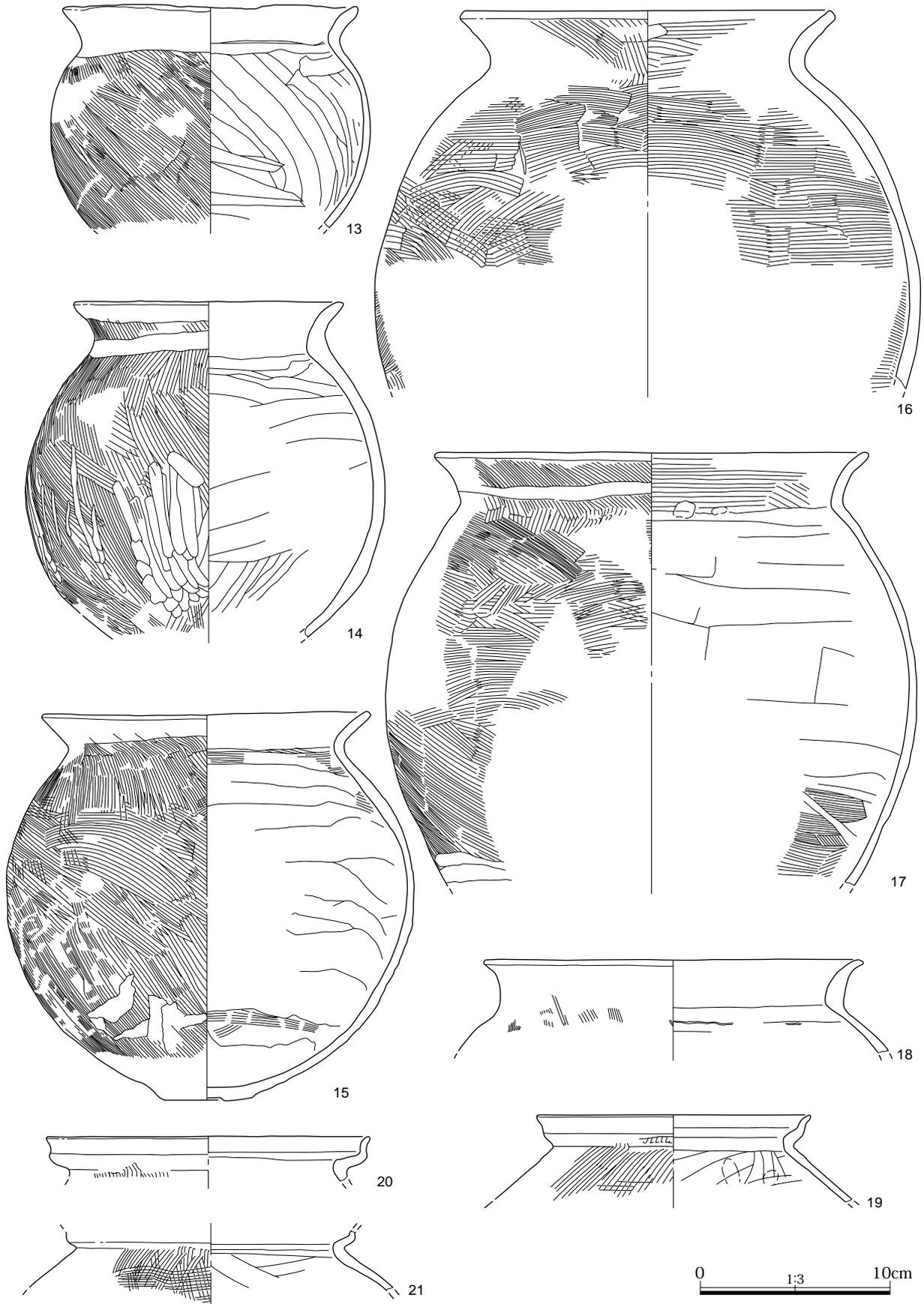


第47図 1区31号住居(2)

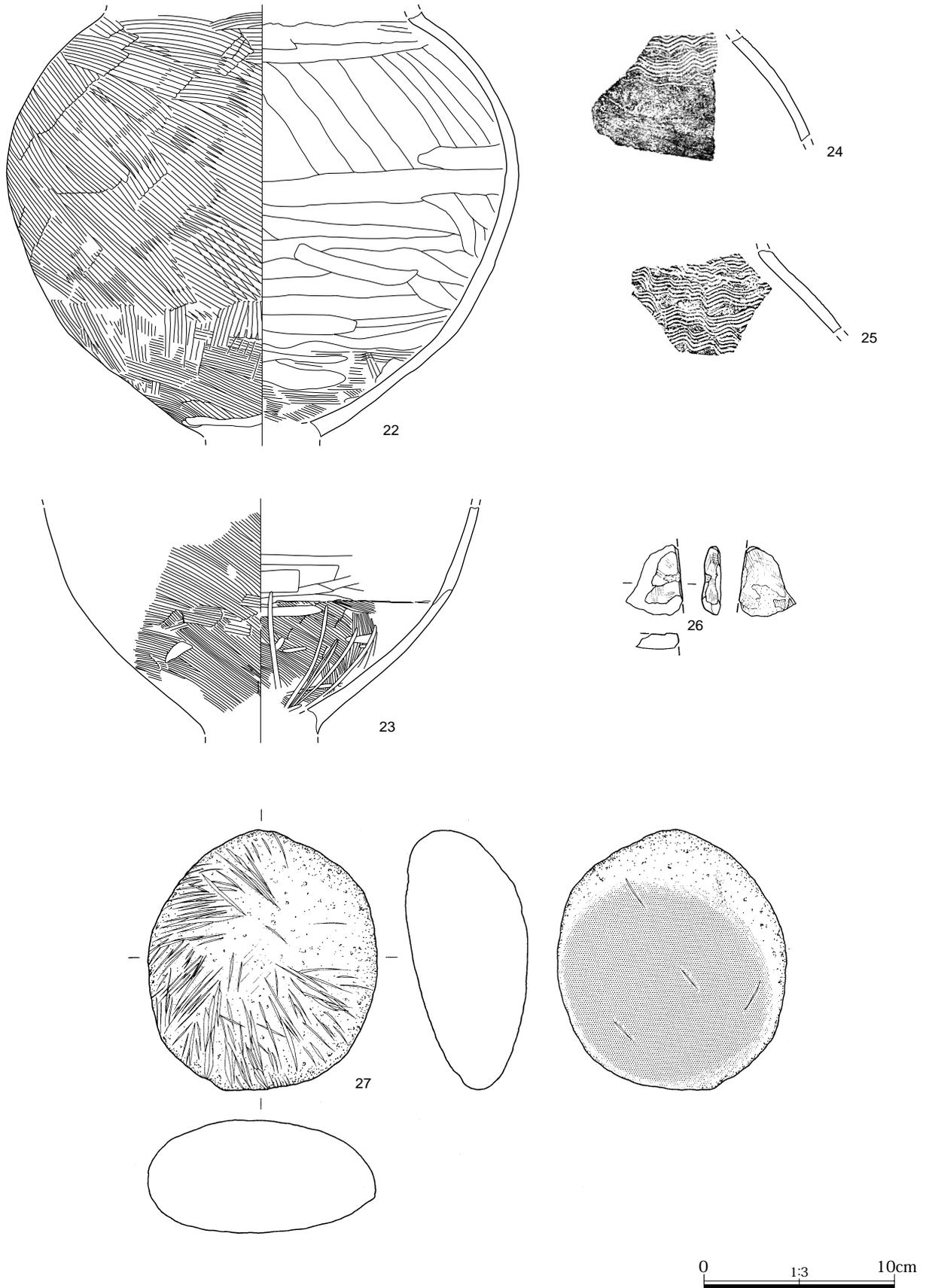
第4章 1区の遺構と遺物



第48図 1区31号住居出土遺物(1)



第49図 1区31号住居出土遺物(2)



第50図 1区31号住居出土遺物(3)

第5章 2・3区の遺構と遺物

1. 概要

(1) 2・3区微高地部(第51図 PL25)

2・3区の微高地部は圃場整備の際に大きく削られており、表土および浅間C軽石混土を除去した黄色砂壤土上面(付図2)まで掘り下げて遺構確認を行い、古墳時代前期以降の井戸10基、土坑27基、復旧溝1カ所、竪穴住居25軒、溝3条、掘立柱建物4棟、畠跡2カ所等を検出した。

また、この遺構確認面では、北西-南東方向あるいは北-南方向の地割れが多数検出された。これらは古墳時代前期の遺構を壊していることから、それ以降の地割れである。地割れの上に構築されている遺構は検出されていないので、時期の下限は不明である。赤城山南面では、818(弘仁九)年に地震があり、山体崩壊があったと言われている。いくつかの遺跡で地割れが検出されて、この地震によるものと推定されている。本遺跡2区微高地部で検出された地割れもその地震によるものと考えられる。

井戸は掘削時期が不明であり、埋没土の特徴や出土遺物の時期から、中世以降のいずれかの時期に掘られたと推定される。土坑も複数の時期に掘られたものが混在するが、古墳時代前期の土坑も含まれている。復旧溝は1区画のみ残存していたが、1区谷部に堆積していた9世紀初頭と推定される第2洪水層と酷似する砂礫で埋填されており、この洪水災害に伴う復旧溝と推定される。

竪穴住居は25軒のうち、24軒は浅間C軽石を多く含む黒色で埋まっており、出土土器から古墳時代前期の遺構と判断できる。唯一15号住居は、埋没土中に榛名二ツ岳火山灰を挟在する住居で、出土土器からも5世紀代と同定される。掘立柱建物4棟は柱間1間の建物で類例の少ない遺構である。これらは竪穴住居より先行する重複状態でみつかり、特筆される。3区北端では細長方形の土坑が

重複する土坑群が検出された。住居とはやや離れた遺構であるが、古墳時代前期の土器が出土した。遺構の性格は不明である。畠跡は浅間C軽石を多く含む黒色土で畝間溝が埋まっているもので、2カ所が散在していた。時期は特定できないが、埋没土は竪穴住居と共通することから古墳時代前期の可能性が高い。

古墳時代遺構の調査が終了したのち、縄文時代遺構確認調査(第167図)をおこなった。特に北部のI・J-17・18グリッドには縄文時代中期土器の集中出土地点があり、遺物分布と遺構の確認をおこなった。

また微高地全体にも5m置きに0.7バックフォアのバケット幅で縄文時代の遺構確認トレンチを入れたが、3基の不定形土坑を検出したにとどまった。

(2) 2・3区低地部(第51図 PL25)

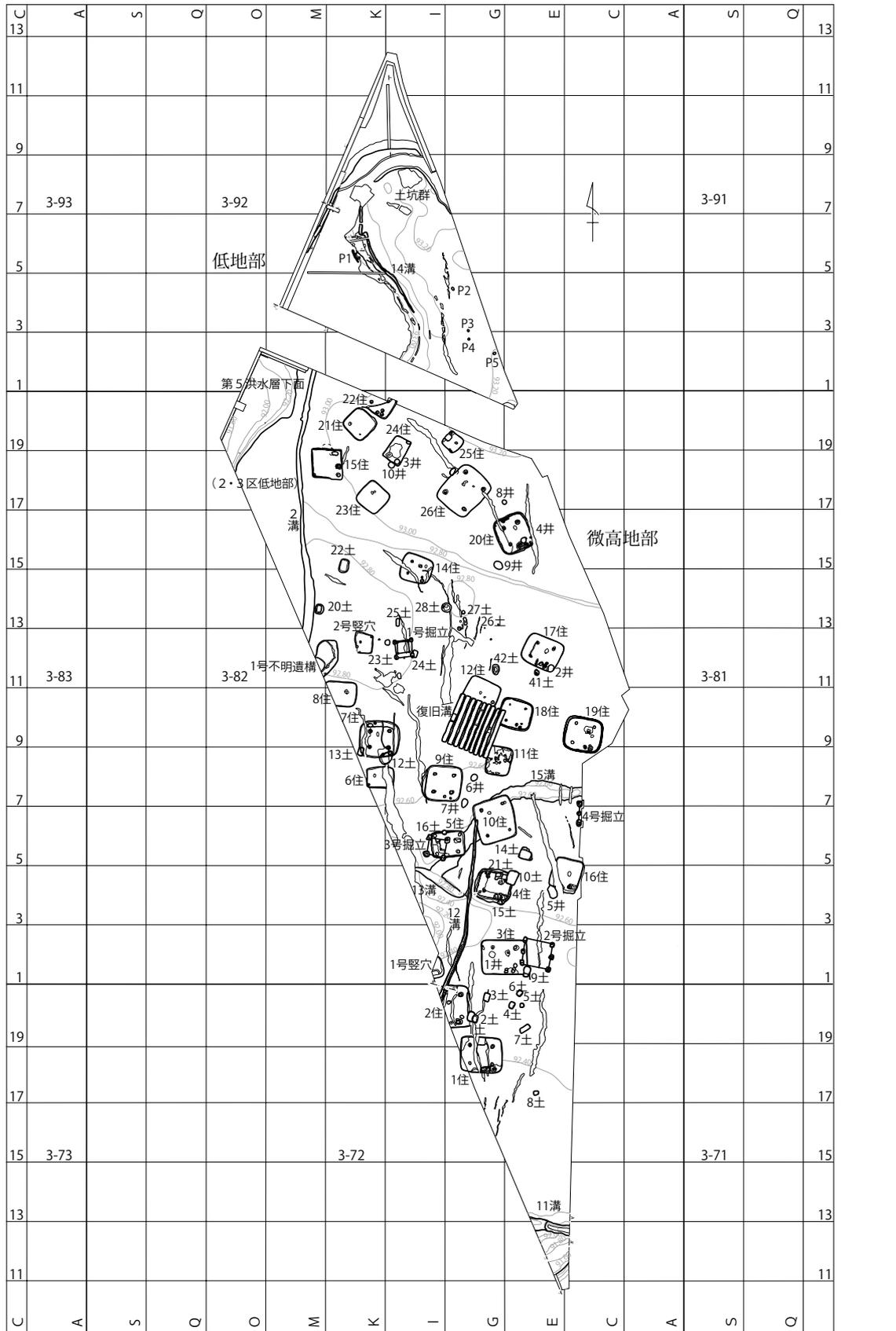
2・3区低地部は既存の道路を間にはさんだ荒砥川沖積地の東縁部分にあたる。

3区の微高地から低地にかけて、表土下面で灰白色砂層を確認し、第1洪水層とした。遺構確認ではさく溝列のような遺構が想定されたが、その後の調査の結果、重機痕跡と判明した。したがって第1洪水層下面の報告は写真(PL99-4)と、低地部共通土層断面図D-D(第168図・20層)のみとした。

第2洪水層下面(第169図)では、6号溝を主要水路とする水田面が検出された。2号~5号溝は6号溝より新しく水田に伴う遺構ではない。6号溝には3カ所の水口も検出され、幅の狭い長方形の水田区画を示すアゼも検出された。

第3洪水層下面(第173図)では、上位の第2洪水層下水田の主要水路(6号溝)に沿った形で検出された9号溝を水路とする水田面を検出した。水口は検出されなかったが、溝西脇にはアゼが付帯していた。水田面にもアゼ状の高まりを検出したが、水

第5章 2・3区の遺構と遺物



第51図 2・3区全体図

田区画としては不明瞭であった。

3区の低地部では、この第3洪水層の下位、浅間粕川テフラの上位で女堀(第225図)を確認した。女堀はこれまで浅間Bテフラより新しいことは調査で判明していたが、明瞭に浅間粕川テフラ層を排土下で確認したのは今回が初例である。浅間粕川テフラ層の降下年代については後でまとめるが、今回の調査で女堀掘削年代をより詳細に検討できる資料を得ることができた。

女堀の掘削排土下面では微高地縁辺に7号溝・8号溝が検出された。一部に平坦面があり、アゼは見つからなかったが、水田面の可能性がある。また低地内は斜面であったが、イネの植物珪酸体は検出されていることから、水田として利用されていた可能性はある。なお、女堀および女堀排土下面については、第7章で報告した。

第4洪水層(第176図)は3区北西部のみで検出された。洪水層直下で、微高地縁辺には畝の畝のような小溝の連続が、低地内には平坦面とアゼ状の高まりが検出された。狭い範囲の調査であったが、水田であった可能性は高いと考えられる。

浅間粕川テフラ層は、下位の浅間Bテフラ(As-B)との間層が1cmと薄く、浅間粕川テフラ自体の層厚も1cm以下であったため、直下面の精査は実施できなかった。

浅間Bテフラは第176図の灰色部分で示したように低地部の一部で検出された。明確なアゼや溝は検出されなかった。直下土層の土壤分析でも植物珪酸体は検出されなかったことから、水田化はされていなかったと推定される。

第5洪水層下面(第178図)は2区北西部の隅で検出された。明確なアゼや溝は検出されなかった。直下土層の土壤分析でも植物珪酸体は検出されなかったことから、水田化はされていなかったと考えられる。

第6洪水層下面(第178図)は2区北西隅と3区南西隅で、第5洪水層の下位で検出された。2区北西隅で検出された小砂礫層は、1区第2洪水層と酷

似しており、同時期の洪水の可能性が高い。洪水層直下ではアゼは検出されなかったが、傾斜に平行する段が確認でき、直下の土壤分析でもイネの植物珪酸体が検出されたことから水田化されていたと判断した。

2.2.3 区微高地部の遺構と遺物

(1) 井戸

2区1号井戸(付図2 第52図 PL26)

位置 2区3-82-G-1・2G

重複 2区3号住居に後出する。形状 楕円形
規模 長軸1.10m 短軸0.87m 残存壁高1.30m

長軸方位 N-38°-W

断面形 上方がラッパ状に開く筒状である。また確認面から0.96m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 上層は浅間C軽石を含む黒褐色土で、中層は小砂利・小石を多量に含む黒褐色土で埋まっていた。下層は不明である。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から礫・礫片が18点出土したのみで、土器は出土しなかった。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区2号井戸(付図2 第52図 PL26)

位置 2区3-82-E-11G

重複 2区17号住居に後出する。

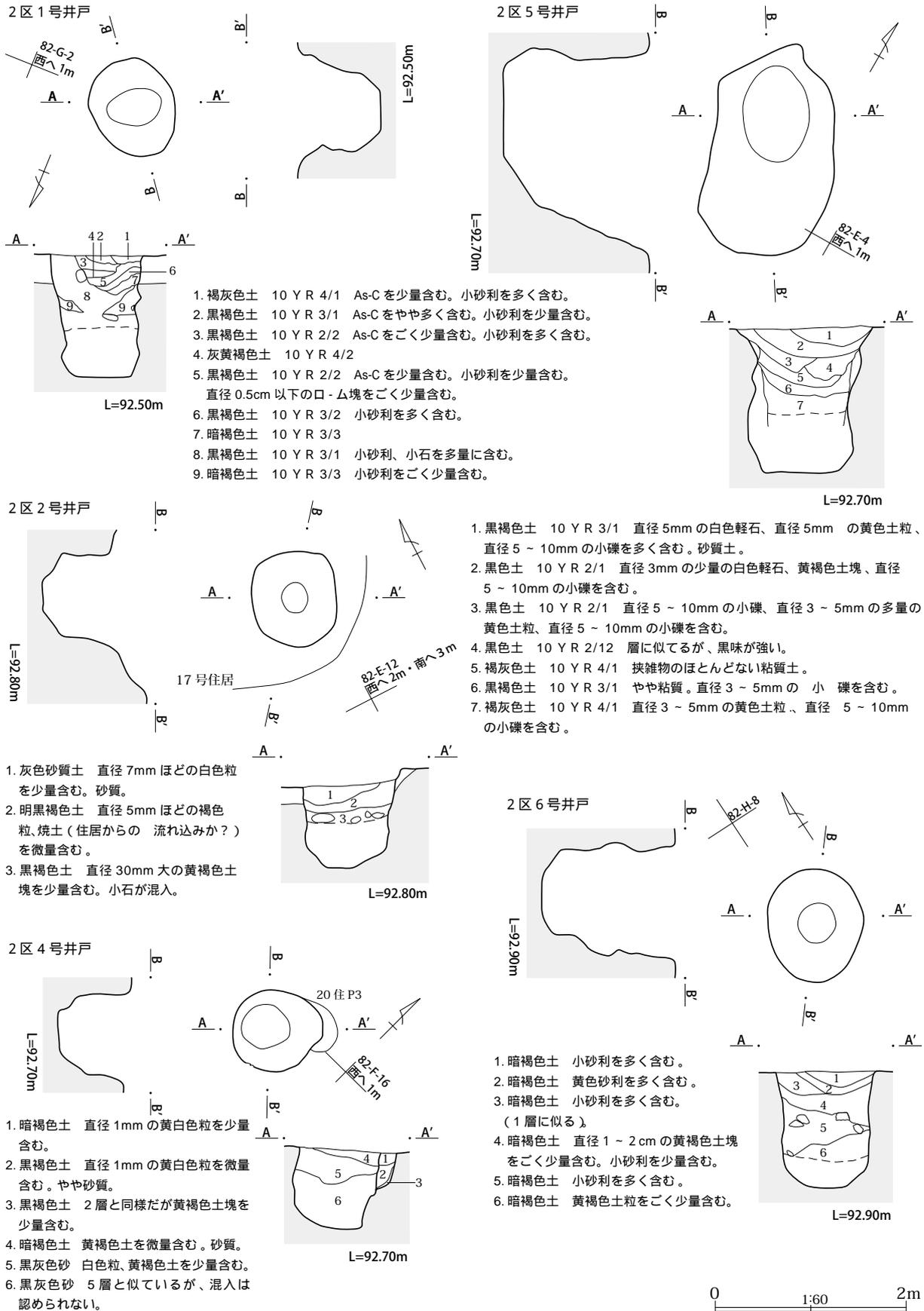
形状 隅丸方形

規模 長軸1.02m 短軸0.88m 残存壁高1.08m
長軸方位 N-26°-E

断面形 ほぼ垂直に掘られた筒状で、底面はボール状になっていた。また確認面から0.50m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 上層は白色粒を含む灰色砂質土で、中層は黄褐色土塊・小石を含む黒褐色土で埋まっていた。大型の礫が中層に堆積していた。下層は不明である。

第5章 2・3区の遺構と遺物



第52図 2区1号・2号・4号・5号・6号井戸

2. 2・3区微高地部の遺構と遺物

底面 ボール状。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片4点、棒状礫・礫片20点が出土した。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区4号井戸(付図2 第52図)

位置 2区3-82-F-15・16G

重複 2区20号住居に後出する。

形状 楕円形

規模 長軸0.93m 短軸0.87m 残存壁高0.75m

長軸方位 N-44°-E

断面形 ほぼ垂直に立ち上がる筒状である。底面近くではやや細くなっていた。

埋没土 上層は黄褐色土粒を含む暗褐色土で、下層は黒灰色砂で埋まっていた。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から円礫が1点出土したのみで、土器は出土しなかった。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区5号井戸(付図2 第52図 PL26)

位置 2区3-82-E-4G

重複 無し 形状 楕円形

規模 長軸2.21m 短軸1.25m 残存壁高1.55m

長軸方位 N-23°-W

断面形 上方がラッパ状に開く筒状である。また確認面から0.50m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 上層は白色軽石・黄褐色土粒を含む黒色土で、中層はやや粘質の黒褐色土で埋まっていた。下層は不明である。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から礫22点が出土したのみで、土器は出土しなかった。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区6号井戸(付図2 第52図 PL26)

位置 2区3-82-G・H-7G

重複 無し

形状 楕円形

規模 長軸1.20m 短軸1.00m 残存壁高1.40m

長軸方位 N-34°-E

断面形 ほぼ垂直に立ち上がる筒状である。また確認面から0.70m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。底面はボール状に丸い。

埋没土 上層は小砂利を含む暗褐色土で、中層は小砂利・小石を多量に含む暗褐色土で、下層は黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

底面 丸いボール状

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区7号井戸(付図2 第53図 PL26・148)

遺物観察表P.485)

位置 2区3-82-H-7G

重複 無し

形状 楕円形

規模 長軸1.48m 短軸0.98m 残存壁高1.48m

長軸方位 N-15°-E

断面形 上方がラッパ状に開く筒状である。特に南側には大きく開いている。また確認面から0.60m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 上層は小砂利を含む暗褐色土で、中層は多量の小砂利と少量の黄褐色土塊を含む暗褐色土で埋まっていた。下層は不明である。

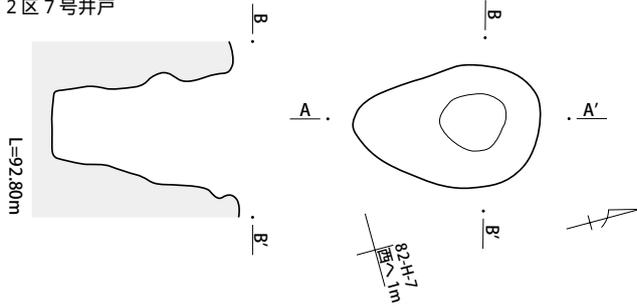
底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から大型で扁平な擦石(第53図7井1)の他、礫8点が出土したのみで、土器は出土しなかった。

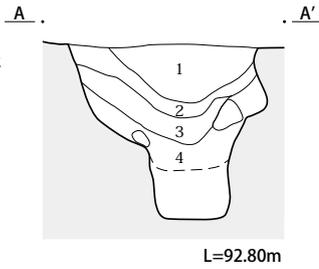
所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

第5章 2・3区の遺構と遺物

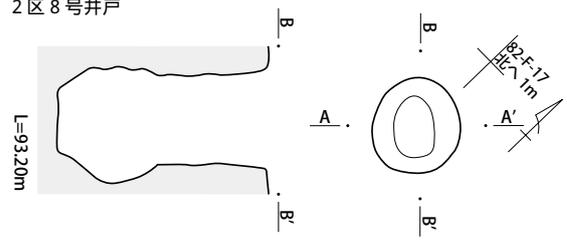
2区7号井戸



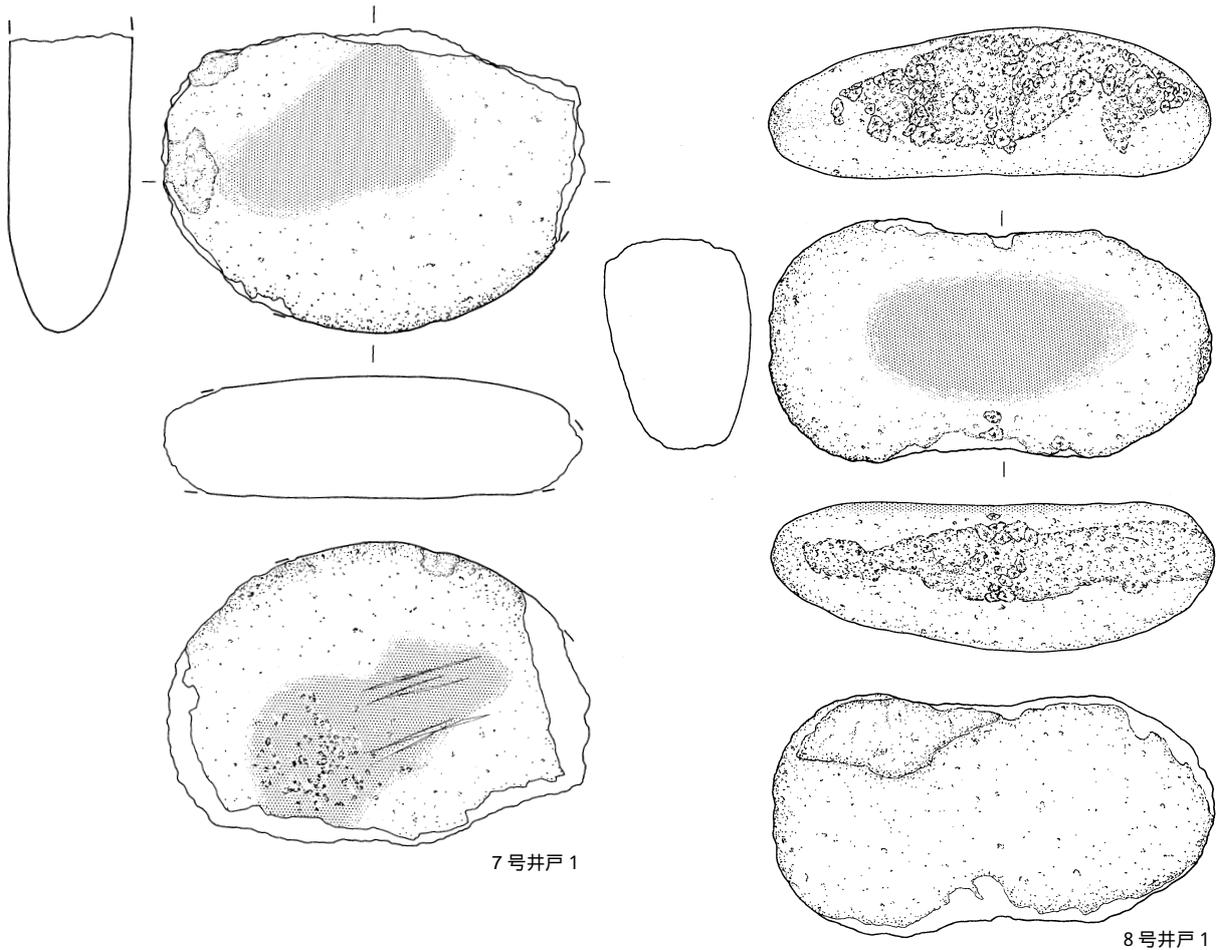
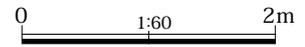
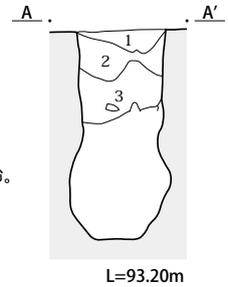
1. 暗褐色土 小砂利を多く含む。
2. 暗褐色土 黄色砂利を多く含む。
3. 暗褐色土 直径1～2cmの黄褐色土塊をごく少量含む。小砂利を少量含む。
4. 暗褐色土 小砂利を多く含む。



2区8号井戸

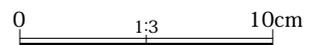


1. 暗褐色土 小砂利を少量含む。
2. 黒褐色土
3. 暗褐色土 黄褐色土粒をごく少量含む。



7号井戸1

8号井戸1



第53図 2区7号・8号井戸と出土遺物

2区8号井戸

(付図2 第53図 PL26・148 遺物観察表P.485)

位置 2区3-82-E・F-16・17G

重複 無し

形状 円形に近い楕円形

規模 長軸0.76m 短軸0.70m 残存壁高1.68m

長軸方位 N-46°-W

断面形 ほぼ垂直に立ち上がる筒状である。また確認面から1.2～1.3m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 上層は小砂利・黄色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。中層・下層は不明である。

底面 ほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から礫・礫片が10点出土したのみで、土器は出土しなかった。礫の中には挟り入り礫(第53図8井1)が含まれていた。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区9号井戸

(付図2 第54図 PL26・148 遺物観察表P.485)

位置 2区3-82-G-14・15G

重複 無し

形状 楕円形

規模 長軸1.55m 短軸1.22m

残存壁高1.84m

長軸方位 N-51°-W

断面形 上方がラッパ状に開く筒状である。また確認面から1.2m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 上層は黒色砂で、中層は黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。下層は不明である。

底面 平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から大型の多孔石(第54図1)の破片が出土した。他に礫が18点出土したが土器は出土しなかった。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区3号井戸(付図2 第55図)

位置 2区3-82-J-18G

重複 2区24号住居に後出する。

形状 円形

規模 長軸0.87m 短軸0.81m

残存壁高1.64m

長軸方位 N-43°-E

断面形 やや中位が膨らんでいる筒状で、底面は平坦である。また確認面から0.50m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

埋没土 上層は浅間C軽石を多く含む黒褐色土で、中層は黄褐色土塊をごく少量含む暗褐色土で埋まっていた。

底面 平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から礫が21点出土したが、土器は出土しなかった。

所見 掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

2区10号井戸

(付図2 第55図 PL26・148 遺物観察表P.485)

位置 2区3-82-J-18G

重複 無し

形状 円形

規模 長軸1.07m 短軸1.03m 残存壁高1.59m

長軸方位 N-89°-E

断面形 ほぼ垂直に立ち上がる筒状である。確認面から0.6m下のところで側方に抉れている。透水層があったものと推定される。

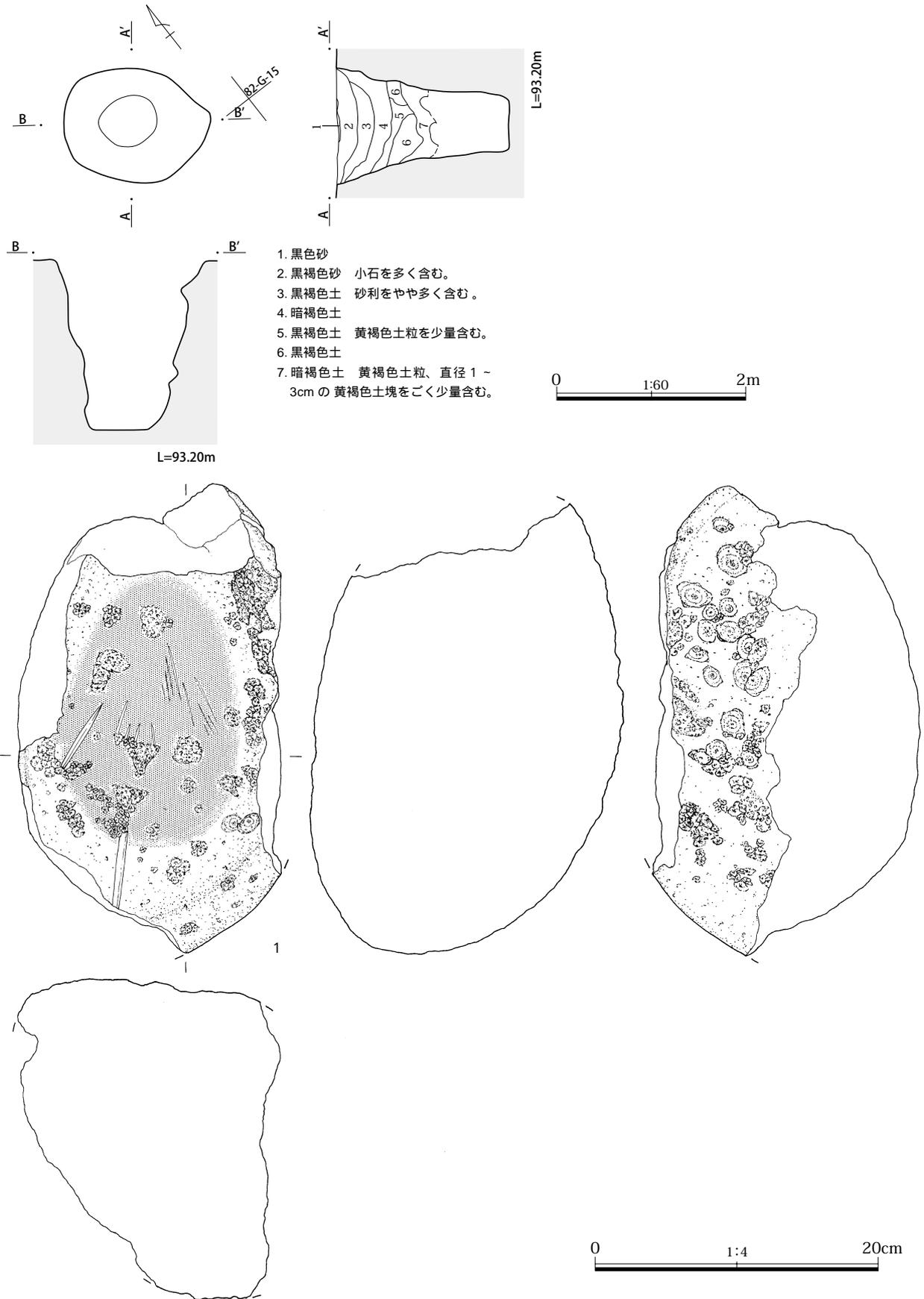
埋没土 上層は浅間C軽石を含む黒褐色土で、中層は黒褐色土粒を含むにぶい暗褐色土で、下層は暗黄褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から椀形鉄滓(第55図10井3)とすり鉢破片2点(1・2)が出土した。他に礫片が1点出土している。

所見 他の掘削時期は中世以降のいずれかの時期と考えられるが、明確にはできなかった。

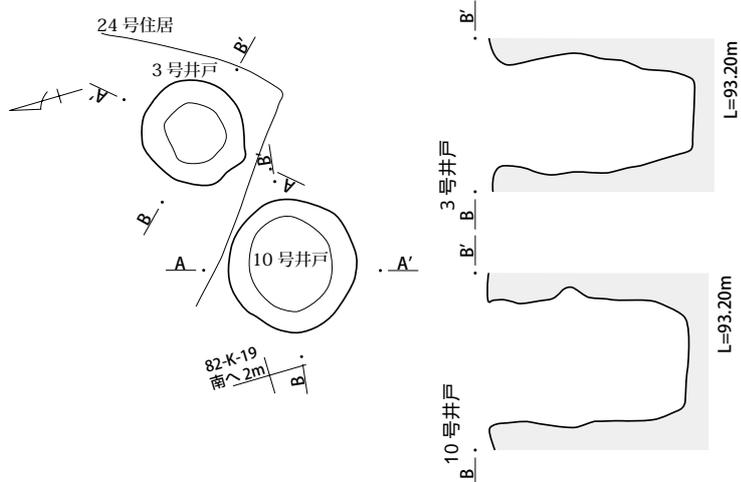
第5章 2・3区の遺構と遺物



第54図 2区9号井戸と出土遺物

2. 2・3区微高地部の遺構と遺物

2区3号・10号井戸

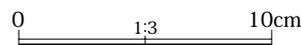
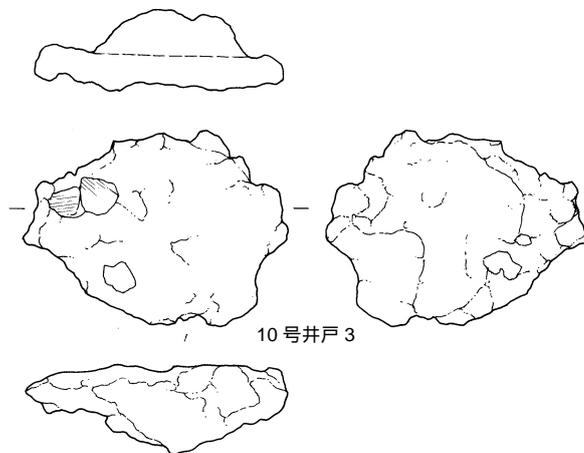
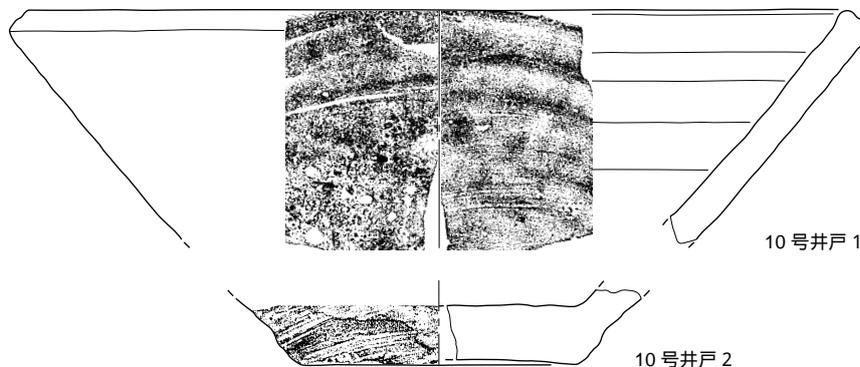
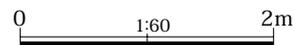
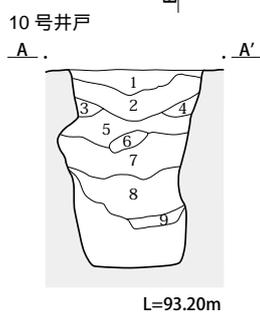
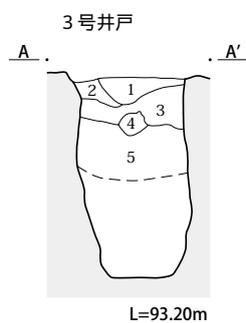


3号井戸

1. 暗褐色土 As-Cを多く含む。砂質。
2. 黒褐色土 As-Cを多く含む。
3. 暗褐色土 直径15cmの黒褐色土塊状をごく少量含む。
4. 1層と2層の混土
5. 暗褐色土 直径5mm以下の黄褐色土塊をごく少量含む。

10号井戸

1. 暗黒褐色土 直径1mm大のAs-C混入黒色土を多く含む。しまり良く硬質。
2. 黒褐色土 As-Cを少量、暗褐色砂粒を多く含む。やや砂質。
3. 黒色土 As-C混じり黒色土塊を主体とした層。
4. 黒色土 As-C混じり黒色土塊を主体とした層。
5. 暗褐色土 2層に含まれた暗褐色砂粒を主体とした層。
6. にぶい暗褐色土 白色砂粒を少量含む。
7. にぶい暗褐色土 軟質黒褐色土塊をやや多く含む。
8. にぶい暗褐色土 7層と似ているが、暗黄褐色土塊を少量含む。
9. 黒褐色土 暗黄褐色土塊を多く、暗褐色粘質土を少量含む。



第55図 2区3号・10号井戸と出土遺物

(2) 復旧溝

復旧溝(付図2 第56図 PL27)

2区微高地のほぼ中央、3-82-G~H-8~10Gで等間隔に平行する溝9条が検出された。これらの溝に埋填されていたのは灰黄褐色小砂礫である。これは洪水被災の耕地の復旧のために、洪水堆積物を埋めた復旧溝と考えられる。

検出された復旧溝は、幅0.6~0.8m、長さ8.7m、深さ0.06~0.20mの細長い溝9条が、東西8.16m、南北8.7mの範囲に、0.20~0.3mの間隔で整然と並んでいた。溝の方向はN-22°-Eである。出土遺物は縄文土器破片1点、土師器破片43点、陶器破片1点、磁器破片1点、軟質土器破片1点が出土したが、遺構の時期を決めるような出土状態ではなかった。

復旧溝の掘り込み面は、本来もう少し高い位置にあったものが、圃場整備等で削平されたものと考えられる。洪水被災面がどのような耕作面であったかは現状では不明と言わざるを得ない。また、この1区画のみが残った理由についても、復旧の範囲が限定されたのが、この区画だけ深く掘り込まれたために残存したか、判然としない。

復旧溝に埋填されていた小砂礫は1区低地部第2洪水層および微高地部北半に堆積していた洪水堆積物と酷似しており、同時期の可能性がある。この第2洪水層の堆積時期は、浅間Bテフラと榛名山二ツ岳火山灰に挟まれていること、出土遺物が8世紀後半から9世紀にかけてのものであることから、818(弘仁九)年の地震に伴う洪水堆積物と推定される。したがって、本2区復旧溝も818(弘仁九)年の地震に伴う洪水被災地の復旧による可能性がある。

しかし、北方1.3kmにある同じ微高地上面に同一層位で水田が検出された。荒砥前田遺跡・荒砥宮田遺跡では洪水被災後、復旧は行われていなかった。

水田耕作地は復旧されることなく放置されたと推定される。復旧溝の出現の問題にも関係するので、同一洪水層の可能性があることを指摘するにとどめる。

(3) 浅間Bテフラ下凹地

(付図2 第56図 PL27)

2区微高地のほぼ中央の西壁際、3-81-I-2・3Gで浅間Bテフラが堆積する凹地を検出した。直径9mの半円形に浅間Bテフラが厚さ0.1~0.15mの厚さで堆積し、その中央部の直径2mほどは浅間B軽石を含む黒色砂質土上面から砂やシルトの堆積がみられた。浅間Bテフラは純堆積層とみられ、上位の浅間粕川テフラは浅間Bテフラの火山灰と軽石とともに攪乱した状態であった。

出土遺物は土師器甕破片が4点、高坏破片が1点出土しているのみである。

この凹地は東半分が調査できたにとどまったので、西側の低地部の縁であるのか、何らかの別の遺構の掘り込みを反映しているのかは判然としない。

(4) 土坑

2区1号土坑(付図2 第57図 PL28)

位置 2区3-72-G・H-19G

形状 隅丸長方形。やや西壁が膨らんでいる。

重複 2号土坑に先行する。

規模 長軸1.22m 短軸0.90m 残存壁高0.42m
長軸方位 N-19°-E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 上層は浅間C軽石粒・黄褐色土塊を含む明黒褐色土で、下層は粘性のある明黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸がある。

遺物と出土状況 1号土坑とともに掘り下げたため、出土遺物の分離はできなかった。両者の埋没土中から土師器破片16点が出土した。土坑の時期を決めるような出土状態ではなかった。

所見 掘削時期は不明である。

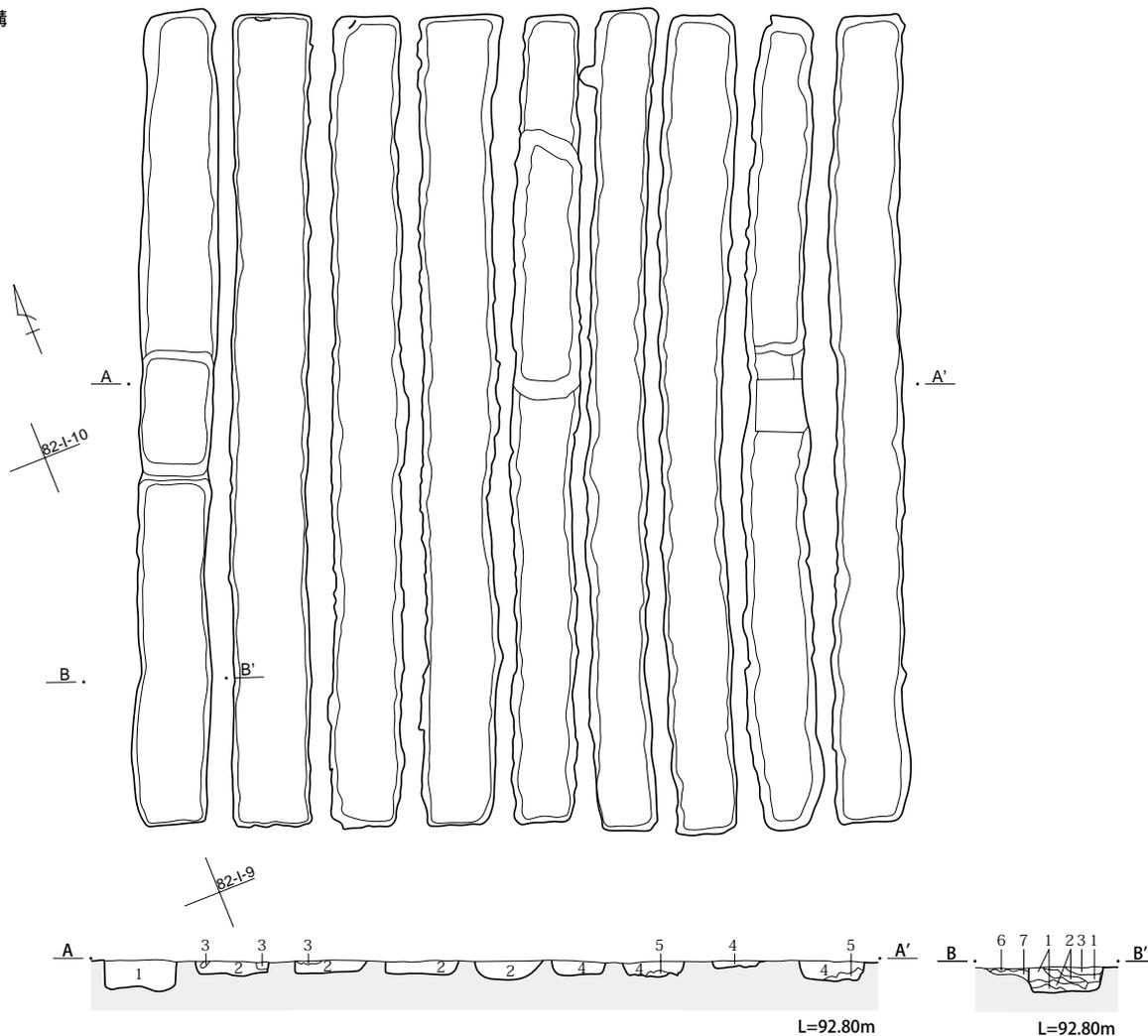
2区2号土坑(付図2 第57図 PL28)

位置 2区3-72-G・H-19G

形状 隅丸長方形 重複 2号土坑に後出する。

規模 長軸1.70m 短軸1.18m 残存壁高0.35m

復旧溝



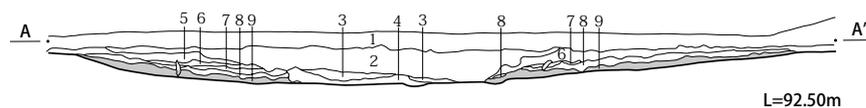
A - A'

1. 黄褐色土 直径5～10mmの軽石を多く含む砂質土。しまりは強くAs-Cを含む黒色土を塊状に含む。色調は鉄分に由来するものと思われる。
2. 灰褐色土 直径2～5mmの軽石を多く含む砂質土。しまりは強い、上部にやや鉄分の凝集が見られる。
3. 黒色土 As-Cを含む。地山の土と思われるが、塊状に混入している。鉄分の酸化した赤味が混入する。
4. 灰褐色土 2層に似るが、As-Cを含む黒色土と茶褐色の粘質土を塊状に混入する。
5. 灰褐色土 4層と同様だが、混入する塊状の土が多い。

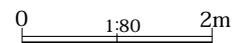
B - B'

1. 黄褐色土 直径5～10mmの軽石を多く含む砂質土。しまりは強く、As-Cを含む黒色土を塊状に含む。色調は鉄分に由来するものと思われる。
2. 灰褐色土 直径2～5mmの軽石を多く含む砂質土。しまりは強い、上部にやや鉄分の凝集が見られる。
3. 黒色土 As-Cを含む。地山の土と思われるが、塊状に混入している。鉄分の酸化した赤味が混入する。
6. 暗赤褐色土 鉄分の多い砂質土。
7. 黒色土 しまり強く、As-Cを多く含む。

浅間Bテフラ下凹地



1. 表土。
2. 灰褐色土。
3. 灰色シルト小塊と灰色細砂の混土。
4. 灰色細砂。
5. 黄色土粒を含む灰褐色土。
6. As-Bの軽石を含む黒色砂質土。
7. 粕川テフラ青灰色灰とAs-Bピンク灰とAs-B軽石の混土。
8. As-Bピンク灰。
9. As-B軽石。



第56図 2区復旧溝と浅間B軽石下凹地

第5章 2・3区の遺構と遺物

長軸方位 N - 16.5° - E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 上層は明黒褐色の砂層で、下層は黄褐色土粒を含む明黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸がある。

遺物と出土状況 1号土坑とともに掘り下げたため、出土遺物の分離はできなかった。両者の埋没土中から土師器破片16点および2号土坑埋没土中から土師器破片2点が出土した。土坑の時期を決めるような出土状態ではなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区3号土坑(付図2 第57図 PL28)

位置 2区3 - 72 - G - 20 G

形状 長方形 重複 無し

規模 長軸1.70 m 短軸0.97 m 残存壁高0.24 m

長軸方位 N - 22° - E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 上層は浅間C軽石粒と小砂利を含む黒褐色の砂層で、下層は黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸がある。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片6点が出土した。土坑の時期を決めるような出土状態ではなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区4号土坑(付図2 第57図 PL28)

位置 2区3 - 72 - F - 20 G

形状 隅丸長方形

重複 無し

規模 長軸1.17 m 短軸0.88 m 残存壁高0.21 m

長軸方位 N - 25.5° - E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる浅いボール形

埋没土 上層は浅間C軽石粒と小砂利と黄褐色土粒を含む黒褐色土で、下層は黄褐色土粒と黒色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸がある。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区5号土坑(付図2 第57図 PL28)

位置 2区3 - 72 - F - 20 G

形状 隅丸不整正方形

重複 無し

規模 長軸0.74 m 短軸0.70 m 残存壁高0.23 m

長軸方位 N - 0° - E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 上層は浅間C軽石粒を含む暗褐色で、下層は黄褐色土で埋まっていた。

底面 中央部は平坦である。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区6号土坑(付図2 第57図 PL29)

位置 2区3 - 72 - F - 20 G

形状 長方形 重複 無し

規模 長軸0.99 m 短軸0.80 m 残存壁高0.28 m

長軸方位 N - 41° - E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 上層は明黒褐色の砂層で、下層は黄褐色土粒を含む明黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸がある。長辺壁際の底面は凹んでいた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区7号土坑(付図2 第57図 PL29)

位置 2区3 - 72 - F - 19 G

形状 長方形 重複 無し

規模 長軸1.84 m 短軸0.81 m 残存壁高0.36 m

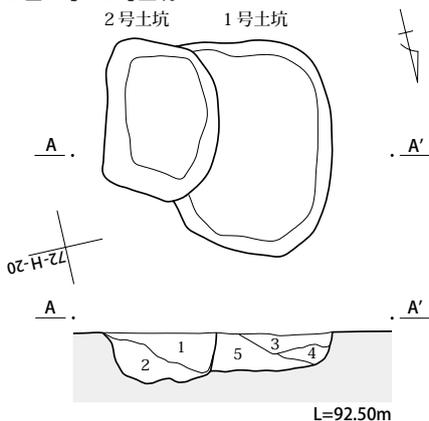
長軸方位 N - 56° - E

断面形 壁はほぼ垂直に立ち上がる箱形

埋没土 上層は浅間C軽石・小砂利・黄褐色土粒を含む黒褐色土で、下層は黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

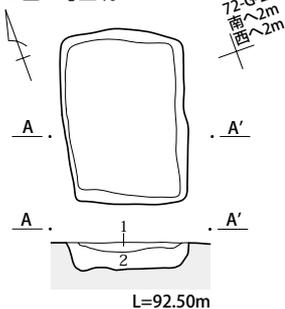
2.2.3区微高地部の遺構と遺物

2区1号・2号土坑



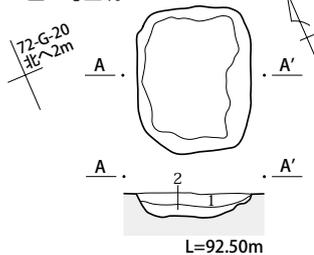
1. 明黒褐色土 直径1～3mmのAs-Cをやや多く、～30mmほどの黄褐色塊を少量含む。しまりが良く、やや硬質。
2. 明黒褐色土 土質は1層と同じだがAs-Cを微量含む。やや粘性有り
3. 明黒褐色砂質土 直径1～5mmの砂粒を主体とする層。
4. 黒褐色土 As-Cをやや多く、含み、しまり良い。
5. 明黒褐色土 直径30mmほどの黄褐色土粒をやや多く、As-Cを微量含む。

2区3号土坑



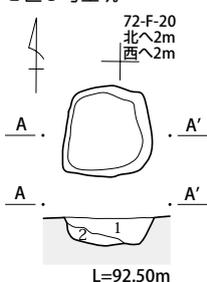
1. 黒褐色土 As-Cを少量含む。小砂利を多く含む。
2. 黒褐色土 As-Cを少量含む。直径1cmの口-ム塊を少量含む。

2区4号土坑



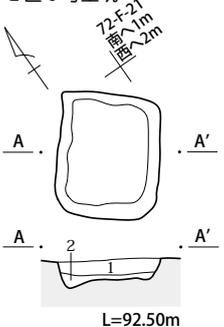
1. 黒褐色土 As-Cを少量含む。小砂利を多く含む。直径0.5～1cmの口-ム塊を少量含む。
2. 黒褐色土 口-ム塊。直径0.5～1cmの黒色土塊を多く含む。

2区5号土坑



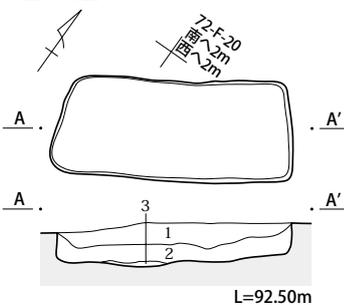
1. 暗褐色土 As-Cを少量含む。
2. 黄褐色土

2区6号土坑



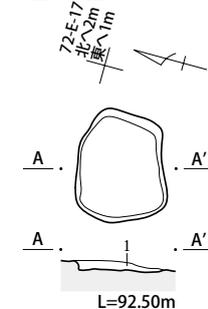
1. 黒褐色土 As-Cを少量含む。小砂利を多く含む。直径0.5以下の口-ム塊を少量含む。
2. 黄褐色土と黒色土の混土。

2区7号土坑



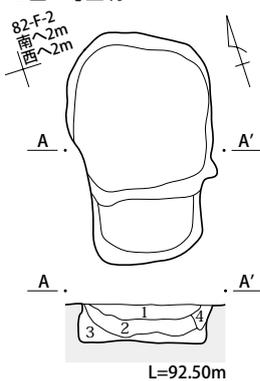
1. 黒褐色土 As-Cを少量含む。小砂利を多く含む。直径0.5～10cmの口-ム塊を多く含む。
2. 暗褐色土 直径0.5以下の口-ム塊を少量含む。
3. 暗褐色土と黄褐色土の混土。

2区8号土坑



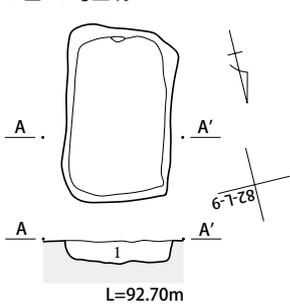
1. 暗褐色土 As-Cを少量含む。小砂利を多く含む。直径0.5cm以下の口-ム塊を少量含む。

2区9号土坑

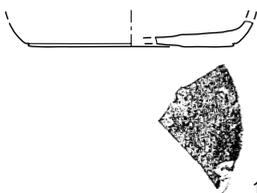


1. 黒褐色土 As-Cを少量含む。小砂利を多く含む。直径0.5cm以下の口-ム塊を少量含む。
2. 黒褐色土 直径0.5cm以下の口-ム塊、黒色土塊を多く含む。
3. 黒褐色土 直径0.5cm以下の口-ム塊、黒色土塊を少量含む。
4. 黒褐色土と黄褐色土の混土。

2区13号土坑

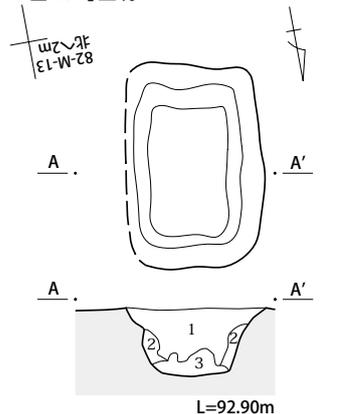


1. 暗褐色土 12号土坑よりやや小さい砂利を含む。



0 1:3 10cm

2区20号土坑



1. 黒褐色土 砂質。直径2～4mmのAs-C及び白色軽石を、多く混入。
2. 黒褐色土 やや砂質。
3. 黒褐色土 やや砂質の黄褐色砂塊混入、As-C及び白色軽石を微量混入。

0 1:60 2m

第57図 2区土坑(1)と出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

底面 底面は平坦である。写真には北西隅にピットがあるが、攪乱である。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区8号土坑(付図2 第57図 PL29)

位置 2区3-72-D・E-17G

形状 隅丸不整長方形

重複 無し

規模 長軸0.91m 短軸0.69m 残存壁高0.12m

長軸方位 N-67°-E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 少量の浅間C軽石粒・小砂利を含む暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面は平坦である。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区9号土坑(付図2 第57図 PL29)

位置 2区3-72-F-1G

形状 隅丸長方形。南北方向に長い長方形であるが、北側は西側に膨らんでおり、2基の重複のようにも見える。ここでは1基として報告した。

重複 無しとして記録したが、南北方向の土層断面の観察をしていないので断定はできない。遺構確認面の平面確認では重複は見られなかった。

規模 長軸1.82m 短軸0.86~1.13m

残存壁高0.35m

長軸方位 N-19°-E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 上層は浅間C軽石粒と小砂利を含む黒褐色の砂層で、下層は黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸がある。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片6点が出土した。土坑の時期を決めるような出土状態ではなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区13号土坑

(付図2 第57図 PL30 遺物観察表P.485)

位置 2区3-82-K-8G

形状 隅丸長方形

重複 無し

規模 長軸1.40m 短軸0.84m 残存壁高0.32m

長軸方位 N-19.5°-E

断面形 壁は緩やかに立ち上がる箱形

埋没土 小さな砂利と白色軽石を含む暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から古式土師器破片10点と須恵器坏破片(第57図1)が出土した。

所見 掘削時期は不明である。出土した須恵器坏は8世紀代のものと見られるが、小片であるので土坑の時期を決めることは困難である。

2区20号土坑(付図2 第57図 PL30)

位置 2区3-82-M-13G

形状 隅丸長方形 重複 無し

規模 長軸1.62m 短軸1.10m 残存壁高0.55m

長軸方位 N-10.5°-E

断面形 上方が開く箱形

埋没土 上層は白色軽石を多く含む黒褐色土で、下層は白色軽石と黄褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面は平坦である。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明である。

2区24号土坑(付図2 第58図)

位置 2区3-82-J-12G

形状 隅丸長方形

重複 1号掘立柱建物P3に後出する。

規模 長軸1.14m 短軸0.75m 残存壁高0.09m

長軸方位 N-13°-E

断面形 上方が開く箱形

埋没土 暗褐色土で埋まっていた。

2. 2・3区微高地部の遺構と遺物

底面 底面はほぼ平坦である。
遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。
所見 掘削時期は不明である。平面図の記録データが上場のみとなってしまった。

2区 23号土坑(付図2 第58図 PL30)
位置 2区3-82-J-12G
形状 隅丸方形
重複 無し
規模 長軸0.91m 短軸0.77m 残存壁高0.20m
長軸方位 N-4°-E
断面形 皿形
埋没土 白色軽石・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。
底面 底面はほぼ平坦である。
遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。
所見 掘削時期は不明である。平面図の記録データが上場のみとなってしまった。

2区 16号土坑(付図2 第58図 PL30)
位置 2区3-82-H-I-6G
形状 円形 重複 無し
規模 長軸0.76m 短軸0.74m 残存壁高0.25m
断面形 箱形
埋没土 上層は白色軽石を含む黒褐色土で、下層は白色軽石を含む黒色土で埋まっていた。
底面 底面はほぼ平坦である。
遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。
所見 掘削時期は不明である。底面の確認を誤ったために写真には底面に段差のある形状で記録してしまった。

2区 26号土坑(付図2 第58図 PL31)
位置 2区3-82-H-I-6G
形状 不整円形 重複 無し
規模 長軸0.72m 短軸0.70m 残存壁高0.59m
断面形 U字形
埋没土 上層は少量の白色軽石を含む黒褐色土で、

下層はやや粘性のある黒褐色土で埋まっていた。
底面 底面は丸いボール状である。
遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。
所見 掘削時期は不明である。

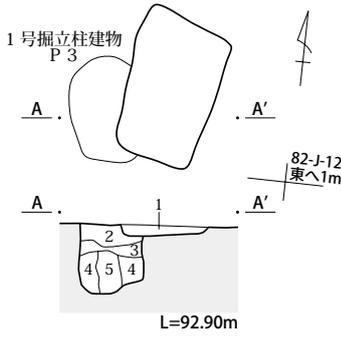
2区 27号土坑(付図2 第58図 PL31)
位置 2区3-82-H-13G
形状 不整隅丸正方形
重複 無し
規模 長軸0.59m 短軸0.57m 残存壁高0.66m
断面形 筒形
埋没土 上層は砂質褐灰色土・黄褐色土塊を多く混じるにぶい黄褐色土で、下層は砂質の暗褐色土で埋まっていた。
底面 底面は平坦である。
遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。
所見 掘削時期は不明である。

2区 28号土坑(付図2 第58図 PL31・149
遺物観察表 P.486)
位置 2区3-82-H-I-13・14G
形状 円形 重複 無し
規模 長軸0.81m 短軸0.79m 残存壁高0.90m
断面形 筒形
埋没土 上層は黄褐色土粒を黒褐色土で、下層は軽石粒を含む暗黒褐色土で埋まっていた。
底面 底面は一部が丸く凹んでいた。
遺物と出土状況 埋没土中層から上層にかけて大型礫が5個と、ウマと同定された下顎骨が1個体分出土した。
所見 時期を示す出土遺物がないため、掘削時期は不明である。馬頭観音信仰に関わる遺構の可能性がある。

2区 30号土坑(第58図 PL31)
位置 不明 形状 不明
規模 軸長1.05m 断面形 皿形
埋没土 浅間C軽石粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

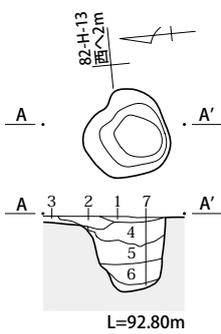
第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 24号土坑



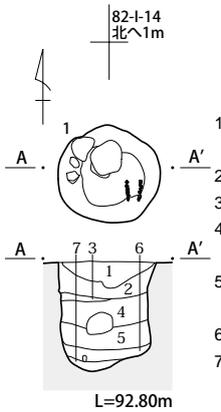
1. 暗褐色土 10 Y R 3/3 直径1 ~ 3cmの塊を少量含む。

2区 26号土坑



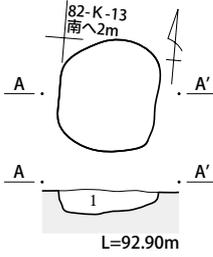
1. 黒色土 As-Cを多く含む。
2. 黒褐色土 As-Cを少量含む。直径3 ~ 5cmの暗褐色土塊を少量含む。
3. 暗褐色土 直径1 ~ 2cmの黒褐色土塊を極少量含む。
4. 黒褐色土 As-Cを少量含む。暗褐色土混入。
5. 暗褐色土 As-Cを微量含む。
6. 暗褐色土 やや粘性有り。
7. 暗褐色土 黄褐色土塊多く混入。

2区 28号土坑



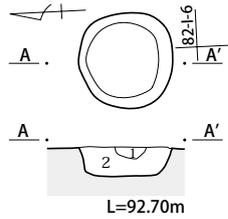
1. 黒灰色土 黄褐色土を少量灰色砂粒を多く含む。砂質。
2. 黒褐色土 黄褐色土を微量含む。軟質。
3. 暗黄褐色土 黄褐色土を多く含む。やや砂質。
4. 暗黒褐色土 灰色砂粒をやや多く含む。直径50mm程度の軽石を少量含む。馬歯出土。
5. 暗黒褐色土 軟質でしまり悪い。混入物は認められない。
6. 暗黒褐色土 黒褐色砂粒をやや多く含む。砂質。
7. 灰色砂粒 灰色砂層。軟質。

2区 23号土坑



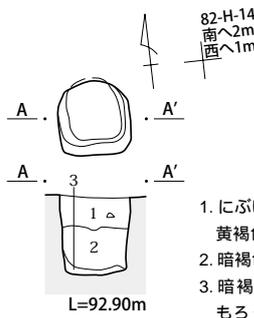
1. 暗褐色やや砂質にぶい黄褐色土塊多く白色軽石微混入

2区 16号土坑



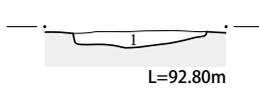
1. 黒褐色土 10 Y R 3/1 白色軽石を少量含む砂質土。
2. 黒色土 10 Y R 2/1 白色軽石をわずかに含む砂質土。

2区 27号土坑



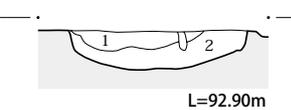
1. にぶい黄褐色土 砂質褐灰色土に黄褐色土塊多く混入。
2. 暗褐色土 やや砂質。
3. 暗褐色土 やや砂質黄褐色土塊混入。もろくくずれやすい。

2区 30号土坑



1. 黒褐色土 As-C 混入。

2区 31号土坑

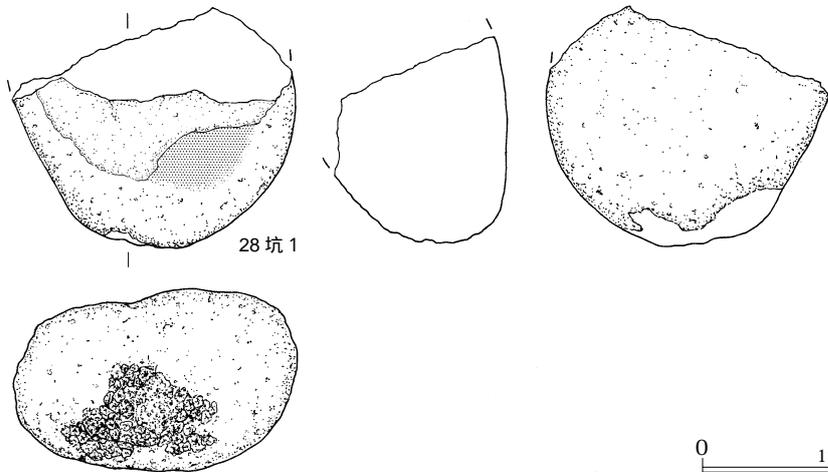
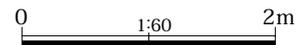


1. 黒褐色土 As-Cと粘土塊混じり。
2. 暗褐色土 As-Cと黄色砂質土が鹿の子状に入る。

2区 38号土坑



1. 暗褐色土 黄褐色土粒を少量含む。



第58図 2区土坑(2)と出土遺物

底面 底面は平坦

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 遺憾ながら平面図の記録をすることができなかった。掘削時期は不明である。

2区 31号土坑(第58図 PL32)

位置 不明 形状 不明

規模 軸長 1.41 m 断面形 箱形

埋没土 上層は浅間C軽石粒を含む黒褐色土で、下層は浅間C軽石と黄色砂質土が混じる暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面は緩やかに丸い。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 遺憾ながら平面図の記録をすることができなかった。掘削時期は不明である。

2区 38号土坑(第58図 PL17)

位置 不明 形状 不明

規模 軸長 0.84 m 断面形 皿形

埋没土 黄褐色土粒を少量混じる暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 土師器破片1点が埋没土中から出土した。

所見 遺憾ながら平面図の記録をすることができなかった。掘削時期は不明である。

2区 10号土坑

(付図2 第59図 PL32・149 遺物観察表P.486)

位置 2区3-72-F-4G

形状 比較的大型の隅丸長方形

規模 長軸 2.44 m 短軸 1.74 m 残存壁高 0.26 m

長軸方位 N-23.5°-E

断面形 壁はほぼ垂直に立ち上がる箱形

埋没土 上層は褐色砂粒・小石を含む黒褐色土で、下層は褐色砂粒を含まない黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 南西部に大型礫が集中して出土し

た。また埋没土中から台付甕を含む土師器破片6点が出土した。また図示した擦石(第59図10坑1)が底面上3cmで出土した。

所見 出土土器は破片が多く掘削時期を特定するのは困難であるが、古墳時代前期の土坑の可能性が高い。

2区 12号土坑

(付図2 第59図 PL32 遺物観察表P.486)

位置 2区3-82-J・K-8G

形状 比較的大型の不定方形。隅丸長方形の南東隅が欠けたような形状を呈する。

重複 無し

規模 長軸 2.38 m 短軸 1.80 m 残存壁高 0.22 m

長軸方位 N-66°-E 断面形 皿形

埋没土 砂利と白色軽石を含む暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸がある。

遺物と出土状況 埋没土中から台付甕(第59図12坑1)を含む土師器破片6点が出土した。

所見 出土土器は破片が多く掘削時期を特定するのは困難であるが、比較的大形の破片が出土していることから、古墳時代前期の土坑の可能性が高い。

2区 14号土坑(付図2 第59図 PL32)

位置 2区3-82-E-4G

形状 比較的大型の隅丸方形。南側・西側には突出部が伴う。埋没土の観察からは一体の遺構である。

重複 無し

規模 長軸 2.31 m 短軸 1.51 m 残存壁高 0.26 m

長軸方位 N-70°-W

断面形 箱形。一部皿形

埋没土 上層は白色軽石・黄色土粒を含む黒褐色土で、下層は白色軽石を含む黒色土で埋まっていた。

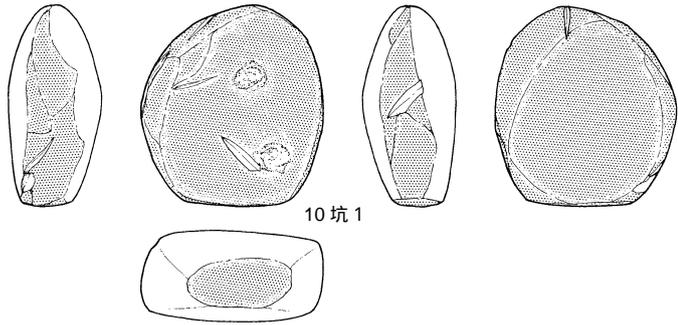
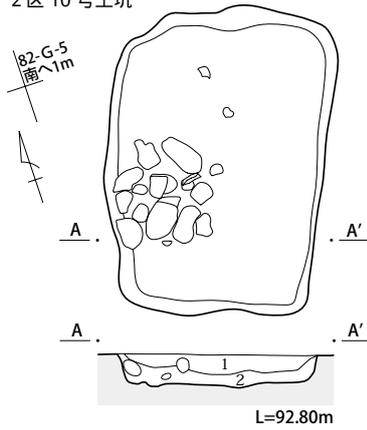
底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から古式土師器破片14点が出土した。

所見 出土土器は破片が多く掘削時期を特定するの

第5章 2・3区の遺構と遺物

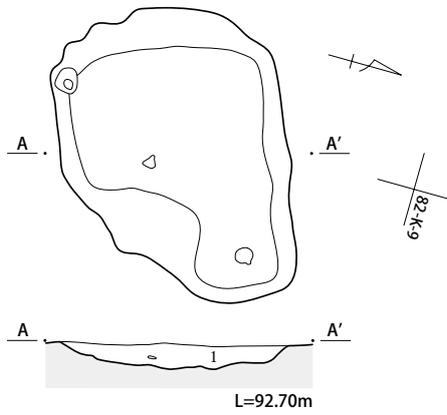
2区 10号土坑



10坑1

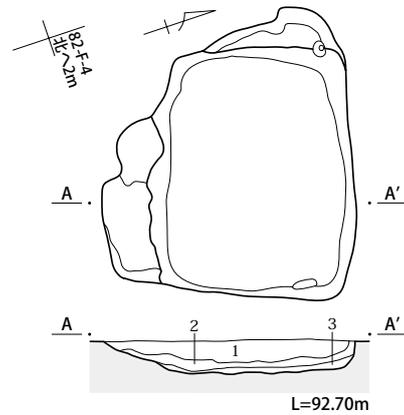
1. 黒褐色土 直径1mmほどの褐色砂粒及び直径～5mmの小石を多く含む。やや砂質。
2. 黒褐色土 土質は1層と似ているが褐色砂粒を含まない。やや砂質。

2区 12号土坑



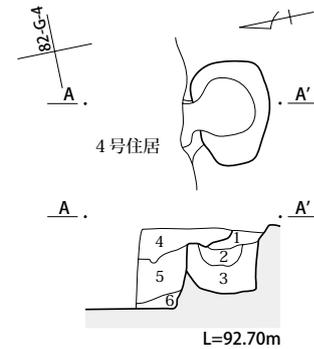
1. 暗褐色土 直径0.5～2.0cmの砂利が多く混入。白色軽石(As-Cか?)少量混入

2区 14号土坑



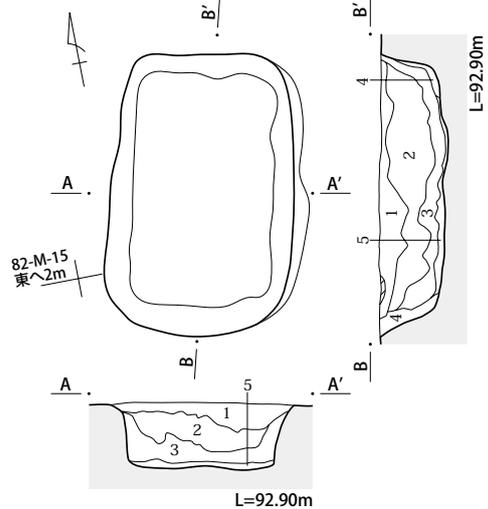
1. 黒褐色土 10 Y R 3/1 直径0.5～3mmの白色軽石、直径0.5mmの黄色土粒、直径5～10mmの砂利を多く含む。砂質。
2. 黒色土 10 Y R 2/1 直径3～5mm少量の白色軽石か、直径5～10mmの砂利を含む。砂質。
3. 黒褐色土 10 Y R 3/1 直径5～8mmの白色軽石、直径5mmの黄色土粒、直径5～10mmの砂利を含む。

2区 15号土坑

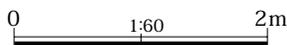


1. 黒褐色土 10 Y R 3/1 直径0.5～3mmの白色軽石、直径5～10mmの黄色土粒を少量含む。
2. 黒褐色土 10 Y R 3/2 直径1～5mmの白色軽石、焼土、炭化物を含む。
3. 黒褐色土 10 Y R 3/2 直径2～5mmの白色軽石を少量含む。やや粘質。
4. 黒色土 10 Y R 2/1 直径1mm、3～5mmの角閃石の入る白色軽石を、ともに多く含む。
5. 黒褐色土 10 Y R 3/2 直径1～2cmの褐灰色土塊、直径1～3mmの白色軽石を含む。
6. 褐灰色土 10 Y R 4/1 挟雑物をほとんど含まない。やや粘質。

2区 22号土坑



1. 黒褐色土 やや砂質。As-C及び白色軽石を多く混入。
2. 黒褐色土 1層に比べAs-C及び白色軽石は少ない。
3. 黒褐色土 やや砂質。As-C微量、黄褐色砂微量混入。
4. 暗褐色土 やや砂。にぶい黄褐色土少量混入。
5. 暗褐色土 やや砂質。にぶい黄褐色土を塊状に多く混入。



第59図 2区土坑(3)と出土遺物

は困難であるが、異なる時期の遺物混入がないことから、古墳時代前期の土坑の可能性が高い。

2区22号土坑(付図2 第59図 PL33)

位置 2区3-82-L-14・15G

形状 比較的大型の隅丸方形

重複 無し

規模 長軸 2.25 m 短軸 1.39 m

残存壁高 0.56 m

長軸方位 N-12.5°-E

断面形 箱形

埋没土 上層は浅間C軽石粒・白色軽石を含む黒褐色土で、下層は浅間C軽石を含まない黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面は平坦である。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明である。埋没土の特徴・共通性からすれば古墳時代前期の土坑である可能性が高い。

2区15号土坑(付図2 第59図 PL33)

位置 2区3-82-G-3G

形状 楕円形

重複 2区4号住居に先行する。

規模 長軸 0.83 m 短軸 0.59 m

残存壁高 0.55 m

長軸方位 N-88°-W

断面形 箱形

埋没土 上層は焼土・炭化物粒・白色軽石を含む黒褐色土で、下層は白色軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 底面は平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片1点が出土した。

所見 出土遺物からは掘削時期を決めかねるが、2区4号住居に先行することから、古墳時代前期の土坑であることは確実である。筒状の形状と住居に先行する層位から考えると、掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、単独の検出状態であった。

2区21号土坑

(付図2 第60図 PL33・149 遺物観察表P.486)

位置 2区3-82-G-4G

形状 隅丸長方形

重複 2区4号住居に先行する。

規模 長軸 0.83 m以上 短軸 0.71 m

残存壁高 0.46 m

長軸方位 N-90°-E

断面形 底面近くしか確認出来なかったため、断面形の詳細は不明である。

埋没土 上層には炭化材が集合しており、その下位には若干の掘り込みあり、焼土粒・炭化粒を含む灰褐色土が堆積していた。

底面 底面は平坦であるが、炭化材があった部分は5cmほど一段下がっている。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器壺(第60図21坑1)、大型台付甕脚部(21坑2)、大型鉢(21坑3)が出土した。また埋没土中から土師器破片18点と礫片1点、円礫1点が出土した。

所見 出土遺物から古墳時代前期の土坑と考えられる。炭化材が出土しているが、土坑の機能は判然としなかった。

2区25号土坑

(付図2 第60図 PL33・149 遺物観察表P.486)

位置 2区3-82-J-13G

形状 隅丸長方形 重複 無し

規模 長軸 1.25 m 短軸 0.53 m 残存壁高 0.54 m

長軸方位 N-0°-W 断面形 箱形

埋没土 上層は浅間C軽石粒・白色軽石を含む黒褐色土で、下層は黄褐色土塊を含む砂質暗褐色土で埋まっていた。

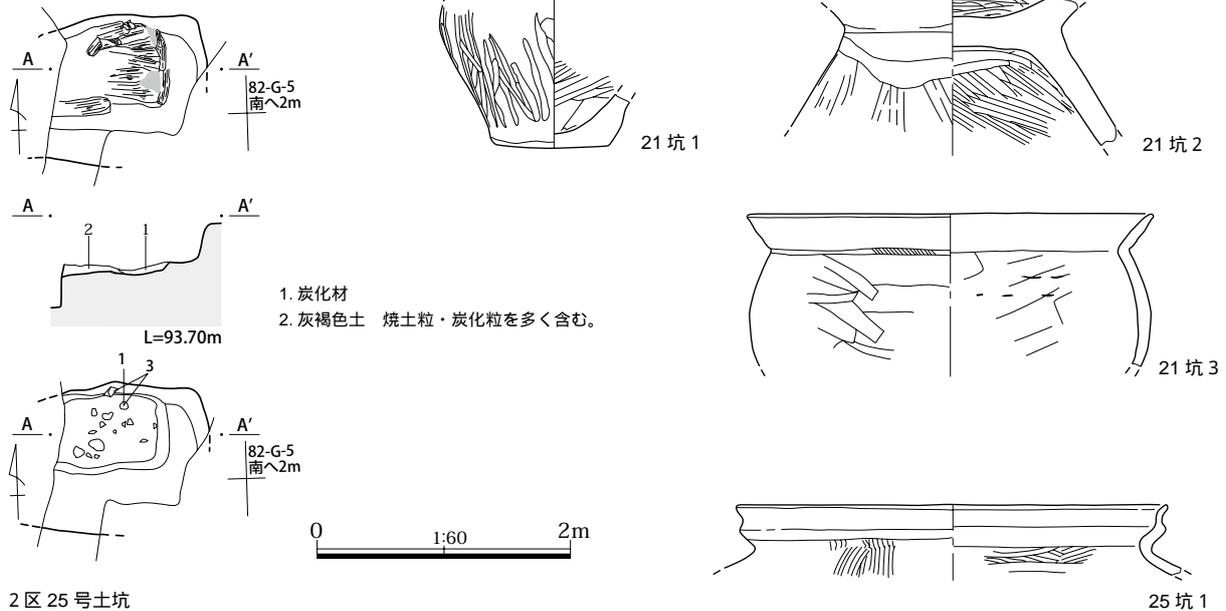
底面 底面は平坦である。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器S字甕破片(第60図25坑1・2・3)が出土した。この他に土師器破片44点が出土した。

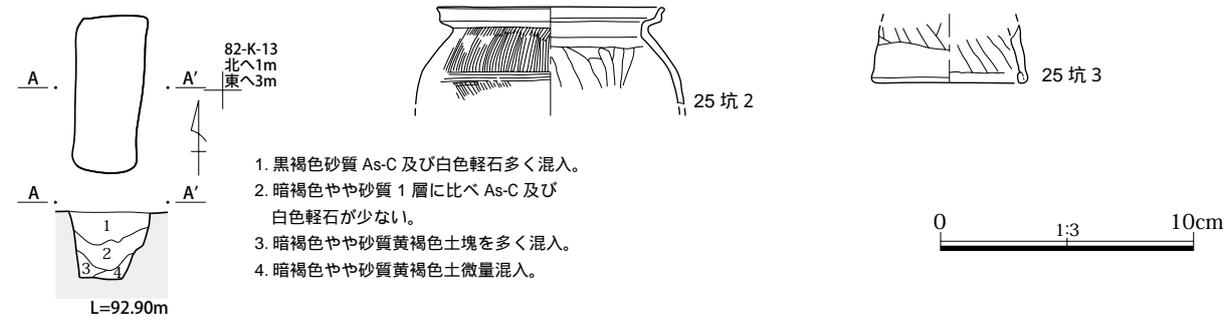
所見 出土遺物から古墳時代前期の土坑と考えられる。出土したS字甕はやや古い様相を示している。

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 21号土坑



2区 25号土坑



第60図 2区土坑(4)と出土遺物

3区土坑群

(第61図 PL34・149 遺物観察表 P.486)

3区微高地部の北西突出部のほぼ中央部(3-92-I・J-7・8G)に、細長い土坑5基と、平行四辺形土坑1基が重複した土坑群が検出された。それぞれの規模と長軸方位は下記のとおりである。

- 1号坑：長軸 3.05 m、短軸 0.75 m 以上、
残存壁高 0.24 m 長軸方位 N - 20.5° - W
- 2号坑：長軸 3.08 m、短軸 0.65 m 以上、
残存壁高 0.25 m 長軸方位 N - 36.5° - W
- 3号坑：長軸 3.30 m、短軸 0.64 m 以上、
残存壁高 0.34 m 長軸方位 N - 36° - W
- 4号坑：長軸 3.21 m、短軸 0.83 m、
残存壁高 0.27 m 長軸方位 N - 36° - W
- 5号坑：長軸 2.12 m、短軸 0.50 m 以上、

残存壁高 0.13 m 長軸方位 N - 38° - W

6号坑：長軸 0.87 m、短軸 0.75 m、

残存壁高 0.18 m 長軸方位 N - 54.5° - E

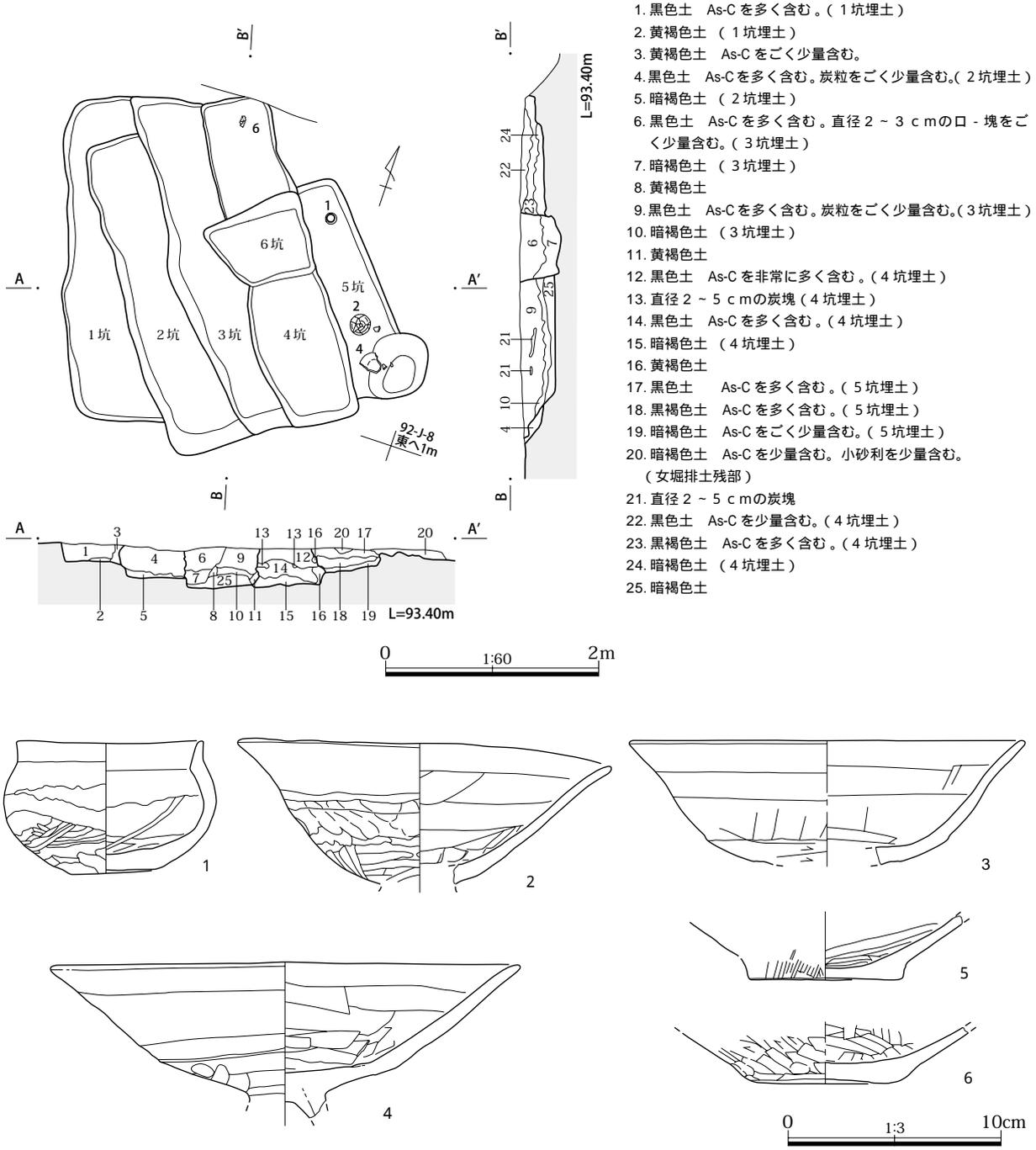
これらの土坑の断面形は概ね箱形で、底面はそれぞれに凹凸はあったが、ほぼ平坦であった。埋没土は浅間C軽石を含む黒色土・黒褐色土で、それぞれの土坑の中位から上半部に炭化材あるいは炭粒を含んでいた。遺物は埋没土中から92点の土師器破片と、陶器破片1点が出土した。特に4坑、5坑では底面近くで、土師器壺底部(第61図6)、鉢(1)、高坏(2・4)が出土した。出土遺物の時期と、埋没土の特徴から、本土坑群の掘削時期は古墳時代前期と考えられる。

本土坑群はそれぞれの埋没土に大きな差異はなく、出土遺物も同時期のものが出土している。しか

し埋没土の断面観察によれば、明らかに重複関係が認められる。したがって、時期をあけず埋められ、また掘り直された可能性が高い。掘られた順序は1坑 2坑 3坑 6坑、4坑 3坑、4坑 5坑が確認できる。

土坑群の機能は明確にはできなかった。3区土坑群は1区から2区にかけての同時期の竪穴住居群が

ら北に離れた位置にあり、特徴的である。一方、同時期と見られる方形周溝墓群は、1区の南西部の台地上の荒砥北原遺跡で調査されている。3区土坑群のような短期間で重複する細長い土坑群は、一般的な集落内では検出例がない。墓・祭祀等の日常生活以外の場面で使用されたものと考えられるが、今回の調査で明確にすることはできなかった。



第61図 3区土坑群と出土遺物

(5) 竪穴住居

2区1号住居(付図2 第62～65図 PL35～37・150 遺物観察表P.486・487)

位置 2区3-72-G・H-18・19G

形状 隅丸長方形

規模 長軸 7.20 m 短軸 6.06 m

残存壁高 0.73 m

床面積 37.62 m² 長軸方位 N-87°-W
埋没土 上層は浅間C軽石を多く含む黒色土で、下層は浅間C軽石・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北東寄り、支柱穴P2の南西側に炉の痕跡が掘り方面で検出された。これはちょうど地割れが炉の直上に入ったために、床面では炉の形状を確認することができなかったことによる。

掘り方面で検出された炉の痕跡は長径0.62 m、短径0.26 m、深さ0.06 mの不整楕円形で、北東隅に棒状礫が1個据えられていた。焼土の残存はわずかである。

柱穴 P1～P4の4本支柱穴を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.65×0.56×0.43 m、P2が0.74×0.66×0.44 m、P3が0.60×0.55×0.39 m、P4が0.56×0.42×0.51 mである。いずれも形状は不整円形あるいは楕円形である。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 2基の住居内土坑を検出した。1号土坑はP3の南側で検出された。規模は長軸1.02 m、短軸0.95 m、深さ0.60 mで、長軸が南壁に平行する隅丸方形と推定される。北東隅がやや不整形で検出された。床面から0.2 mほど下がったテラス状の面から、直径0.4 mほどのピットが掘られていた。底面上0.1 m上に敲石(第65図7)が出土した。

2号土坑は1号土坑の西側に並んで南壁際で検出された。長軸1.40 m、短軸0.52 m、深さ0.22 mの隅丸長方形で、長軸は南壁に平行している。最下面は直径0.4 mの円形のピット状になっており、ピット内部上位中央に直径14 cm、厚さ9 cmの白

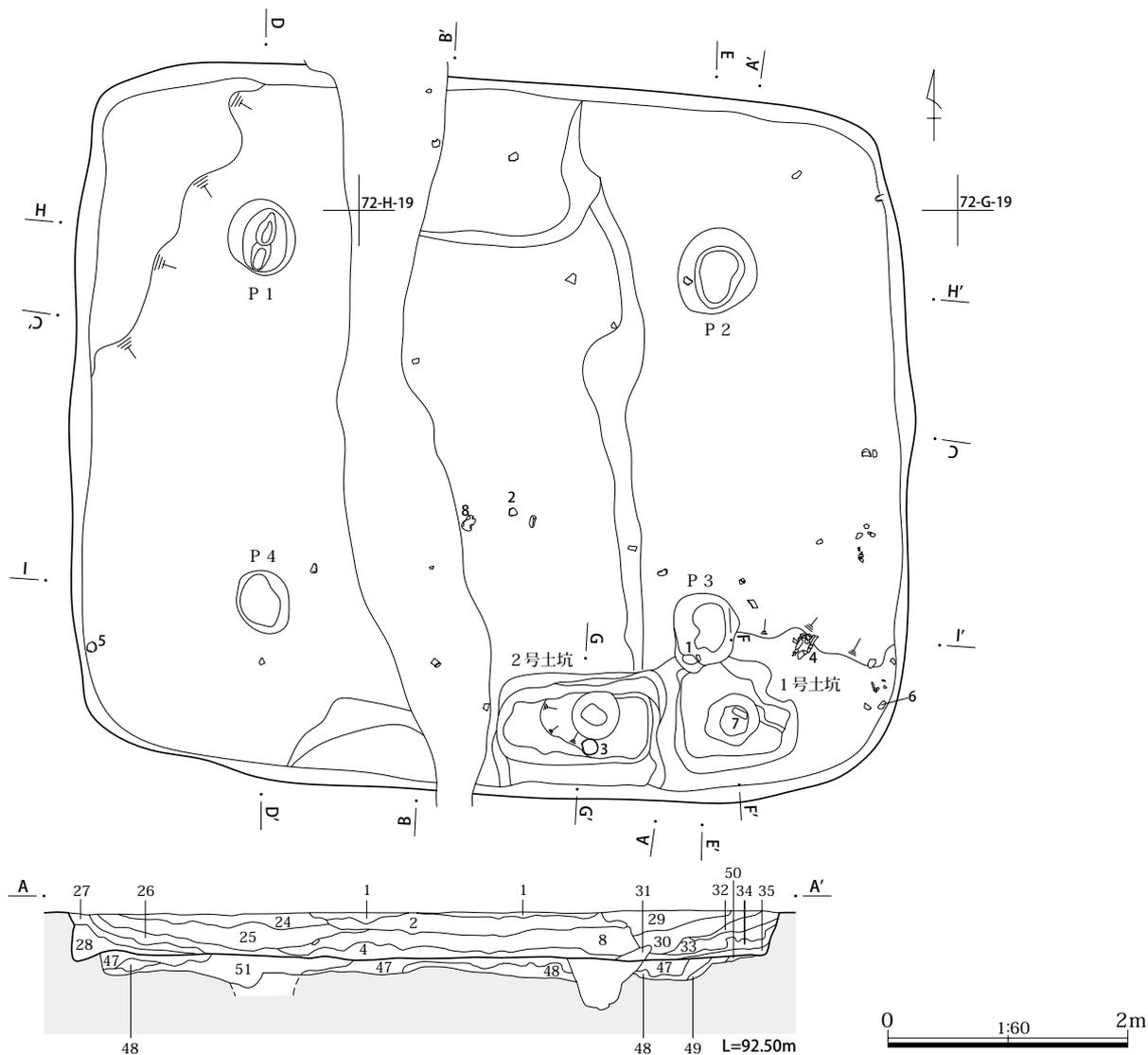
灰色粘土が出土した(PL37-1)。粘土塊の下層は黒灰色土が埋没していた。この円形ピットの南縁から土師器壺底部(第65図3)が出土した。

床面 床面は硬化していたが、特に支柱穴で囲まれた内部の硬化が著しい。四周は深く掘り込まれた掘り方面を反映してやや下がっていた。縦横に2列の地割れが北壁から南壁に向けて入り、床面を壊していた。南壁沿いの1号・2号土坑周辺の床はやや下がっていた。

掘り方 四柱穴の外側を結んだ線の外側が、不定形に若干掘り込まれていた。掘り方面でP5・P6を検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP5が0.27×0.21×0.21 m、P6が0.28×0.24×0.19 mである。支柱穴の掘り方は、最も深い柱根部分は床面と共通するが、住居内部あるいは隣の支柱穴方向に掘り広がる傾向があった。

遺物と出土状況 遺物は住居南部、特に南東部に集中して出土した。土師器鉢(第65図1)はP3南縁底面直上で出土した。甕(4)は1号土坑北東縁床面上4 cm、壺(3)は2号土坑縁底面直上で出土した。埴口縁部(2)は住居中央部床面上4 cmで出土した。擦石(5・6)はそれぞれ南西隅床面直上、南東隅床面直上で出土した。挟り入り礫(8)は中央部床面上4 cmで出土した。また黒曜石製の石鏃(第234図63)が1点と中期後半と見られる弥生土器2点(第230図19・21)が出土しているが、いずれも混入遺物と考えられるので第8章遺構外出土遺物で図示した。図示した遺物の他、縄文土器破片2点、土師器破片822点、陶器破片1点、鉄片1点、剥片1点、礫片3点、礫5点が出土している。

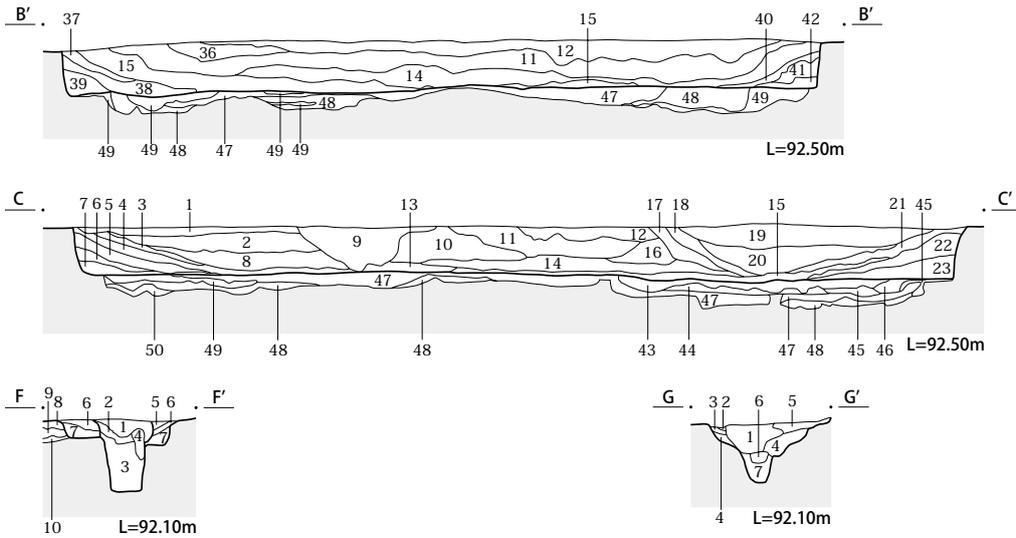
所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。発掘区の南端に位置する住居である。大型の長方形住居であったので、土層断面をキの字に設定したが、重複遺構ではなく、単独の竪穴住居遺構であった。古墳時代前期の住居は正方形と認識されていたが、本遺跡では長方形の住居が多数みつかった。弥生時代から古墳時代前期の住居構造を整理する新視点を得た。



- A - A' · B - B' · C - C'
1. 黒色土 As-Cを多く含む。
 2. 黒色土 As-Cを多く含む。直径0.5 - 1cmのローム塊を少量含む。
 3. 暗褐色土 As-Cを少量含む。直径0.5 - 1cmのローム塊をごく少量含む。
 4. 暗褐色土 As-Cをごく少量含む。ローム粒、直径0.5cm以下のローム塊をやや多く含む。
 5. 黒色土 As-Cをごく少量含む。直径1 - 2cmのローム塊をごく少量含む。
 6. 黄褐色土 ローム粒、直径1 - 2cmのローム塊を多く含む。
 7. 暗褐色土 ローム粒、直径0.5cm以下のローム塊をごく少量多く含む。
 8. 暗褐色土 As-Cを少量含む。直径0.5 - 1cmのローム塊をごく少量含む。炭粒焼土粒をごく少量含む。
 9. 黒色土 As-Cを少量含む。
 10. 黒色土 As-Cを多く含む。直径1 - 2cmのローム塊を少量含む。
 11. 暗褐色土 As-Cを多く含む。ローム粒を少量含む。
 12. 黒色土 As-Cを少量含む。ローム粒、直径1 - 2cmのローム塊をごく少量含む。
 13. 黒色土 As-Cをごく少量含む。ローム粒、直径2 - 3cmのローム塊をごく少量含む。
 14. 黒色土 直径2 - 3cmのローム塊をごく少量含む。
 15. 暗褐色土 直径1 - 3cmのローム塊を少量含む。
 16. 暗褐色土 直径1 - 2cmのローム塊を少量含む。
 17. 黄褐色土 直径2 - 3cmのローム塊を多く含む。
 18. 暗褐色土 ローム粒、直径0.5 - 1cmのローム塊を少量含む。
 19. 黒色土 As-Cを多く含む。ローム粒、直径1 - 2cmのローム塊を少量含む。
 20. 暗褐色土 As-Cを多く含む。ローム粒、直径1 - 2cmのローム塊を少量含む。
 21. 暗褐色土 As-Cをごく少量含む。ローム粒をごく少量含む。
 22. 黄褐色土 ローム粒、直径1 - 5cmのローム塊を多く含む。
 23. 黒色土 ローム粒、直径0.5cm以下のローム塊をごく少量含む。
 24. 黒色土 As-Cを多く含む。ローム粒、直径0.5cm以下のローム塊をごく少量含む。
 25. 暗褐色土 As-Cを少量含む。全体的にロームが多く混じっている。
 26. 黒色土 ローム粒、直径0.5cm以下のローム塊をごく少量含む。
 27. 暗褐色土 直径0.5cm以下のローム塊をやや多く含む。
 28. 黒色土 As-Cをごく少量含む。
 29. 黒色土 As-Cを多く含む。ローム粒、直径0.5cm以下のローム塊を少量含む。
 30. 黒色土 As-Cを少量含む。
 31. 黒色土 ローム粒、直径0.5 - 1cmのローム塊を多く含む。
 32. 黒色土 As-Cを少量含む。ローム粒、直径0.5 - 1cmのローム塊を少量含む。
 33. 黄褐色土 ローム粒、直径0.5 - 3cmのローム塊を多く含む。
 34. 黒色土 As-Cを少量含む。ローム粒を少量含む。
 35. 黄褐色土 全体的にロームが多く混じる。
 36. 黒色土 As-Cをやや多く含む。ローム粒をごく少量含む。
 37. 暗褐色土 As-Cをごく少量含む。直径0.5cm以下のローム塊を少量含む。
 38. 黄褐色土 ローム粒、直径0.5 - 2cmのローム塊を多く含む。
 39. 暗褐色土 ロームを全体的にやや多く含む。
 40. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
 41. 黄褐色土 ロームを全体的に多く含む。
 42. 暗褐色土 ローム粒をごく少量含む。
 43. 暗褐色土 As-Cをごく少量含む。直径0.5cm以下のローム塊をごく少量含む。しまつて固い。(貼り床か?)
 44. 黒色土 直径0.5 - 1cmのローム塊をごく少量含む。
 45. 黄褐色土
 46. 暗褐色土
 47. 黒色土 As-Cを少量含む。直径0.5 - 1cmの黄色砂質土塊を多く含む。
 48. 褐色粘性土と黒色土の混土 直径2 - 5cmの黄色砂質土塊を多く含む。
 49. 黒色土 黄色砂質土粒を少量含む。
 50. 黄色砂質土 黒色土粒を少量含む。
 51. 黒色土 直径1 - 2cmの褐色粘性土塊、直径1 - 2cmの黄色砂質土塊、黄色砂質土粒を多く含む。

第62図 2区1号住居(1)

第5章 2・3区の遺構と遺物



1号土坑 F - F'

1. 黄褐色土 As-Cをごく少量含む。直径0.5～1cmのローム塊を多く含む。
2. 明黄褐色土と暗褐色土の混土
3. 明黄褐色土
4. 暗褐色土
5. 黄褐色土 直径1～3cmのローム塊を多く含む。
6. 黒色土 As-Cを少量含む。直径1～3cmの暗褐色粘性土塊を少量含む。
7. 暗褐色土 直径0.5cm以下のローム塊を少量含む。
8. 灰褐色土 暗灰色粘質土をやや多く含む。粘性有。
9. 暗黒褐色土 焼土粒、炭化物を微量含む。

2号土坑 G - G'

1. 黄褐色土 ロームがまだらに多く混じる。
2. 暗褐色土
3. 暗褐色粘性土
4. 黒色土 As-Cをごく少量含む。直径0.5～1cmの暗褐色粘性土を少量含む。
5. 暗褐色土
6. 白灰色粘質土 白灰色粘土を主体とする層。
7. 黒灰色土 黄色砂質土を少量含む。粘性やや有。

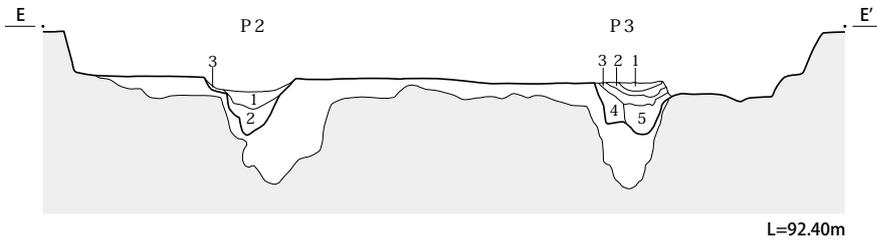


P1 D - D'

1. 黒褐色土 10YR2/3 直径1～5cmのローム塊を少量含む。
2. 黒褐色土 10YR2/2 直径0.5～10cmのローム塊を多量に含む。
3. 黒褐色土 10YR3/1 直径5～10cmのローム塊を多く含む。
4. 黒色土 10YR2/1 直径0.5～15cmのローム塊(水つきのため、粘土化したもの)を少量含む。

P4 D - D'

1. 黒褐色土 10YR2/3 直径1～5cmのローム塊を少量含む。
2. 暗褐色土 10YR3/3 直径0.5～2cmのローム塊を少量含む。
3. 暗褐色土 10YR3/4 直径2～5cmのローム塊を多く含む。

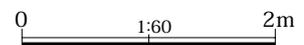


P2 E - E'

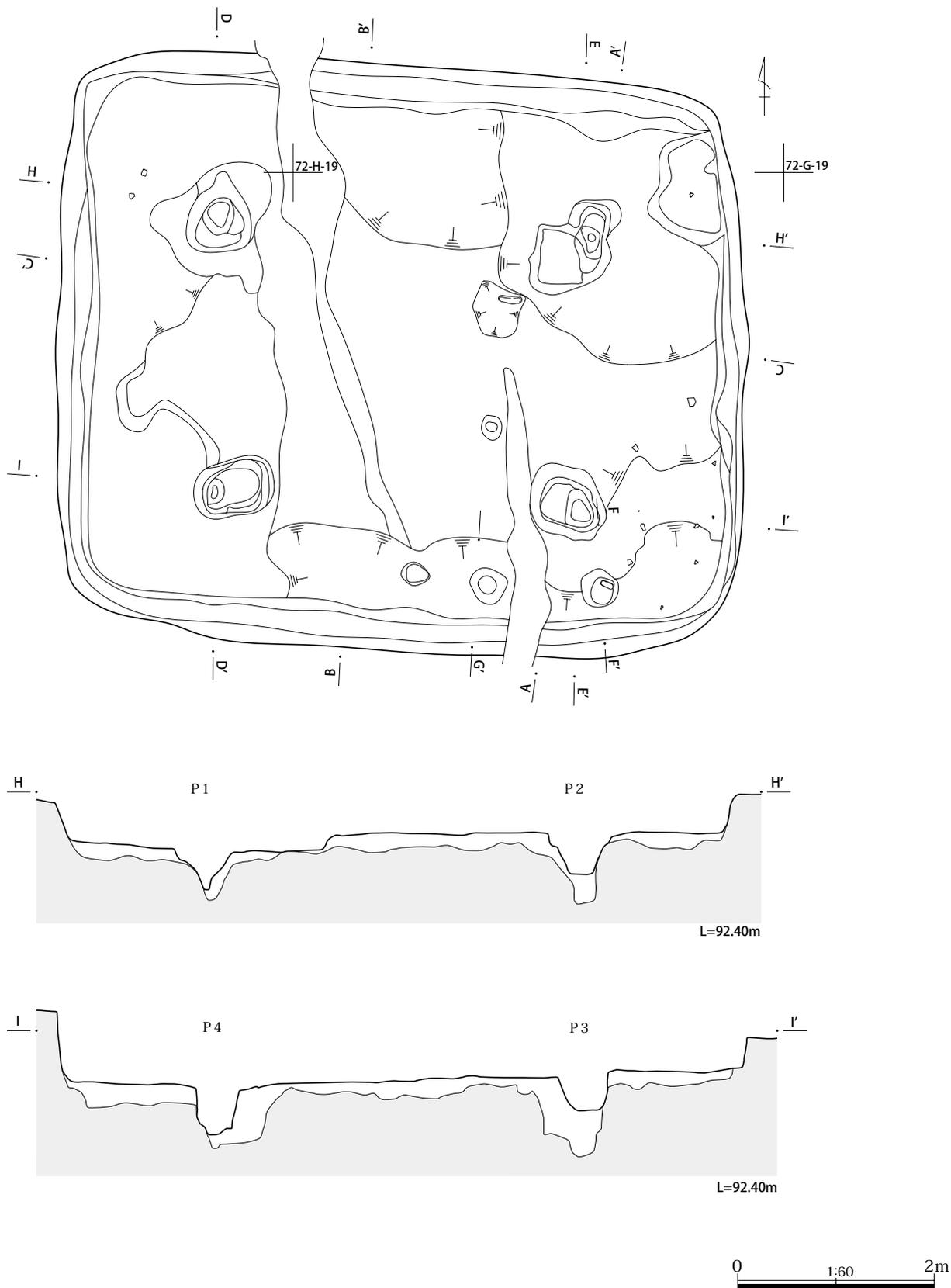
1. 黒色土 10YR2/1 直径1～2cmのローム塊をごく少量含む。
2. 黒色土 10YR2/1 直径1～3cmのローム塊を多く含む。
3. 黒褐色土 10YR3/1 直径1～2cmのローム塊を少量含む。

P3 E - E'

1. 暗褐色土 10YR3/3
2. 暗褐色土 10YR3/4 直径0.5～1cmのローム塊をごく少量含む。
3. 暗褐色土 10YR3/3 直径0.5～5cmのローム塊を多く含む。
4. 黒褐色土 10YR2/3 直径5～10mmのローム塊を少量含む。
5. 黒褐色土 10YR2/2 直径5～7cmのローム塊を少量、直径5～10mmのローム塊をごく少量含む。

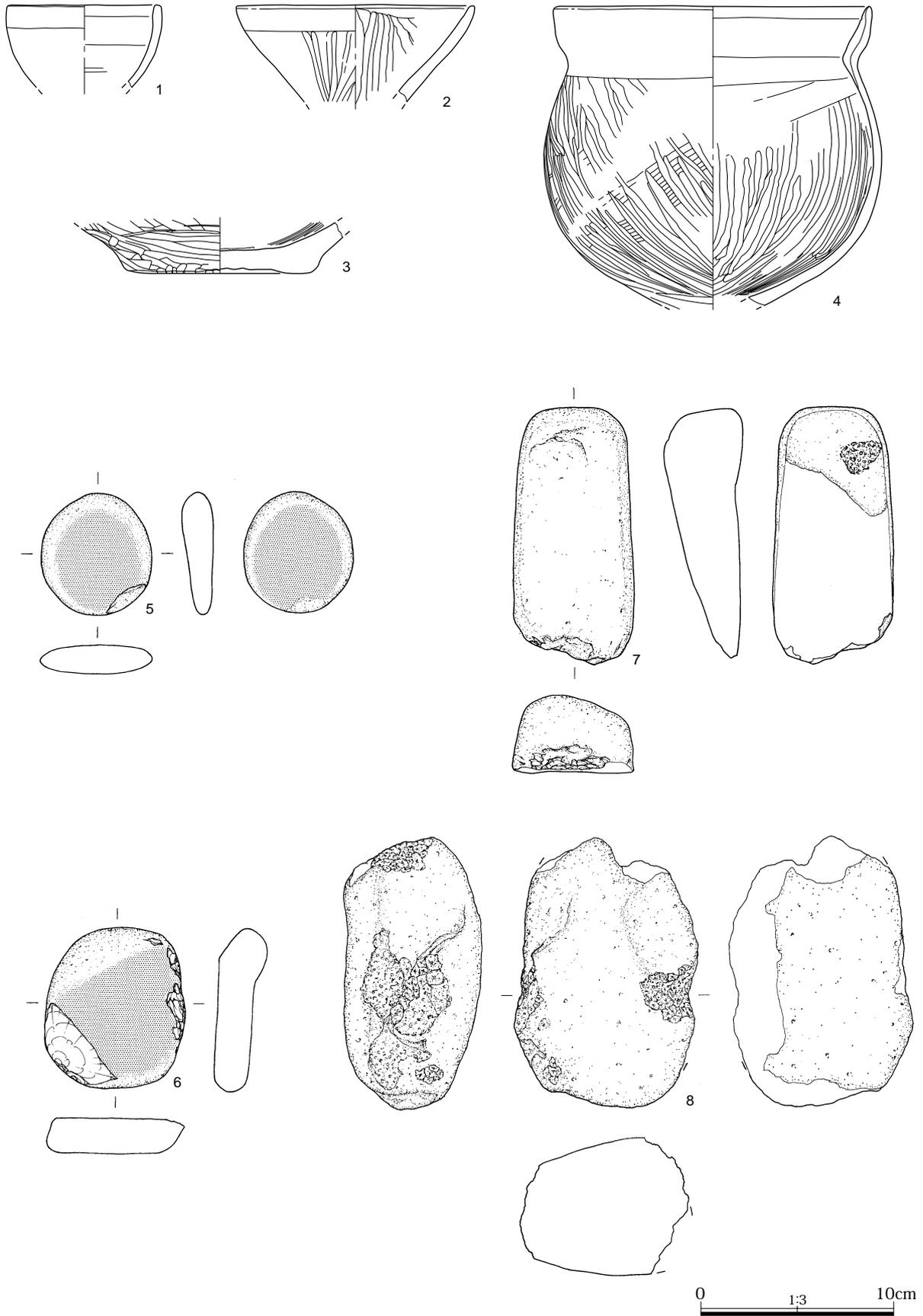


第63図 2区1号住居(2)



第64図 2区1号住居(3)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第65図 2区1号住居出土遺物

2区2号住居(付図2 第66~69図 PL37~39・150・151 遺物観察表P.487)

位置 2区3-72-H・I-19・20G

形状 西壁が発掘区域外にあり、全形を調査することができなかったが、主柱穴の位置から隅丸正方形と推定される。

重複 1号・2号土坑に先行する。

規模 長軸 7.25m 短軸 (6.68m)

残存壁高 0.34m

床面積 計測不能 長軸方位 N-1°-E

埋没土 上層は浅間C軽石を多く含む黒色土で、下層は浅間C軽石・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。床面直上には暗褐色土と黒色土・明黄褐色土の混土が覆っていた。

炉 住居中央やや北寄りに炉が検出された。炉は長径0.74m、短径0.64mの楕円形で、0.02mほど凹んでいた。中央部には厚さ0.05mの焼土が形成されていた。炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.09m掘り込み、黄白色土塊を含む黒色土を埋填して作られたと推定される。炉の周囲から棒状礫が3点出土しているが、いずれも焼土上10cmほどのところで出土しており、炉の構造物ではない。

柱穴 P1・P2の主柱穴を床面で検出した。これらは4本主柱穴の東側2本と推定される。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.96×0.79×0.72m、P2が0.74×0.61×0.76mである。P2の中位から下位にかけて、土師器甕(第69図8)が完形に近い形で口縁部を斜め下方に向けて出土した。その上位には甕(5)の口縁部から胴部の大型破片が出土した。また、南壁沿いにP3、北西部にP4を検出した。P3が0.52×0.47×0.34m、P4が0.45×0.38×0.20mである。

周溝 東壁の中央付近に周溝が検出された。上幅0.3m、深さ0.14mである。

住居内土坑 1基の住居内土坑を検出した。1号土坑は主柱穴P2の南西側で検出された。その規模は長軸1.12m、短軸0.92m、深さ0.47mで、長軸が南壁に平行する隅丸長方形である。南西部に偏っ

て0.82m×0.75mの範囲が深くなっていた。したがって北側・東側は床面から0.07mほど下がったテラス状になっていた。埋没土中から礫や土器小破片が出土した。

床面 3条の地割れが南北方向に入り、床面を壊していた。床面は硬化していたが、特に主柱穴で囲まれた内部の硬化が著しい。四周は深く掘り込まれた掘り方を反映してやや下がっていた。

掘り方 四柱穴の外側を結んだ線の外側の四周が、幅0.8~1.3m、深さ0.1~0.2mの溝状に掘り込まれていた。掘り方を埋めていたのは黄灰色土や黒色土を含む褐色土である。

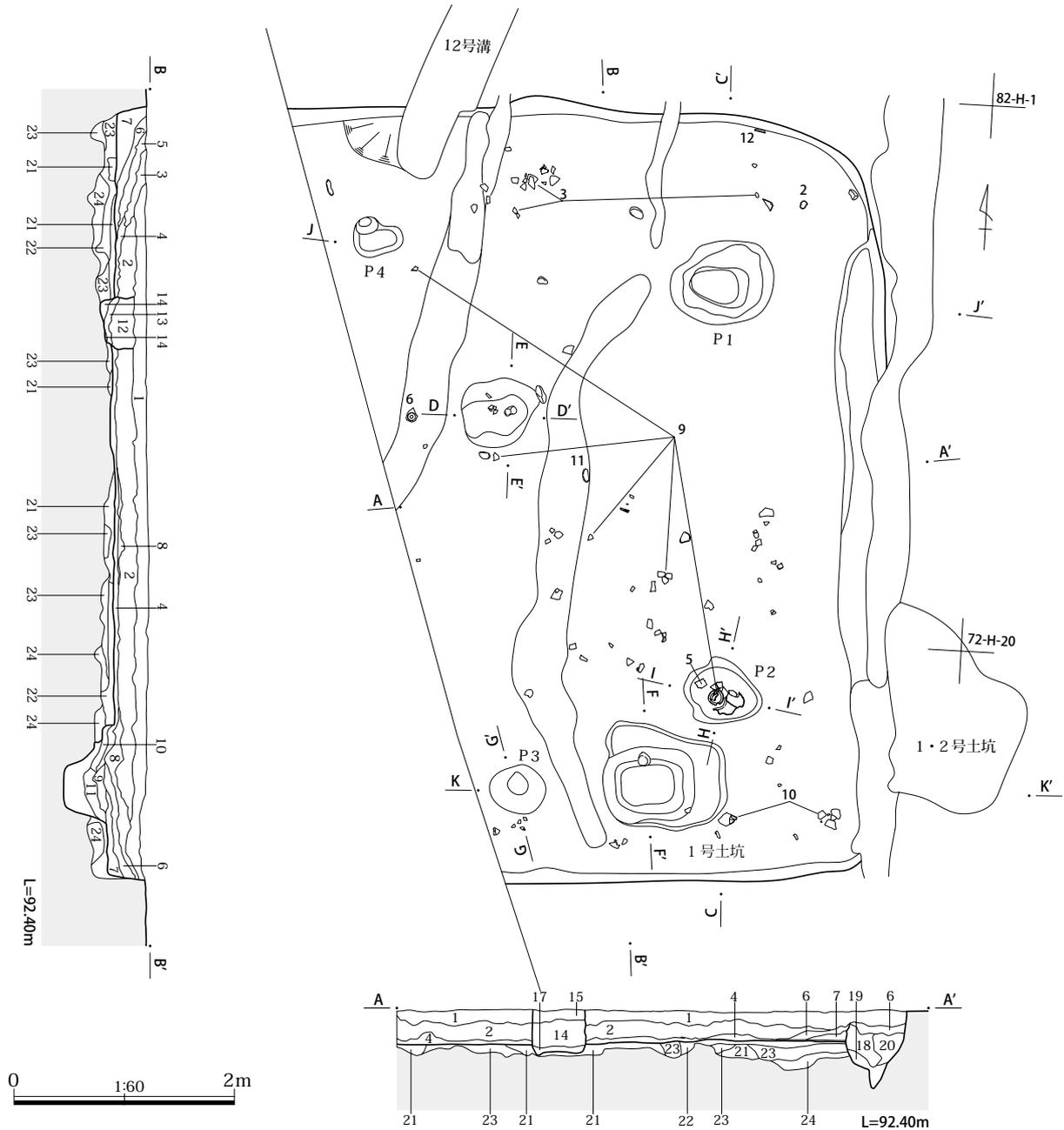
遺物と出土状況 床面近くの遺物は住居全体に散在していた。土師器鉢(第69図2)は北東隅床面上12cm、高坏(3)は北部床面上2cmで出土した。甕(9)は中央部床面直上に散在していた遺物が接合したものである。甕(10)は南東隅床面上2cmで出土した。砥石(12)は北東隅北壁際床面上2cmで出土した。

壺(6)や敲石(11)は地割れ内から出土したもので、本住居で使われたとは断定できない。また埋没土中から土師器器台(1)、甕(7)、高坏(4)が出土している。

図示した遺物の他、土師器破片822点、剥片2点、礫片6点、礫10点、棒状礫2点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。P3はその位置から入り口に関わるピットの可能性がある。P4は主柱穴の可能性も考えたが、規模が小さいこと、P1からの柱間が少ないことから主柱穴とはしなかった。もう少し西側の調査区域外に主柱穴があるものと推定される。西側の主柱穴の位置によって、住居の形態は正方形あるいは長方形のどちらかになるので、調査では明らかにできなかった。P2から出土した土器はほとんど完形の甕であった。甕の埋没位置からすれば、住居使用時=柱が柱穴内にあった時には甕はなかったと考えられ、柱抜き取り後に柱穴内に入れられたものと推定される。住居廃絶時の所作の一例として重要であろう。

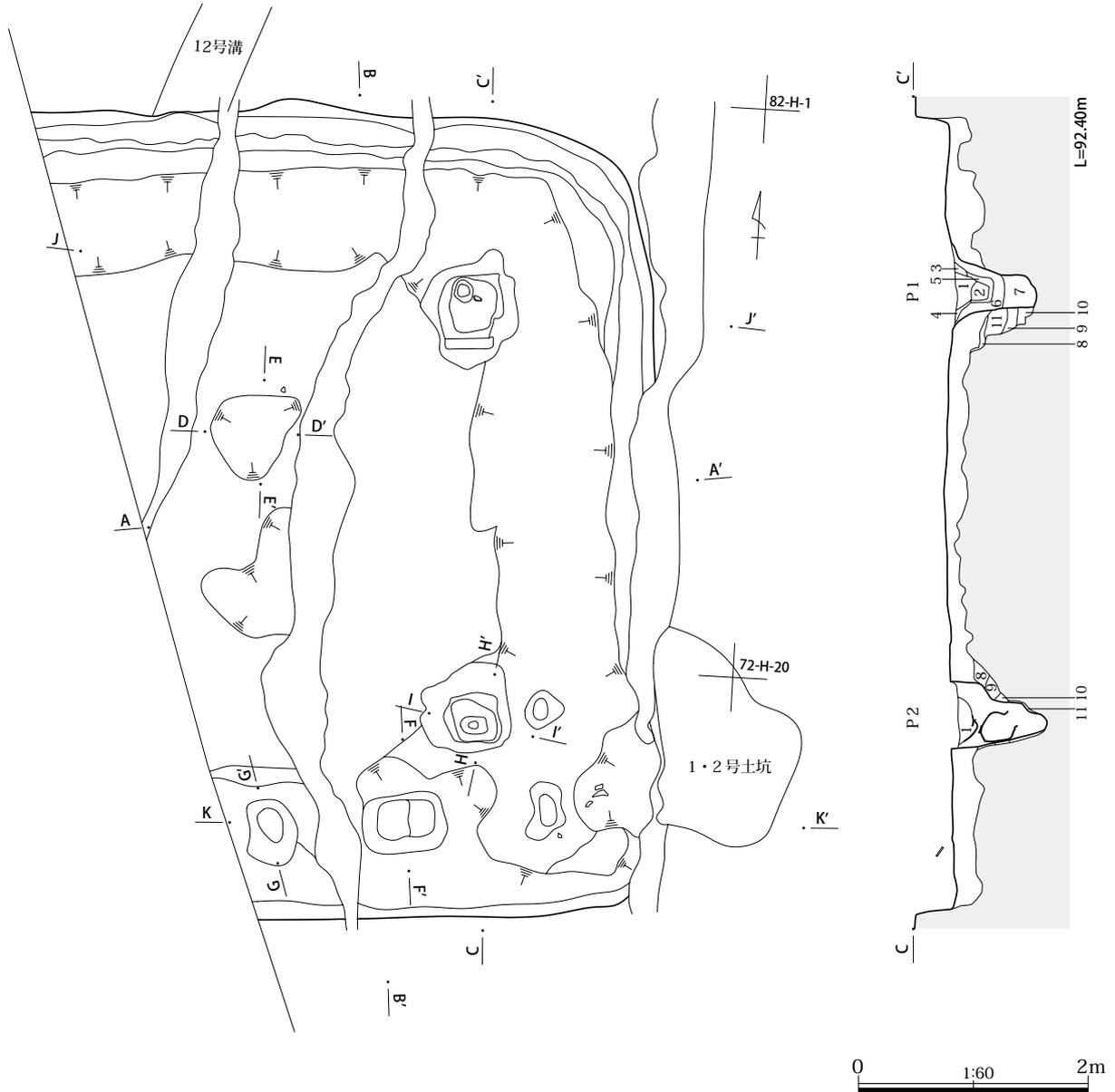
第5章 2・3区の遺構と遺物



A - A' · B - B'

1. 黒褐色土 10YR3/1 As-C 軽石。直径5～8mmの白色軽石粒を多く含む。
2. 黒褐色土 10YR3/1 As-C、直径5～8mmの白色軽石粒をやや多く含む。直径0.5～1cmのローム塊をごく少量含む。
3. 暗赤褐色土 5YR3/2 As-C、直径5～8mmの白色軽石粒を多量に含む。鉄分により変色。
4. 暗褐色土と黒色土と明黄褐色土の混土 10YR3/1 10YR2/1 10YR6/6
5. 黒色土 10YR2/1 As-Cをごく少量含む。
6. にぶい黄褐色土 10YR4/3 As-Cをごく少量含む。
7. 黒褐色土 10YR2/2 As-Cを多く含む。
8. 黒色土 10YR2/1 直径1～2cmの炭塊、直径1～2cmの焼土塊を多く含む。
9. 暗褐色土 10YR3/3 直径0.5～2mmの黄色軽石をごく少量含む。
10. 明黄褐色土 10YR6/6
11. 黒色土 10YR2/1 直径0.5～1cmのローム塊をごく少量含む。
12. 暗褐色土 10YR3/3 As-C、直径5～8mmの白色軽石粒をやや多く含む。
13. 4層の土が落ち込んだもの。
14. 明黄褐色土と黒色土 10YR6/6 10YR2/1 直径1～3cmの黒色土の塊を多く含む。
15. 黒褐色土 10YR2/1 As-Cを多く含む。直径5～10mmの白色軽石をやや多く含む。
16. 黒褐色土 10YR3/1 As-Cを多く含む。直径5～8mmの白色軽石を少量含む。直径1～3cmのローム塊をごく少量含む。
17. 4層が落ち込んだもの。
18. 黒色土 10YR2/1 As-Cをやや多く含む。直径5～8mmの白色軽石をごく少量含む。
19. 4層が落ち込んだもの。
20. 暗褐色土 10YR3/4
21. 黄灰色土 黒色土に黄色砂質土が塊状に入る。
22. 褐色土 黄色砂質土に若干の黒色土が混じる。
23. 黄灰色土 黄色砂質土が塊状に入る。
24. 黒色土 黒色土に黄色砂質土が入る。

第66図 2区2号住居(1)

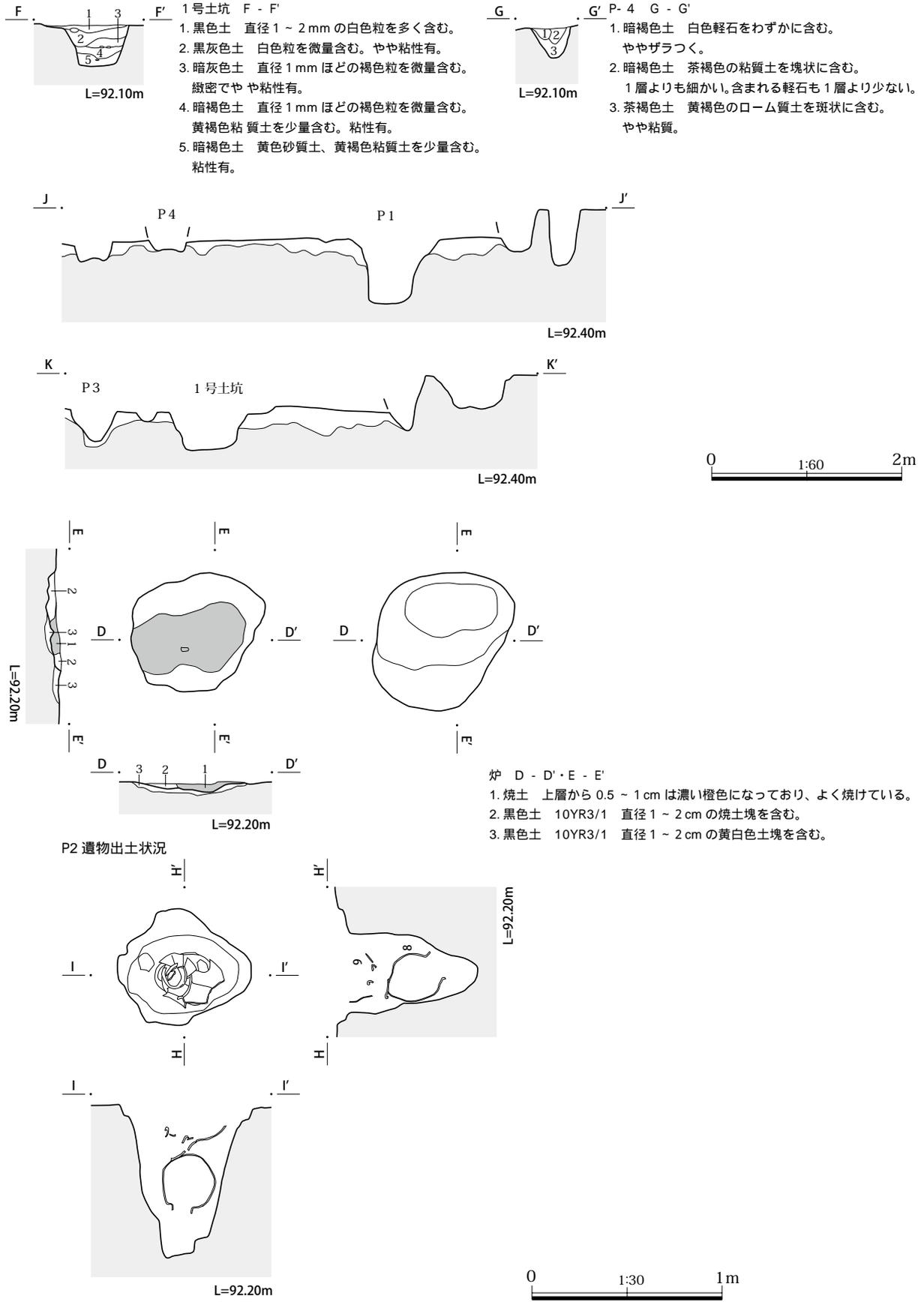


P1・P2 C - C'

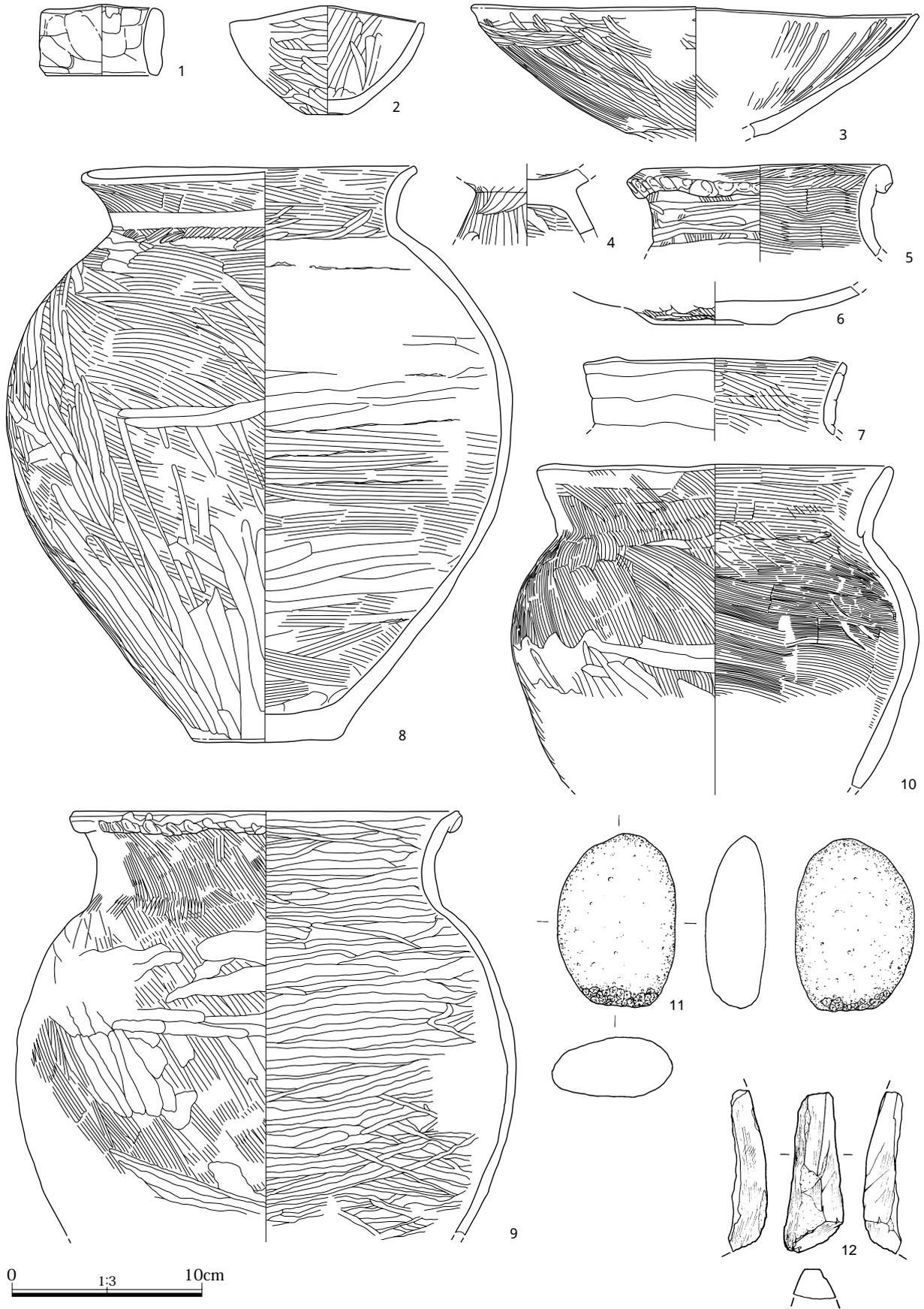
1. 黒色土 褐色粒を少量含む。焼土、炭か、微量混入。
2. 暗褐色土 黄白色粘質土をやや多く含む。粘性やや有。
3. 暗褐色土 2層と似ているが、1層の黒色土を少量含む。粘性有。
4. 暗褐色土 3層とほぼ同一。粘性有。
5. 明黒褐色土 やや粘性はあるも軟質でしまり悪い。
6. 暗褐色土 ローム粒、直径1～2cmのローム塊を少量含む。
7. 暗褐色土 直径1～2cmのローム塊、黒色土、直径1～2cmの暗褐色土塊の混土。
8. 黄褐色土 暗褐色土をまばらに全体的に少量含む。
9. 暗褐色土 黄褐色土粒、直径0.5～1cmの黄褐色土塊を少量含む。
10. 灰色粘性土 黄褐色土粒を少量含む。
11. 黄褐色土 直径2～3cmの黒褐色土塊を多く含む。

第67図 2区2号住居(2)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第68図 2区2号住居(3)



第 69 図 2区2号住居出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区3号住居(付図2 第70～77図 PL39～43・151～154 遺物観察表P.488～490)

位置 2区3-82-F・G-1・2G

形状 隅丸長方形

重複 1号井戸、9号土坑に先行する。2号掘立柱建物に後出する。

規模 長軸 7.69 m 短軸 5.84 m

残存壁高 0.45 m

床面積 39.73 m² 長軸方位 N-90°-E
埋没土 上層は浅間C軽石・白色軽石を含む暗褐色土で、下層は浅間C軽石を多く含む黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北東寄りに炉が検出された。炉は長径0.95 m、短径0.65 mの楕円形で、0.05 mほど凹んでいた。中央部には厚さ0.02 mの焼土が形成されていた。炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.10 mほど掘り込み、灰白色粘土を埋填して作られたと推定される。焼土のすぐ南縁に2点、さらに凹みの南縁には1点の礫が置かれていた。炉の構造物と推定される。また炉中央には焼土化していない粘土が残っていた。

柱穴 P1～P4の4本主柱穴を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.62×0.55×0.67 m、P2が1.00×0.80×0.39 m、P3が0.76×0.63×0.47 m、P4が0.90×0.80×0.72 mである。いずれも不整形円形・不整形楕円形である。P4からは中位から下位にかけて土師器破片が多量に出土した。10個体ほどの破片が重なっていたが、完形に復元できるものはなかった。

周溝 検出されなかった。

住居内土坑 2基の住居内土坑を検出した。1号土坑は主柱穴P2の南西側で検出された。床面では長径0.67 m、短径0.58 m、深さ0.40 mの楕円形で検出されたが、掘り方面で精査した結果、長軸が南壁に平行する隅丸長方形で確認できた。掘り方面での規模は長軸0.52 m、短軸0.45 m、深さ0.30 mである。埋没土中から土師器壺口縁部破片等が出土した。

2号土坑は1号土坑の0.6 m西側に並んで検出さ

れた。長軸0.58 m、短軸0.50 m、深さ0.56 mで南側には0.08 mほど下がったテラス状の凹みがある。床面 床面は平坦で、硬化していた。P1・P4の間には後出する1号井戸があり、床面が壊されていた。掘り方 四柱穴の外側を結んだ線の外側の四周が、幅0.6～1.0 m、深さ0.05～0.1 mの溝状に掘り込まれていた。炉の周辺は、炉上面で確認できた棒状礫が、掘り方面でも見られたほどで、ほとんど掘り方で掘り込まれていない。掘り方を埋めていたのは黄褐色土や暗褐色粘土を含む暗褐色土である。

主柱穴P1・P2のそれぞれ南側に接してP5・P6が検出された。それらは壁方向に平行するほぼ隅丸長方形で、規模(長径×短径×深さ)はP5が0.78×0.60×0.61 m、P6が0.78×0.70×0.48 mである。隣り合うP1とP5、P2とP6はほとんど同じ深さであった。

また、南壁と東壁に直交する小規模な溝を2条検出した。南壁の溝は西壁から3.0 mのところであり、長さ1.17 m、上幅0.3 m、掘り方面からの深さ0.18 mである。これは床面からの深さにすると0.36 mである。東壁の溝は南壁から1.8 mのところであり、長さ1.36 m、上幅0.31 m、掘り方面からの深さ0.16 mである。これは床面からの深さにすると0.43 mである。

東壁沿いに本住居に重複して隅丸方形のピットを3基検出したが、住居床面では検出されなかったこと、東側の遺構確認調査により対応する柱列が検出されたことから、本住居に先行する2号掘立柱建物の西側の側柱列と判断した。

遺物と出土状況 埋没土中や床面近くで多量の遺物が出土した。特に南西隅には埋没土上層から床面にかけて重なるように出土した。住居埋没過程で流れ込んだ遺物と考えられる。その他の地点では、床面近くの遺物は全体に散在していた。

土師器高坏(第73図1)は炉北縁床面直上で、高坏(2)はP1東部の床面、高坏(3)は主柱穴P2の中層で出土した。器台(4)は南西部床面上3 cmで出土した。埴(5・6)はそれぞれ南東部、北

東隅の床面直上で出土した。壺(7)は支柱穴P4の上層で出土した。

大型の壺は7個体を図示した。住居内に散在した複数の破片が接合したもので、その中には支柱穴内から出土したものが含まれるのが特徴である。壺(8)は南西隅の床面直上から25cm浮いた破片までと支柱穴P4とP3の中層で出土した破片が接合した。壺(9)は中央部から北部に出土した床面上0cmから10cmまでの破片と支柱穴P4出土の破片が接合した。壺(第74図10)は南西部・北西部で出土した床面上0cmから12cmまでの破片と支柱穴P1とP4で出土した破片が接合した。壺(11)は南西部・北西部で出土した床面上0cmから12cmまでの破片と支柱穴P1とP4で出土した破片が接合した。壺(第75図12)は西部から北部にかけて出土した床面上0cmから4cmまでの破片と支柱穴P4で出土した破片が接合した。壺(13)は中央部から南部にかけて出土した床面上0cmから10cmまでの破片が接合した。壺(14)は中央部から北東部および南部で出土した床面上0cmから19cmまでの破片と支柱穴P2で出土した破片が接合した。

甕(第75図15)は弥生土器の影響を残した器形であるが、S字甕(第76図25)と並んで、南東隅床面直上で出土した。台付甕(第75図16)は南西隅床面上2~3cmで出土した破片と支柱穴P2内で出土した破片が接合している。他の甕は底部が欠損しているため、平底が台付かがはっきりしない。甕(17・第76図19)は口縁部外面に刻み目があり古相を見せているが、17は南部床面直上で、19は南西部で床面上4~10cmで出土した破片が接合した。甕(18)は支柱穴P4内で、20は南西部で出土した床面上2~15cmの破片と支柱穴P4から出土した破片が接合した。21・23も同様で南西部で出土した床面上2~10cmの破片と支柱穴P4から出土した破片が接合した。22は中央部床面上5cmの破片と北東部床面上20cmの破片が接合した。24は南西部で床面直上から床面上9cmで出

土した遺物が接合した。

S字甕(第77図26・27)は北部から北西部で床面上10cm前後の破片が接合した。台付甕の台部は単口縁の甕につくものと推定される下端部の折り返しのないものがほとんどで、多くは床面より数cm浮いた状態で出土した。

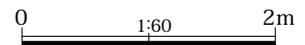
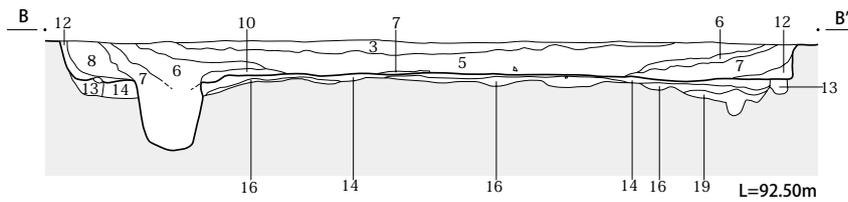
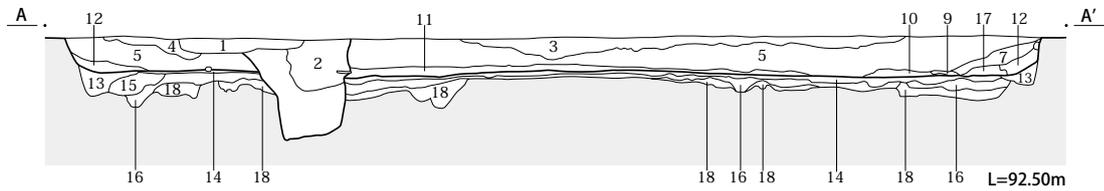
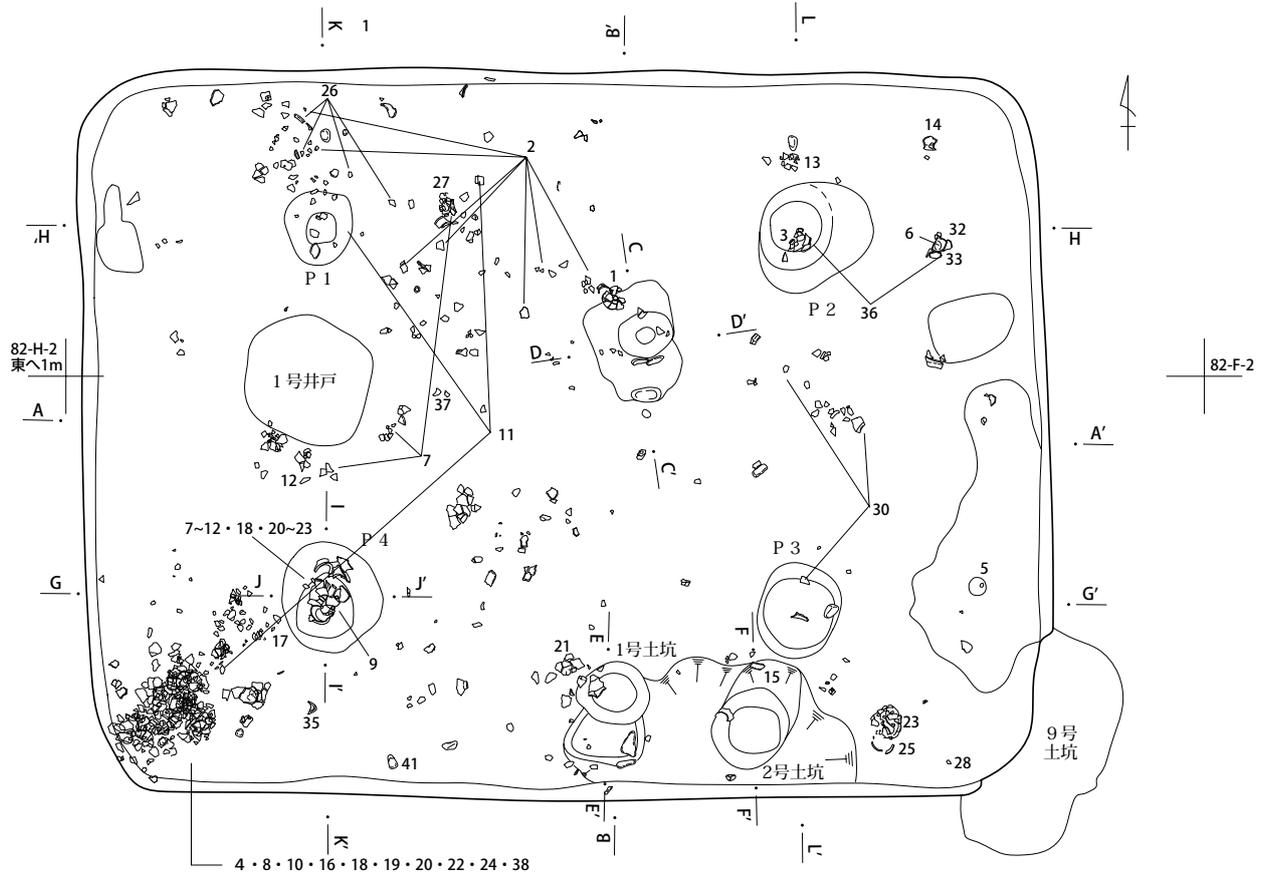
砥石(39・40)は埋没土中から、擦石(41)は南壁際床面上10cmで出土した。また南壁際で打製石斧が1点出土しているが、混入品であることから遺構外出土遺物として第8章で報告した(第234図70)。図示した遺物の他、縄文土器破片2点、土師器破片1436点、陶器破片1点、剥片1点、礫片14点、礫10点、棒状礫1点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居は長軸短軸比1.32で、今回の調査で検出された住居のなかで最も細長い長方形である。しかし弥生時代後期の小判形に近い形態とは異なり、隅は丸いが、各壁は直線になっている。1号住居の所見でも述べたが、弥生時代から古墳時代への住居形態の変遷をもう一度整理しなければならないだろう。

2号土坑は位置からすると入り口施設の可能性がある。掘り方で検出されたP5・P6は古い支柱穴と考えられる。通常ならば、本住居は北側に拡張されたものと考えられるが、想定される拡張は北壁が24cmほど広がるだけであり、不自然である。この柱穴掘り直しについては不明と言わざるを得ない。また、南壁・東壁に検出された小溝は従来間仕切り溝といわれていたものであるが、調査では溝の機能を特定することはできなかった。

支柱穴P4中には土器が重なり合って出土した。これらには少なくとも11個体に接合する破片が含まれており、柱穴埋没時に流れ込んだと推定される。これらの遺物に接合するのは南西隅に集中して出土した遺物群であることから、本住居埋没過程で南西隅から投棄された遺物の一部が、埋没途中であった支柱穴P4に入り込んだと考えておきたい。したがって南西隅出土遺物は東部・北部の床面出土遺物と同時期か、やや新しい時期のものと推定される。

第5章 2・3区の遺構と遺物



A - A'・B - B'

1. 攪乱 (試掘トレンチ)

2. 黒褐色土 やや砂質。小礫多く混入 (11号土坑埋土)

3. 暗褐色土 やや砂質。As-C及び直径1cmほどの白色軽石。(Hr-FPが大胡火砕流混入)

4. 暗褐色土 土に黄褐色小塊少量混入。

5. にぶい黄褐色土 やや砂質。黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土塊の混土。As-C少量混入。

6. 黒褐色土 やや砂質。As-C及び白色軽石少量混入。

7. にぶい黄褐色土 5層の土と同様だが、黄褐色土塊の大きさが小さい。

8. 黒褐色土 As-C及び白色軽石多く混入。

9. 明黄褐色土 やや砂質。焼土粒少量混入。

10. 褐色土やや砂質。黄褐色土小塊少量混入。

11. 黒褐色土 やや粘質。

12. 暗褐色土 やや砂質。黒褐色土、及び黄褐色土小塊少量混入。

13. 暗黄褐色土 黄褐色塊を多く含む。軟質。

14. 明黒灰色土 暗色粘土、黄褐色土小塊を主体とした層。貼り床面。

15. 暗褐色土黄褐色塊を少量含む。やや粘性有。

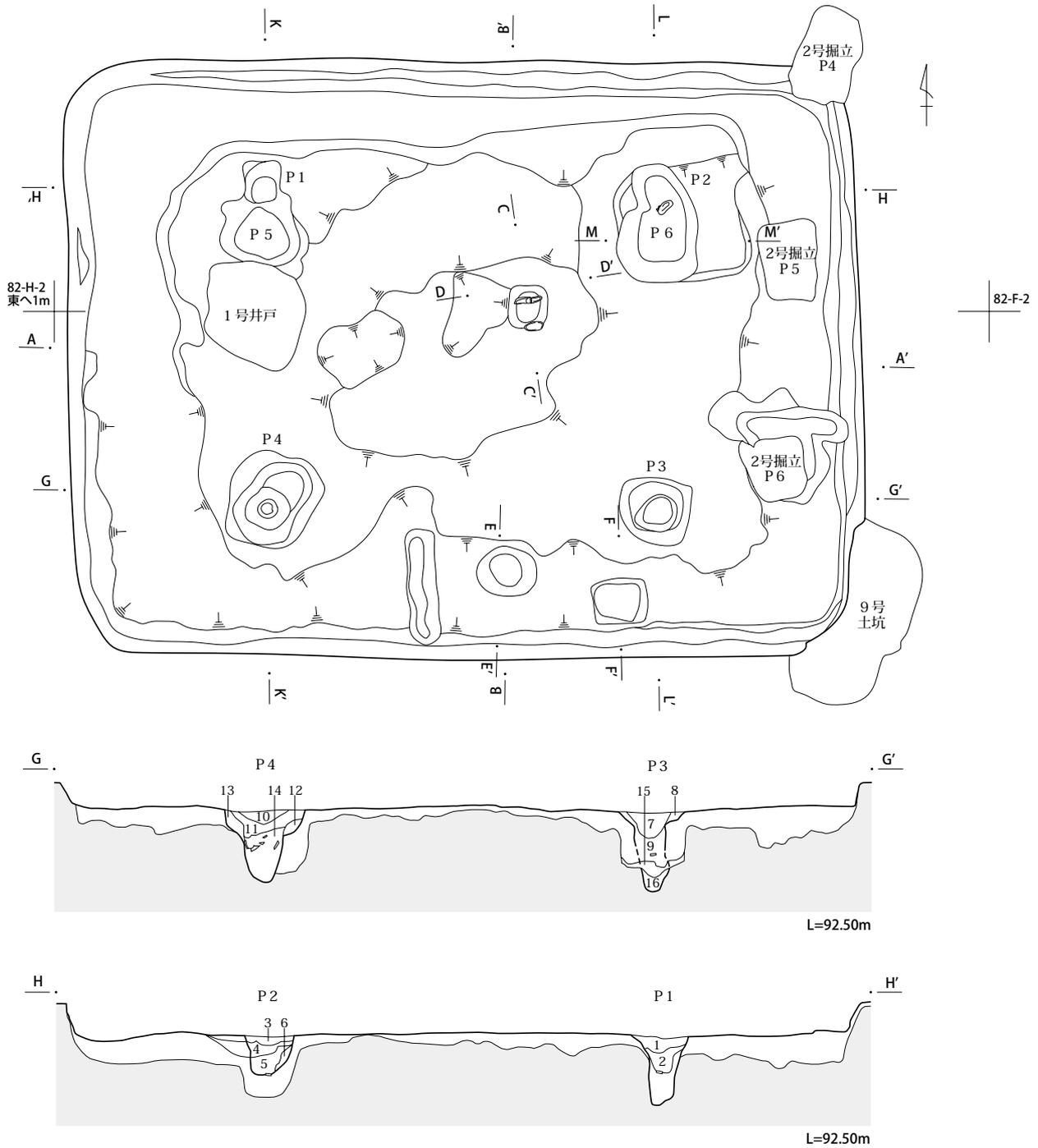
16. 暗黒褐色土白色粒を微量含む。しまり良く、やや粘性有。

17. 暗赤褐色土 焼土を主体とした層。

18. 暗灰褐色土 黄褐色土塊を多く含む。やや軟質。

19. 黄褐色土 黄褐色土塊を多く含む。軟質でしまり悪い。

第70図 2区3号住居(1)



P ~ P 4 G-G'・H-H'

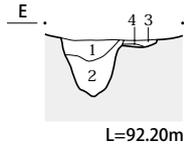
1. 暗褐色土 黄色砂質土塊（地山）がやや多く、炭化物が少量混入。
2. 暗褐色土 黄色砂質土塊が微量混入。やや粘性有。
3. 暗褐色土 黄色砂質土が微量。焼土が微量混入。
4. 暗褐色土 直径3～40mmほどの黄色砂質土塊が多く混入。やや粘性有。
5. 暗灰褐色土 黄色砂質土を微量含む。粘性やや有。
6. 暗灰褐色土 5層と同じだが崩落土（黄色砂質土）を多く含む。
7. 黒灰色土 黄色砂質土、白色粘土を共に少量混入。
8. 黒灰色土 灰、炭化物を多く、焼土を少量含む。

9. 暗褐色土 黄色砂質土を少量含む。やや粘性有。
10. 黒褐色土 炭化物・灰・黄色砂質土を共に少量含む。
11. 黒褐色土 土質は10層と似ているが、炭化物・灰を含まない。
12. 暗褐色土 黄色砂質土塊を多く含む。
13. 暗褐色土 12層と同質。
14. 暗褐色土 混入物は少なく、土器が多く検出。
15. 直径2～3cmの黄白色土塊と黒色土塊の混土。
16. 不明

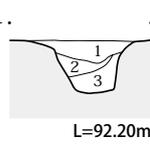
0 1:60 2m

第71図 2区3号住居(2)

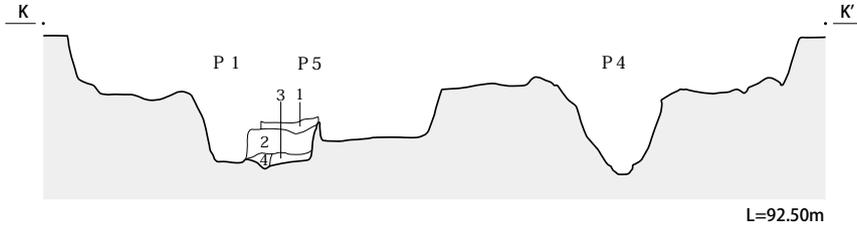
第5章 2・3区の遺構と遺物



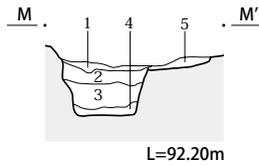
- 1号土坑 E - E'
1. 暗黒褐色土 直径1～4mmの褐色土粒をやや多く、黄色砂質土を少量含む。
 2. 黒灰色土 直径1～3mmの白色粒を少量含む。やや粘性有。
 3. 暗黄褐色土 黄色砂質土塊を主体とした層。
 4. 黒褐色土 黄色砂質土塊を多く含む。



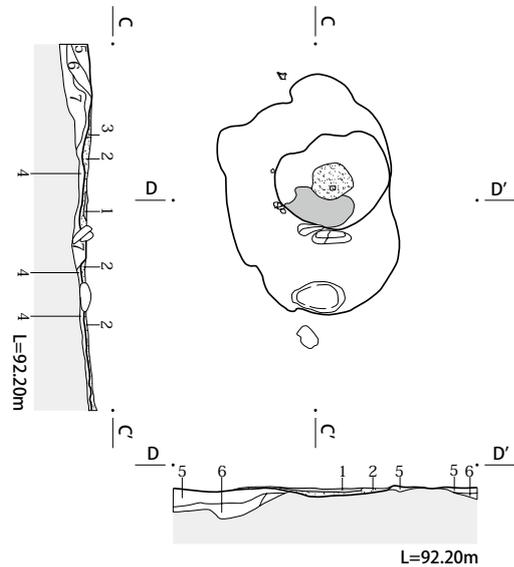
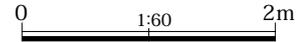
- 2号土坑 F - F'
1. 黒褐色土 直径1～3mmの白色粒を少量含む。
 2. 黒褐色土 土質は1層と似ているが、黄色砂質土塊を少量含む。
 3. 暗褐色土 黄色砂質土塊をやや多く含む。粘性やや有。



- P-5 K - K'
1. 黒色土 黄白色土塊を含む。
 2. 黒色土 黄白色土塊を多量に含む。
 3. 灰白色砂質土
 4. 黒褐色土 黄白色土粒を含む。

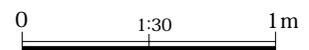
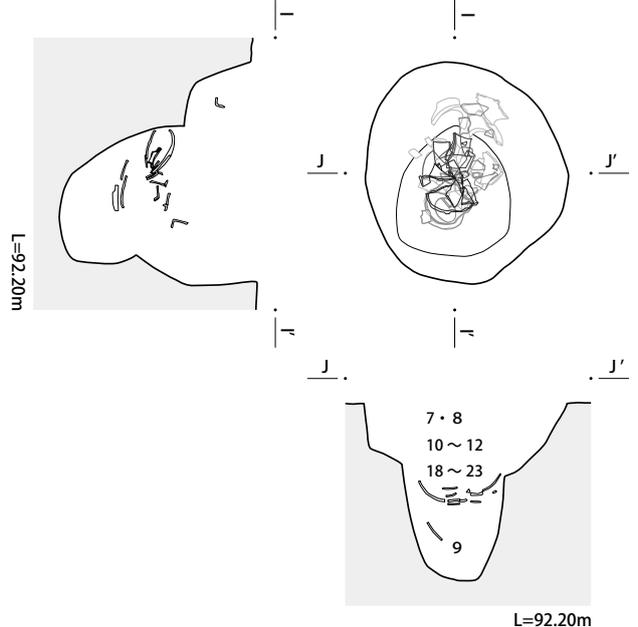


- P-6 M - M'
1. 黒褐色土 黄褐色土塊をやや多く含む。軟質。
 2. 暗黄褐色土 黄褐色土塊を多く、明黒褐色粘質土塊を少量含む。
 3. 暗黄褐色土 黄褐色土塊をやや多く、明黒褐色粘質土塊を多く含む。やや粘性。
 4. 暗黒褐色土 黄褐色土塊を少量含み、明黒褐色粘性土を主体とした層。
 5. 黒褐色土 黄褐色土塊を多く含む。軟質。

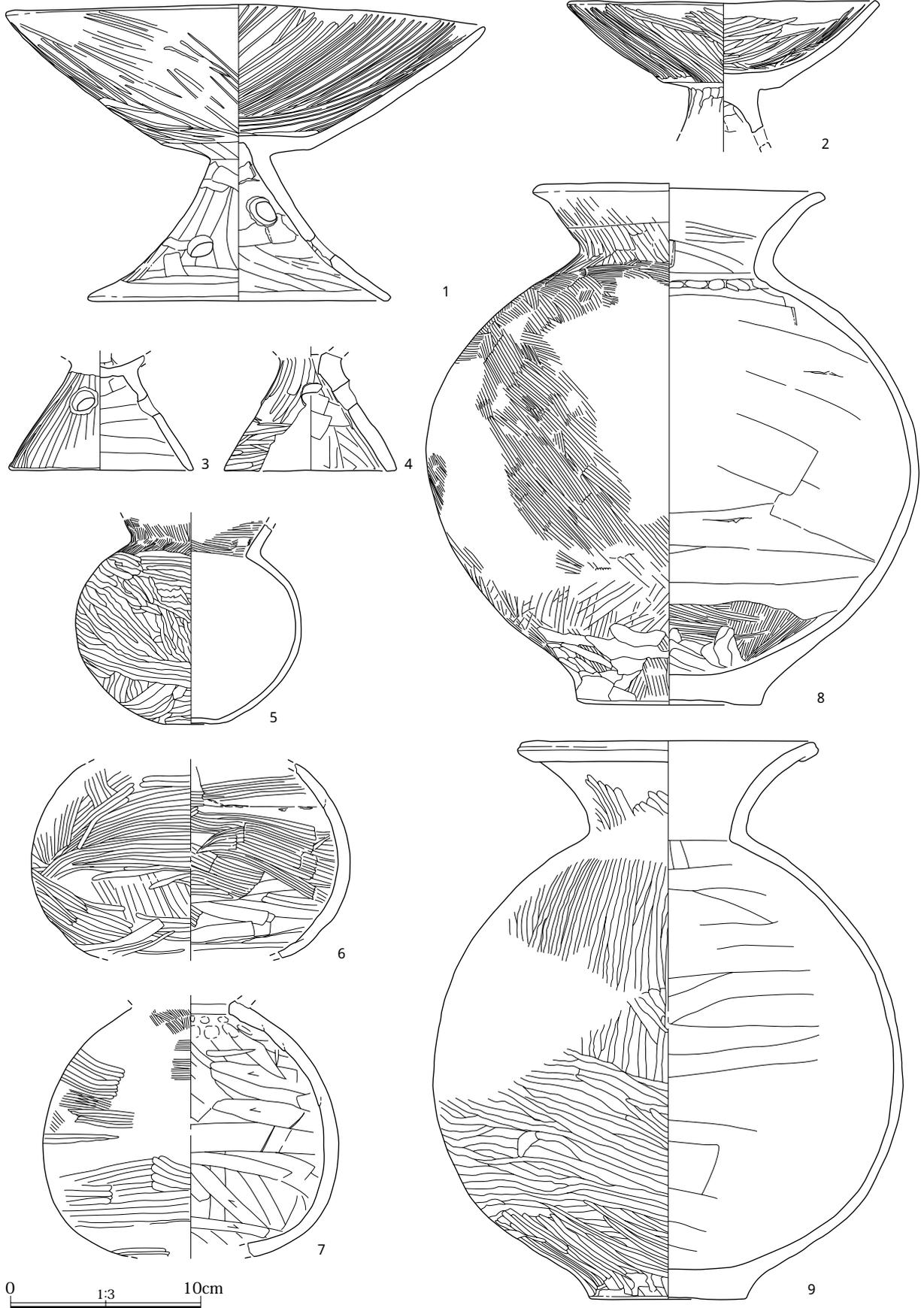


- 炉 C - C'・D - D'
1. 焼土
 2. 灰白色粘土
 3. 灰
 4. 灰褐色土 黄白色砂質土塊を含む。
 5. 褐色土 黄白色土粒を含む。
 6. 黒色土 灰白色土粒を含む。
 7. 黄白色砂質土塊と灰褐色土塊の混土。

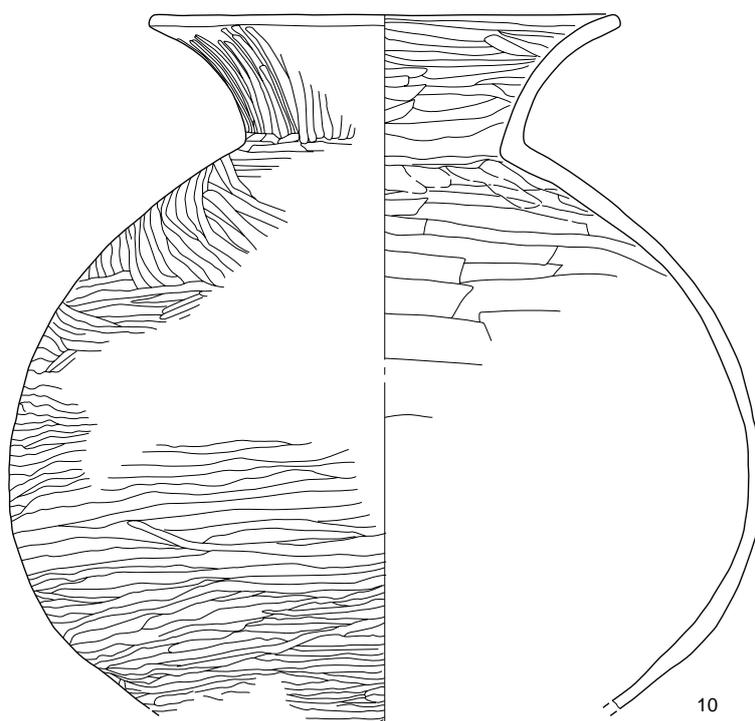
P4 遺物出土状況



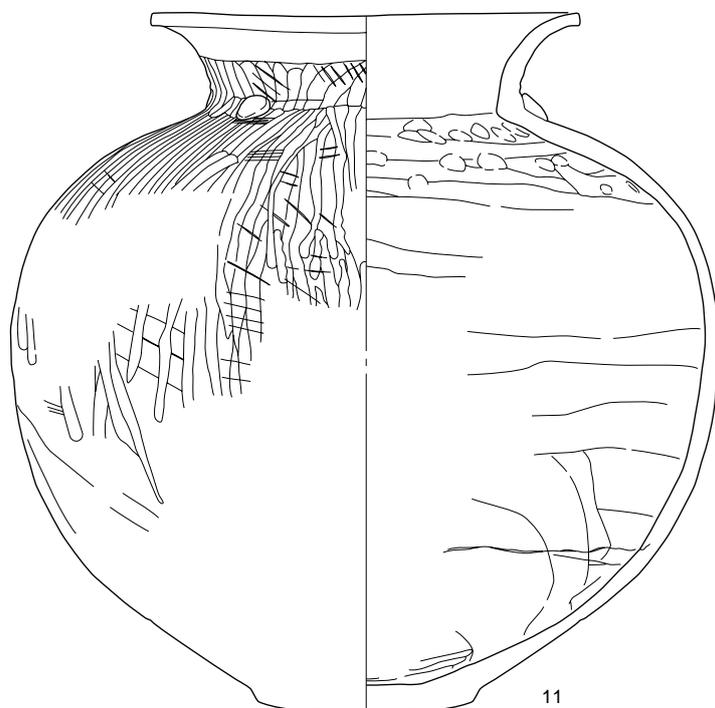
第72図 2区3号住居(3)



第73図 2区3号住居出土遺物(1)



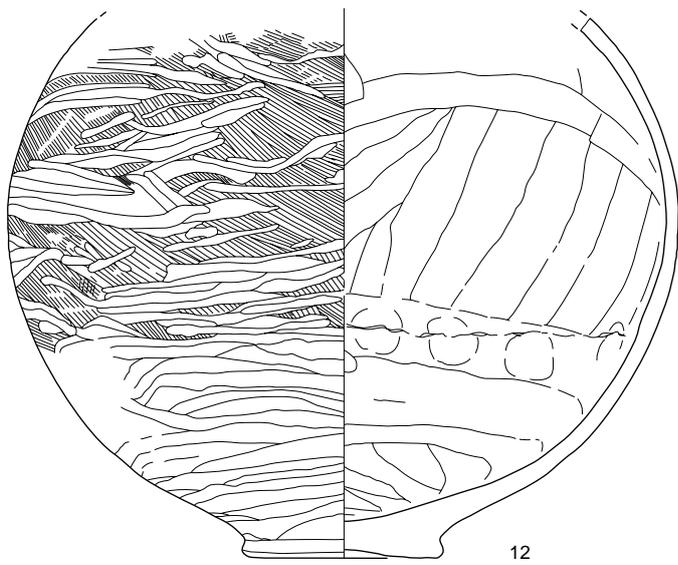
10



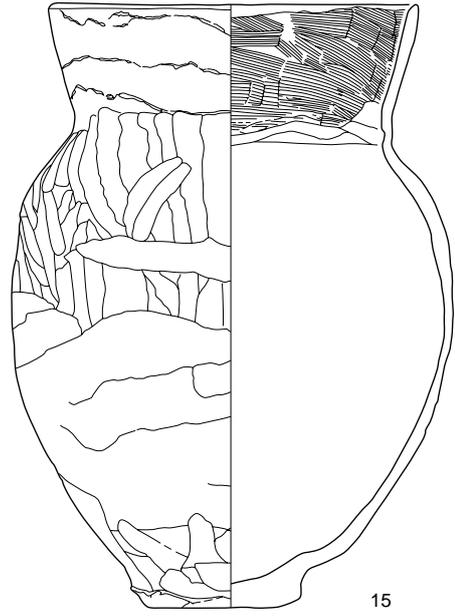
11

0 1:3 10cm

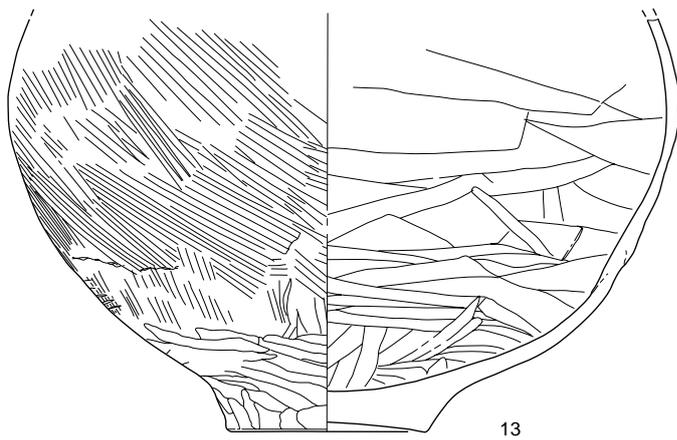
第74図 2区3号住居出土遺物(2)



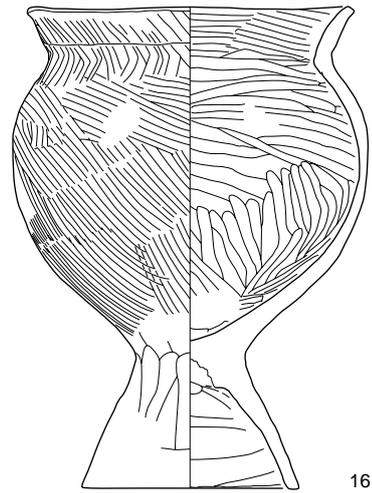
12



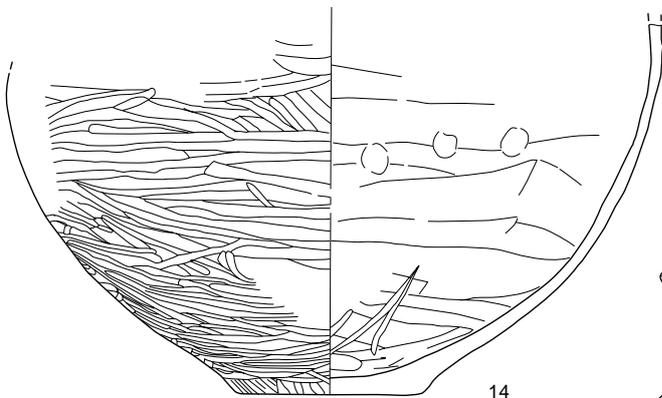
15



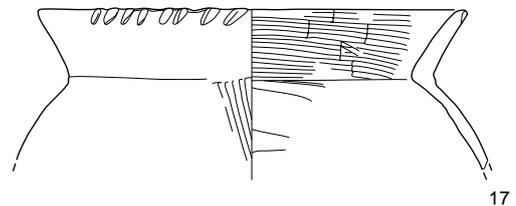
13



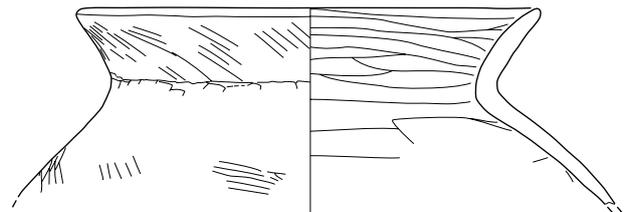
16



14



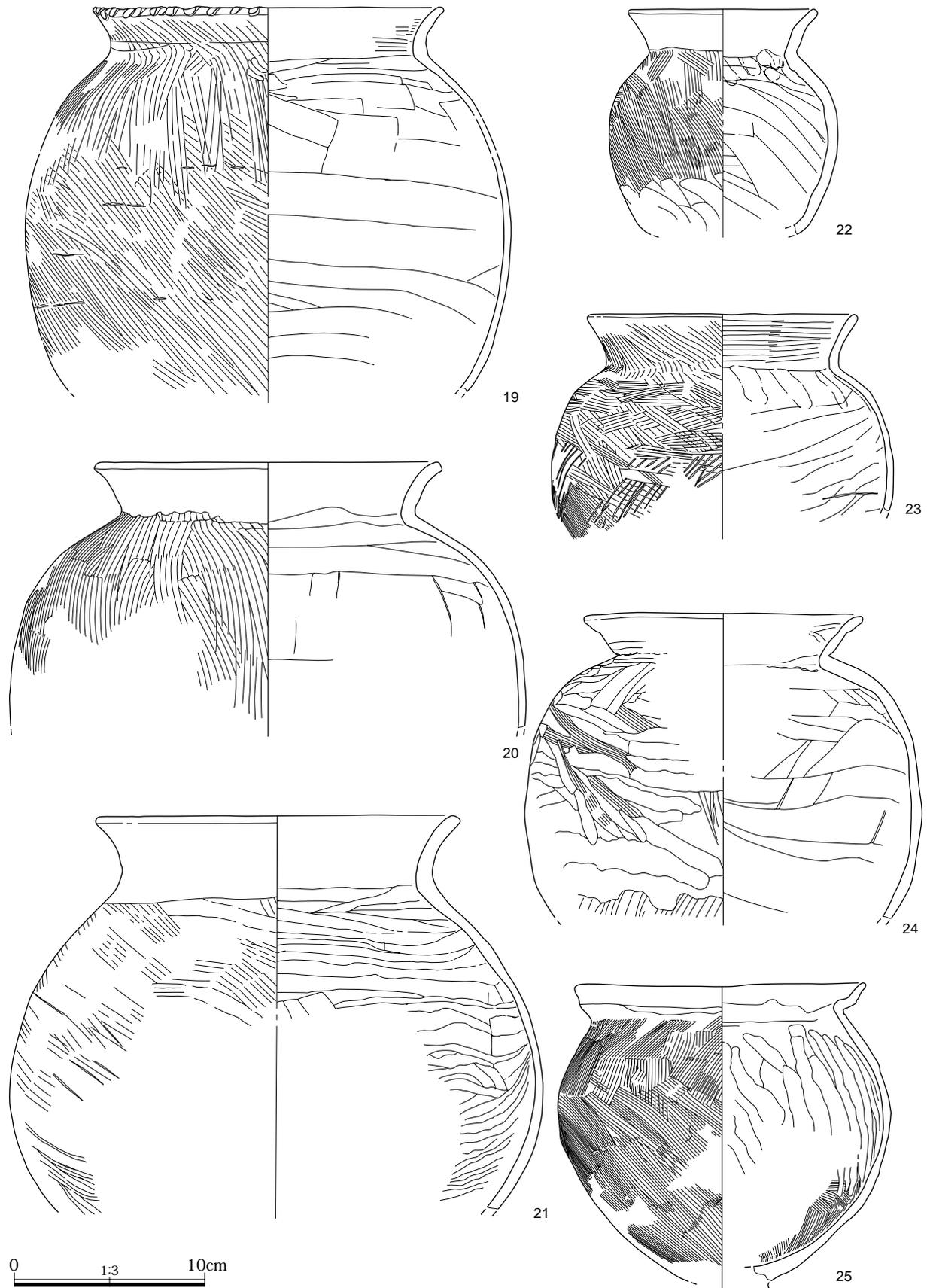
17



18

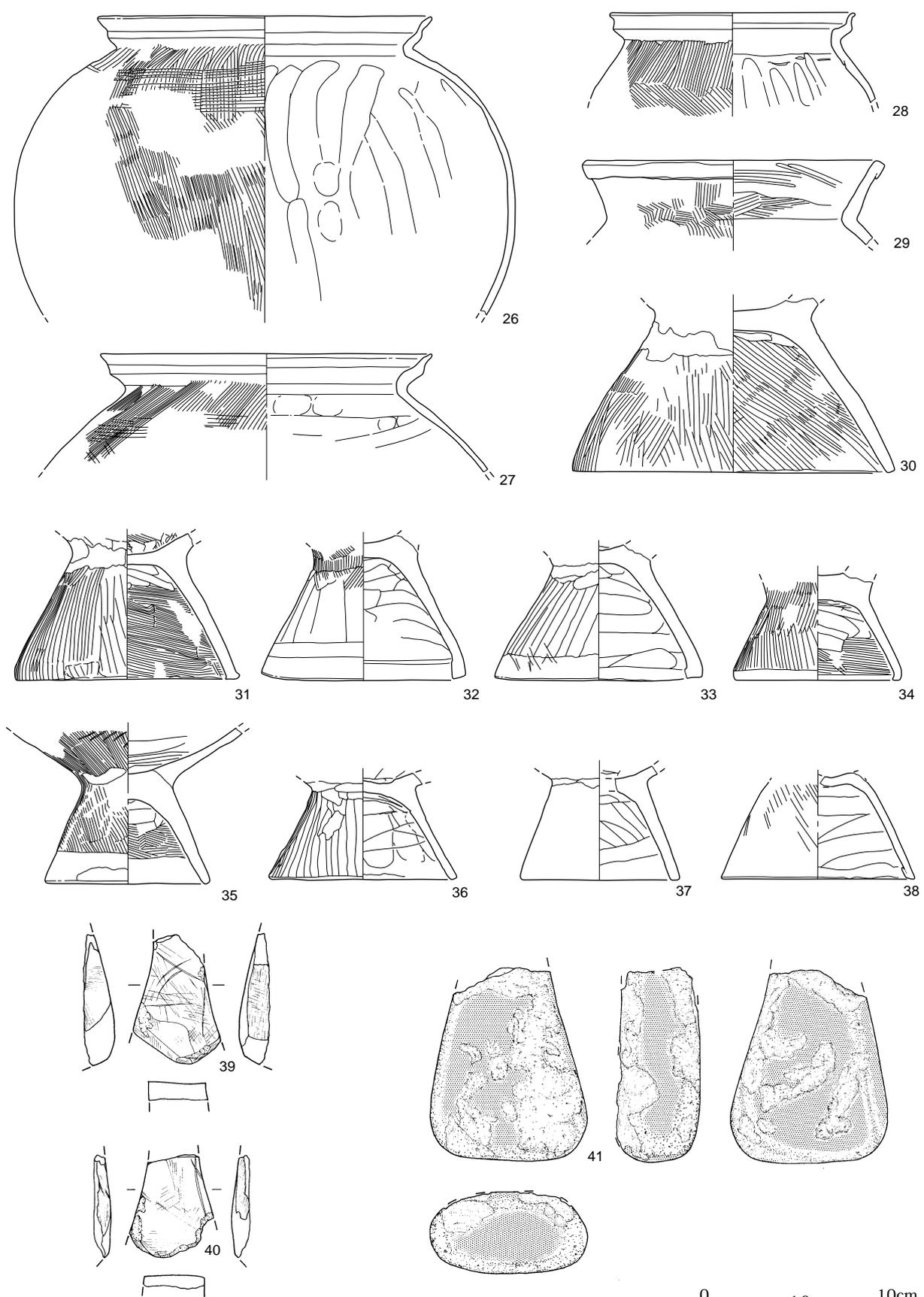
0 1:3 10cm

第75図 2区3号住居出土遺物(3)



第76図 2区3号住居出土遺物(4)

2.2.3区微高地部の遺構と遺物



第77図 2区3号住居出土遺物(5)

0 1:3 10cm

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区4号住居(付図2 第78～82図 PL43～45・154・155 遺物観察表P.490・491)

位置 2区3-82-F・G-3・4G

形状 隅丸長方形

重複 10号土坑に先行し、15号土坑に後出する。

(15号土坑の土層断面図は第59図に掲載)

また北東部北壁沿いでほぼ4号住居と重なって後出する21号土坑を検出している。

規模 長軸 5.76m 短軸 4.80m

残存壁高 0.73m

床面積 20.78㎡ 長軸方位 N-77°-W
埋没土 上層は多量の浅間C軽石と少量の黄褐色土粒を含む黒褐色土で、下層は浅間C軽石・黄褐色土粒を含む暗褐色土および炭化物粒を含む黒色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや東寄りの、P2の南西脇に炉が検出された。炉は長軸0.72m、短軸0.60mの隅丸長方形で、表面は厚さ0.02mの硬化した灰白色粘土が貼られていた。橙色の焼土は粒状で、厚く焼土化した部分は見られなかった。北東脇の床面には灰が広がっていた。上面には土師器破片が1点出土した。

なお、本住居の炉は残存状態が極めて良好であることから、樹脂で固めて切り取り保存した。

柱穴 P1～P4の4本主柱穴を床面で検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.72×0.50×0.28m、P2が0.49×0.46×0.31m、P3が0.50×0.42×0.46m、P4が0.62×0.57×0.33mである。いずれも不整楕円形である。掘り方で精査したところ、P2を除き隅丸方形の形状を確認することができた。

周溝 周溝は四壁沿いを全周していた。規模は概ね上幅0.15m、深さ0.06mである。

住居内土坑 4基の住居内土坑を検出した。1号土坑は主柱穴P3の南側で検出された。その規模は長軸0.51m、短軸0.43m、深さ0.28mで楕円形である。2号土坑は主柱穴P3の南西側、1号土坑の西側で検出された。その規模は長軸0.80m、短軸0.74m、深さ0.80mで周囲に馬蹄形の掘り込みが

ある。2号土坑からは中層で土師器鉢(第81図2)、台付甕台部(第82図17・18)、擦石(25)が出土した。

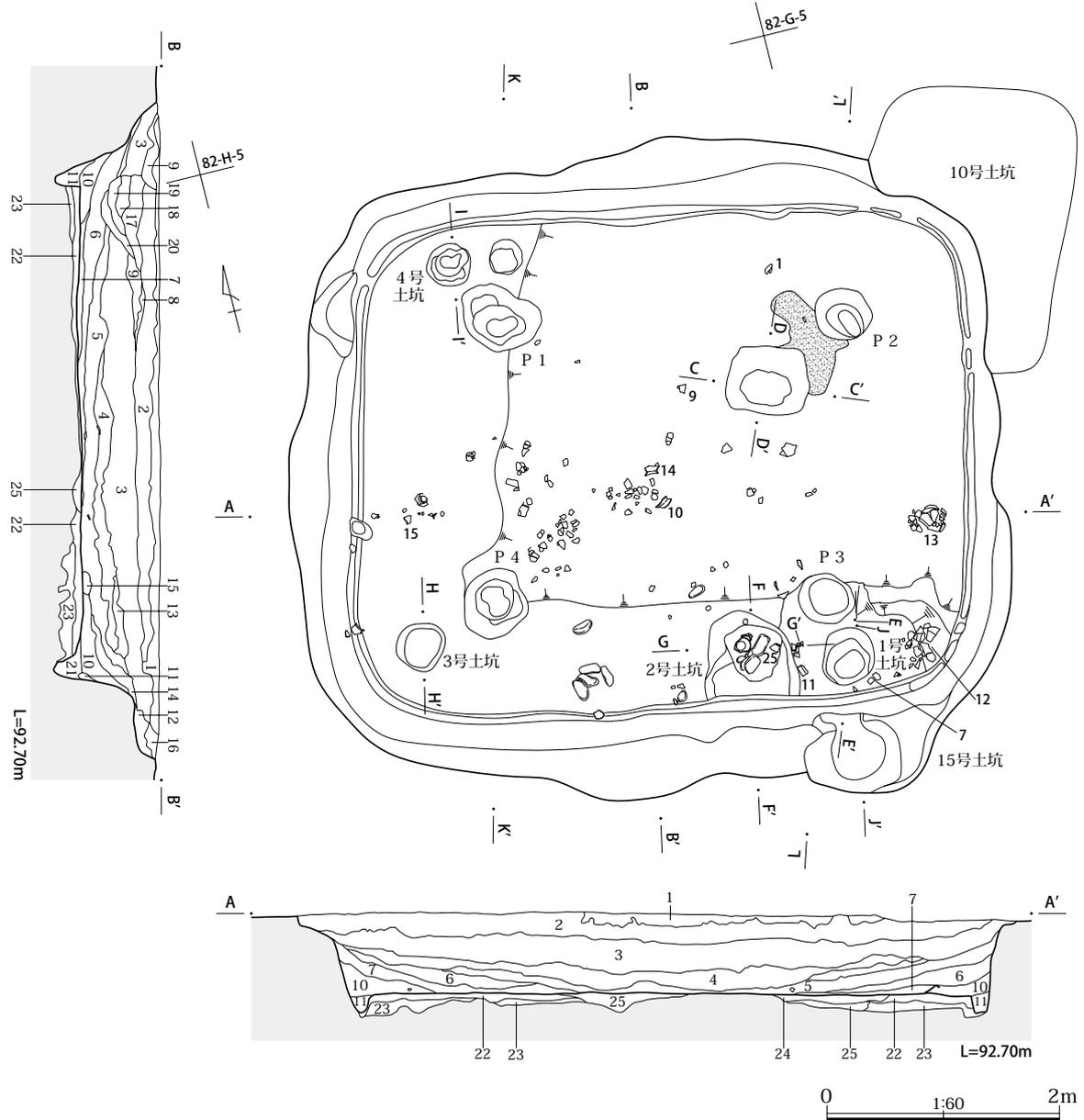
3号土坑は主柱穴P4の南西側で検出された。その規模は長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.13mで楕円形である。4号土坑は主柱穴P1の北西側で検出された。その規模は長軸0.38m、短軸0.38m、深さ0.18mである。3号・4号土坑は主柱穴の外側に位置するが、断面形が椀形であり拡張時の柱穴とは考えにくい。

床面 中央部が硬化していた。西壁と南壁沿いは、それぞれ幅1.2m、0.9mの範囲に床面が1～3cm高くつくられていた。いわゆるベッド状遺構である。その段差のライン状に主柱穴が位置する。

掘り方 住居の周辺部が不定形に深く掘り込まれていた。北東部は住居の形状の通りにL字形に掘り込まれていたが、南西部は主柱穴P4の内側まで掘り込まれていた。掘り方底面には壁方向に直交する鋤等の工具痕跡が残っていた。中央部はほとんど掘り込まれていなかった。掘り方を埋めていたのは灰黄褐色土や黒褐色土と褐色土の混土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は住居南半に偏って出土した。土師器鉢(第81図1)は北部床面上3cmで出土した。壺は7が南東部床面直上で、9が中央部床面上5cmで出土した。

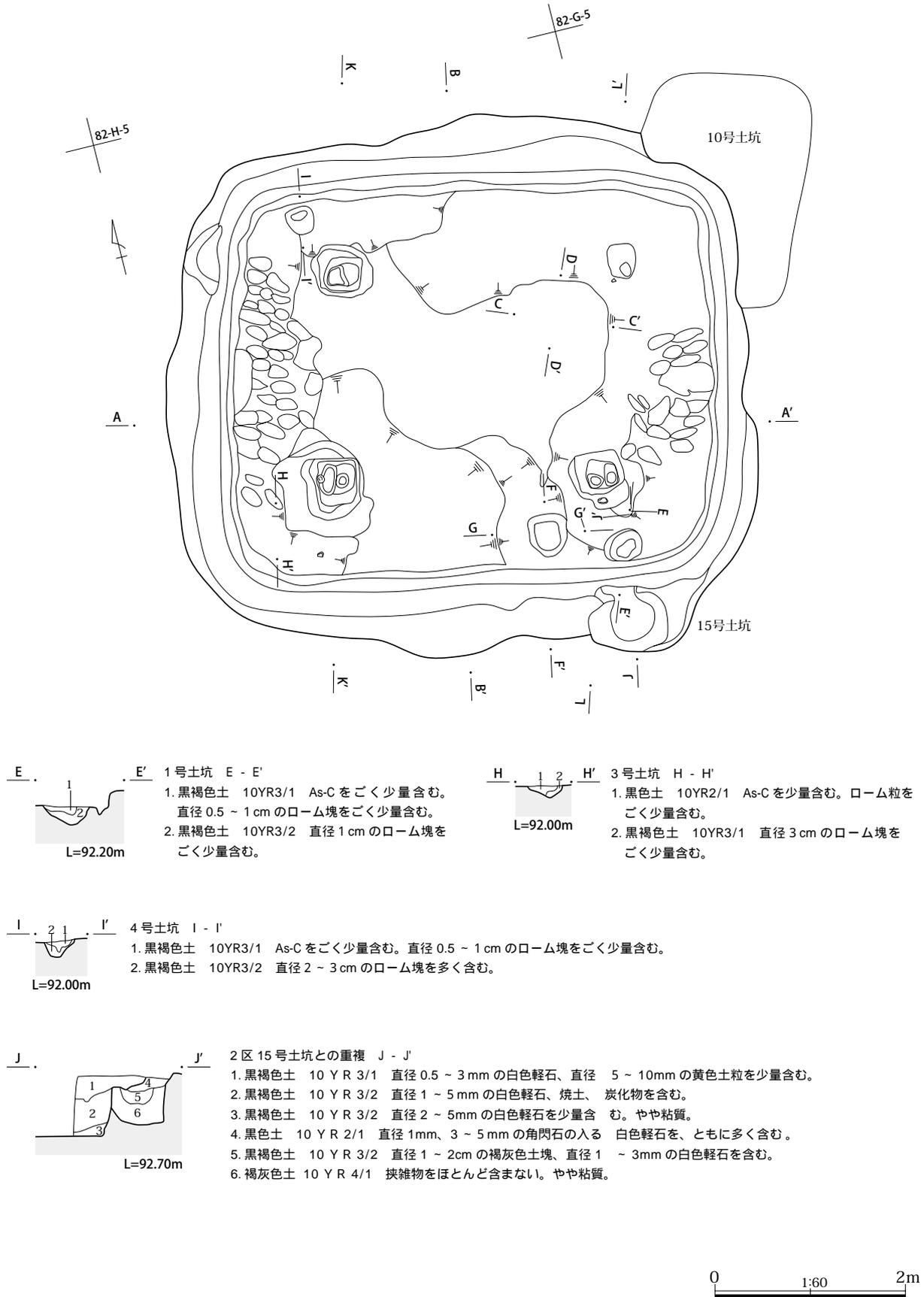
甕は底部が接合できない個体が多く、平底か台付か不明な個体が多い。台が付くと特定できる個体のみ台付甕と報告した。甕(10)は中央部床面上5cmで出土した。11は1号土坑南側の壁際床面直上の破片と主柱穴P3埋没土中の破片が接合した。12は南東隅の床面の凹みに落ち込むように出土した。13は主柱穴P3の北東壁際床面直上で出土した。台付甕の台部は第81図17と第82図18が2号土坑周辺の床面直上で、第81図16と第82図19は埋没土中から出土した。甕が南東隅に偏在する傾向があった。有孔鉢(第82図20・21)や鉢(22)は埋没土中から出土した。また弥生土器破片(23・24)も埋没土中から出土した。特に24は掘り方出土の破片が接合している。弥生時代中期と見られる破片



A - A'・B - B'

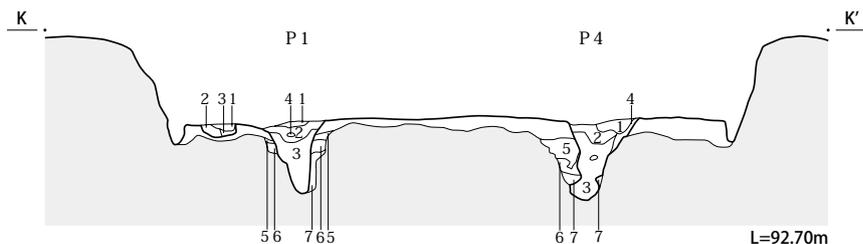
1. 黒褐色土 10YR2/2 As-Cをやや多く含む。直径5～10mmの白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土 10YR3/4 As-Cを少量含む。ローム粒をごく少量含む。
3. 黒褐色土 10YR2/3 As-Cを多く含む。ローム粒をごく少量含む。
4. にぶい黄褐色土と明黄褐色土の混土 10YR4/3 10YR6/6 直径1～2cmの炭塊をごく少量含む。
5. 褐色土 10YR4/4 As-Cをごく少量含む。ローム粒を少量含む。
6. 黒色土 10YR2/1 ローム粒をごく少量含む。炭粒と直径1～2cmの炭塊を多く含む。
7. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒をごく少量含む。
8. 黒色土 10YR2/1 As-Cをごく少量含む。直径1～2cmの炭塊、炭粒を多く含む。
9. にぶい黄褐色土 10YR4/3 As-C、ローム粒をごく少量含む。
10. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒をごく少量含む。
11. 暗褐色土 10YR3/4 直径1～3cmのローム粒を多く含む。
12. 暗褐色土 10YR3/3 As-Cをごく少量含む。
13. 暗褐色土 10YR3/3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)を少量斑状に含む。
14. 暗褐色土 10YR3/4 にぶい黄褐色土を多く斑状に含む。
15. 暗褐色土 10YR2/3 As-Cを多く含む。
16. 黒褐色土 10YR2/3 As-Cを少量含む。
17. 暗褐色土 10YR3/3 As-Cを少量含む。ローム粒・炭粒をごく少量含む。
18. 暗褐色土 10YR3/4 焼土粒、炭粒を多く含む。As-Cを少量含む。
19. 暗褐色土 10YR3/4 焼土粒、直径1～2cmの焼土塊、炭粒、直径5～10mmの炭塊を多く含む。
20. 暗褐色土 10YR3/4 焼土粒、炭粒を少量含む。ローム粒、As-Cをごく少量含む。
21. 灰黄褐色土 10YR5/2 直径1～3cmの黄白色塊を多く含む。
22. 直径1～2cmの褐灰色土(10YR4/1)と黒褐色土(10YR3/1)と黄白色砂質土塊の混土。
23. 直径3～5cmの褐灰色土(10YR4/1)と黒褐色土(10YR3/1)と黄白色砂質土塊の混土。
24. 灰黄褐色砂質土 10YR1/2 黄白色砂質土小塊を含む。
25. 灰黄褐色砂質土(10YR1/2)と褐灰色土(10YR4/1)と直径1cmの黒褐色土(10YR3/1)の塊を含む。

第78図 2区4号住居(1)



第79図 2区4号住居(2)

2.2.3区微高地部の遺構と遺物

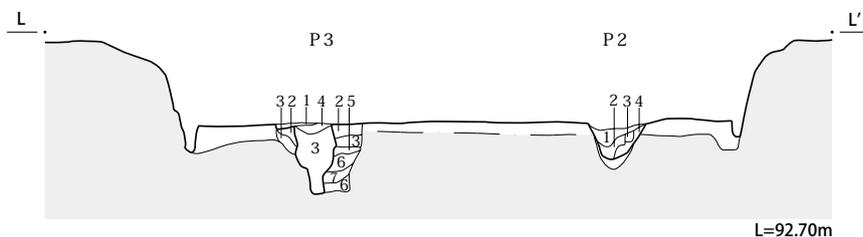


P 1 K - K'

1. 黒褐色土 10YR2/2 10YR2/1 直径0.5cmの黒色土をごく少量含む。
2. 黒褐色土 10YR3/1
3. 暗褐色土 10YR3/4
4. 暗褐色土 10YR3/4 直径0.5～1cmのローム塊をごく少量含む。
5. 黄褐色土 直径0.5～1cmの明黄褐色土塊、直径0.5～1cmの暗褐色土塊を多く含む。
6. 黄褐色土 ほとんどまじりなし。
7. 灰色粘性土

P 4 K - K'

1. 黒褐色土 10YR2/2 直径0.5cmのローム塊をごく少量含む。
2. 黒色土 10YR2/1 直径0.5～0.8cmのローム塊をごく少量含む。
3. 黒色土 10YR2/1 鉄分の沈着が多くみられる。直径2～3cmの黄褐色土塊を少量含む。
4. 黒褐色土 10YR2/3 直径0.5cmのローム塊を少量含む。
5. 黄褐色土 直径0.5～1cmの明黄褐色土塊、直径0.5～1cmの暗褐色土塊を多く含む。
6. 黄褐色土 ほとんどまじりなし。
7. 灰色粘性土

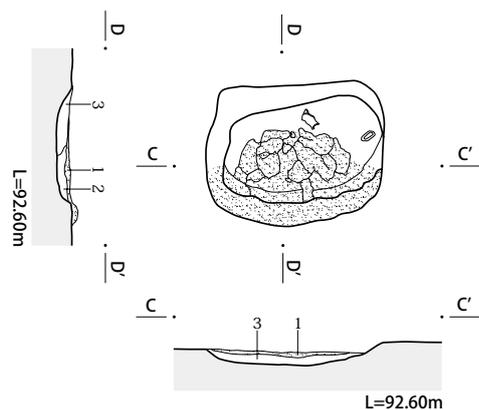


P 3 L - L'

1. 黒褐色土 直径1cmの黄褐色土塊、直径1mmの炭塊を含む。
2. 黒褐色土 直径0.5～1mmの炭塊をやや多く含む。
3. 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土粒を少量含む。
4. 黒褐色土 10YR2/3
5. 黄褐色土 10YR7/8 ほとんどまじりなし。
6. 灰色粘性土 直径1～2cmの黄褐色土塊をごく少量含む。
7. 暗黄褐色土 ほとんどまじりなし。

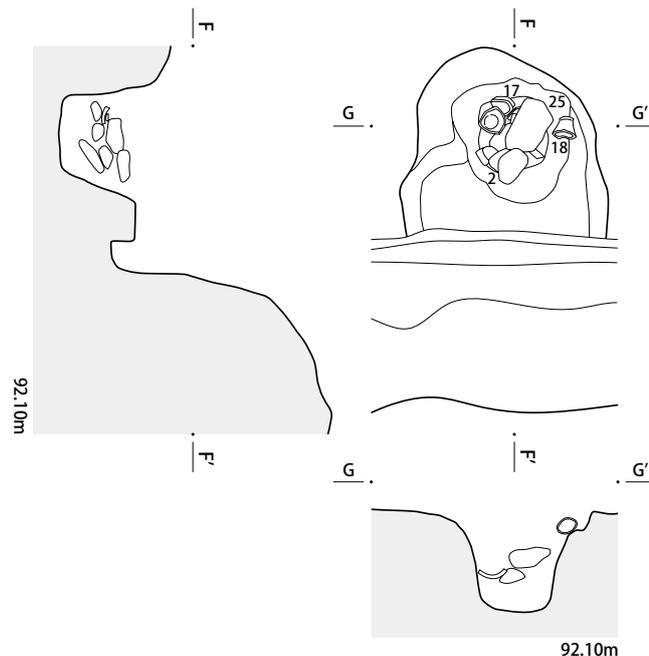
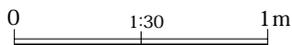
P 2 L - L'

1. 黒色土 10YR2/1 As-Cを少量含む。黄褐色土粒を少量含む。
2. 黒褐色土 10YR2/3 黄褐色土粒をごく少量含む。
3. 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土粒をごく少量含む。
4. 黄褐色土(10YR7/8)と暗褐色土(10YR3/4)の混土。



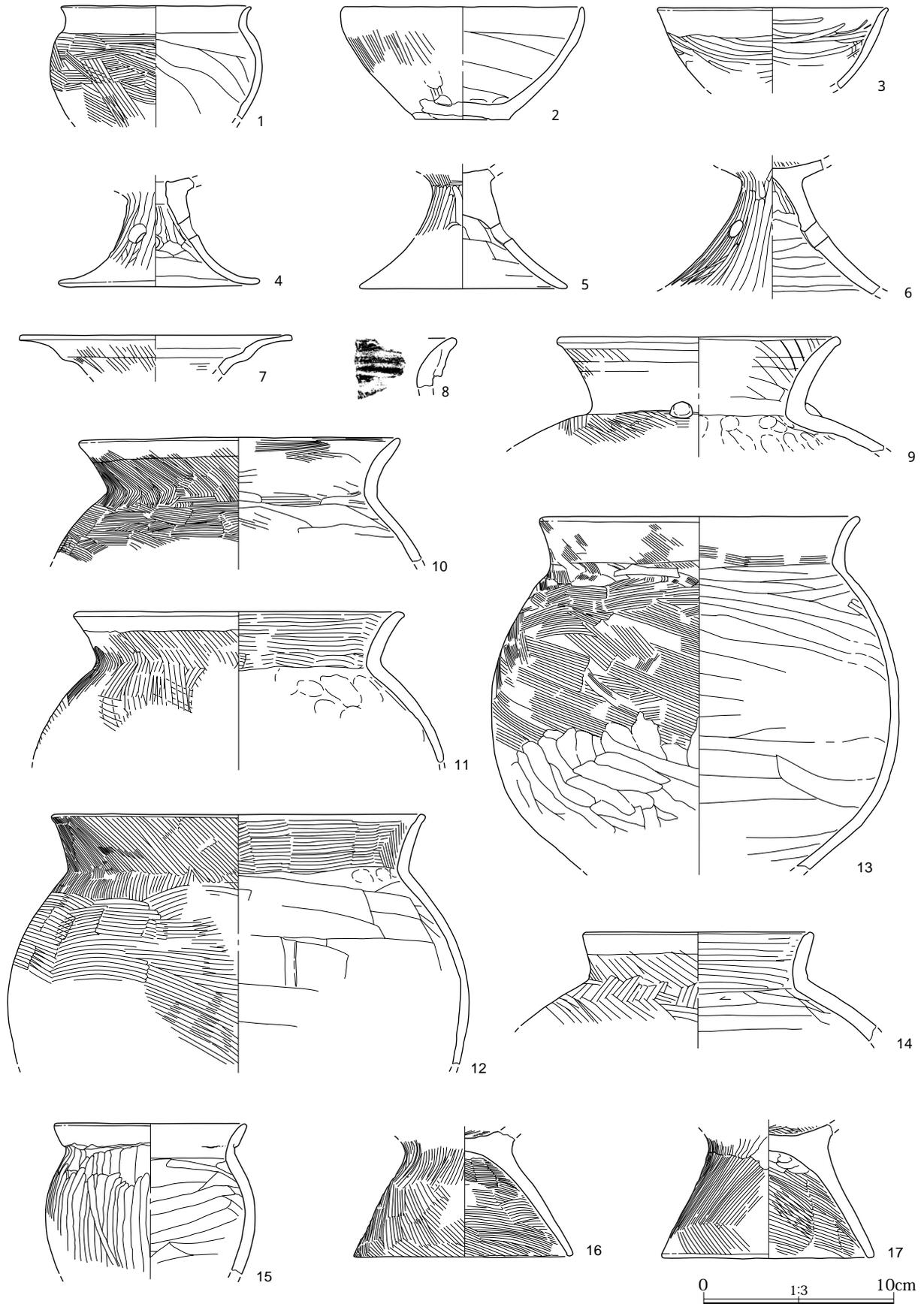
炉 C - C'・D - D'

1. 灰白色粘土 表面は硬化。
2. 灰白色粘土と灰白シルトの混土。
3. 炭化物塊を含む灰褐色土。

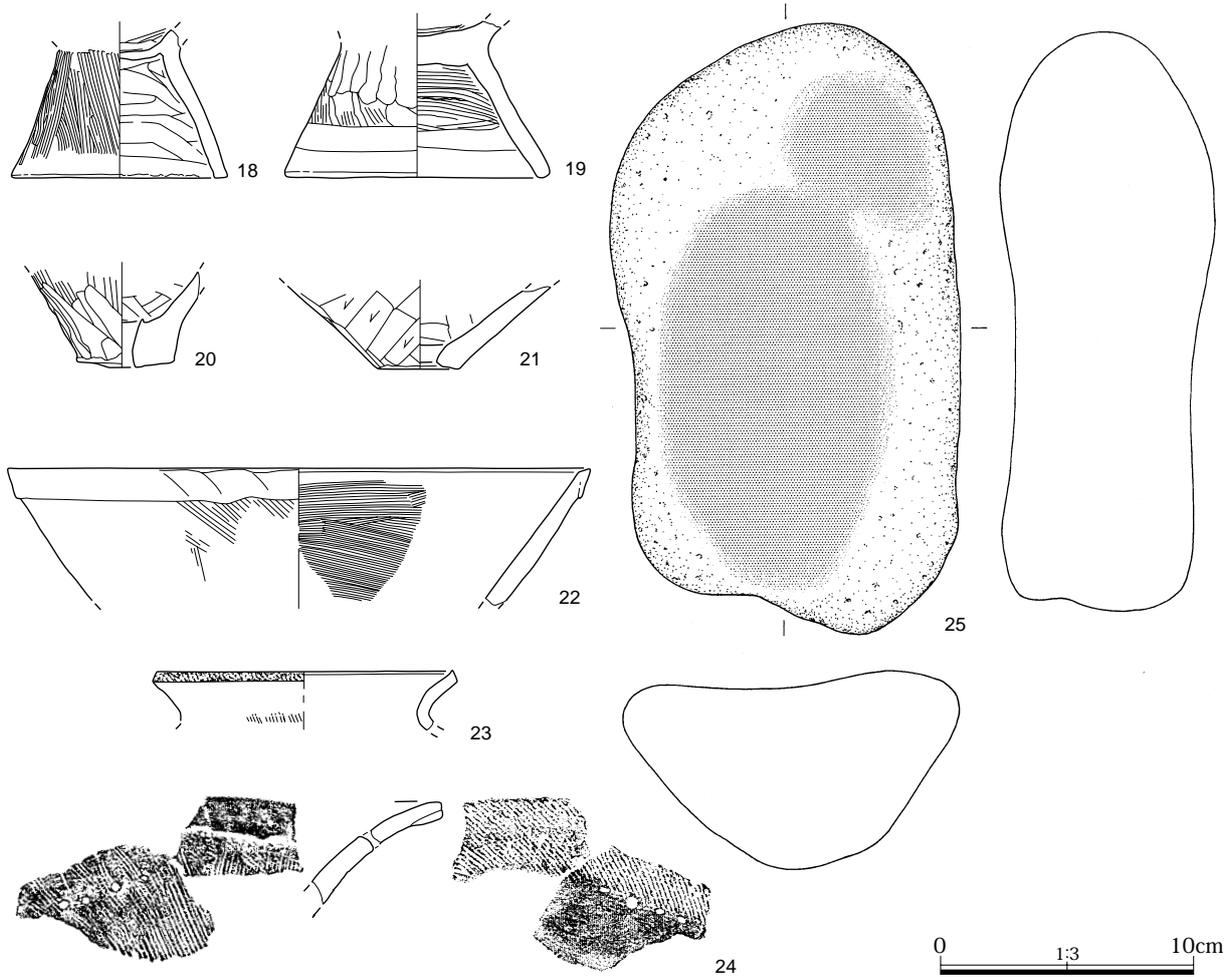


第 80 図 2区4号住居(3)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第81図 2区4号住居出土遺物(1)



第82図 2区4号住居出土遺物(2)

も2点出土した。これらは遺構外出土遺物として第230図23に掲載した。

図示した遺物の他、縄文土器2点、土師器破片1301点、粘土塊2点、剥片5点、礫片15点、礫12点、棒状礫2点が出土している。特に円礫・棒状礫は使用痕跡が見られなかったので図化しなかったが、P4南東の南壁際ベッド状遺構上に集中して4点、周辺に3点が出土した。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居の炉は、定形化した長方形に粘土を貼って作られており、それまでの弥生時代後期の住居の地床炉とは大きく異なっている。古墳時代前期は住居形態が長方形から正方形へ変化する時期でもあり、炉等の付属施設も含めた住居構造研究の重要な資料となろう。

2区5号住居(付図2 第83～88図 PL46～48・155～157 遺物観察表P.491・492)

位置 2区3-82-H・I-5・6G

形状 隅丸長方形

重複 3号掘立柱建物に後出する。

規模 長軸 5.60m 短軸 4.10m

残存壁高 0.57m

床面積 20.62m² 長軸方位 N-86°-E

埋没土 浅間C軽石と黄褐色土粒を含む暗オリーブ灰色土や黒褐色土で、下層は黄褐色土粒を含む黒色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北東寄りの、P2の西脇に炉が検出された。炉は長径1.13m、短径0.80mの不整楕円形で中央部は1～3cmへこんでいた。中央部には2個の棒状礫が炉内を区切るように置かれていた。

棒状礫の南側は、厚さ0.03 mほど表面が焼土化して硬化していた。北側も1～2 cmへこんでおり、黒色灰が広がっていた。

柱穴 当初は、四隅で検出したP1～P4を4本主柱穴として調査を始めたが、断面はP3を除いて浅いボール状であったことから主柱穴ではないと判断した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.60×0.53×0.15 m、P2が0.67×0.49×0.20 m、P3が0.68×0.63×0.52 m、P4が0.62×0.56×0.19 mである。

主柱穴は掘り方で4本を確認した。これらの柱穴の上端は不整形な楕円形であったが、下半部は整った隅丸正方形で、深さもある。その位置も後述する床面の段に対応しており、主柱穴と判断した。炉焼土の東側で検出していた小ピットが主柱穴P6であったことになる。それぞれの規模は長軸・短軸は掘り方面の計測で、深さは床面からの計測で、P5が0.86×0.64×0.61 m、P6が0.80×0.56×0.53 m、P7が0.80×0.64×0.66 m、P8が0.80×0.68×0.62 mである。

床面で検出したP3は、南東隅よりやや内側にあり、規模・深さもP1・2・4とは異なっていたが、他の住居と比較検討すると、南壁際に掘られた土坑の一部と考えられる。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面で2基の住居内土坑を検出した。1号土坑は主柱穴P6の東側で検出された。その規模は長軸1.20 m、短軸0.78 m、深さ0.07 mで隅丸長方形である。土坑というよりは凹地のようであり、P6の掘り方全体を反映したものかもしれない。

もうひとつの土坑は、南東隅で検出したP3である。南東部の主柱穴P7の南やや西側にある長径0.68 m、短径0.63 m、深さ0.52 mの土坑で、本遺跡の他の長方形住居にも同様な位置に土坑が掘られている。柱穴より住居内の施設の一部と考えておきたい。北縁からは削痕のある大型の挟り入り礫(第86図11)が出土している。

床面 中央部が硬化していた。西壁から南壁沿いは、

それぞれ幅0.6～1.2 mの範囲で階段状に区切られ床面が3～5 cm高つくられていた。いわゆるベッド状遺構である。その段差の屈曲部に主柱穴P5とP8が位置する。南西隅は掘り方の凹みを反映して1～2 cm L字形に凹んでいた。

掘り方 住居の中央部のごく狭い範囲を除き、周辺部が不定形に深く掘り込まれていた。特に東西壁沿いは幅0.5 mほどの溝状に掘られており、溝内には壁に直交する位置で使われた鋤等の掘削用具の痕跡が残っていた。掘り方を埋めていたのはにぶい古黄褐色土と暗褐色土の混土や褐灰色土である。

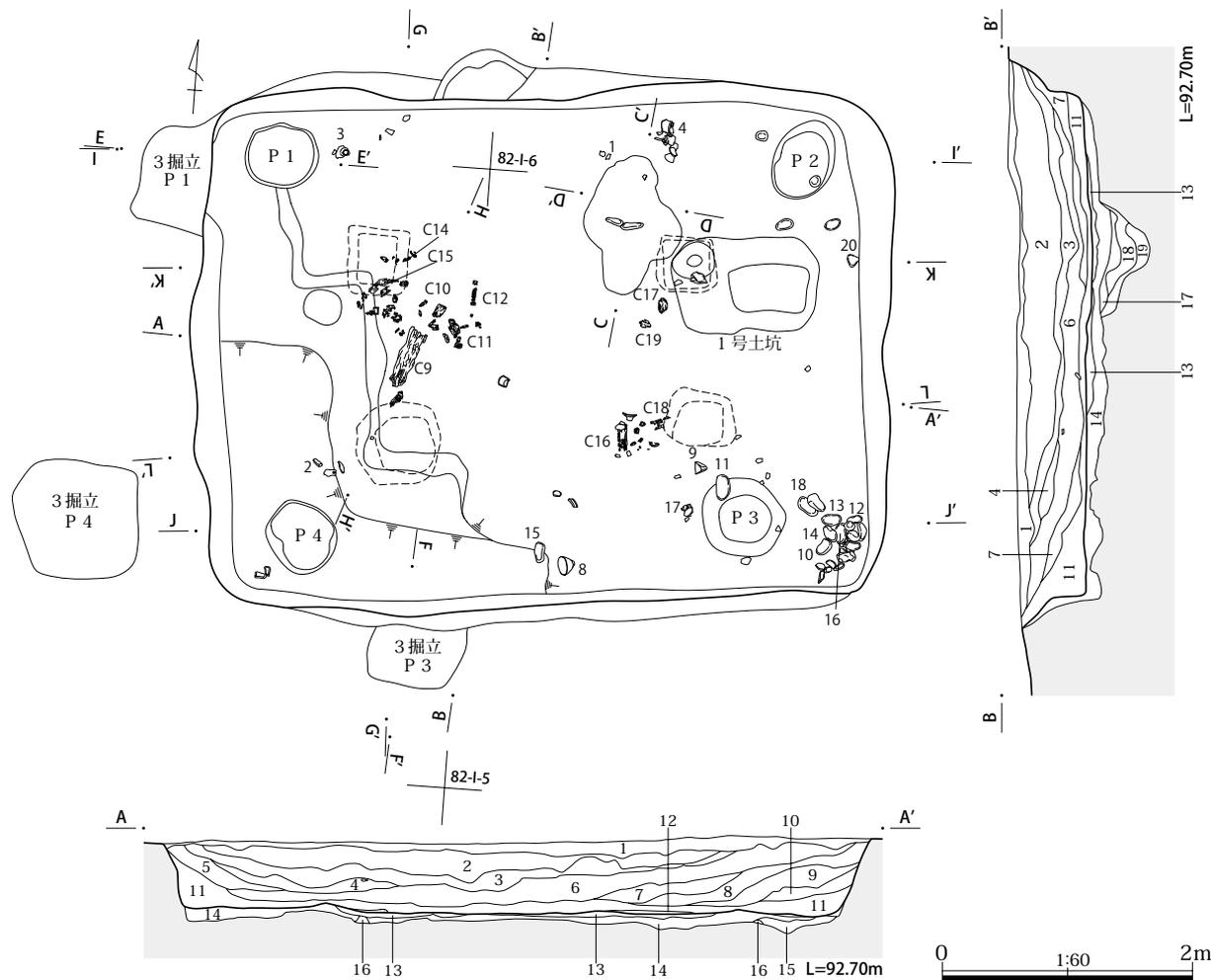
また、前述のように、掘り方で主柱穴のP5～P8を検出した。P3の西側には住居内の施設と考えられるP9を検出した。P9は一辺0.42 m、深さ0.15 mほどの隅丸正方形で、軸方向が南壁にほぼ平行している。本遺跡では、南東隅の主柱穴の南側に2基の住居内土坑が掘られている住居が多い。本住居ではP3とP9がそれに当たると考えられる。

さらに南壁ほぼ中央で、壁に直交する方向の小溝2条を検出した。西側は長さ1.14 m、幅0.23 m、深さ0.13 m、東側は長さ1.08 m、幅0.34 m、深さ0.21 mで、0.1 mほどの間隔で並んでいた。この長さは主柱穴P7とP8を結んだ線のちょうど南側の長さにあたる。

遺物と出土状況 土器や石は東半分偏って出土した。また、炭化材が主柱穴P5～P8を結んだ線の内側で集中して出土した。

土師器高坏台部(第85図1)は北部床面上13 cmで出土した。高坏(2)は中央部床面上13 cmで出土した。3は蓋と推定される土器で、北部床面上6 cmで出土した。台付甕(4)は北部、炉の北側の床面直上で出土した。甕(5)・台付甕(6)・S字甕(7)は埋没土中から出土した。有孔鉢(8)は南壁中央部壁際床面上4 cmで完形で出土した。

本住居からは小礫・棒状礫が多量に出土している。特に南東隅では大小合わせて20個の礫が集中して出土した。また南西部に5個、北東部に6個の礫が散在していた。このうち使用痕跡のある12個を図

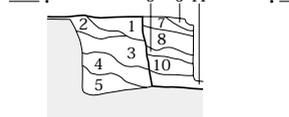


A - A'・B - B'

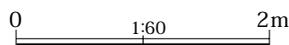
1. 暗青灰色土 5PB3/1 直径1～3mmのAs-C軽石を多く、褐色砂粒を少量含む。
2. 暗オリーブ灰色土 2.5GY3/1 白色粒を少量、黄色砂質土を微量含む。
3. 黒褐色土 2.5Y3/2 2層と同じ白色粒を微量、黄色砂質土（地山の混土）を多く含む。
4. 黒色土 10YR2/1 炭化物を微量含む。3層土が少量混入。
5. 暗灰色土 白色粒をやや多く含み、炭化物を微量含む。
6. オリーブ黒土 5Y3/1 黄色砂質土をやや多く含む。
7. オリーブ黒土 5Y3/2 6層と似ているが、黄色砂質土の混入が多い。
8. オリーブ黒土 10Y3/1 白色粒、焼土を微量含む。やや軟質。
9. にぶい黄褐色土 10YR4/3 黄色砂質土（地山）の混入が多い。
10. 黒色土 10Y2/1 黒色砂粒を多く含む。砂質。

11. 黒色土 5Y2/1 黄色砂質土（地山）の流れこみが多い。中央低部には炭化物の混入が多い。
12. 黒色土 5Y2/1 11層と同様であるが、直径1～2cmの焼土塊、炭化物塊を多く含む。
13. にぶい黄褐色土と暗褐色土の混土。床の土と思われる。
14. 褐灰色土 にぶい黄褐色土と暗褐色土多く混入。
15. 暗褐色土 にぶい黄色砂塊（地山）が多く混入。
16. 褐灰色土 14層に比べ、混入なし。
17. 褐灰色土 砂質の黄褐色土を多く含む。黄褐色砂質土を混入する。
18. 暗褐色土 しまり弱く、やや粘質。
19. 褐灰色土 17層と似るが、やや粘性強い。

E - E'



L=92.70m

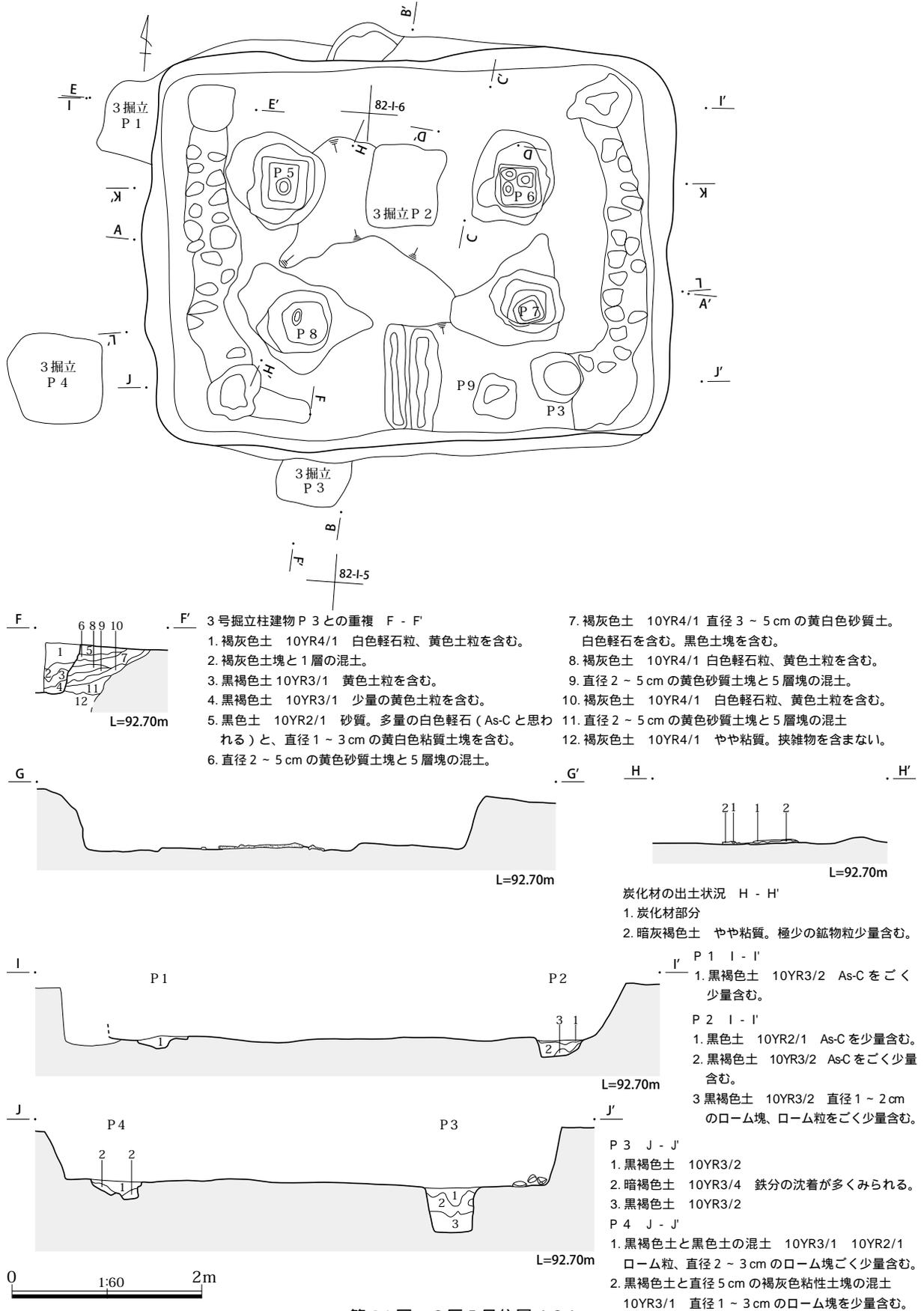


E - E'

1. 暗褐色土 10YR3/4 As-Cを少量含む。直径1～2cmのローム塊をごく少量含む。
2. 暗褐色土 10YR3/4 As-Cをごく少量含む。黒色土（10YR2/1）を少量まばらに含む。
3. 暗褐色土 10YR3/4 As-Cをごく少量含む。直径1～3cmのローム塊を多く含む。黒色土（10YR2/1）をやや多くまばらに含む。
4. 暗褐色土 10YR3/4 As-Cをごく少量含む。ローム粒、黒色土（10YR2/1）を少量まばらに含む。
5. 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒、直径1～5cmのローム塊を少量含む。黒色土（10YR2/1）を少量まばらに含む。
6. 暗青灰色土 5PB3/1 直径1～3mmのAs-C軽石を多く、褐色砂粒を少量含む。
7. 暗オリーブ灰色土 2.5GY3/1 白色粒を少量、黄色砂質土を微量含む。
8. 黒褐色土 2.5Y3/2 2層と同じ白色粒を微量、黄色砂質土（地山の混土）を多く含む。
9. 黒色土 10YR2/1 炭化物を微量含む。3層土が少量混入。
10. 暗灰色土 白色粒をやや多く含み、炭化物を微量含む。
11. 黒色土 5Y2/1 黄色砂質土（地山）の流れこみが多い。中央低部には炭化物の混入が多い。

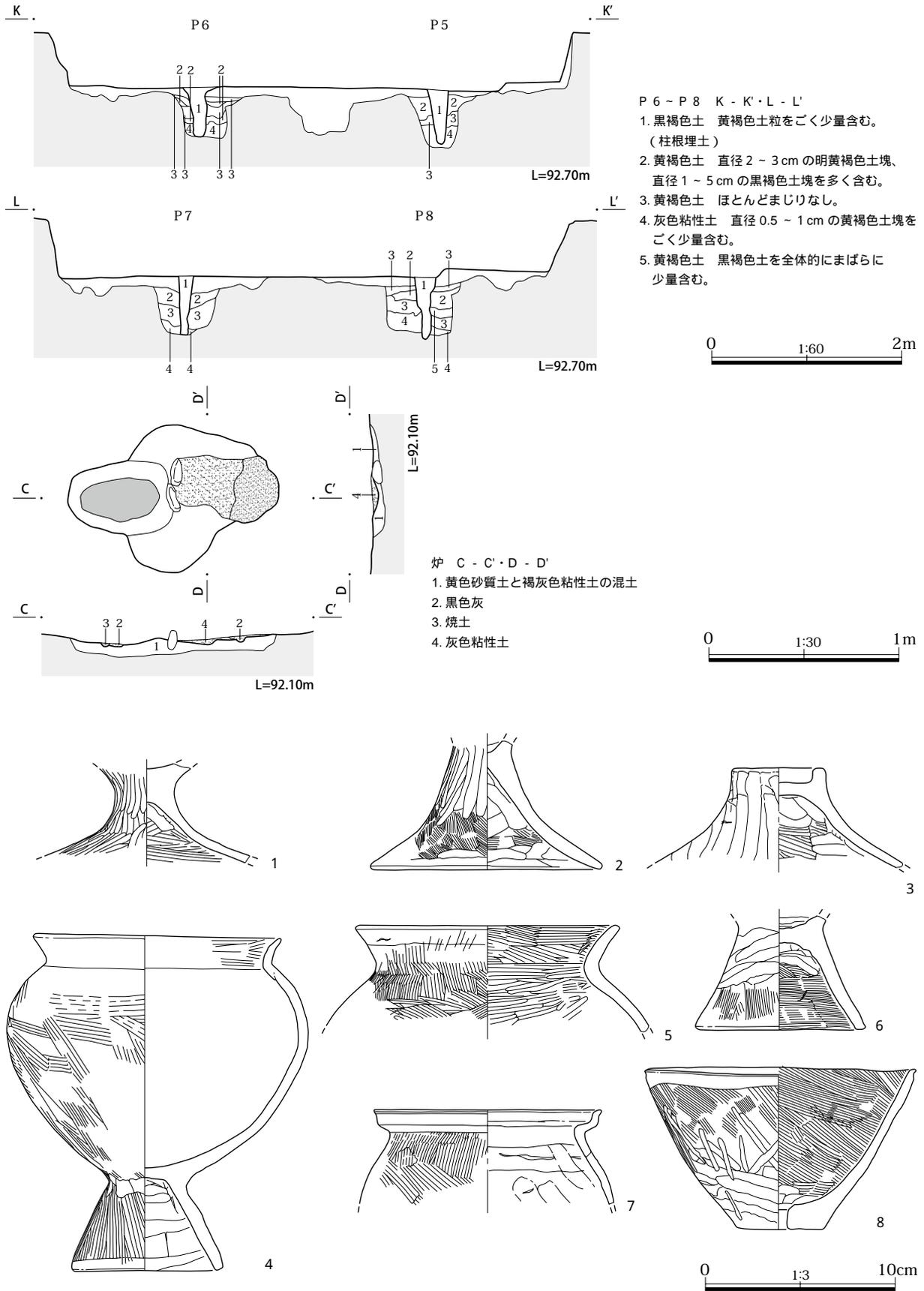
第83図 2区5号住居(1)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第84図 2区5号住居(2)

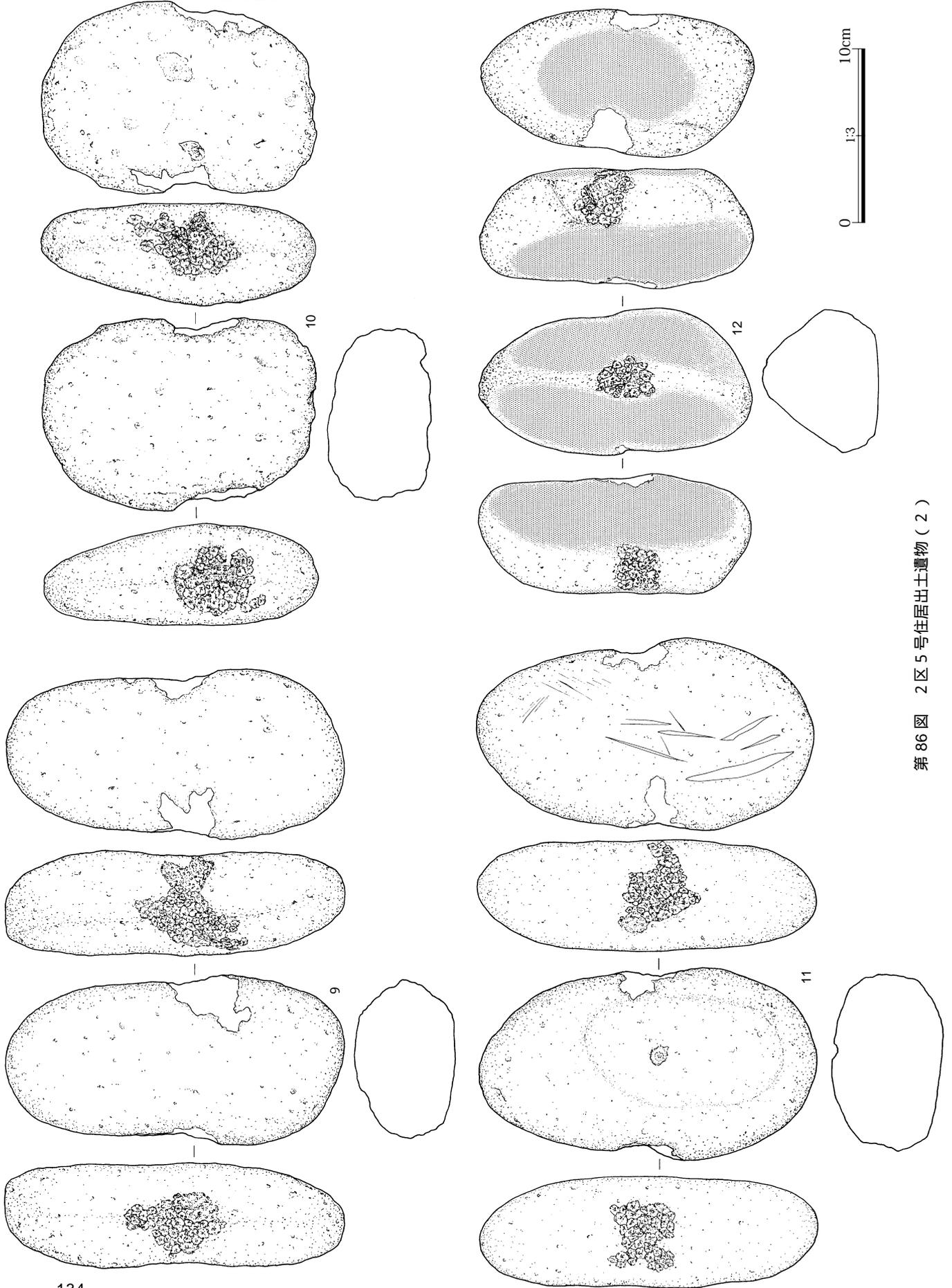
2. 2・3区微高地部の遺構と遺物



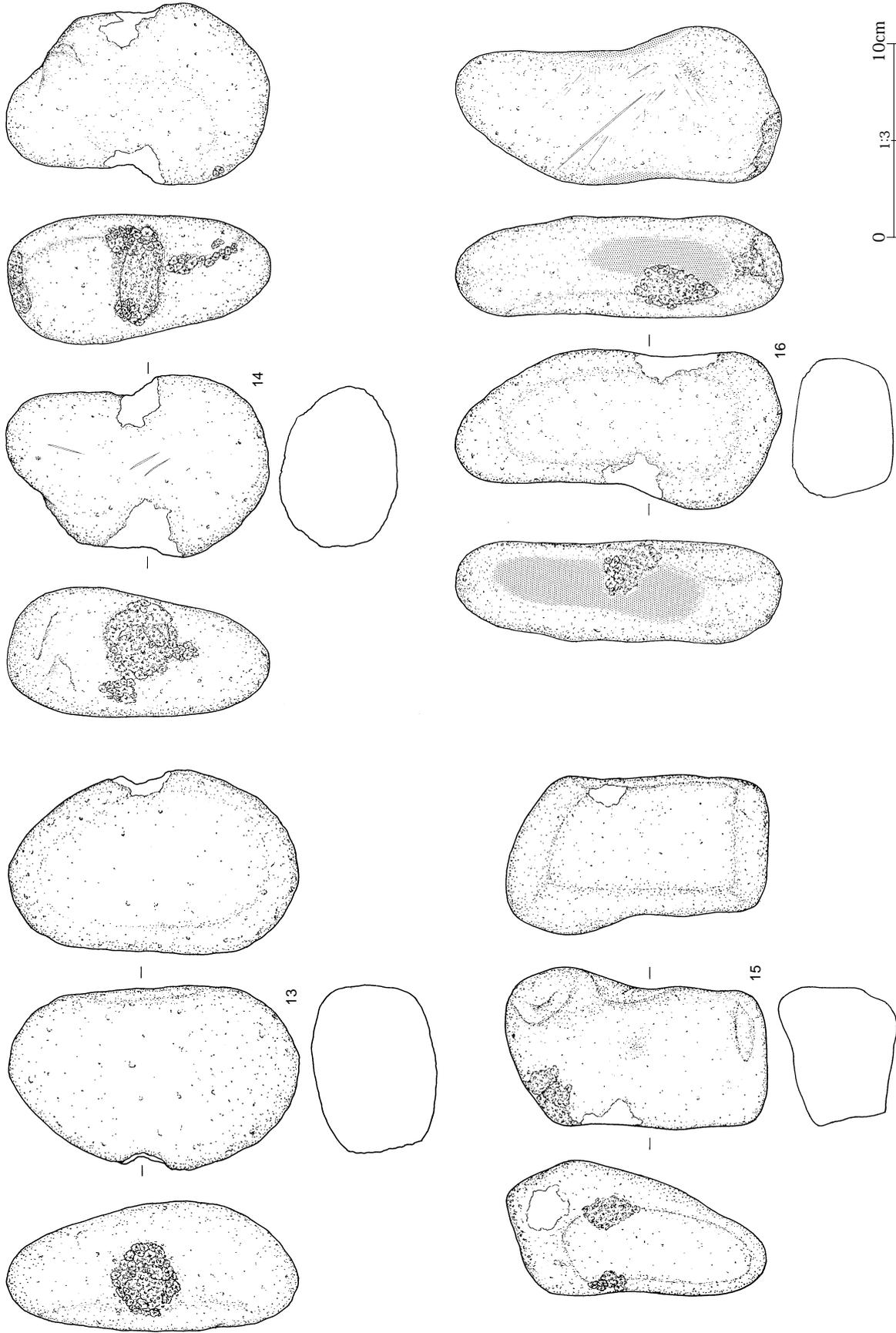
- P 6 ~ P 8 K - K'・L - L'
1. 黒褐色土 黄褐色土粒をごく少量含む。
(柱根埋土)
 2. 黄褐色土 直径2~3cmの明黄褐色土塊、直径1~5cmの黒褐色土塊を多く含む。
 3. 黄褐色土 ほとんどまじりなし。
 4. 灰色粘性土 直径0.5~1cmの黄褐色土塊をごく少量含む。
 5. 黄褐色土 黒褐色土を全体的にまばらに少量含む。

- 炉 C - C'・D - D'
1. 黄色砂質土と褐灰色粘性土の混土
 2. 黒色灰
 3. 焼土
 4. 灰色粘性土

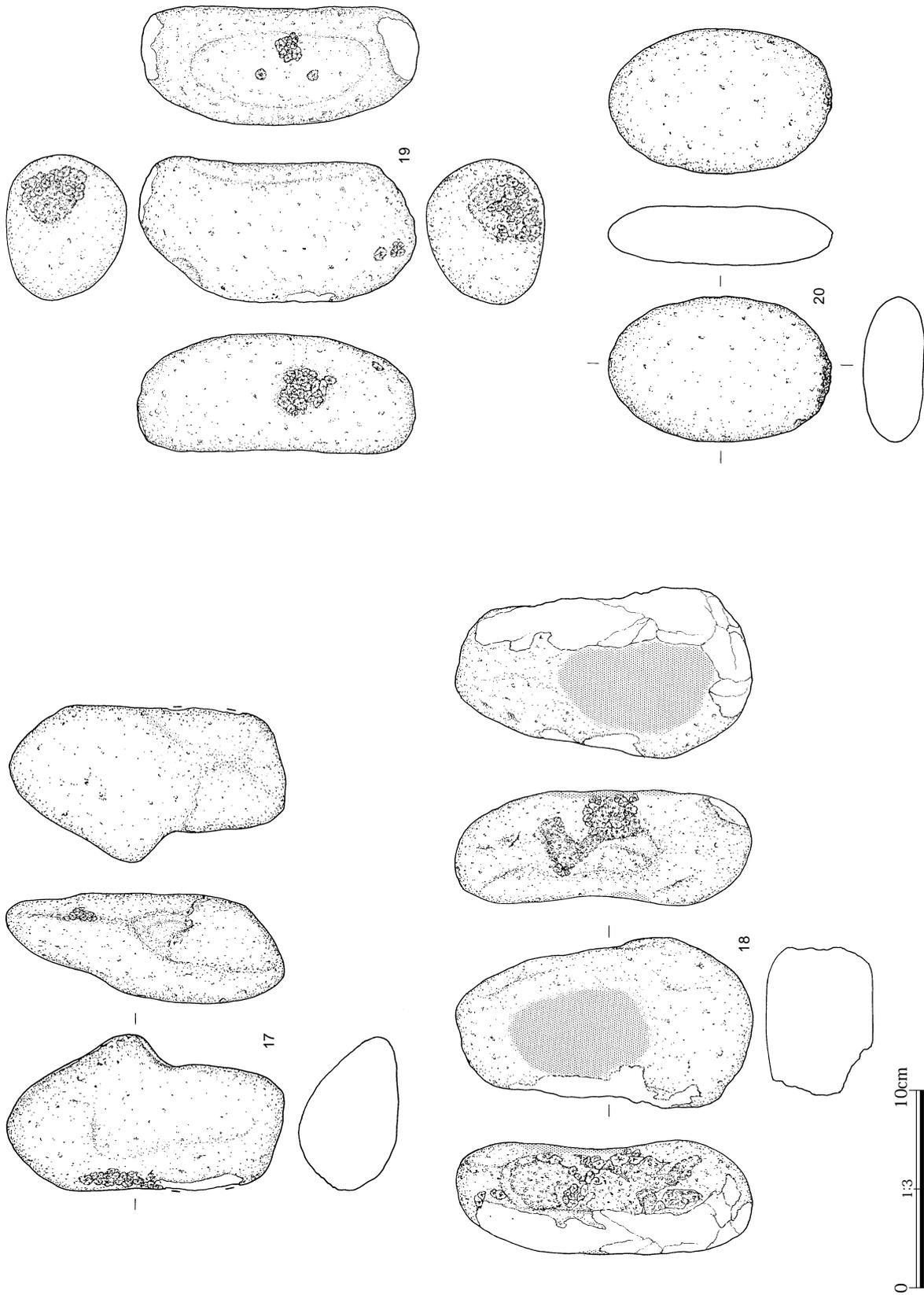
第 85 図 2区5号住居と出土遺物(1)



第86図 2区5号住居出土遺物(2)



第87図 2区5号住居出土遺物(3)



第88図 2区5号住居出土遺物(4)

化掲載した。第 86・87 図 9 ~ 18 のような挟り入り礫がその多くを占めていた。他に埋没土中から打製石斧が出土した。下記の縄文土器とともに混入であるので、遺構外として第 234 図 68 に掲載した。

ここで図示した遺物の他、縄文土器 4 点、土師器破片 558 点、剥片 3 点、礫片 6 点、礫 16 点、棒状礫 3 点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居からは炭化材が出土した。樹種同定を実施したところ、コナラ節とクヌギ節であることが判明した。礫の出土も目立ったが、全体で 31 点のうち使用痕跡のあるもの 12 点、無いもの 19 点であった。これらの出土位置は混在しており、礫の利用の方法を明らかにすることは困難であった。

2 区 6 号住居 (付図 2 第 89・90 図 PL48 ~ 50・157 遺物観察表 P.492)

位置 2 区 3 - 82 - J・K - 7・8 G

形状 隅丸長方形 重複 無し

規模 長軸 4.52 m 短軸 3.58 m

残存壁高 0.14 m

床面積 13.52 m² (一部復元)

長軸方位 N - 90° - E

埋没土 浅間 C 軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや西側、P 1 の南脇に炉が検出された。炉は長径 0.57 m、短径 0.38 m の不整楕円形で、周囲は 3 cm ほど周辺より高まっていた。中央部は 6 ~ 7 cm へこんでおり、厚さ 0.08 m ほど表面が焼土化して硬化していた。炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ 0.15 m ほど掘り込み、黒褐色土を埋填して作られたと推定される。

柱穴 主柱穴 4 本を掘り方面で検出した。床面はあまり硬化していなかったため、柱穴の確認が厳密にはできなかった。掘り方面では地山を掘り込んでい部分が明確になり、検出することができた。いずれも不整円形あるいは不整楕円形である。それぞれの規模は (長径 × 短径 × 深さ) 掘り方面の計測で、P 1 が 0.44 × 0.42 × 0.21 m、P 2 が 0.33 × 0.31

× 0.30 m、P 3 が 0.27 × 0.24 × 0.20 m、P 4 が 0.47 × 0.40 × 0.34 m である。P 2 と P 3 の規模・深さが小さいのは住居東半にある地割れ底面で検出したからである。また P 3 の位置がやや南西にずれている。本来の南東隅の主柱穴 P 3 はもう少し北東側にあって地割れによって壊された可能性も否定できない。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面で南西隅に 1 基の住居内土坑を検出した。その規模は直径 0.38 m の円形で、深さ 0.29 m である。土坑内から土師器甕 (第 90 図 2) が半完形で出土した。

床面 住居東半部に幅の広い地割れが入り込み、床面の大半を壊していた。床面もあまり硬化していなかった。床面を掘り抜くトレンチを設定して、床面を確かめながら調査した。

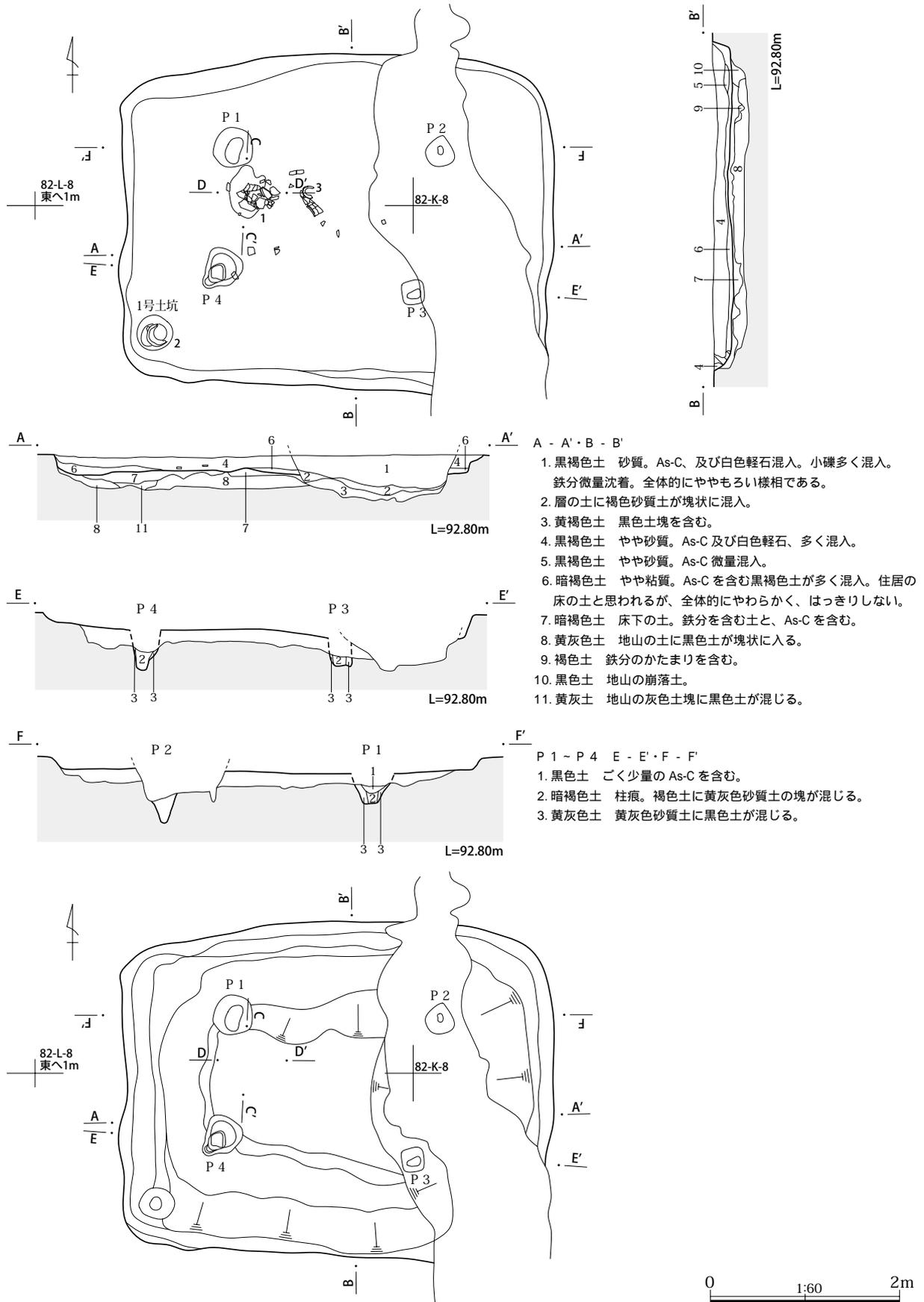
掘り方 住居四周の壁沿いを幅 0.8 ~ 0.9 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m ほどの溝状に掘られていた。掘り方を埋めていたのは浅間 C 軽石を含む暗褐色土、黒色土塊を混じる黄灰色土である。また、前述のように、掘り方面で主柱穴の P 1 ~ P 4 を検出した。

遺物と出土状況 土器は西半部に偏って出土した。図示できたのは土師器甕である。台付甕 (第 90 図 1) は炉の焼土直上で割れた状態で出土した。甕 (2) は前述のように南西隅の 1 号土坑内で出土した。甕 (3) は住居中央部、炉の東脇で床面上 2 cm の位置で出土した。

甕だけでなく鉢や高坏も出土しているが、接合しない破片が多く図化できなかった。ここで図示した遺物の他、土師器破片 168 点、粘土塊 1 点、礫片 4 点が出土している。

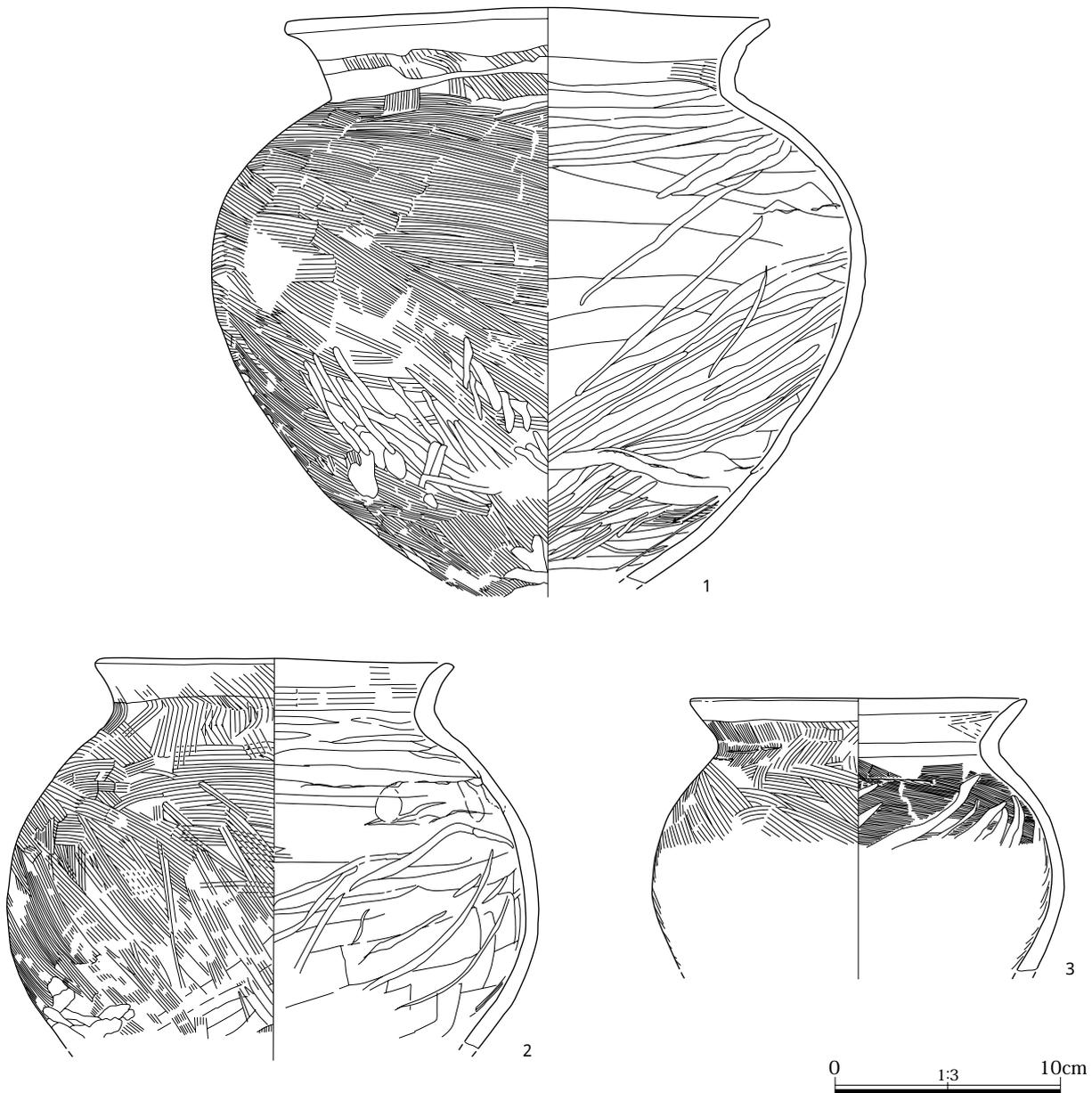
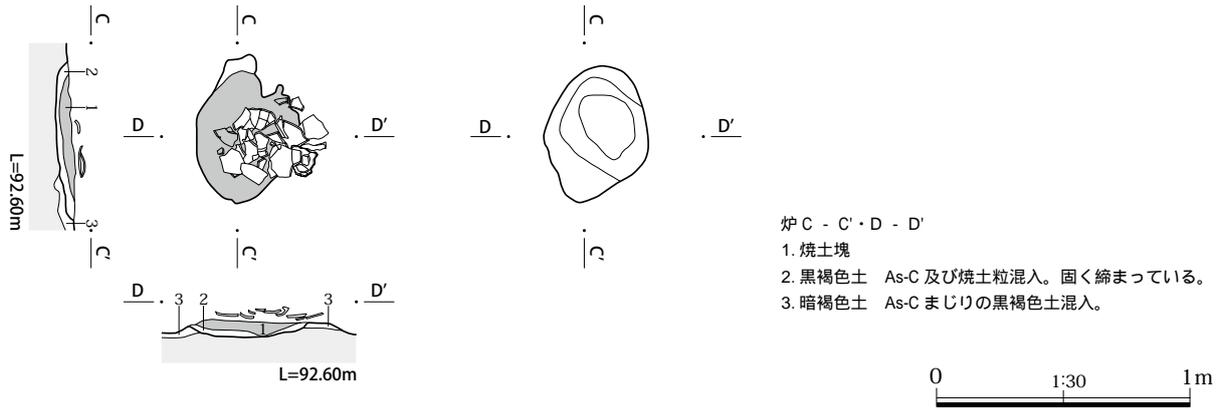
所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本遺跡内の長方形住居は長軸方向の柱間周辺に炉がつくられていたが、本住居は短軸方向の柱間周辺に炉が作られている。ここでは入り口方向を示す資料がないが、住居平面形と柱間さらには炉の位置が当該期の住居変化解明のきっかけになるかもしれない。

第5章 2・3区の遺構と遺物



第 89 図 2 区 6 号住居

2.2.3区微高地部の遺構と遺物



第90図 2区6号住居炉と出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区7号住居(付図2 第91～96図 PL50～54・157・158 遺物観察表P.492・493)

位置 2区3-82-J・K-8・9G

形状 隅丸長方形

重複 12号・13号土坑に先行する。

規模 長軸 6.72m 短軸 6.20m

残存壁高 0.60m

床面積 34.78㎡

長軸方位 N-87°-W

埋没土 上層は浅間C軽石・白色軽石を含む黒褐色土で、下層は浅間C軽石・白色軽石・黄褐色砂黒褐色土や灰褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北西部に炉が検出された。炉は長径0.78m、短径0.38mの不整楕円形で、厚さ0.07mほど表面が焼土化して硬化していた。炉は住居掘り方を埋積した土層内に深さ0.20mほど掘り込み、灰色砂と黒褐色土を埋填して作られていた。

柱穴 主柱穴4本を床面で検出した。いずれも不整円形あるいは不整楕円形である。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.70×0.70×0.56m、P2が0.64×0.57×0.46m、P3が0.76×0.72×0.59m、P4が0.65×0.60×0.67mである。

南壁際で検出したP5は、南東隅にあり、規模・深さも主柱穴とは異なっていた。他の住居と比較検討すると、南壁際に掘られた土坑の一部と考えられる。周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面で2基の住居内土坑を検出した。1号土坑は主柱穴P1の北側で検出した。長径1.05m、短径0.67m、深さ0.2mの楕円形で、断面形は皿状である。長軸を北壁と平行にしている。

南東隅に1基の住居内土坑の一部と推定されるP5を検出した。その規模は長径0.51m、短径0.48m、深さ0.41mの楕円形で、底面に南壁と平行する細長い凹みが検出された。凹みの大きさは長さ0.32m、幅0.09m、深さ0.22mである。入り口施設の可能性がある。

床面 住居の西部と東部に南北方向の細い地割れが入り込み、床面を壊していた。床面は南西隅を除く

壁沿いが、幅0.6～2.0mの範囲にやや高く貼り床されて硬化していた。北壁沿いは幅0.6mでP1・P2を結んだ線より狭かったが、西壁・南壁沿いは主柱穴がその高い貼り床の境になっている。主柱穴P2周辺はやや広く貼り床が検出された。東壁沿いは貼り床の境界がちょうど地割れに当たってしまったと推定される。地割れの東側のほうがやや高くなっていた。

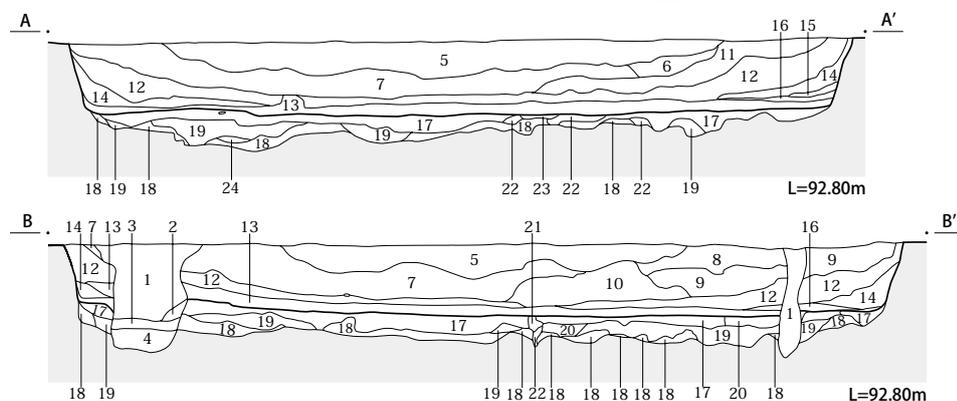
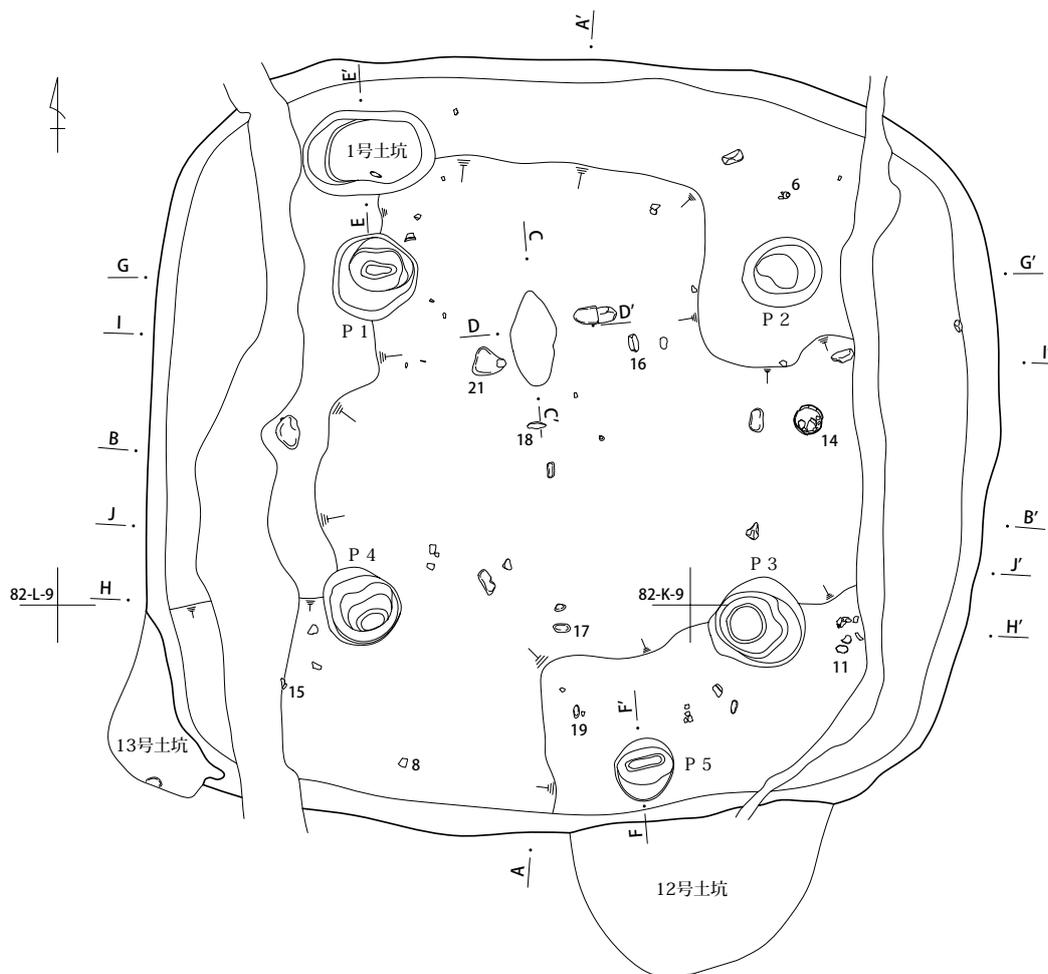
掘り方 掘り方面の主柱穴P1～P4の内側で、新たに4本の柱穴P6～P9を検出した。このことから本住居は拡張住居であり、P6～P9は拡張前、P1～P4は拡張後の主柱穴と考えられる。掘り方面で検出した柱穴はいずれも不整形あるいは不整楕円形である。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP6が0.59×0.24×0.31m、P7が0.43×0.27×0.33m、P8が0.59×0.39×0.30m、P9が0.53×0.34×0.23mである。

掘り方面には、拡張後の住居壁から0.7～1.0m内側に、0.7～1.0m、深さ0.07～0.12mの溝状の掘り込みが口の字状に検出された。この外周は拡張前の住居の掘り込みにあたる可能性があるが、確定はできなかった。この溝状の掘り込みの外側は幅0.5～0.7mのテラス状の平坦面になっていた。

また掘り方面でP10～P16のピットを検出した。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP10が0.66×0.40×0.25m、P11が0.40×0.37×0.24m、P12が0.46×0.44×0.15m、P13が1.06×0.45×0.26m、P14が0.61×0.52×0.27m、P15が0.44×0.34×0.24m、P16が0.39×0.35×0.17mである。P14は南東隅にあり、比較的大型であることから、住居内土坑であるかもしれない。

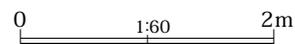
上記のような掘り方面を埋めていたのは、浅間C軽石・黄褐色砂を含む暗褐色土、黄褐色土粒を含む黄灰色土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は全体に散在していた。弥生土器壺破片(第94図1・2)と土師器甕破片(3)、壺破片(4)は埋没土中から出土した。5は埴形の手捏ね土器で主柱穴P3埋没土中から出



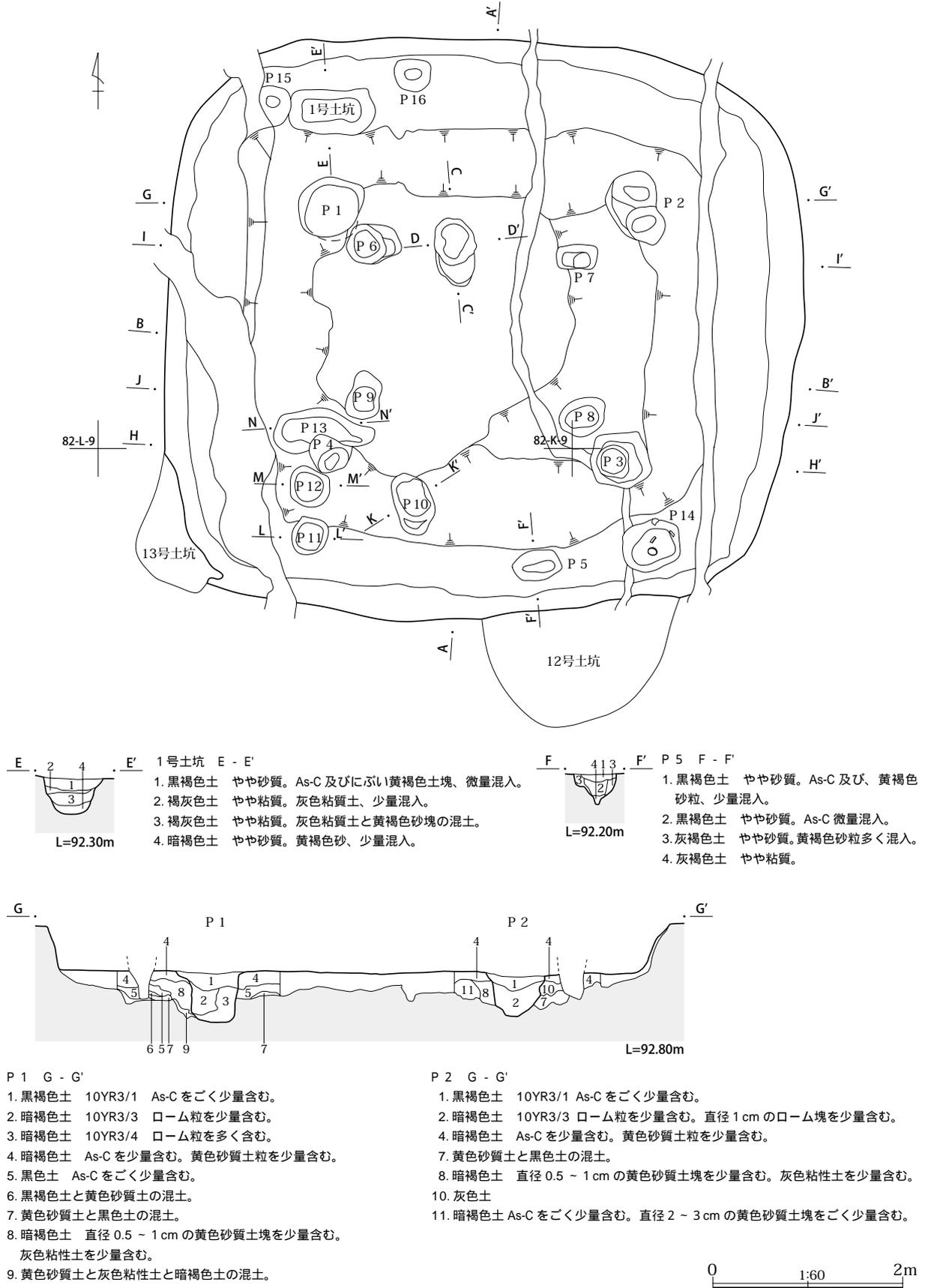
A - A'・B - B'

- | | |
|---|--|
| <p>1. 黒褐色土 砂質。As-C、黄褐色砂。微量混入。</p> <p>2. 黒褐色土 1層に比べ、黄褐色砂多く混入。</p> <p>3. 褐灰色土 やや砂質。7号住居の床が落ち込んだものと思われる。黄褐色土塊、多く混入。</p> <p>4. 褐灰色土 やや砂質。黄褐色土塊、微量混入。</p> <p>5. 黒褐色土 やや砂質。As-C及び、直径1～2mmほどの白色軽石、多く混入。</p> <p>6. 黒褐色土 砂質。As-C及び、直径1～2mmほどの白色軽石、多く混入。</p> <p>7. 灰褐色土 やや砂質。As-C及び、直径1～2mmの白色軽石、混入。</p> <p>8. 灰褐色土 やや砂質。As-C及び、直径1～2mmの白色軽石、多く混入。
鉄分沈着多い。</p> <p>9. 灰褐色土 7層に固定。7層に比べAs-C少なく、鉄分沈着。</p> <p>10. 灰褐色土 やや砂質。黄褐色土塊多く混入。As-C及び白色軽石、微量混入。</p> <p>11. 灰褐色土 7層に固定。As-C及び白色軽石が7層より少ない。</p> <p>12. 黒褐色土 砂質。As-C及び白色軽石。黄褐色砂、微量混入。</p> | <p>13. 灰褐色土 やや砂質。As-C微量混入。</p> <p>14. 暗褐色土 やや砂質。黄褐色土混入。</p> <p>15. 黒褐色土 砂質。黄褐色砂、微量混入。</p> <p>16. 暗褐色土 やや粘質。黄褐色砂、微量混入。</p> <p>17. 暗褐色土 As-C軽石、黄褐色砂混入。硬化面。</p> <p>18. 黄灰色土 黄褐色砂を多く含む。</p> <p>19. 暗黄灰色土 黒色土に黄灰色砂を塊状に含む。</p> <p>20. 暗褐色土 As-C混じり。黒色土に黄褐色砂が塊状に入る。</p> <p>21. 黒色土 As-C混じり。</p> <p>22. 暗灰色土 黄灰色砂塊。</p> <p>23. 黄灰色土 黄灰色土に黒色土が混じる。</p> <p>24. 黒色土 粘質。</p> |
|---|--|

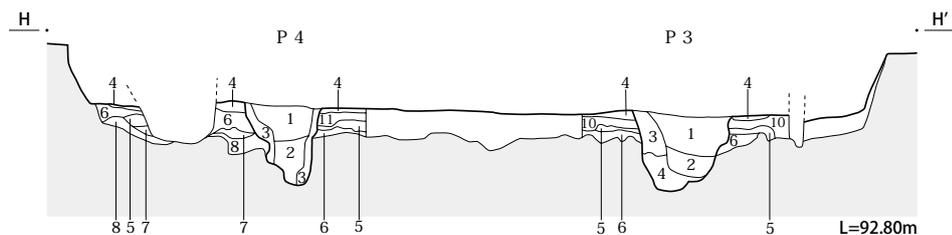


第91図 2区7号住居(1)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第 92 図 2 区 7 号住居 (2)



P 4 H - H'

1. 黒褐色土 10YR3/1 As-C を多く含む。
2. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒、直径 1 cm のローム塊を少量含む。
3. 暗褐色土 10YR3/3 直径 1 cm のローム塊を少量含む。褐灰色粘性土 (10YR4/1) 直径 1 cm の塊を少量含む。
4. 暗褐色土 As-C を少量含む。黄色砂質土粒を少量含む。
5. 黒色土 As-C をごく少量含む。
6. 黒褐色土と黄色砂質土の混土。
7. 黄色砂質土と黒色土の混土。
8. 暗褐色土 直径 0.5 ~ 1 cm の黄色砂質土塊を少量含む。灰色粘性土を少量含む。
11. 暗褐色土 As-C をごく少量含む。直径 2 ~ 3 cm の黄色砂質土塊をごく少量含む。

P 3 H - H'

1. 黒褐色土 10YR3/1 As-C を少量含む。
2. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒、直径 1 cm のローム塊を少量含む。
- 3a. 黒褐色土 10YR3/2 直径 1 cm のローム塊を少量含む。
- 3b. 黒褐色土 10YR3/2 直径 1 ~ 2 cm のローム塊を多く含む。暗褐色 粘性土 (10YR4/1) 塊をごく少量含む。
4. 暗褐色土 As-C を少量含む。黄色砂質土粒を少量含む。
5. 黒色土 As-C をごく少量含む。
6. 黒褐色土と黄色砂質土の混土。
10. 灰色土



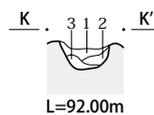
P 6 I - I'

1. 黒褐色土 やや砂質。As-C 微量混入。
2. 暗褐色土 灰色粘質土及び黄褐色砂、小塊混入。
3. 暗褐色土 黄褐色砂小塊少量混入。



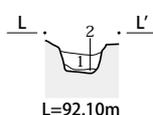
P 8 J - J'

1. 暗褐色土 灰色粘質土及び黄褐色小塊混入。
2. 褐灰色土 やや粘質。黄褐色砂少量混入。



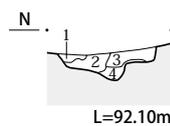
P10 K - K'

1. 暗褐色土 黄褐色砂、混入。
2. 暗褐色土 黄褐色砂、多く混入。
3. 褐灰色土 やや粘質。黄褐色砂、少量混入。



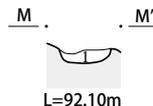
P11 L - L'

1. 暗褐色土 黄褐色砂混入。
2. 褐灰色土と黄褐色砂の混土。



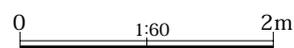
P13 N - N'

1. 黒色土 As-C を多く含む。
2. 黒色土 As-C を少量含む。黄褐色土粒、直径 0.5 ~ 1 cm の黄褐色土塊を少量含む。
3. 黒色土 As-C を少量含む。黄褐色土粒、直径 5 ~ 8 mm の黄褐色土塊をごく少量含む。
4. 黒色土 As-C をごく少量含む。直径 5 ~ 8 mm の暗褐色粘性土塊を少量含む。



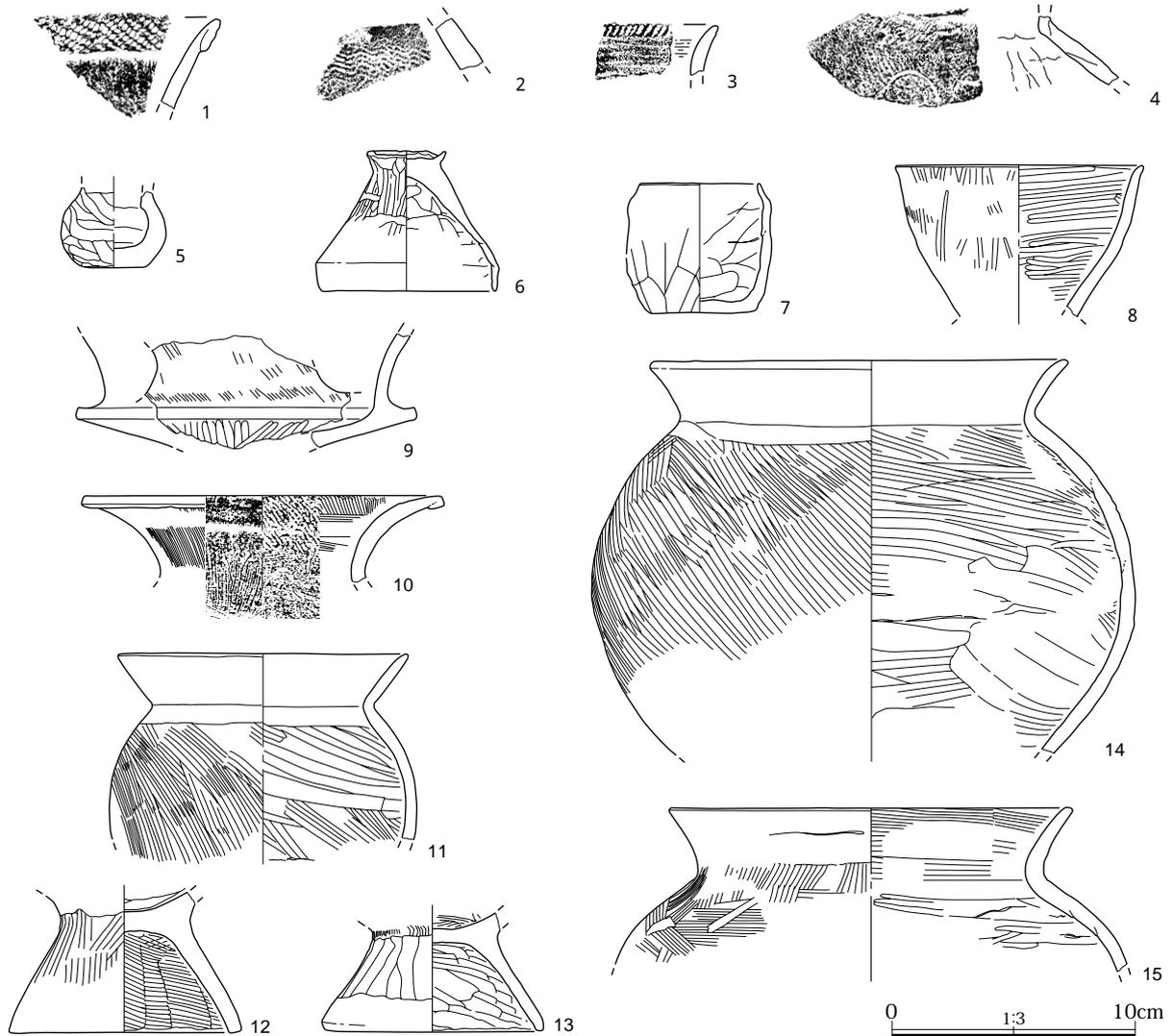
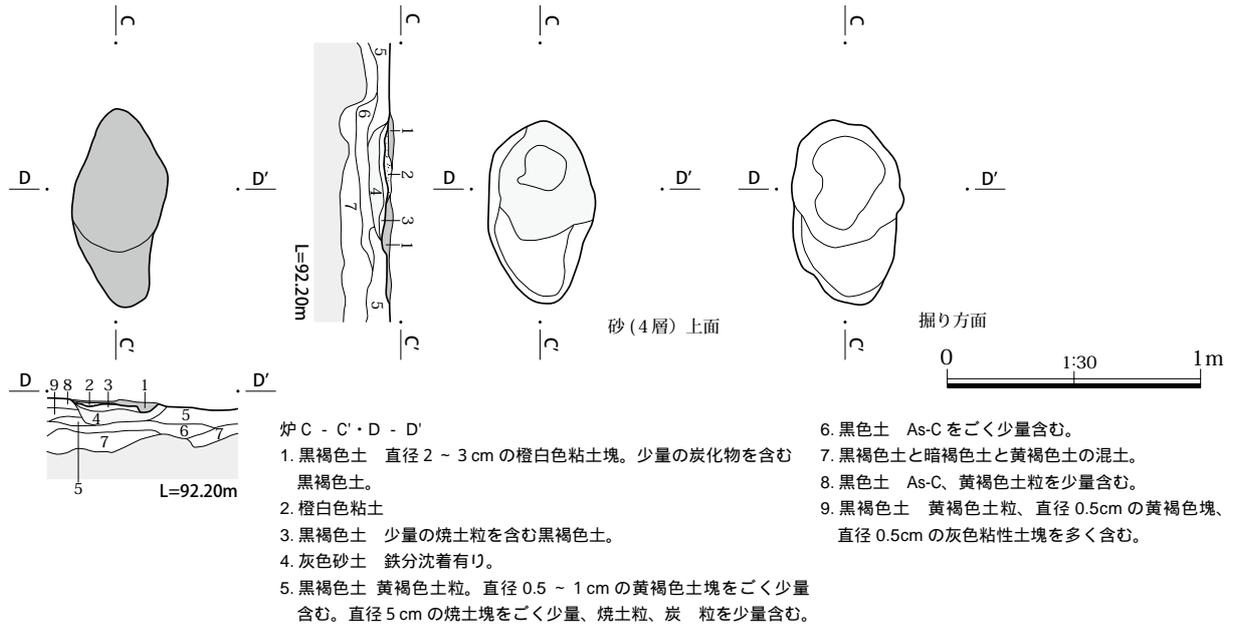
P12 M - M'

1. 暗褐色土 黄褐色砂、微量混入。

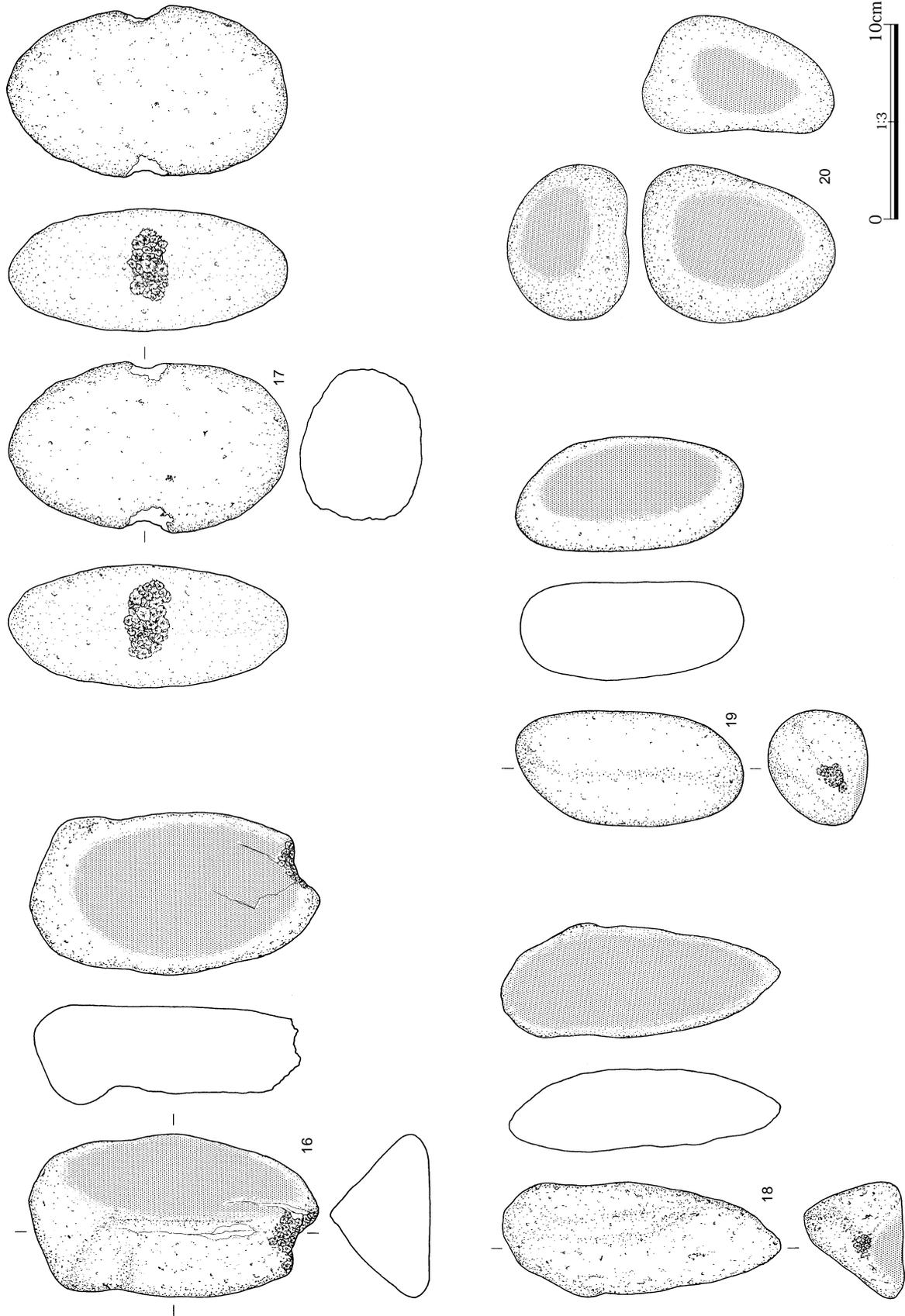


第 93 図 2 区 7 号住居 (3)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第94図 2区7号住居炉と出土遺物(1)



第95図 2区7号住居出土遺物(2)

土した。蓋(6)は北東部床面上5cm、鉢形の手捏ね土器(7)は南東隅の土坑P14底面上9cmで出土した。埴(8)は南部床面上9cmで出土した。甕は11が南東部床面上2cmで、14が東部床面上14cmで、15が南西部床面上4cmで出土した。土師器特殊器台(9)、壺(10)、台付甕台部(12・13)は埋没土中から出土した。

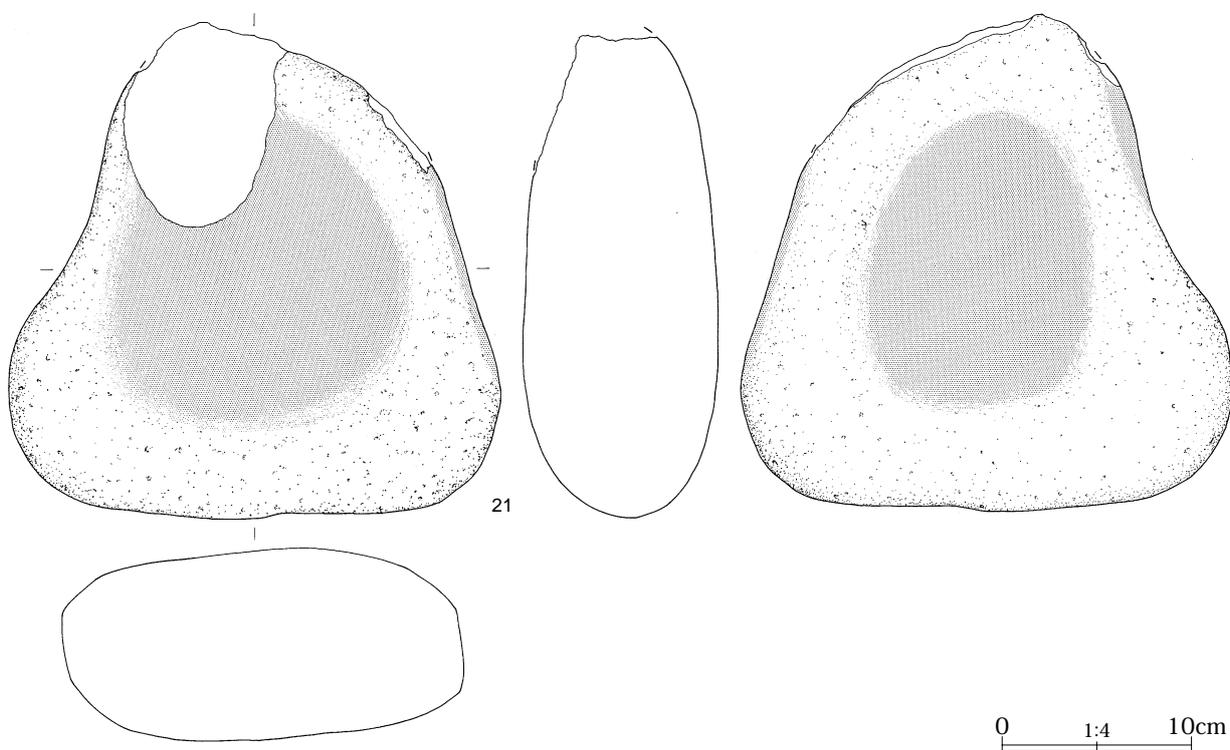
石製品・礫は住居中央部に20点ほどが散在していた。敲石(第95図16)は炉の東側床面上8cm、挟り入り礫(17)はP3とP4を結んだ線の中央部床面上2cmで出土した。敲石(18)は炉の南側床面上5cmで、大型の砥石(第96図21)は炉の西側床面上6cmで出土した。

ここで図示した遺物の他、土師器破片842点、礫・礫片15点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居は掘り方で床面の支柱穴の内側に古い

支柱穴を確認したことから拡張されていることが判明した。拡張前の住居形態は新しく掘り込まれた住居掘り方で分からなくなっているが、古い支柱穴を結んだ形が長軸短軸比1.41の長方形であることから、長方形と推定される。拡張された7号住居は長軸短軸比1.08で正方形に近い形態に変化していた。本遺跡では長方形の住居と正方形の住居が混在しており、弥生時代終末から古墳時代にかけての住居形態の変遷を示している可能性がある。本住居の拡張は、その過程の一側面を示す可能性を指摘しておきたい。

本住居の炉の掘り込みの下層に厚さ9cmの灰色砂が敷かれていた。炉はその上位に黒褐色土を充填し、白色粘土を置いて火床としている。本遺跡の炉は粘土を火床とする例は多いが、下層に砂を敷いているのは7号住居の炉のみである。



第96図 2区7号住居出土遺物(3)

2区8号住居(付図2 第97~99図 PL54・55
・158・159 遺物観察表 P.493・494)

位置 2区3-82-K・L-10・11G

形状 南西部は発掘区域外で全形を調査することは
できなかったが、隅丸長方形と推定される。

重複 無し

規模 長軸(5.40m) 短軸 4.16m

残存壁高 0.17m

床面積 計測不能

長軸方位 N-83°-W

埋没土 上層は浅間C軽石を含む黒色土で埋まっ
ていた。本住居上にも地割れが及んでいたが、浅か
かったので床面を壊すにはいたらなかった。

炉 住居中央やや北東部、支柱穴P2の南西脇に炉
が検出された。炉は長径0.72m、短径0.65mの
不整楕円形で、厚さ0.12mほど表面が焼土化して
硬化していた。炉は住居掘り方を埋積した土層内に
深さ0.12mほど掘り込み、黒褐色土を埋積して作
られていた。

柱穴 支柱穴3本を掘り方面で検出した。南西隅の
支柱穴は発掘区域外となり、未検出である。いずれ
も不整円形あるいは不整楕円形で、それぞれの規模
(長径×短径×深さ)はP1が0.38×0.35×0.37
m、P2が0.17×0.16×0.10m、P3が0.40×0.31
×0.22mである。

周溝 床面では周溝は検出されなかった。

住居内土坑 掘り方面で1基の住居内土坑を検出し
た。1号土坑は支柱穴P3の南東部の壁際で検出し
た。長径0.50m、短径0.44m、深さ0.25mの楕
円形で、断面形は箱状である。黄褐色土粒・塊を少
量含む黒色土で埋まっていた。出土遺物はなかった。

床面 床面は中央部のみが硬化していた。

掘り方 前述のように掘り方面で、支柱穴P1~P
3と1号土坑を検出した。本来なら床面で検出され
るべき遺構であったが、壁寄りの床面はあまり硬化
していなかったため、掘り込みを平面的に確認する
ことが困難であった。

南東隅には掘り方面で周溝を検出した。幅0.14

m、深さ0.05mで、延長0.9mのL字状に巡って
いた。支柱穴P1とP2を結んだ線のP1から1.05
mのところまで小溝を検出した。規模はP1とP2を
結んだ線から南へ長さ1.42m、幅0.31m、深さ0.18
mである。

掘り方全体としては中央部がやや浅く、壁沿いの
四周が深く掘り込まれていた。掘り方上面は凹凸が
著しい。掘り方を埋めていたのは、浅間C軽石・
黒褐色土粒を含む暗褐色土、暗褐色土粒を含む黄褐
色土である。

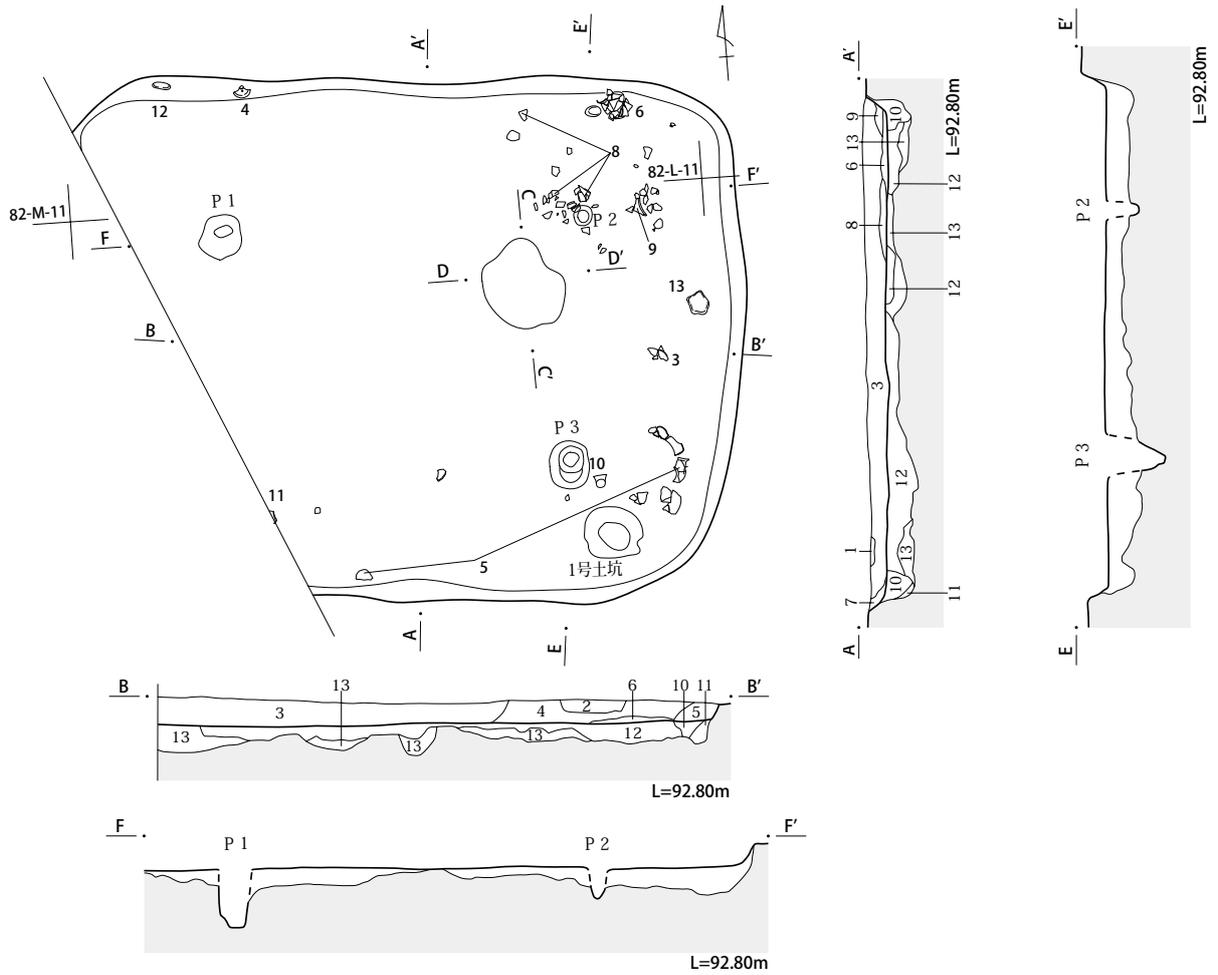
遺物と出土状況 床面近くの遺物は東部に集中し
て出土した。高坏形手捏ね土器(第98図1)と土
師器鉢(2)は埋没土中から出土した。高坏(3)は
東部床面上3cmで出土した。高坏脚部(4)は北西
部壁際床面上6cmで出土した。甕(5)は南東部床
面上5cmの破片と南部壁際床面上3cmの破片が
接合した。壺(6)は北東隅床面直上で割れてはい
たが、ほぼ全形で出土した。甕(第99図8)は主
柱穴P2の北脇床面直上で、9はP2東側床面上5
cmで出土した。台部(10)は支柱穴P3東側床面直
上、11は南西部床面直上で出土した。敲石(12)は
北西隅床面上6cmで、砥石(13)は東壁中央床面上
3cmで出土した。小型甕は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物の他、土師器破片247点、
剥片1点、礫片2点、礫3点、棒状礫片1点が出土
している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられ
る。床面では支柱穴が検出できなかったために、柱
穴の土層断面や掘り方との関連を確認する土層断面
の設定ができなかった。したがって本住居では柱穴
の情報は高さしか記録できなかった。

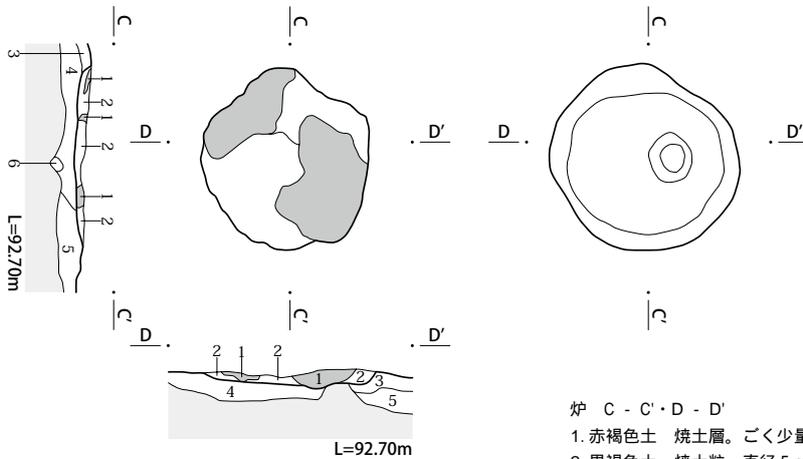
住居内1号土坑は床面では検出できなかったが、
床面上の施設と考えられる。本遺跡では南東隅の主
柱穴の南側あるいは南東側の壁沿いに土坑をもつ住
居がほとんどを占める。この土坑の機能は未解明で
あるが、さらに西隣にもう1基の土坑を施設する住
居もあり、入り口や作業場としての空間利用が推定
される。

第5章 2・3区の遺構と遺物



A - A'・B - B'

1. 暗灰色土 住居を切るように走る溝状の攪乱。
2. 暗灰色土 住居を切るように走る溝状の攪乱。
3. 黒色土 直径1～3mmのAs-Cを多く含む。しまり良い。
4. 黒灰色土 As-Cをやや多く含む。3層と比べると、As-Cが少なく粒が小さい。
5. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
6. 暗灰色土 As-Cを微量。褐色粒を少量含む。
7. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
8. 黒色土 As-Cを少量。褐色粒を微量含む。
9. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
10. 暗褐色土 やや砂質。As-C微量混入。
11. にぶい黄褐色土 やや砂質。黄褐色土と10層の土の混土。
12. 暗褐色土 やや砂質。黒褐色土粒とAs-C含む。及び黄褐色土が混入。
13. にぶい黄褐色土 やや砂質。暗褐色土。多く混入。



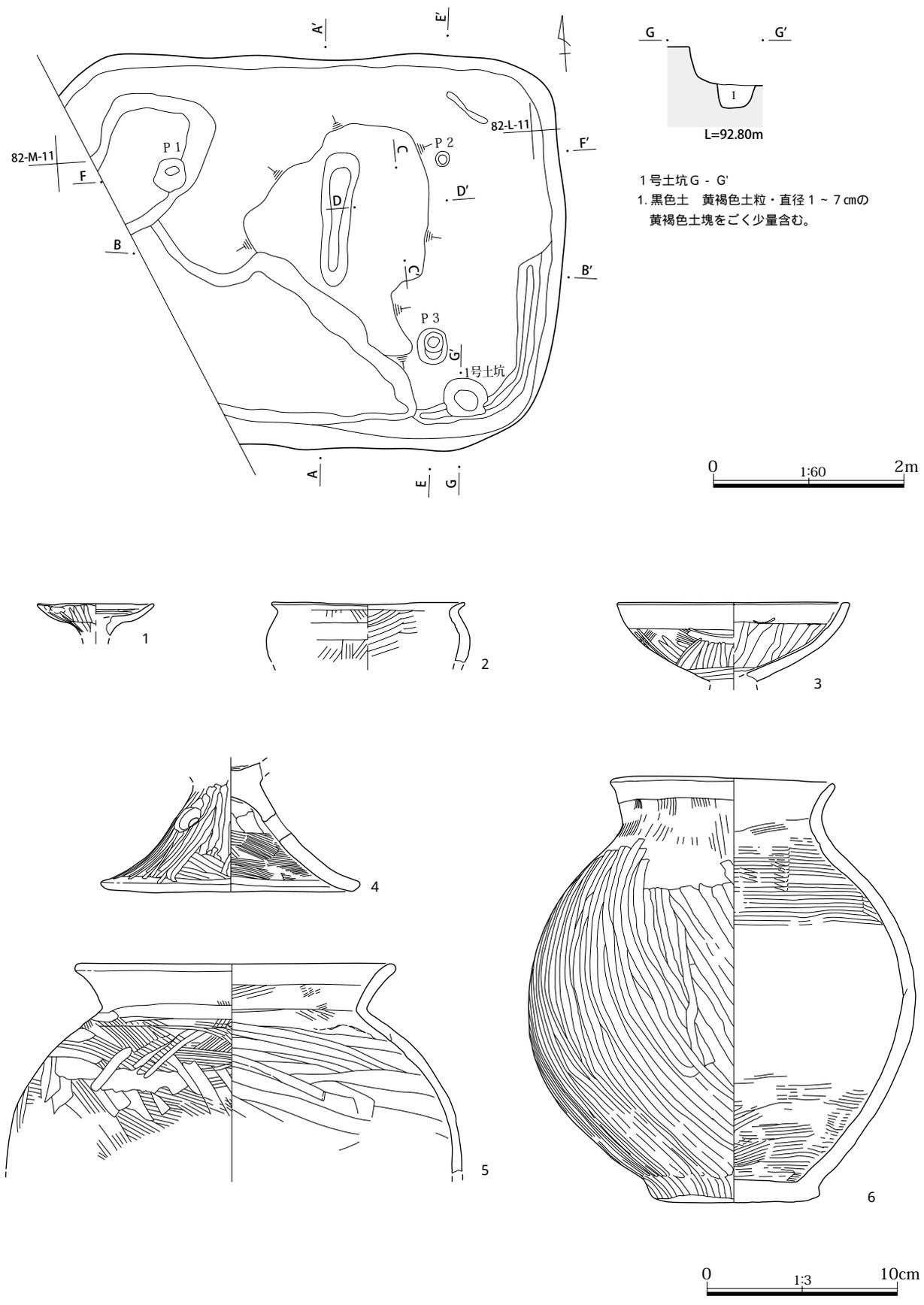
炉 C - C'・D - D'

1. 赤褐色土 焼土層。ごく少量の炭化物粒を含む。しまりはあまり強くない。
2. 黒褐色土 焼土粒。直径5mmの焼土塊、炭粒を多く含む。
3. 暗褐色土 焼土粒、炭粒をごく少量含む。
4. 暗褐色土

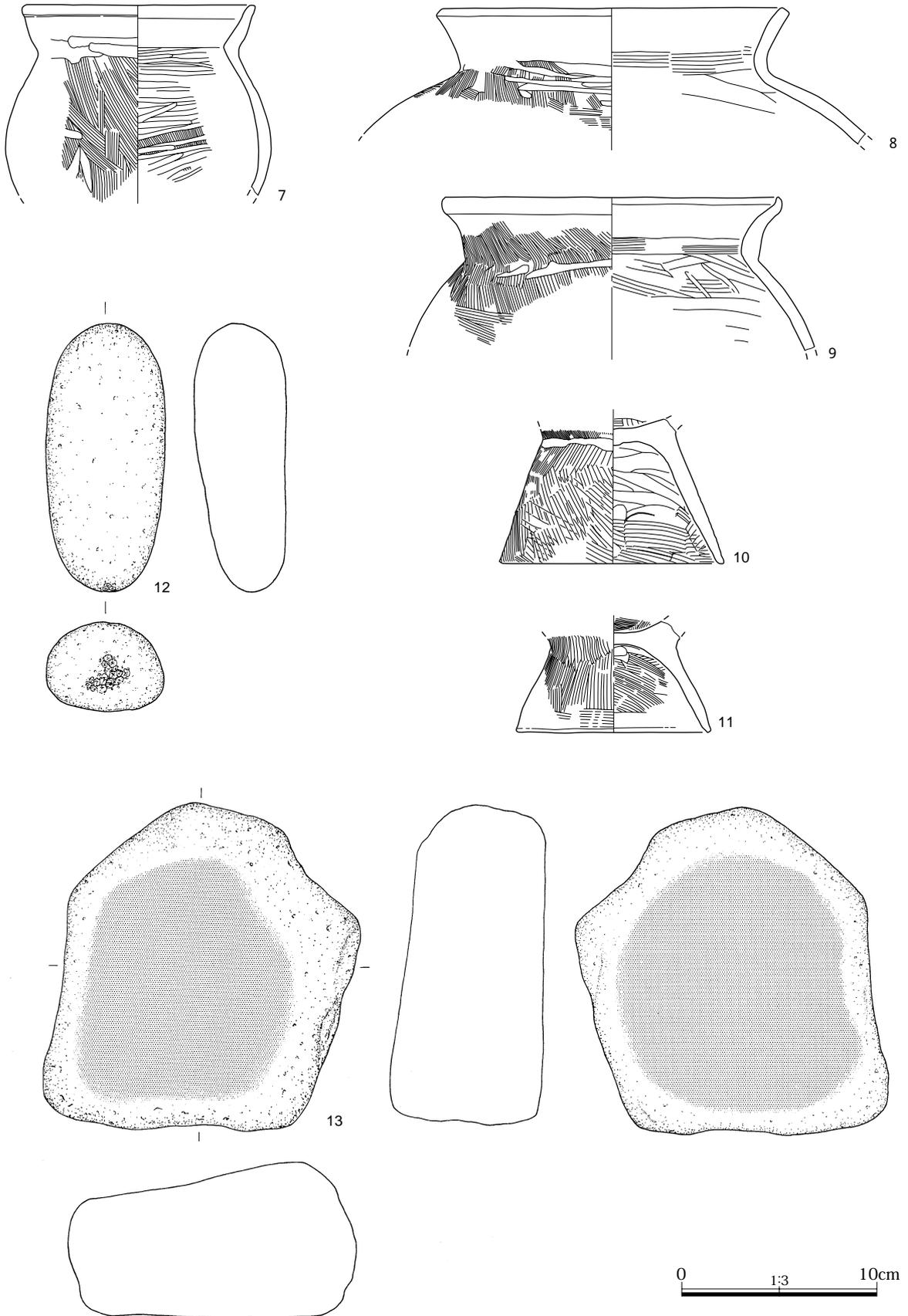
0 1:30 1m

第97図 2区8号住居

2.2.3区微高地部の遺構と遺物



第98図 2区8号住居と出土遺物(1)



第99図 2区8号住居出土遺物(2)

2区9号住居(付図2 第100～110図 PL56
～60・159～164 遺物観察表P.494～498)

位置 2区3-82-H・I-7・8G

形状 隅丸正方形

重複 無し

規模 長軸 6.00 m 短軸 5.91 m

残存壁高 0.78 m

床面積 30.50 m² 長軸方位 N-88°-W

埋没土 上層は浅間C軽石・白色軽石を多く含む黒褐色土で、下層は少量の浅間C軽石・黄褐色土を含む黒灰色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北東部、主柱穴P2の南西脇に炉が検出された。炉は長軸0.6 m、短軸0.5 mの隅丸長方形で、厚さ0.03 mほど表面が焼土化して、非常に硬く粘土が焼き締まっていた。炉は地山を0.08 mほど掘り込み、灰白色粘質土を充填してつくられていた。中層も比熱して一部が焼土化していた。

柱穴 P1～P4の主柱穴4本を床面で検出した。いずれも不整形円形あるいは不整形楕円形で、床面では円形の柱痕を検出した。掘り方面では隅丸方形の掘り方を検出した。それぞれの掘り方面での規模(長径×短径×深さ)は、P1が0.58×0.47×0.36 m、柱痕径0.16 m、P2が0.64×0.49×0.49 m、柱痕径0.14 m、P3が0.68×0.61×0.43 m、柱痕径0.21 m、P4が0.70×0.58×0.41 m、柱痕径0.15 m、である。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面で東壁および南壁沿いに3基の住居内土坑を検出した。1号土坑は主柱穴P3の北東部で検出した。直径0.45 m、深さ0.2 mの不整形円形で、断面形は皿状である。2号土坑は1号土坑の南側で検出した。長径0.68 m、短径0.54 m、深さ0.18 mの楕円形で、断面形は皿形である。北東脇で壺(第104図31)が出土した。3号土坑は主柱穴P2の南側の壁際で検出した。長軸0.8 m、短軸0.78 m、深さ0.82 mの隅丸方形で、断面形は筒形である。長軸が南壁に平行している。内部からは台付甕(第107図58)の破片が出土し、南壁際

で出土した破片と接合した。後述するが、掘り方面でも土坑を1基検出した。

床面 平坦で、貼り床されて硬化していた。特に主柱穴を結んだ線の内側は硬化していた。

掘り方 掘り方底面は全体的に平坦で、やや壁際が深くなっていた。掘り方を埋めていたのは、明黄褐色土の粒や下位を含む黒褐色土である。

主柱穴P1～P4は床面で柱痕跡を検出できたが、柱穴の形状の調査が不十分で、掘り方面では4本とも隅丸方形に掘られていたことが判明した。

また、掘り方面では周溝が四周の壁で検出された。規模は概ね、幅0.2 m、深さ0.11～0.15 mである。

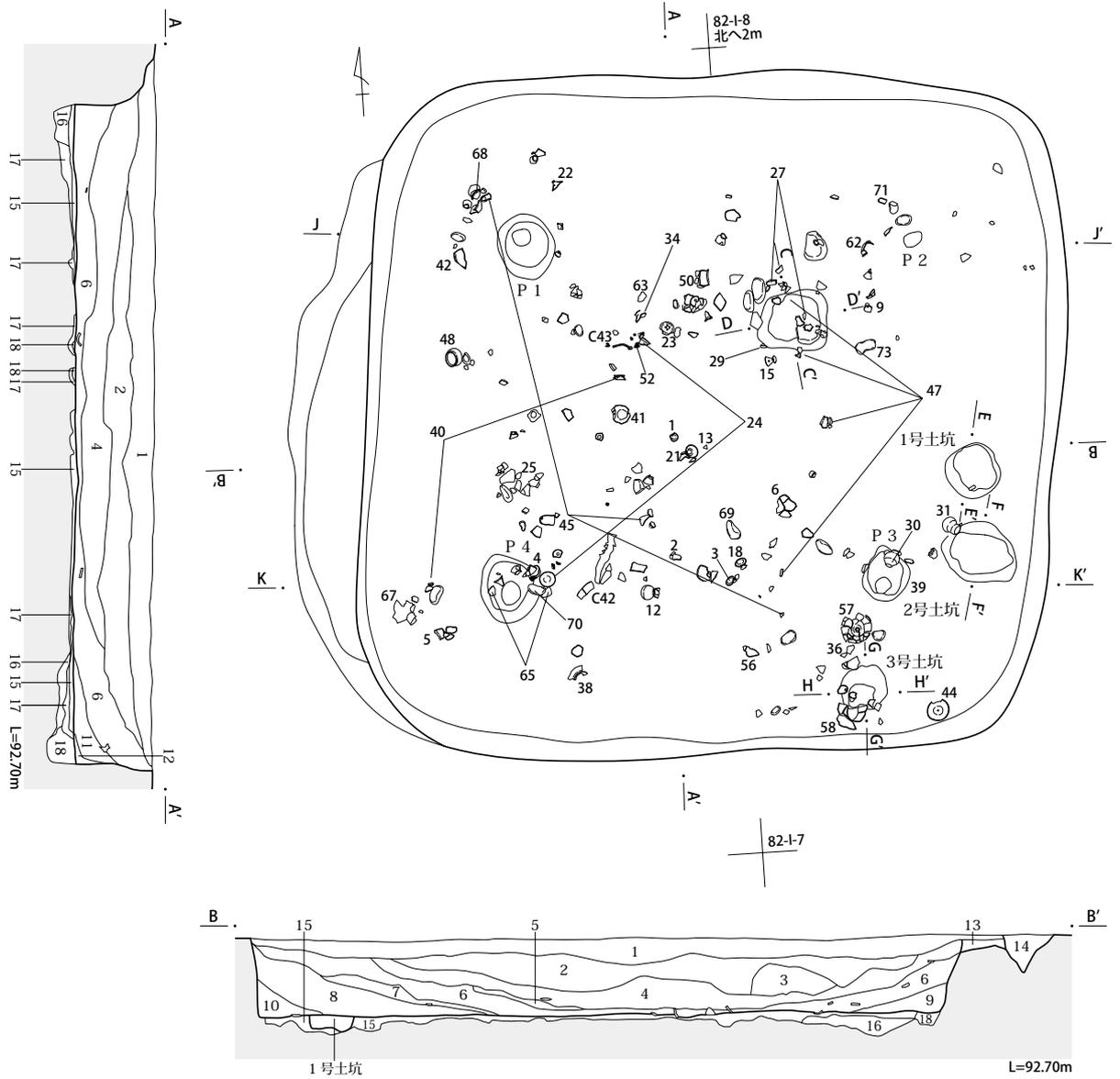
南壁沿いでは、床面で検出された3号土坑の西側で土坑1基を検出した。この4号土坑は長軸0.43 m、短軸0.40 m、深さ0.3 mの隅丸方形で、断面形は箱形である。定形的な形態の土坑で、長軸は南壁に平行していた。

遺物と出土状況 本住居の埋没土上層から中層にかけては多量の土器破片が出土した。埋没土上層あるいは埋没土として取りあげた遺物は、縄文土器破片2点、土師器破片1059点、須恵器破片1点にのぼる。この他に接合し図化できた埋没土中出土の遺物も相当量ある。埋没土出土の遺物は破片が多いが、住居縁から落ち込んだような状態で出土したもの(PL56-7・57-2)や、完形に近い遺物もある(PL56-8・57-1)。一方床面近くから出土した遺物は形が残っているものが多かった(PL57-3～5)。

本住居には、このような二つの出土パターンがあることから、遺物取りあげ作業や写真や図の記録を二回に分けておこなった。上層遺物は可能な限り残して掘り下げ、全体写真撮影後に一括して取りあげた。床面出土の遺物は出土位置の図化記録もおこなってから、1点ずつ高さを計測して取りあげた。なお、埋没土出土遺物には土器実測図中にマークを付した。台付甕・S字甕に埋没土上層から出土したものが多く、器台や蓋等の小型品のなかにも上層から出土したものが含まれていた。

床面近くの遺物は、概ね主柱穴を結んだ線の内側

第5章 2・3区の遺構と遺物



A - A'・B - B'

1. 黒色土 直径1～4mmほどのAs-Cを多く含む。しまり良くやや硬質。
2. 黒褐色土 As-Cをやや多く、暗褐色土を少量含む。しまり悪い。
3. 黒褐色土 2層と似ているが、Cの混入が少量で暗褐色土をやや多く含む。軟質。
4. 黒灰色土 As-Cを微量。暗黄褐色土を少量含む。
5. 暗黄褐色土 地山からの崩落土(暗黄褐色土)を主体とする。
6. 黒灰色土 4層と似ているが、暗黄褐色土の混入が多く、やや砂質。
7. 黒褐色土 焼土。白色粘質土を多く含む。
8. 黒褐色土 暗黄褐色土及び、30mmの軽石を少量含む。
9. 暗黒褐色土 暗黄褐色土を微量含む。しまり良い。

10. 暗褐色土 8層と似ているが混入物はなし。軟質。
11. 暗褐色土 8層と似ているが混入物はなし。軟質。
12. 暗黄褐色土 地山からの崩落土を主体とする。
13. 黒褐色土 As-Cを少量含む。やや硬質。
14. 黒褐色土 地割れ。As-Cを少量含む。
15. 黒褐色土 黄褐色土を全体的にまばらに少量含む。
16. 黄褐色土 黒褐色土を全体的にまばらに少量含む。
17. 黒褐色土 直径0.5～1cmの黄褐色土塊を少量含む。
18. 黒褐色土と黄褐色土の混土。

E - E' 1号土坑 E - E'

1. 白色粘土
2. 黄白色砂質土 直径1～2cmの黒褐色土小塊を含む。
3. 灰褐色土 直径1～3cmの黄白色砂質土塊を含む。

F - F' 2号土坑 F - F'

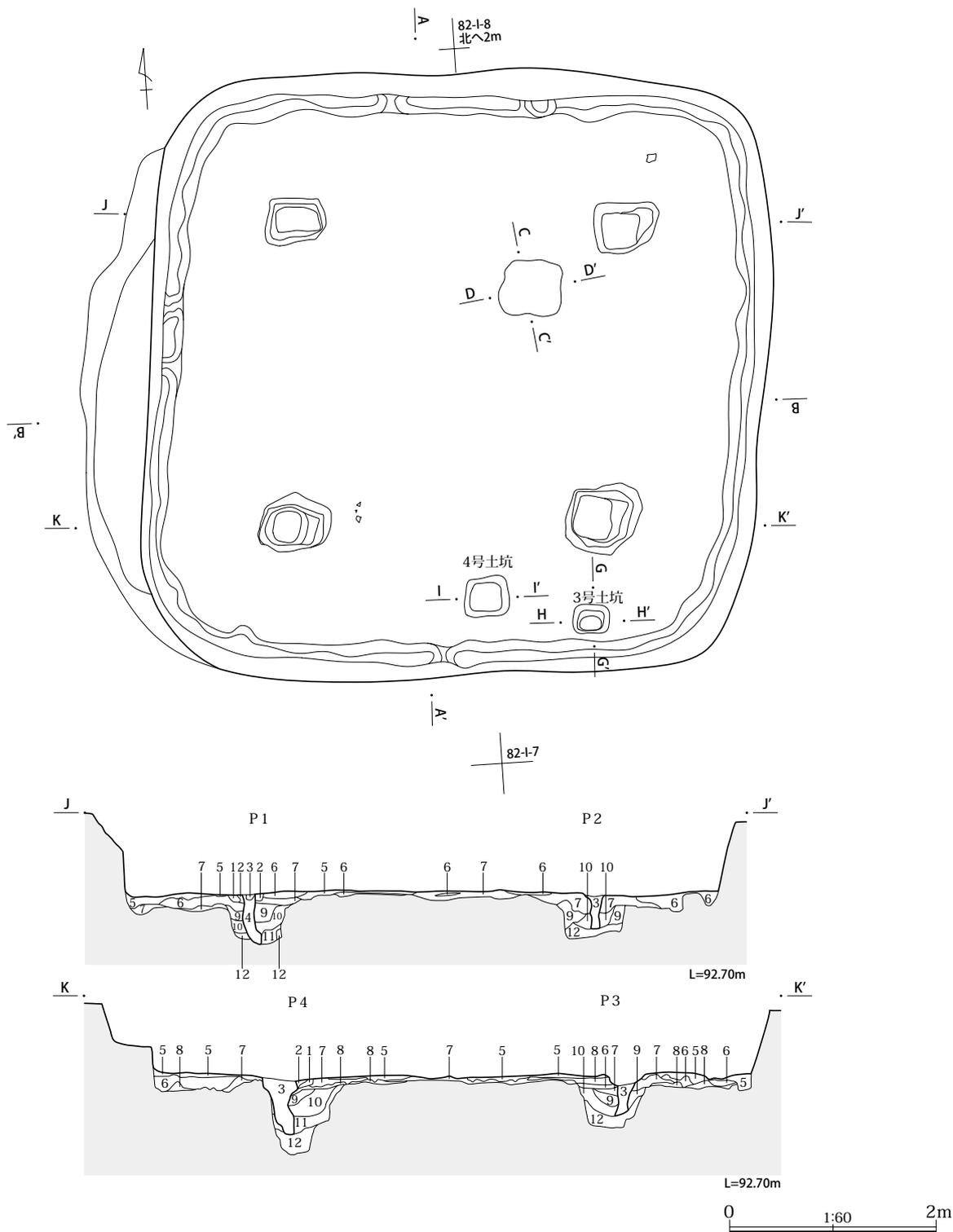
1. 灰褐色土 直径0.5cmの黄白色土粒。少量の焼土粒を含む。
2. 灰褐色土 直径3～5cmの黄白色砂質土塊を多く含む。

I - I' 4号土坑 I - I'

1. 黄褐色土 直径1cmの黒褐色土塊を多く含む。
2. 黒褐色土 直径1cmの黄褐色土塊を少量含む。

0 1:60 2m

第100図 2区9号住居(1)



P 1 ~ P 4 J - J'・K - K'

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黄褐色土と黒色土と明黄褐色土の混土。 2. 黄褐色土 明黄褐色土粒をごく少量含む。 3. 黒褐色土 4. 暗褐色土 黄褐色土粒。直径 2 ~ 3 cm の黄褐色土塊を少量含む。 5. 黄褐色土 直径 1 ~ 2 cm の黒褐色土塊。直径 1 cm の明黄褐色土塊を多く含む。 6. 黒褐色土 直径 0.5 ~ 1 cm の黄褐色土塊を少量含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 7. 黄褐色土 直径 2 ~ 3 cm の明黄褐色土塊を多く含む。直径 1 ~ 2 cm の黒褐色土塊を少量含む。 8. 黒褐色土と黄褐色土の混土。 9. 明黄褐色土 直径 1 ~ 3 cm の黒褐色土塊をごく少量含む。 10. 明黄褐色土 黄褐色土。黒褐色土をまばらに全体的にごく少量含む。 11. 黄褐色土 直径 0.5 ~ 1 cm の暗褐色土塊を少量含む。灰色粘性土塊を少量含む。 12. 灰色粘性土 直径 1 ~ 2 cm の黄褐色土塊を少量含む。 |
|--|--|

第 101 図 2区9号住居(2)

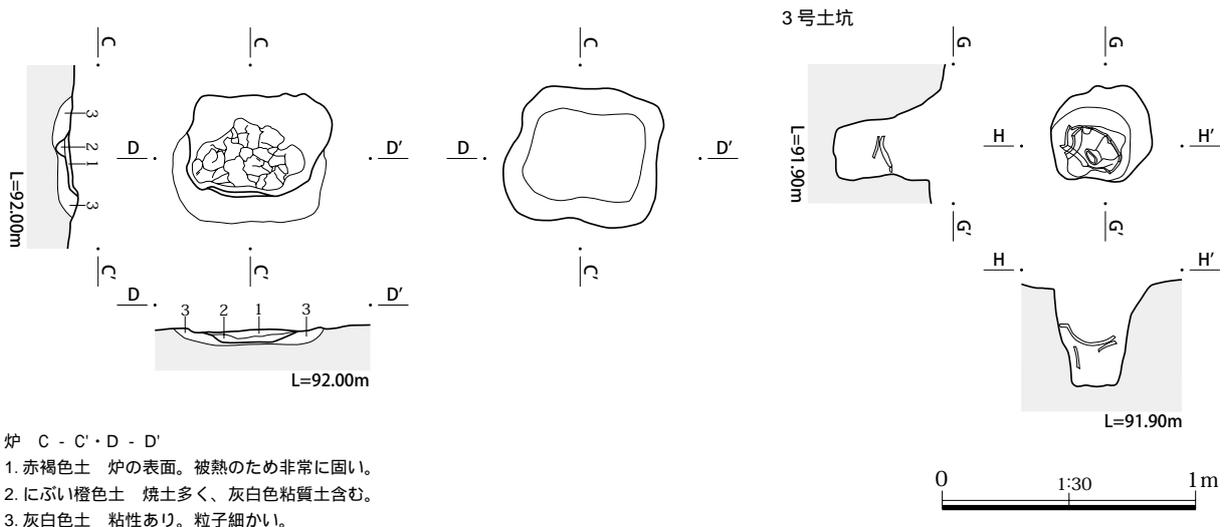
に集中して出土した。西壁沿いと3号土坑周辺は、壁近くで遺物が出土した。

完形で出土した手捏ね土器(第103図1)は中央部床面上5cm、半完形で出土した鉢(3)は南部床面上6cmで出土した。蓋が3点出土したが、(9)は東部床面上7cmで、(7)と(10)は埋没土中から出土した。半完形で出土した小型器台(13)は中央部床面直上の遺物と掘り方出土の破片が接合した。一方ほぼ完形で出土した小型器台(14)は埋没土中から出土した。高坏は第104図24が中央部床面上4cmで、25は中央部床面直上で出土した。壺(30)は完形でP3北東縁床面直上で出土した。甕(第105図46)はほぼ完形であるが、埋没土上層から出土した。台付甕(第107図59)もほぼ完形で出土したが、埋没土上層から出土した。床面近くから出土した甕は第106図50の台付甕、第108図65のS字甕やP3内から出土した第107図58の台付甕等である。有孔鉢(第105図44)は南東隅床面直上、45は南部床面直上で出土した。

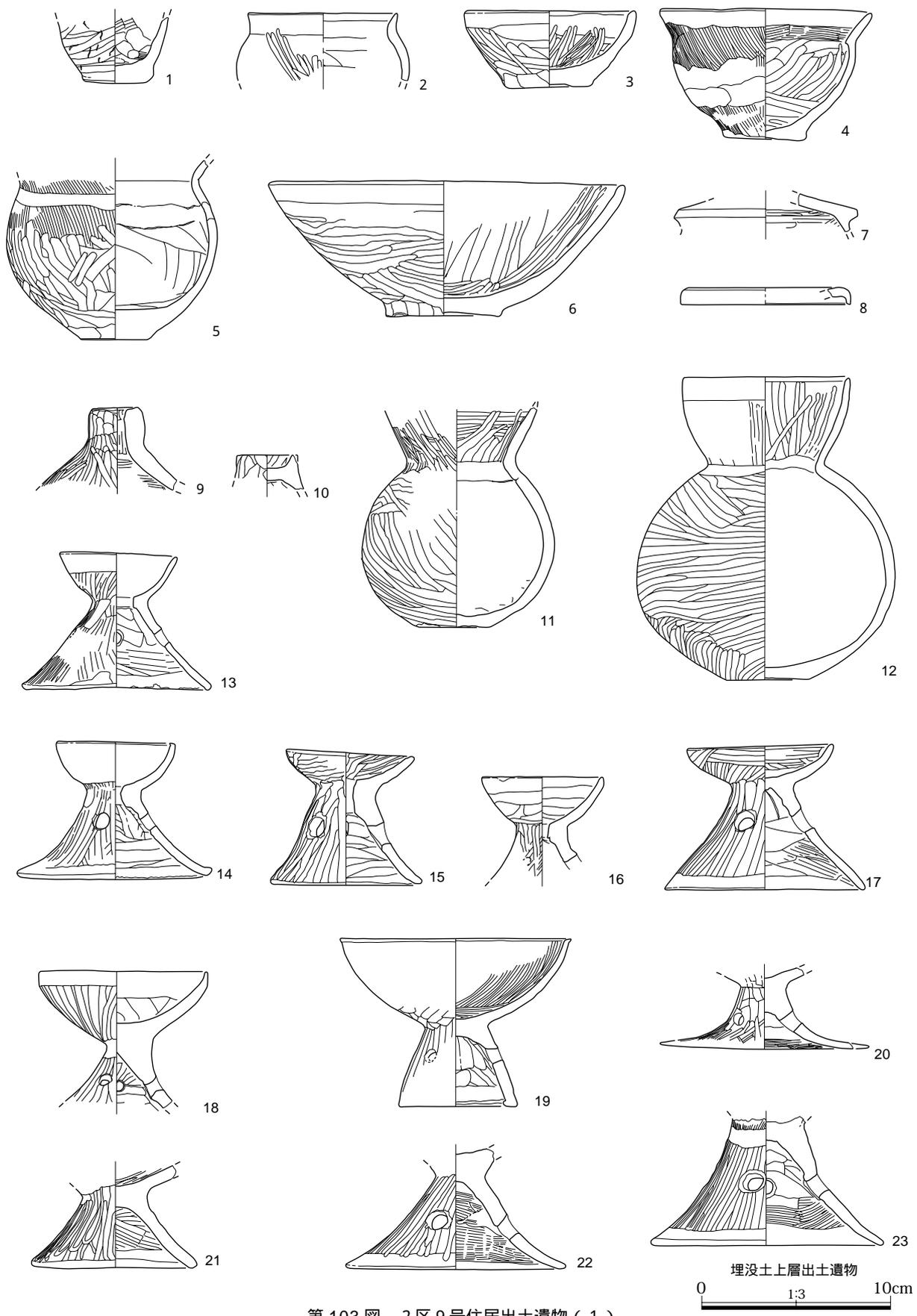
石製品・礫は住居全体に20点ほどが散在していた。そのうち使用痕跡のある7点を図化した。挟り入り礫(第109図69・70、第110図73・74)はそれぞれ、中央部床面上2cm、P4東隅床面上3cm、中央部床面上3cm、埋没土上層で出土した。敲石(第109図71・72)は北東部床面上2cm、埋没土上層で、砥石(第110図75)は埋没土上層で出土した。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居では埋没土上層で多量の遺物が出土した。これは出土層位から住居廃棄後の埋没過程において投棄されたものと考えられる。

4号土坑は掘り方で検出されたが、本来は床面で検出されるべきであったと考えられる。本遺跡の竪穴住居では、北東隅の支柱穴(P2)の内側に炉が、南東隅の支柱穴(P3)の南側の壁沿いに2基の土坑を伴う例がほとんどである。このことから推せば、本住居の3号土坑・4号土坑がこれにあたるといえよう。

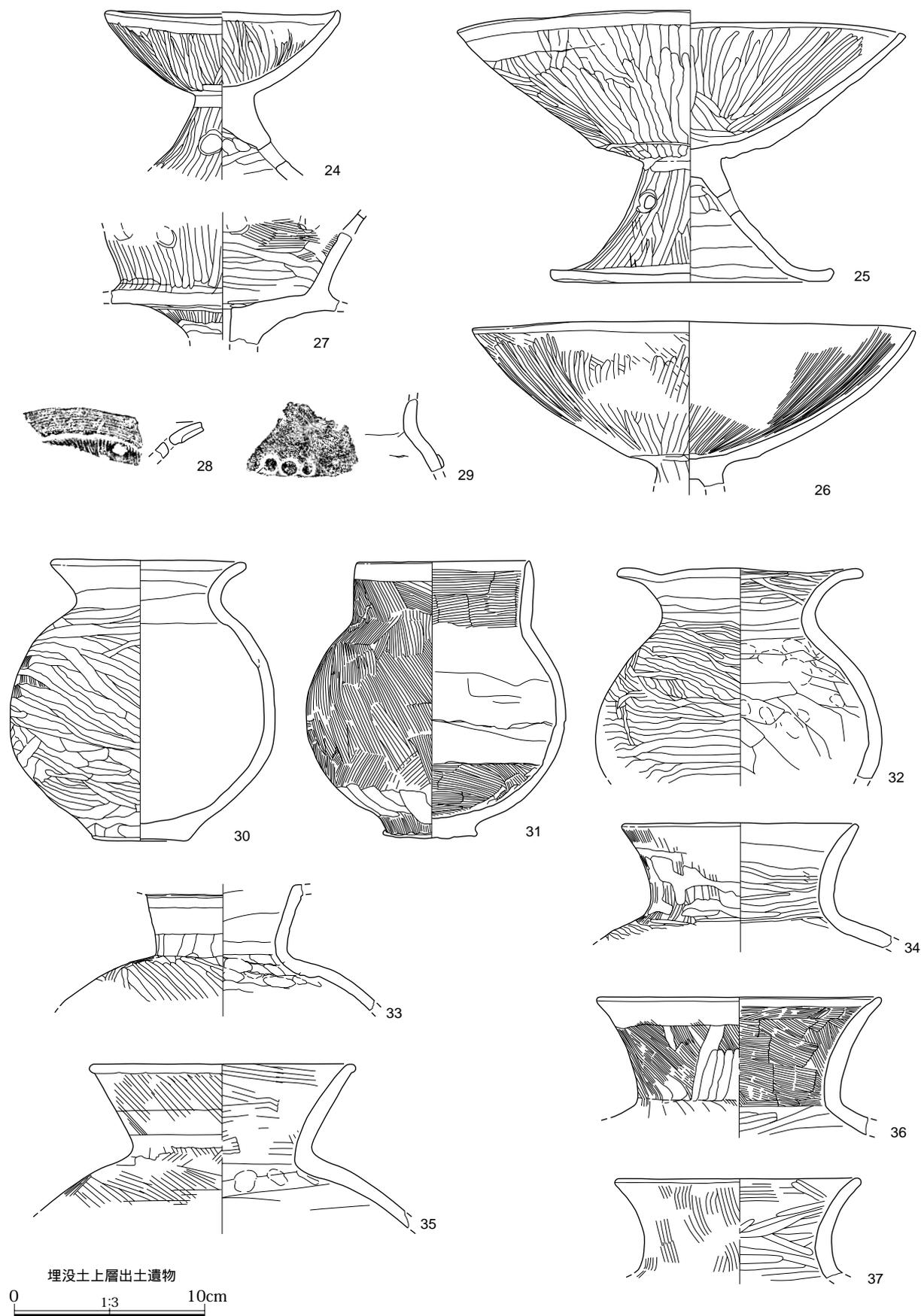


第102図 2区9号住居炉と土坑

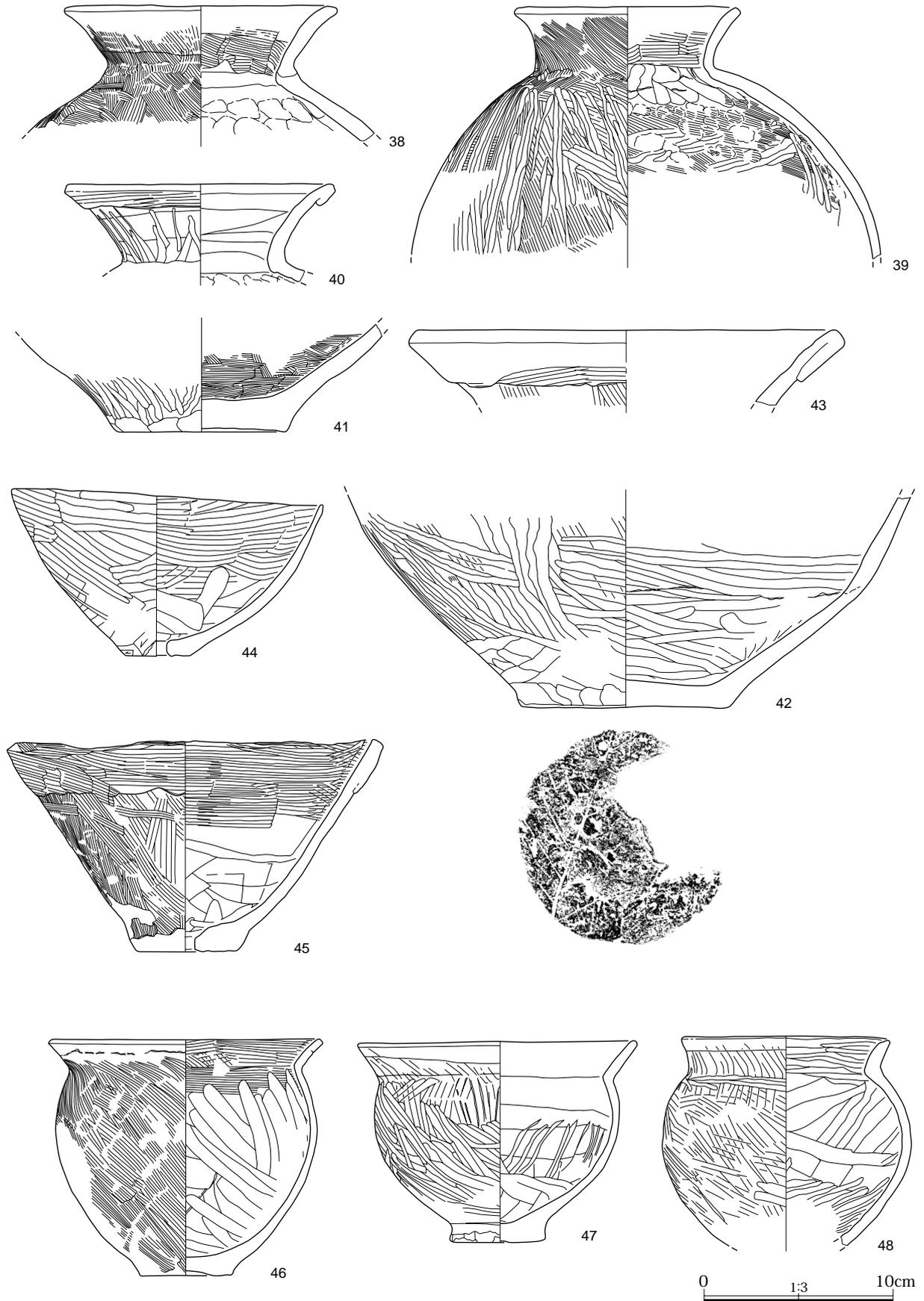


第103図 2区9号住居出土遺物(1)

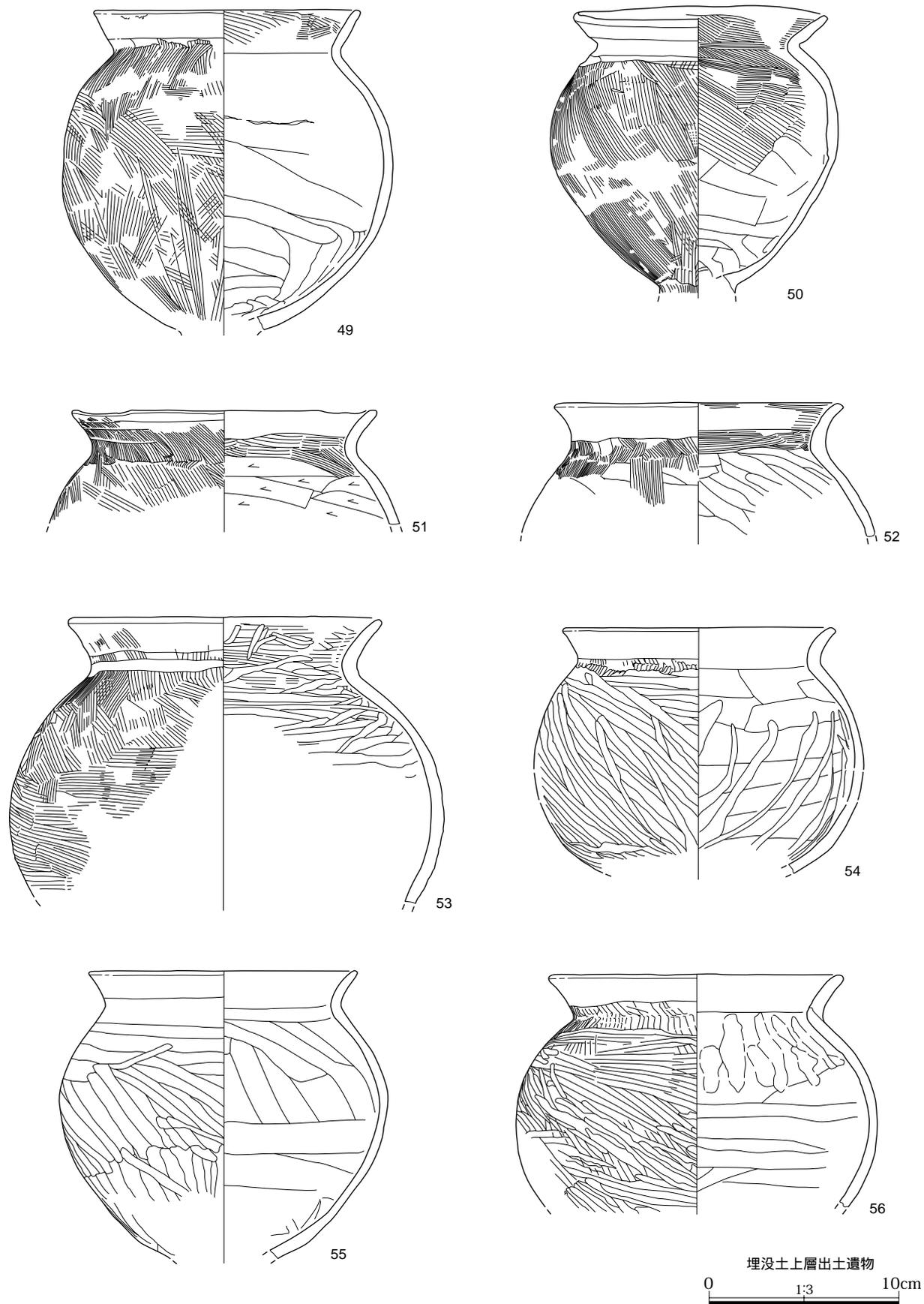
第5章 2・3区の遺構と遺物



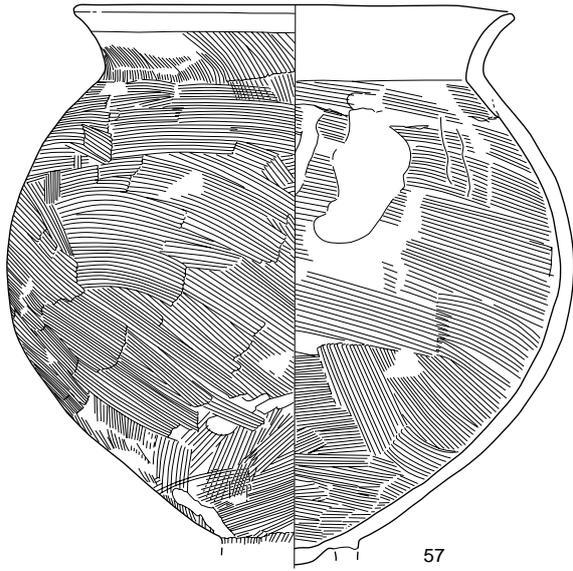
第104図 2区9号住居出土遺物(2)



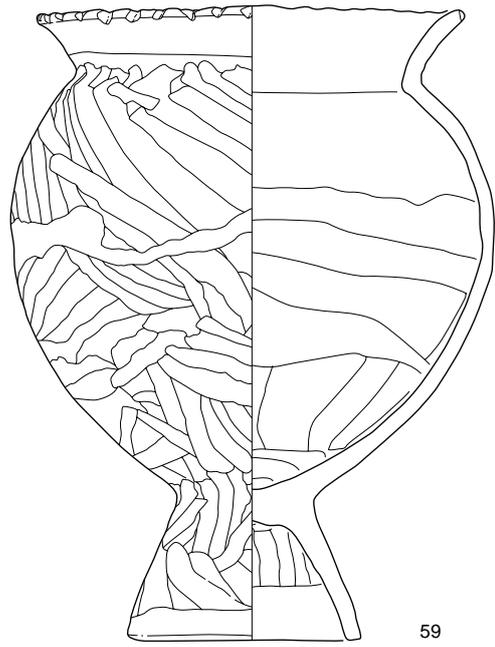
第 105 図 2 区 9 号住居出土遺物 (3)



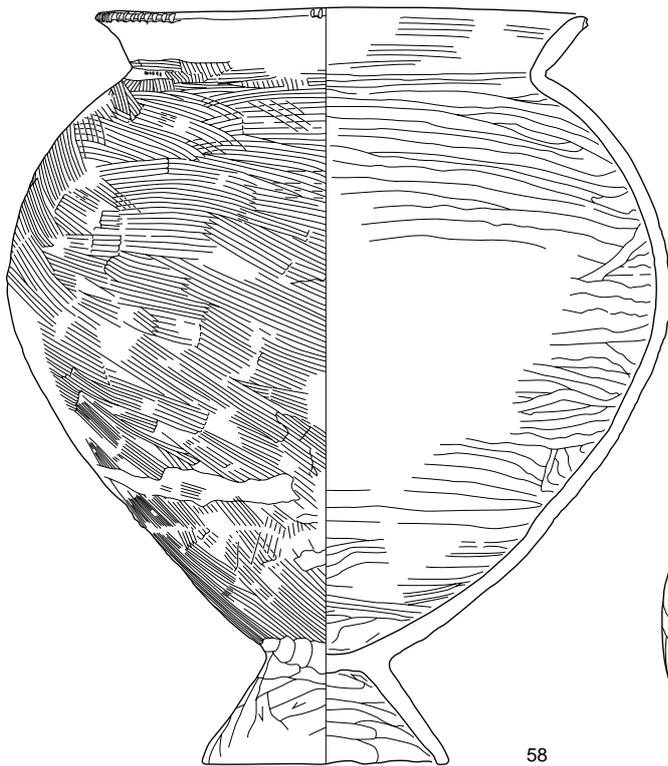
第106図 2区9号住居出土遺物(4)



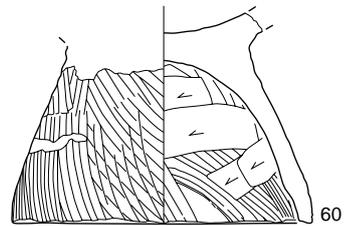
57



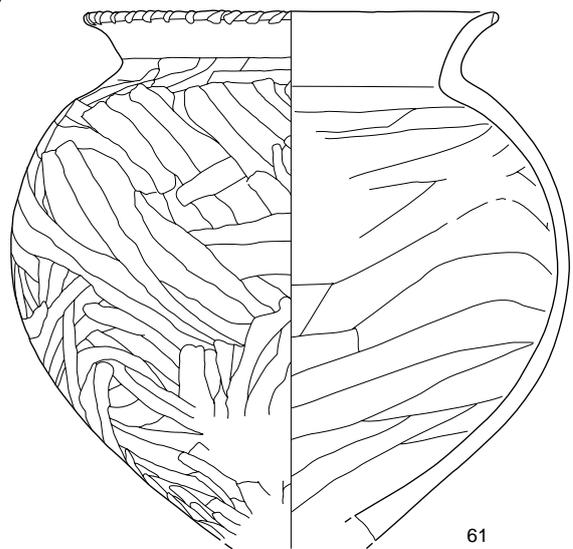
59



58



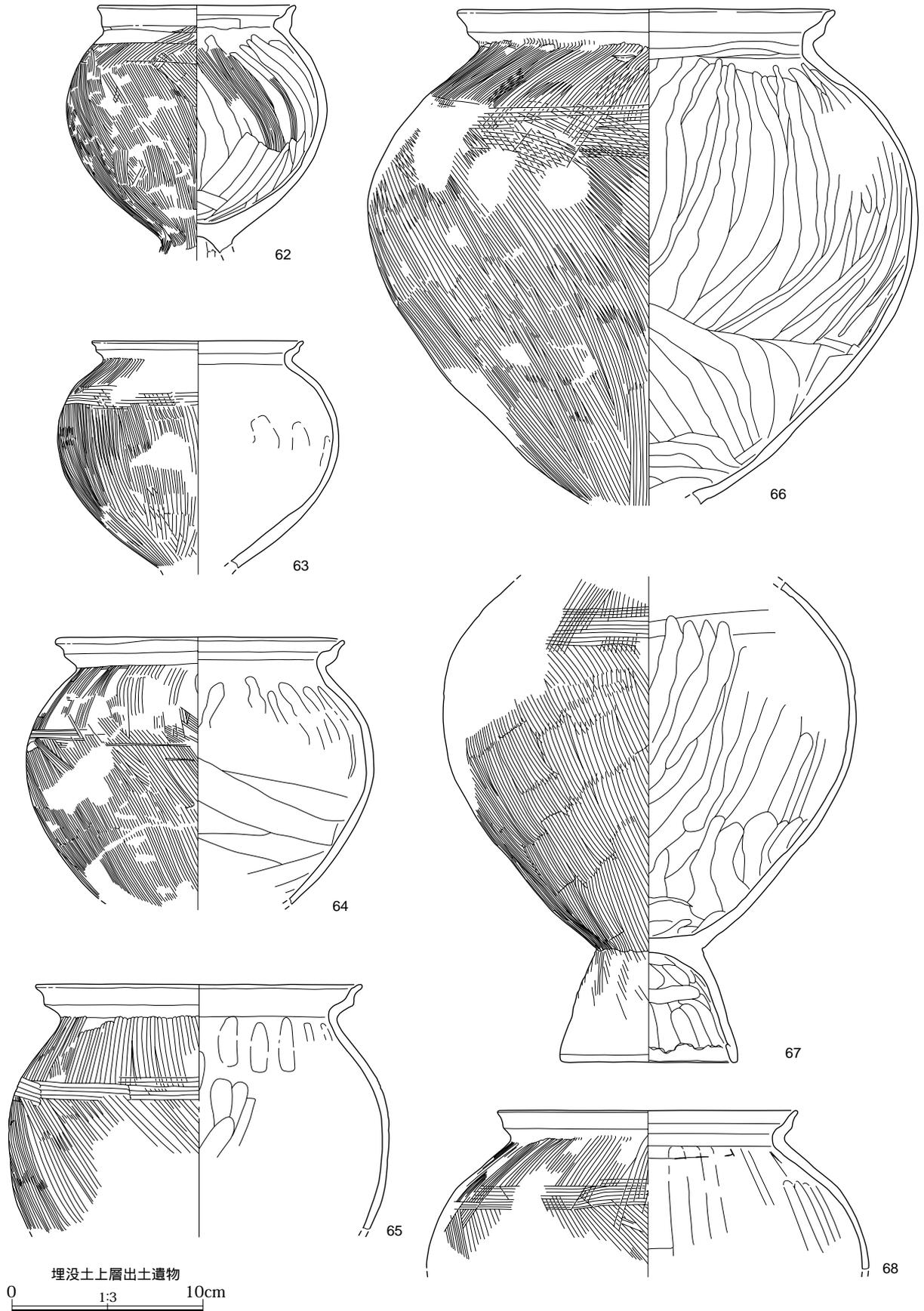
60



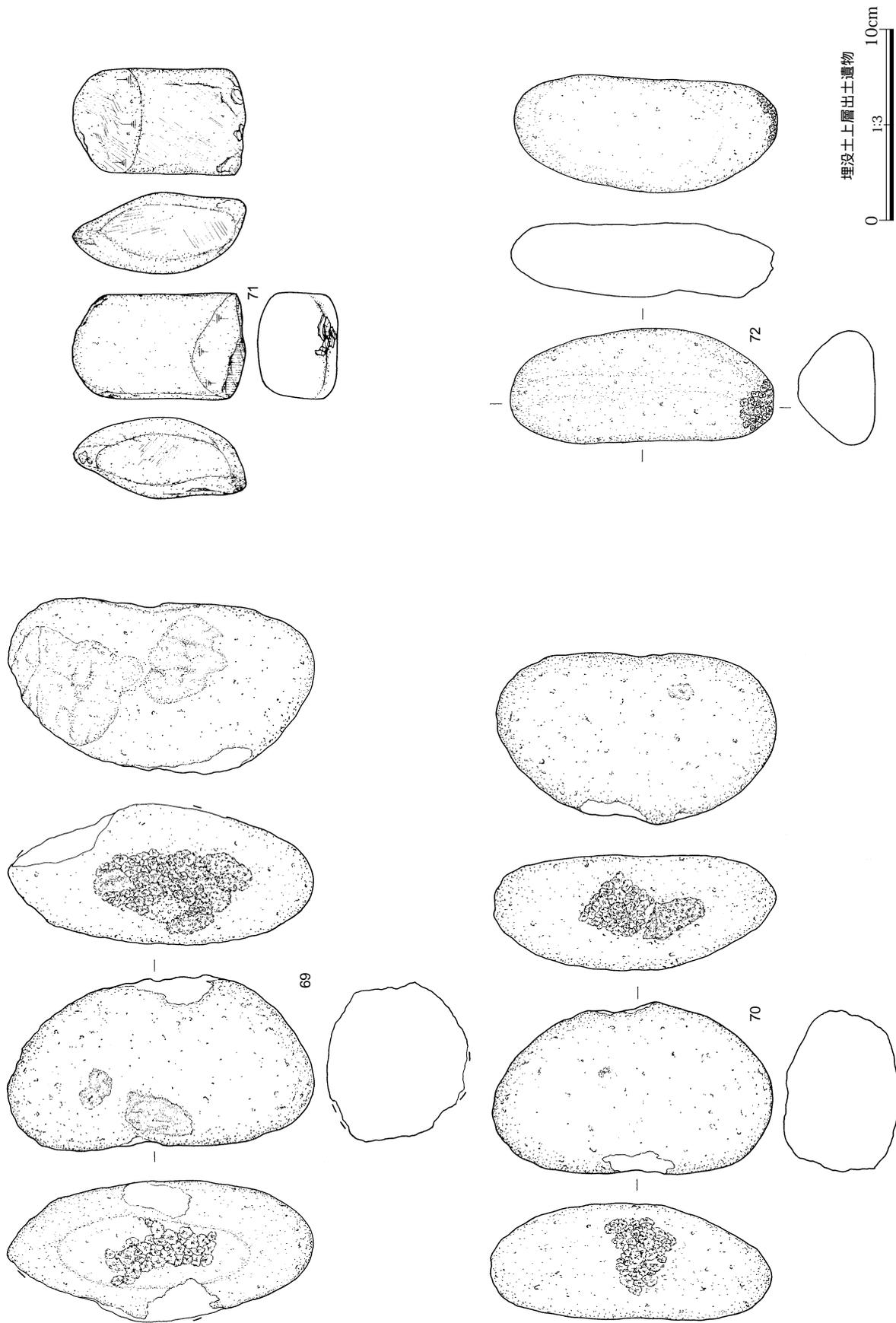
61

埋没土上層出土遺物
0 1:3 10cm

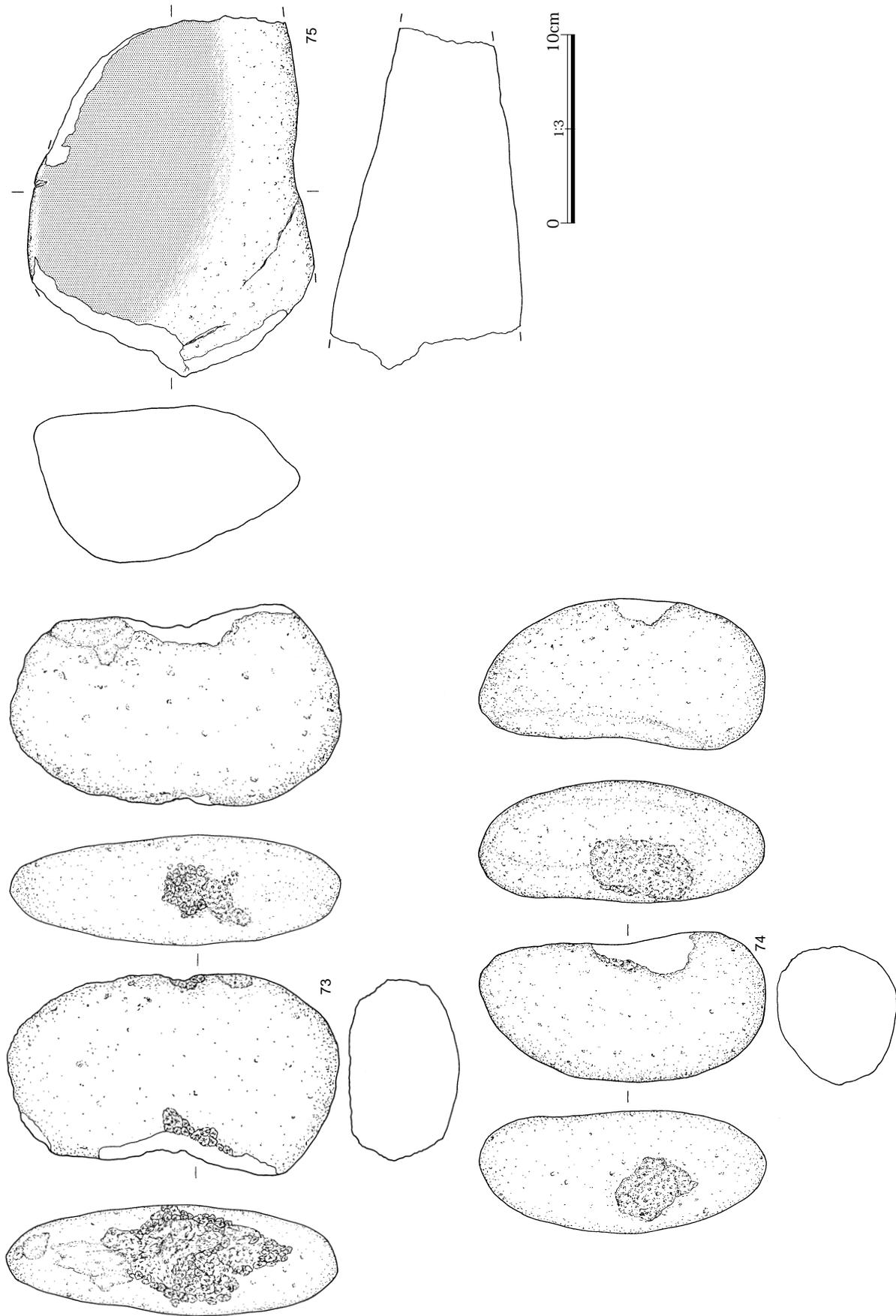
第 107 図 2 区 9 号住居出土遺物 (5)



第108図 2区9号住居出土遺物(6)



第109図 2区9号住居出土遺物(7)



第110 図2区9号住居出土遺物(8)

2区10号住居(付図2 第111～114図 PL60～63・165 遺物観察表P.498)

位置 2区3-F～H-5～7G

形状 隅丸長方形 重複 無し

規模 長軸 7.17m 短軸 6.60m

残存壁高 0.30m

床面積 41.65㎡ 長軸方位 N-16°-W

埋没土 上層は浅間C軽石を多量に含む黒色土で、下層は白色軽石・炭化物粒を含む褐灰色土で埋没。

炉 住居中央やや北西部に炉が検出された。炉は長径0.60m、短径0.47mの不整楕円形で、厚さ0.13mほど表面が焼土化して硬化していた。炉は住居掘り方を埋積した土層内に掘り込まれた深さ0.15mほどの凹地が焼土化していた。

柱穴 主柱穴4本を床面で検出した。いずれも不整円形あるいは不整楕円形である。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.67×0.57×0.67m、P2が0.50×0.47×0.26m、P3が0.43×0.41×0.62m、P4が0.55×0.47×0.73mである。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 住居内の土坑は検出されなかった。P2の南側に円形の凹地が認められたが、掘り込みにはならなかった。

床面 床面の硬化はあまり顕著ではなく、一部に確認用のトレンチを設定して、床面を土層断面で確認しながら掘り下げた。床面は平坦である。

掘り方 西壁を除く3辺の壁沿いが幅0.8～1.7m、深さ0.13～0.45mほど、掘り込まれていた。特に主柱穴の周囲は深くなっていた。中央部は平坦であったが、P4の北東部が長径1.8m、短径1.3m、深さ0.28mの楕円形に掘り込まれていた。掘り方面を埋めていたのは、浅間C軽石・黄褐色砂を含む黒褐色土、暗褐色土と黄褐色土の混土である。

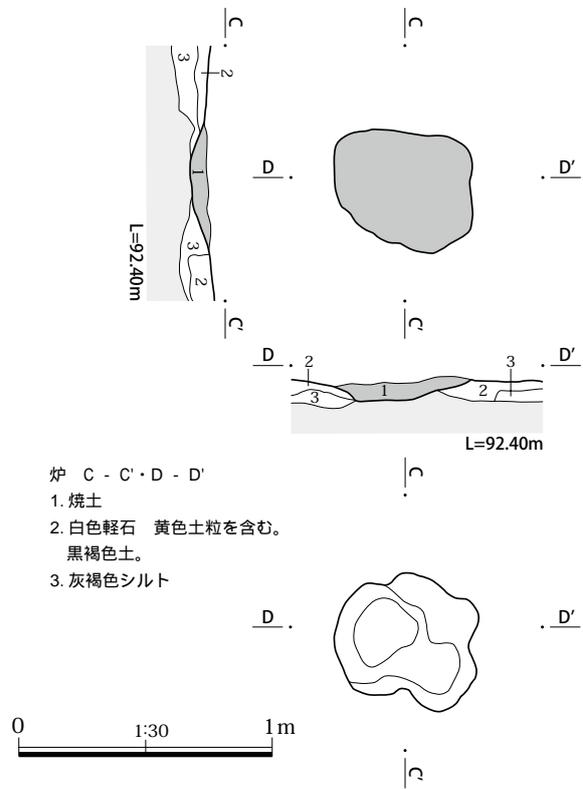
遺物と出土状況 床面近くの遺物は壁際に集中して出土した。土師器壺(第114図4)は北壁際床面直上で出土した。これには南西部床面直上で出土した破片が接合した。無頸壺(3)は南東部床面直上で、壺(5)はP4北部床面直上で出土した。S字甕(6)、

甕(7)はP1南部床面直上で、8は炉南部床面直上でと北西隅床面上5cmで出土した破片が接合した。台付甕(9・10)は南西部床面直上で、擦石(11)は南壁中央部床面上4cmで出土した。南壁中央部壁際には礫が8点集中して出土した。そのうち使用痕跡があったのは上記11である。

またP4南の南壁際と、北東隅のP2の南東側で炭化材が床面直上で出土した。樹種同定の結果、クヌギ節あるいはコナラ節であることが判明した。

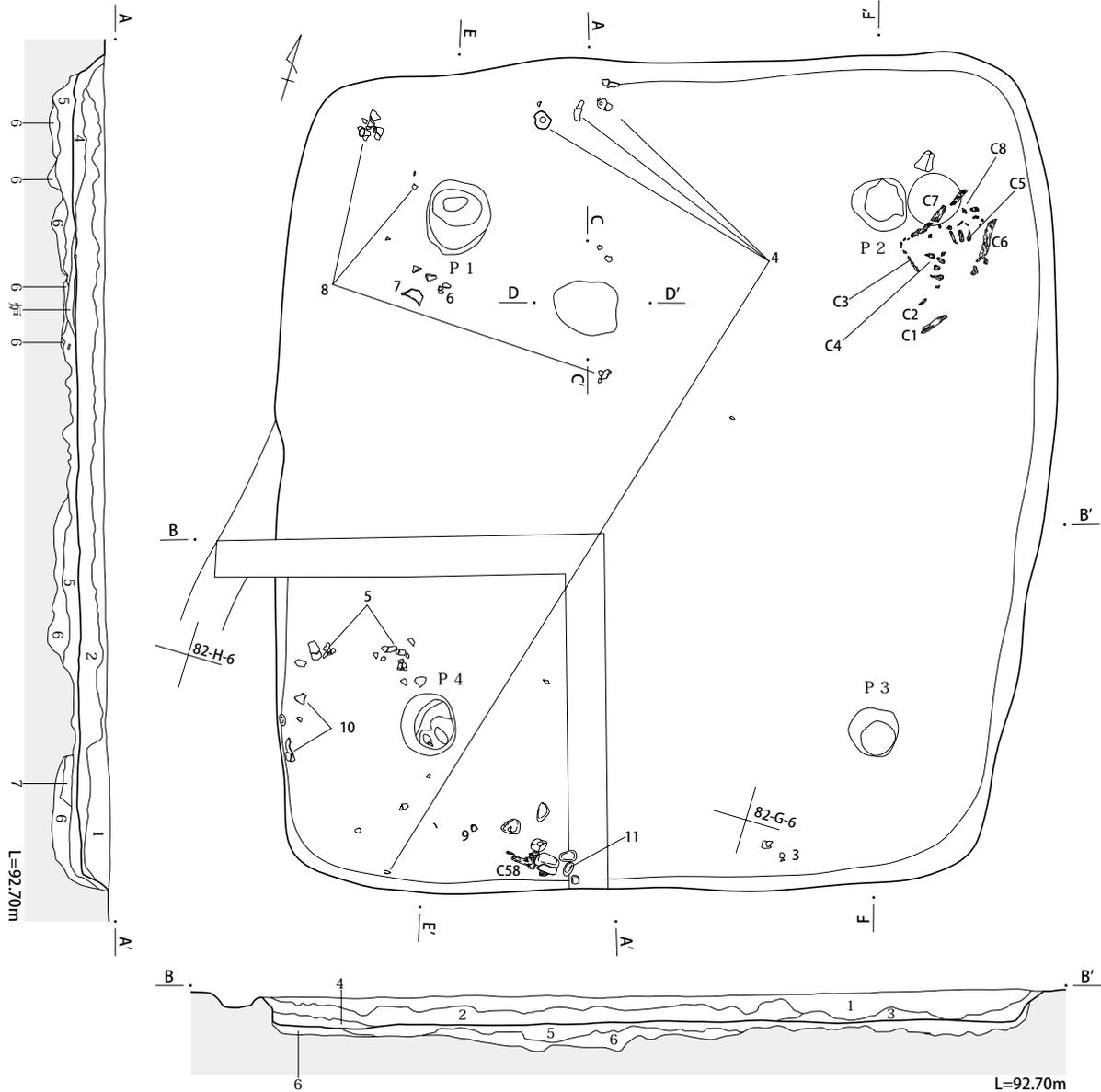
高坏坏部(1)、壺底部(2)は埋没土中から出土した。また、P4埋没土中から削器(第235図78)が出土した。縄文時代の石器であるので、遺構外の項で報告した。ここで図示した遺物の他、土師器破片665点、礫片4点、礫9点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本遺跡の中では残存壁高が低い住居である。本住居の掘り方は主柱穴の周囲が深く掘り込まれていた。そこで柱痕跡と掘り方充填土の関係を把握することに努めたが、記録できたのはP1にとどまった。



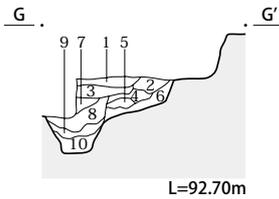
第111図 2区10号住居炉

第5章 2・3区の遺構と遺物



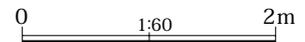
A - A'・B - B'

- 1. 黒色土 10YR2/1 砂質。As-C あるいは攪乱石を含む白色軽石を多量に含む。
- 2. 褐灰色土 10YR4/1 白色軽石を少量含む。直径2～5cmの黄色土塊。炭化物粒を含む。
- 3. 黒色土 10YR2/1 やや粘質。As-Cを少量含む。
- 4. 褐灰色土 10YR4/1 白色軽石を少量含む。
- 5. 褐灰色土 10YR4/1 砂質。白色軽石を含む。
- 6. 灰色土 10YR4/1 シルト質。挟雑物をほとんど含まない。
- 7. 6層と地山の黄白色砂質土塊の混土。

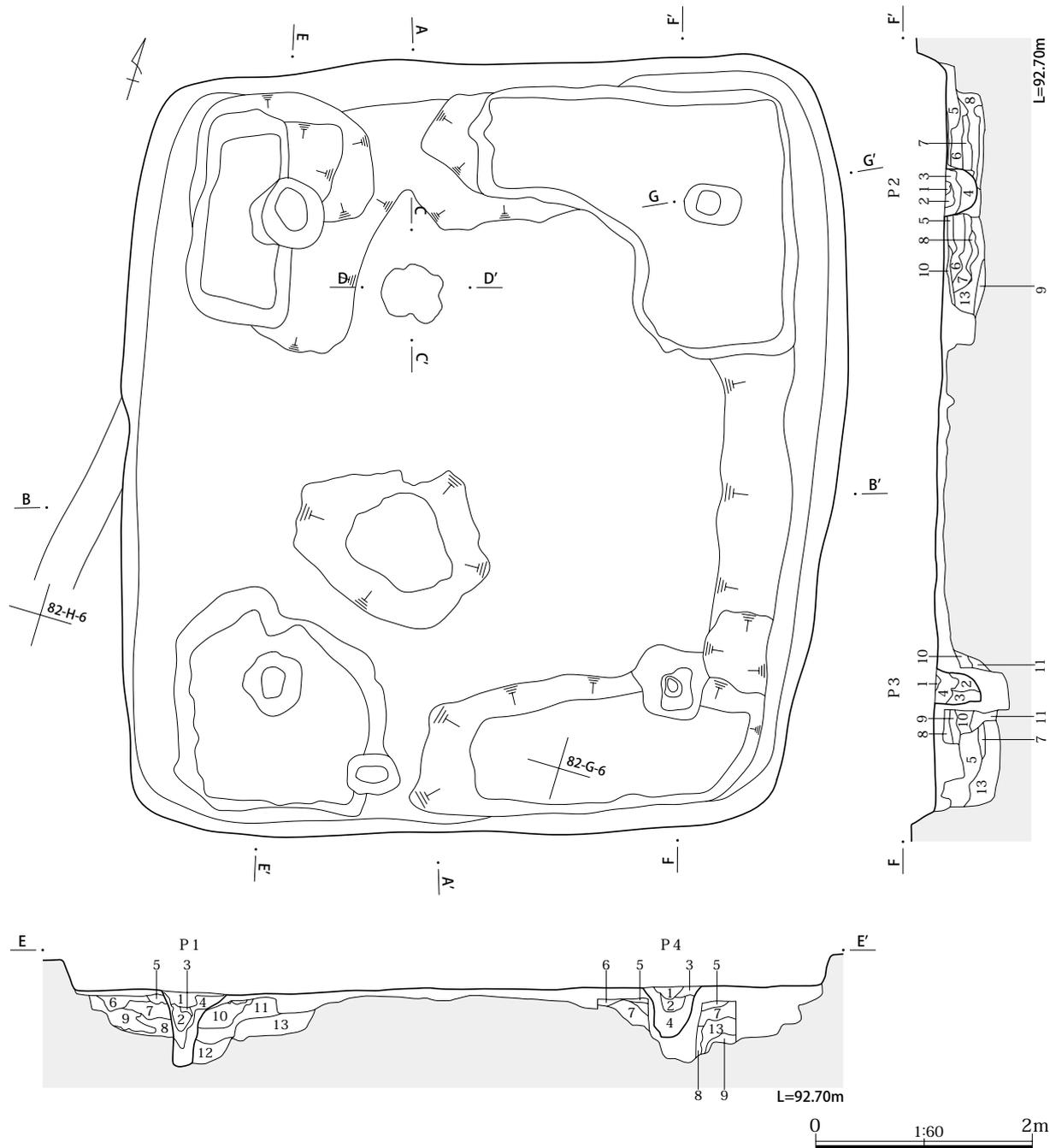


1号土坑 G - G'

- 1. 黒色土 As-Cと思われる白色軽石を多量に含む。黒色土。
- 2. 灰褐色土 白色軽石を少量含む。灰褐色土。
- 3. 暗灰褐色土 挟雑物のほとんど含まない暗灰褐色土。
- 4. 暗黄褐色土 黄白色砂質土を含む。
- 5. 暗灰褐色土 やや粘質。
- 6. 灰黄褐色土
- 7. 黒褐色土 直径2～3cmの黄色砂質土塊を含む黒褐色土。
- 8. 灰褐色土 直径3～5cmの黄褐色土塊を斑状に含む灰褐色土。
- 9. 暗灰褐色土 粘質。
- 10. 暗褐色土 直径3～5cmの黄色砂質土塊を含む暗褐色土。粘質。



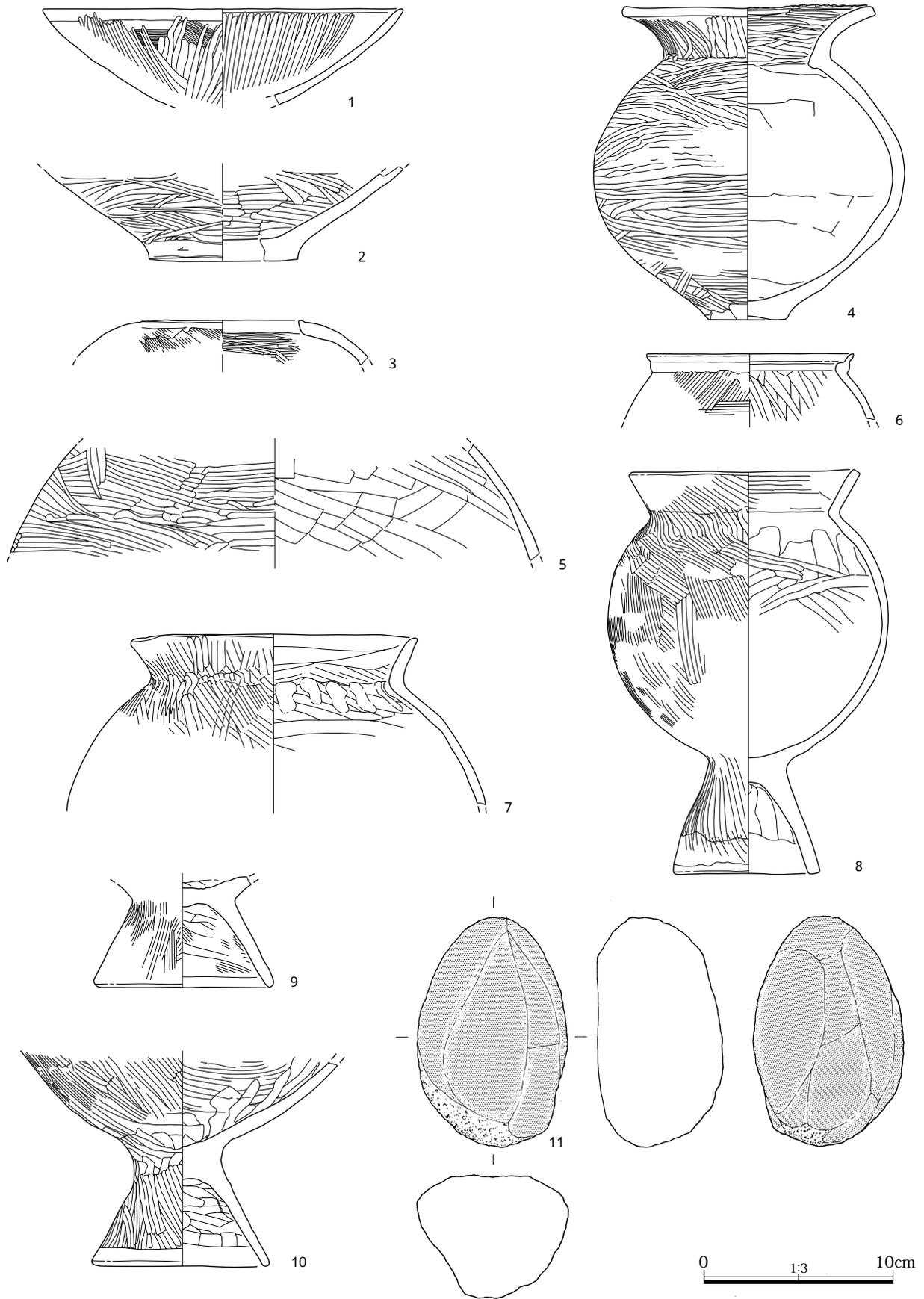
第112図 2区10号住居(1)



E - E'・F - F'

1. 暗褐色土 黄色砂質土粒。As-C をごく少量含む。
2. 暗褐色土 黄色砂質土粒をごく少量含む。
3. 黒褐色土 直径1～2cmの黄色砂質土塊を少量含む。
4. 暗褐色土と黄褐色土の混土。
5. 黒褐色土 As-C を多く含む。
6. 暗褐色土 As-C をごく少量含む。直径1～2cmの明黄褐色土塊を多く含む。
7. 黄褐色土 As-C をごく少量含む。直径0.5～1cmの黄褐色土塊をごく少量含む。
8. 明黄褐色土 直径1cmの明黄褐色土塊をごく少量含む。
9. 暗褐色土と黄褐色土の混土。
10. 黄褐色土 直径1～2cmの明黄褐色土塊を多く含む。暗褐色土を少量含む。
11. 暗褐色土 直径1～2cmの明黄褐色土塊をごく少量含む。
12. 暗褐色土 直径1～3cmの明黄褐色土塊を多く含む。
13. 黒褐色土

第113図 2区10号住居(2)



第114図 2区10号住居出土遺物

2区 11号住居 (付図2 第115・116図 PL64 ~ 66・165・166 遺物観察表 P.499)

位置 2区 3 - 82 - F・G - 8・9 G

形状 隅丸長方形

重複 復旧溝に先行する。

規模 長軸 4.86 m 短軸 4.20 m

残存壁高 0.29 m

床面積 17.88 m²

長軸方位 N - 11° - E

埋没土 上層は浅間C軽石を多量に含む黒褐色土で、下層は浅間C軽石・炭化物粒・焼土粒を多く含む褐色土で埋まっていた。また床面上6~8cmのところは焼土および炭化材が南東隅を除く壁沿いおよび中央部で出土した。それらの焼土・炭化材と床面との間には浅間C軽石を多量に含む黒褐色土が堆積しており、床面直上で出土したものではない。出土した炭化材は同定の結果、ほとんどがコナラ節で、1点クヌギ節が含まれていた他、北西隅1点とP5北側の1点がタケ亜科(竹類)と報告されている。炉 住居中央やや東側に炉が検出された。炉は長径0.64 m、短径0.40 mの不整楕円形で、厚さ0.06 mほど表面が焼土化して硬化していた。掘り方調査の際の炉南西部で床面下に焼土層を確認した。(PL66-4) 層位的には古い炉の可能性もあるが、全体形状は記録できなかった。

柱穴 床面で柱穴と考えられるピットを6本検出した。P3は炉に接する位置にあることから、P4はひとつだけ方形で東壁沿いの柱間から外れていることから、柱穴である可能性は低い。ほかの五つは不整楕円形である。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.30×0.26×0.21 m、P2が0.25×0.22×0.06 m、P3が0.29×0.22×0.21 m、P4が0.31×0.29×0.19 m、P5が0.44×0.27×0.46 m、P6が0.44×0.27×0.19 mである。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 住居内の土坑は検出されなかった。

床面 床面は全体的に硬化していた。床面は平坦である。

掘り方 壁沿いが幅0.5~1.2 m、深さ0.07~0.10 mほど、ぐるりと掘り込まれていた。特に前述した柱穴P1~P4の周囲は深くなっていた。中央部は平坦であった。

掘り方面を埋めていたのは、浅間C軽石・黄褐色土を含む黒褐色土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は東壁および南壁際に集中して出土した。土師器高坏(第116図2)は北東隅床面上6 cmで倒立して出土した。壺(3)は南東隅床面直上で出土した。壺(4)は北東隅床面上9 cmで出土した。壺(5)は南東部に散在していた床面直上の遺物が接合した。台付甕(6)は南東隅床面上6~8 cmの破片とP5周辺床面直上の破片、中央部床面上6 cmの破片が接合した。小型甕口縁部破片(7)は掘り方南壁際底面上5 cmで出土した。土師器蓋(1)と弥生土器甕口縁部破片(7)は埋没土中から出土した。

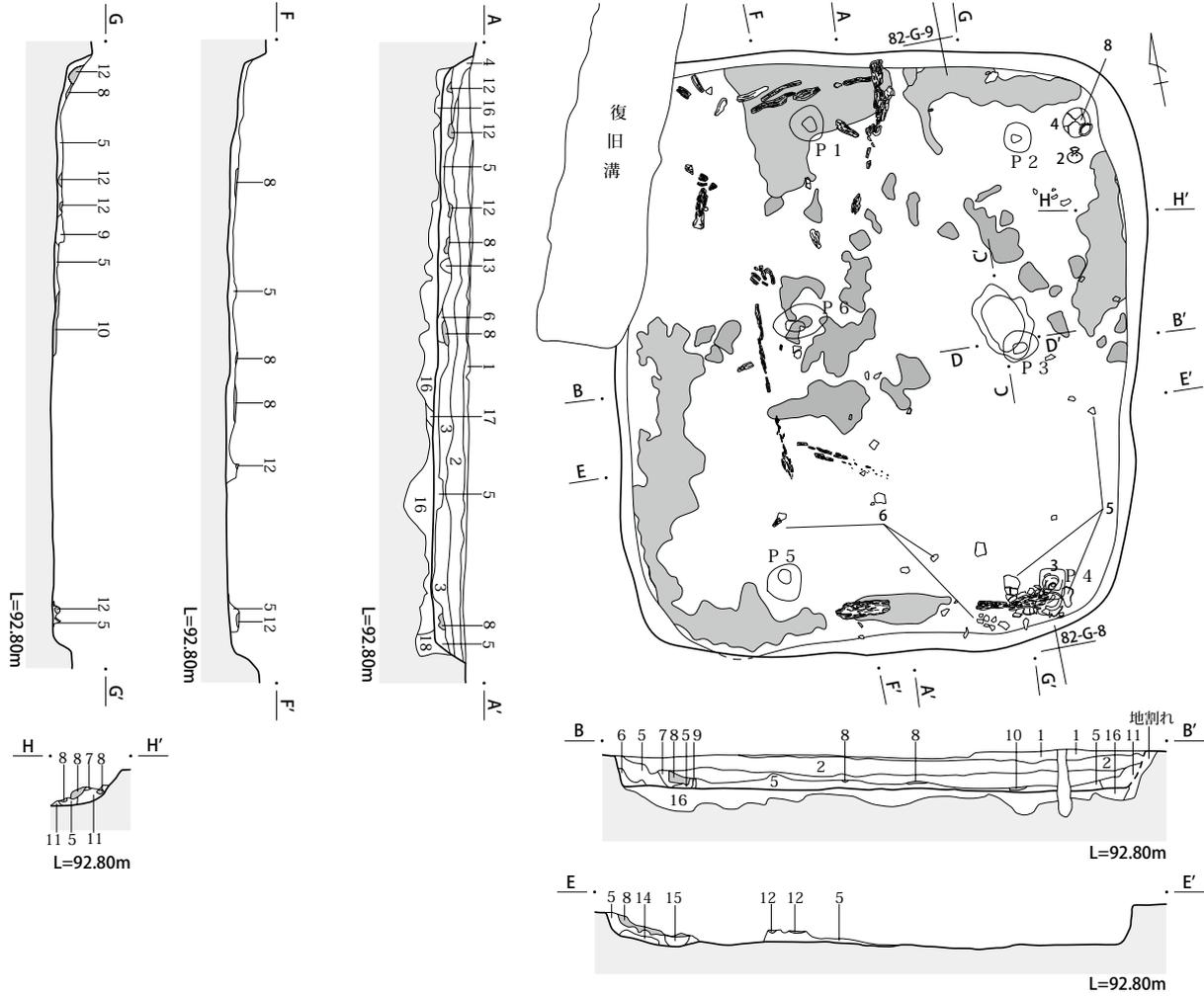
床面から多量に出土した炭化材は前述のように、コナラ節、クヌギ節、タケ亜科(竹類)である。

ここで図示した遺物の他、縄文土器2点、石鏃1点、土師器破片174点、剥片1点、礫片3点が出土している。縄文土器(第232図26)・石鏃(第234図64)は混入であるので、遺構外遺物の項で報告した。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居からは壁沿いに焼土と炭化材が多量に出土した。炭化材は床面上6~8 cmの黒色土の間層があって出土した。炭化材は梁や垂木等の屋根の構造材と推定される。焼土はいわゆる「土屋根」である可能性もあるが、そうであれば焼土が炭化材の上にあるはずである。しかし、炭化材と焼土の関係は図化できていないが、概ね炭化材が焼土の上のっていた。焼土が「土屋根」の土が焼けたものとは即断できない。

本住居は今回の発掘調査で検出された唯一の6本柱穴の住居である。弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居で6本柱穴の住居は類例があまりない。住居形態を整理する中で注意していく必要がある。

第5章 2・3区の遺構と遺物



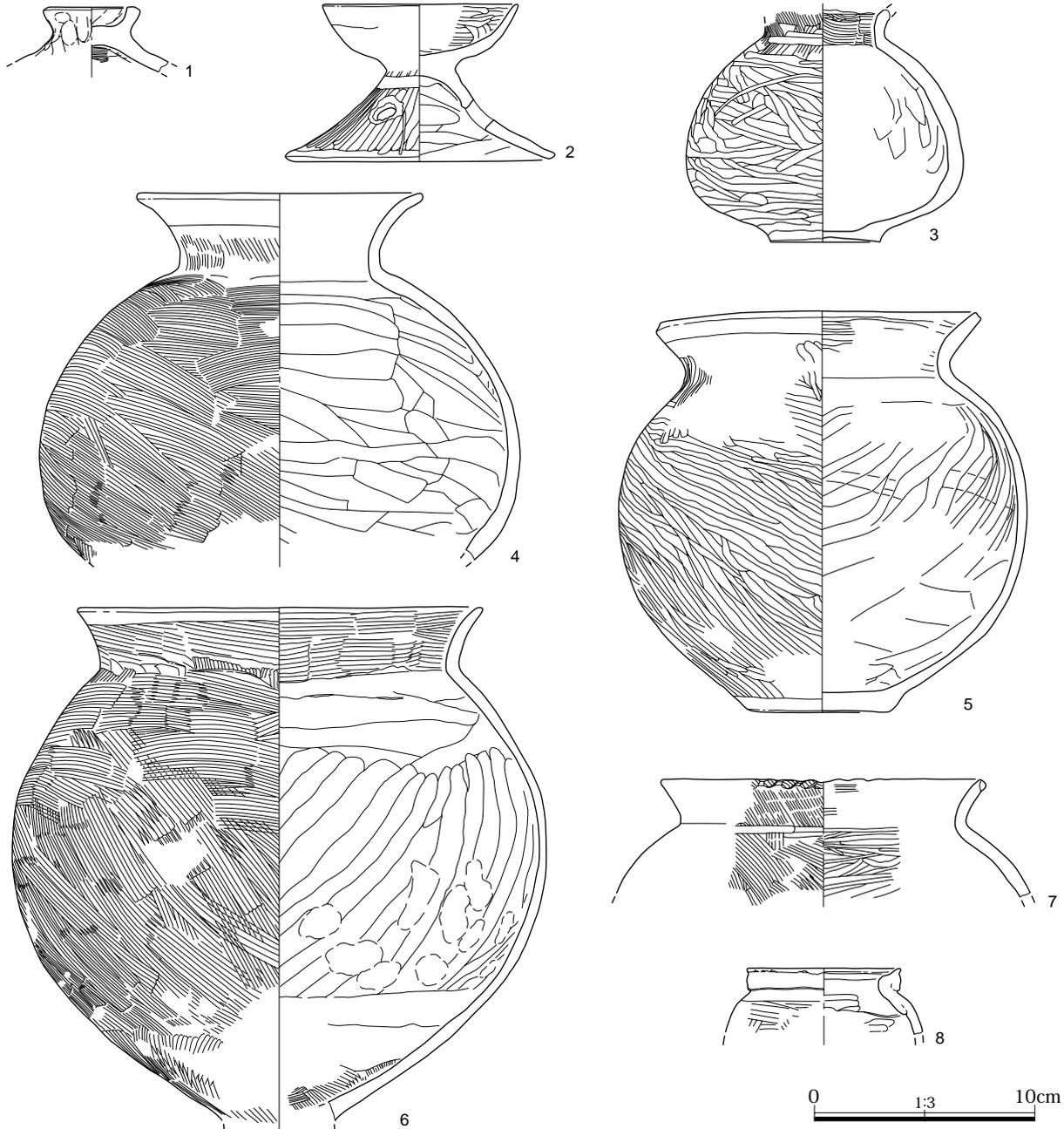
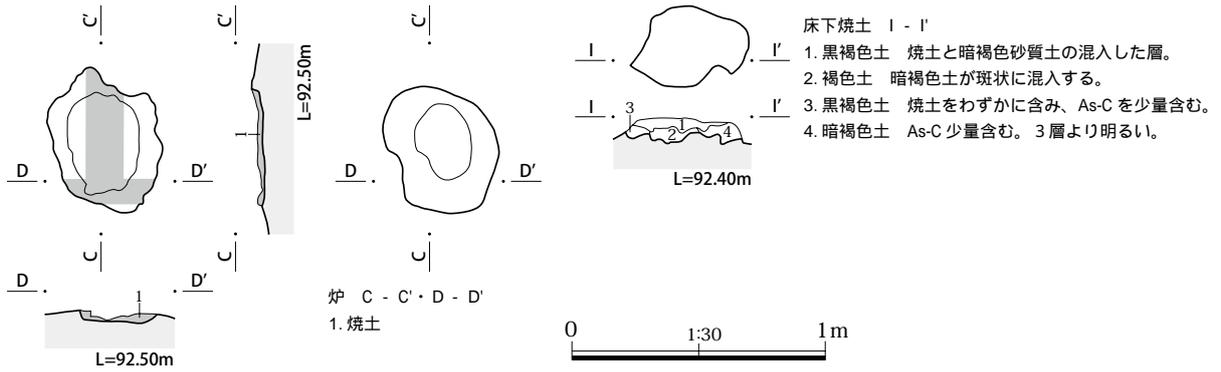
A - A' · B - B' · E - E' · F - F' · G - G' · H - H'

1. 黒褐色土 As-Cを多く含む。
2. 黒褐色土 As-Cを多く含む。炭粒をごく少量含む。
3. 黒褐色土 As-Cを少量含む。炭粒。焼土粒。直径1～3cmの焼土塊を少量含む。
4. 黒褐色土 As-Cをごく少量含む。直径1～2cmの炭塊を多く含む。
5. 黒褐色土 As-C多く含む。
6. 暗褐色土 やや砂質。壁の崩落土か。
7. 黒褐色土 焼土の塊を多く含む。
8. 明褐色土 焼土層。灰を含む。
9. 暗褐色土 6層に似る。
10. 赤褐色土 焼土。8層よりよく焼けている。炉と思われる。
11. 黒褐色土 As-C多く、5層よりザラつく。
12. 黒色土 炭化材。
13. 明褐色土 焼土。8層、10層とは異なる。
14. 黒褐色土 5層に似るが、As-Cやや少ない。
15. 黒褐色土 As-C多く、焼土粒、炭化物多い。
16. 黒褐色土 As-Cを少量含む。黄褐色土をまばらに全体に少量含む。
17. 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
18. 黒褐色土と黄褐色土の混土。As-Cをごく少量含む。

0 1:60 2m

第115図 2区11号住居

2. 2・3区微高地部の遺構と遺物



第116図 2区11号住居炉と出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 12号住居(付図2 第117～121図 PL66
～69・166・167 遺物観察表 P.499・500)

位置 2区3-82-G・H-10・11G

形状 隅丸長方形

重複 復旧溝に先行する。

規模 長軸 5.70 m 短軸 4.77 m

残存壁高 0.16 m

床面積 24.25 m²

長軸方位 N-63°-W

埋没土 上層は浅間C軽石を多量に含む暗黒褐色土で、下層は浅間C軽石をほとんど含まず、黄褐色土粒を少量含む黒褐色土で埋まっていた。

炉 本住居では2カ所の焼土と、炉1カ所を検出した。まず2カ所の焼土を床面で検出し、炉は掘り方を掘削し始めたところで検出した。床面の作り替えがあった可能性もあるが、炉の検出時に掘り下げが足りなかったのかもしれない。

床面で検出した1号焼土は住居中央やや西側、炉の南西側に検出された。規模は長径0.5 m、短径0.36 m、焼土の厚さ0.06 mで、焼土表面は硬化していた。2号焼土は住居中央やや東側、炉の南側に検出された。規模は長径0.3 m、短径0.2 m、焼土の厚さ0.02 mで、焼土表面は硬化していた。いずれも床面の一部が比熱して焼土化したものと推定され、炉として構築されたものではないと推定される。

一方、床面を少し下げたところで検出した炉は、住居中央やや東側、支柱穴P2の西側で検出された。長径0.90 m、短径0.56 mの不整楕円形で、厚さ0.04 mほど表面が焼土化して硬化していた。掘り方充填土を0.08 m掘り込んで褐色土で埋めて構築していた。しかし、掘り方で検出されたP2の西縁まで焼土が及ぶこととなり、炉としての安全性に疑問は残る。

柱穴 掘り方で支柱穴P1からP4を検出した。床面は硬化していたが、色調の違いを認識できずに柱穴を確認することができなかった。

掘り方で検出した支柱穴はいずれも不整円形あるいは不整楕円形で、それぞれの規模(長径×短

径×深さ)はP1が0.38×0.28×0.21 m、P2が0.44×0.37×0.30 m、P3が0.35×0.31×0.24 m、P4が0.38×0.38×0.24 mである。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面で5基の住居内土坑が検出された。1号土坑は、住居南東隅の南壁際で検出した。支柱穴P3の南側にあたり、長軸は南壁に平行している。長軸1.10 m、短軸0.8 m、深さ0.2 mの隅丸長方形で、南寄りに深さ0.33 mのピット状の土坑が2基掘られていた。土師器甕(第120図14)が埋没土中から出土している。

2号土坑は東壁際、P3の北西側で検出した。長径0.60 m、短径0.54 m、深さ0.45 mの楕円形で、断面形は筒形である。この土坑の西側で壺(第120図12)と台付甕(15)が床面直上で出土した。

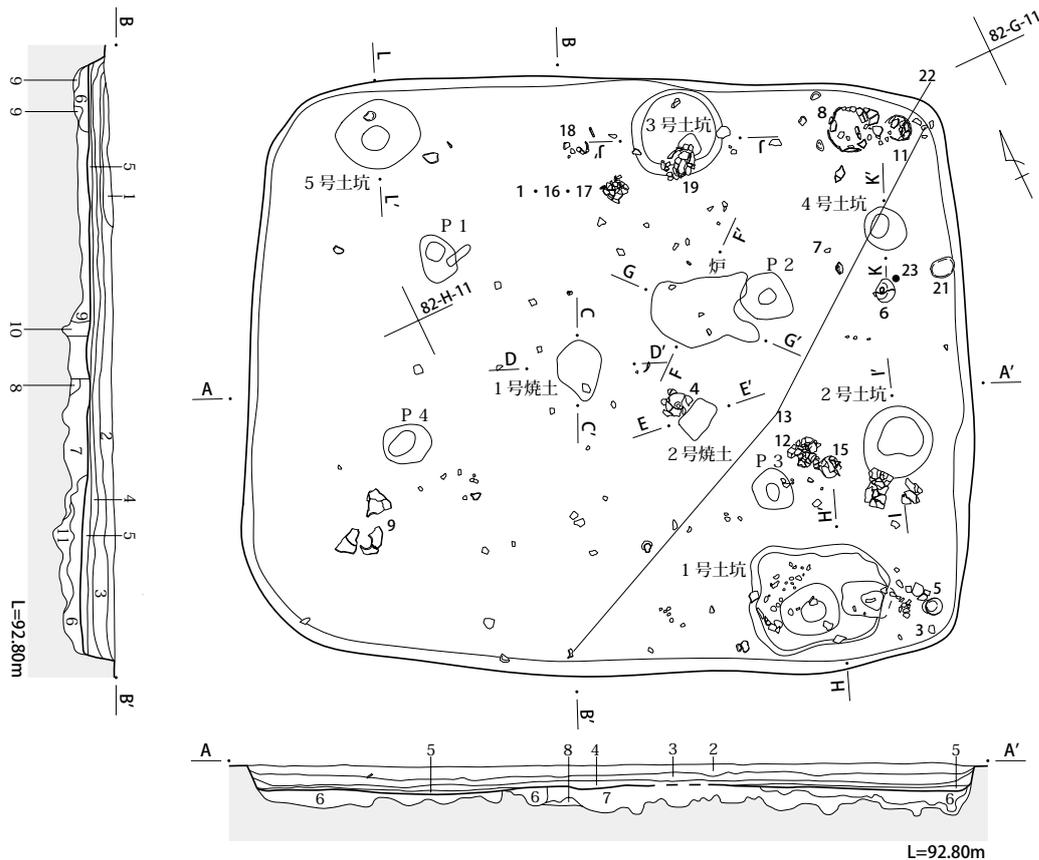
3号土坑は北壁際中央よりやや東側で検出した。長径0.72 m、短径0.69 m、深さ0.20 mのほぼ円形で、断面形は浅い箱形である。この土坑の南縁部でS字甕(第120図19)が床面直上から土坑に落ち込むように出土した。

4号土坑は北東部の東壁近くで検出した。長径0.35 m、短径0.32 m、深さ0.14 mの楕円形で、断面形は筒形である。この土坑の南側で土師器高坏(第119図6)が床面上6 cmで、そのすぐ東縁で巴形銅器(第121図23)が床面直上出土している。

5号土坑は北西隅の北壁近くで検出した。長径0.68 m、短径0.57 m、深さ0.44 mの楕円形で、断面形は筒形である。土坑内から礫1点が出土した。床面 床面は平坦で、全体的に硬化していた。

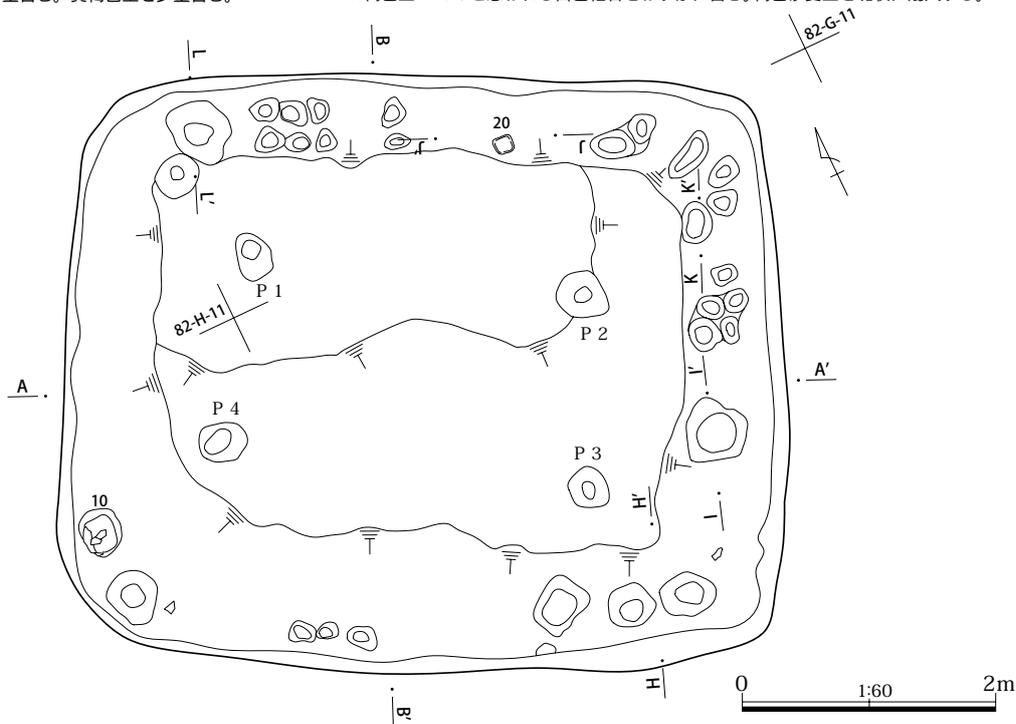
掘り方 四周の壁沿いが幅0.7～1.0 m、深さ0.10～0.30 mほど、ぐるりと掘り込まれていた。特に前述した住居内土坑5基はこの帯状の掘り込み内にある。また支柱穴P1～P4は、中央の掘り残された部分にある。掘り方を埋めていたのは、浅間C軽石・黄褐色土を含む暗褐色土である。

遺物と出土状況 床面近くで完形に近い遺物が出土したが、東半分に集中して出土している。土師器鉢(第119図1)、台付甕(第120図16・17)は北



A - A' · B - B'

- | | |
|---|---|
| <p>1. 暗黒褐色土 As-Cを少量含む攪乱層。
 2. 暗黒褐色土 As-Cをやや多く含む。しまり良く、硬質。
 3. 暗黒褐色土 2層と似ているが、As-Cの混入が少量。
 4. 暗褐色土 As-Cの混入はほとんどない。黄褐色土を少量含む。
 5. 黒褐色土 As-Cをごく少量含む。黄褐色土を少量含む。</p> | <p>6. 暗褐色土 As-Cを少量含む。褐色砂質土を混入する。
 7. 暗褐色土 直径1mm以下の白色粒子をわずかに含む。粒子細かく均質。
 8. 暗褐色土 層よりやや暗く、白色粒子をごくわずかに含む。
 9. 褐色土 6層に混入する砂質土と思われる。地山に近似するため、掘りすぎか。
 10. 黒褐色土 やや粘質で黄褐色粒子をごく少量含む。
 11. 褐色土 As-Cと思われる白色軽石をわずかに含む。褐色砂質土を斑状に混入する。</p> |
|---|---|



第117図 2区12号住居(1)

第5章 2・3区の遺構と遺物

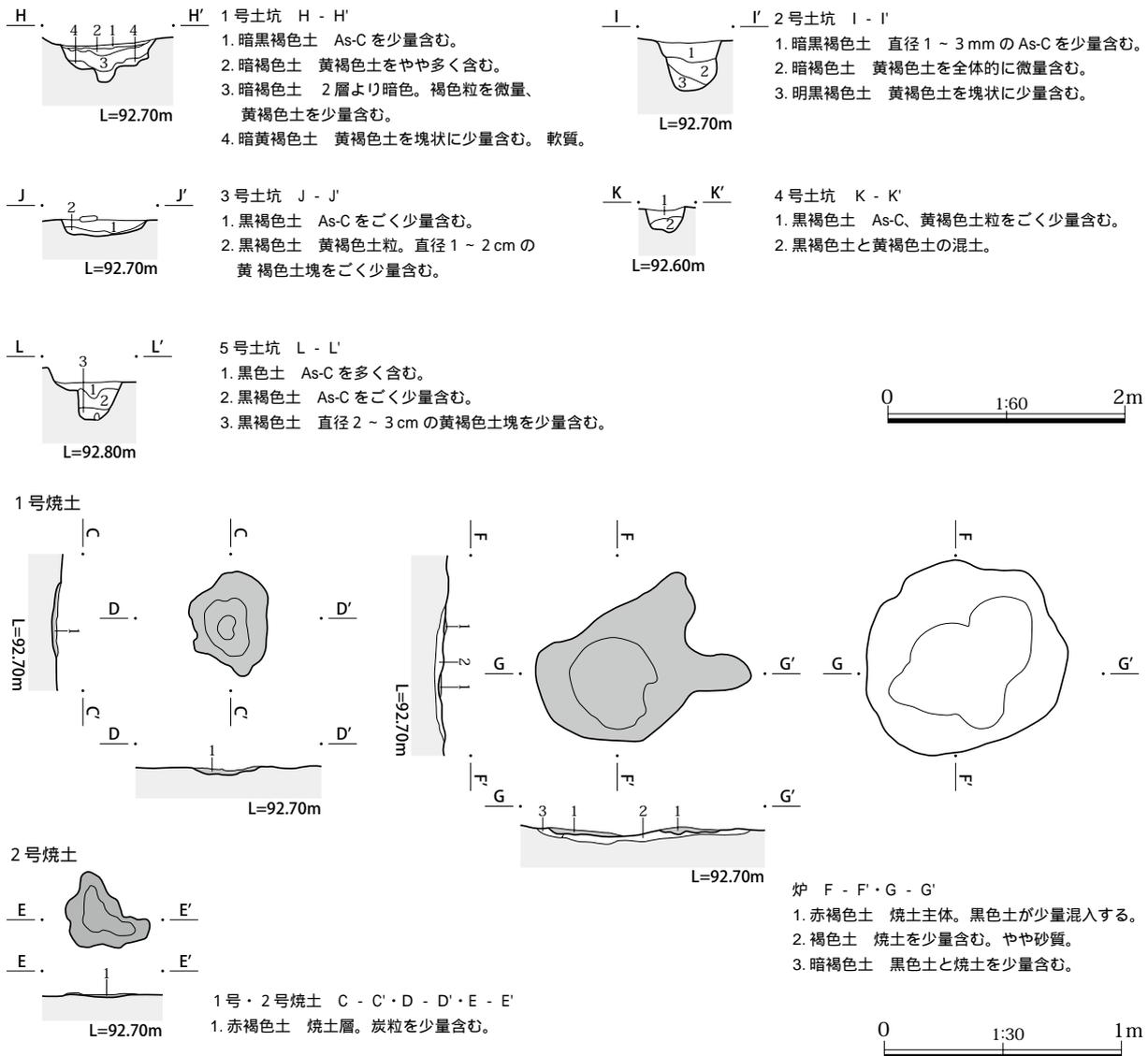
部床面直上で出土した。蓋(第119図4)は完形に近い残存で中央部床面直上で出土した。高坏(5)は南東隅床面直上で、高坏脚部破片(7)はP2北東部床面上3cmで出土した。壺(8)・(第120図11)、擦石(第121図22)は北東隅北壁沿いで床面直上で出土した。壺(第119図9)は大型の壺破片であるが、南西隅床面直上で出土した。壺口縁部破片(第120図10)は掘り方南西隅で出土した。甕(13)は北東隅床面上7cmの破片と南壁際床面上15cmの破片が接合した。S字甕台部(18)が北部床面上3cmで出土した。

敲石(第121図20)は掘り方北部底面上9cmで、

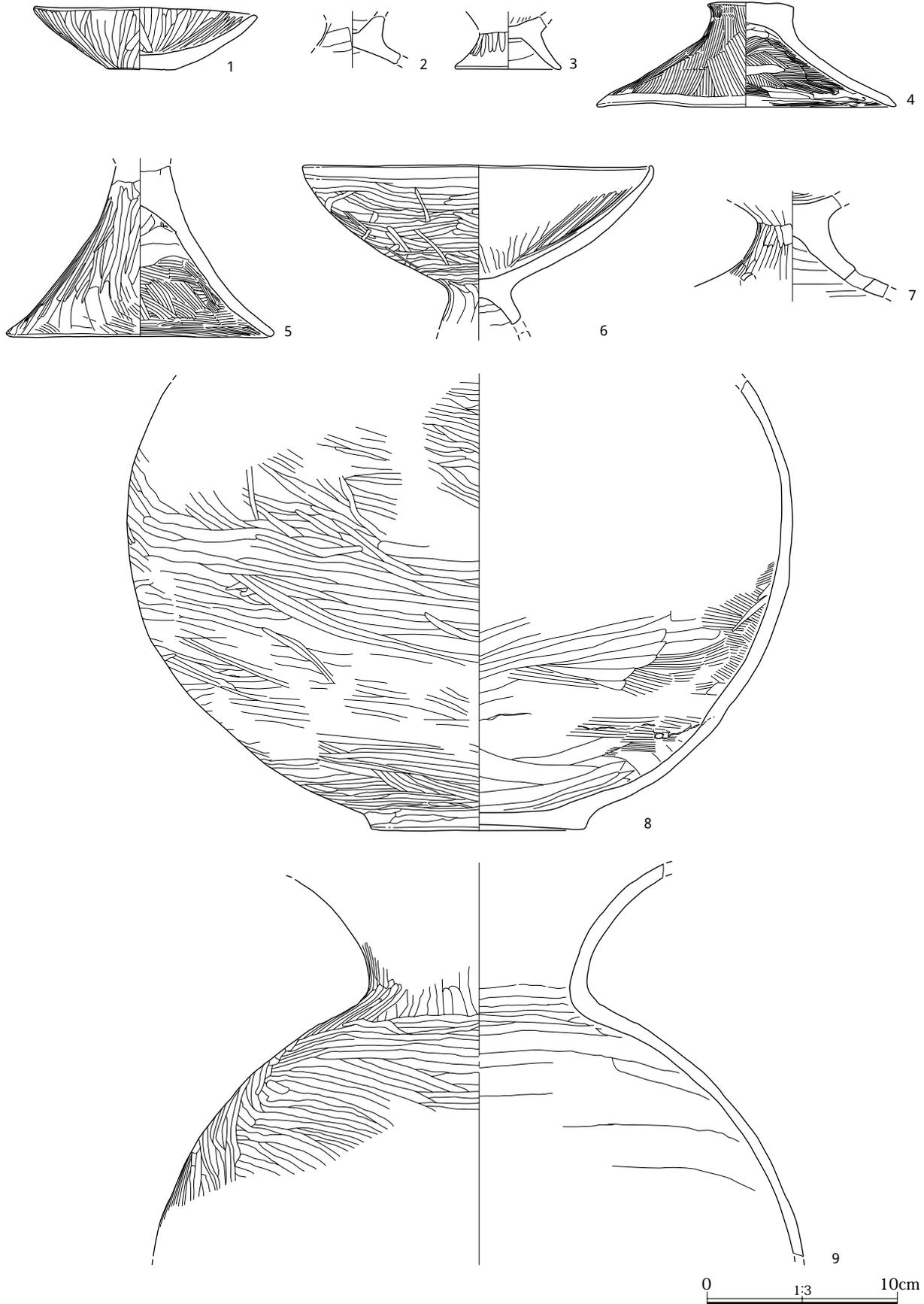
擦石(21)は東壁際床面上3cmで出土した。

ここで図示した遺物の他、縄文土器3点、土師器破片464点、剥片1点、礫片10、礫9点が出土している。縄文土器(第232図10)は混入であるので、遺構外遺物の項で報告した。

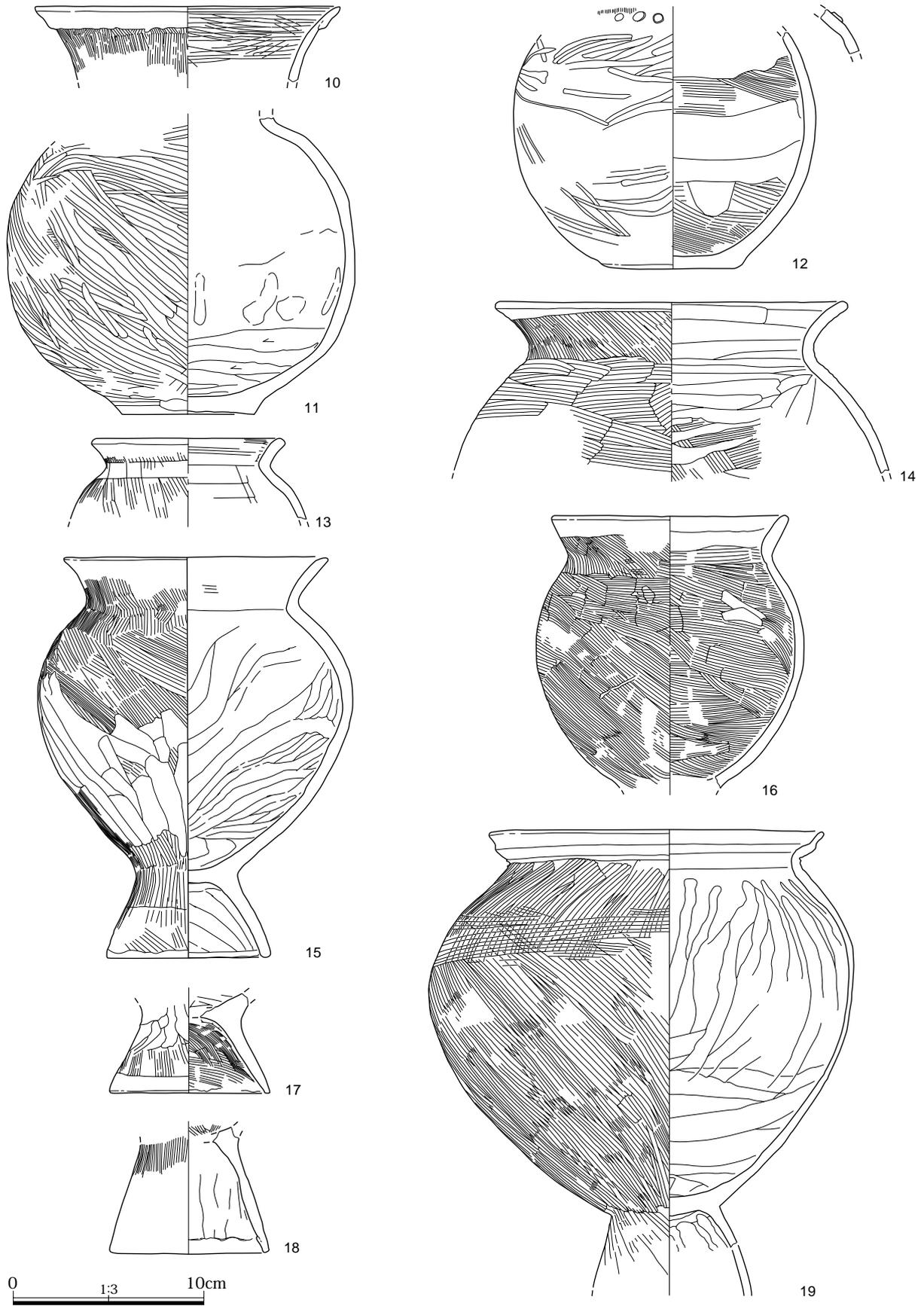
所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。主柱穴P2の東側床面直上で巴形銅器の破片が出土した。表裏面とも磨かれており、本来の使用目的から離れ、破片として重用されたと推定される。群馬県内では高崎市新保遺跡に次いで2例目の出土例である。



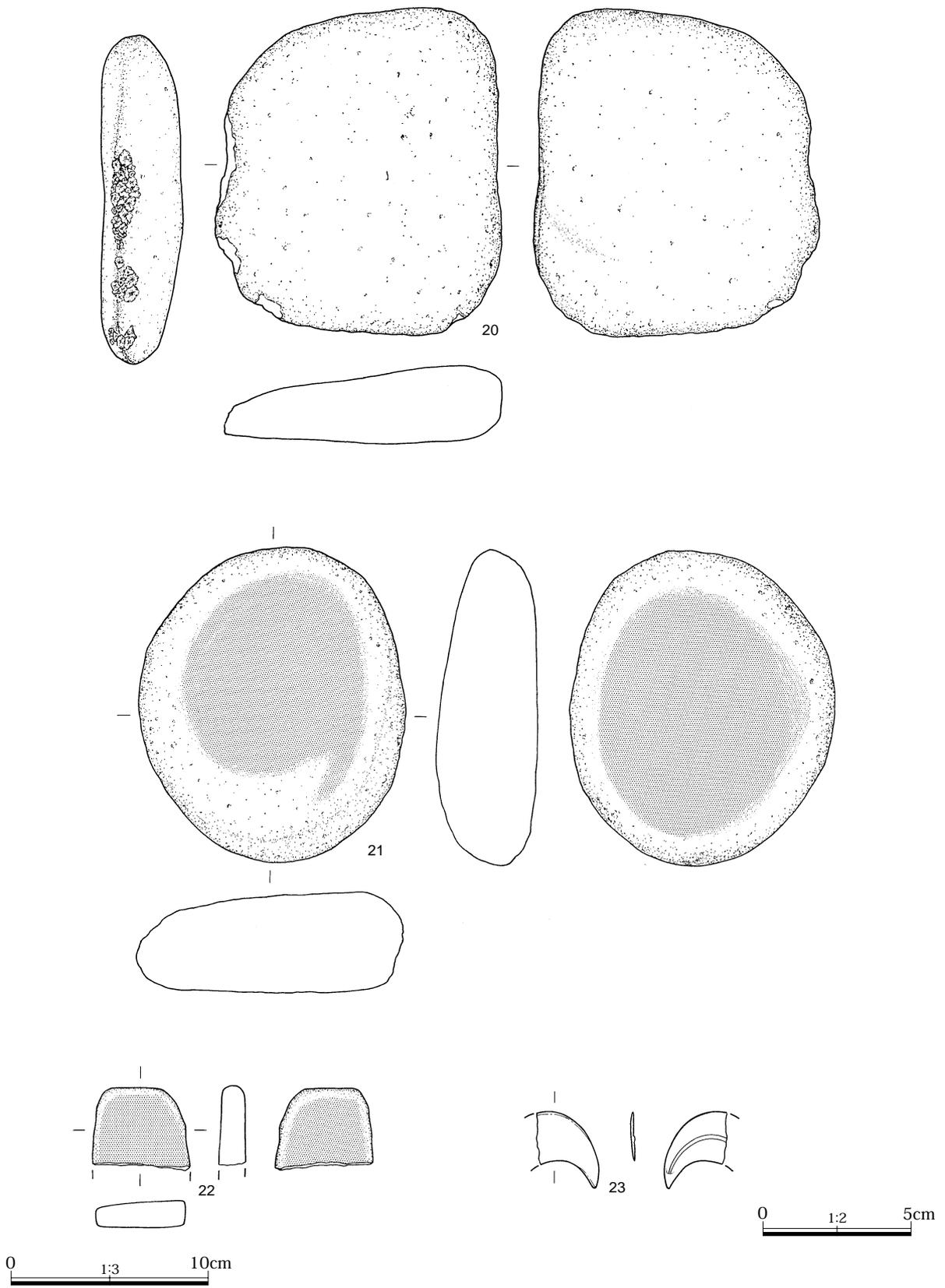
第118図 2区12号住居(2)



第119図 2区12号住居出土遺物(1)



第120図 2区12号住居出土遺物(2)



第 121 図 2区 12号住居出土遺物(3)

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 14号住居(付図2 第122～124図 PL69
～71・168 遺物観察表P.500・501)

位置 2区3-82-I・J-14・15G

形状 隅丸長方形

重複 無し

規模 長軸 5.27 m 短軸 4.58 m

残存壁高 0.36 m

床面積 21.58 m²

長軸方位 N - 70° - W

埋没土 上層は浅間C軽石を多量に含む暗黒褐色土で、下層は浅間C軽石をほとんど含まず、暗黄褐色土粒を少量含む明黒灰色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北東部、P2の西側で炉を検出した。炉は長軸0.6 m、短軸0.46 mの隅丸長方形で、長軸は住居長軸と一致している。深さ0.08 mほど掘り込み内部に粘土を貼っていた。表面は非常に硬く粘土が焼き締まっており、中央部は焼土化していた。粘土下部の掘り込みはない。

柱穴 床面で主柱穴P1～P4を検出した。いずれも不整円形あるいは不整楕円形で、それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.47×0.45×0.54 m、P2が0.50×0.36×0.49 m、P3が0.39×0.32×0.47 m、P4が0.48×0.36×0.68 mである。柱穴の掘り方は隅丸方形で、底面中央に柱根が残る。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 南東隅に1基の住居内土坑を検出した。この1号土坑は、住居南東隅の南壁際、主柱穴P3の南側で検出した。長軸0.60 m、短軸0.52 m、深さ0.37 mの隅丸方形である。浅間C軽石を含む黒褐色土・暗褐色土で埋まっていた。遺物は出土しなかった。

床面 北西から南東にかけて地割れが入り、床面を壊していた。床面は平坦で、全体的に硬化していた。

掘り方 四周の壁沿いが幅0.9～1.4 m、深さ0.02～0.15 mほど、ぐるりと掘り込まれていた。主柱穴P1～P4は、中央の掘り残された部分の隅にある。掘り方面を埋めていたのは、黄色砂を含む暗黄褐色土・黄褐色土である。

掘り方面で2号土坑、3号土坑を検出した。2号土坑は北東隅にあり、長径0.72 m、短径0.46 m、深さ0.14 mの楕円形である。底面直上で土師器台付甕のミニチュア(第124図1)とやや大きな礫が出土した。

3号土坑は主柱穴P2の西、炉の北側にあり、長径0.56 m、短径0.48 m、深さ0.36 mの不整楕円形である。

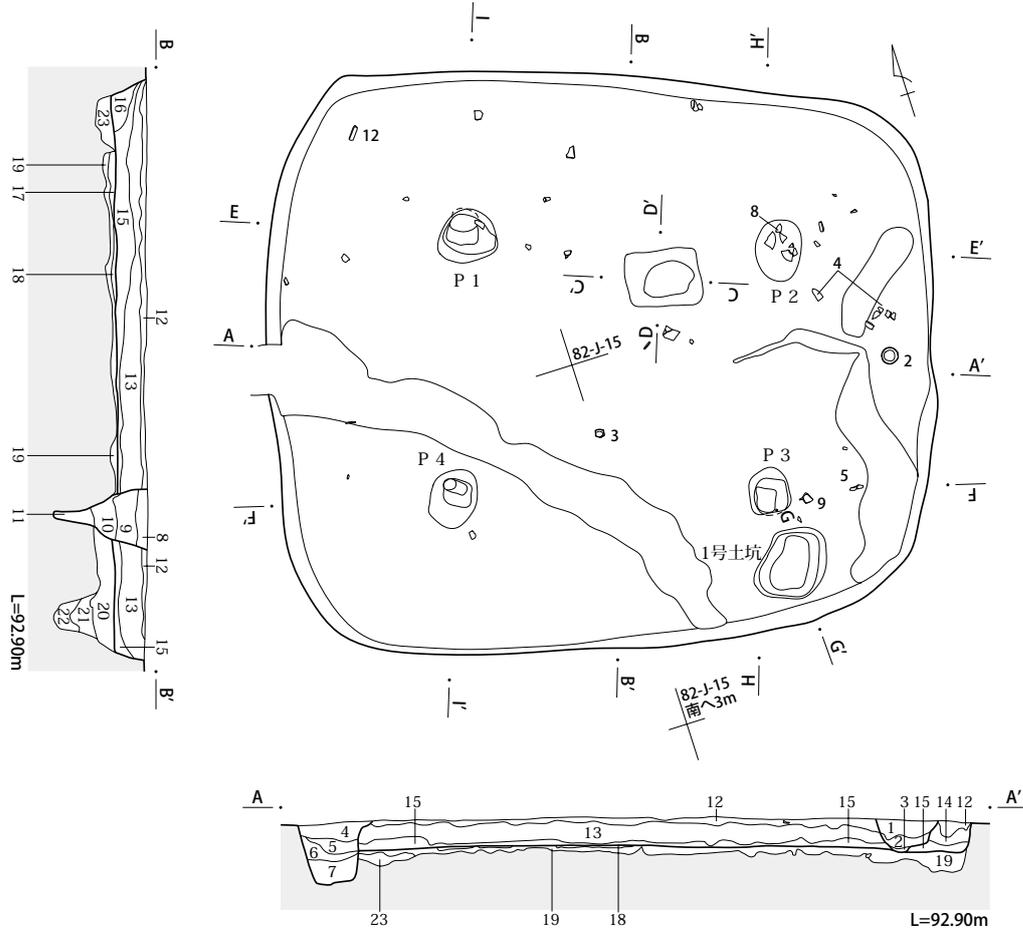
また、掘り方面の南壁中央壁際でP5を検出した。長径0.36 m、短径0.33 mのほぼ円形で、深さは0.34 mである。

遺物と出土状況 床面近くで出土した遺物は、北部から東部にかけて集中していた。土師器鉢(第124図2)は東壁中央部壁際床面上33 cmで出土した。3の鉢破片は中央部床面上2 cmで出土した。北陸系の土師器高坏(4)は東壁中央壁際床面上4 cmで出土した。土師器甕口縁部(5)と台付甕(9)は南東部P3東側で、それぞれ床面上8 cm、7 cmで出土した。台付甕台部(8)は主柱穴P2内から出土した。砥石(12)は北西隅床面上4 cmで出土した。S字甕(6)、弥生土器甕破片(7)、土製品破片(10)、砥石(11)は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物の他、縄文土器3点、土師器破片277点、礫片4点、礫2点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。土製品(第124図10)は鱗状の突起のある薄く彎曲のある破片で、銅鐸形土製品の可能性があるが、詳細は不明である。今回は銅鐸形土製品として図化した。類例を検討して、再考したい。

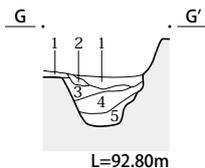
南東隅で1号土坑とP5が検出されているが、本遺跡では他の住居でもほぼ同じ位置に土坑およびピットが検出されている。周囲に馬蹄形の堤状の盛土が巡る住居もある。住居の空間利用にあたって、南壁から南東隅には何らかの施設があったものと推定される。荒砥前田 遺跡ではこれらの土坑がほとんどの住居で検出されているが、古墳時代初頭の竪穴住居の典型的な形態として認識できるかどうか、他遺跡との比較検討が必要である。



A - A'・B - B' (1 - 11は地割れ)

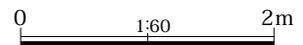
1. 暗黒褐色土 直径1 - 3 mmほどのAs-Cを多く、直径1 - 5 mmの白色軽石粒を少量含む。やや硬質。
2. 暗黒褐色土 土色は1層と同一だが、軽石の混入が微量であり、やや軟質。
3. 暗褐色土 暗黄褐色土粒をやや多く含む。
4. 暗黒褐色土 直径1 - 3 mmほどのAs-Cを多く、直径1 - 5 mmの白色軽石粒を少量含む。やや硬質。
5. 暗黒褐色土 土色は1層と同一だが、軽石の混入が微量であり、やや軟質。
6. 暗黒褐色土 As-Cおよび暗黄褐色土を少量含む。
7. 暗褐色土 暗黄褐色土粒をやや多く含む。
8. 暗黒褐色土 直径1 - 3 mmほどのAs-Cを多く、直径1 - 5 mmの白色軽石粒を少量含む。やや硬質。
9. 暗黒褐色土 土色は1層と同一だが、軽石の混入が微量であり、やや軟質。
10. 黒褐色土 As-Cを微量含む。軟質でしまり悪い。
11. 黒褐色土 軽石の混入は認められない。軟質。

12. 暗黒褐色土 直径1 - 3 mmほどのAs-Cを多く、直径1 - 5 mmの白色軽石粒を少量含む。しまり良くやや硬質。
13. 暗黒褐色土 土色は12層と同一だが、As-Cをやや多く、白色軽石粒を少量含む。
14. 黄白色砂質土 黄白色および褐色砂質土を主体とした層。
15. 明黒灰色土 As-Cの混入は微量で暗黄褐色土を少量含む。
16. 明黒褐色土 15層と土質は似ているが、暗黄褐色土の混入が多い。
17. 暗黒灰色土 炭化物、灰を主体とする層。直下に炉がある。
18. 黒色土 炭化物を含む。
19. 暗黄褐色土 黄色砂を含む。
20. 褐色土 As-Cを若干含む。
21. 暗褐色土 黄色砂粒を少量含む。
22. 明褐色土 黄色砂を塊状に含む。
23. 黄褐色土 黄色砂を多く含む。



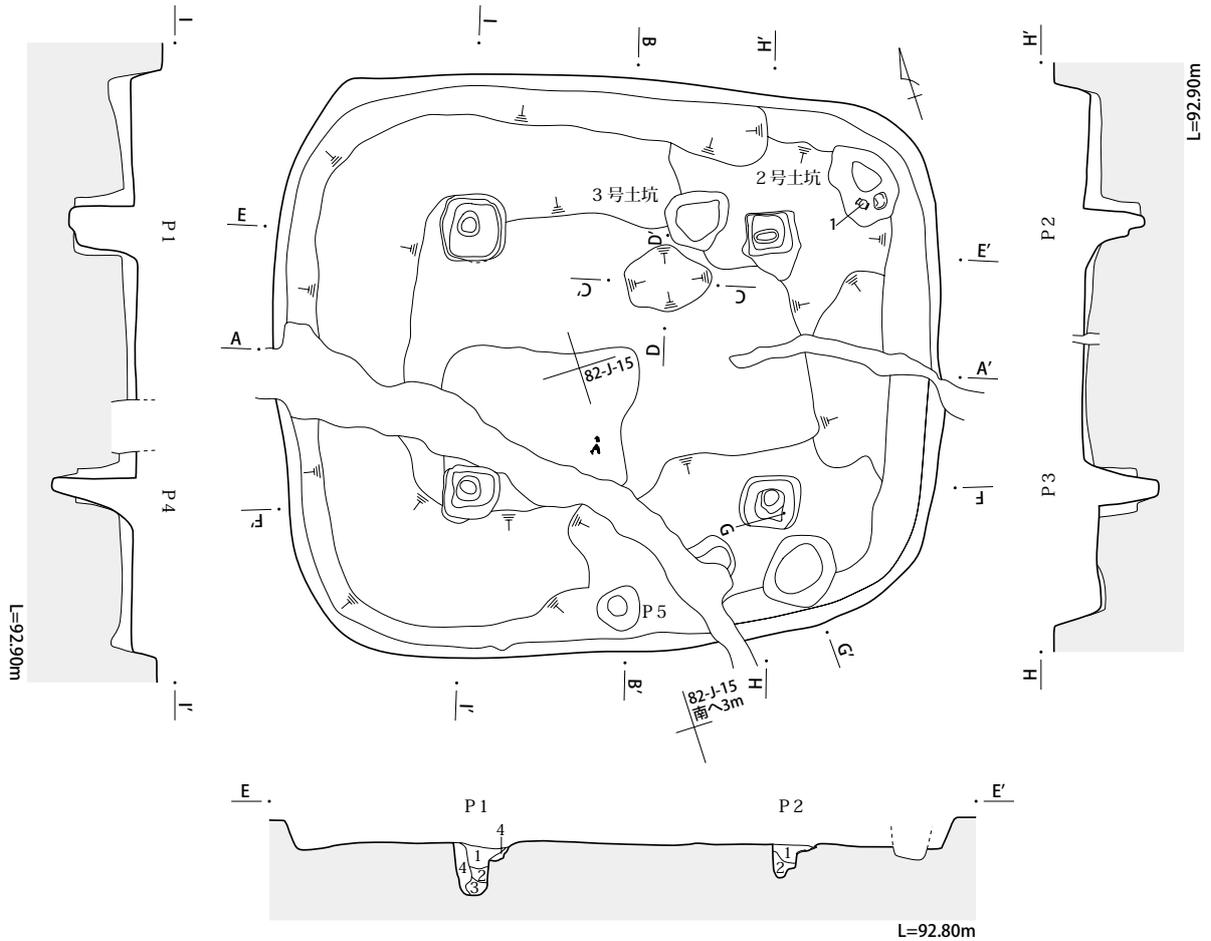
1号土坑 G - G'

1. 黒褐色土 As-Cを多く含む。
2. 灰色粘性土
3. 黒褐色土 As-Cをごく少量含む。
4. 暗褐色土 As-Cをごく少量含む。
5. 暗褐色土 直径1 - 5 cmの黄色砂質土塊を少量含む。黄色砂質土粒をごく少量含む。



第122図 2区14号住居(1)

第5章 2・3区の遺構と遺物

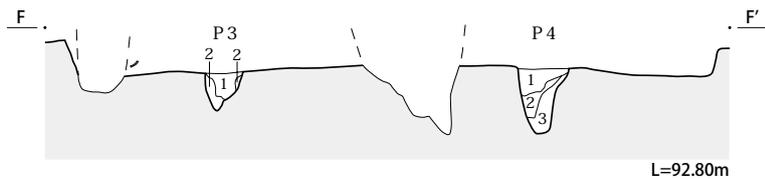


P 1 E - E'

1. 黒色土 直径5cmの黄色砂質土塊をごく少量含む。黄色砂質土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 黄色砂質土粒を少量含む。
3. 黄褐色土 直径5～10cmの黄色砂質土塊を多く含む。
4. 黄褐色土 直径2～3cmの黄色砂質土塊を多く含む。

P 2 E - E'

1. 黒色土 黄色砂質土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 黄色砂質土。直径1～3cmの黄色砂質土塊を少量含む。

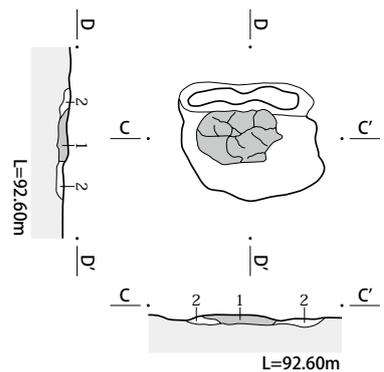


P 3 F - F'

1. 黒色土 黄色砂質土粒、直径5～10mmの黄色砂質土塊を少量含む。
2. 暗褐色土と黄褐色土の混土

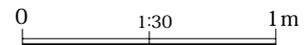
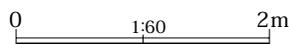
P 4 F - F'

1. 黒色土 As-Cをごく少量含む。黄色砂質土粒を少量含む。
2. 暗褐色土 黄色砂質土粒を少量含む。
3. 黄褐色土 直径5～10mmの黄色砂質土塊を少量含む。

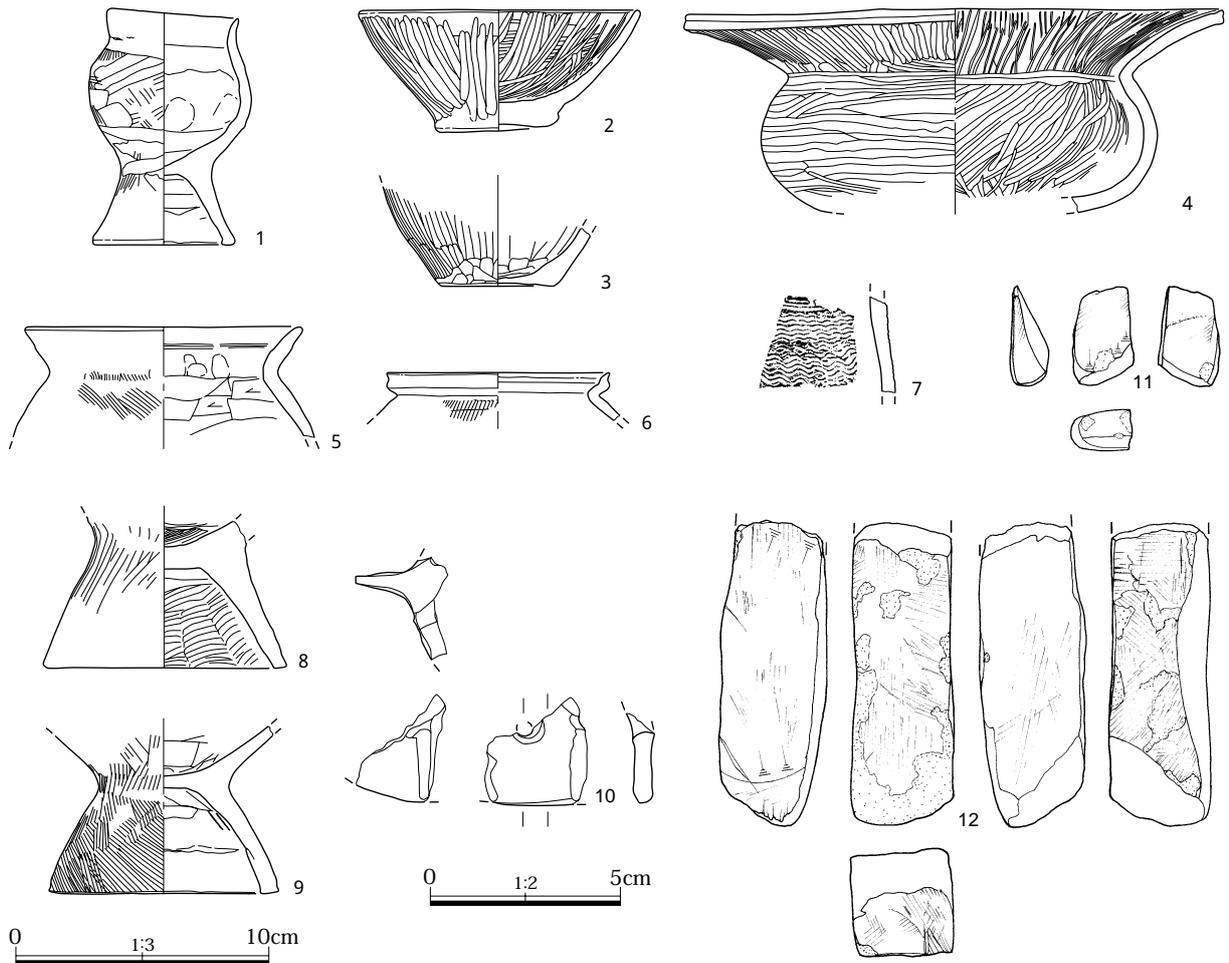


炉 C - C'・D - D'

1. 暗赤褐色土 焼土塊(非常に硬質)を主体とした層。
2. 白灰色土 粘土層、焼土面(使用面)を囲むようにある。硬質(火を受けている)。



第123図 2区14号住居(2)



第124図 2区14号住居出土遺物

2区15号住居(付図2 第125～130図 PL71
 ～74・168～170 遺物観察表P.501・502)
 位置 2区3-82-L・M-18・19 G
 形状 平行四辺形
 重複 無し
 規模 長軸 5.10 m 短軸 4.90 m
 残存壁高 0.43 m
 床面積 22.62 m²
 長軸方位 N-0°-E
 埋没土 上層は多量の白色軽石粒と少量の焼土粒を
 含む黒褐色土で、下層は黄色砂質土塊と焼土粒を少
 量含む暗褐色土で埋まっていた。中位には榛名山二
 ツ岳火山灰層が厚さ4～10cm堆積していた。
 竈 住居東壁中央よりやや南側に竈が構築されてい
 た。確認長1.16 m、燃烧部幅0.52 m。袖の残存

長は向かって右側が1.08 m、左側が1.08 m。壁
 外に伸びる煙道は確認できなかった。焚き口部には
 大型礫が門状に組みあげられていた。燃烧部中央や
 や左には棒状礫を利用した支脚が立てて埋められて
 いた。支脚上には土師器甕破片(第129図17)がのっ
 ていた。燃烧部および右袖上には土師器坏(第128
 図1)、埴(10・11)がほぼ完形で出土した。焚き口
 部に渡されていた大型礫(第130図22)には削り
 痕が残っていた。何らかに利用されていた礫が竈に
 転用されたものと思われる。
 柱穴 柱穴は住居床面では検出できなかった。掘り
 方面で精査の際に、数cmの凹みとして4本の柱穴
 と思われるピットを確認した。それぞれの規模(長
 径×短径×深さ)は、P1が0.26×0.21×0.12
 m、P2が0.16×0.14×0.04 m、P3が0.21×0.19

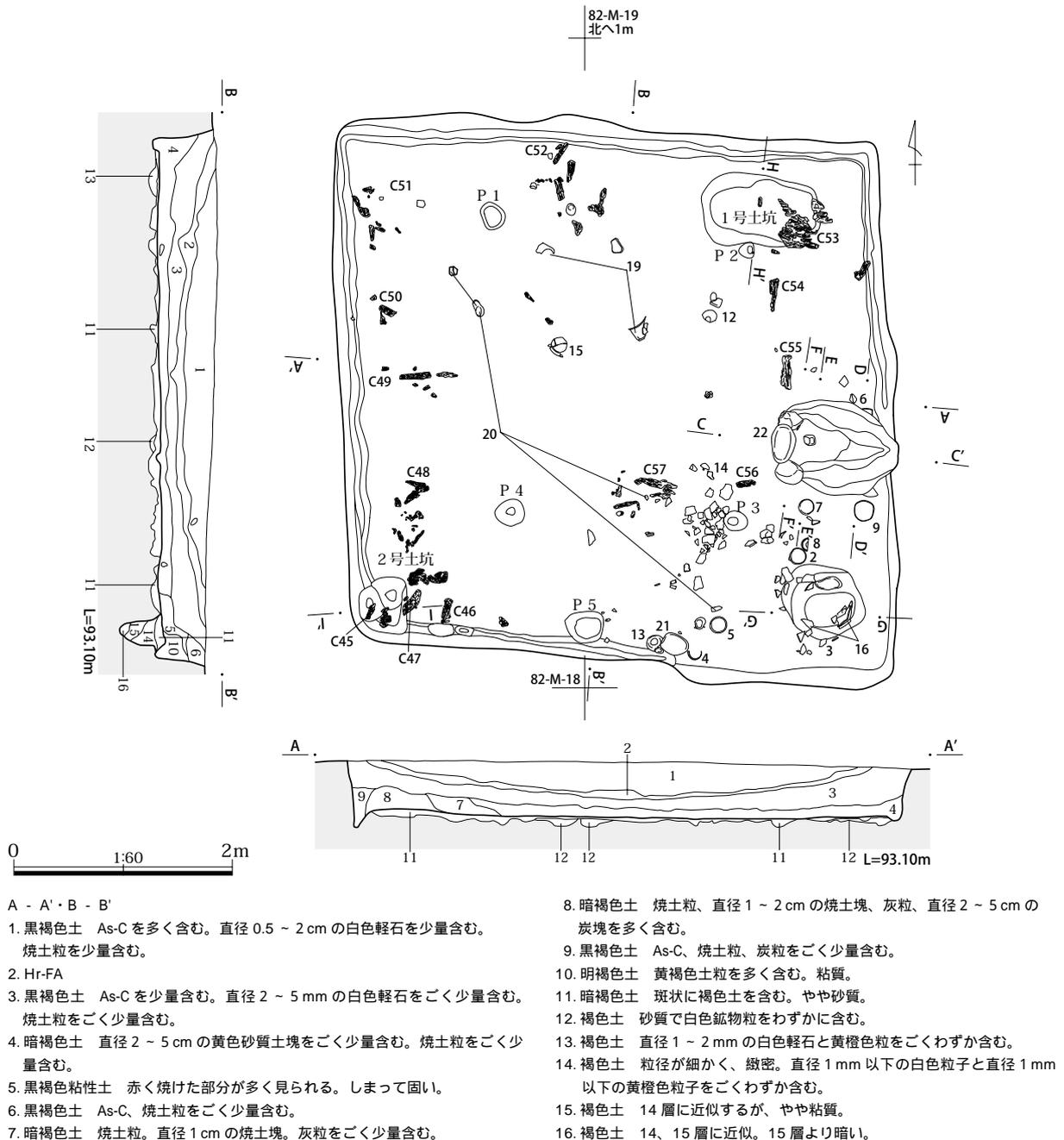
第5章 2・3区の遺構と遺物

× 0.10 m、P 4 が 0.27 × 0.24 × 0.10 m である。
 周溝 南東隅を除き、周溝が検出された。概ね幅は 0.15 ~ 0.2 m、深さ 0.02 ~ 0.05 m である。
 貯蔵穴 南東隅、竈右横に長径 0.80 m、短径 0.57 m、深さ 0.62 m の不整楕円形の土坑が検出された。その位置から貯蔵穴と推定される。周辺から遺物が多数出土した。土師器甕 (第 129 図 16) は貯蔵穴内で出土した破片と、中央部床面上 2 cm で出土し

た破片が接合した。

床面 床面は全体的に硬化していた。特に中央部の硬化は著しい。

また、床面で住居の施設と考えられる土坑 2 基を検出した。1 号土坑は、住居北東隅の北壁際、支柱穴 P 2 の北側で検出した。長軸 1.10 m、短軸 0.65 m、深さ 0.17 m の隅丸長方形である。長軸が北壁と平行する。前述のように炭化材が東半分

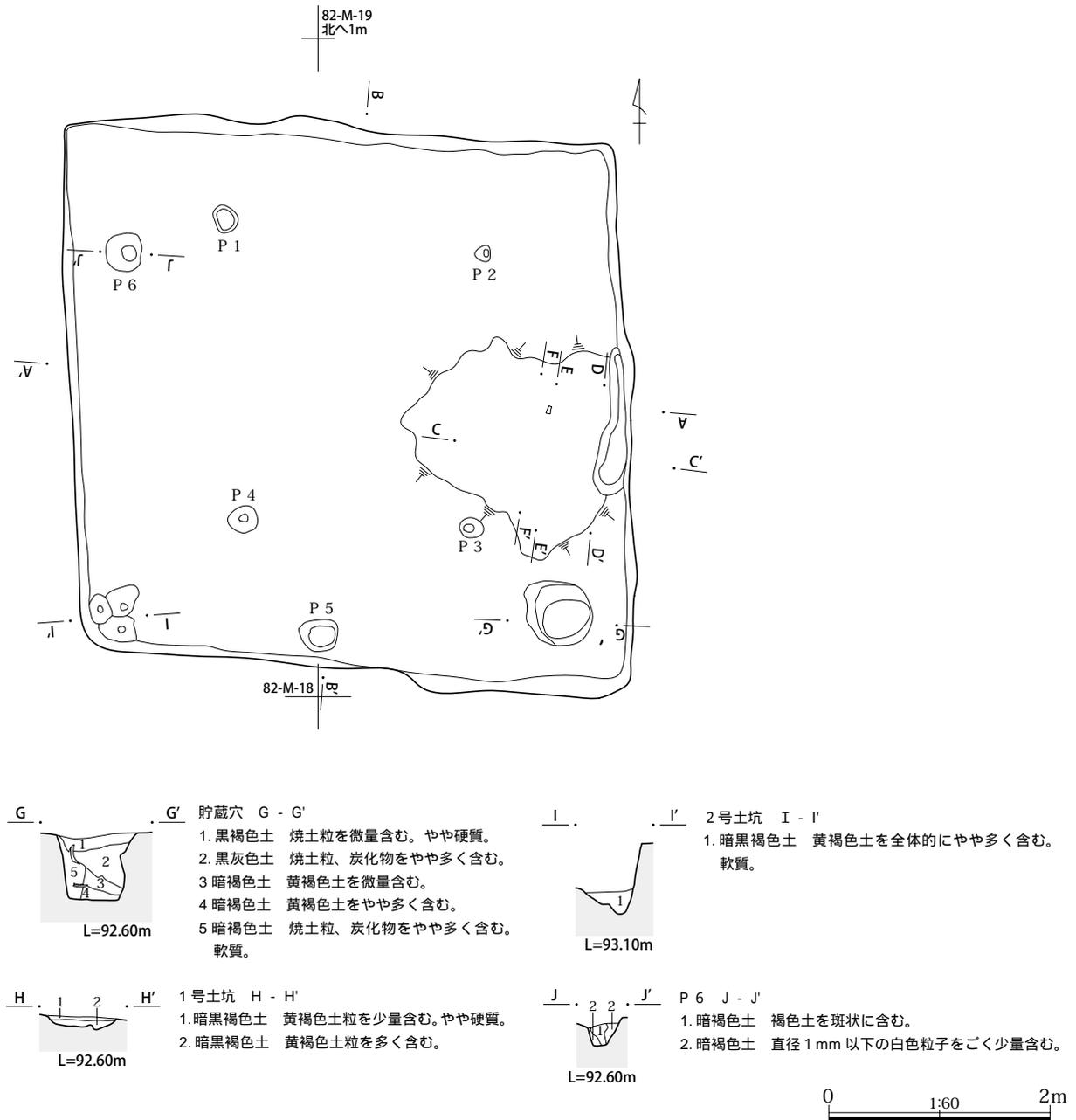


第 125 図 2 区 15 号住居 (1)

て出土した。樹種同定の結果、タケ亜科(竹類)と判明した。2号土坑は南西隅壁際で検出した。長径0.52m、短径0.43m、深さ0.21mの隅丸方形で、底面には2カ所の凹みがあった。周辺には炭化材が散在していたが、樹種はコナラ節とクヌギ節である。掘り方 掘り方面は多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦で、竈部分のみ0.1~0.16mほど高くなっていた。また、掘り方面でP5・P6を検出した。P5は南

壁中央やや西にあり、0.35×0.28×0.38mの不整形円形である。P6は北西部西壁際にあり、0.36×0.32×0.27mの不整形円形である。

遺物と出土状況 土器は竈周辺および南東部に集中して出土し、礫が南東隅および中央部から北部にかけて散在していた。土師器坏(第128図2)はほぼ完形で貯蔵穴北西際床面直上で出土した。坏(4)は南壁中央際床面上10cm、坏(5)は南部床面上



第126図 2区15号住居(2)

第5章 2・3区の遺構と遺物

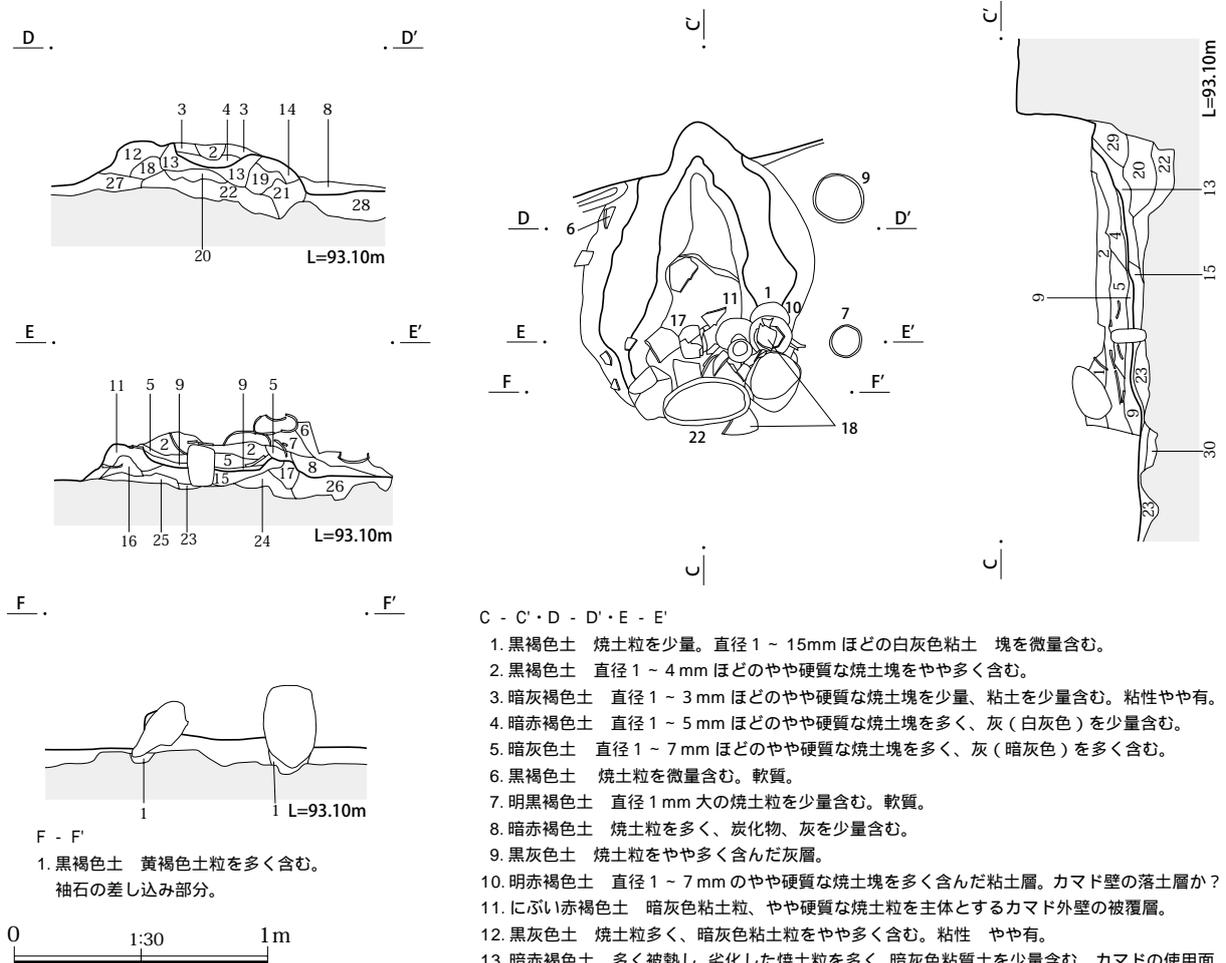
2 cm、坏(6)は竈縁床面上4 cmで出土した。須恵器坏(8)は竈右脇床面直上で、蓋(7)は貯蔵穴北縁床面上5 cmで出土した。これらの須恵器坏・蓋は至近距離で出土しており、大きさも一致していることからセットで使われたと推定される。

土師器の小型の甕(12)は中央部床面上4 cm、13は南壁際床面上3 cm、14は南東部床面上1 cm、15は中央部床面直上で出土した。大型の甕(第129図16)は貯蔵穴内、甕(17・18)は竈燃焼部、19は中央部床面上3 cm、甑(20)は南東部に散在していた破片と中央部床面直上の破片、北西部床面

上3 cmの破片が接合した。

大型の砥石(第130図21)は南壁中央部壁際床面上4 cmで出土した。小型の砥石(23)は埋没土中から出土した。貯蔵穴内から出土した大型礫は敲打痕のある凹石で、縄文時代の石器と判断し、遺構外出土遺物として第237図(92)で報告した。

図示した遺物のほか、縄文土器1点、土師器140点、礫片16点、礫5点、棒状礫1点が出土した。所見 出土遺物から古墳時代中期、須恵器の窯式からは5世紀第3四半期の年代が考えられる。本遺跡唯一の中期の住居である。

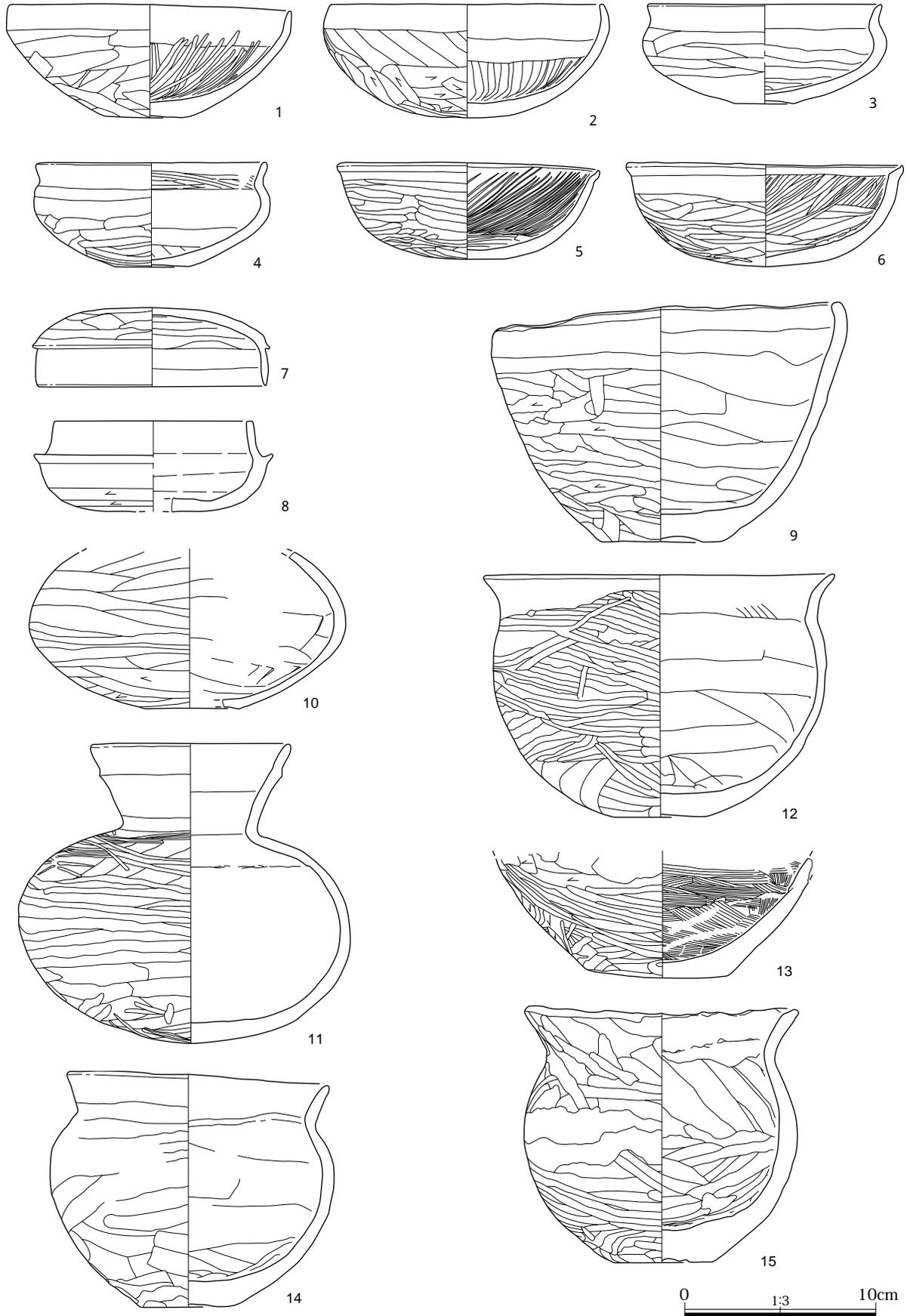


C - C' · D - D' · E - E'

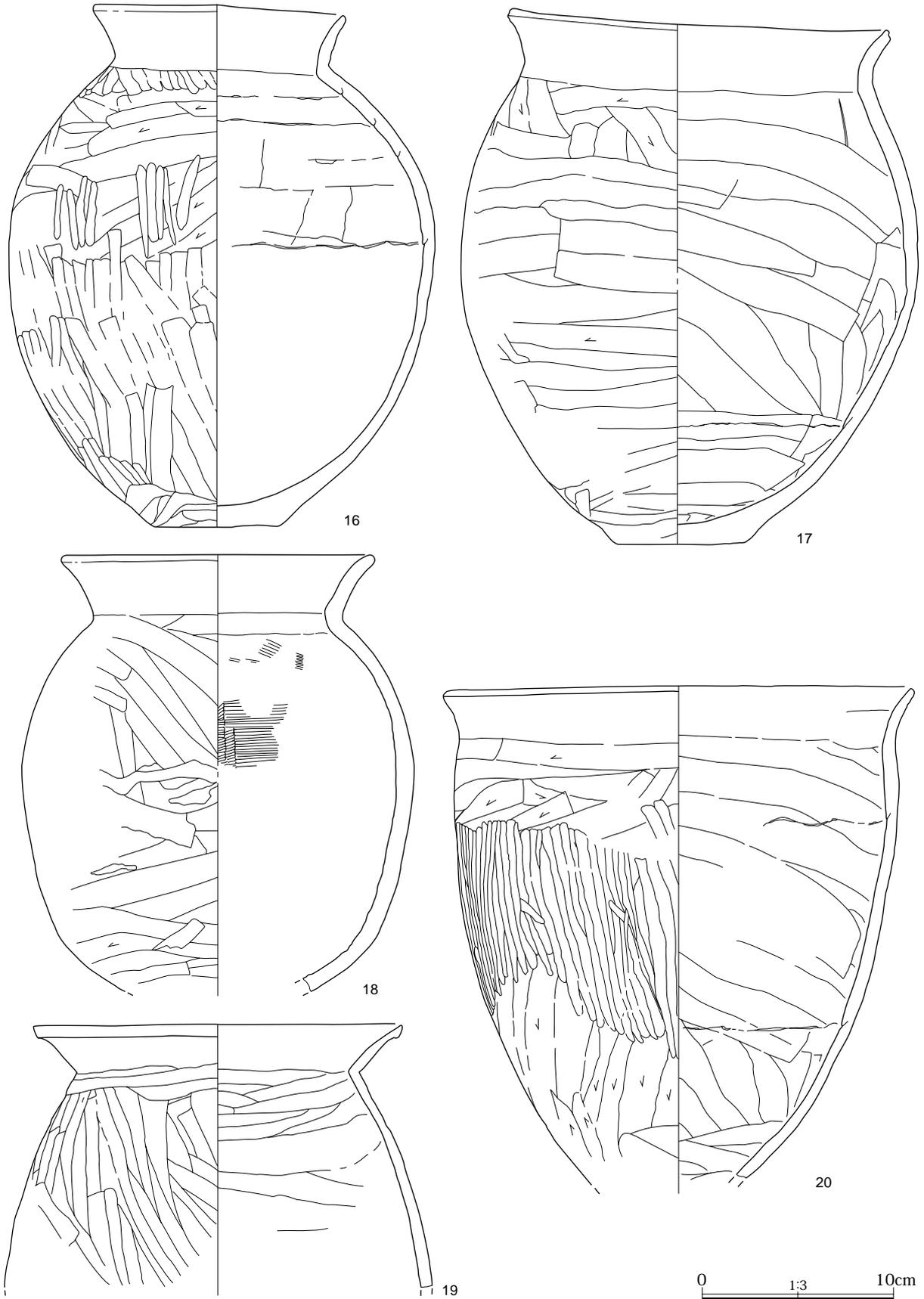
- 22. 黒色土 焼土粒を少量、黄褐色土を少量含む。
- 23. 黒褐色土 黄褐色土を少量含む。硬質。住居の床面。
- 24. 黒褐色土 焼土粒を少量、黄褐色土をやや多く含む。
- 25. 暗褐色土 黄褐色土を多く含む。軟質。
- 26. 暗褐色土 黄褐色土を多く含む。軟質。
- 27. 黒褐色土 黄褐色土を塊状にやや多く含む。
- 28. 暗褐色土 黄褐色土をやや多く含む。やや硬質。

- 1. 黒褐色土 焼土粒を少量。直径1～15mmほどの白灰色粘土 塊を微量含む。
- 2. 黒褐色土 直径1～4mmほどのやや硬質な焼土塊をやや多く含む。
- 3. 暗灰褐色土 直径1～3mmほどのやや硬質な焼土塊を少量、粘土を少量含む。粘性やや有。
- 4. 暗赤褐色土 直径1～5mmほどのやや硬質な焼土塊を多く、灰(白灰色)を少量含む。
- 5. 暗灰色土 直径1～7mmほどのやや硬質な焼土塊を多く、灰(暗灰色)を多く含む。
- 6. 黒褐色土 焼土粒を微量含む。軟質。
- 7. 明黒褐色土 直径1mm大の焼土粒を少量含む。
- 8. 暗赤褐色土 焼土粒を多く、炭化物、灰を少量含む。
- 9. 黒灰色土 焼土粒をやや多く含んだ灰層。
- 10. 明赤褐色土 直径1～7mmのやや硬質な焼土塊を多く含んだ粘土層。カマド壁の落土層か？
- 11. にぶい赤褐色土 暗灰色粘土粒、やや硬質な焼土粒を主体とするカマド外壁の被覆層。
- 12. 黒灰色土 焼土粒多く、暗灰色粘土粒をやや多く含む。粘性 やや有。
- 13. 暗赤褐色土 多く被熱し、劣化した焼土粒を多く、暗灰色粘質土を少量含む。カマドの使用面。
- 14. 赤褐色土 やや硬質な焼土層を主体とする。カマドの外壁。
- 15. 暗黒灰色土 焼土粒を多く、灰をやや多く含む。カマドの使用面。軟質。
- 16. 暗灰色粘質土 暗灰色粘土中に焼土粒を少量含む。カマドの芯材。
- 17. 暗灰色粘質土 暗灰色粘土中に焼土粒を少量含む。カマドの芯材。
- 18. 暗灰色粘質土 暗灰色粘土中に焼土粒を多く含む。カマドの芯材。
- 19. 暗赤褐色土 焼土粒をやや多く含む。軟質。
- 20. 暗褐色土 焼土塊を主体として灰色粘土を微量含む。やや軟質。
- 21. 暗灰色粘質土 暗灰色粘土中に焼土粒を少量含む。

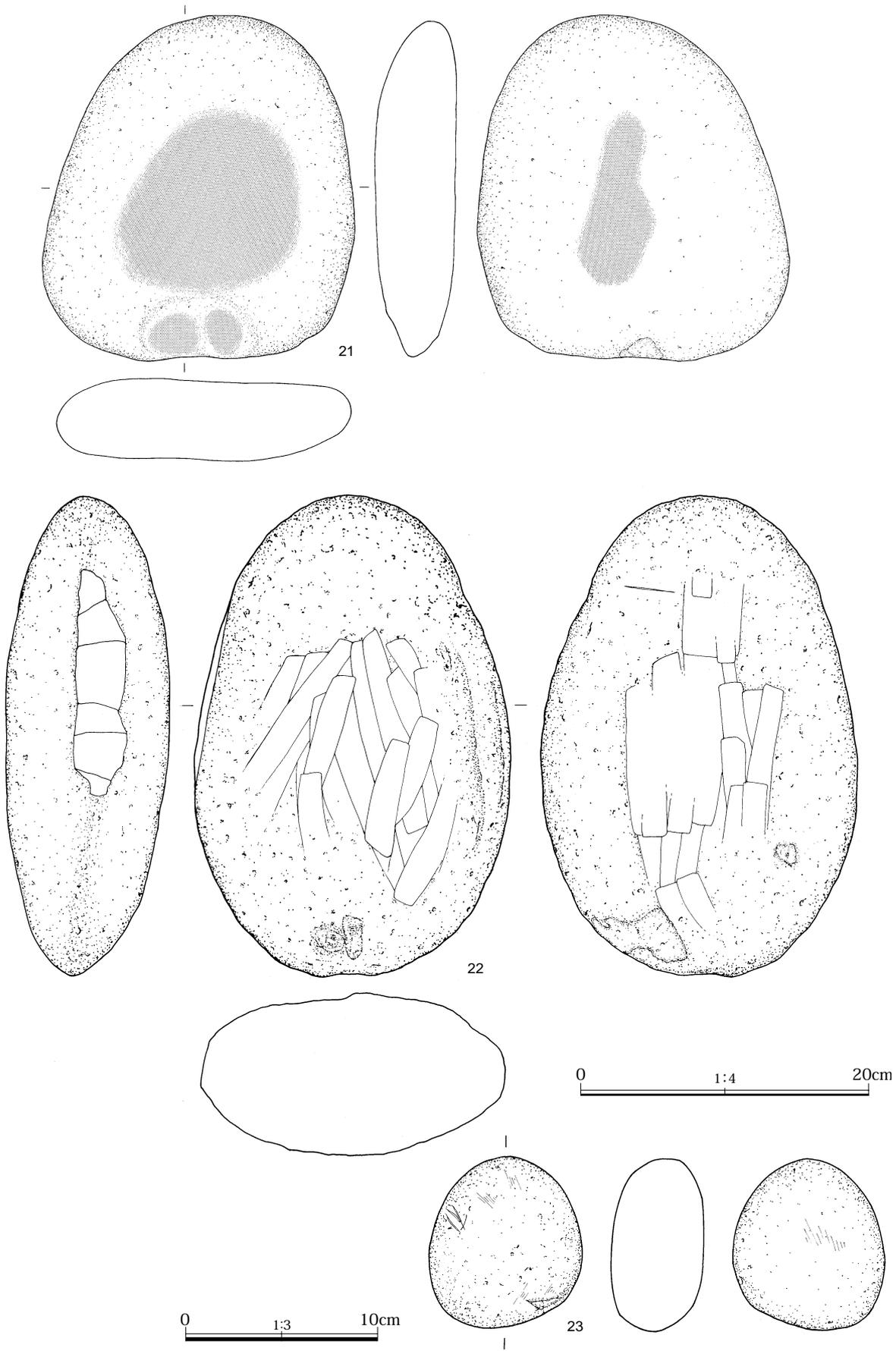
第127図 2区15号住居竈



第 128 図 2 区 15 号住居出土遺物 (1)



第129図 2区15号住居出土遺物(2)



第130図 2区15号住居出土遺物(3)

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 16号住居(付図2 第131～133図 PL74
～76・170 遺物観察表P.502・503)

位置 2区3-82-D・E-4・5G

形状 隅丸正方形

重複 無し

規模 長軸 5.08 m 短軸 4.98 m

残存壁高 0.25 m

床面積 21.78 m²

長軸方位 N-14°-E

埋没土 上層は浅間C軽石、榛名二ツ岳火山灰を多く含む暗黒褐色土で、下層は浅間C軽石・褐色土粒を少量含むにぶい黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央やや東側で炉を検出した。炉は長径0.83 m、短径0.56 mの不整楕円形で、長軸は住居長軸とほぼ一致している。深さ0.06 mほど掘り方埋没土内に掘り込み、焼土粒・炭粒を含む黒褐色土を充填してつくられていた。表面は厚さ0.04 mが焼土化していた。

柱穴 床面は炉の周辺が硬化していたのみで、床面で柱穴を確認することができなかった。掘り方で住居四隅に浅い土坑状のP1～P4を検出したが、対角線上の位置には柱穴と考えられる掘り込みは検出できなかった。P1～P4は浅い土坑状であったが、規格的な位置に見つかったことから、これが住居構造にかかわる遺構の可能性はある。

いずれも不整円形あるいは不整楕円形で、それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.64×0.56×0.18 m、P2が0.66×0.58×0.29 m、P3が0.56×0.51×0.07 m、P4が0.64×0.54×0.12 mである。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 南東隅に1基の住居内土坑を検出した。この1号土坑は、住居南東隅の南壁際に長軸が接するような形で検出した。長軸1.50 m、短軸0.78 m、深さ0.19 mの隅丸長方形である。土坑内の西半には0.48×0.46×0.22 mの土坑状のピットがあり、東半は掘り方でP3が検出された。土坑北部には厚さ3～6 cmの粘土が底面から数 cm 浮い

たところに広がって出土した。土坑内からは遺物が出土しているが、土師器台付甕(第133図8)が東半部底面直上で出土した。これには炉北側床面上4 cmの破片が接合した。また1号土坑北縁床面直上で台付甕(10)が出土した。弥生土器壺(第132図1)は東駿河系の小型壺で、1号土坑内出土の破片と北東隅床面上4 cmの破片、さらに西部に入り込んだ地割れ内から出土した破片が接合した。

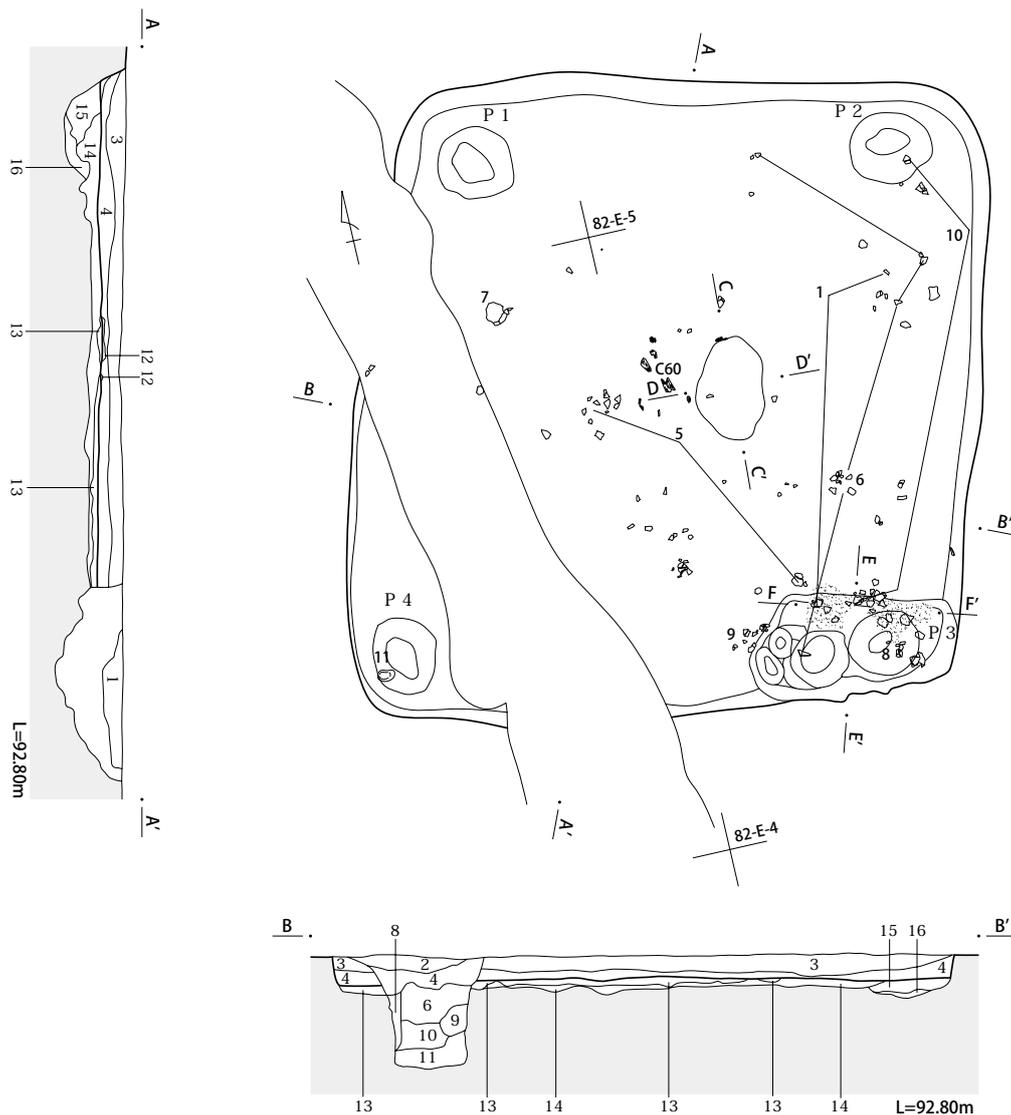
床面 西壁から南壁にかけて地割れが入り、床面を壊していた。床面は平坦であるが、硬化していたのは炉の南側と南東部だけであった。

掘り方 四周の壁沿いが幅0.6～1.0 m、深さ0.03～0.10 mほど、ぐるりと掘り込まれていた。柱穴の可能性も考えられるP1～P4は、この帯状の掘り込みの中にある。掘り方を埋めていたのは、浅間C軽石・黄褐色砂を含む暗褐色土である。

遺物と出土状況 床面近くで出土した遺物は、東部および中央部に集中していた。土師器高坏(第132図5)は中央部床面直上で出土した。壺(6)は東壁に沿うように床面上1～数 cmで出土した破片が接合した。壺(第133図7)は西部床面直上で出土した。台付甕(9)は1号土坑西縁と南部の床面直上で出土した破片が接合した。砥石(11)は南西隅のP4に落ち込むような形で出土した。弥生土器甕破片(第132図2・3)、土師器蓋(4)は埋没土中から出土した。中央部で1点炭化材が出土しているが、樹種同定の結果、クヌギ節と判明した。

ここで図示した遺物の他、土師器破片235点、礫片1点、礫1点が出土している。

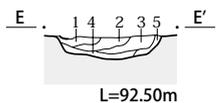
所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居の柱穴は他の住居のように対角線上に4本主柱穴という形で検出されなかった。住居四隅に検出された土坑状のピットは深さが0.07～0.29 mで他の住居の柱穴に比較して浅い。これが柱穴であるかどうかは検討を要するところである。住居形態の異なる本住居については、4本主柱穴の住居と構造が違う可能性もあり、今後他遺跡例との比較検討が必要である。



A - A'・B - B'

1. 黒褐色土 攪乱層、小石、褐色粒を含む。
2. 暗褐色土 褐色砂粒を多く含む。地割れ層。
3. 暗黒褐色土 As-C、Hr-FAを多く含む。しまり良く、硬質。
4. にぶい黒褐色土 As-Cをやや多く、褐色粒を少量含む。
5. にぶい黒褐色土 色調、土質共に4層と同一だが、軽石の混入は認められない。
6. 黒褐色 As-Cを少量含む。鉄分の凝集多い。
7. 黄褐色土 砂質土。地山か。白い鉱物粒を少量含む。
8. 黒褐色土 やや粘質でAs-Cがわずかに含まれる。

9. 暗灰褐色土 As-Cわずかに含む。鉄分が少量含まれる。
10. 黒褐色土 6層より暗く、As-C少ない。鉄分が層状に凝集する。
11. 黒褐色土 粘質でAs-Cほとんど含まない。鉄分の凝集多い。
12. 黒褐色土 炭化物多く含む。
13. 暗褐色土 黄褐色砂及び、As-C微量混入。全体的に固く締まっている。
14. 暗褐色土 砂質。地山、黄褐色砂を多く含む。
15. 黒褐色土 As-C、黄褐色砂少量含む。
16. にぶい黄褐色土暗褐色土、混入。

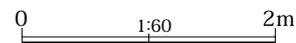
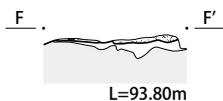


土坑 E - E'

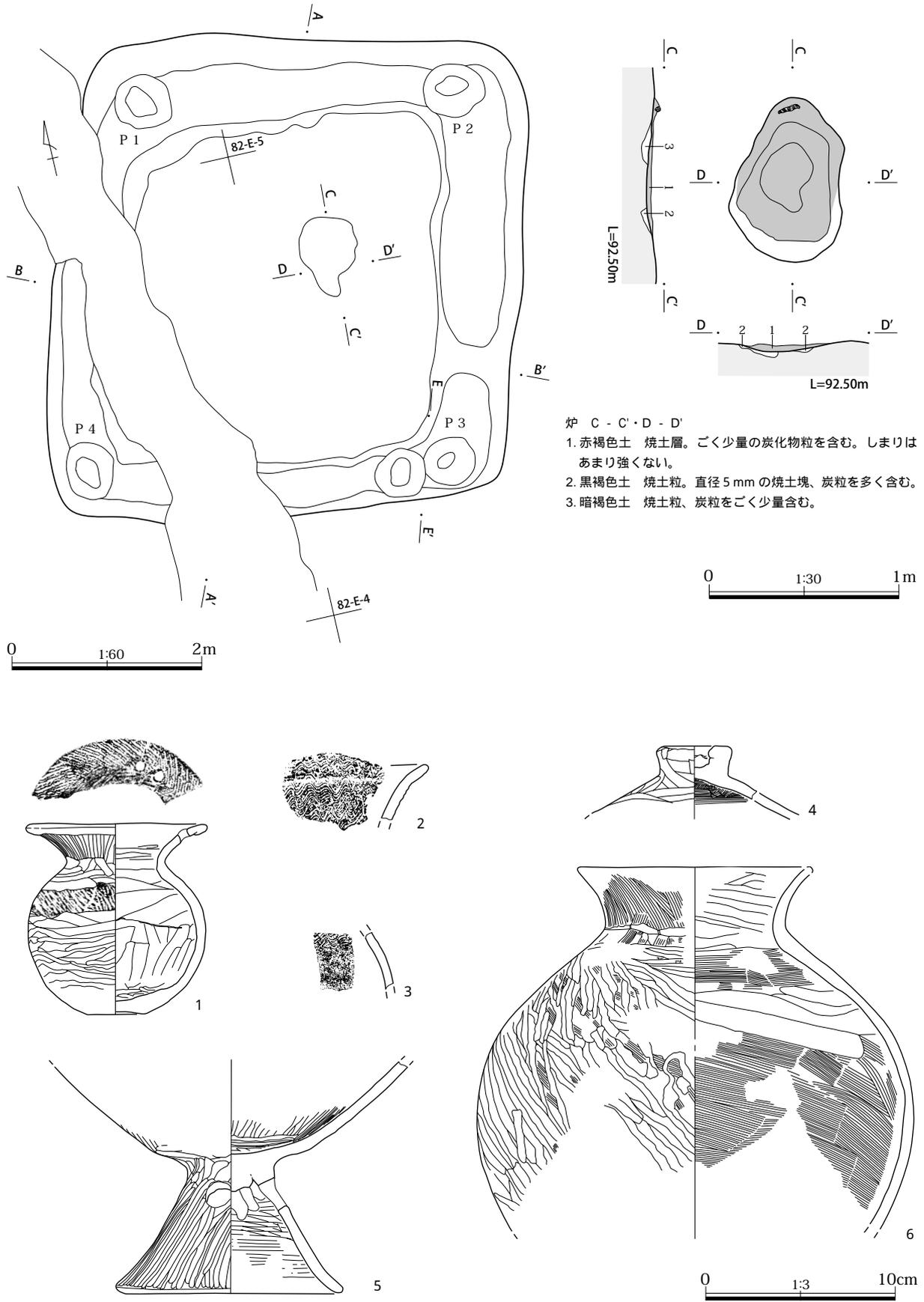
1. 黒褐色土 直径1～3cmの白色粘性土塊をごく少量含む。As-Cをごく少量含む。
2. 黒褐色土 直径1～3cmの黄色砂質土塊を少量含む。As-Cをごく少量含む。
3. 黒色土 As-Cを多く含む。



4. 黒褐色土と黄色砂質土の混土
5. 黄色砂質土



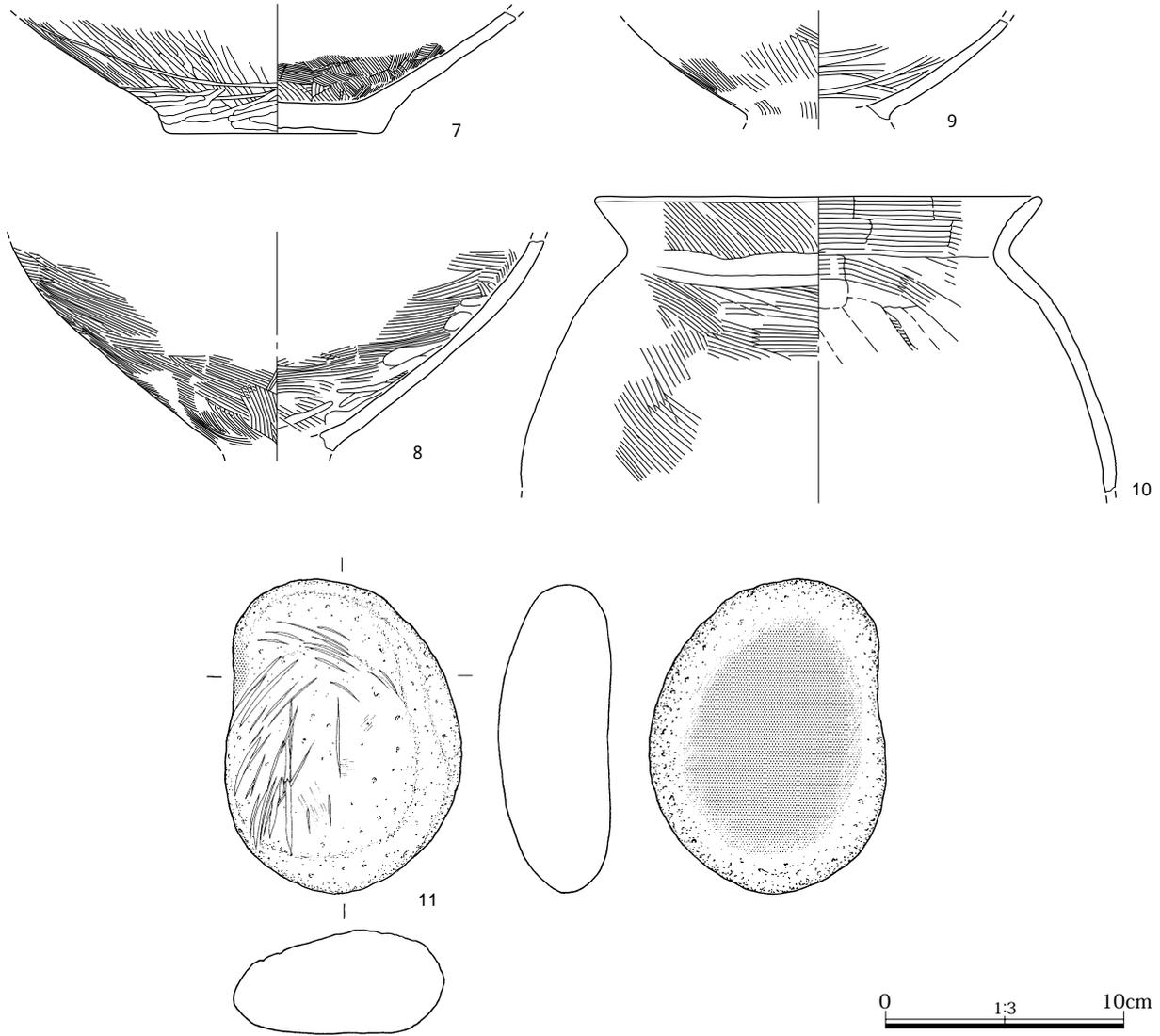
第131図 2区16号住居(1)



炉 C - C'・D - D'

1. 赤褐色土 焼土層。ごく少量の炭化物粒を含む。しまりはあまり強くない。
2. 黒褐色土 焼土粒。直径5mmの焼土塊、炭粒を多く含む。
3. 暗褐色土 焼土粒、炭粒をごく少量含む。

第132図 2区16号住居と出土遺物(1)



第 133 図 2 区 16 号住居出土遺物 (2)

2 区 17 号住居 (付図 2 第 134 ~ 136 図

PL76・77・170・171 遺物観察表 P.503)

位置 2 区 3 - 82 - E・F - 11・12 G

形状 隅丸長方形

重複 2 号井戸に先行する。

規模 長軸 6.38 m 短軸 5.20 m

残存壁高 0.20 m

床面積 29.66 m²

長軸方位 N - 64° - W

埋没土 上層は黄色砂質土塊を含む暗褐色土で、下層は浅間 C 軽石を少量含む暗褐色土で埋まっていた。また、北壁の東半、東壁、南壁沿いにほぼ床面

直上で焼土および炭化材が厚さ 2 ~ 5 cm で検出された。出土した炭化材は同定の結果、ほとんどがコナラ節で、1 点クヌギ節が含まれていた。

炉 住居中央やや北東側に炉が検出された。炉は長径 0.87 m、短径 0.53 m の不整楕円形で、厚さ 0.10 m ほど表面が焼土化して硬化していた。掘り方埋没土内に 0.10 m ほど掘り込んで、その中を黄褐色土を含む黒褐色土を充填して作られていた。掘り方底面までの掘り込みはなかった。

焼土上面には小礫 4 個が直上にのっていたが、被熱はない。このうちの 1 個は敲石 (第 136 図 8) で、他の礫には使用痕跡はなかった。

第5章 2・3区の遺構と遺物

柱穴 床面で支柱穴P1～P4を検出した。いずれも不整楕円形で、それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.52×0.45×0.34m、P2が0.76×0.46×0.30m、P3が0.48×0.42×0.53m、P4が0.70×0.39×0.35mである。これらの支柱穴のうち、P1・P2・P4は床面調査時の掘り下げが足らなかった可能性がある。床面と掘り方調査時の底面を比較した断面図H～Kを見ると、掘り方面では4本ともに底面に柱根の小ピットを残していることや、P3のみが掘り方底面まで達していることがわかる。したがってP3を除くP1・P2・P4は掘り足らなかった可能性がある。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面で2基の住居内土坑が検出された。1号土坑は、住居南東隅の南壁際で検出した。支柱穴P3の南側にあたる。長径0.77m、短径0.64m、深さ0.19mの不整楕円形で、底面中央に小ピットの凹凸があった。

2号土坑は1号土坑の西側で検出した。長径0.80m、短径0.52m、深さ0.46mの楕円形で、断面形は筒形である。土坑埋没土最上層から土師器壺底部(第136図4)と敲石(9)が出土した。また埋没土中から手捏ねの鉢(1)が出土した。

1号土坑と2号土坑は、南壁に沿った長径1.8m、短径0.8mの凹地に並んでおり、さらに西側は南壁に直交する小溝によって区切られた空間に位置している。

床面 床面は全体的にあまり硬化していなかったが、支柱穴を結んだ線の内側はやや硬化していた。P1とP4の西側縁を結んだ線のところには、1～4cmの段があり、壁沿いの幅1.4mほどの部分が高くなっていた。

また、前述のように2号土坑の西側には、長さ1.2m、幅0.3m、深さ0.23mの小溝が検出された。

掘り方 四周の壁沿いが幅1.0m、深さ0.06～0.10mほど、ぐるりと掘り込まれていた。P1～P4の支柱穴はこの帯状の掘り込みの内側の平坦面隅に位置する。さらにその帯状の掘り込み内の内側に幅

0.25～0.35m、深さ0.12～0.27mの周溝状の掘り込みがあった。

また、掘り方面で、2号土坑の北側に長径1.0m、短径0.9m、深さ0.19mの不整楕円形の3号土坑を検出した。住居施設としての掘り込みではなく、掘り方掘削が深く及んだだけの可能性もある。

掘り方面を埋めていたのは、褐色土を含む暗褐色土である。

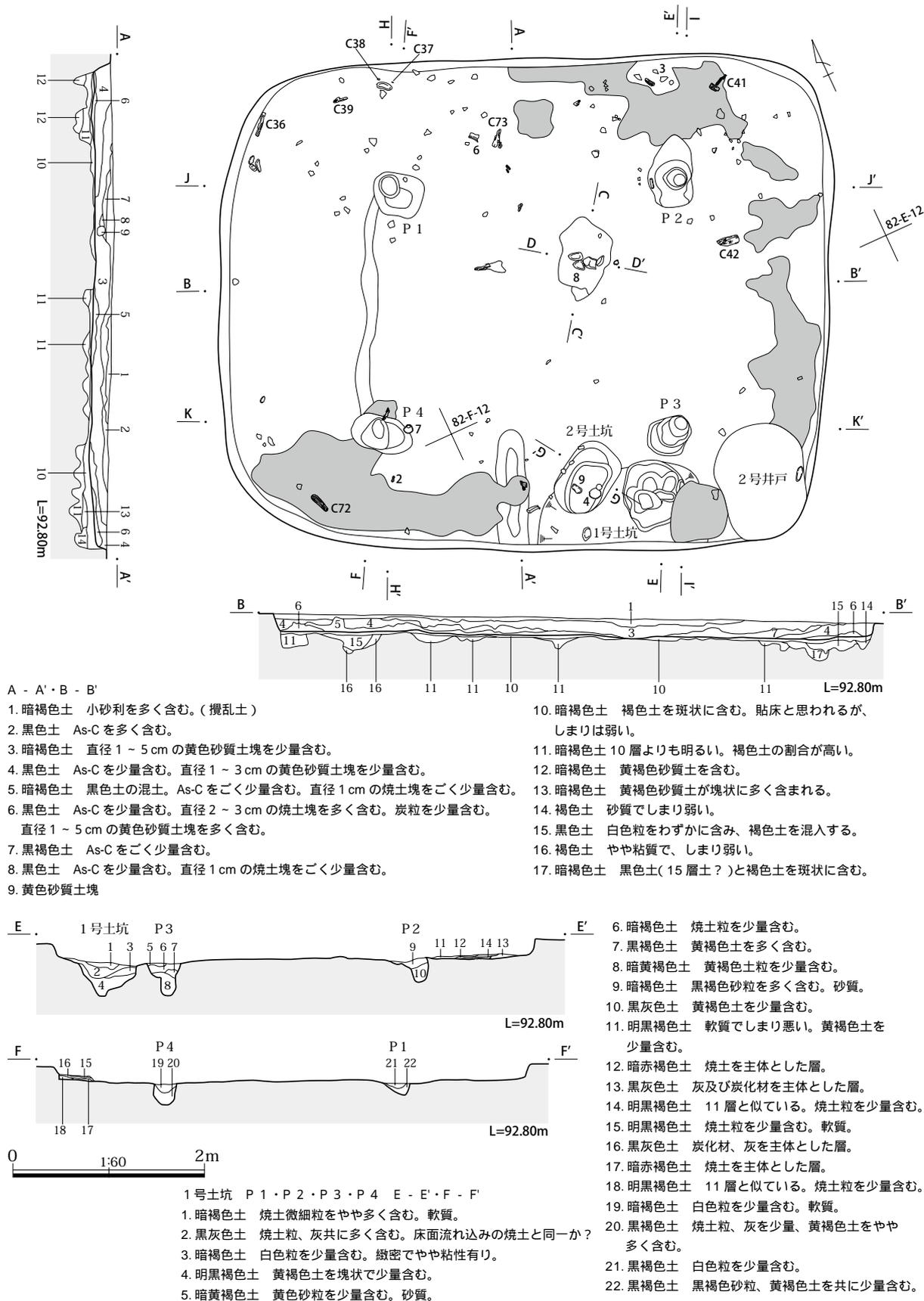
遺物と出土状況 床面近くの遺物は北部と南東隅に集中して出土した。土師器高坏(第136図2)は南西隅P4南部床面上5cmで出土した。壺(3)は北部壁際床面直上で出土した。甕(6)は北部床面上2cmで出土した。台付甕台部(7)は南西部P4東側床上3cmで出土した。S字甕(5)は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物の他、縄文土器11点、土師器破片161点、陶器1点、剥片1点、礫片1点、礫8点、棒状礫2点が出土している。縄文土器は混入であるので、11点のうち3点を図化し、遺構外遺物の項で報告した(第232図22・23・第233図47)。

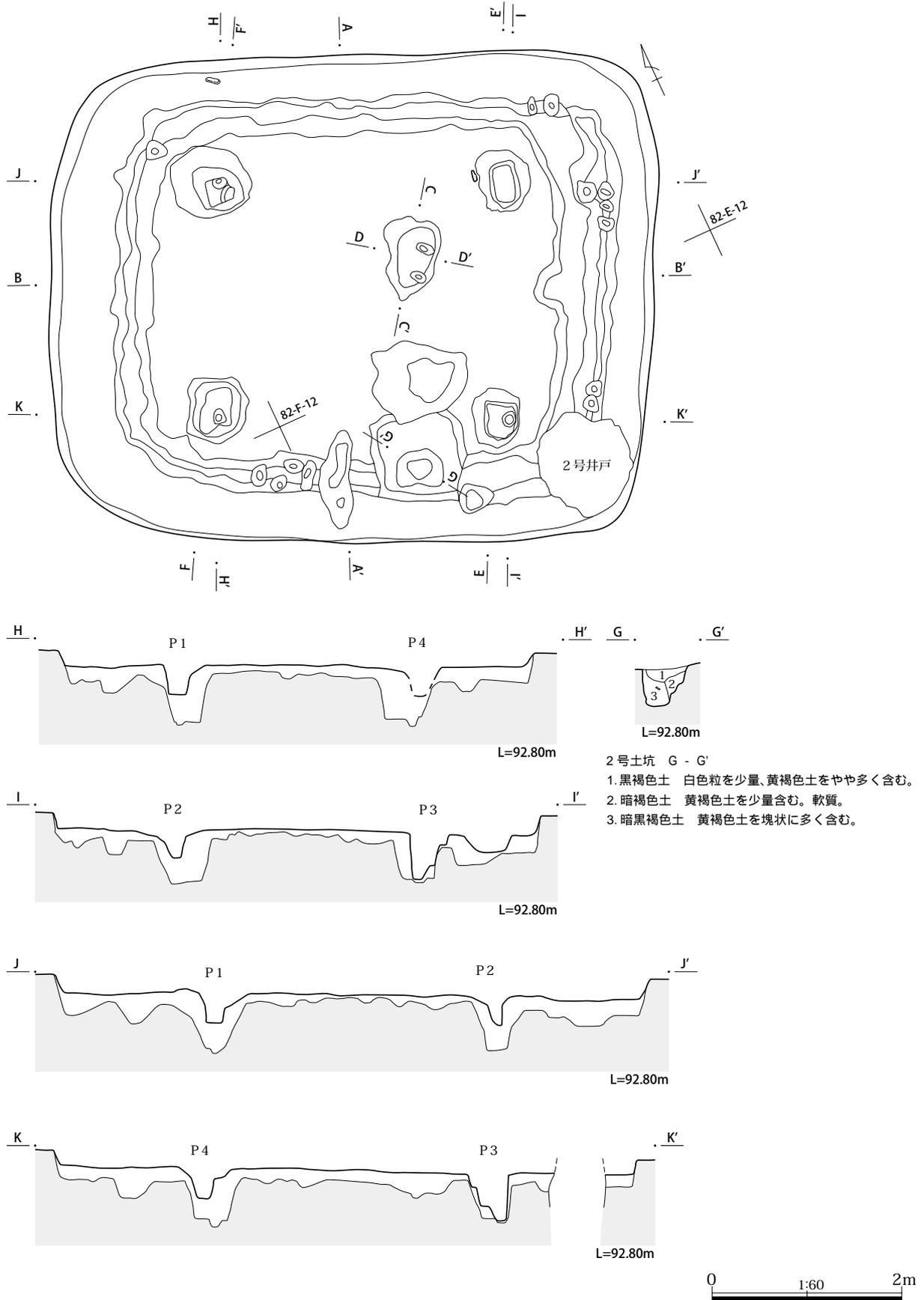
所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居では壁沿いに一部炭化材を含む焼土が出土した。2区11号住居にも同様に焼土が壁沿いに出土している。11号住居では床面の上に6～8cmの黒色土の間層があって、その上位に焼土が出土したのに対して、本住居は床面に直接焼土がのっていた。これが埋没の時間差なのか、焼土の形成過程の違いなのかについては調査では判断できなかった。

南壁中央の小溝については、2区3号住居にも検出されている。3号住居では東壁に中央にも小溝があり、南東隅を空間的に区切る意図があったものと推定される。本住居も同様で、南東隅の何らかの空間を区切るための施設であろう。

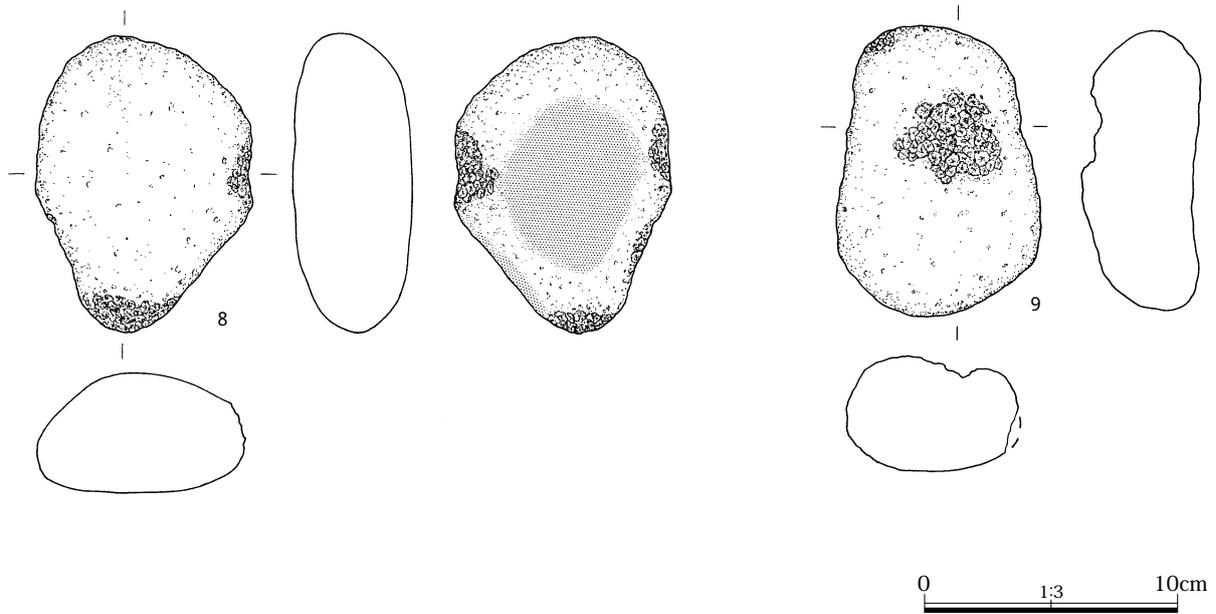
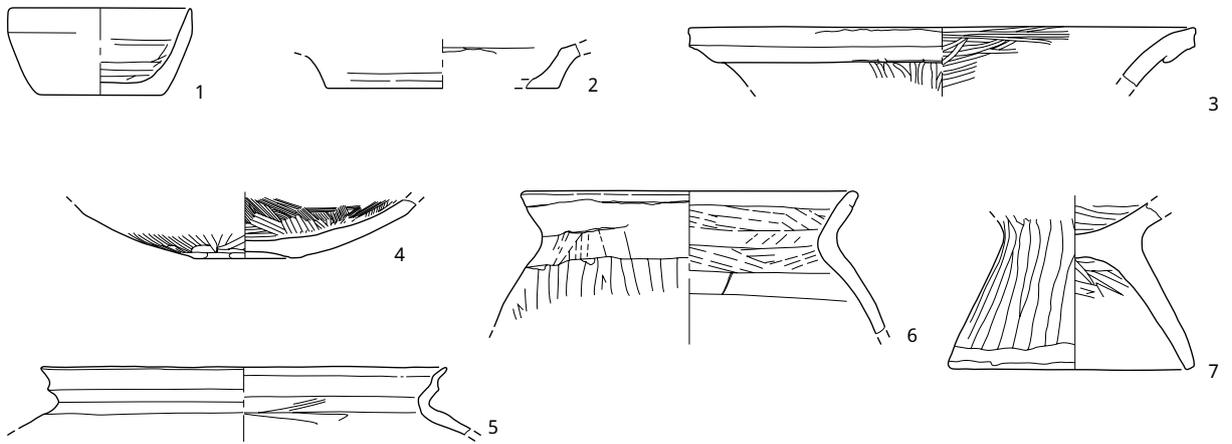
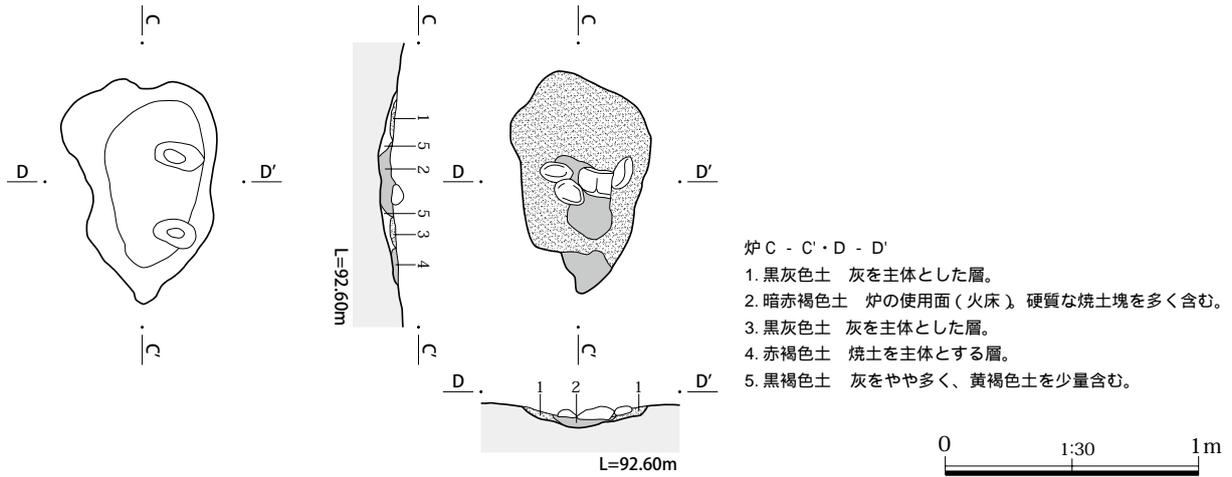
本遺跡の住居群は南東隅の南壁沿いから支柱穴南側にかけて、1～2基の土坑あるいはピットが掘られているのが通例であり、この時期の住居構造を整理する上で重要な視点となろう。



第 134 図 2区 17号住居(1)



2. 2. 3 区微高地部の遺構と遺物



第 136 図 2 区 17 号住居炉と出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 18号住居(付図2 第137～139図 PL78・79・171 遺物観察表 P.503・504)

位置 2区3 - 82 - F・G - 9・10 G

形状 隅丸長方形 重複 無し

規模 長軸 5.60 m 短軸 5.13 m

残存壁高 0.56 m

床面積 21.28 m² 長軸方位 N - 75° - W

埋没土 本住居の埋没土は、自然堆積を示す緩やかな凹線状の土層堆積ではなく、中央が山形になっている。塊状の堆積土を多く含む土砂をブロックで積み重ねたような状況を示していた。したがって、本住居の埋没は自然ではなく、人為的に土砂を投棄した可能性が高い。埋没土は浅間C軽石・黄色砂質土塊・褐色土塊を含む暗褐色土・黒褐色であるが、塊の混ざり具合や土色の違いで、堆積単位と見られる土砂が識別できる。

炉 炉は検出されなかった。床面で検出できなかったために、掘り方面での精査をおこなったが、炉と認められる凹地や焼土・灰の堆積は認められなかった。柱穴 床面で支柱穴P1～P4を検出した。いずれも不整楕円形で、それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.30×0.21×0.52 m、P2が0.42×0.32×0.42 m、P3が0.30×0.24×0.55 m、P4が0.46×0.38×0.50 mである。

周溝 周溝は、四周の壁に沿って全周していた。規模は概ね幅0.16 m、深さ0.20 mである。

住居内土坑 床面で1基の住居内土坑と1基のピットを検出した。1号土坑は、住居南東隅の南壁際、支柱穴P3の南側で検出した。直径0.50 m、深さ0.37 mの不整円形で、東半部が深くなっている。

P5は1号土坑の北西側で検出した。長径0.60 m、短径0.41 m、深さ0.53 mの楕円形で、断面形は筒形である。長軸が南壁と直交している。埋没土中から土器破片は出土したが図化できるほどの大きさではなかった。

床面 床面は平坦で、全体的に硬化していた。

掘り方 四周の壁沿いが幅0.6 m、深さ0.05～0.10 mほどの溝状にぐるりと掘り込まれていた。掘り込

みの痕跡が筋状に見え、筋内には鋤先の痕跡のような小穴が並んでいるように観察できる地点もあった。P1～P4の支柱穴はこの帯状の掘り込みの内側の平坦面隅に位置する。中央の平坦面の上も掘削単位の痕跡が微かに観察されたが、地山はほとんど掘り込まれていなかった。

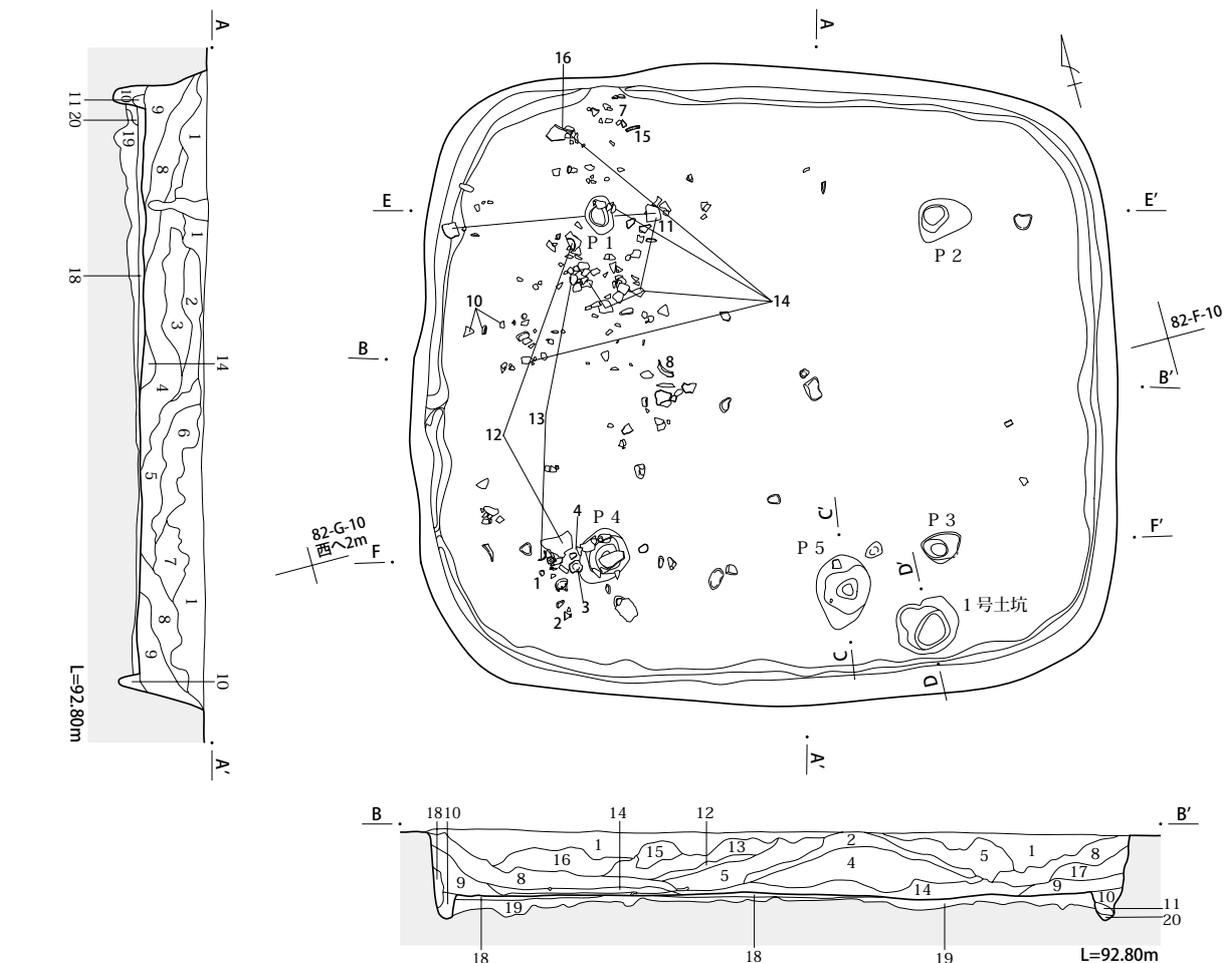
支柱穴の掘り方は方形で、各辺が壁方向に平行する規格性をもっていた。柱穴掘り方の規模は一辺が0.5 mの正方形か、0.4～0.6 mの長方形である。

掘り方面を埋めていたのは、黄褐色土・黒褐色土を含む黒色土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は西壁沿いに集中して出土した。土師器高坏(第139図1・2・3)はそれぞれ、南西部P4西床面直上、P4南西部床面上9 cm、P4西縁床面上4 cmで出土した。小型器台(4)はP4南縁床面上2 cmで出土した。壺(7)は北壁際床面上13 cmで、壺(8)は中央部床面上2 cmで、壺(10)は西部床面上7 cmで出土した。壺(11)は大型の壺で、P1南周辺、西壁際、P4北縁の床面直上で出土した多くの破片が接合した。壺(12)も台付甕台部(13)も同様にP1南西側床面直上の破片とP4西縁床面上5 cmで出土した破片が接合した。甕(14)は北西隅床面上5 cm、西部床面上3 cm、P1の北縁に落ち込んだような床面直上の破片などが接合した。S字甕(15)は中央部床面上3 cmの破片と北部床面上8 cmの破片が接合した。S字甕台部(16)は北西隅床面上4 cmで出土した。器台(5)、弥生土器破片(6)、壺口縁部(9)は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物の他、弥生土器1点、土師器破片348点、剥片1点、礫片4点、礫19点、棒状礫1点が出土している。弥生土器は中期のものであり混入であるので、遺構外遺物の項で報告した(第230図22)。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。炉は検出に努めたが確認できなかった。埋没が人為的であった可能性がある住居は、本遺跡では本18号住居のみであった。



A - A' B - B'

1. 黒色土 As-Cを多く含む。直径5 ~ 10cmの黄褐色土塊を少量含む。
2. 黒褐色土 As-Cをごく少量含む。黄褐色土粒、直径5 ~ 10mmの黄褐色土塊をごく少量含む。
3. 黒色土 As-Cをごく少量含む。黄褐色土粒、直径10 ~ 20mmの黄褐色土塊をごく少量含む。
4. 暗褐色土 黄褐色土粒、直径5 ~ 10cmの黄褐色塊を多く含む。
5. 黒褐色土 黄褐色土粒をごく少量含む。
6. 暗褐色土 As-Cをごく少量含む。黄褐色土粒、直径5 ~ 10mmの黄褐色土塊をごく少量含む。
7. 暗褐色土 黄褐色土粒、直径5 ~ 10mmの黄褐色土塊をやや多く含む。直径10cmの黒褐色土塊をごく少量含む。
8. 暗褐色土 As-Cをやや多く含む。黄褐色土粒を多く含む。直径5mmの黄褐色土塊をごく少量含む。
9. 黒褐色土 As-Cをやや多く含む。
10. 黒褐色土 黄褐色土粒をごく少量含む。
11. 黄褐色土
12. 黒褐色土 2層に似る。
13. 暗褐色土 As-Cをごく少量含む。直径5 ~ 10mmの黄褐色土塊をごく少量含む。
14. 暗灰色土 黄褐色土粒をごく少量含む。
15. 暗褐色土と黒褐色土の混土
16. 暗褐色土 直径5 ~ 10cmの黒褐色土塊。直径1 ~ 2cmの黄褐色土塊をごく少量含む。
17. 黒褐色土 直径5 ~ 10cmの黄褐色土塊をごく少量含む。
18. 黄褐色土
19. 黒色土 黄褐色土、黒褐色土を全体的にまばらに多く含む。
20. 黄褐色土 黒褐色土を全体的にまばらに多く含む。

C . C' P 5 C - C'

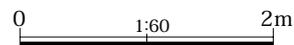
1. 黒褐色土 やや砂質。As-C混入。
2. 暗褐色土 やや砂質。にぶい黄褐色土混入。
3. にぶい黄褐色砂 暗褐色土少量混入。

L=92.30m

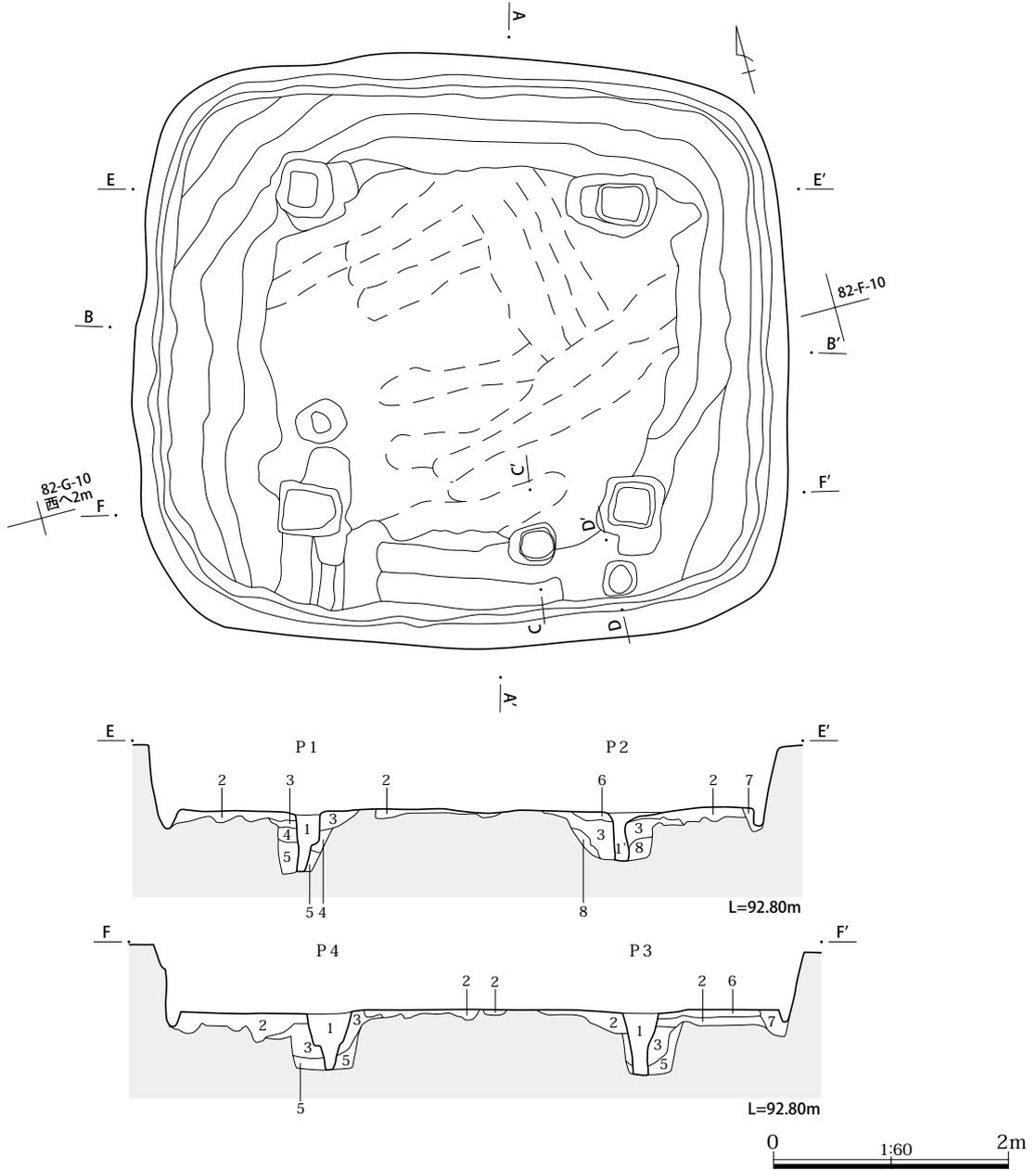
D . D' 1号土坑1 D - D'

1. 黒褐色土 黄褐色土粒をごく少量含む。
2. 黒褐色土 直径1cmの黄褐色土塊を少量含む。

L=92.20m



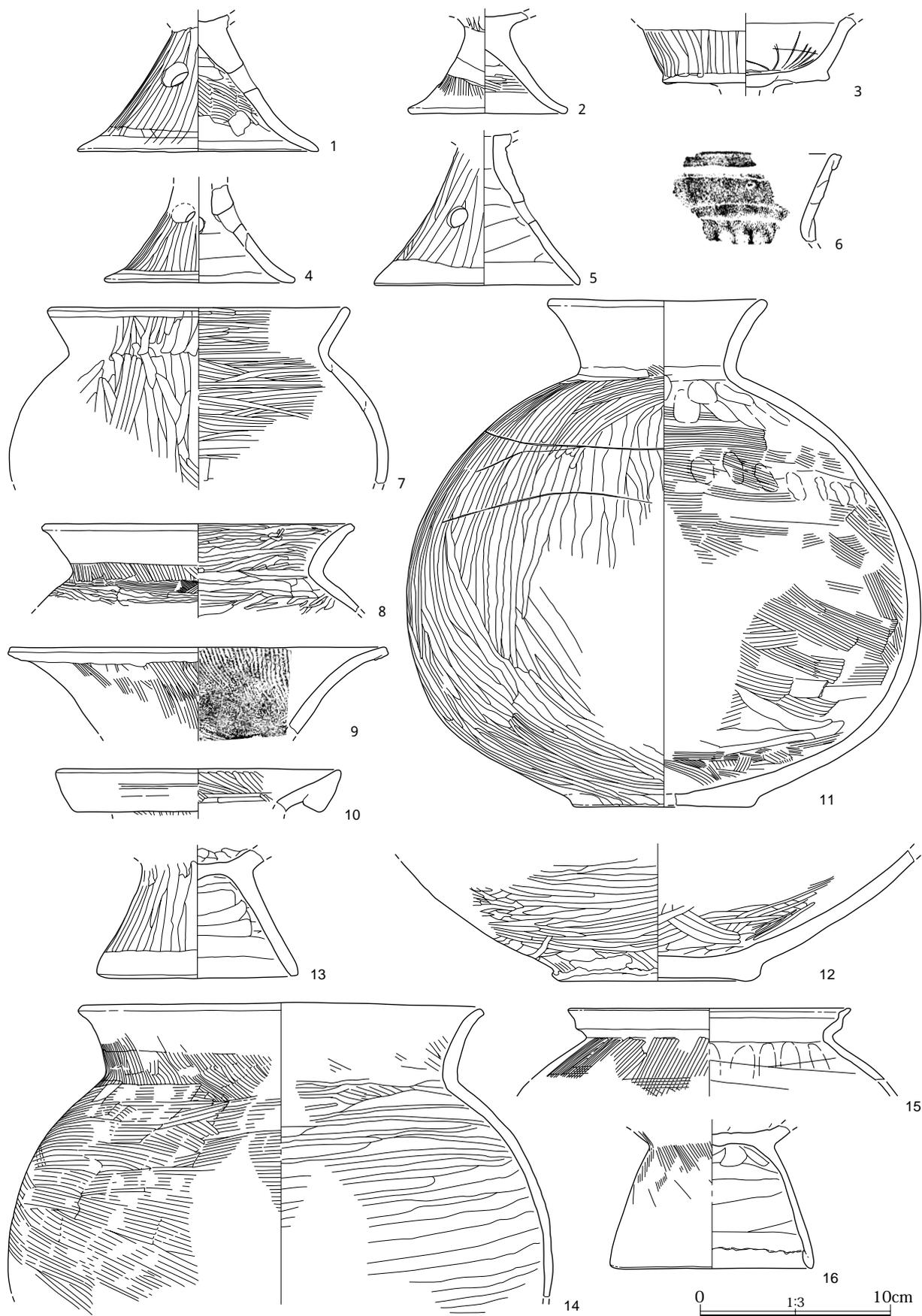
第137図 2区18号住居(1)



P 1・P 2・P 3・P 4 E - E'・F - F'

1. 黒褐色土 黄褐色土粒をごく少量含む。(柱根)
- 1'. 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。(柱根)
2. 黒色土 黄褐色土、黒褐色土を全体的にまばらに多く含む。(住居セクション 19 層に同じ)
3. 黒褐色土と黄褐色土の混土
4. 黄褐色土 直径 1 cm の黒褐色土塊をごく少量含む。
5. 黒褐色土 直径 0.5 ~ 1 cm の黄褐色土塊をごく少量含む。
6. 黄褐色土 黒褐色土、明黄褐色土を全体的に少量含む。(貼床)
7. 黄褐色土 黒褐色土を全体的にまばらにやや多く含む。(住居セクション 20 層に同じ)
8. 黄褐色土 黒褐色土を全体的に少量含む。

第 138 図 2 区 18 号住居 (2)



第 139 図 2区 18号住居出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 19号住居(付図2 第140～142図 PL80
～82・172 遺物観察表P.504・505)

位置 2区3 - 82 - C～E - 8～10 G

形状 隅丸長方形 重複 無し

規模 長軸 6.44 m 短軸 5.70 m

残存壁高 0.74 m

床面積 34.45 m² 長軸方位 N - 80° - W

埋没土 上層は多量の浅間C軽石・黄褐色粒を含む黒褐色土で、下層は暗褐色土と黄褐色土と浅間C軽石を含む黒色土の混土で埋まっていた。

炉 住居中央やや北東寄りの、P2の南西脇に炉が検出された。まず、長軸1.50 m、短軸1.05 mの隅丸長方形の範囲に灰が広がった状態で検出された。灰の下位には、長軸0.64 m、短軸0.60 m、深さ0.09 mの隅丸長方形の掘り込み内部に白色粘土が貼られており、中央の長径0.3 m、短径0.2 mの不整楕円形の範囲が厚さ0.04 m焼土化していた。焼土部分の南側は高さ0.03 mほどの高まりが粘土で帯状に残っていた。

柱穴 床面で支柱穴P1～P4を検出した。本住居の柱穴については、掘り方との関連性を記録することを目的として、床面調査の際には掘り下げないこととし、記録は掘り方調査時におこなうこととした。床面での支柱穴の規模は、P1～P3は直径0.5 mの円形で、P4は長径0.4 m、短径0.3 mの楕円形であった。

周溝 周溝は、四周の壁に沿って全周していた。規模は概ね幅0.1 m、深さ0.07 mである。

住居内土坑 床面で1基の住居内土坑と1基のピットを検出した。1号土坑は、住居南東隅の南壁際、支柱穴P3の南側で検出した。長軸0.78 m、短軸0.70 m、深さ0.23 mの隅丸方形で、長軸は南壁方向に平行している。南縁が一段下がっている。土坑埋没土上層、西縁床面直上で大型壺(第142図7)が出土した。壺は潰れて出土したが、ほぼ完形に接合できた。

P5は1号土坑の北西側で検出した。長径0.70 m、短径0.54 m、深さ0.32 mの楕円形で、断面

形は筒形である。

床面 床面は平坦で、全体的に硬化していた。

掘り方 四周の壁沿いが幅0.7～1.4 m、深さ0.05～0.13 mほどの溝状にぐるりと掘り込まれていた。P1～P4の支柱穴はこの帯状の掘り込みの内側の平坦面隅に位置する。P4の北側は方形にやや凹んでいた。支柱穴の掘り方は大型で深く、不整ではあるが方形を意識して掘られていた。それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.84×0.70×0.57 m、P2が0.90×0.60×0.61 m、P3が0.80×0.68×0.47 m、P4が0.90×0.56×0.66 mである。

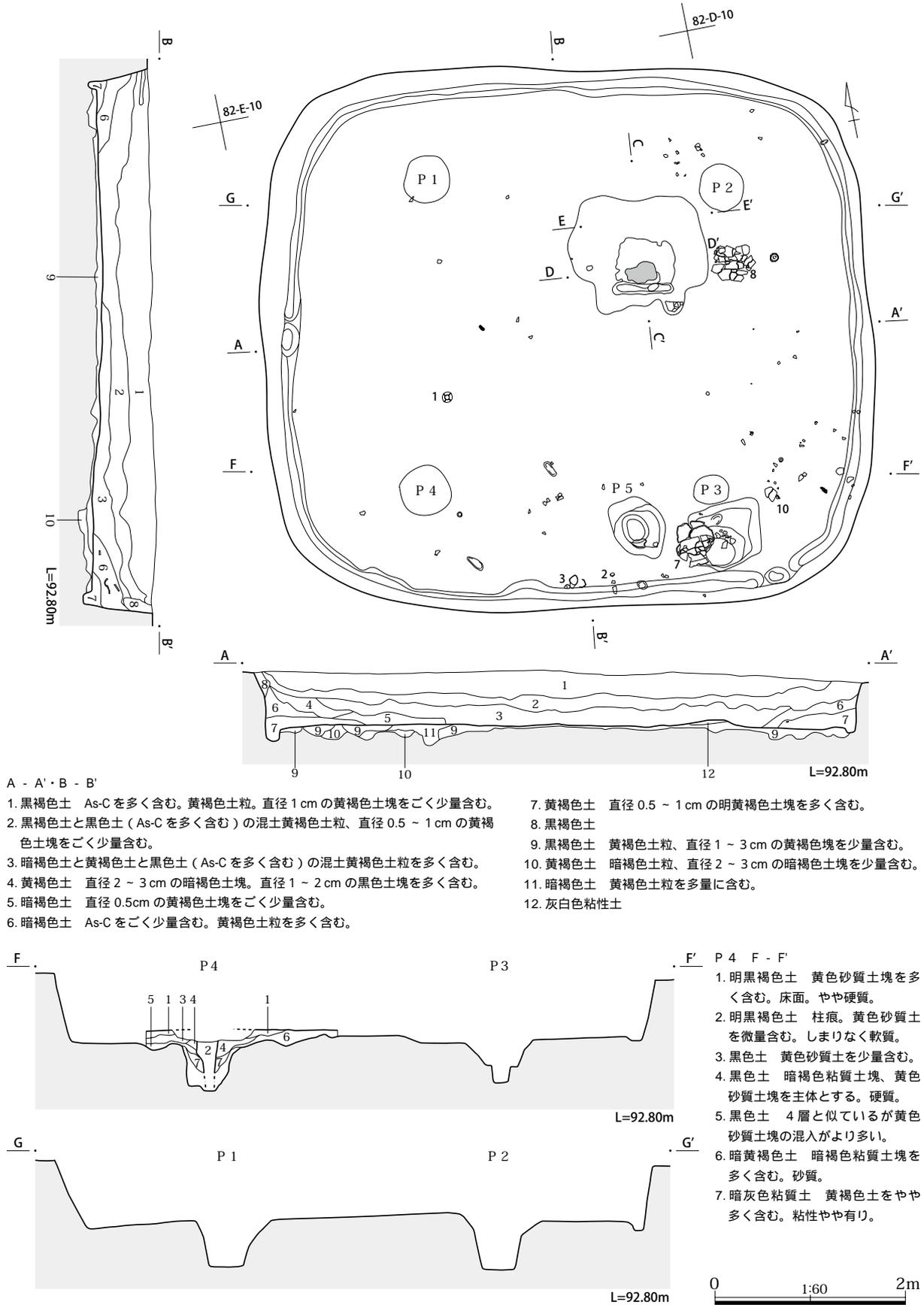
掘り方調査で、掘り方と柱穴の完形を記録する予定であったが、湧水が著しかったこと、断面線を掘り方中央に設定ができなかったことから、目的を達した記録がcaろうじてできたのはP4だけであった。

掘り方を埋めていたのは、黄褐色土粒を含む黒褐色土・暗褐色土である。

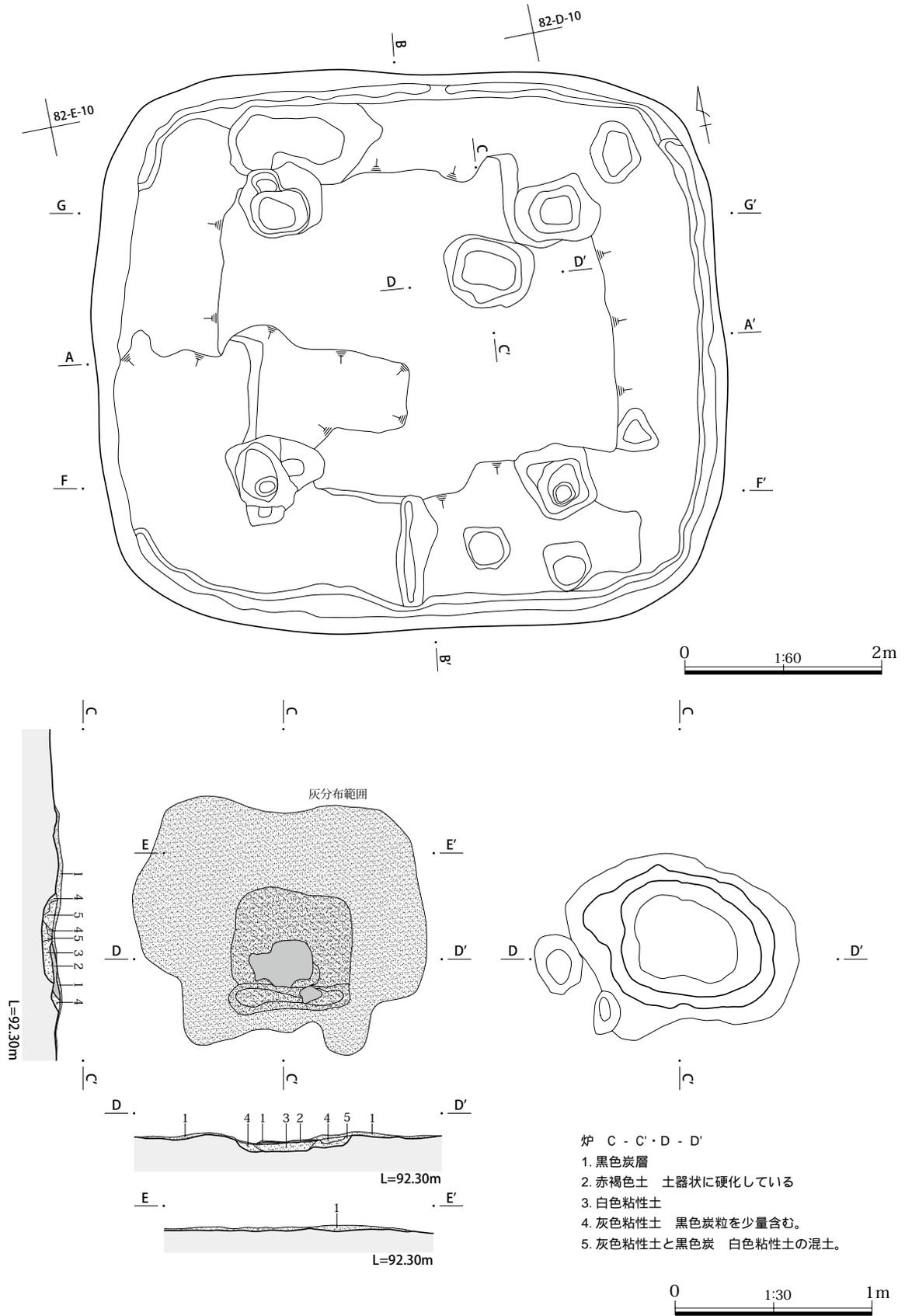
遺物と出土状況 床面近くの遺物はP2周辺と、P4から南東隅にかけての南壁沿いに比較的集中して出土した。土師器小型高坏(第142図1)は中央部床面上7 cmで出土した。高坏口縁部破片(2)は南壁際床面直上で出土した。埴(3)は南壁際床面上11 cmで出土した。大型の壺(8)は炉の東脇床面直上で出土した。S字甕破片(9)は埋没土中、10は南西部の床面直上で出土した。土師器蓋(4)、受け口状の小型甕破片(5)、台付甕台部破片(11)は埋没土中から出土した。

ここで図示した遺物の他、土師器破片330点、礫片3点、礫6点、棒状礫3点が出土している。礫は南壁付近に偏在していた。

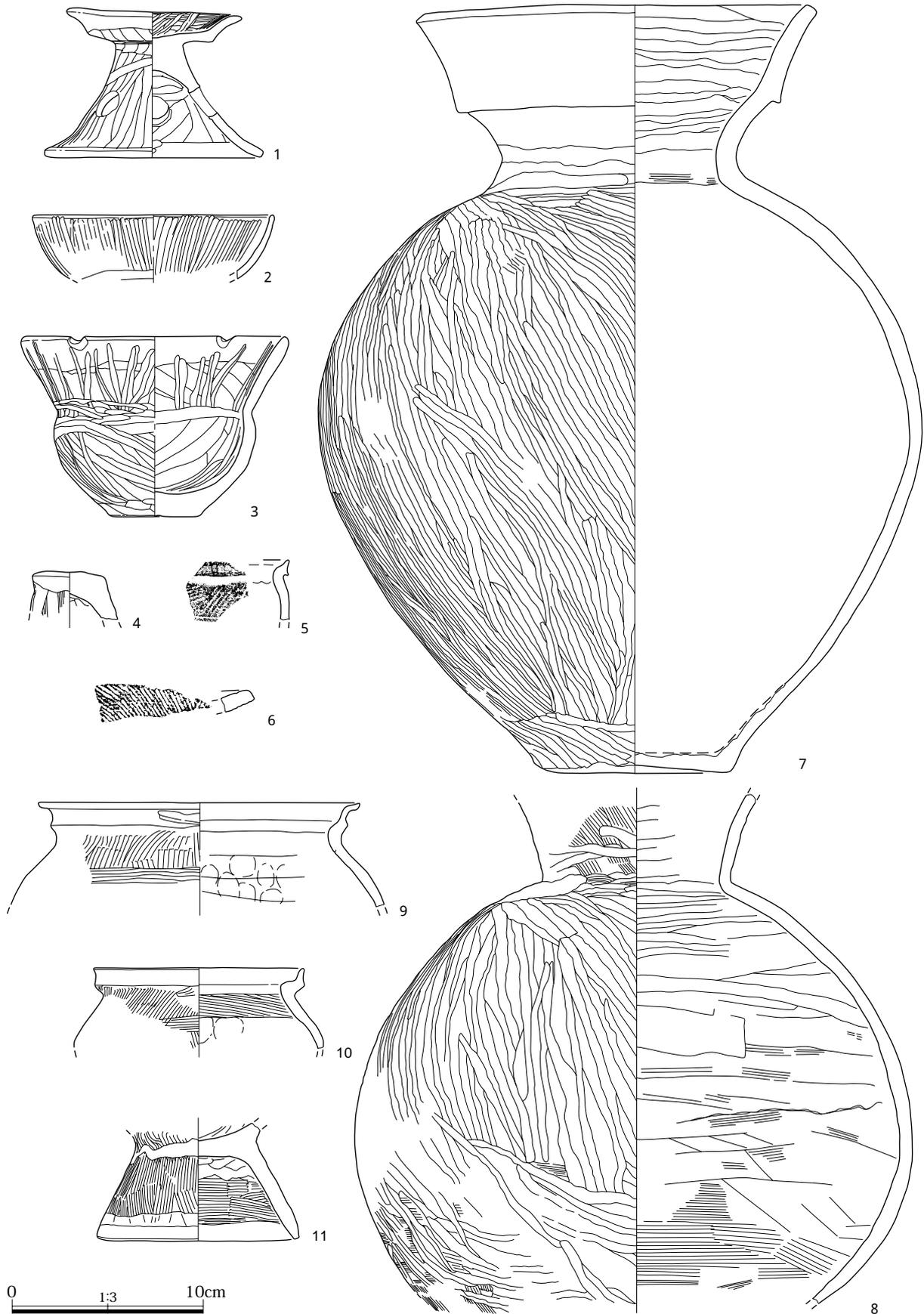
所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居の炉は整った隅丸方形に粘土を貼ったものである。この形態の炉は2区4号住居・5号住居・9号住居・14号住居でも採用されており、他の地床炉とは異なっている。住居の形態や規模との相関関係は今のところ見られない。炉の形態差が何に起因するかも今後の課題となろう。



第140図 2区19号住居(1)



第141図 2区19号住居(2)



第 142 図 2区 19号住居出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 20号住居(付図2 第143～147図 PL83
～85・172～174 遺物観察表P.505・506)

位置 2区3-82-F・G-15・16G

形状 隅丸長方形

重複 4号井戸に先行する。主柱穴P3が壊されている。

規模 長軸 6.40m 短軸 5.8m

残存壁高 0.62m

床面積 28.47m² 長軸方位 N-24°-W
埋没土 上層は多量の浅間C軽石・黄褐色粒を含む
黒褐色土で、下層は黄褐色土含む黒褐色土で埋没。

炉 住居中央やや北寄り。主柱穴P2の南側に炉が
検出された。炉は長径0.76m、短径0.54mの不
整楕円形で、表面は焼土粒・炭粒が混じる程度で焼
土化していなかった。炉は掘り方埋没土内に0.12
mほど掘り込んで、その中に黒褐色土を混じる黄褐
色土を充填して作られていた。炉の南端、長軸側の
縁には棒状礫が設置され、土師器高坏坏部破片(第
146図5)が炉使用面直上で出土した。

柱穴 床面で主柱穴P1～P4を検出した。P3は
4号井戸に壊されており、全形は不明である。いず
れも不整楕円形で、それぞれの規模(長径×短径
×深さ)はP1が0.72×0.58×0.48m、P2が0.86
×0.76×0.46m、P3が不明×0.48×0.40m以上、
P4が0.66×0.50×0.50mである。主柱穴P2内
からは土師器甕2個体(第146図15・第147図
16)が出土した。

周溝 周溝は、四周の壁に沿って全周していた。規
模は概ね幅0.1～0.2m、深さ0.07～0.1mである。
住居内土坑 床面で2基の住居内土坑を検出した。
1号土坑は、住居南東隅の南壁際、主柱穴P3の南
側で検出した。長軸0.44m、短軸0.40m、深さ0.30
mの隅丸方形で、短軸は南壁方向に平行している。
断面は筒形である。土坑埋没土上層、北縁床面直上
で高坏坏部(第146図4)が出土した。また、1号
土坑の東側には長軸0.4m、短軸0.3mの隅丸方形
の凹地があり、土師器台付甕(12)が潰れた状態で
出土した。

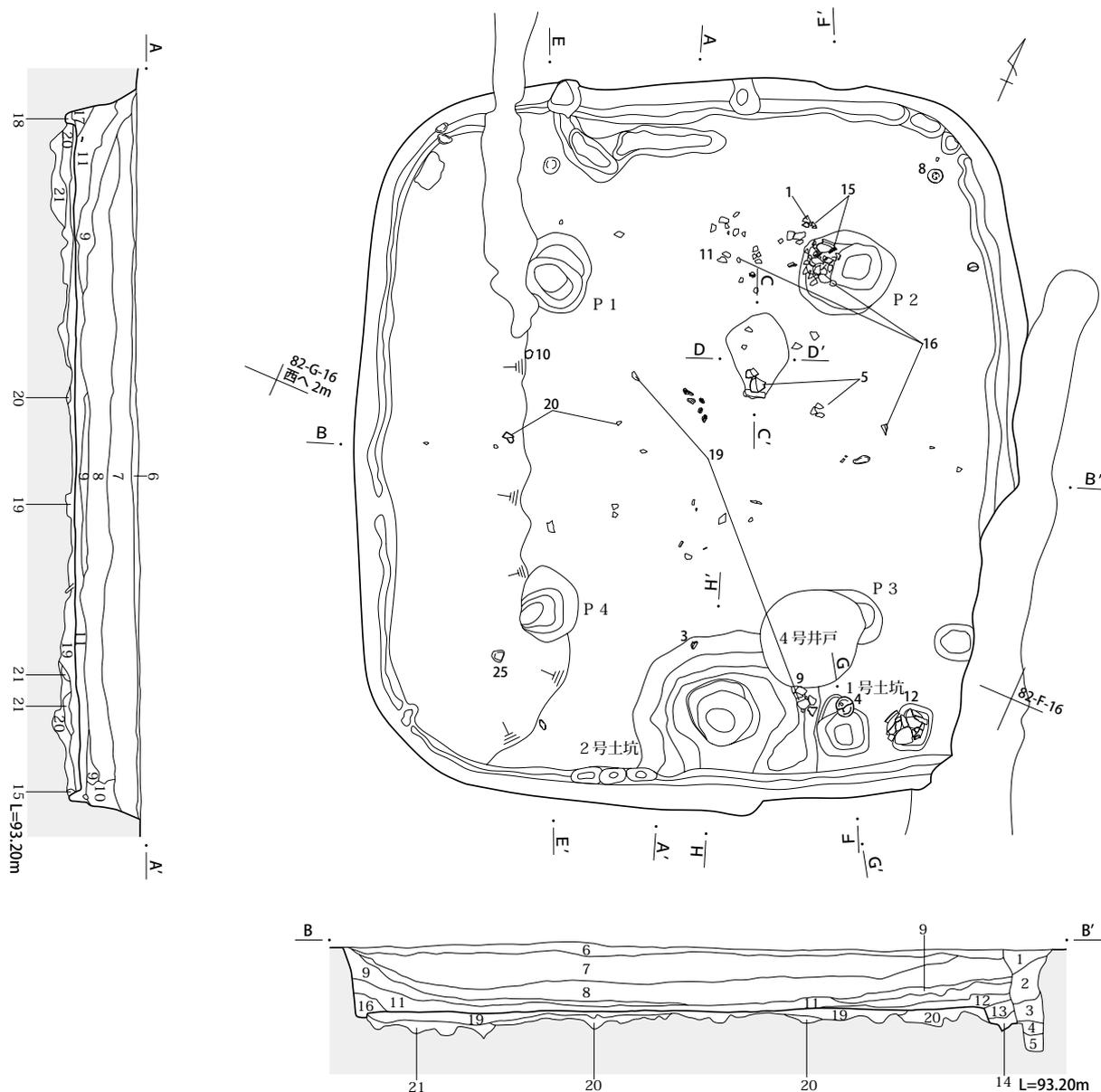
2号土坑は1号土坑の西側で検出した。長径0.60
m、短径0.58m、深さ0.51mの不整円形で、断
面形は筒形である。周囲には南壁際を除く長軸1.3
m、短軸1.0mの範囲で、上幅10～15cm、下幅
20～25cmの周堤が巡っていた。床面調査時は上
記の規模で掘り上げ記録したが、掘り方調査時には
もう少し南側へ掘り広がること、土坑下半部は長軸
が南壁に平行する隅丸方形に掘られていたことが判
明した。東側の周堤直上から土師器壺(9)が出土。
床面 床面は南北方向に入り込んだ2条の地割れで
壊れており、特にP1とP4を結んだ線あたりに北
から入り込んだ地割れの影響で、西側1～3cm低
くなっていた。中央部から東部にかけては平坦で硬
化していた。

掘り方 四周の壁沿いが深さ0.05～0.18mほど
の凹地状に掘り込まれているが、その掘り込みは他
の住居のように定型的でない。主柱穴を結んだ線の
内側はやや高く残されていた。

主柱穴の掘り方は大型で深く、不整ではあるが方
形を意識して掘られていた。それぞれの規模(長径
×短径)および床面からの深さは、P1が1.08×
0.90×0.78m、P2が0.80×0.73×0.79m、P
3が0.58×0.34以上×0.60m、P4が0.64×0.53
×0.67mである。掘り方内に柱がどのように建て
られていたか不明であるが床面で記録した深さはや
や掘り足らなかったと思われる。掘り方面を埋めて
いたのは、黄褐色土粒を含む黒褐色土・暗褐色土で
ある。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は全体に散在して
いたが、そのまま潰れたような形で出土した遺物は、
住居内の柱穴や土坑といった施設内で出土した。

土師器鉢(第146図1)は北部床面上2cmで出
土した。有孔鉢(3)は南部床面上4cmで出土した。
台付甕(11)はP2西側の床面直上で出土した。甕
破片(13)は主柱穴P2埋没土中から出土した。S
字甕(第147図19)は2号土坑東部床面上2cmの
破片と中央部床面上6cmの破片が接合した。台付
甕(20)は中央部床面直上で出土した。台付甕(21・



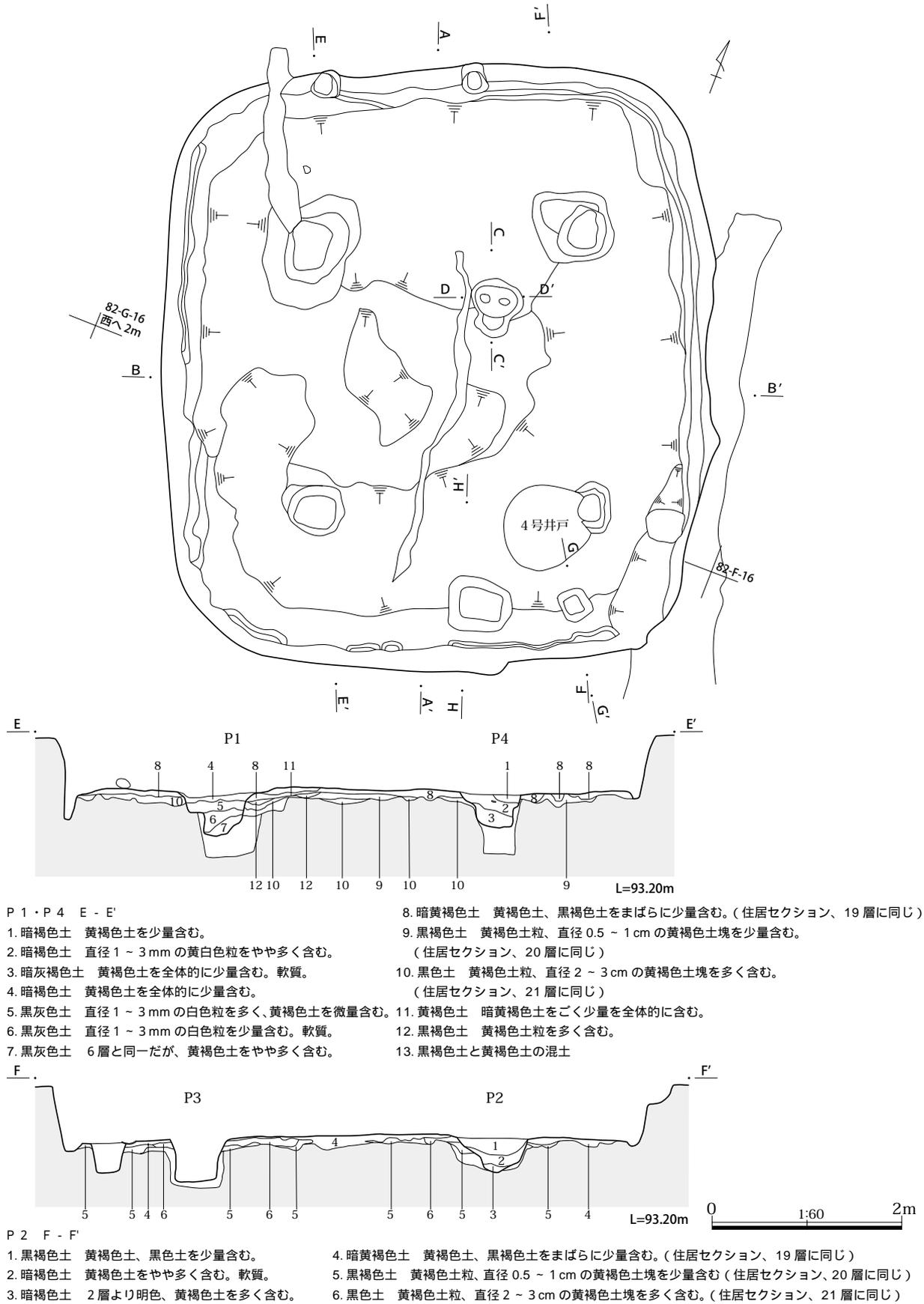
A - A'・B - B'

1. 黒褐色土 6層と同様で地割れによる覆土の崩落。
2. 暗褐色土 1層と同様だが、褐色、黄褐色砂粒を多く含む。砂質。
3. 黒灰色土 黄褐色、黒灰色砂粒を多く含む。砂質。
4. 暗黒褐色土 黄褐色土を少量含む。
5. 暗黄褐色土 黄褐色土（崩落土）の混入が多い。
6. 黒褐色土 As-Cを少量、白色・褐色粒をやや多く含む砂質。
7. 黒褐色土 As-Cを少量、直径10mmほどの白色粒を少量、黄褐色土を少量含む。
8. 暗褐色土 黄白色砂粒、暗黄褐色土を多く含む。洪水層の流れ込みか？
9. 黒灰色土 黒灰色砂粒を主体とした層。黄褐色土を少量含む。
10. 暗褐色土 黄褐色土塊を多く含む。しまり悪く軟質。
11. 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
12. 暗黒褐色土 黄褐色土粒を少量、黒灰色砂粒を微量含む。
13. 暗黒褐色土 黄褐色土粒を微量含む。軟質。
14. 暗褐色土 黄褐色土粒をやや多く含む。
15. 黄褐色土塊 壁の崩落土
16. にぶい黒褐色土 白色粒を少量含む。軟質。
17. 暗褐色土 黄褐色土粒を多く含む。軟質。
18. 暗黄褐色土 黄褐色土粒を主体とした層。
19. 暗黄褐色土 黄褐色土、黒褐色土をまばらに少量含む。
20. 黒褐色土 黄褐色土粒、直径0.5～1cmの黄褐色土塊を少量含む。
21. 黒色土 黄褐色土粒、直径2～3cmの黄褐色土塊を多く含む。

0 1:60 2m

第143図 2区20号住居(1)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第144図 2区20号住居(2)

22・23) は P 1 埋没土中から出土した。砥石 (25) は南西部 P 4 南側床面上 3 cm で出土した。土師器鉢 (第 146 図 2)、高坏 (6・7)、台付甕 (14)、甕 (第 147 図 17)、S 字甕 (18)、台付甕台部 (24)、砥石 (26) は埋没土中から出土した。

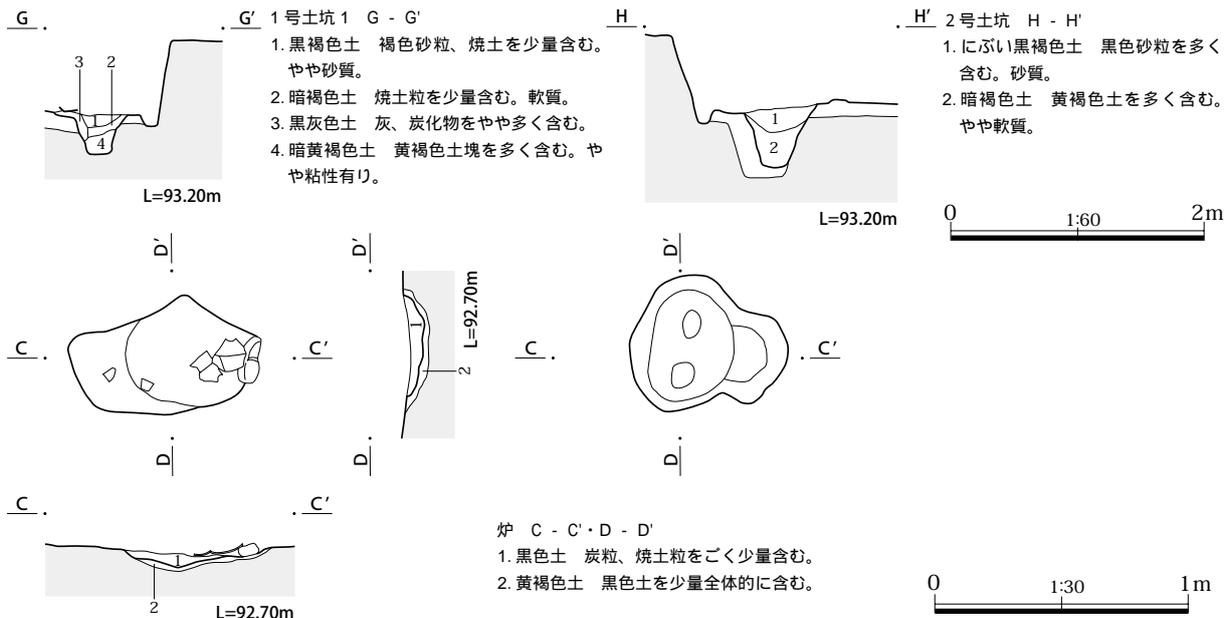
ここで図示した遺物の他、縄文土器 6 点、土師器破片 669 点、磁器 1 点、剥片 3 点、礫片 4 点、礫 5 点、棒状礫 3 点が出土している。礫は南壁付近に偏在していた。縄文土器のうち 2 点は、遺構外遺物の項で報告した (第 232 図 25・第 233 図 38)。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居は本遺跡で検出された住居とは形態上、次の 2 点で異なっていることが特筆される。本住居は長軸短軸比が 1.10 の正方形に近い形態をもつが、支柱穴を結んだ形は明らかに長方形である。長軸短軸比が 1.13 で同様な形態を示す 2 区 19 号住居では、支柱穴を結んだ形が正方形である。本遺跡では、長方形住居はほとんど長軸を東西にとっているが、本住居は南北が長軸方向になっており、長軸方向に炉と壁際の土坑が配置されている。このような配置になるのは本住居だけであり、他の住居は短軸方向に炉と壁際の土坑が配置されている。以上

のように本住居は他の住居と異なっているが、これも長方形から正方形への住居形態の変遷過程の一端を示すのかもしれない。

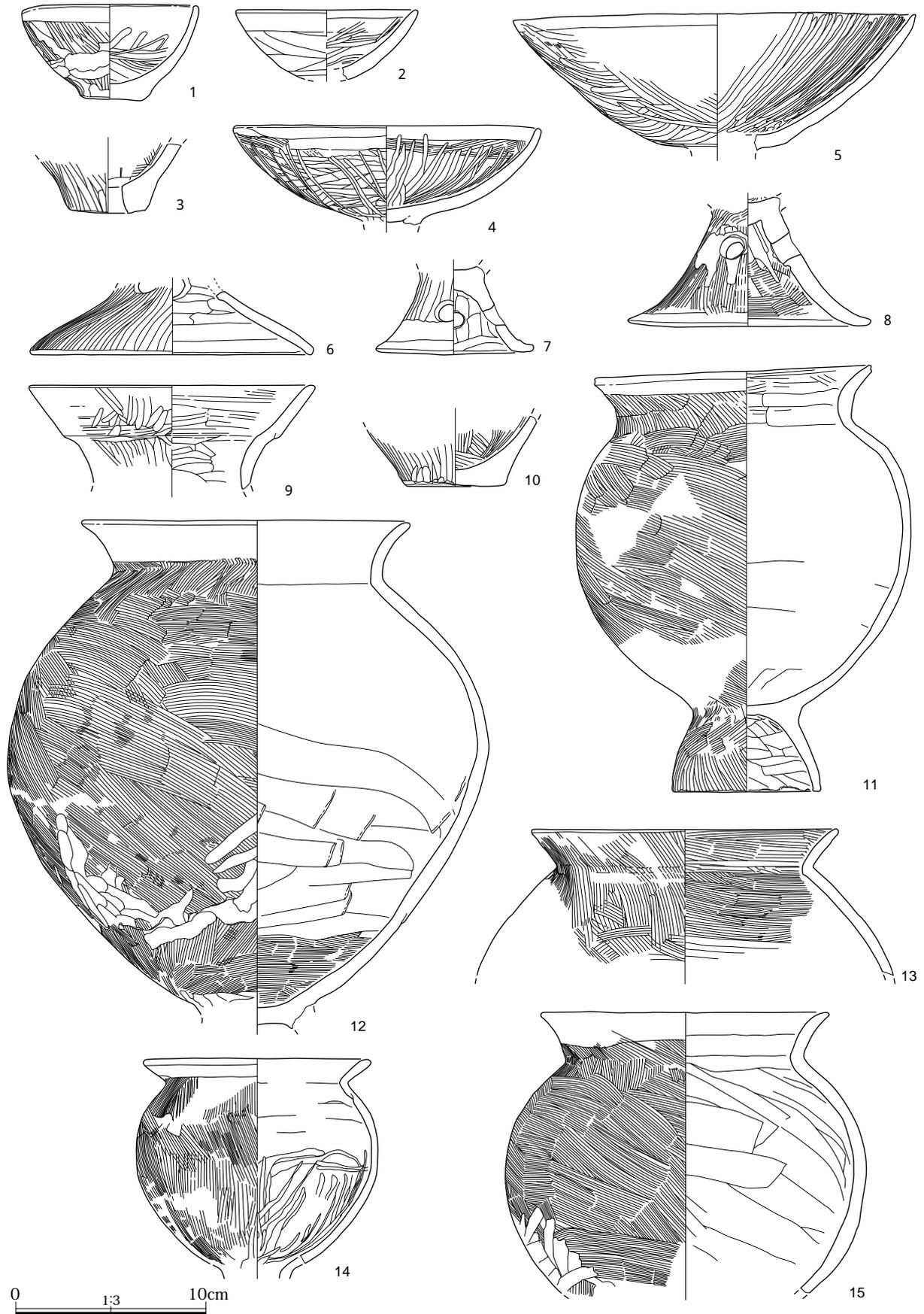
2 号土坑は本遺跡の住居に施設されている南壁沿いの土坑であるが、周囲に堤状の盛土が巡り土坑を囲っており特筆される。この形態の土坑は 1 区 27 号住居に採用されているのみであり、本遺跡では少ない。一方、2 区 1 号住居・3 号住居・4 号住居・17 号住居では周堤ではなく、床面を一段テラス状に掘り凹めて南壁沿いの 2 基の土坑を一体化させるような形態をとっていた。両者とも住居東南隅の土坑の機能を考える上で重要な遺構と思われる。

P 2 からは内部に落ち込むような形で甕 (第 146 図 15) が出土した。本遺跡では支柱穴内から土器が出土する例が多いが、本住居や 2 区 3 号住居・18 号住居のように破片が落ち込むように出土する場合と、2 区 2 号住居のように完形の (あるいは完形に復元できる) 土器が出土する場合があった。前者は埋没過程で入り込む可能性があるが、後者については人為的に柱を抜き取り後、入れた可能性を考えなくてはならないだろう。他遺跡の例を見て今後検討する必要がある。

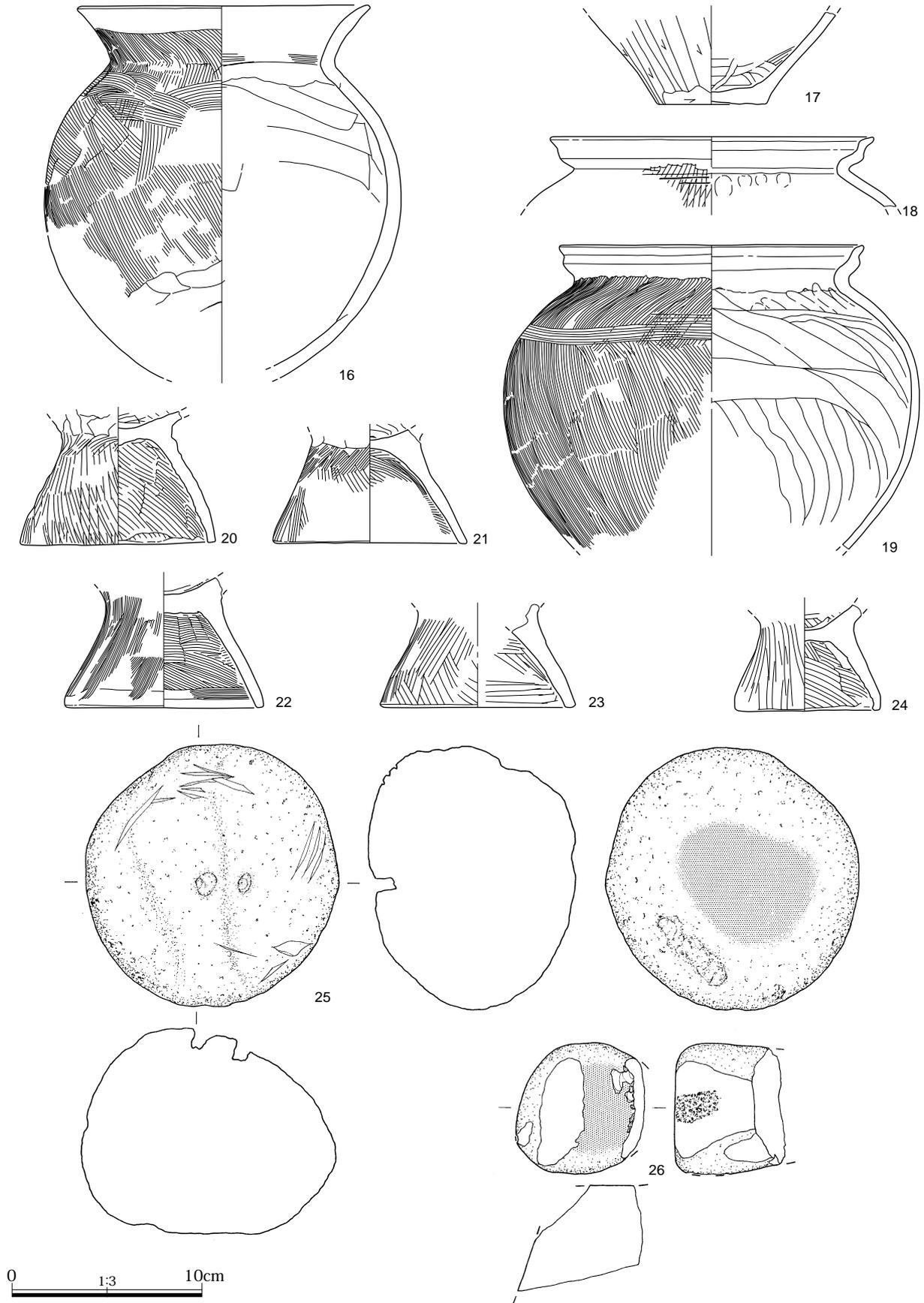


第 145 図 2 区 20 号住居 (3)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第146図 2区20号住居出土遺物(1)



第147図 2区20号住居出土遺物(2)

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区 21号住居

(付図2 第148図 PL86・174 遺物観察表 P.506)

位置 2区3 - 82 - K・L - 19・20 G

形状 隅丸正方形 重複 無し

規模 長軸 4.50 m 短軸 4.40 m

残存壁高 0.16 m

床面積 17.68 m² 長軸方位 N - 46° - W
埋没土 上層は多量の浅間C軽石・少量の黄褐色粒を含む黒褐色土で、下層は浅間C軽石を少量含む黒色土で埋まっていた。

炉 炉は検出されなかった。

柱穴 埋没土の識別が困難であったため、柱穴は床面で検出できなかった。掘り方で西側2本の主柱穴P1・P2を検出した。北東部には小穴がいくつか検出されたが、対角線上ではないので、主柱穴とは考えなかった。東側は掘り方が深くなっているために、主柱穴を検出するのは困難であった。

P1は長径0.62 m、短径0.45 m、深さ0.22 mの不整楕円形で、隅丸方形に掘られていたものが北側の掘り方調査で削ってしまった可能性もある。P2は長径0.23 m、短径0.16 m、深さ0.09 mの小型楕円形である。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 住居内土坑は検出されなかった。

床面 床面は平坦であるが、あまり硬化していなかった。

掘り方 四周の壁沿いを帯状に掘り込んでいる。特に北側と東側は幅広く掘られているが、定型的ではない。底面に鋤痕跡の列の可能性のある筋状の掘削痕が見られる。南西部はやや高く残されていた。

掘り方を埋めていたのは、浅間C軽石を多く含む黒色土、黄褐色土粒を含む暗褐色土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は少ない。掘り方埋没土から土器が出土した。土師器器台(第148図1)は北西隅掘り方底面上2 cmで、高坏(2)は東壁際掘り方底面上12 cm、高坏(3)も東壁際掘り方底面上4 cm、台付甕(4)は東壁際27 cmで出土した。

ここで図示した遺物の他、縄文土器1点、土師器破片6点、礫1点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本遺構は柱穴や炉が見つかっていないことから、通常の竪穴住居ではない可能性が高い。

2区 22号住居(付図2 第149・150図 PL86・87・174・175 遺物観察表 P.506・507)

位置 2区3 - 82 - J・K - 20 G

形状 西半分が低地に切られて残存していなかったが、主柱穴の位置から隅丸長方形と推定される。

重複 2・3区低地に先行する。西隣の21号住居とは近接しており、新旧関係があると推定される。

規模 長軸(4.90 m) 短軸(3.10 m)

残存壁高 0.34 m

床面積 計測不能 長軸方位 N - 57° - W
埋没土 上層は多量の浅間C軽石・少量の黄褐色粒を含む黒色土で、下層は少量の浅間C軽石と黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

炉 残存部分では炉は検出されなかった。

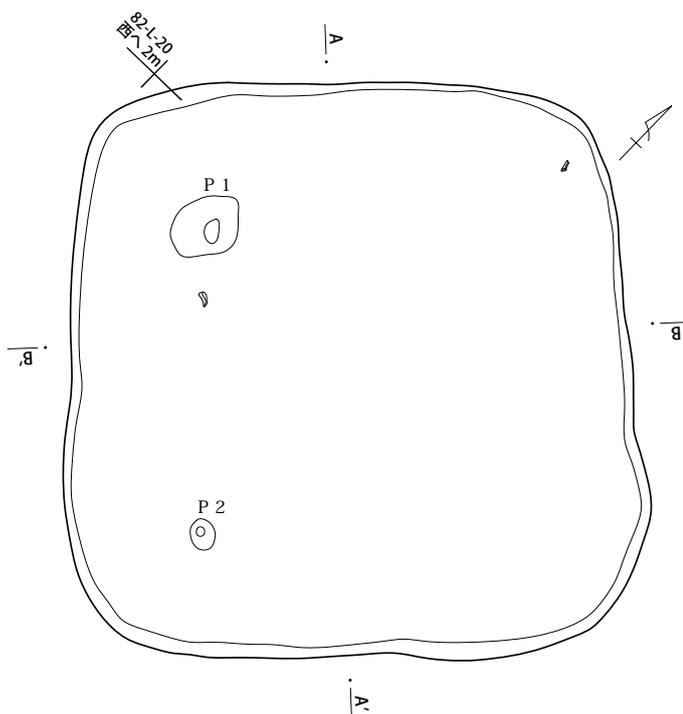
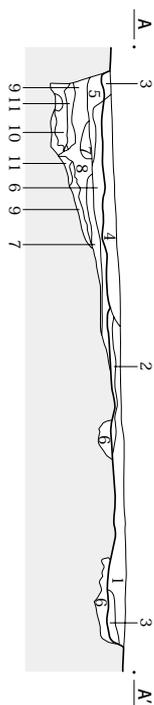
柱穴 北西隅を除く3本の主柱穴P1~P3を床面で検出した。いずれも不整円形で、それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.56×0.42×0.37 m、P2が0.60×0.57×0.39 m、P3が0.62×0.58×0.15 mである。P2南東隅埋没土上層で土師器甕口縁部破片(第150図4)が出土した。

周溝 周溝は検出されなかった。

住居内土坑 床面で2基の住居内土坑を検出した。

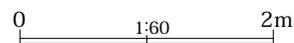
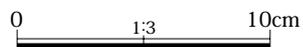
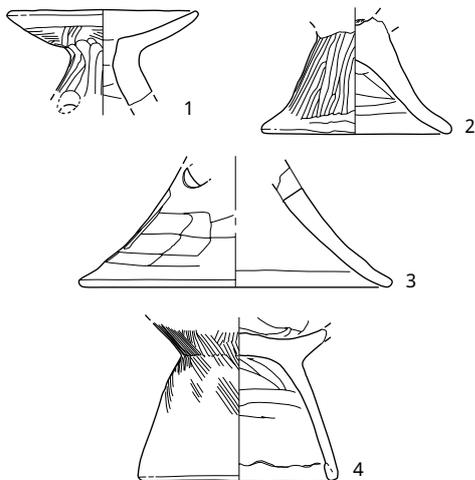
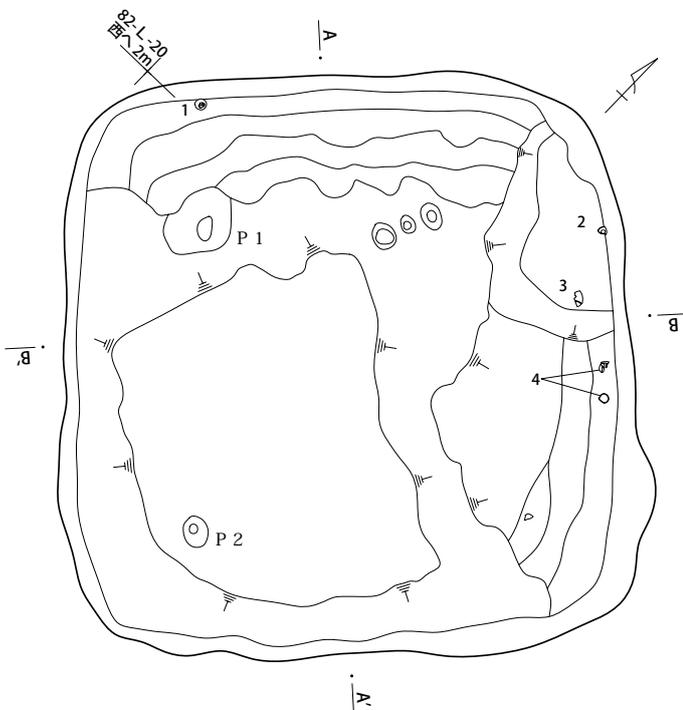
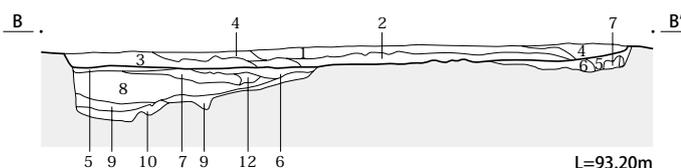
1号土坑は、住居南東隅の南壁際、主柱穴P2の東側で検出した。長軸0.68 m、短軸0.53 m、深さ0.23 mの不整隅丸方形で、長軸は南壁方向に平行している。断面は浅い箱形で、土坑内の南東隅は深くなっていた。その深くなった底面から土師器壺破片が出土した。また土坑埋没土上層、東縁床面直上で完形の甕(第150図6)が潰れて出土した。

2号土坑は1号土坑の西側で検出した。長径0.68 m、短径0.56 m、深さ0.27 mの不整楕円形で、断面形はボール形である。北側縁床面上2 cmから



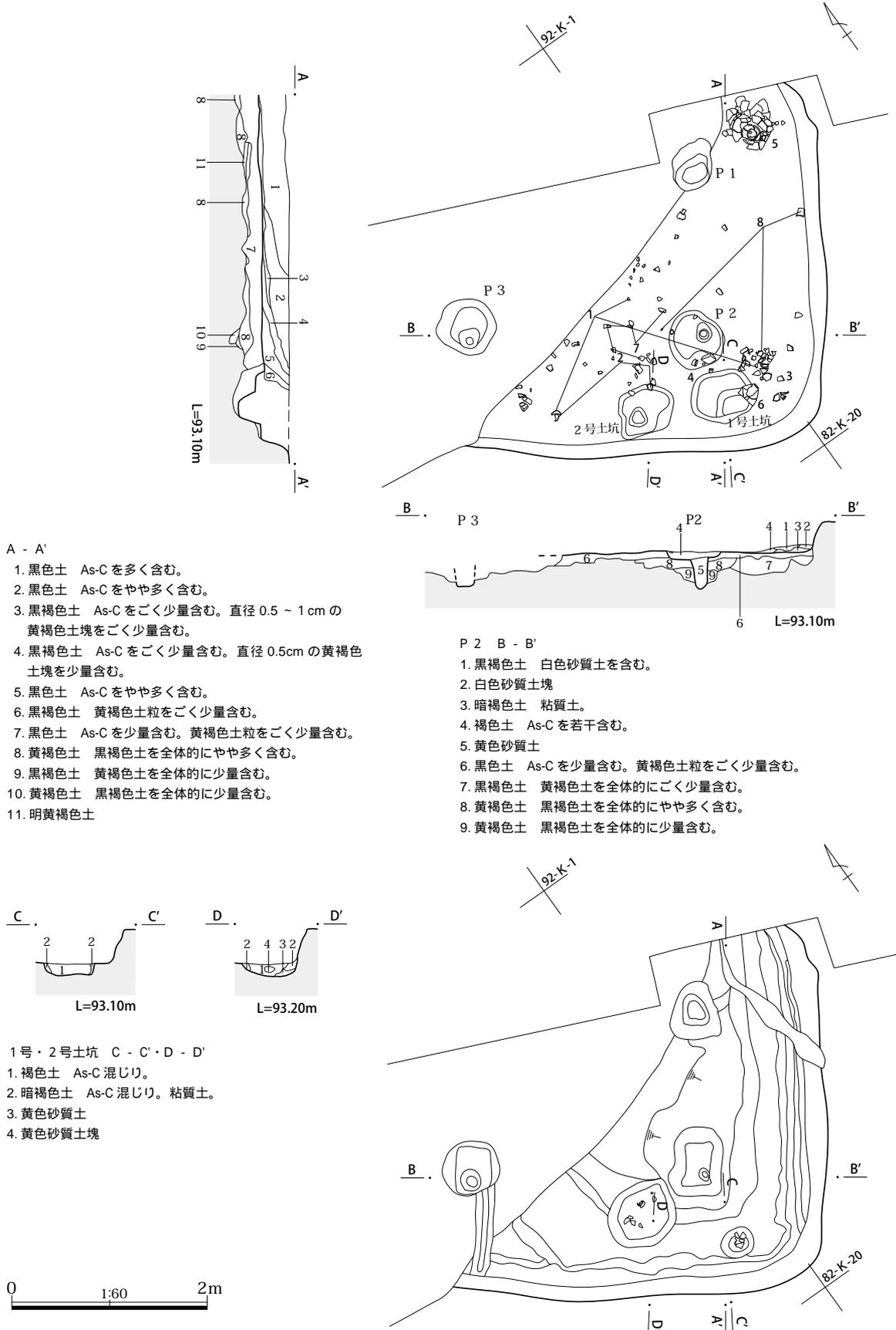
A - A'・B - B'

1. 黒褐色土 As-Cを多く含む。直径1～2cmの黄褐色土塊を少量含む。
2. 黒色土 As-Cを少量含む。
3. 黒褐色土 As-Cをごく少量含む。黄褐色土粒、直径1～2cmの黄褐色土塊をごく少量含む。
4. 黒色土 As-Cを多く含む。
5. 黒色土 As-Cを多く含む。黄褐色土粒をごく少量含む。
6. 黒色土 As-Cを少量含む。直径2～3cmの黄褐色土塊を少量含む。
7. 黒褐色土 As-Cと黄褐色土塊。
8. 黒色土 As-Cを多く含む。
9. 暗褐色土 少量のAs-Cと黄色塊を含む。
10. 褐色土 黄色砂質土に少量のAs-Cが混入。
11. 黄褐色土 黄色砂質土に少量の褐色土が混入。
12. 褐色土 粘質の褐色土にAs-Cを少量含む。



第 148 図 2区 21号住居と出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物



A - A'

1. 黒色土 As-Cを多く含む。
2. 黒色土 As-Cをやや多く含む。
3. 黒褐色土 As-Cをごく少量含む。直径0.5～1cmの黄褐色土塊をごく少量含む。
4. 黒褐色土 As-Cをごく少量含む。直径0.5cmの黄褐色土塊を少量含む。
5. 黒色土 As-Cをやや多く含む。
6. 黒褐色土 黄褐色土粒をごく少量含む。
7. 黒色土 As-Cを少量含む。黄褐色土粒をごく少量含む。
8. 黄褐色土 黒褐色土を全体的にやや多く含む。
9. 黒褐色土 黄褐色土を全体的に少量含む。
10. 黄褐色土 黒褐色土を全体的に少量含む。
11. 明黄褐色土

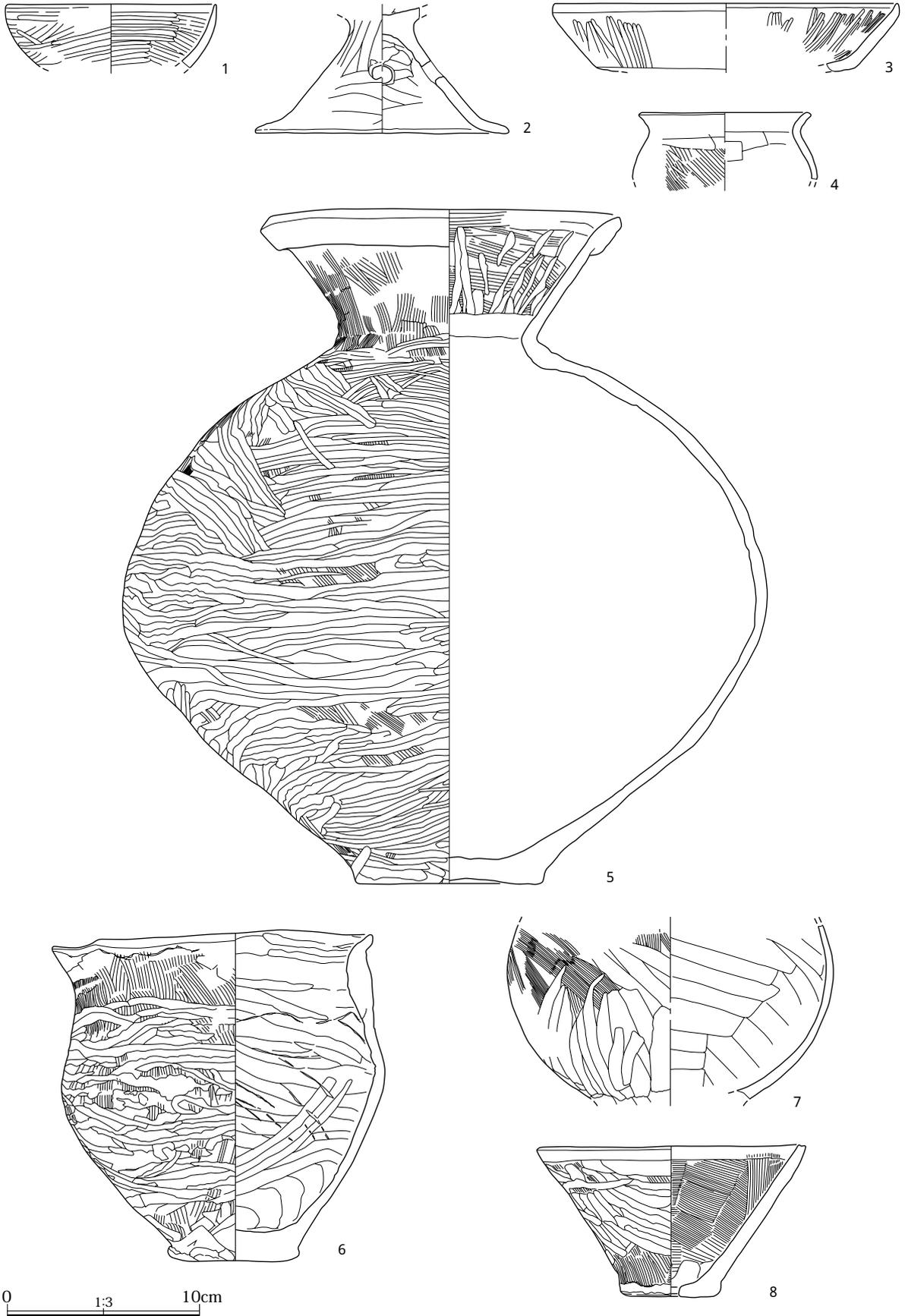
P 2 B - B'

1. 黒褐色土 白色砂質土を含む。
2. 白色砂質土塊
3. 暗褐色土 粘質土。
4. 褐色土 As-Cを若干含む。
5. 黄色砂質土
6. 黒色土 As-Cを少量含む。黄褐色土粒をごく少量含む。
7. 黒褐色土 黄褐色土を全体的にごく少量含む。
8. 黄褐色土 黒褐色土を全体的にやや多く含む。
9. 黄褐色土 黒褐色土を全体的に少量含む。

1号・2号土坑 C - C'・D - D'

1. 褐色土 As-C混じり。
2. 暗褐色土 As-C混じり。粘質土。
3. 黄色砂質土
4. 黄色砂質土塊

第149図 2区22号住居



第150図 2区22号住居出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

台付甕(7)が出土し中央部床面直上で出土した破片と接合した。

床面 床面は平坦であるが、あまり硬化していなかった。

掘り方 四周の壁沿いを幅0.45～0.6m、深さ0.1mほど帯状に掘り込んでいる。掘り方面の精査では主柱穴は隅丸方形に掘られていたことが判明した。また、主柱穴P2の南西脇、2号土坑の北側に、長径0.8m、短径0.65m、深さ0.19mの楕円形の3号土坑を検出した。埋没土中から土師器破片が出土した。また、P3と南壁をつなぐように、幅0.17m、長さ0.9m、深さ0.06mの小溝を検出した。方向は南壁と直交する。

掘り方面を埋めていたのは、浅間C軽石・黄褐色土粒を少量含む黒色土、黄褐色土粒を含む暗褐色土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は全体に多く出土した。土師器高坏(第150図1)は中央部や南東隅、南壁沿いの床面直上出土の破片が接合した。高坏脚部(2)は南壁周辺床面上3～6cmで出土した破片が接合した。3は壺の口縁部と推定されるが、1号土坑北東縁床面直上で出土した。大型壺(5)は北東隅床面直上で潰れて出土したが、完形に接合できた。有孔鉢(8)は東壁際床面直上の破片、1号土坑北東縁床面直上の破片、2号土坑北側の床面直上の破片が完形に接合された。

ここで図示した遺物の他、土師器破片91点、礫1点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。P3の南側に検出された小溝は、根太を据えた痕跡と考えられる。

2区23号住居(付図2 第151・152図 PL87・88・175 遺物観察表P.507)

位置 2区3-82-J-17G・K-16・17G

形状 隅丸正方形 重複 無し

規模 長軸 4.57m 短軸 4.50m

残存壁高 0.12m

床面積 18.03m² 長軸方位 N-48°-W

埋没土 上層は多量の浅間C軽石を含む黒褐色土で、下層は白色土粒を少量含む黒褐色土で埋まっていた。

炉 住居中央北寄り、主柱穴P1の南東側に炉が検出された。炉は焼土化した部分が2カ所検出された。炉西側は長径0.54m、短径0.28mの不整楕円形で、表面は厚さ0.10mが焼土化していた。東側は長径0.45m、短径0.33m、深さ0.07mの不整楕円形の焼土である。炉は掘り方埋没土内に0.10mほど掘り込んで、その中に焼土粒を混じる黒褐色土を充填してそのまま炉床としている。

柱穴 埋没土の識別が困難であったため、柱穴は床面で検出できなかった。掘り方面で主柱穴P1～P4を検出した。いずれも不整楕円形で、それぞれの規模(長径×短径×深さ)はP1が0.30×0.27×0.28m、P2が0.45×0.32×0.34m、P3が0.36×0.33×0.35m、P4が0.30×0.27×0.23mである。底面は柱根が残っていた。

周溝 周溝は検出されなかった。

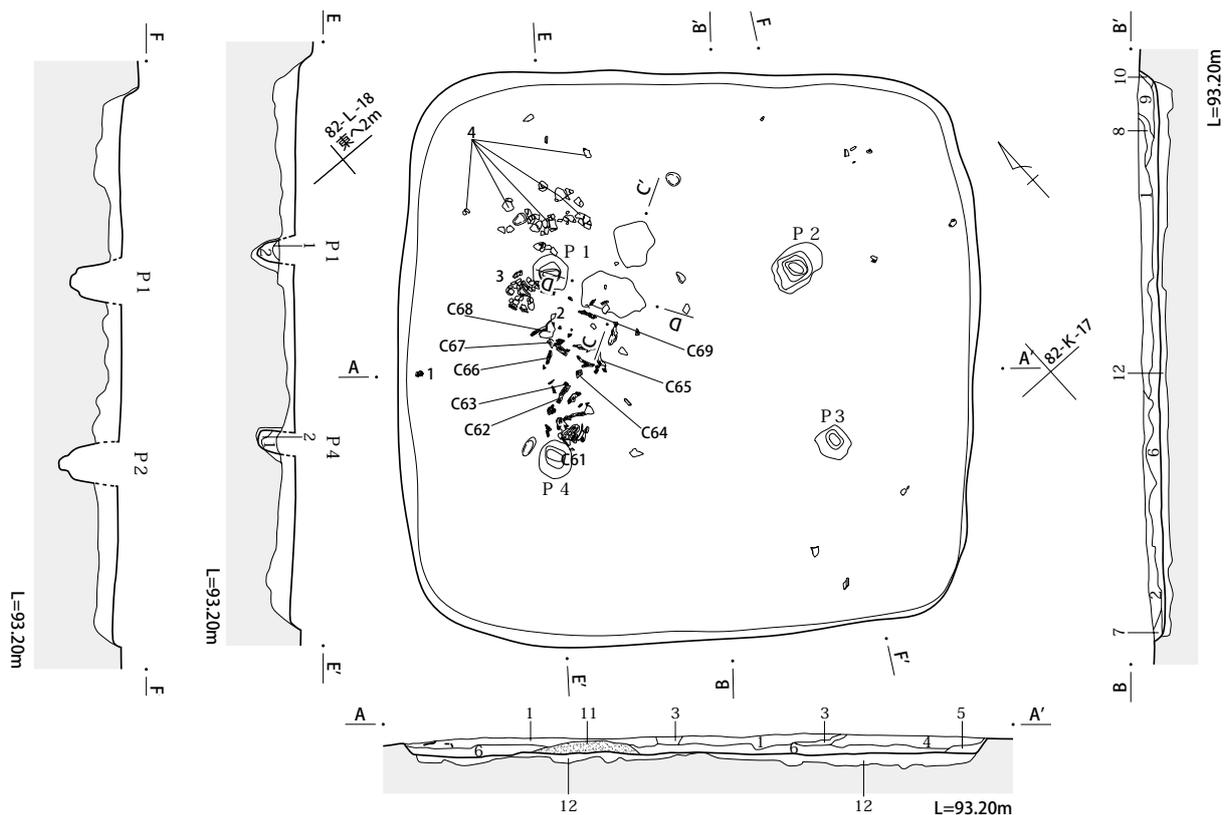
住居内土坑 住居内土坑は検出されなかった。

床面 床面は平坦であるが、あまり硬化していなかった。主柱穴P1とP4の間にはまとまって炭化材が出土し、一部には厚さ0.1mの灰が堆積していた。炭化材は9点を樹種同定した結果、クヌギ節8点、コナラ節1点という結果であった。

掘り方 四周の壁沿いを幅0.7～1.0m、深さ0.04～0.06mほどの帯状に掘り込んでいる。主柱穴は中央に掘り残された高い部分にある。

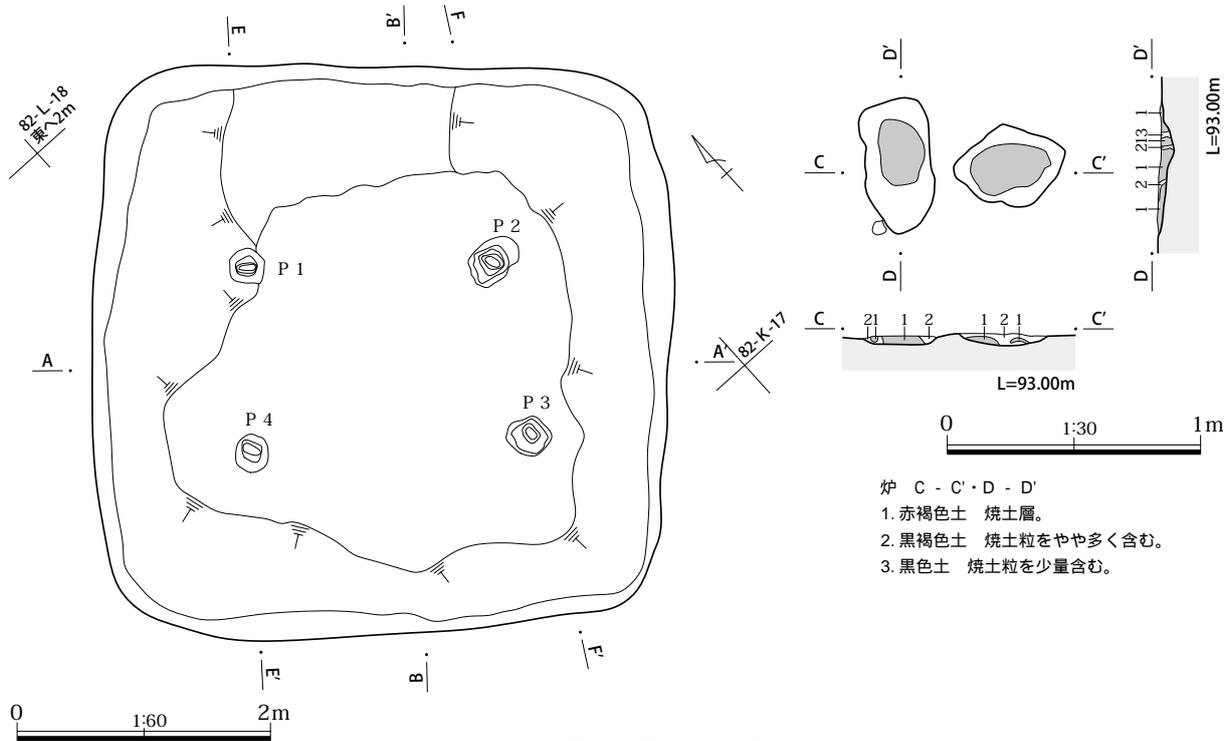
掘り方面を埋めていたのは、浅間C軽石・暗褐色土塊を含む黒褐色土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は炉の周辺で多く出土し、東壁沿いにも散在していた。土師器甕底部(第152図1)は北西部壁際床面上5cmで、高坏脚部(2)は北西部床面上4cmで出土した。S字甕(3)はP1西縁床面直上で、S字甕(4)は北部床面上2cmで出土した。また、炉南縁焼土上面で使用痕ある剥片が1点出土したが、混入であるので、



A - A'・B - B'・E - E'・F - F'

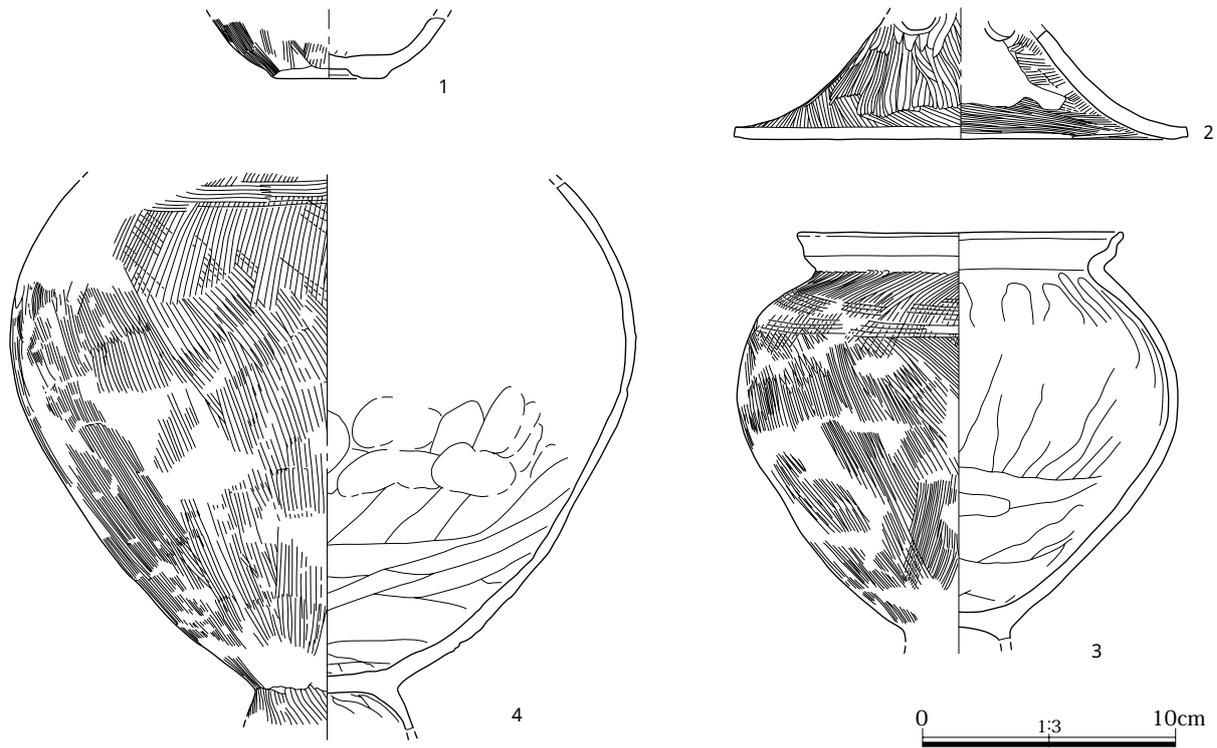
1. 暗黒褐色土 As-C 軽石をやや多く含む。しまり良い。
2. 暗黒褐色土 1と似ているが、C 軽石の粒が大きい（1～4mm ほど）
3. 暗褐色土 C 軽石を微量含む。やや軟質。
4. 暗褐色土 As-C 軽石をやや多く、褐色砂粒を多く含む。
5. 暗褐色土 4層と似ているが、軽石を含まない。
6. 黒褐色土 白色粒を少量含む。軟質。
7. 暗褐色土 4層と似ているが、軽石を含まない。
8. 暗褐色土 As-C を微量含む。暗黄褐色土を少量含む。
9. 暗褐色土 As-C 軽石をやや多く、褐色砂粒を多く含む。
10. 暗褐色土 4層と似ているが、軽石を含まない。
11. 灰層
12. 黒褐色土 As-C 及び白色軽石含む。暗褐色土塊混入。



炉 C - C'・D - D'

1. 赤褐色土 焼土層。
2. 黒褐色土 焼土粒をやや多く含む。
3. 黒色土 焼土粒を少量含む。

第 151 図 2区 23号住居



第152図 2区23号住居出土遺物

遺構外遺物の項で報告した(第236図87)。

ここで図示した遺物の他、縄文土器1点、土師器破片57点、礫片2点、礫2点が出土している。
所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。本住居は主柱穴を結んだ形が長方形であるのに対して住居全体は正方形で、対角線上に柱穴が位置しない。竪穴住居が長方形から正方形になっていく過程での一側面を示しているのかもしれない。

2区24号住居(付図2 第153図 PL88・89)

位置 2区3-82-J-18・19 G・K-18 G

形状 不整長方形

重複 3号井戸に先行する。

規模 長軸 4.42 m 短軸 3.10 m

残存掘り方壁高 0.01 m

床面積 12.63 m²

長軸方位 N-34°-E

埋没土 埋没土は不明である。

炉 住居北部に炉の痕跡と推定される焼土塊・焼土

粒を多く含む暗褐色土の凹地を検出した。長径0.44 m、短径0.42 m、深さ0.04 mの不整形円形である。

柱穴 主柱穴は検出されなかった。

周溝 周溝は検出されなかった。

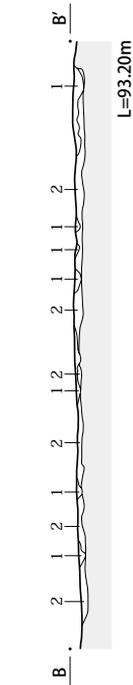
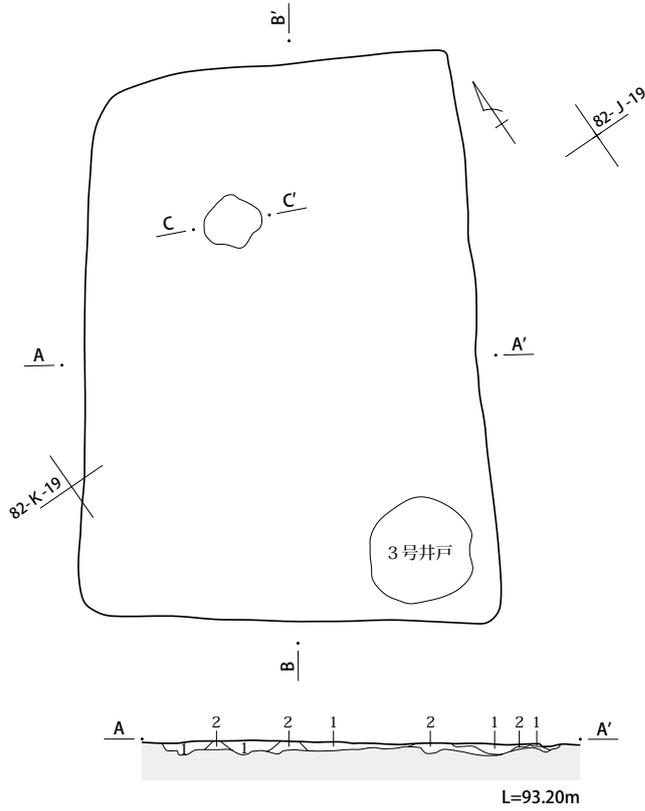
住居内土坑 住居内土坑は検出されなかった。

床面 床面はすでに失われていた。

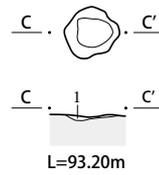
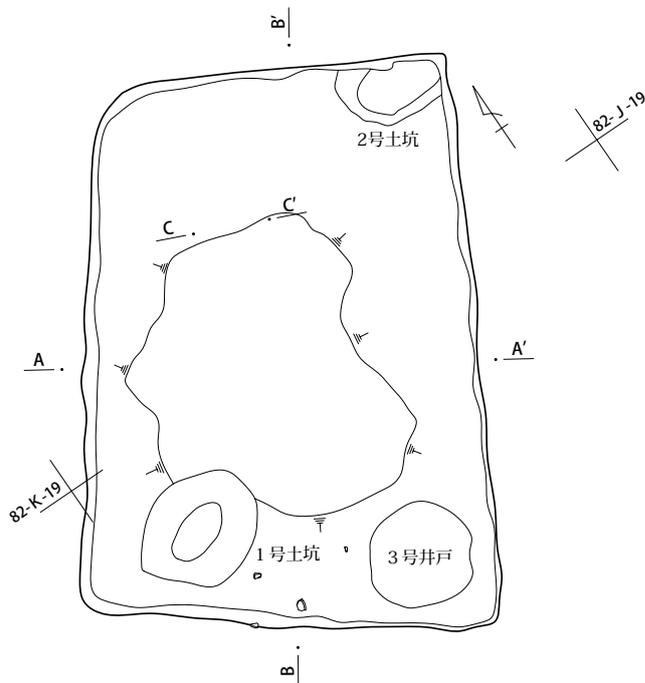
掘り方 四周の壁沿いを深さ0.01～0.06 mほど掘り込んでいる。幅は一様でなく、北東部は幅が広い。掘り方面で2基の床下土坑を検出した。1号土坑は南西隅にあり長径1.06 m、短径0.86 m、深さ0.12 mの楕円形である。2号土坑は北東隅の壁際にあり、長径0.82 m、短径0.50 m、深さ0.07 mの凹地状である。掘り方面を埋めていたのは、浅間C軽石を含む黒褐色土・暗褐色土である。

遺物と出土状況 遺物は10点出土したのみである。このうち5点は埋没土中から出土した土師器壺・甕小破片である。残りの5点は南壁中央部で出土した縄文土器5点である。このうち2点の縄文土器は遺構外出土遺物の項で報告(第232図11・13)した。

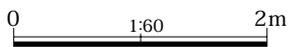
2. 2・3区微高地部の遺構と遺物



- A - A'・B - B'
1. 黒色土 As-C を多く含む。
 2. 暗褐色土 As-C をごく少量含む。



- 炉 C - C'
1. 暗褐色土 焼土粒、直径 0.5cm の焼土塊を少量含む。



第 153 図 2 区 24 号住居

第5章 2・3区の遺構と遺物

所見 出土遺物から古墳時代初頭の竪穴住居の痕跡と考えられる。表土除去後の遺構確認で、すでに床面より下がった状態にあり、かろうじて平面形と炉の痕跡を検出したにとどまる。

南壁付近から縄文土器が出土したことから、周辺の縄文土器および縄文時代以降の確認調査を実施した。

2区 25号住居 (付図2 第154図 PL89)

位置 2区3-82-H-18・19 G・I-19 G

形状 隅丸長方形

重複 無し

規模 長軸 3.10 m 短軸 2.85 m

残存掘り方壁高 0.07 m

床面積 7.72 m²

長軸方位 N - 48° - W

埋没土 埋没土は不明である。

炉 住居中央よりやや南東寄りに炉の痕跡と推定される焼土塊・焼土粒を多く含む暗褐色土の凹地を検出した。長径 0.52 m、短径 0.40 m、深さ 0.03 m

の不整円形である。

柱穴 主柱穴は検出されなかった。

周溝 周溝は検出されなかった。

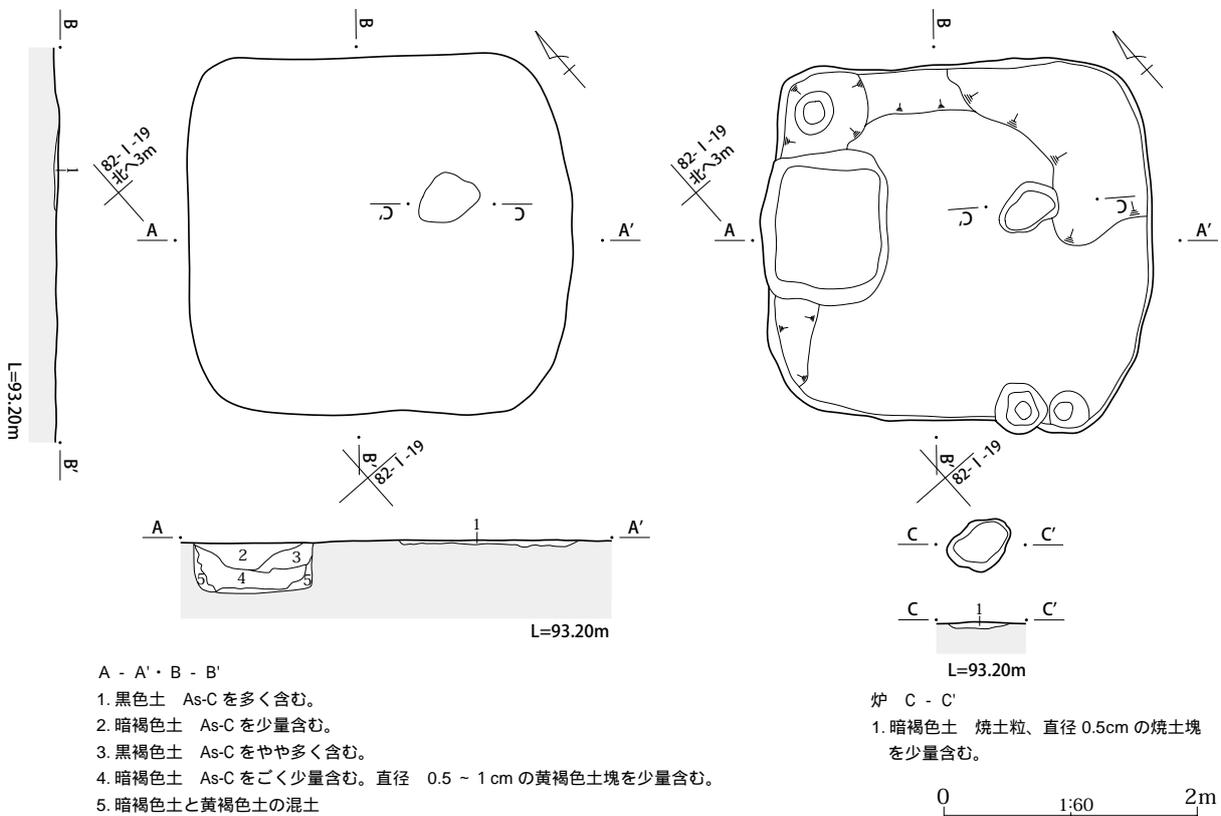
住居内土坑 住居内土坑は検出されなかった。

床面 床面はすでに失われていた。

掘り方 北西から北東壁沿いを深さ 0.02 ~ 0.10 mほど掘り込んでいる。幅は一様でなく、東隅は幅が広い。掘り方で1基の床下土坑を検出した。1号土坑は北西壁際にあり長軸 1.22 m、短軸 1.00 m、深さ 0.40 mの隅丸長方形である。長軸は北西壁に平行し接している。掘り方面を埋めていたのは、浅間C軽石を多く含む黒色土である。

遺物と出土状況 遺物は縄文土器1点と土師器壺破片1点が出土したのみである。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の竪穴住居の痕跡と考えられる。表土除去後の遺構確認で、すでに床面より下がった状態にあり、かろうじて炉の痕跡と掘り方面を記録できた。床下の1号土坑は住居より古い単独の土坑の可能性もある。



第154図 2区25号住居

2区 26号住居 (付図2 第155～158図 PL90
～92・175 遺物観察表 P.507)

位置 2区 3 - 82 - G ~ I - 16 ~ 18 G

形状 隅丸長方形

重複 無し

規模 長軸 7.93 m 短軸 6.68 m

残存壁高 0.02 ~ 0.07 m

床面積 47.53 m²

長軸方位 N - 42° - E

埋没土 埋没土は不明である。表土除去後の遺構確認で、すでに埋没土は数 cm しか残存がなく、記録を断念した。

炉 住居中央やや北部に炉が検出された。炉は長径 0.56 m、短径 0.45 m の不整楕円形で、厚さ 0.04 m ほど表面が焼土化して硬化していた。炉は住居掘り方を埋積した土層内に掘り込まれた深さ 0.18 m ほどの凹地が焼土化していた。

柱穴 主柱穴 4本を床面で検出した。いずれも不整円形あるいは不整楕円形である。それぞれの規模は P 1 が 0.87 × 0.87 × 0.78 m、P 2 が 0.79 × 0.75 × 0.76 m、P 3 が 0.78 × 0.72 × 0.80 m、P 4 が 0.88 × 0.57 × 0.91 m である。

周溝 周溝は床面では検出されなかった。掘り方面で幅 0.13 ~ 0.30 m、深さ 0.04 ~ 0.07 m の周溝が検出された。四周の壁を全周していた。

住居内土坑 住居内の土坑は床面では検出されなかった。掘り方面で、P 2 の南側に円形の土坑を検出した。

床面 床面の硬化はあまり顕著ではなかった。床面は平坦である。床面では図化しなかったが、3条の地割れが入り、床面を壊していた。

掘り方 四周の壁沿いが幅 1.2 ~ 1.6 m、深さ 0.05 ~ 0.10 m ほどの不定形な溝状にぐるりと掘り込まれていた。この掘り込みの外形は、前述した周溝から内側へ 0.2 ~ 0.4 m 入った位置にあり、高さ 0.1 m ほどの段になっている。南東部には幅 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m の周溝状になっていた。このことから拡張住居の可能性も考えられるが、柱穴の移動

はない。

P 1 ~ P 4 の主柱穴の周りはさらに方形に掘り込まれていた。また、主柱穴の掘り方は大型で深く、方形を意識して掘られていた。それぞれの柱穴は、P 1 が長軸 1.8 × 短軸 1.5 m の掘り込み内に長軸 0.80 × 短軸 0.80 × 深さ 0.80 m、P 2 が 2.0 × 2.2 m の掘り込み内に 1.00 × 0.70 × 0.77 m、P 3 が 2.10 × 1.70 m の掘り込み内に 1.20 × 0.68 × 0.86 m、P 4 が 1.6 × 1.4 m の掘り込み内に 0.68 × 0.58 × 0.68 m の長方形あるいは正方形の柱穴掘り方を持っていた。

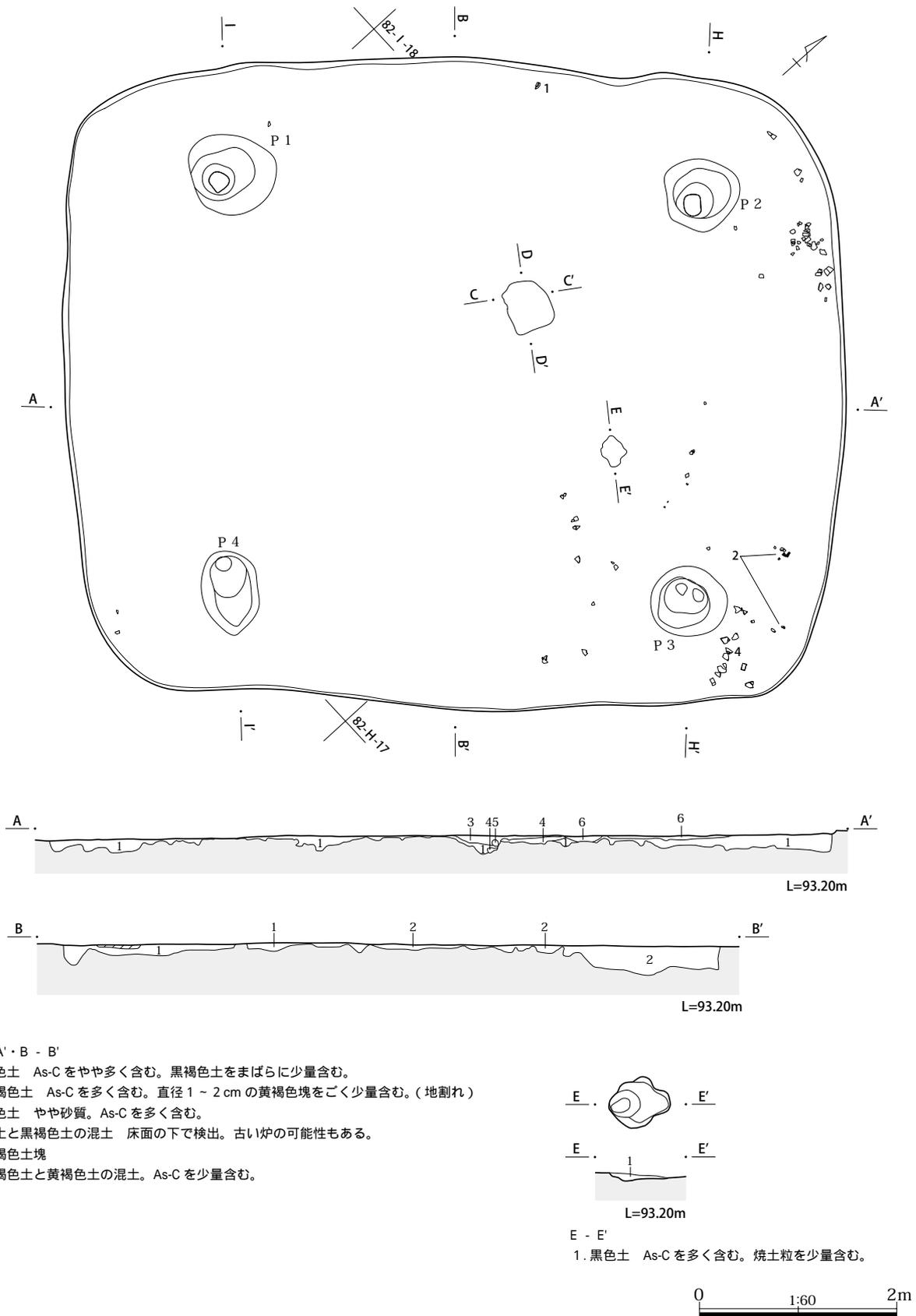
また掘り方面で、炉の南側に焼土を検出した。長径 0.8 m、短径 0.44 m の不整楕円形の範囲に厚さ 0.06 ~ 0.08 m の焼土が残されていた。その底面は地山そのまま、凹凸が著しかった。古い炉の痕跡の可能性もあるが、不定形なので炉とは考えにくい。掘り方面を埋めていたのは、浅間 C 軽石をやや多く含む黒色土である。

遺物と出土状況 床面近くの遺物は北東部に集中して出土した。土師器蓋 (第 157 図 1) は北西壁際床面直上で出土した。S 字甕 (2) は北東部床 P 3 東側床面直上で出土した。S 字甕 (3) は掘り方地割れ内で出土した。壺 (4) は東隅床面直上で出土した複数の破片が接合した。砥石 (第 158 図 5) は掘り方 1 号土坑北縁底面上 12 cm で、敲石 (6) は掘り方南東部底面上 4 cm、敲石 (7) は掘り方北東部、炉の北東側底面直上で出土した。

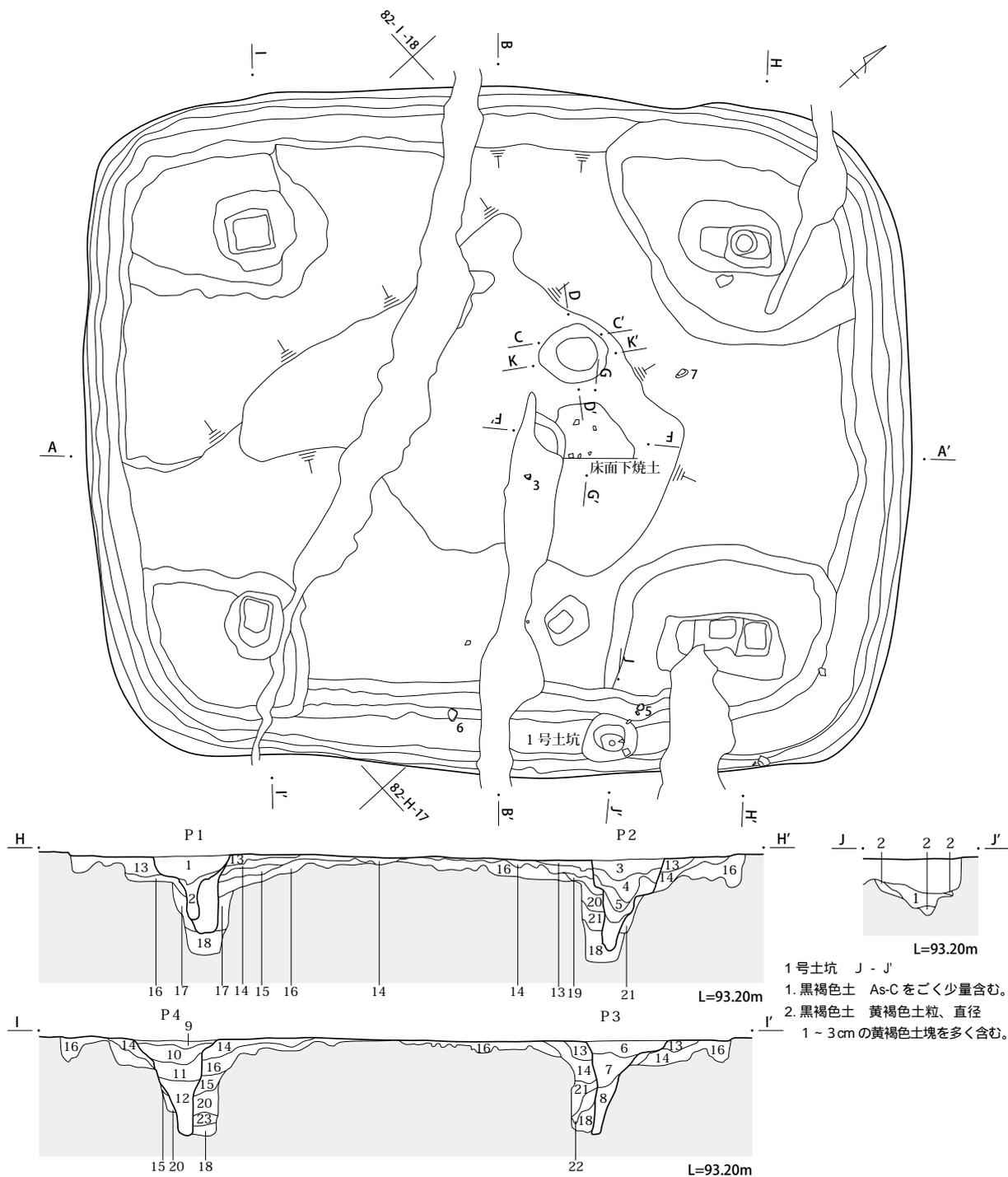
ここで図示した遺物の他、土師器破片 231 点、礫片 3 点、礫 1 点が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の住居と考えられる。掘り方調査では、広く掘り込まれた柱穴の掘り方と柱穴あるいは柱痕跡の関係を記録することを試みたが、柱の痕跡と思われる細い土層と掘り方を埋めた土層群を記録することができた。

1 号土坑は掘り方面で検出したが、南東隅の主柱穴の西側壁際に位置しているのは、本遺跡の住居内土坑の典型的なあり方と合致しており、床面で検出すべきものだった可能性が高い。



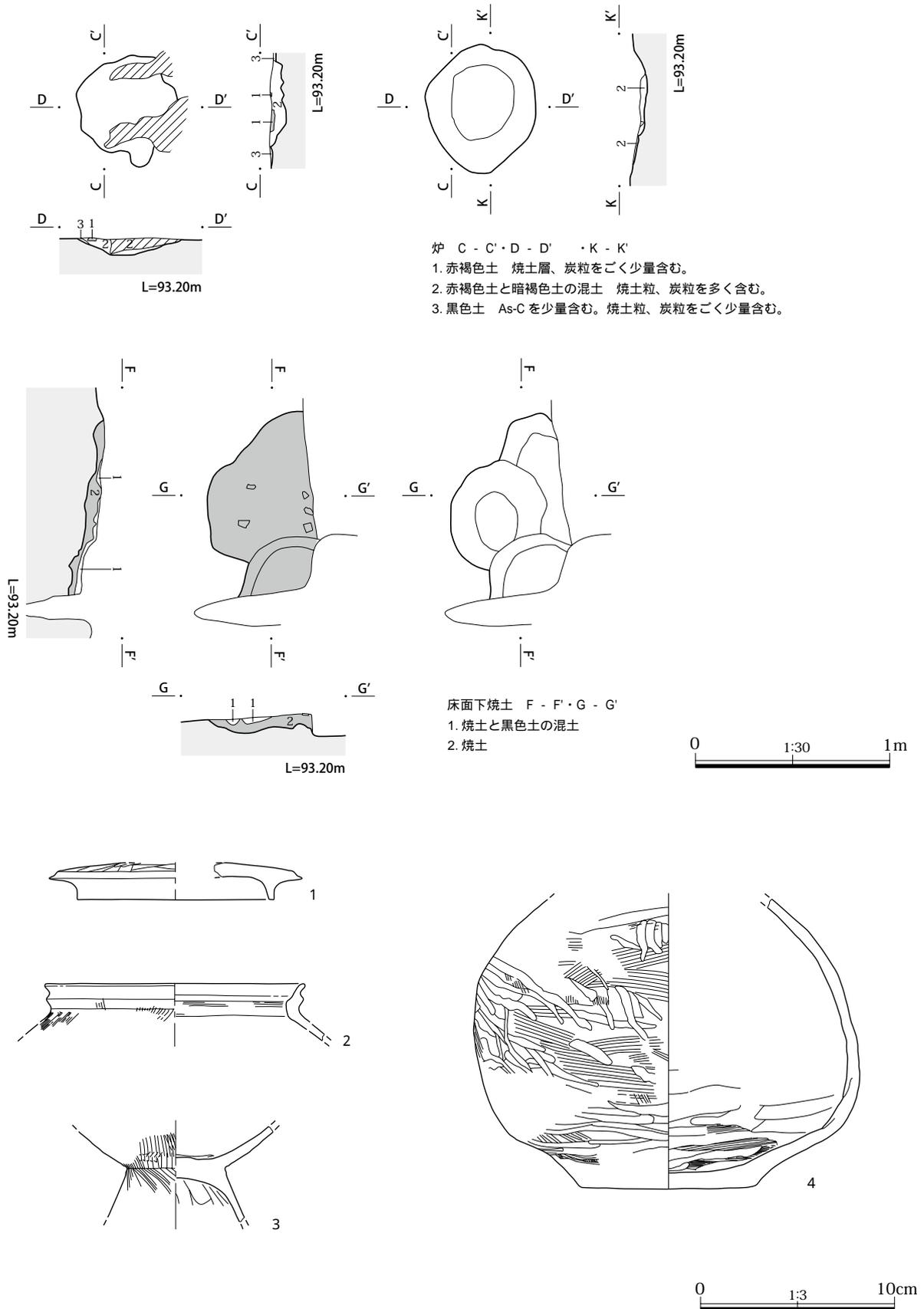
第155図 2区26号住居(1)



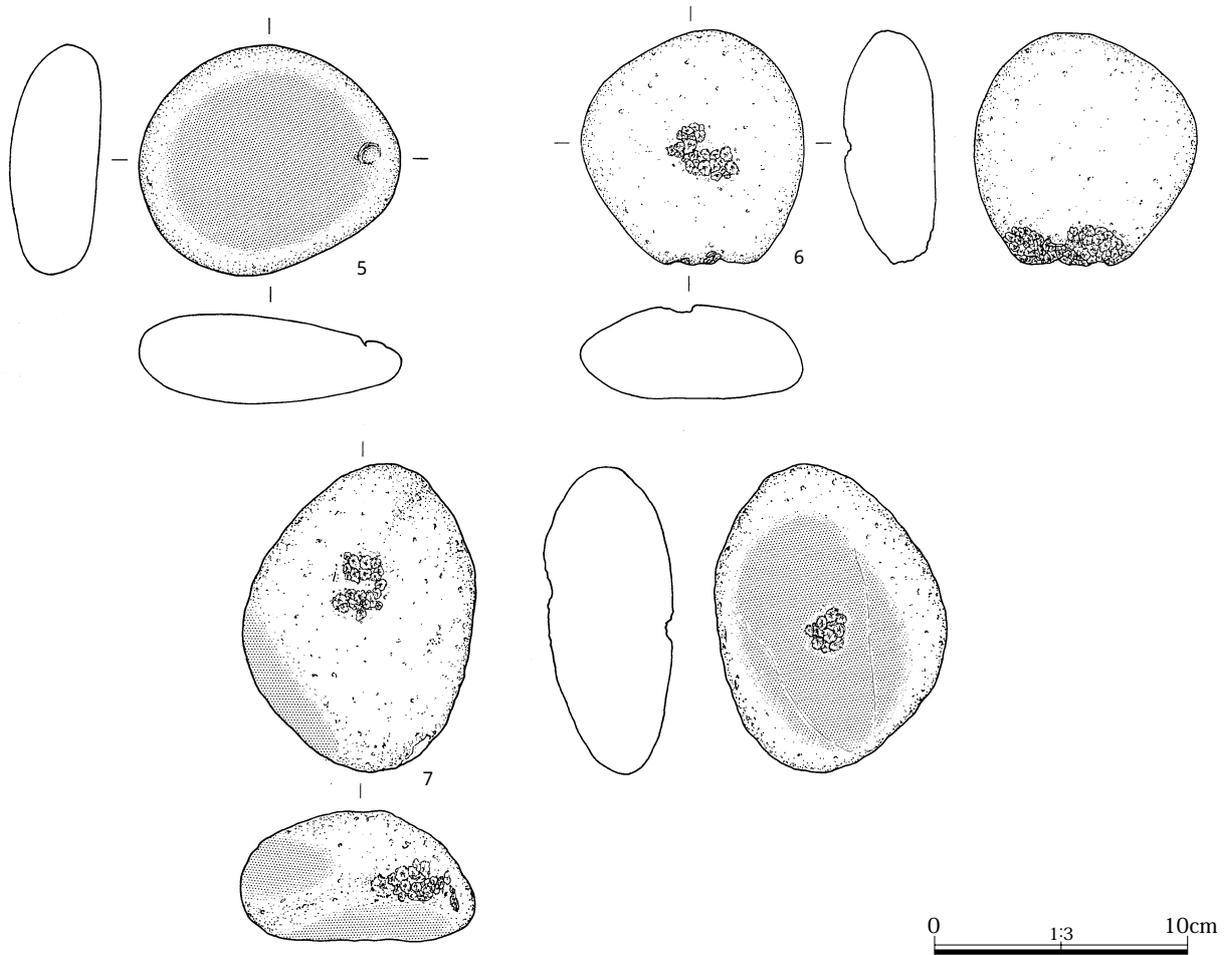
- P 1 ~ P 4 H - H' · I - I' J - J'
1. 暗黒褐色土 直径1 ~ 2 mm のAs-Cを少量含む。
 2. 明黒褐色土 白色粒を少量含む。しまり悪い。
 3. 暗黒褐色土 直径1 ~ 2 mm のAs-Cを少量含む。
 4. 黒褐色土 As-Cを微量含む。やや砂質。
 5. 黒褐色土 4層と似ているが、Cの混入はなし。
 6. 暗黒褐色土 直径1 ~ 2 mm のAs-Cを少量含む。
 7. 黒褐色土 As-Cを微量含む。やや砂質。
 8. 暗褐色土 黄褐色土塊を少量含む。
 9. 暗黒褐色土 直径1 ~ 2 mm のAs-Cを少量含む。
 10. 黒灰色土 As-Cを少量、白色粘土を微量含む。やや砂質。
 11. 明黒褐色土 黄褐色土をやや多く含む。
 12. 黒褐色土 黄褐色土塊を少量含む。
 13. 黒色土 やや砂質。As-Cを多く含む。(住居セクション、3層と同じ)
 14. 黒褐色土と黄褐色土の混土 As-Cを少量含む。(住居セクション、6層と同じ)
 15. 黒色土 As-Cを少量含む。黄褐色土粒を少量含む。
 16. 黒色土 As-Cをやや多く含む。黒褐色土をまばらに少量含む。(住居セクション1層と同じ)
 17. 明黄褐色土 黄褐色土、暗褐色土を全体的に少量含む。
 18. 黒褐色土 黄褐色土を全体的に少量含む。
 19. 黒褐色土 直径0.5 ~ 1 cmの黄褐色土塊を少量含む。
 20. 黄褐色土 直径0.5 ~ 0.8 cmの黒褐色土塊、直径1 ~ 2 cmの明黄褐色土塊を多く含む。
 21. 黒色土 黄褐色土を全体的に少量含む。
 22. 黒色土 直径5 mmの黄褐色土塊をごく少量含む。
 23. 黄褐色土 (壁の崩れ)

第156図 2区26号住居(2)

第5章 2・3区の遺構と遺物



第 157 図 2 区 26 号住居炉と出土遺物 (1)



第158図 2区26号住居出土遺物(2)

(6) 掘立柱建物

2区1号掘立柱建物(付図2 第159図 PL93)
 位置 2区3-82-E・F-1・2G
 主軸方位 N-2°-W
 重複 5号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。
 形態 1×1間(2.92×2.80m)、面積8.176㎡。
 棟方向は東西棟か。柱間は東西辺2.70~2.92m、南北辺2.80~2.90m。

P3がやや西にずれている。いずれの柱穴でも底面で直径0.2~0.3mの柱痕跡が検出されたが、柱穴内の中央を外れている。柱穴の形状は定型的な隅丸長方形で、各辺は柱筋に平行あるいは直交する。規模は長軸0.64~0.70m、短軸0.50~0.60m、深さ0.52~0.60mで、P3は北縁・西縁が広がっていた。

内部施設 無し

出土遺物 埋没土中から土師器S字甕破片1点が出土した。

所見 時期決定の決め手に欠くが、3号掘立柱建物との形状の共通性から古墳時代初頭の遺構と考えられる。5号掘立柱建物とは主軸を異にすることから別遺構と考えた。

第5表 2区1号掘立柱建物柱穴計測表

建物全体規模	1×1間		面積	8.176㎡			
主軸方向	N-2°-W		施設				
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)	
		長軸	短軸	深さ			
北辺 2.92	P1	0.64	0.5	0.52	隅丸長方形	2.97	
東辺 2.90	P2	0.64	0.5	0.58	隅丸長方形	2.9	
南辺 2.70	P3	0.84	0.6	0.56	隅丸長方形	2.7	
西辺 2.80	P4	0.7	0.57	0.6	隅丸長方形	2.8	

第5章 2・3区の遺構と遺物

2区5号掘立柱建物

(付図2 第159図 PL93・94)

位置 2区3-82-J-11・12G

主軸方位 N-5°-W

重複 1号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。

形態 1×1間(1.76×1.80m)、面積3.168㎡。棟方向は不明。柱間は東西辺1.76～1.96m、南北辺1.80～1.90m。

P4がやや南にずれている。いずれの柱穴でも柱痕跡は検出されなかった。柱穴の形状は円形あるいは不整楕円形で、規模は直径0.25～0.29m、深さ0.09～0.26m。深さにやや開きがある。

内部施設 無し 出土遺物 無し

所見 時期は不明と言わざるを得ない。1×1間であることから古墳時代前期の可能性が最も高いと思われる。

第6表 2区5号掘立柱建物柱穴計測表

建物全体規模	1×1間		面積		3.168㎡	
主軸方向	N-5°-W		施設			
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長軸	短軸	深さ		
北辺 1.76	P1	0.26	0.26	0.09	円形	1.76
東辺 1.80	P2	0.25	0.25	0.33	円形	1.8
南辺 1.96	P3	0.27	0.24	0.13	不整円形	1.9
西辺 1.90	P4	0.29	0.29	0.26	隅丸正方形	2.8

2区2号掘立柱建物

付図2 第160図 PL94・95 遺物観察表 P.508)

位置 2区3-82-J-11・12G

主軸方位 N-8°-E

重複 2区3号住居に先行する。

形態 1×2間(4.60×4.26m)、面積18.584㎡。棟方向は東西棟か。柱間は東西辺4.60～4.64m、南北辺3.82～4.26m。

東辺・西辺の柱筋はP3がやや東にずれるのを除けば通っているが、東辺の柱間がやや長いので、P2・P3とP6・P5の位置が対応しない。いずれの柱穴でも底面で直径0.2～0.3mの柱痕跡が検出

されたが、柱穴内の中央を外れている。柱穴の形状は定型的な隅丸長方形で、その長軸は概ね南北方向に揃っている。柱穴の規模は長軸0.75～0.92m、短軸0.53～0.70m、深さ0.37～0.78mで、深さにばらつきが大きい。

内部施設 無し

出土遺物 P4の埋没土最上層で壺(第160図1・2)が出土した。また埋没土中から土師器甕破片11点が出土した。

所見 出土遺物の時期と住居との埋没土の共通性から、古墳時代初頭の遺構と考えられる。当初P2～P4は単独の土坑と考え調査していたが、3号住居の掘り方調査面でP5・P6を検出し、全体の規則性から掘立柱建物と判断し、時期も確定した。そのため柱を通した土層断面等の設定ができなかった。

第7表 2区2号掘立柱建物柱穴計測表

建物全体規模	1×2間		面積		18.584㎡	
主軸方向	N-8°-E		施設			
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(m)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長軸	短軸	深さ		
北辺 4.60	P1	0.92	0.53	0.75	長方形	4.6
東辺 4.26	P2	0.8	0.68	0.82	隅丸長方形	2.14
	P3	0.8	0.7	0.81	不整長方形	2.18
南辺 4.64	P4	0.82	0.7	0.78	隅丸長方形	4.64
西辺 3.82	P5	0.92	0.56	0.37	隅丸長方形	2.08
	P6	0.75	0.56	0.4	隅丸長方形	1.76

2区3号掘立柱建物

(付図2 第161図 PL95・96)

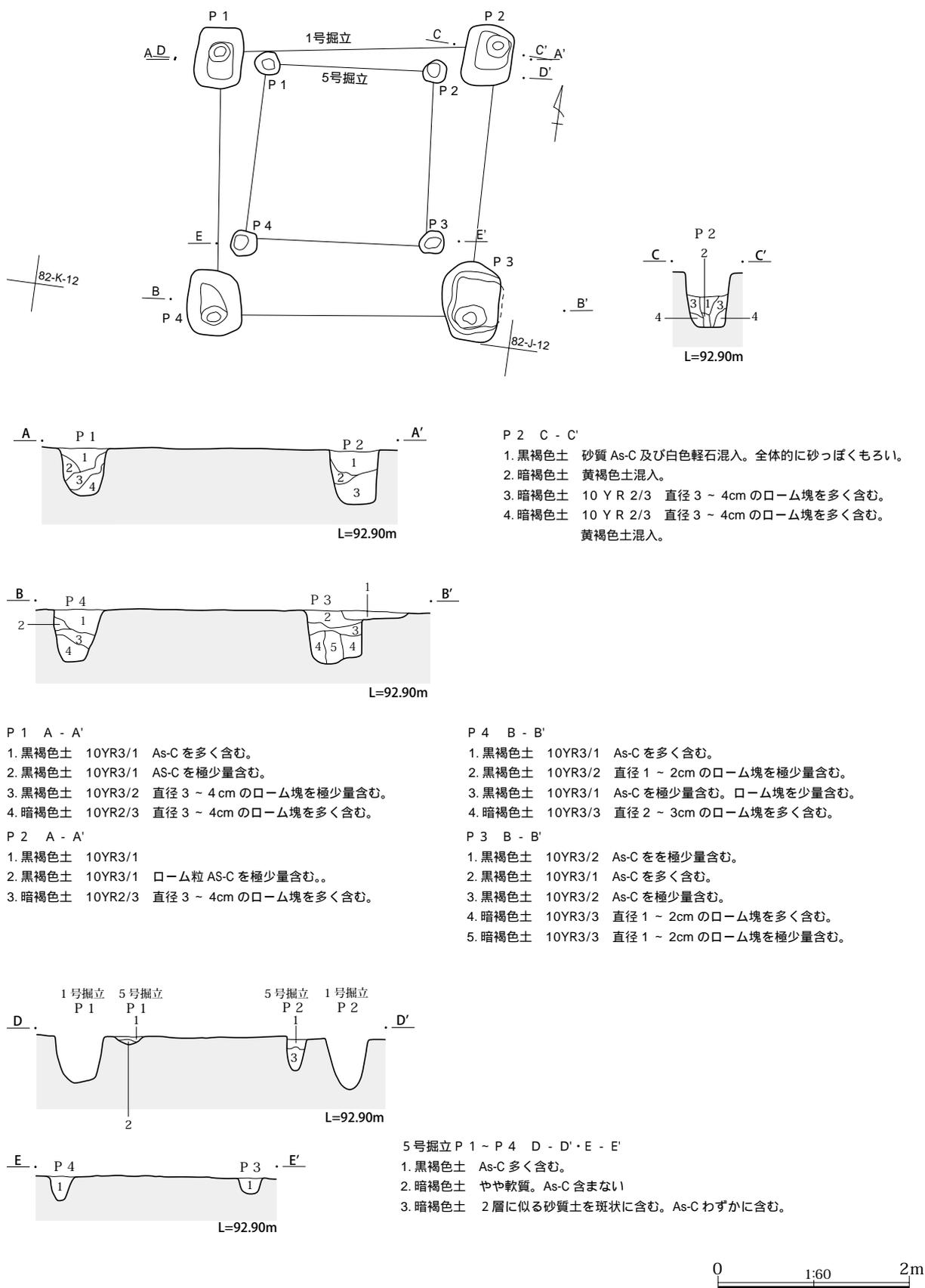
位置 2区3-82-H・I-5・6G

主軸方位 N-8°-E

重複 2区5号住居に先行する。

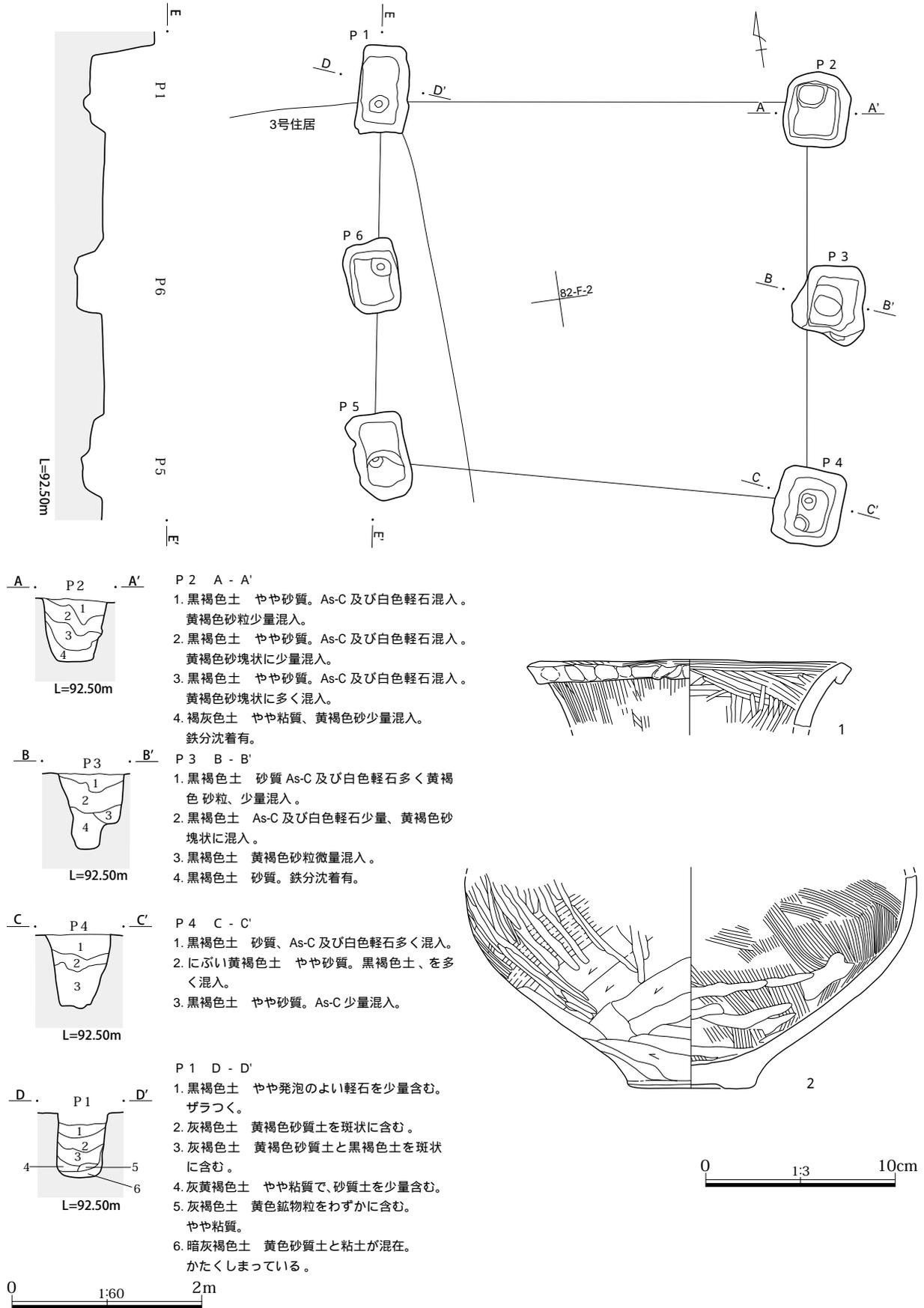
形態 1×1間(3.00×3.06m)、面積8.64㎡。棟方向は不明。柱間は東西辺3.00～2.94m、南北辺2.70～3.06m。

いずれの柱穴も底面で直径0.15～0.2mの柱痕跡が検出されたが、柱穴内の中央を外れている。特にP4が北にずれているために、東辺・西辺の柱間が対応しない。柱穴の形状は定型的な隅丸長方形



第 159 図 2 区 1 号・5 号掘立柱建物

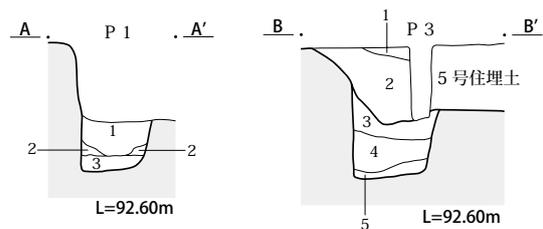
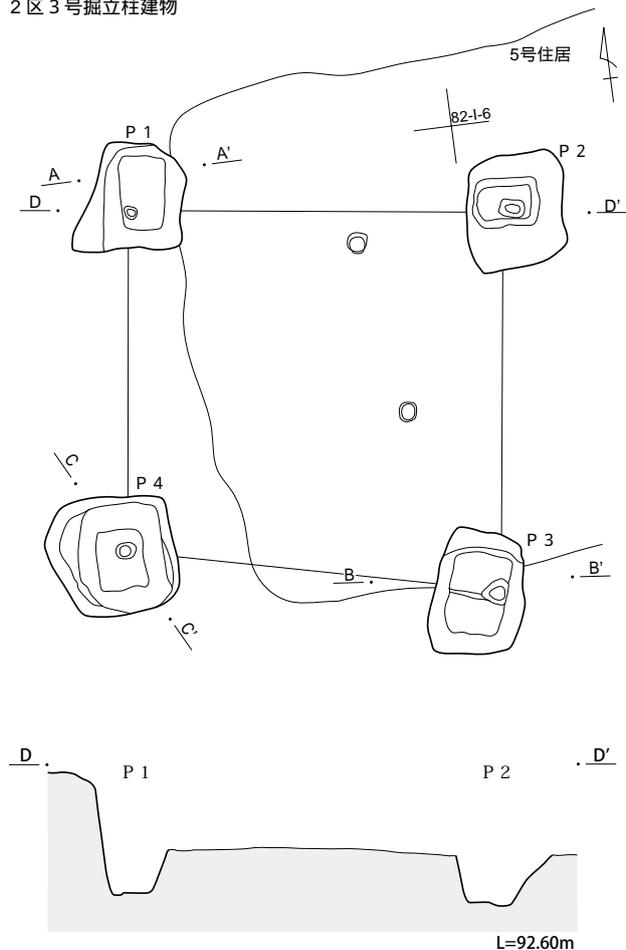
第5章 2・3区の遺構と遺物



第 160 図 2 区 2 号掘立柱建物と出土遺物

2区2・3区微高地部の遺構と遺物

2区3号掘立柱建物

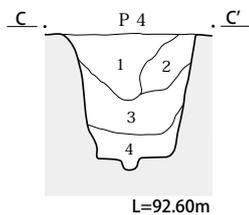


P 1 A - A'

1. 黒褐色土 砂質。As-C 及び、黄褐色砂混入。
2. 暗褐色土 やや砂質。
3. 褐灰色 やや粘質。黄褐色砂塊多く混入。

P 3 B - B'

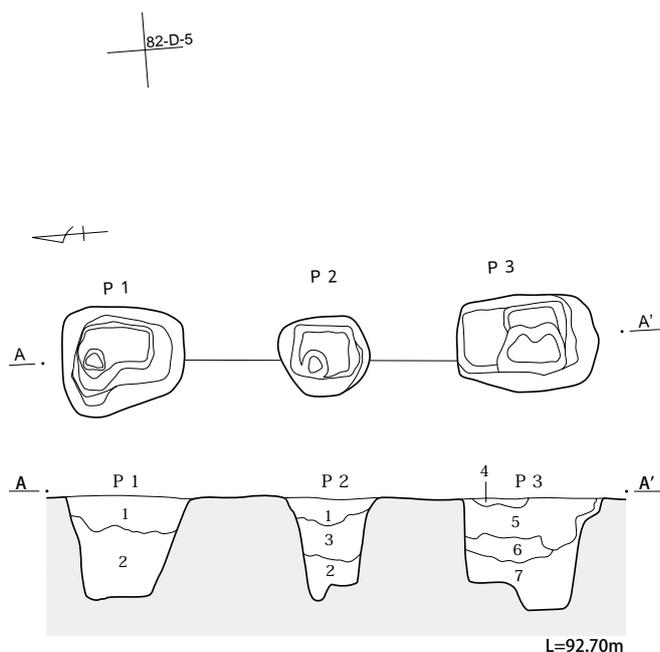
1. 暗褐色土 As-C、多く混入。
2. 褐灰色土 やや砂質。As-C 及び、黄褐色砂小塊、暗褐色土混入。
3. 暗褐色土砂質。褐色砂、及び、褐灰色土混入。As-C を微量含む。
4. 褐灰色土 やや砂質。暗褐色土混入。
5. 褐灰色土 やや粘質。



P 4 C - C'

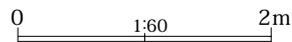
1. 暗褐色土 As-C 多く混入。
2. 暗褐色土 砂質。As-C 及び黄褐色砂粒、多く混入。
3. 暗褐色土 やや砂質。黄褐色砂粒少量混入。
4. にぶい黄褐色土 やや粘質。褐灰色粘質土と黄褐色砂塊の混土。

2区4号掘立柱建物



P 1・P 2・P 3 A - A'

1. 黒褐色土 As-C を多く含む。黄褐色の砂質土を斑状に含む。
2. 暗褐色土 やや粘質で1層と同様に黄褐色の砂質土を塊状に含む。
3. 黒褐色土 1層より均質で含まれる。パミスがやや少ない。
4. 黒褐色土 白色パミス多く1層に似るが含まれる砂質が少なく。
5. 黒褐色土 1層に似るが含まれる砂質土が非常に多い。
6. 暗褐色土 パミスをほとんど含まず2層より暗い。
7. 暗褐色土 2層に似るが砂質土が少ない。



第 161 図 2 区 3 号・4 号掘立柱建物

第5章 2・3区の遺構と遺物

で、その長軸は概ね南北方向に揃っている。柱穴の規模は長軸 0.82 ~ 1.01 m、短軸 0.68 ~ 0.93 m、深さ 0.41 ~ 1.10 mで、深さにばらつきが大きい。また P 1・P 4 はやや西縁が広がっていた。

内部施設 無し

出土遺物 埋没土中から土師器甕破片 10 点が出土。所見 出土遺物の時期と住居との埋没土の共通性から、古墳時代初頭の遺構と考えられる。5号住居との新旧関係については精査し、掘立柱建物が先行することを確認した。

第8表 2区3号掘立柱建物柱穴計測表

建物全体規模	1 x 1 間		面積		8.64 m ²	
主軸方向	N - 8° - E		施設			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (m)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長軸	短軸	深さ		
北辺 3.00	P 1	0.82	0.73	0.98	隅丸長方形	3.0
東辺 3.06	P 2	0.9	0.76	0.41	隅丸長方形	3.0
南辺 2.94	P 3	0.98	0.68	0.93	隅丸長方形	3.0
西辺 2.70	P 4	1.01	0.93	1.1	隅丸長方形	2.7

2区4号掘立柱建物 (付図2 第161図 PL96)

位置 2区3-82-D-4・5G

主軸方位 N - 8° - E

重複 無し

形態 柱間2間(3.60m)の柱穴列を検出した。西側には展開しないことが判明しているため、東側の1区との境にある現行水路付近に東側の柱列があるものと推定される。柱間は南北辺1.80m。

柱筋はきれいに通っている。いずれの柱穴でも底面で直径0.15~0.3mの柱痕跡が検出されたが、柱穴内の中央を外れている。柱穴の形状は定型的な隅丸長方形で、その長軸は概ね南北方向に揃っている。柱穴の規模は長軸0.73~1.11m、短軸0.64~0.80m、深さ0.82~0.90mである。P2が他の2つより小さい。

内部施設 無し

出土遺物 無し

所見 出土遺物の時期と住居との埋没土の共通性から、古墳時代初頭の遺構と考えられる。

第9表 2区4号掘立柱建物柱穴計測表

建物全体規模	不明		面積		- m ²	
主軸方向	N - 8° - E		施設			
桁・梁行の規模 (m)	柱穴 No	規模 (m)			形状	次柱穴との間隔 (m)
		長軸	短軸	深さ		
西片 3.60	P 1	0.97	0.8	0.82	隅丸長方形	1.8
	P 2	0.73	0.64	0.82	隅丸長方形	1.8
	P 3	1.11	0.8	0.9	隅丸長方形	2.94

(7) 溝

2区12号溝 (付図2 第162図 PL96・192 遺物観察表 P.508)

位置 2区3-72-H・I-20G

3-82-G-6、H-1~6G

形状 北端はほぼ南北方向のほぼ直線の溝で、3-82-H-2グリッドで緩やかに南西方向に方向を変えている。北端部で10号住居、南端で2号住居に後出する。

規模 調査長 31.5m 最大幅 0.9m

最小幅 0.28m 深さ 0.12~0.28m

走向 北端 N - 5° - E 南端 N - 23° - E

断面形 下半部は底面の幅が0.28~0.4mほどの箱形で、上半部は外方に開く。

埋没土 下層は浅間C軽石と思われる白色軽石と黄褐色土粒を含むにぶい黒褐色土で、上層は多量の白色軽石と黄褐色土粒を含む砂質のにぶい黒褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から弥生土器破片1点、土師器破片41点が出土した。土師器破片は古墳時代前期の土器である。小破片が多いが、図化できたのは高坏(第162図12溝1)と鉢(12溝2)と櫛描き文のある樽式土器の小破片(12溝3)である。

所見 掘削時期は、埋没土の共通性や、出土遺物の時期から、古墳時代前期の可能性が高いが確定はできなかった。

2区13号溝 (付図2 第162図 PL97)

位置 2区3-82-H-3・4、I-4G

形状 北西から南東方向の等高線に沿った凹地状の

溝。北辺が15号溝と合流する。

規模 調査長 9.6 m 最大幅 1.65 m

最小幅 0.75 m 深さ 0.15 m

走向 N - 55° - W

断面形 浅い皿形

埋没土 下層は浅間C軽石と思われる白色軽石と黄色土粒を含む黒色土で、上層は少量の白色軽石を含む砂質の黒褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片11点が出土した。土師器破片は古墳時代前期の土器で小破片が多いが、図化できたのは台付甕(第162図13溝1)である。

所見 掘削時期は、埋没土の共通性や、出土遺物の時期から、古墳時代前期の可能性が高い。遺憾ながら埋没土観察の断面位置を記録できなかった。

形状 やや幅が一致しないが、3-82-G-6グリッドで緩やかに南西方向から東方向に方向を変えて彎曲する。5号住居・10号住居に先行する。

規模 調査長 32.4 m 最大幅 3.15 m

最小幅 1.50 m 深さ 0.3 ~ 0.44 m

走向 南端N - 39° - E 東端N - 0° - W

断面形 下半部は底面の幅が0.4 mの箱形で、上半部は大きく外方に開く。

埋没土 下層の箱形の部分は浅間C軽石を含まない粘質黒色土で、上層は多量の浅間C軽石を含む黒褐色土で埋まっていた。中位には浅間C軽石が層状にブロック堆積している部分もあった。

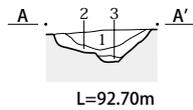
遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片7点が出土した。土師器破片は古墳時代前期の土器である。小破片が多く、図化できなかった。

所見 掘削時期は、埋没土の共通性や、出土遺物の時期から、古墳時代前期の可能性が高い。5号住居・10号住居に先行する遺構である。

2区15号溝(付図2 第162図 PL97)

位置 2区3-82-D~G-7、G~I-4~6G

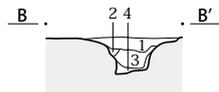
2区12号溝



L=92.70m

A - A'

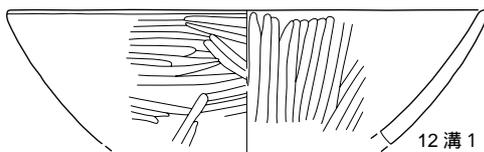
1. にぶい黒褐色土 直径1mm大の白色粒、黄褐色粒を多く含む。やや砂質。
2. にぶい黒褐色土 層と土質が似ているが、白色粒、黄褐色粒を少量含む。
3. にぶい黒褐色土 直径1mm以下の暗灰色砂粒を少量、直径10mmほどの黄褐色土塊をやや多く含む。やや粘性有。



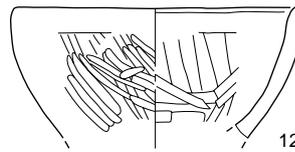
L=92.50m

B - B'

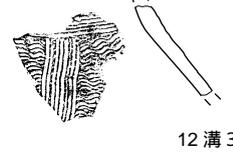
1. にぶい黒褐色土 直径1mm大の白色粒、黄褐色粒を多く含む。やや砂質。
2. 黒灰色土 塊状になっており、白色粒を微量含む。
3. にぶい黒褐色土 1層と土質が似ているが、白色粒、黄褐色粒を少量含む。
4. にぶい黒褐色土 直径1mm以下の暗灰色砂粒を少量、直径10mmほどの黄褐色塊をやや多く含む。やや粘性有。



12溝1

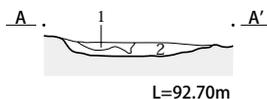


12溝2



12溝3

2区13号溝

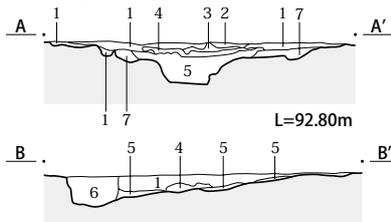


L=92.70m

A - A'

1. 黒褐色土 10YR3/1 砂質。白色軽石粒を少量含む。
2. 黒色土 10YR2/1 白色軽石、黄色砂質土粒を含む。

2区15号溝

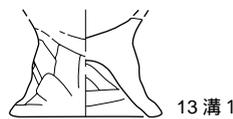


L=92.80m

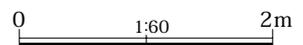
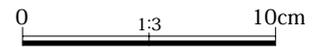
L=92.80m

A - A'・B - B'

1. 暗褐色土 As-Cを多く含む固い。
2. 暗灰褐色土 As-Cを少量含む。
3. 黒褐色土 As-Cを非常に多く含む。1層よりAs-Cの直径が大きい。
4. As-C層 5層土を少量混入するが、ほとんどがAs-Cである。ただし一次堆積ではない。
5. 黒褐色土 As-Cをほとんど含まず、やや粘質、地山に近似。
6. 黒褐色土 1層よりやや粒径が小さい。As-Cを多く含むが、その割合は1層より少ない。
7. 褐色土 As-Cと思われる軽石をごくわずか含み、粒径は小さい。
8. 灰褐色土 砂質で柔らかい。地山。



13溝1



第162図 2区12号・13号・15号溝と出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

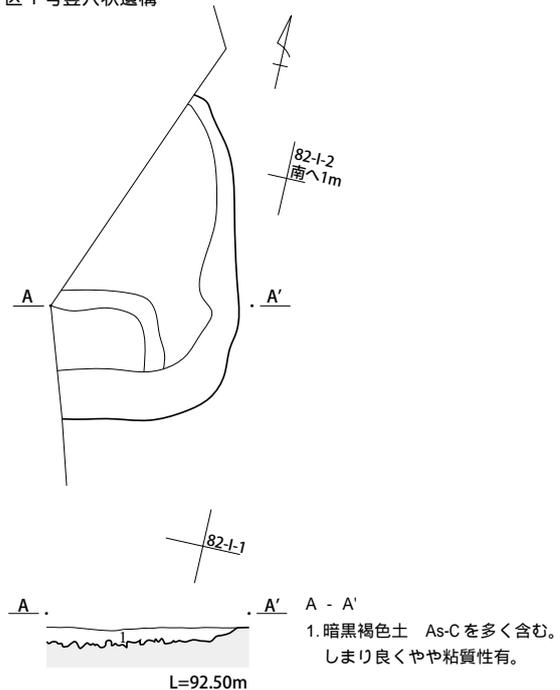
(8) 竪穴状遺構

2区1号竪穴状遺構(付図2 第163図 PL97)
 位置 2区3-82-I-1G
 形状 西半分は発掘区域外で調査できなかったが、
 隅丸方形と推定される。
 重複 無し
 規模 長軸 4.0m 短軸 2.0m以上
 残存壁高 0.20m
 面積 計測不能 東壁方位 N-15°-W
 埋没土 白色軽石をやや多く含む暗黒褐色土で埋
 まっていた。

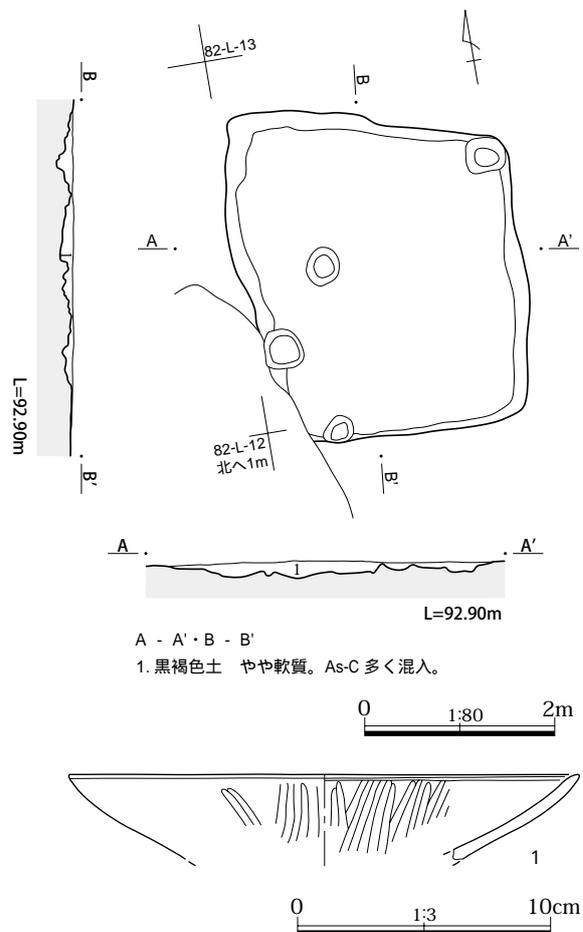
炉等 炉や竈は検出されなかった。
 柱穴 柱穴は検出されなかった。
 周溝 周溝は検出されなかった。
 底面 底面は凹凸が著しく、平坦でない。南壁に沿っ
 て方形に0.02~0.10mほど深くなっていた。貼
 り床等の施設はなく、掘り方は検出されなかった。
 遺物と出土状況 床面近くから出土した遺物はな
 かった。埋没土中から縄文土器2点、土師器破片9
 点が出土した。縄文土器は混入であると判断し、遺
 構外出土遺物の項(第233図51)で報告した。
 所見 古墳時代の遺構との確証はないが、埋没土中
 から出土した土師器は古墳時代前期のものであり、
 埋没土の特徴も一致することから、古墳時代前期と
 考えられる。

2区2号竪穴状遺構(付図2 第163図 PL97
 遺物観察表P.508)
 位置 2区3-82-K-12G
 形状 平行四辺形
 重複 無し
 規模 長軸 3.55m 短軸 3.04m 残存壁高 0.11m
 面積 8.02m² 長軸方位 N-6°-E
 埋没土 浅間C軽石を多く含む砂質の黒褐色土で埋
 まっていた。
 炉等 炉や竈は検出されなかった。
 柱穴 柱穴は検出されなかった。底面では直径0.4
 m前後の小ピットが検出されたが、定型的な位置に

2区1号竪穴状遺構



2区2号竪穴状遺構



第163図 2区1号・2号竪穴状遺構と出土遺物

なく、柱穴とは考えにくい。

周溝 周溝は検出されなかった。

底面 底面は凹凸が著しく、平坦でない。貼り床等の施設はなく、掘り方は検出されなかった。

遺物と出土状況 埋没土中から19点の古墳時代前期の土師器破片が出土した。小破片が多く図化できたのは、高坏坏部(第163図1)だけである。

所見 出土遺物の時期と、埋没土が共通であることから、古墳時代前期の遺構と考えられる。

2区1号不明遺構(付図2 第164図 PL98・147 遺物観察表P.508)

位置 2区3-82-L・M-11・12G

形状 南西部が発掘区域外のため全形は不明であるが、長径の長い楕円形と推定される。東側縁辺は浅く、北半が一段深くなり、南西部がさらに深くなっている。

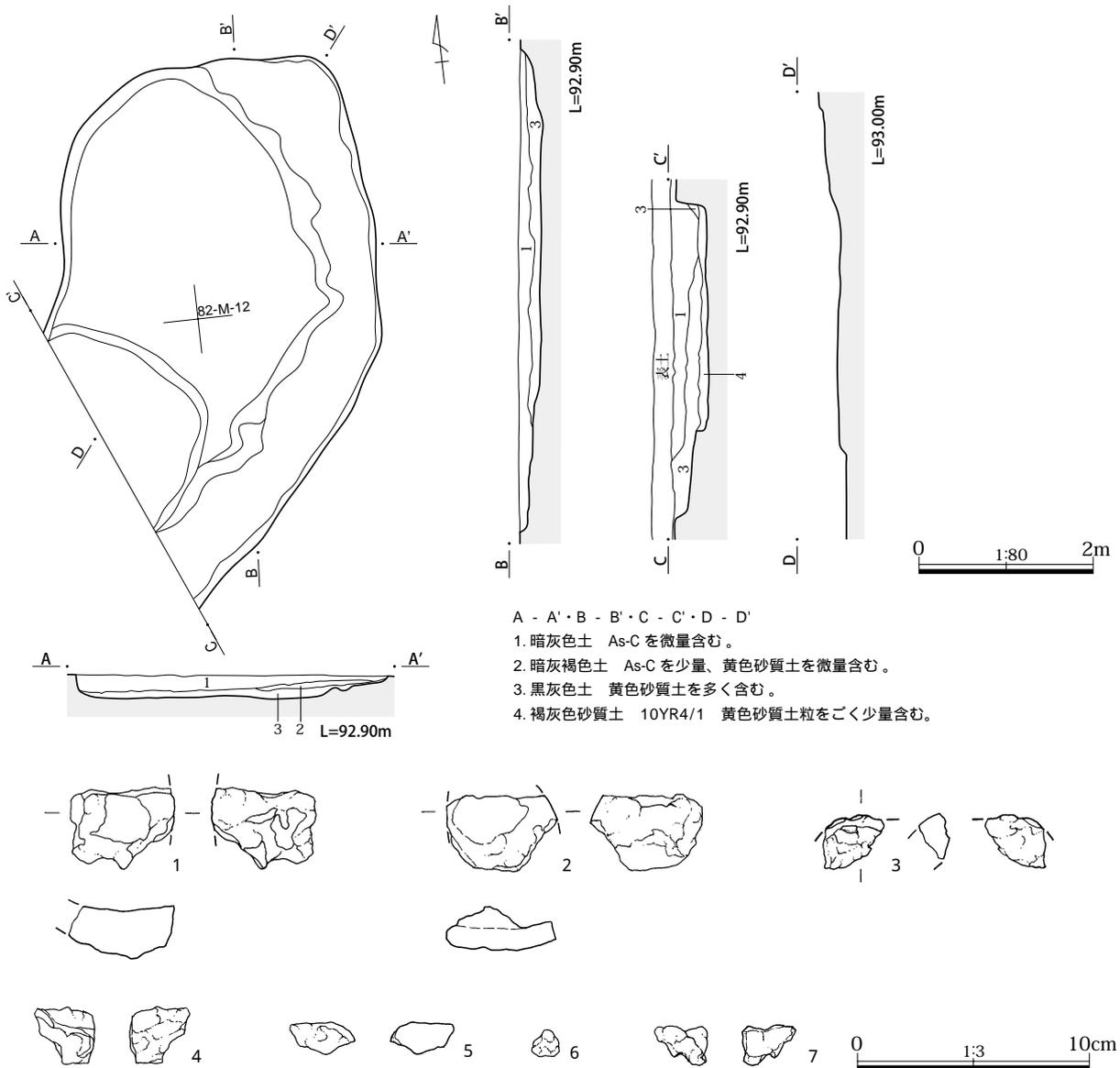
重複 無し

規模 長軸 5.28m以上 短軸 1.8~2.0m

残存壁高 0.05~0.36m

面積 測定不能 長軸方位 N-32°-E

埋没土 上層は浅間C軽石を少量含む暗灰色土で、下層は黄色砂質土を多く含む黒灰色土・褐灰色土で埋まっていた。



第164図 2区1号不明遺構と出土遺物

第5章 2・3区の遺構と遺物

炉等 炉や竈は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。

周溝 周溝は検出されなかった。

底面 底面は小さな凹凸があるが、全体としては平坦である。貼り床等の施設はなく、掘り方は検出されなかった。

遺物と出土状況 埋没土中から古墳時代前期の土師器破片 50 点、中世のすり鉢かと思われる軟質土器破片 1 点、鉄滓破片 8 点が出土した。土器は小破片が多く図化できなかつた。鉄滓は椀形滓の破片とみられる。

所見 出土遺物の大半は古墳時代前期の土師器破片であるが、軟質土器が 1 点出土していること、埋没土が古墳時代前期の住居と異なることから、古墳時代の遺構でない可能性が高い。小鉄滓がまとめて出土していることからすれば、南西部の発掘区域外に鉄生産関連の遺構が残されている可能性がある。

3区 1号竪穴状遺構 (第 165 図 PL97)

位置 2区 3 - 82 - F - 20 G

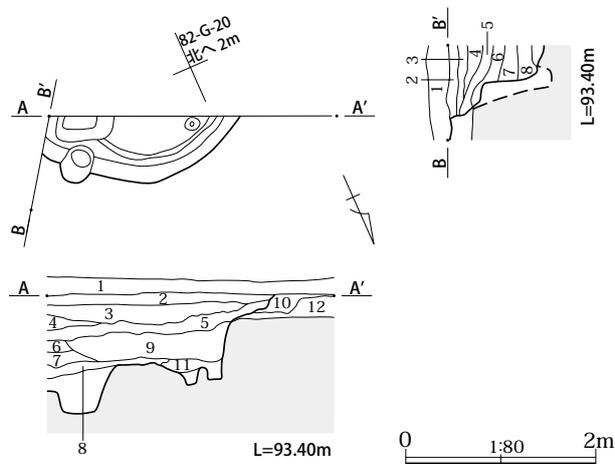
形状 北東部の一部が調査できただけであるので、全体形状は不明である。

重複 無し

規模 長軸 計測不能 短軸 計測不能

残存壁高 0.68 m

面積 計測不能 長軸方位 N - 6° - E



第 165 図 3区 1号竪穴状遺構

埋没土 上層は浅間C軽石を多く含む黒色土で、下層は少量の浅間C軽石と黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

炉等 炉や竈は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。底面では直径 0.15 m の小ピットや一辺 0.6 m の方形土坑が検出されたが、定型的な位置になく、柱穴とは考えにくい。

周溝 周溝は調査できた範囲では、全周していた。概ね幅 0.25 ~ 0.36 m、深さ 0.04 ~ 0.09 m である。

底面 底面は大きな凹凸があり、平坦でない。断面観察では貼り床等の施設はなかった。

遺物と出土状況 埋没土中から 2 点の古墳時代前期の土師器破片が出土した。小破片で図化できなかつた。

所見 出土遺物の時期と、埋没土が共通であることから、古墳時代前期の遺構と考えられる。

(9) 畝跡 (付図 2 第 166 図 PL98)

2区で畝間溝の痕跡と見られる小溝を 2カ所 で検出した。埋没土の共通性から、古墳時代前期の集落内に畝作耕地が存在したものと推定される。遺憾ながらそれらの平面図を作成できなかったために、位置や全体規模の記述ができなかつた。

1号畝間遺構は南北方向の不定形な 3条の小溝が東西に並ぶ。断面形は底面の丸いボール形。溝の幅は 0.13 ~ 0.16 m、深さは 0.08 ~ 0.12 m で、溝の間隔は芯心距離で 0.70 m である。埋没土は浅間

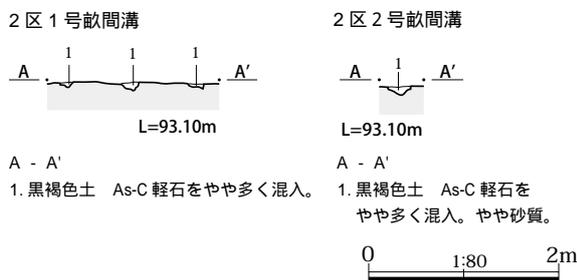
A - A'・B - B'

1. 表土
2. 黒色土 As-C を多く含む。
3. 黒色土 As-C をやや多く含む。
4. 黒褐色土 As-C を少量含む。直径 0.5 ~ 1 cm のローム塊を極少量含む。
5. 暗褐色土 As-C を極少量含む。直径 1 ~ 5 cm のローム塊をやや多く含む。
6. 黒褐色土 As-C を極少量含む。直径 0.5 ~ 1 cm のローム塊を少量含む。
7. 黒褐色土 直径 1 ~ 3 cm のローム塊を少量含む。
8. 暗褐色土 直径 1 ~ 5 cm のローム塊を多く含む。
9. 暗褐色土 As-C をやや多く含む。
10. 黒褐色土 As-C をやや多く含む。
11. 黄褐色土
12. 暗褐色土 (地山)

C軽石をやや多く含む砂質の黒褐色土である。埋没土中から土師器破片2点が出土している。

2号畝間遺構は1条の小溝が検出された。断面形は底面中央がややすぼまるボール形。溝の幅は0.22m、深さは0.08mで、1号と同様に浅間C軽石をやや多く含む砂質の黒褐色土で埋まっていた。埋没土中からS字甕破片5点間溝含む土師器破片7点が出土している。

これらの畝間遺構の時期は浅間C軽石降下以降で、埋没土の共通性から古墳時代前期と考えられる。



第166図 2区畝跡

(10) 縄文時代の遺構 (PL98・99)

2区24号住居の南壁付近から縄文土器破片5点がまとまって出土したことから、周辺の縄文土器および縄文時代遺構の確認を目的にI・J-17・18グリッドの調査を実施した。また、古墳時代前期の住居埋没土中からも縄文土器が出土していることから、古墳時代の遺構調査終了後、2区および3区全域に5mおきに幅約1.0mのトレンチを設定し、バックフォーで縄文時代遺構の有無を確認調査した。

I・J-17・18グリッドでは打製石斧を含む縄文時代遺物が17点出土したが、当該期の遺構は検出されなかった。また、遺構の最終確認として実施したトレンチ調査では、2区41号土坑・42号土坑と3区44号土坑が黒色土下の黄褐色砂質土上面で検出された。これらの土坑はいずれも黄色砂質土で埋まっており、縄文時代の遺物は出土しなかったが、層位的には古いと考えられる。

なお、3区44号土坑については、図面記録はとらなかったが、写真のみPL99に掲載した。

2区41号土坑 (第167図 PL98)

位置 2区3-72-E-11G

重複 無し

形状 不整楕円形

規模 長軸 1.02 m 短軸 0.72 m

残存壁高 0.14 m

長軸方位 N - 2° - E

断面形 皿形

埋没土 黄色砂質土で埋まっていた。

底面 底面には凹凸があり、南西部は凹んでいた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 層位的には縄文時代の遺構と推定される。

2区42号土坑 (第167図 PL98)

位置 2区3-82-G-11G

重複 無し

形状 不整楕円形

規模 長軸 1.77 m 短軸 1.09 m

残存壁高 0.35 m

長軸方位 N - 1° - W

断面形 ボール形

埋没土 黄色砂質土で埋まっていた。

底面 底面には凹凸があった。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 層位的には縄文時代の遺構と推定される。

3区44号土坑 (PL99)

位置 不明 重複 無し

形状 不整楕円形

規模 不明

長軸方位 不明

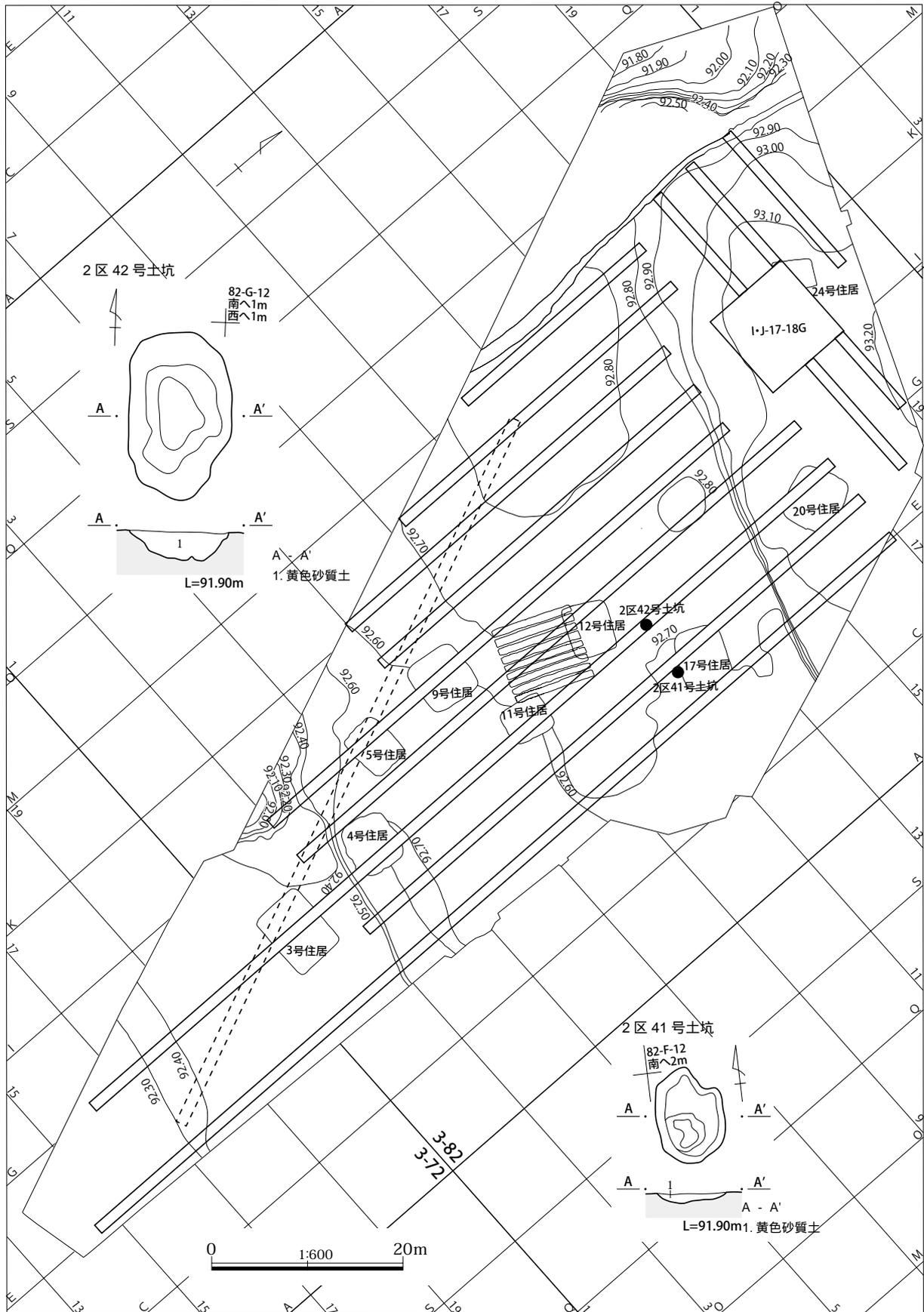
断面形 皿形

埋没土 黄色砂質土で埋まっていた。

底面 底面には凹凸があり、南西部は凹んでいた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 層位的には縄文時代の遺構と推定される。



第167図 縄文時代遺構確認トレンチ配置と2区41号・42号土坑

3. 2. 3 区低地部の遺構と遺物

(1) 第2洪水層下面

2・3区第2洪水層下水田(第168～172図
PL99～102・176 遺物観察表P.508)

2・3区の西部、3-82-M～P-12～20G、
3-92-J～M-2～8Gにわたって、第2洪水層に埋まった水田面が検出された。水田面を覆っていた第2洪水層は、2区では厚さ5～10cm、3区では15～25cmの灰黄色砂と褐灰色シルトである。上層に砂層、下層にシルトが堆積していた。洪水層は、2区の北西隅を斜めに開析した荒砥川低地の東縁にあたる部分に堆積しており、下位の水田面を覆っていた。洪水層の堆積時期は不明であるが、1108(天仁元)年に降下した浅間Bテフラより新しい。

第2洪水層下水田域を構成しているのは、低地縁辺に掘られた6号溝と、その西側に細長く区切られた4面の水田面、東側に区画された1面の水田面である。なお、同じ遺構確認面で検出した2号～5号溝はいずれも第2洪水層より新しい遺構である。

水田面への給配水は、微高地縁辺を北から流下する6号溝によって行われていたと推定される。6号溝は両側にアゼを伴った用水路で、下位の水田面に給水していた。

検出された水田区画は全部で5面である。6号溝の西側で4面、東側で1面が確認された。6号溝の西側の水田面1～4は、低地の等高線の方向に対して縦長に区画されており、形態はほぼ帯状である。全形を把握できた区画は無かった。6号溝からの水口は3区画に2カ所(2号水口・3号水口)が検出されている。

6号溝東側の水田面は既存道路を挟んだ半円形で、全体では202.7㎡である。現状での水田面の高さに1m以上の差があり、ひとつの区画でない可能性もある。6号溝からの水口は南端の1カ所(1号水口)のみ検出された。6区画の南側は緩斜面で、第2洪水層の堆積は認められなかった。6号溝に東方への水口は作られていなかったため、水田化され

ていなかった可能性が高い。

水田面を区画するアゼは1区画では比較的大きく、上幅0.4m、下幅0.6m、高さ0.35mほどであった。1区画と2区画の間のアゼは上幅0.2m、下幅0.4m、高さ0.1m、4区画の5号溝沿いのアゼは上幅0.2m、下幅0.4m、高さ0.15mで良好に残っていた。1区画と3区画の間のアゼは、西半の残存状態が悪く輪郭のみ検出した。

水田耕作土は明黄褐色砂質土塊、黒色土塊、灰白色砂を含む黒褐色土である。洪水層直下の耕土から2200個/gのイネの植物珪酸体が検出されている(2区西壁第1地点)。水田面には細かな凹凸があり、洪水堆積物が入り込んでいた。特に2区南部では、歩行状態を示す人足跡や、農耕具刃先の痕跡と見られる細長い凹み、小円形の凹みが検出された。

遺物は土師器破片22点、陶器4点、軟質土器3点、礫2点が耕土中あるいは洪水層中から出土した。第図1は陶器皿美濃系の灰釉で17世紀のものと見られる。2は瀬戸美濃系の灰釉で17世紀後葉～18世紀前葉のものと見られる。3は内耳鍋の破片で17世紀のものと推定される。

また、6号溝からは土師器破片20点と、中世とみられるすり鉢破片(第229図4)が出土した。第2洪水層下水田面の時期は確定しづらいが、出土遺物で最も新しいのは瀬戸美濃系の陶器鉢で、17世紀後葉～18世紀前葉とされているものである。これから考えれば、第2洪水層下水田は近世以降の水田面である可能性が高い。

2区6号溝(第168・169図 PL102)

位置 2区3-82-M・N-13～20G

3-92-L・M-1～7G

重複 4号溝に先行し、9号溝に後出する。

形状 微高地西縁辺に沿って緩やかなS字のカーブを描く南北方向の溝。北端・南端ともに調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.08m高い。

本溝より新しい4号溝と平行あるいは重複する部

第5章 2・3区の遺構と遺物

A-A'

1. 黒褐色土 5YR2/1 廢材などを含む攪乱層。
2. 褐色土 10YR4/3 白色軽石をやや多く含む。(表土)
3. 黒褐色土 5YR3/1 小石などを多く含んだ攪乱層。
4. 暗オリーブ褐色土 2.5Y3/3 黄色砂粒を少量含んだ攪乱層。
5. 黄灰色土 2.5Y4/1 小石を多く含んだ攪乱層。
6. 暗赤褐色土 5YR3/2 白色軽石を多く含む。小砂利を少量含む。(表土、新しい時期の水田耕土)
7. 褐色土 10YR4/4 白色軽石を多く含む。小砂利を少量含む。
8. 黒褐色土 10YR3/1 白色軽石(As-Cか?)を多く含む。小砂利をごく少量含む。
9. 黄色砂 2.5Y6/2 橙色砂(7.5YR6/8)を層状にやや多く含む。(第2洪水層)
10. 褐灰色シルト 10YR4/1 水田面を直接おおう、第2洪水層に伴うものか?(第2洪水層下シルト)
11. 褐灰色粘性土 10YR4/1 灰白色砂(10YR7/1)と灰黄色砂(2.5Y6/2)を少量含む(第2洪水層下水田耕土上層)
12. 灰黄褐色砂礫層 10YR5/2 上層は小石、小砂利、黒色粘性土(10YR7/1)、直径0.5～5cmの塊が多く混じるが、下層は灰黄褐色砂層となっている(第3洪水層)
13. 黒色粘性土 10YR2/1 (第3洪水層下水田耕土)
14. 粕川テフラ火山灰
15. As-B火山灰 5YR5/3
16. As-B軽石
17. 褐灰色粘性土(10YR4/1)と黒色粘性土(10YR2/1)が互層状に重なる混土。(As-B下耕土)
18. 暗赤灰色土 5R4/1 灰色シルトが少量混入したシルト層(第5洪水層に相当するシルト)
19. 暗青灰色土 5PB3/1 褐色・白色粒を多く含む。(第5洪水層下遺構面)
20. にぶい黄褐色砂礫層 10YR5/4 (第6洪水層)上・下層は粒子のこまかい層となっており、中層は直径0.5～2cmの礫層となっている。

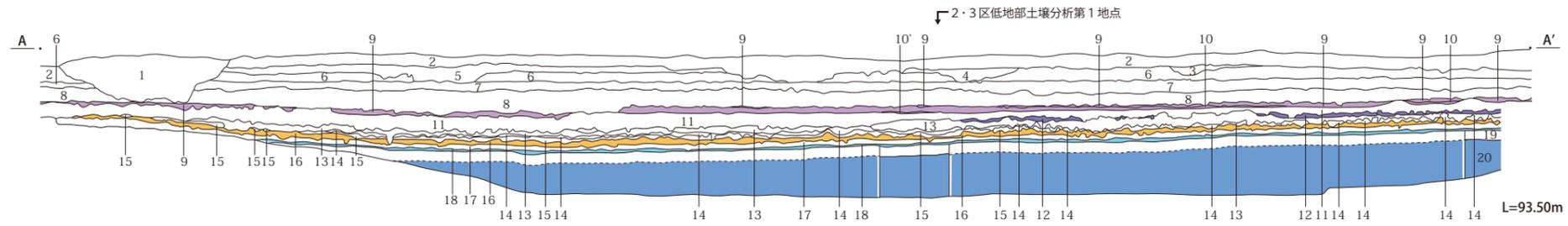
B-B'

1. 灰色土(2号溝埋土)
2. 灰色砂質土 やや褐色に近い(3号溝埋土)
3. 暗褐色土と4層の砂の混土(水田より新しい溝か?)
4. 橙色砂 粒子がこまかい。(2号洪水層)
5. 白色砂 粒子が非常にこまかい。(2号洪水層)
6. 7層の土に暗褐色土が混入
7. 橙色砂と白色砂の混土 6号溝埋土(2号洪水層)
8. 7層の土に小砂利が混入 6号溝埋土(2号洪水層)
9. 灰色シルト 6号溝埋土(2号洪水層)
10. 暗褐色砂質土 第3洪水層の砂多く、黄褐色砂微量混入。3区で見える第3洪水層の土が上の耕作によって混じっていると思われる。
11. 暗褐色砂質土 10層の土より砂が少なく、やや粘質
12. 暗褐色砂質土 10層の土よりやや砂質。10層の土をのせて畦をつくったと思われる。
13. 灰褐色砂質土 暗褐色土多く混入。
14. 赤褐色粘性土 As-B軽石を少量含む。(第3洪水層下水田耕土・As-B混土)
15. 赤褐色粘性土 As-B軽石をやや多く含む。(第3洪水層下水田耕土・As-B混土)
16. As-B火山灰
17. 赤褐色粘性土 As-B軽石を多量に含む。(As-B混土)
18. 粕川テフラ火山灰
19. As-B軽石 As-Bアッシュ火山灰と粕川テフラ火山灰を少量含む。
20. 灰色粘性土 白色シルトを層状に数層含む。
21. 黒褐色粘質土 直径0.5～1.0cmの小礫、細砂を多く含む。白色軽石を少量含む。
22. 灰色砂 直径0.3～0.5cm
23. 灰色細砂 直径0.1～0.3cm
24. 黒灰色砂礫層 直径10～15cmの円礫、直径3～5cmの円礫、直径1cmほどの小礫が混じっている。
25. 灰色砂礫層 直径0.5～1.0cmの小礫のみ。
26. 灰白色砂礫層 直径0.5～1.0cmの小礫のみ。
27. 灰色砂礫層 直径0.3～0.5cmの粗砂のみ。
28. 灰色砂層 直径0.1～0.3cmの粗砂に直径10～15cmの円礫を少量混じる。
29. 灰色砂層 直径0.1～0.3cmの粗砂のみ。
30. 灰色細砂層 直径0.1cmの砂のみ。

*22～30は、直径10cm以上の円礫も多く含み、荒砥川の河床堆積物との見方もあるが、最下層(30層)の直下には水田面が検出された。

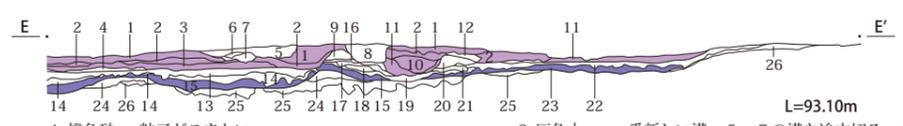
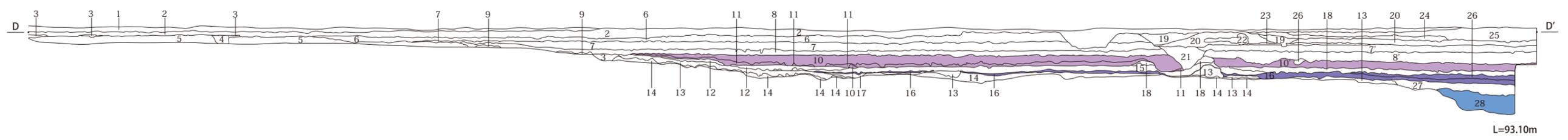
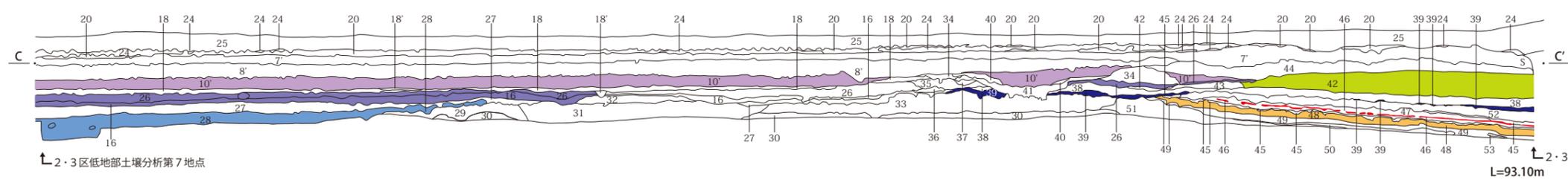
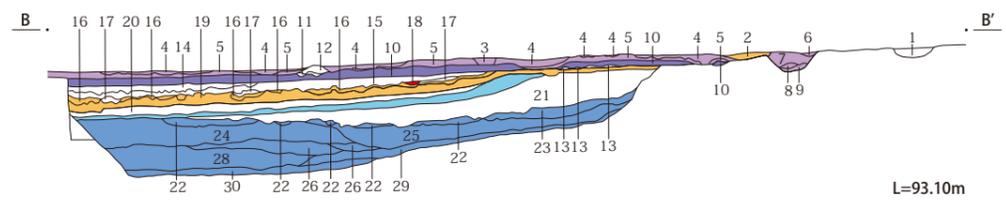
C-C' D-D' 共通

1. 褐灰色土 10YR4/1 白色軽石を少量含む。(表土)
2. 褐色土 10YR4/3 白色軽石をやや多く含む。(表土)
3. 黒色土 10YR2/1 As-Cを少量含む。(C混土、遺構の土)
4. 黒色土 10YR2/1 As-Cを多く含む。(C混土、溝か?)
5. 黒色土 10YR2/1 As-Cを含まない。
6. 暗赤褐色土 5YR3/2 白色軽石を多く含む。小砂利を少量含む。(表土、新しい時期の水田耕土)
7. 褐色土 10YR4/4 白色軽石を多く含む。小砂利を少量含む。
7. 暗灰色粘性土 N3/0 白色軽石をごく少量含む。(第1洪水層下水田耕土)7層は7層が変色したと思われる。
8. 黒褐色土 10YR3/1 白色軽石(As-Cか?)を多く含む。小砂利をごく少量含む。
8. 黒褐色土 7.5YR3/2 第1洪水層下水田耕土下の鉄分沈着層になっているため、赤く変色している。下層の10層が少量混じっている。
9. 暗褐色土 10YR3/3 (5層の下の地山)
10. 灰黄色砂 2.5Y6/2 橙色砂(7.5YR6/8)を層状にやや多く含む。(第2洪水層)
10. 橙色砂層 10YR6/8 10層が鉄分の影響により変色したもので、中層に礫を含む。西へ行くほど橙色が増す。
11. 褐灰色シルト 10YR4/1 (水田面を直接おおう、第2洪水層に伴うものか?)
12. 黒褐色土 10YR3/2 明黄褐色砂質土(2.5Y6/6)の直径1～2cmの塊と黒色土(10YR1.7/1)直径1～3cmの塊、灰白色砂(10YR7/1)を多く含む。
13. 黒褐色土(10YR3/2)と明黄褐色砂質土(2.5Y6/6)と黒色土(10YR1.7)の混土
14. 明黄褐色砂質土 2.5Y6/6 (9層の下の地山)
15. 褐灰色粘性土(10YR4/1)と灰白色砂(10YR7/1)の混土。灰黄色砂(2.5Y6/2)を多く含む。(第2洪水層下水田耕土下層)
16. 褐灰色シルト 10YR4/1 (第3洪水層に伴うシルト)
17. 黒褐色シルト 10YR3/1 14層を少量層状に含む。
18. 褐灰色粘性土 10YR4/1 灰白色砂(10YR7/1)と灰黄色砂(2.5Y6/2)を少量含む(第2洪水層下水田耕土上層)
18. 10層と18層の混土。
19. 褐灰色土 10YR5/1 (新しい溝の埋土)
20. 褐灰色砂 10YR6/1 明黄褐色砂(10YR6/8)をまだらに少量含む(第1洪水層)
21. 褐色粘性土 10YR4/1 白色軽石を少量含む。小砂利を少量含む(第1洪水層より下で、第2洪水層を切る溝)
22. 暗灰色粘性土 N3/0 白色軽石・小砂利をごく少量含む。
23. 暗赤褐色粘性土 5YR3/6 7層の耕土が鉄分の沈着により変色したものの。
24. 灰黄褐色土 10YR4/2 褐灰色砂(10YR6/1、20層)を多く混じる。
25. 灰黄褐色土 10YR4/2 白色軽石や、黒色土(1.7YR7/1)、直径0.5cm以下の塊を多く含む。
26. 灰黄褐色砂礫層 10YR5/2 上層は小石、小砂利、黒色粘性土(10YR1.7/1)、直径0.5～5cmの塊が多く混じるが、下層は灰黄褐色砂層となっている(第3洪水層)
27. 黒色粘性土 10YR2/1 (第3洪水層下水田耕土)
28. にぶい黄褐色砂礫層 10YR5/4 (第6洪水層)上・下層は粒子のこまかい層となっており、中層は直径0.5～2cmの礫層となっている。
29. 黒褐色土 10YR3/1 直径5～10mmの白色軽石をごく少量含む。As-Cを少量含む。
30. 灰褐色砂質土 10YR4/1
31. 黒褐色土 10YR3/2 As-Cをごく少量含む。(溝埋土)
32. 黒褐色砂 10YR3/2 黒色粘性土(10YR2/1)直径5～15mmの塊を多く含む。(畦状の高まり)
33. 黒褐色土 10YR3/1 As-Cを多く含む。
34. 暗褐色土 10YR3/3 10層を多く含む。
35. 黒褐色土(10YR3/1)と褐灰色土(10YR4/1)の混土 10YR3/1 直径0.5～1mmの白色軽石をごく少量含む。
36. 黒褐色土 10YR3/2
37. 黒褐色土 10YR3/2
38. 褐灰色土 10YR4/1
39. 褐灰色砂礫層(第4洪水層)
40. 黒褐色土 10YR3/2 10層を少量含む。
41. 黒褐色土 10YR3/2 10層を多く含む。
42. 掘削排土。
43. 黒褐色粘性土 10YR3/1 直径5～8mmの白色軽石を少量含む。(畦の可能性あり)
44. 黒褐色粘性土 10YR3/2 直径2～5mmの白色軽石を多く含む。黄褐色土粒(10YR5/8)を多く含む。(表土の一部)
45. As-Bピンク灰 5YR5/3
46. 粕川テフラ火山灰
47. 褐灰色粘性土 10YR5/1 45・46・48を少量含む。
48. As-B軽石。
49. 褐灰色粘性土(10YR4/1)と黒色粘性土(10YR2/1)が互層状に重なる混土。(B下耕土)
50. 黒色粘性土 10YR1.7/1
51. 暗灰色土 H.3/0 直径0.5～3mmの白色軽石を少量含む。
52. 黒褐色土 As-Bを多量に含む。
53. にぶい黄褐色シルト 10YR4/3



- 第2洪水層
- 第3洪水層
- 女堀排土
- 第4洪水層
- As-Kk
- As-B
- 第5洪水層
- 第6洪水層

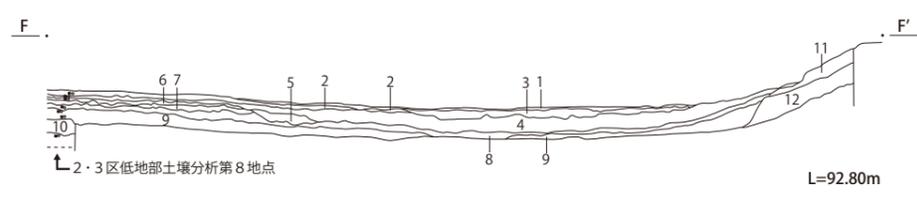
(A~Dの土層注記はP.●)



- 1. 橙色砂 粒子がこまかい。
- 2. 白色砂 粒子が非常にこまかい。
- 3. 白色砂礫土
- 4. 暗灰色シルト (水田面直上に部分的に薄く堆積している。)
- 5. 黄灰色砂質土 3号溝埋土。水田より新しい。
- 6. 橙色砂質土 3号溝埋土。水田より新しい。
- 7. 灰色砂質土 3号溝埋土。水田より新しい。
- 8. 灰色土 一番新しい溝。5~7の溝も途中切る。2号溝。
- 9. 暗褐色土 やや粘質土。橙色砂粒を少量含む。(畦埋土)
- 10. 暗褐色土 橙色砂と白色砂が混じる。
- 11. 灰色シルト
- 12. 灰色粘性土 砂、小砂利を少量含む。
- 13. 暗褐色土 やや粘質。橙色砂。黒色土塊を多く含む。(水田耕土)
- 14. 白色砂 層状に堆積。

- 15. 灰色シルト ラミナ状に堆積。
- 16. 橙灰色シルト
- 17. 暗褐色砂質土 13層に似る。(水田耕土)
- 18. 灰色シルト 直径0.5~1cmの黒色土塊を少量含む。
- 19. 灰色砂 小砂利を少量含む。
- 20. 暗褐色土 やや粘質。橙色砂。黒色土塊を少量含む。(9層に似る)
- 21. 灰色シルト 層状に堆積。

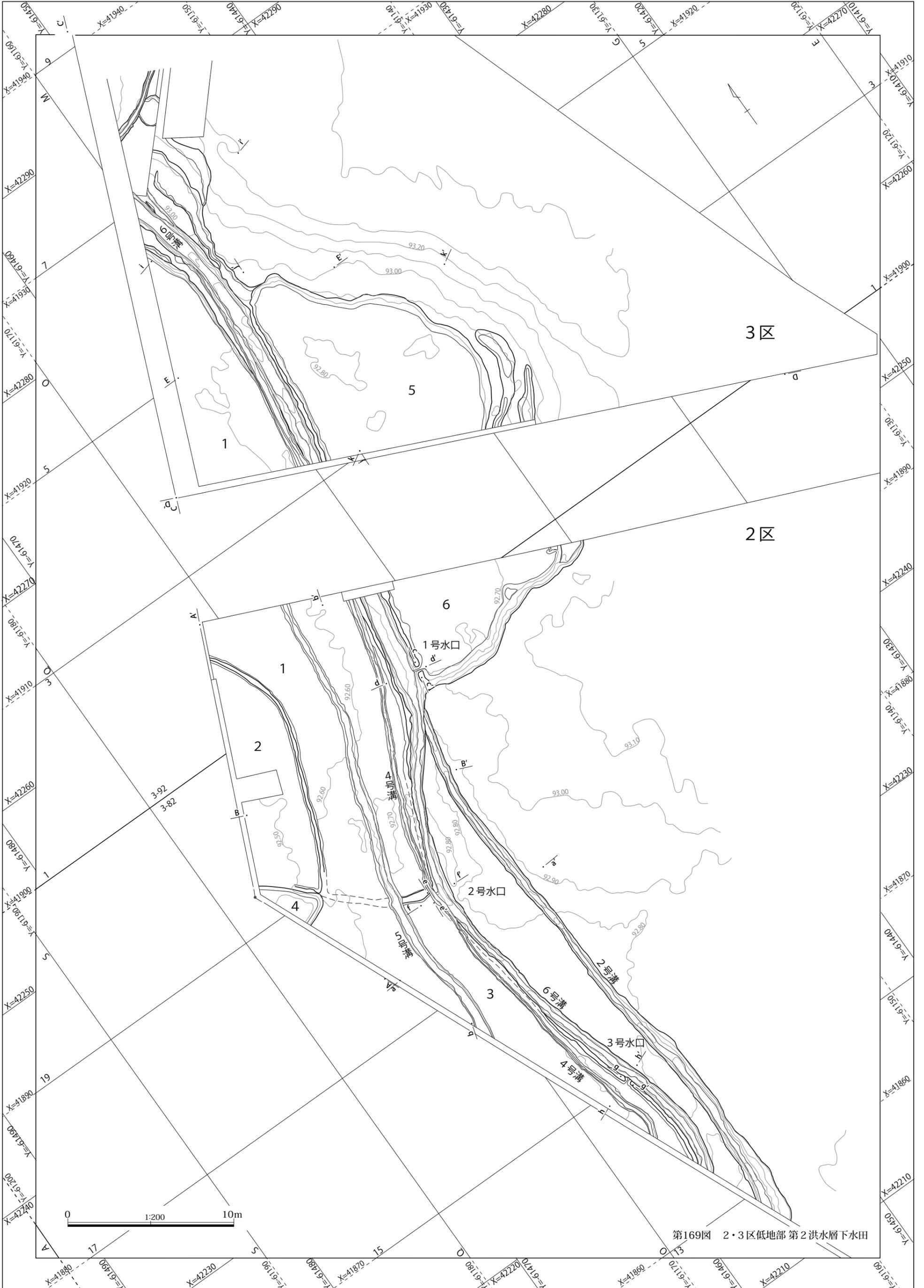
- 22. 灰色粘質土 直径1mm以下の黒色土塊をごく少量含む。
- 23. 灰色シルトと灰色砂の混土 直径2~5cmの黄色砂質土を塊状に少量含む。
- 24. 直径2~5cmの黄色シルト小塊。直径5~10cmのC混り黒色土塊。直径5~10cmの灰褐色粘土塊の混土。畦の盛り土と思われる。
- 25. 直径5~10cmの黄色シルト塊と直径5~10cmの灰褐色粘土塊の混土。洪水堆積物か?
- 26. 黄色シルト(地山)



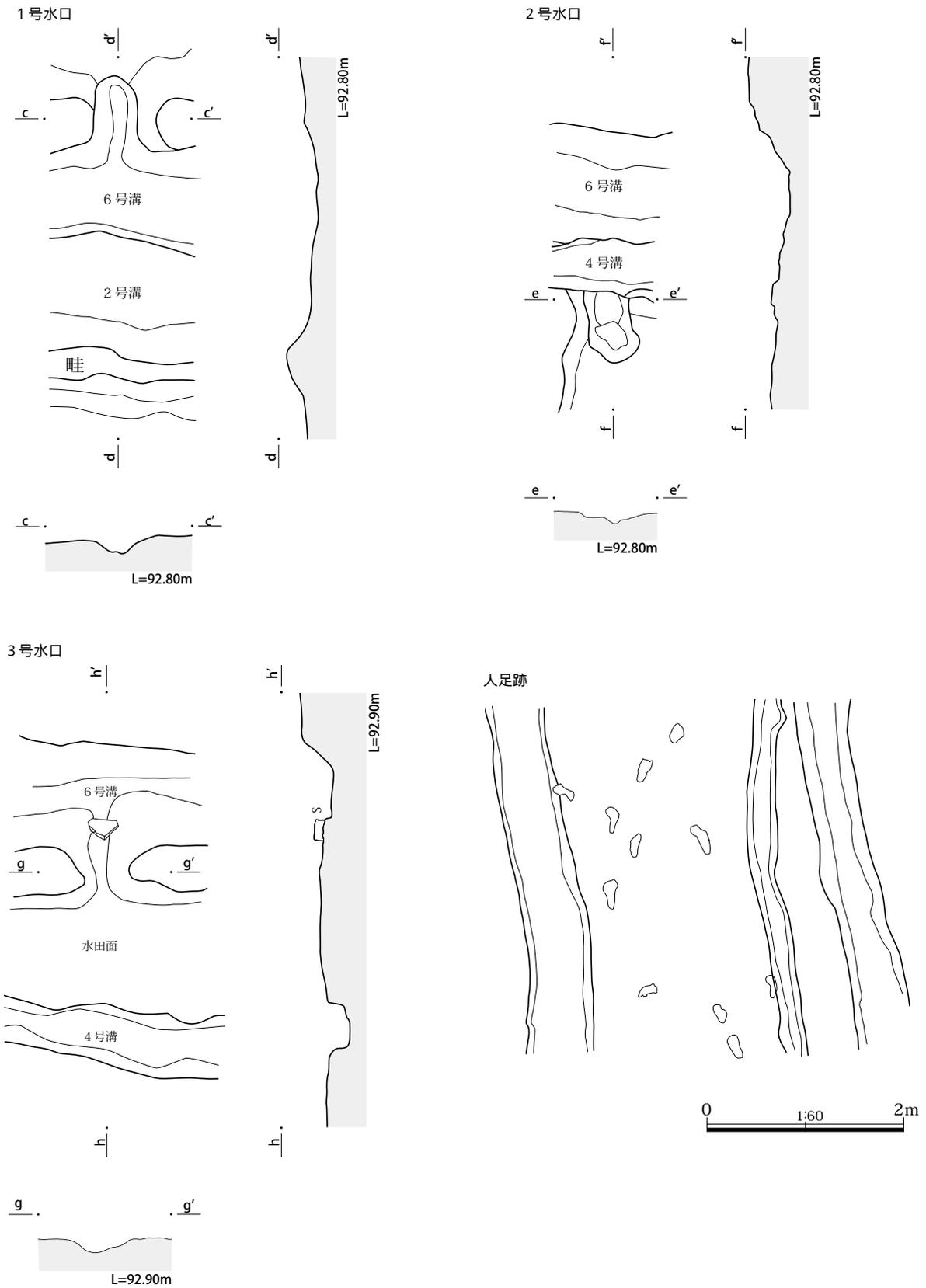
- 1. 黒灰色粘質土 褐灰色のシルトと炭化物層の縞状の層がある。
- 2. 灰色粘質土
- 3. 灰色粘質土 直径1~3cmの黄色粘土塊を含む。未分解の植物遺体が残る。
- 4. 灰色粘質土 少量の白色シルト塊を含む。未分解の植物遺体が残る。
- 5. 灰白色粘質土 未分解の植物遺体が残る。
- 6. 上層は灰白色シルト、下層は黒色粘質土
- 7. 灰白色シルト
- 8. 灰白色シルトと黒灰色粘質土の混土
- 9. 黒灰色粘質土 少量の灰白色シルトを含む。
- 10. 黄灰色砂層
- 11. 白色軽石を少量含む灰色粘質土 微高地堆積土
- 12. 灰色粘土 微高地堆積土



第168図 2・3区低地部 共通土層断面



第169图 2·3区低地部 第2洪水層下水田



第170図 2・3区低地部第2洪水層下水田 水口と足跡

第5章 2・3区の遺構と遺物

分では残存状態は良くないが、水田面と接する地点ではアゼを伴っていた。溝の東側にも水田区画のある北半部では両側に、南半部では西側のみにアゼがつくられていた。

規模 調査長 63.0 m 最大幅 1.40 m
 最小幅 0.76 m 深さ 0.24 m

断面形 上方が開く箱形

埋没土 水田面を覆っていたのと同じ灰黄色砂と褐色シルトで埋まっていた。

遺物と出土状況 土師器破片 20 点と、中世とみられるすり鉢破片 (第 172 図 4) が出土した。

所見 2・3区第2洪水層下水田に伴う用水路である。低地の東脇、微高地の縁辺に掘られている。時期は水田面と同じとすれば、近世の可能性が高い。

下記の2号溝～5号溝は、第2洪水層下面で検出・記録したが、第2洪水層より新しい遺構である。平面図 (第 169 図)・断面図 (第 168 図) は共通していることから、ここで記載する。なお、2区3号溝は土層断面 B - B で確認されたのみである。

2区2号溝 (第 168・169 図 PL100)

位置 2区3 - 82 - M - 12 ~ 19 G

重複 6号溝に後出する。

形状 微高地西縁辺に沿ったほぼ直線の南北方向の溝。北半は6号溝と重複する。本溝北半は土層断面 D - D と E - E で確認し、平面図は実測しなかった。南端は調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より 0.19 m 高い。

規模 調査長 38.0 m 最大幅 1.8 m

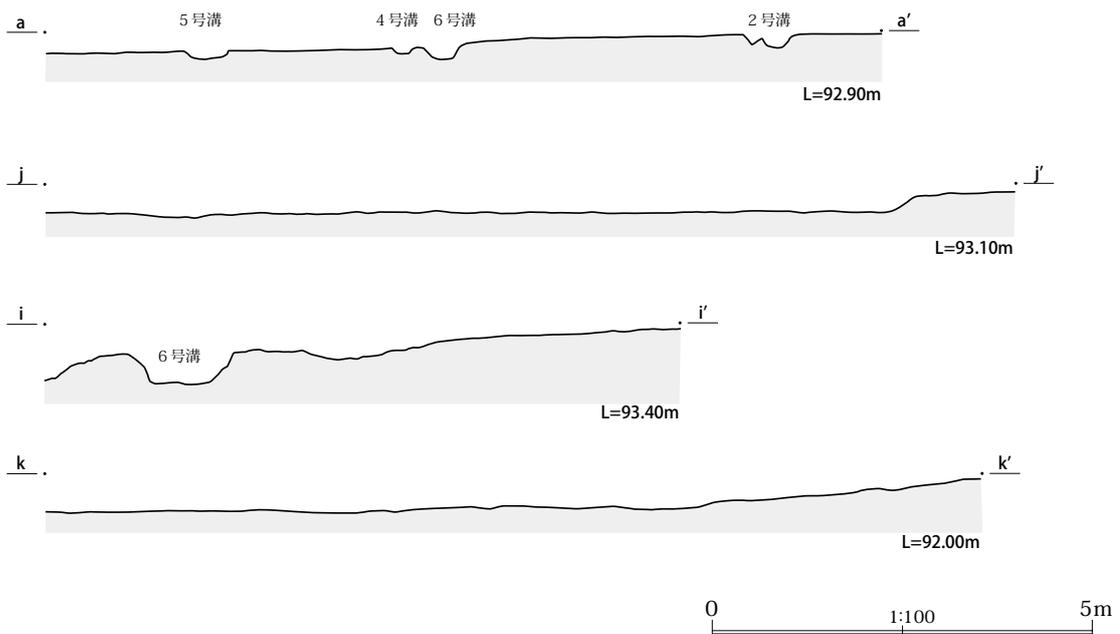
最小幅 0.40 m 深さ 0.09 ~ 0.38 m

断面形 浅い皿形

埋没土 灰色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片 22 点、須恵器 1 点、礫片 3 点、砥石 1 点 (第 172 図 6)、石製模造品 (7) が出土した。遺物は混入と推定される。

所見 具体的な時期は不明であるが、6号溝より新しいことから近世以降であろう。微高地の高まり部分を横断するように掘られている。中央部の底面標高はやや高くなっており用水路としては考えにくい。



第 171 図 2・3区低地部第2洪水層下水田断面

2区4号溝 (第168・169図 PL100)

位置 2区3 - 82 - M・N - 14 ~ 20 G

3区3 - 92 - L・M - 1 ~ 6 G

重複 6号溝に後出する。

形状 微高地西縁辺に沿ったほぼ直線の南北方向の溝。6号溝の西側に沿うように彎曲する。北端では6号溝に重複している。3区南壁付近では、6号溝西側のアゼを壊していた。底面は丸く凹んでおり、その標高は西端が東端より0.32 mほど高い。

規模 調査長 24.6 m 最大幅 0.56 m

最小幅 0.32 m 深さ 0.22 m

断面形 浅い皿形

埋没土 3区では白色軽石・小砂利を含む褐灰色粘性土で、2区では橙色砂で埋まっていた。

遺物と出土状況 土師器破片7点が出土した。小片で実測できなかったが、混入であろう。

所見 具体的な時期は不明である。

2区5号溝 (第168・169図 PL100)

位置 2区3 - 82 - N・O - 16 ~ 20 G

2区3 - 92 - N - 1 G

重複 第2洪水層に後出する。第2洪水層下水田のアゼを壊していた。

形状 微高地西縁辺に沿ったほぼ直線の南北方向の溝。4号溝の2~3 m西側を沿うように彎曲する。2区では検出できたが、3区ではその延長を確認できなかった。底面はほぼ平坦で、その標高は北端と南端は同じであった。

規模 調査長 29.0 m 最大幅 0.72 m

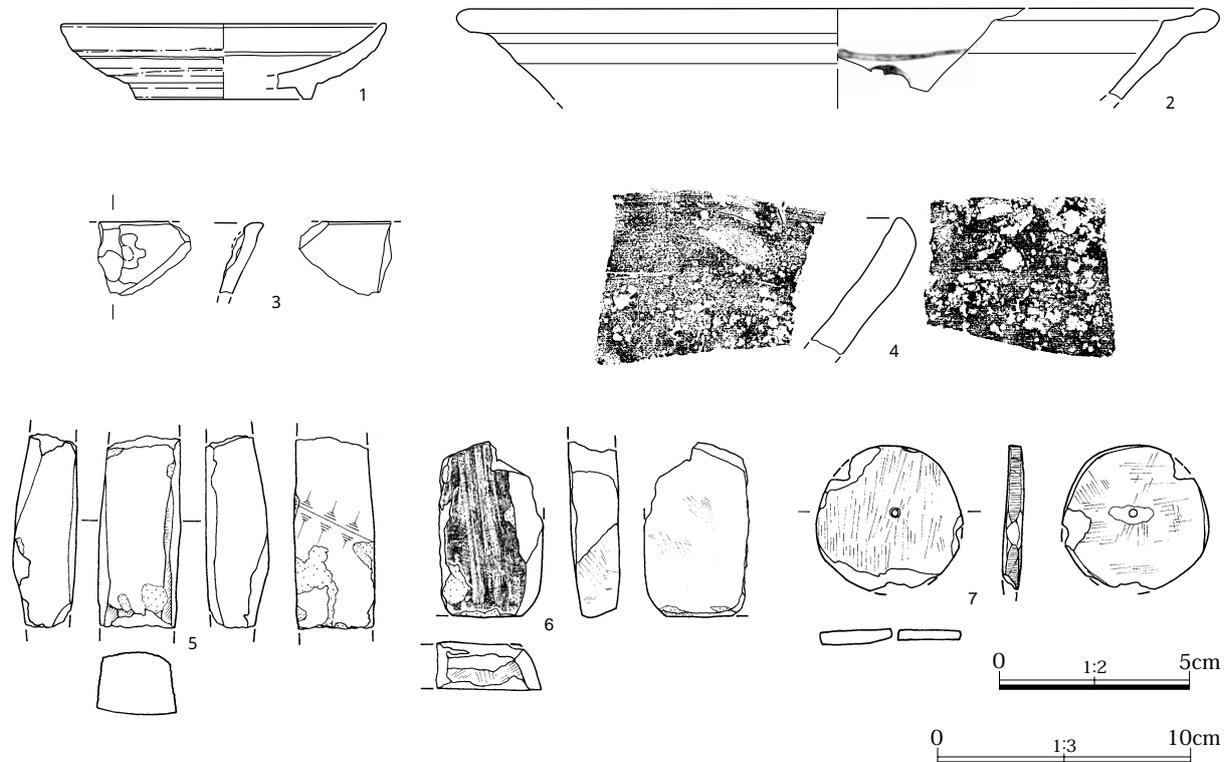
最小幅 0.52 m 深さ 0.12 m

断面形 浅い皿形

埋没土 橙色砂で埋まっていた。

遺物と出土状況 土師器破片が2点出土した。

所見 具体的な時期は不明であるが、6号溝より新しい4号溝と同様な堆積物で埋まっていたことから、近世以降の水路と考えたい。



第172図 2・3区低地部第2洪水層下水田出土遺物

(2) 第3洪水層下面

2・3区第3洪水層下水田(第168・173・174図
PL102～104・176 遺物観察表P.509)

2・3区の西部、3-82-M～P-12～20
G、3-92-J～M-2～8Gにわたって、第3
洪水層に埋まった水田面が検出された。本水田面
は、区画するアゼはみつからなかったが、用水路に
はアゼが伴い、土壌分析でも洪水層直下の耕土から、
1500個/gのイネの植物珪酸体が検出されている(2
区西壁第1地点)ことから、水田面と判断した。

水田面を覆っていた第3洪水層は、2区では厚さ
5～7cmの褐灰色シルト、3区では4～20cmの
灰黄褐色砂礫と褐灰色シルトである。上層に砂礫
層、下層にシルトが堆積していた。洪水層は、2区
の北西隅に堆積しており、下位の水田面を覆ってい
た。洪水層の残存状況は一様ではなく、2区南半で
はほとんど残っていなかった。上位の水田耕土に鋤
き込まれたものと考えられる。土壌分析資料を採取
した第1地点でも第3洪水層は明確にはとらえられ
なかった。第3洪水層の堆積時期は不明であるが、
1108(天仁元)年に降下した浅間Bテフラより新し
く、第2洪水層より古い。

第3洪水層下水田域を構成しているのは、低地縁
辺に掘られた9号溝と、アゼ状の凹凸がある平坦面
である。9号溝は、上位にあった6号溝とほぼトレ
ースする位置にある。水田面への給配水は、上位の第
2洪水層下水田と同様に、微高地縁辺を北から流下
する9号溝によって行われていたと推定される。

水田面には区画アゼは検出されなかったが、2区
では上幅1.0m、下幅2.2m、高さ0.09mほどの
緩やかな帯状の高まりが、3区では上幅0.32m、
下幅0.88m、高さ0.14mのやや細い帯状の高ま
りが検出された。上位の第2洪水層下水田で5区画
とした半円形の部分では、水路である9号溝の東岸
のアゼがなくなっており、洪水層下面の凹凸が著し
くあったことから、水田化されていなかった可能性
が高い。区画5は、洪水被災後、9号溝を復旧して
6号溝を掘った際に、水田化されたものと推定される。

水田耕作土は黒色粘性土、あるいは黒褐色土と明
黄褐色砂質土と黒色土の混土である。

遺物は縄文土器破片1点、弥生土器破片3点、土
師器破片166点、陶器4点、軟質土器3点、剥片
1点、礫片1点、礫3点が耕土中あるいは洪水層中
から出土した。いずれも混入と見られる。また、銭
貨4枚が錆着した状態で耕土中から出土した。墓坑
は検出されなかった。

本水田の時期を示す遺物は出土しなかったが、水
田構造の共通性からすれば、第2洪水層下水田とあ
まり隔たらない時期で、浅間Bテフラ降灰後、近世
以前に開田されたものと考えられよう。

2区9号溝(第168・173図 PL103)

位置 2区3-82-M・N-13～20G

3-92-L・M-1～7G

重複 6号溝に先行する。

形状 微高地西縁辺に沿って緩やかなS字のカーブ
を描く南北方向の溝。北端・南端ともに調査区外に
伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端
より0.06m低い。

残存状態は南にいくにしたがって浅く、細くなっ
ていた。3区では溝の西側のアゼが明瞭であったが、
2区ではアゼの残存状況も悪くて、南半はほとんど
見えなくなっていた。

規模 調査長 61.0m 最大幅(北端) 0.7m

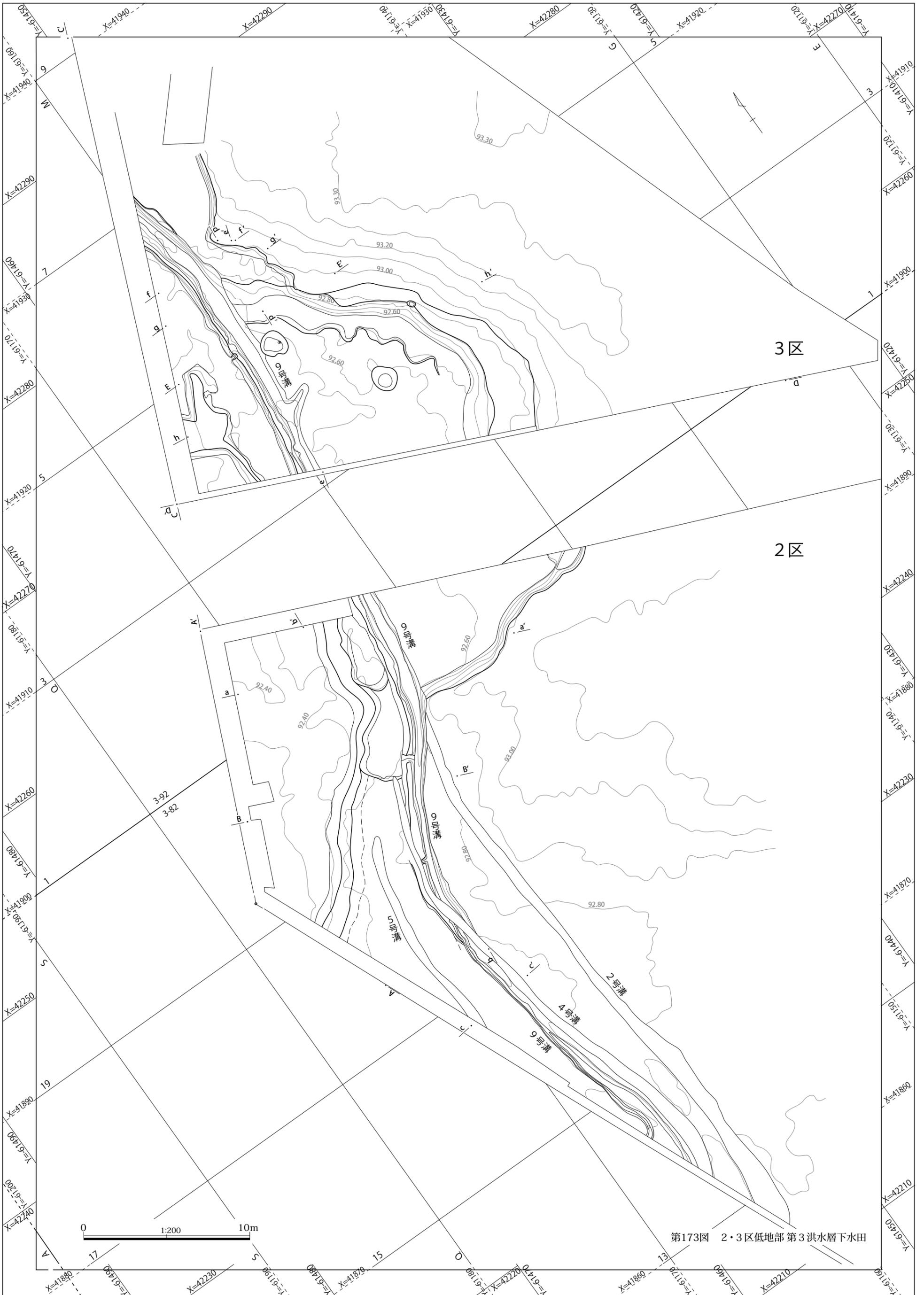
最小幅(南端) 0.2m 深さ(北端) 0.23m

断面形 上方が開く箱形。

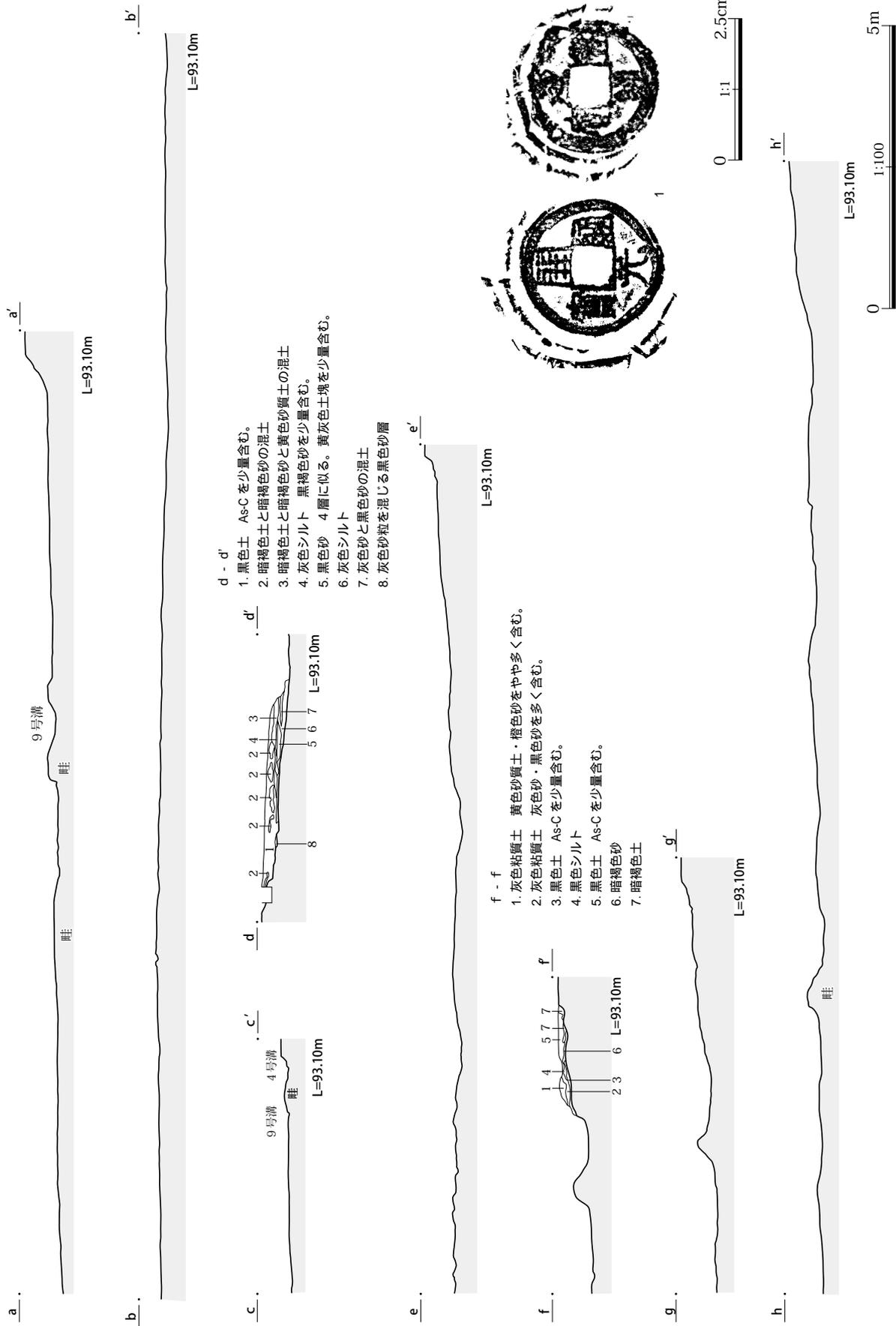
埋没土 水田面を覆っていたのと同じ灰黄褐色砂礫
と褐灰色シルトあるいは、白色砂と灰色シルトで埋
まっていた。共通土層断面C-CとD-Dでは、
砂やシルトに混じって褐灰色粘性土や黒褐色土を含
む土が9号溝に堆積していることが記録されている
が、洪水被災後、用水路が掘り直されたことを示す
のかもしれない。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 2・3区第3洪水層下水田に伴う用水路であ
る。低地の東脇、微高地の縁辺に掘られている。



第173图 2·3区低地部 第3洪水層下水田



第 174 図 2・3 区低地部第 3 洪水層下水田断面と出土遺物

(3) 第4洪水層下面

3区第4洪水層下水田・畝(第168・175・176図
PL104・105 遺物観察表 P.509)

3区の北西部、3-92-J~L-6~11Gの
低地内で第4洪水層に埋まった水田面、微高地斜面
で第4洪水層と同層位と推定される畝跡が検出された。

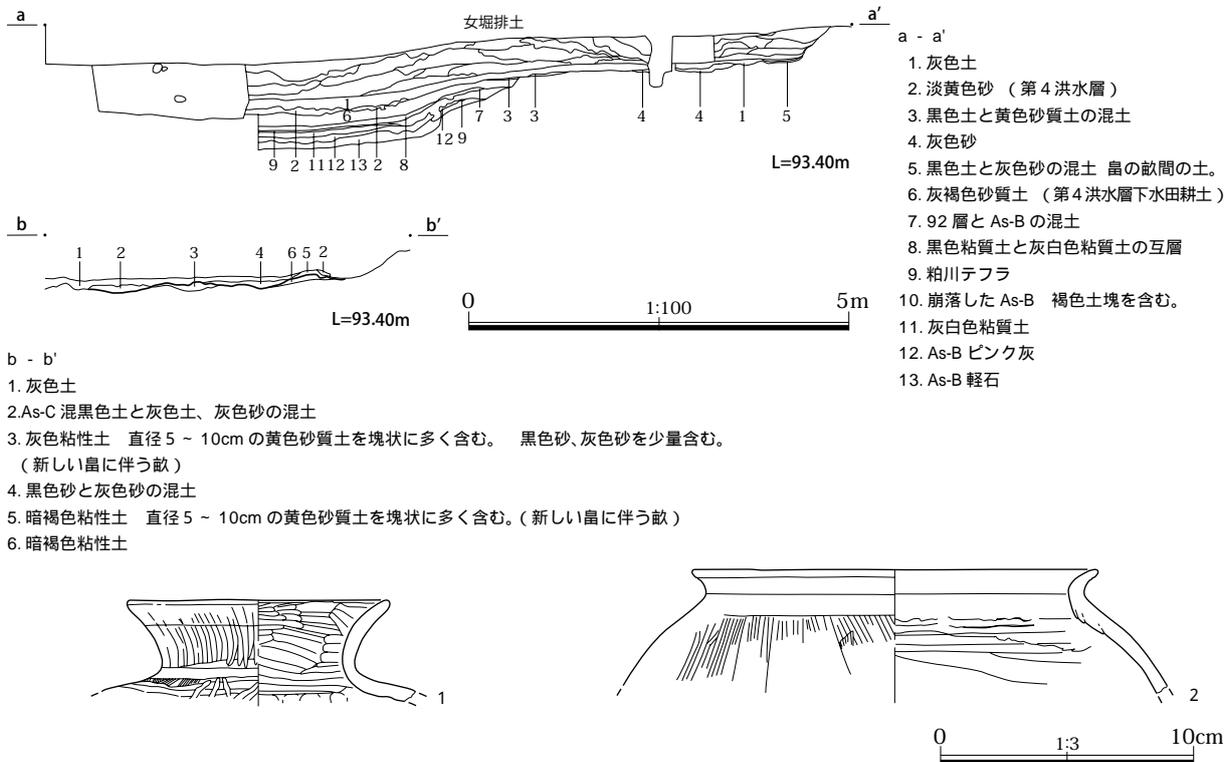
水田面を覆っていた第4洪水層は、厚さ2~
15cmの褐灰色砂礫層である。洪水層は、3区の北
西隅低地内から微高地斜面にかけて、断続的に堆積
していた。土層断面a-a'(第175図)では、低
地内の第4洪水層(2層)と微高地上の灰色砂(4
層)が繋がらないことから分けて記載したが、共通
土層断面C-C'(第168図)では同一層(39層)と
判断できた。したがって、低地内の水田と、微高地
斜面から上面にかけての畝は同時期のものと推定し
ておきたい。第4洪水層の堆積時期は不明であるが、
1108(天仁元)年に降下した浅間Bテフラより新し
く、女堀掘削より古い。

第4洪水層下水田域を構成しているのは、アゼ状
の短い高まりと足跡と推定される小穴がある平坦面

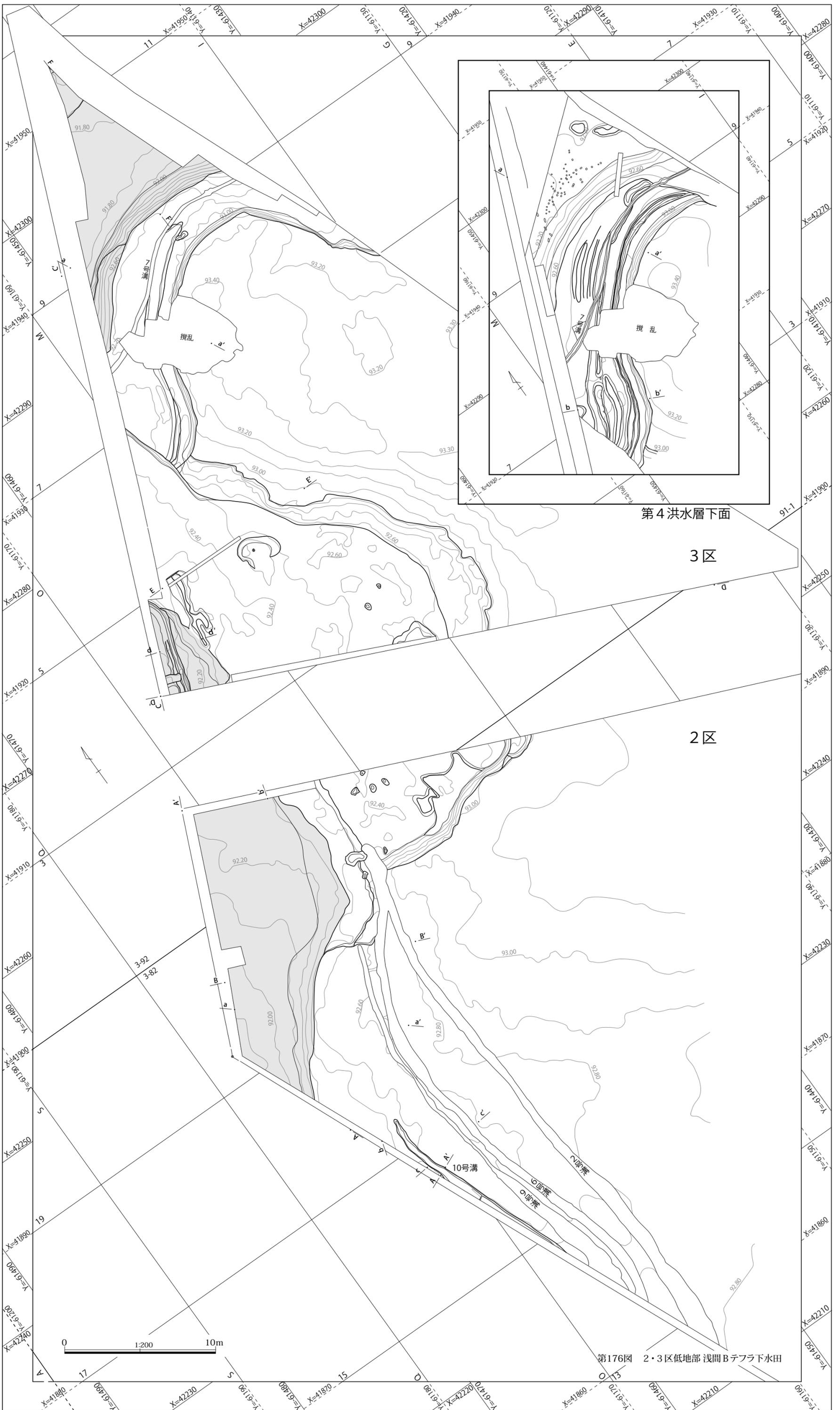
である。水田面に関わる水路は検出されなかった。
水田面には明瞭な区画アゼは検出されなかったが、
北隅に上幅0.28m、下幅0.8m、高さ0.27mほ
どの緩やかな帯状の高まりが3.24mにわたって検
出された。また、直径0.1m前後の丸い小穴や長さ
0.25mの細長い小穴が検出された。後者は微妙な
彎曲があり、人足跡の可能性が高い。水田耕土は褐
灰色砂質土である。植物珪酸体は、イネが1200個
/gヒエ属型が800個/g検出されている。

畝跡は、微高地への斜面を削り出して平坦にした
ところへ、畝間状の溝を切って畝としている。畝間
と畝の凹凸は明瞭ではないが、わずかながら700/
gのイネの植物珪酸体が検出されているので、畝と
判断した。

遺物は土師器破片161点、剥片1点、礫片5点、
礫2点が耕土中あるいは洪水層中から出土した。い
ずれも混入と見られる。本水田の時期を示す遺物
は出土しなかったが、層位からすれば、浅間Bテ
フラ降灰(1108年)以降、女堀掘削以前という限
られた時間内ということになる。



第175図 3区低地部第4洪水層下水田断面と出土遺物



第4洪水層下面

3区

2区

0 1:200 10m

第176図 2・3区低地部 浅間Bチフラ下水田

(4) 浅間Bテフラ下面

2・3区浅間Bテフラ下面

(第168・176・177図 PL105・106)

2区・3区の低地部では、2区北西隅の1段下がった部分と、3区北隅の深い部分で浅間Bテフラを検出した。2区の浅間Bテフラは第2洪水層下水田面から0.10～0.18m下に0.18cmほどの厚さで堆積していた。浅間Bテフラの2cmほど上位に浅間粕川テフラの火山灰が一部に残っていたが、多くは上層の耕作により鋤き込まれたものと推定される。

一方、3区では、浅間Bテフラの2～6cmほど上位に浅間粕川テフラが断続的に残っていた。浅間粕川テフラと浅間Bテフラの間層は数cmであり、浅間粕川テフラ直下の遺構確認作業はできなかった。浅間Bテフラの降灰時期は、1108(天仁元)年とされている。

2・3区とも、浅間Bテフラ直下面は平坦であったが、アゼや水路は検出されなかった。また、直下の土壌分析でもイネの植物珪酸体が検出されていないことから、水田面と判断しなかった。

2区の南半で上位の第3洪水層下水田の耕土を掘り下げている際に、10号溝を検出した。この地点は浅間Bテフラの残存がない地点である。10号溝

の埋没土は浅間B軽石を多く含む暗褐色土であり、浅間Bテフラより新しい遺構であるが、ここで報告した。

2区10号溝(第176・177図 PL106)

位置 2区3-82-N・O-14～17G

重複 無し

形状 微高地西縁辺に沿って緩やかなカーブを描く南北方向の溝。北端は3-82-O-17Gで見えなくなるが、南端は調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.19m高い。

残存状態は北にいくにしたがって浅く、細くなっていた。

規模 調査長 14.40m 最大幅 0.64m

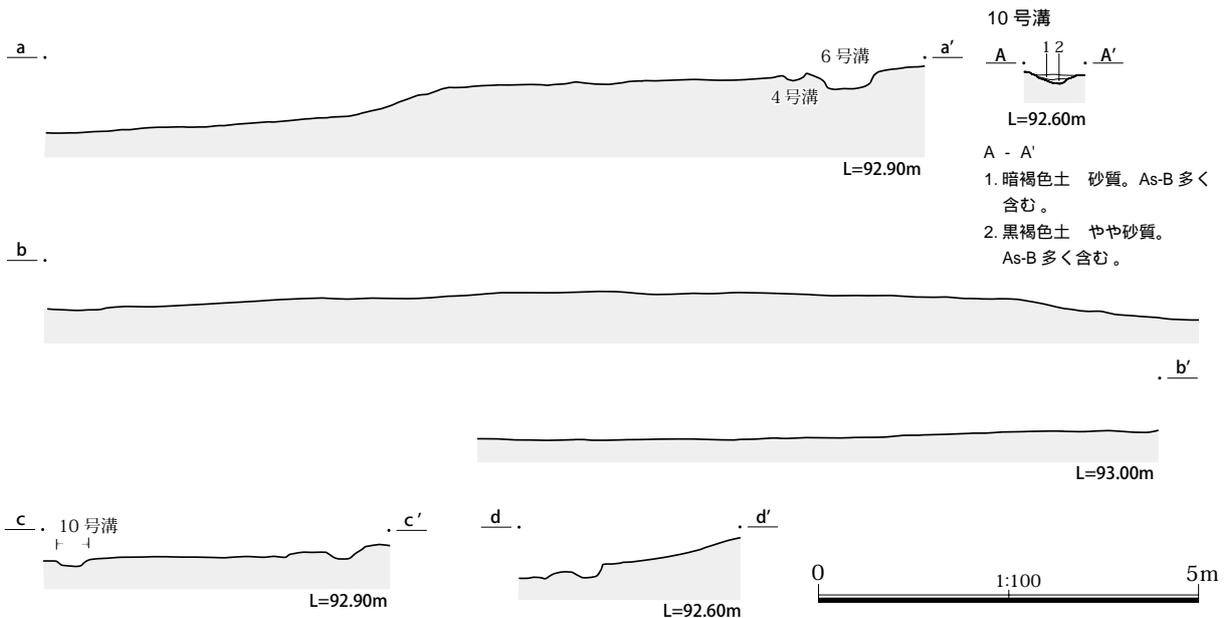
最小幅 0.48m 深さ 0.12m

断面形 浅い皿形

埋没土 浅間Bテフラを多く含む暗褐色土・黒褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 低地の東脇、微高地の縁辺に掘られている。時期は第3洪水層下水田より古く、浅間Bテフラ降灰より新しい。



第177図 2・3区浅間Bテフラ下面・2区10号溝断面

第5章 2・3区の遺構と遺物

(5) 第5洪水層下面

2区第5洪水層下平坦面(第178図 PL107)

2区の低地部浅間Bテフラとほぼ同じ範囲の下層に、第5洪水層に覆われた平坦面が検出された。ここでは、洪水層が検出されたため下面の調査を実施したが、水田面として判断できるアゼや水路は検出されなかった。

第5洪水層は、暗赤灰色のシルトで、西壁沿いは厚さ5～8cm、谷東部では厚さ10～15cmほどが堆積していた。第5洪水層の堆積した時期は、上位に浅間Bテフラがあることから、1108(天仁元)年以前ということになる。

下位の土壌は白色軽石・小礫・細砂を含む黒褐色粘質土である。残念ながら西壁沿いの試料採取地点に第5洪水層下土壌がなかったために、土壌の植物珪酸体分析はできなかった。第5洪水層下平坦面が水田であったかどうかは判断できなかった。

遺物は出土しなかった。

(6) 第6洪水層下面

2・3区第6洪水層下水田(第178図 PL107)

2区の低地部、浅間Bテフラや第5洪水層よりやや広い範囲に第6洪水層に覆われた水田面が検出された。本水田面は、区画するアゼはみつからなかったが、棚田状に段があり、土壌分析でもイネの植物珪酸体が検出されていることから、水田面と判断した。また3区でも南西隅に第6洪水層に相当すると考えられる砂礫層を確認し、その直下からアゼ状の高まりを検出した。

水田面を覆っていた第6洪水層は、厚さ0.8mにおよぶ砂と砂礫の互層で、直径10cmの円礫も含んでいた。当初は荒砥川の河床礫とも考えたが、34層(第168図B-B')下位に棚田状の水田面を検出した。第6洪水層の堆積時期は不明であるが、1108(天仁元)年に降下した浅間Bテフラや第5洪水層より古い。堆積物の層位は、1区で浅間B軽石層の下位に堆積していた第2洪水層と類似している。

第6洪水層下水田域を構成しているのは、2区で

は3段に造成された水田面、3区ではアゼである。用水路は検出されなかった。2区の棚田区画は、幅1.2m、長さ4mほどの細長い帯状で、等高線に沿って弧状につくられていた。3段目は平坦面が広くなっていたが、幅9.2m以上の区画になる。段を区切る明瞭なアゼや水口は検出されなかった。

3区で検出されたアゼ状の高まりは上幅0.3m、下幅0.5m、高さ0.10mほどの帯状である。その延長は2区でもうっすら確認することができた。なお、3区の第6洪水層下水田は、調査工程の都合で第176図の浅間Bテフラ下面の図とともに作図した。

第6洪水層下水田の水田耕作土は白色軽石を含む黒褐色粘性土である。土壌の植物珪酸体分析でも3000個/gと比較的高い密度でイネの植物珪酸体が検出されており、水田面であったことを補強している。

遺物は出土しなかった。

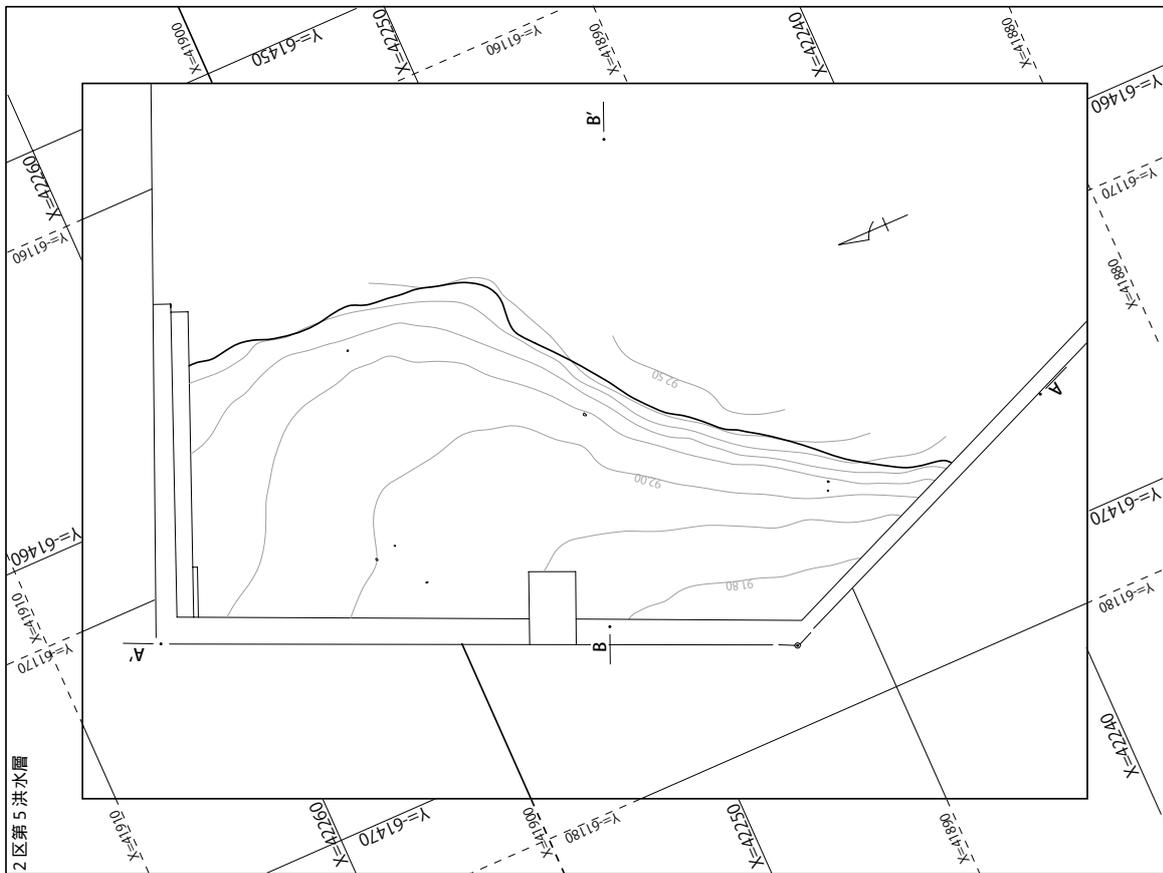
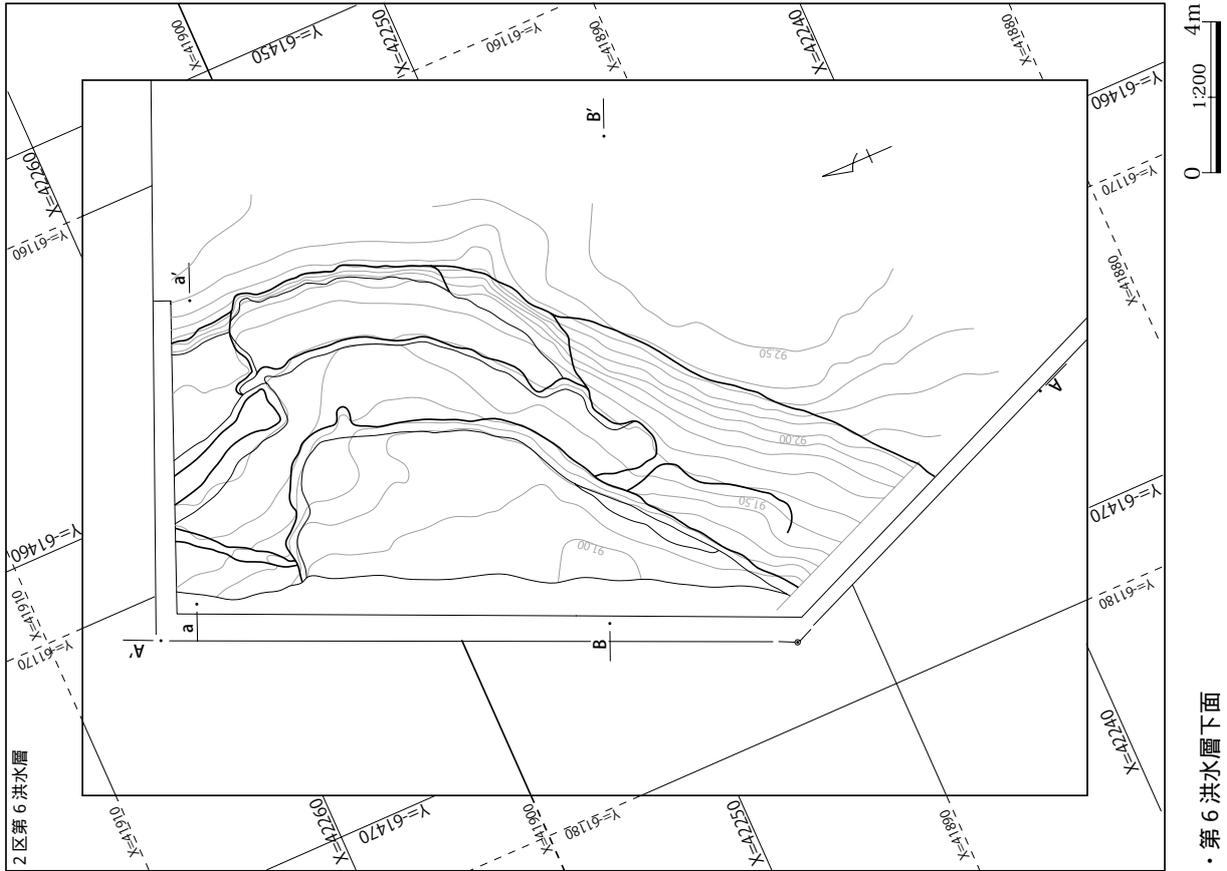
本水田の時期を示す遺物は出土しなかったが、水田面を覆う洪水堆積層の層位からすると、1区で浅間B軽石層の下位に堆積していた第2洪水層と対比できる可能性がある。1区第2洪水層下水田に伴う溝から8世紀後半から9世紀の時期の土師器が出土している。第2洪水層下水田の埋没時期を示唆していると推定され、1区第2洪水層は、818(弘仁九)年の地震に伴う洪水層に対比できると推定される。

したがって2区第6洪水層も同様な時期と考えておきたい。

(7) 黄色砂質土面(第179・180図 PL107)

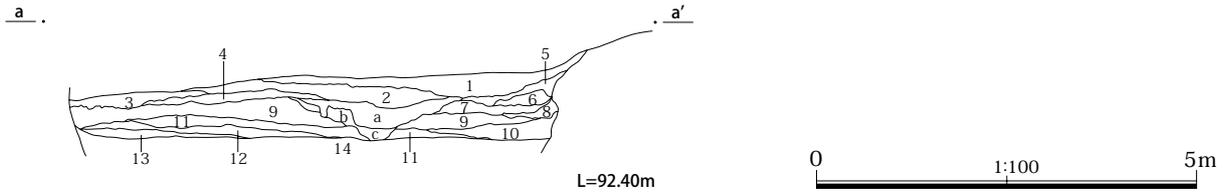
低地部の最終面は黄色砂質土である。ここでの調査は、2区北壁沿いで第6洪水層耕土下の土層断面の記録、3区西壁沿いのトレンチでの断面観察、3区北隅浅間B下水田面下層の土層断面観察を行った。

2区の第6洪水層下水田耕土は厚さ0.3mほどの黒色粘質土や灰色砂質土であり、その下位には砂やシルト・砂礫の互層で、さらに数mの礫層が堆積していることが判明した。(第179図a-a')。これ



第178図 2区第5・第6洪水層下面

第5章 2・3区の遺構と遺物



a - a'

- | | |
|-----------------------------|--|
| 1. 白色軽石混じりの黒色粘質土 | 10. 灰色砂 |
| 2. 黒灰色砂質土 | 11. 灰色砂 直径0.5cmの砂層。直径3～5cmの小礫を含む。 |
| 3. 灰色砂質土 | 12. 灰白色シルト |
| 4. 黄灰色砂質土 3層と下層の混土。 | 13. 灰色砂 |
| 5. 黄灰色砂質土 4層に似る。黄灰色土塊を少量含む。 | 14. 礫層 直径2～15cm。0.7ユンボバケツで2杯部の深さまで礫層は続く。礫層上面20cmまでの水位があり、以下の調査は不能。礫層の状態から見て、荒砥川旧河道堆積物と考えられる。 |
| 6. 灰色砂質土塊と黄色砂質土塊の混土 | a. 2層と7層の混土 |
| 7. 黄灰色砂 | b. 2層の塊を混じる9層 |
| 8. 灰色砂質土塊、黄色砂質土塊の混土 | c. 灰白色砂層 |
| 9. 灰白色砂 | |

第179図 2区第6洪水層下水田耕土下位土層断面

こそは荒砥川河床に関わる礫層と推定される。

また、3区西壁沿いのトレンチの土層断面(第168図C-C')で、厚さ0.3m以上の浅間C軽石を含む黒褐色土あるいは黒色土を確認した。また第6洪水層より下位の層位で、浅間C軽石を含む黒褐色土あるいは黒色土に掘り込んだ3区14号溝を検出した。埋没土は浅間C軽石を少量含んだ黒褐色土で、台地の縁辺に掘られた溝である。

3区14号溝(第180図 PL107)

位置 2区3-92-L・M-5～7G

重複 無し

形状 微高地西縁辺に沿うほぼ直線の南北方向の溝。トレンチ調査なので、両端ともに調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.05m高い。

規模 調査長 12.60m 最大幅 0.80m

最小幅 0.48m 深さ 0.22～0.86m

断面形 箱形

埋没土 浅間C軽石を少量含む黒褐色土で埋まっていた。

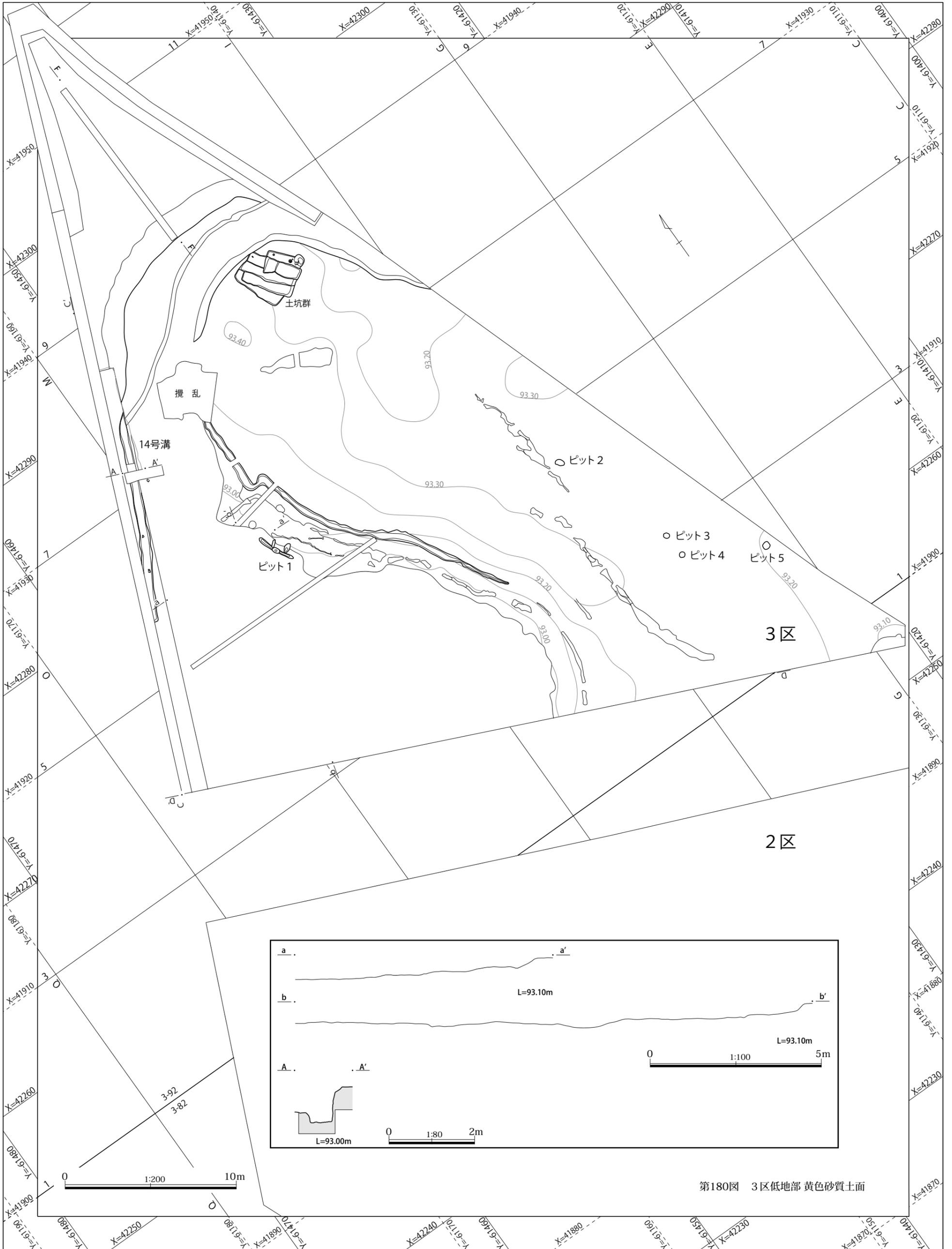
遺物と出土状況 遺物は埋没土中に小礫が3点出土したのみである。

所見 低地の東脇、微高地の縁辺に掘られている。

時期は第6洪水層下水田より古く、浅間C軽石降灰より新しい。古墳時代～古代の可能性はあるが、調査範囲も狭く、結論をだすまでには至らなかった。

3区低地部北隅(第179・180図 PL107)

3区北隅では、浅間Bテフラ直下の下位にトレンチを設定し、土層を確認・記録した。(第168図共通土層断面F-F')直下の土壌は黒灰色～灰色の砂質土が大部分で、未分解の植物遺存体が残っていた層もあった。浅間Bテフラ直下面から0.8～1.2m下位には礫層がある。ここでも土壌分析を行ったが、植物珪酸体は検出されなかったので、下位の調査は本トレンチ調査で終了とした。



第180図 3区低地部 黄色砂質土面

第6章 4区の遺構と遺物

1. 概要

(1) 4区低地部(第181図 PL108)

4区低地部は荒砥川の後背湿地にあたる地形面である。産業廃棄物の埋納が著しく、各遺構面を破壊していたが、以下の7面で調査を実施した。3区で検出した第1洪水層および第4洪水層は確認できなかった。

また、4区は工事工程の都合から東西を二分して調査することとなり、掘り下げと、図面および写真の記録はそれぞれの発掘区で実施した。報告にあたっては、遺構平面図は合成して製図し、写真は西半部と東半部で別に撮影したものを併載した。特に図面は隣接部分の遺構線や等高線に連続しない部分が見られたが、そのまま掲載した。

第2洪水層下面(付図4)では、長方形に区切られた耕作遺構と、その内部を復旧した復旧溝を検出した。区画は9区画に分かれる。検出された遺構面の状況は一様ではなく、1～3区画は洪水層直下平坦面、4～8区画は復旧溝、9区画は洪水層直下畠である。4～8区画での復旧が水田を対象にしたのか、畠を対象にしたのかは判然としない。1～3区画は平坦面で溝と人足が検出されている南西隅の1号溝を用水路と考えれば、4～8区画は水田の復旧と考えられる。一方9区画はあきらかに洪水層下の畠であり西壁共通土層断面B-Bでは洪水被災の畠を切って8区画の復旧溝が掘られている。8区画の北よりは畠であった可能性が高い。

第3洪水層下面(第188図)では平坦面、段、農具痕跡、凹地を検出した。第3洪水層が確認できたのは、4区低地部の東部谷幅40m分ほどである。北端の女堀排土山の裾を切って造成した平坦面に、2カ所の農具痕集中区が検出され、トレンチ調査を実施した。谷東端には凹地があり、下位は帯状の谷になっていると推定される。

4区の低地部でも、第3洪水層の下位、浅間粕川テフラの上位で女堀(第225図)を確認した。4区でも排土下位に浅間粕川テフラの攪乱層と明瞭な浅間Bテフラ層を確認した。女堀の埋没土は拳大の礫が混じる砂礫層で、荒砥川の洪水堆積物と推定される。また排土下面は遺構検出作業を実施したが、明瞭な遺構は検出されなかった(第228図)。女堀およびその直下面については、第7章で詳述する。

4区低地部でも浅間粕川テフラ層は、下位の浅間Bテフラ(As-B)との間層が1～数cmと薄く、浅間粕川テフラ自体の層厚も数mm以下であったため、直下面の精査は実施できなかった。

浅間Bテフラ下面(付図5)では、発掘区中央部で畠跡を検出した。また北西部から中央部にかけて溝2条、土坑5基を検出した。溝および土坑はいずれも浅間Bテフラより新しい遺構である。この面で低地部東西の凹地が明瞭に視認できるようになった。

第5洪水層(第192図)は低地部全体で検出されたが、遺構が確認できたのは北東部の低地部西端で、等高線に平行して細長い水田区画を検出したにとどまった。

第6洪水層(第194図)は、第5洪水層の下位で検出された。遺構は検出されなかったが、流木が出土した。その年代測定をおこなったところ、交点の暦年代は紀元前14520年との結果を得た。

(2) 4区台地部(PL121)

4区台地部は荒砥川の自然堤防と考えられる地形面である。ここでは、通称「権現山」という土山が現存し、今回の調査で女堀排土山が残ったものであることが判明した。

その権現山については当初、古墳との推測もあったため、現形面の測量を実施した。

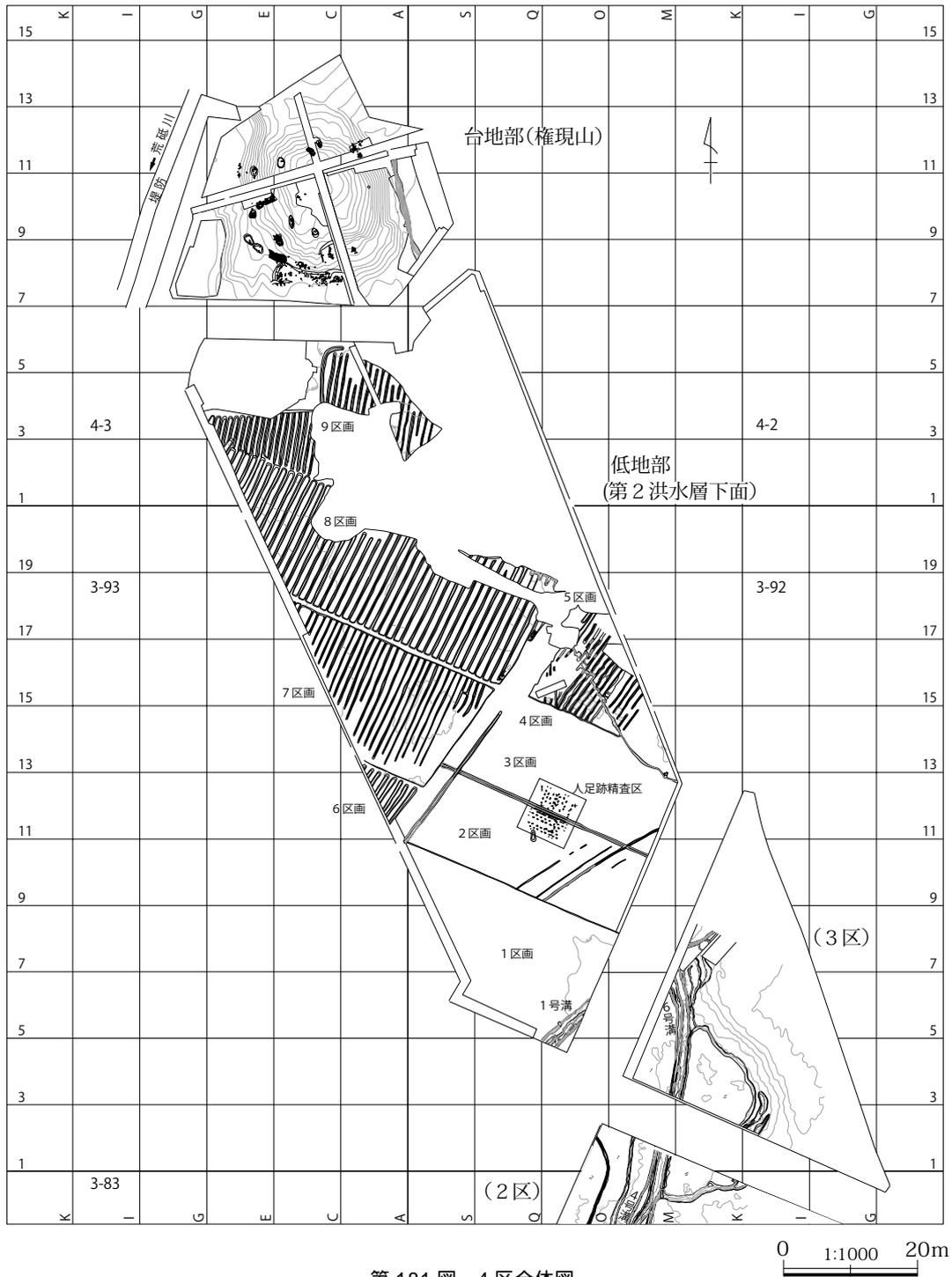
表土下面から女堀排土上面にかけては、中世とみられる集石を23カ所確認した(付図6)。これらに

第6章 4区の遺構と遺物

は、礫が散在するだけのもの、下位に土坑があるものの、上位に長方形の石敷き遺構が伴うものの3種があり、報告では、後2者のみ遺構として扱った。これらの集石遺構は、周辺に五輪塔や板碑が出土することや、遺構内に人歯骨が少量残存するものがあることから、墓と考えられる。周囲が削られ、土山と

して残存した権現山が、墓地として使われたのであろう。

権現山の東部には、1981年の圃場整備に伴う発掘調査で女堀の堀部分が検出されており、4区低地部および2・3区の隣接地でもトレンチ調査がおこなわれている(第224図)。このときの調査1区と



第181図 4区全体図

2区をつなぐ女堀の西岸の調査が今回おこなわれたことになる。なお、2区南東端で前回調査では女堀排土直下で水田が検出されていたが、圃場整備事業の済んだ今回の調査時点では、用水路西側は深く削平が及んでいたために、女堀排土を確認することはできなかった。

女堀排土下面は調査したが、遺構は検出されなかったために、写真記録(PL138-8)にとどめた。

洪水層上面(第213図)では、洪水層より新しい4号・5号・6号溝、7号・8号土坑を検出した。溝埋没土中から土師器・須恵器破片が出土しているが、溝および土坑の時期は不明である。また洪水層の上面で畝状遺構をほぼ全域で検出した。畝の時期は特定できなかったが、下位に古墳時代5世紀後半から7世紀末の土器の包含層があることから、この畝の時期は8世紀以降中世以前ということになる。

畝の耕土になっている浅間C軽石を混じる黒色土を掘り下げの際に、古墳時代の土器包含層を検出した。完形に近く復元できる土器が多く、土師器の坏・甕に加えて、須恵器大甕・細頸壺等が含まれていた。下位の褐色土上面(第215図)で遺構確認を試みたが、土器が比較的集中して出土した地点で遺構は確認されなかった。一方、やや集中から離れた位置で7号・8号溝が検出された。特に8号溝は一辺10mの方形部分を囲む溝と推定され、周溝墓あるいは古墳の可能性もあるが、詳細は判然としなかった。

2.4区低地部の遺構と遺物

(1) 第2洪水層下面(PL109)

4区低地部の、3-92-M~T-5~20G、3-93-A~E-10~20G、4-3-A~G-1~5Gにわたって、第2洪水層に埋まった遺構面が検出された。遺構面を覆っていた第2洪水層は、厚さ5~10cmの灰色砂のラミナ堆積層である。洪水層は、4区低地部のほぼ全域に堆積しており、それぞれの遺構面を覆っていた。洪水層の堆積時期は不明であるが、1108(天仁元)年に降下した浅間

Bテフラより新しい。また、4区東端に検出された女堀には後出する。後述する各遺構の出土遺物は、混入と考えられる土師器破片と近現代の土器を含むが、江戸時代の土器が大半を占める。第2洪水層の堆積時期は江戸時代のいずれかの時期である可能性が高いが、詳細は不明である。

第2洪水層下面では3種類の遺構が洪水層下から検出された。一つは4区南部に検出された水田面と推定される平坦面(2・3区画)である。二つめは中央部に検出された復旧溝群(4~8区画)である。これは第2洪水層に埋まった耕地の復旧を目的に天地返しをした際の溝で、区画内に平行する溝が並んでいる。一部は産業廃棄物を埋めた穴で壊されていた。三つ目は北部に検出された畝(9区画)である。これは復旧溝8区画に隣接する位置で見つかったが、第2洪水層に埋まったまま放置された部分である(付図3の4区共通土層断面B-B')。ここも南東部が産業廃棄物を埋めた穴で壊されていた。

2・3区低地部の第2洪水層とは、同じ洪水層と考えて調査したが、第181図のように遺構の連続性はなく、標高にも差がある。異なる年度で実施した調査であったので、遺構を覆っていた洪水層の連続性を確認することはできなかった。

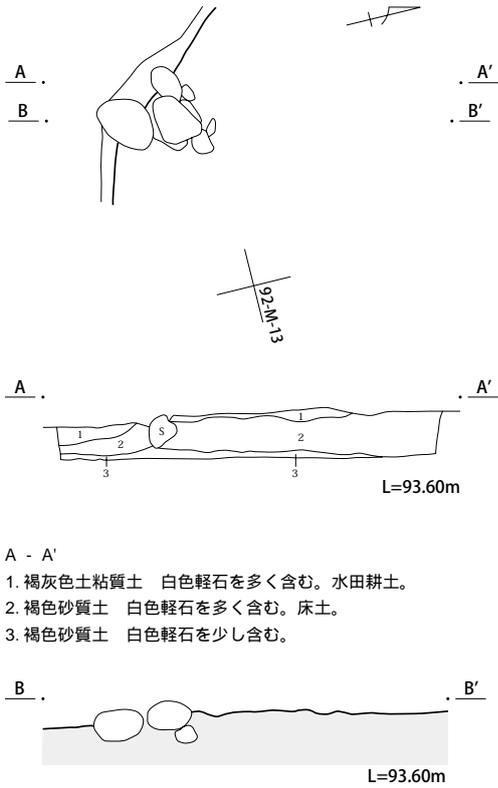
4区第2洪水層下水田(付図3・4 第182・183
186・187図 PL110・176・177 遺物観察表P.509)

第2洪水層下水田が検出されたのは3-92-M~T-5~14Gで、溝および段によって1~3区画の3つの区画に分かれていた。それぞれの区画の方向はN-65°-Wで共通していた。

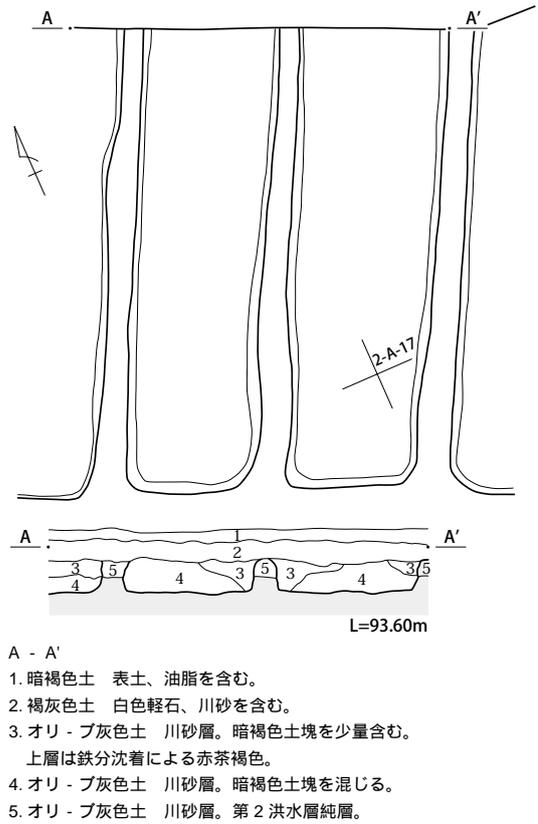
このうち、1区画は共通土層断面A-A(付図3)に記載したように、第2洪水層堆積後に復旧溝を掘った後の攪乱土層で覆われていたことから、第2洪水層下水田より新しい面である。長軸34.6m、短軸19.6mの台形部分が発掘区壁に区切られて検出された。北端は高さ10~12cmほどの段で2区画と境していた。第2洪水層で直接覆われた2区画と3区画の境と平行することから、復旧作業後に

第6章 4区の遺構と遺物

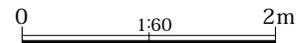
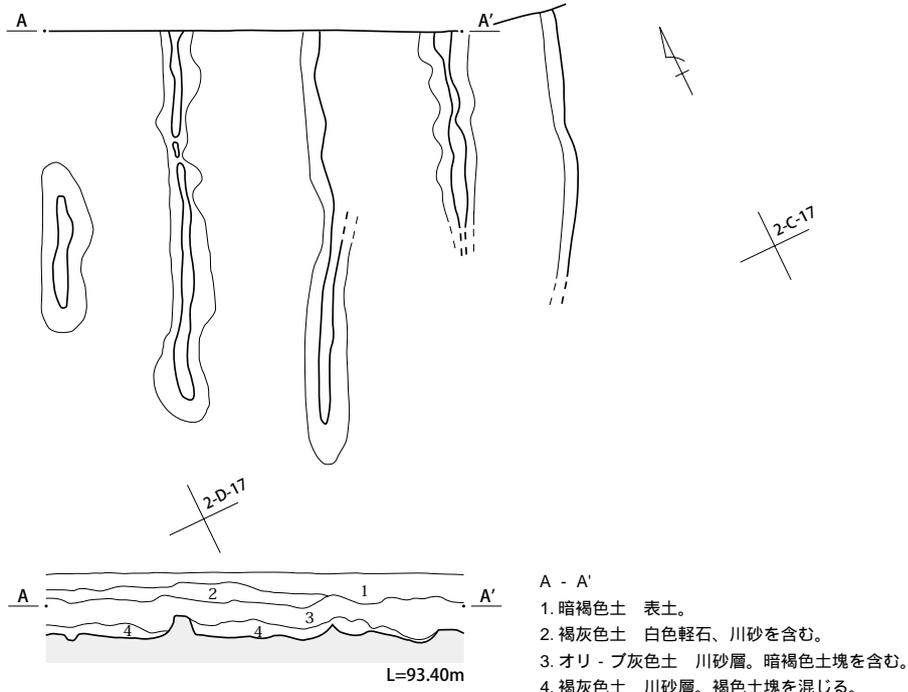
3・5区画境の集石



8区画 復旧溝



7区画 復旧溝



第185図 4区低地部第2洪水層下水田復旧溝

第2洪水層堆積以前の地割に即して掘削されたものと推定される。底面は平坦で、2区画・3区画で検出された人足跡等の痕跡が残る程度の深さの凹凸があった。

1区画の南端では、最上層に第2洪水層が堆積していた1号溝を検出した。したがって1号溝は第2洪水層下の遺構である。1号溝は低地内の最深部となる東端を流れる水路と推定される。全体の洪水堆積物直下は平坦面で、溝や耕作痕跡は確認されなかった。

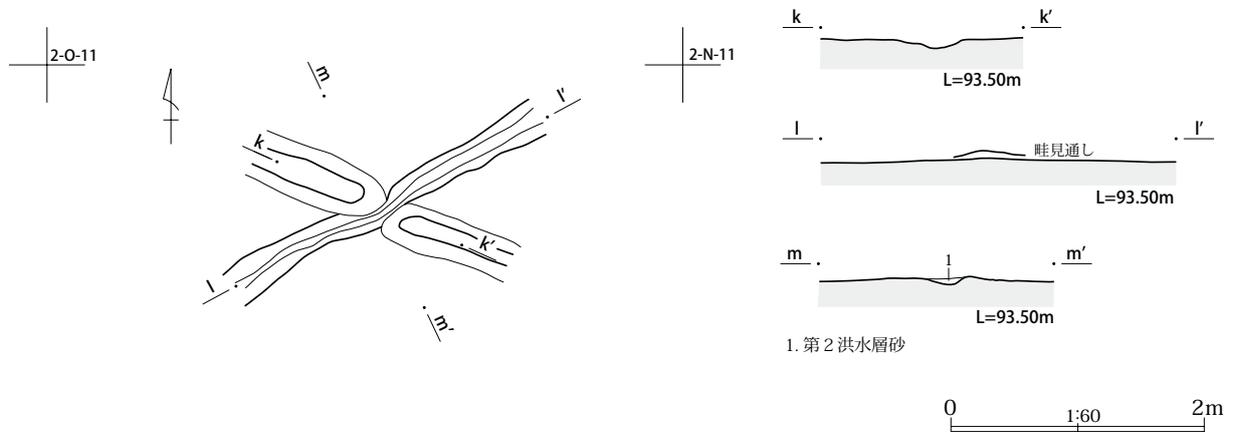
2区画と3区画はそれぞれ、長軸37m—短軸12.7m、長軸31m—短軸14.3mの長方形に区画されたと推定される部分である。西側は全掘できたが、東側は発掘区域外に伸びている。後述するアゼ・水口の存在から水田と推定される。2区画・3区画の境は、上幅0.12m、下幅0.40～0.70mのアゼで区切られ、1～2cmの3区画の方が高くなっていた。両区画とも、区画のアゼと平行する方向の人足跡の連続からなるとされる筋状の細い凹地が全域に残存しており、第2洪水層がその凹地に入り込んで堆積していた。一部にはアゼに直交する方向の凹地もあった。この痕跡の測量については、付図4に人足精査区と示した部分に限って実施した。

また、2区画南部から3区画東部に向かって、境のアゼと交差する溝が検出された。南端は1区画の段で壊されており、北端は発掘区外に伸びる。溝の

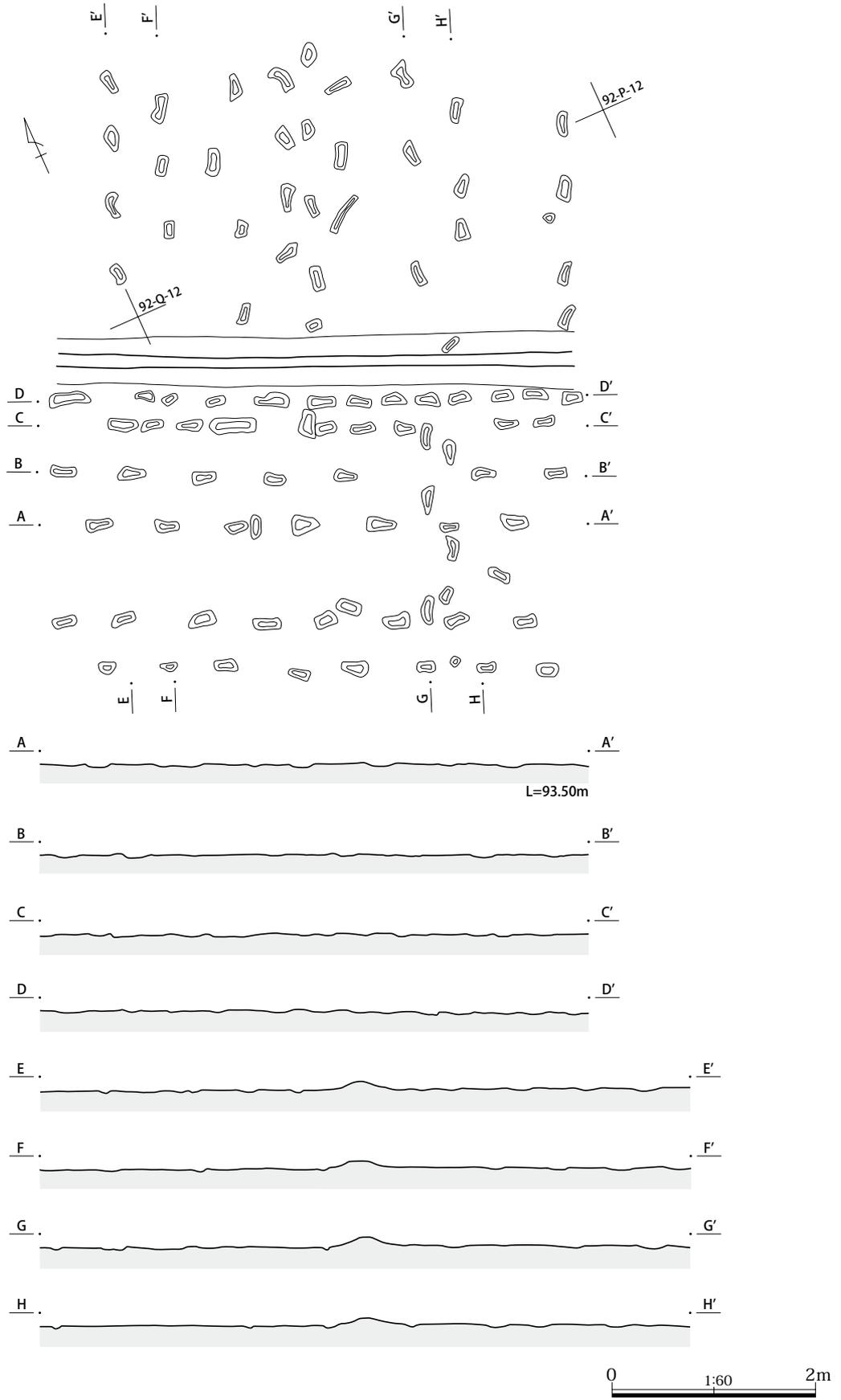
形状は幅0.3～0.4m、深さ0.08mほどで、底面の標高は北端が南端より0.03m高い。溝内には第2洪水層が堆積しており、同一の面に存在したものと考えられる。アゼとの交差部は水口のような形態であった。北側には2条、南側には1条の細い凹地が溝に平行して検出された。

2区画・3区画の西部は復旧溝7区画の東端に平行する溝が検出された。溝の走向はN-36°-Eで、規模は幅0.4～0.64m、深さ0.03～0.19mである。底面の標高は北端が南端より0.16m高い。溝内には灰褐色土塊を混じる灰色砂が堆積しており、第2洪水層堆積後に掘られた溝と判断された。復旧溝と同じ層位ということになる。この溝は北側の3区画北端付近まで続いていたが、15ライン付近で判別できなくなっていた。7区画との間には筋状の凹地がなかったことから、幅2.4mのアゼ状になっていた。

耕土は白色火山灰を混じる灰色土である。土壌の植物珪酸体分析は実施していない。出土遺物は、2区画掘り下げの時に土師器17点、陶器11点、磁器2点、軟質土器3点が出土した。時期不詳の破片も多いが、陶器は10点が江戸時代のものである。3区画掘り下げの時には土師器19点、陶器8点、磁器2点、軟質土器1点が出土した。中世常滑甕破片や14世紀中頃～後半の古瀬戸おろし皿と推定される破片(第187図1)も含まれるが、ほとんどは江戸時代のもものとみられる破片であった。



第182図 4区低地部第2洪水層下水田 水口



第 183 图 4 区低地部第 2 洪水層下面 2 · 3 区人足跡

4区1号溝(付図3・4 第184図 PL111・177
遺物観察表P.509)

位置 4区3-92-O・P-4~6G

重複 2条の溝が重なっており、西側の浅い部分が後出する。

形状 4区低地部南端付近の低地縁辺に沿ったほぼ直線の溝。北端・南端ともに調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.05m高い。

規模 調査長 9.8m 最大幅 2.56m
最小幅 1.92m 深さ 0.33~0.57m

断面形 上方が開く箱形。2条の溝が重なっており、西半分にはテラス状の平坦面がある。

埋没土 先行する溝は砂やシルトを含む褐灰色土で、後出する溝も同様に砂やシルトを含む褐灰色土で埋まっていたが、最上層に第2洪水層が堆積していた。洪水被災時には新しい方の溝が機能していたと判断された。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器13点と、陶器43点、磁器54点、軟質土器15点、板碑破片1点が出土した。いずれも破片で、江戸時代のものが最も多く、近現代のものも含まれていた。

所見 4区第2洪水層下水田に伴う溝と推定されるが、洪水被災時には中位まで埋まっていた。第2洪水層下水田(1~3区画)のアゼ方向とは斜交するが、2~3区画の東部にあった小溝とは方向が一致している。3区ではこの4区1号溝に連続する溝は検出されなかった。

4区第2洪水層復旧溝(付図3・4 第185~187図
PL111~113 遺物観察表P.509)

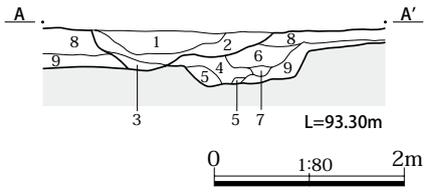
第2洪水層下面で、3-92-M~Q-13~17Gおよび3-92・93-Q~F-11~20、4-3-D~F-1~3において、第2洪水層被災耕作地の復旧溝を検出した。復旧の単位および段によって5つの区画に分かれていた。それらの区画の長軸方向はN-65°-Wで共通しており、復旧されずに水田として埋没していた2・3区画とも共通であっ

た。溝を埋めていたのは、各区画とも共通しており、灰褐色土塊を含む灰色砂であった。

4区画と5区画は、水田3区画の北東側に隣接していた。4区画南端は2区画と3区画の間のアゼに平行であり、3区画からは0.1mほど下がっていた。4区画・5区画の西端も0.1mほど下がっており、2・3区画の西部にあった南北方向の溝の延長線上にある。4・5区画は1~3区画を踏襲したものと推定される。4区画・5区画の境は北西-南東方向の段になっているが、これは2・3区微高地状で検出された地割れと同じものと考えられる。遺構として一体のものと考えられる。全体規模は東西長26m、南北長16mで、東部には溝の痕跡は検出できなかった。また西部には方向の異なった復旧溝列が検出された。4・5区画内の復旧溝は幅0.72m、深さ0.03~0.05mの帯状の長方形で、間隔0.14m、方位N-35°-Eで15条が検出された。南西部はN-5°-Eであった。北端部は産業廃棄物の穴の一部が壊されていた。5区画東端部、3-92-M-12グリッドで大型礫が集まった部分が検出された。塊の礫は水田耕土に埋まっており、被災前の地割に関わる礫と考えられる。

6区画は水田2区画の西側で検出された。東端は2・3区画西部にあった南北方向の溝に平行し、北端は2区画と3区画の間のアゼに平行していた。検出できた区画全体規模は東西長9m、南北長7mで各溝の南端は調査区外に伸びる。6区画内の復旧溝は幅0.52~0.76m、深さ0.34~0.44mの溝状で、間隔0.44~0.66m、方位N-30°-Eで8条が検出された。溝の北端は丸く、浅い短冊状であった4・5区画とは大きく異なっていたが、土層断面A-A'(付図3)では、第2洪水層を切った溝群であることから、同様な復旧溝と判断した。

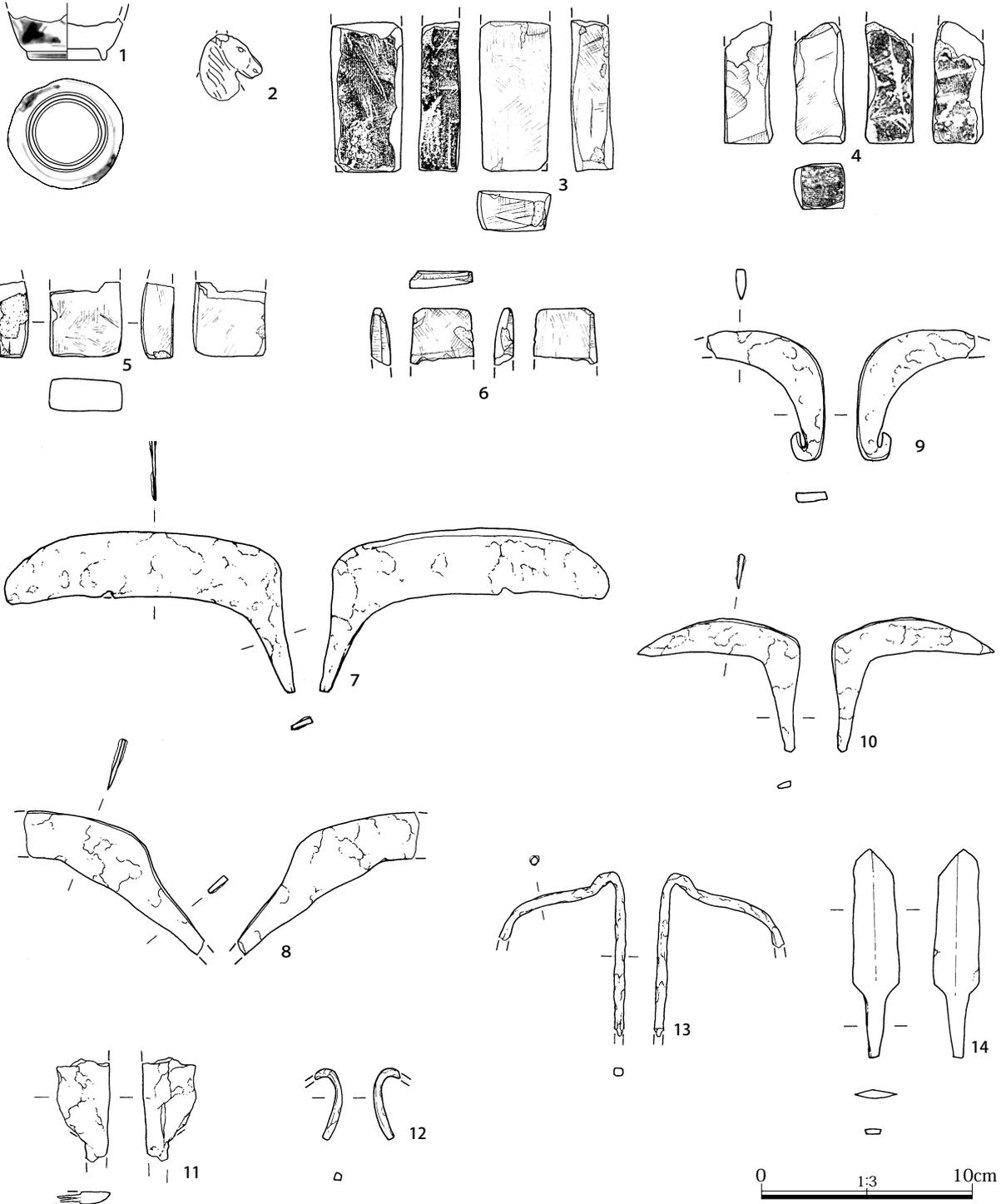
7区画は水田区画2・3区画の西側で検出した。7区画の東端は2・3区画西部にあった南北方向の溝に平行し、南端は2区画と3区画の間のアゼに平行していた。北端は、3区画と4区画の境の段の西側延長にあたる。区画の四周は周囲より0.12~0.14



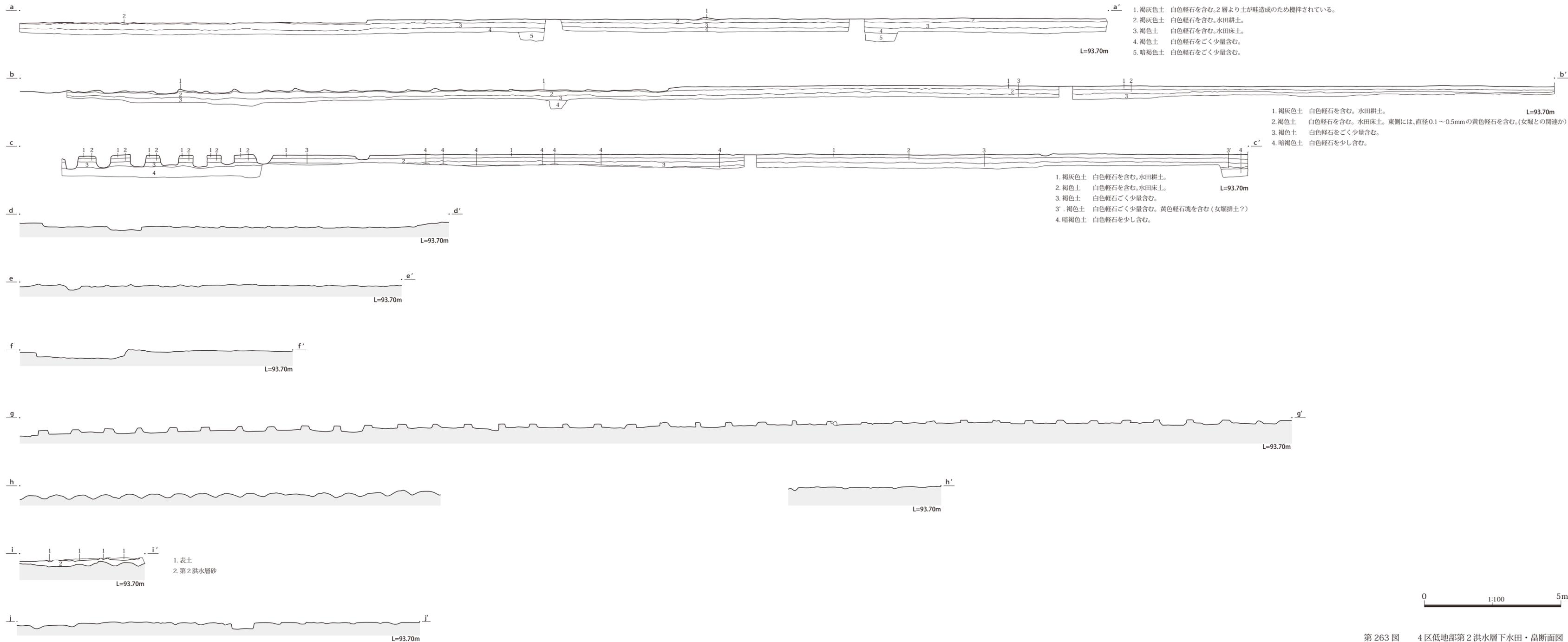
A - A'

1. 緑灰色土 川砂層。第2洪水層。
2. 褐灰色土 シルト質。川砂塊を含む。
3. 褐灰色土 赤褐シルト塊、赤褐川砂塊を含む。
4. 灰黄褐色土 褐灰シルト塊、川砂塊を含む。

5. 褐灰色土 シルト質。川砂粒含む。
6. 褐灰色土 シルト質。川砂塊を少量含む。
7. 灰黄褐色土 褐灰シルト塊、川砂塊を含む。
8. 褐灰色土 少量の黄褐色土塊、軽石を含む。
9. 明黄褐色土 鉄分の凝集がある。



第184図 4区1号溝土層断面と出土遺物



第 263 図 4区低地部第2洪水層下水田・畠断面図

m下がっていた。検出できた区画全体規模は東西長33m、南北長18mで、西部は調査区外に伸びる。7区画内の復旧溝は幅0.70～1.10m、深さ0.11mの浅い短冊状で、間隔0.1～0.2m、方位N-23°-Eで31条が検出された。溝の形状は4・5区画と同じ短冊状であった。7区画東端の方位はN-35°-Eで、溝の方位とは異なっていた。はじめに区画が決められ、その中に溝を西端から掘っていった結果である。

8区画は復旧溝4・5区画の西側で検出した。南端は7区画北端に平行し、幅0.8mがアゼ状に掘り残されていた。北端は北西部で9区画と接していたが、大部分は産業廃棄物の穴で大きく壊されていた。東端は4区画との間に幅4.8mほどの掘り残し部分があった。検出できた区画全体規模は東西長53.9m、南北長18mで、西部は調査区外に伸びる。8区画内の復旧溝は幅0.10～1.10m、深さ0.12～0.17mの浅い短冊状で、間隔0.16～0.24m、方位N-25°-Eで46条が検出された。溝の形状は4・5区画、7区画と同じ短冊状であった。8区画も7区画と同様に東端方位はN-35°-Eであったが、溝の方位とは異なっていた。8区画もはじめに区画が決められ、その中に溝を西端から掘っていったのであろう。東端の2条の溝内には礫が集中して出土したが、溝埋没土内で出土していることから、洪水層に混じていた礫を集めたものと推定される。

出土遺物は、4区画掘り下げの時に土師器4点、陶器2点、磁器2点が出土した。陶磁器は時期不詳の破片もあるが、いずれも江戸時代から近代のものである。5区画掘り下げの時には土師器26点、陶器5点、磁器1点、軟質土器1点が出土した。陶磁器は時期不詳の破片もあるが、江戸時代あるいは近現代のものである。6区画掘り下げ時には混入と見られる土師器破片1点が出土した。7区画掘り下げ時には、土師器2点、陶器9点、磁器3点が出土した。陶磁器は江戸時代のものがほとんどで、近現代の磁器1点と、16世紀中頃から後半の瀬戸美濃系すり鉢(第187図2)が含まれていた。8区画掘り

下げ時には、混入の土師器54点、瓦破片1点、陶器24点、磁器11点、軟質土器22点が出土した。時期不詳の破片が多いが、江戸時代から近現代のものがほとんどである。

4区第2洪水層下畝(付図3・4 第186・187図 PL113・177 遺物観察表P.509)

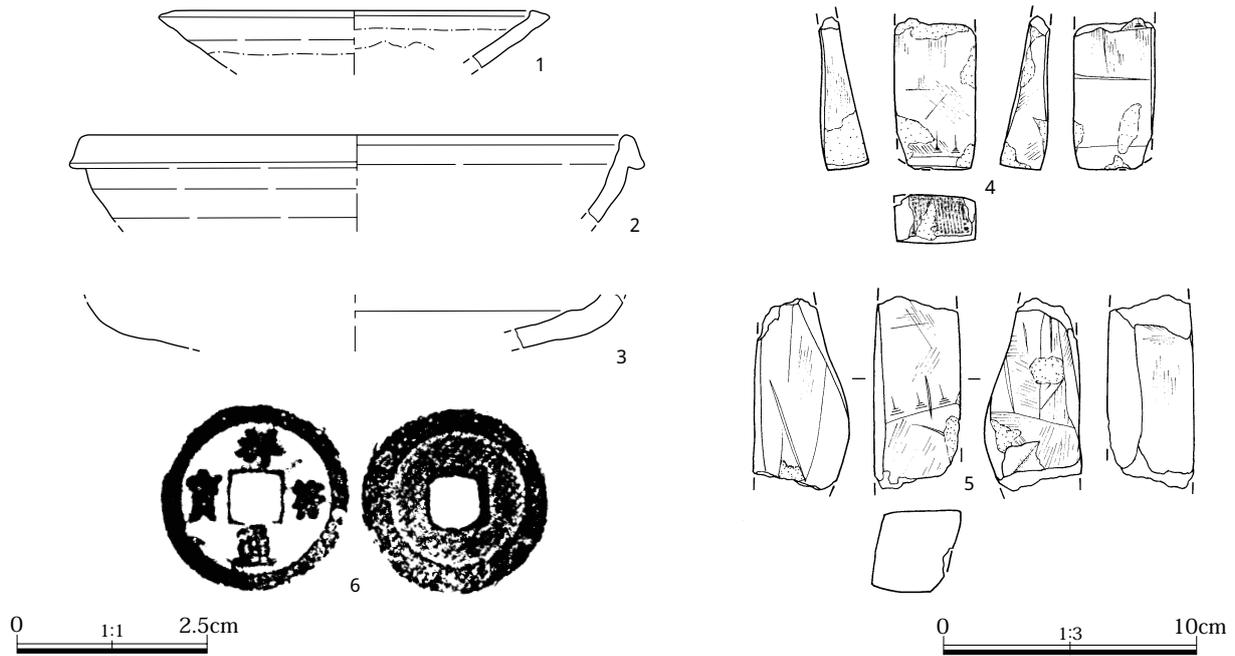
第2洪水層下面で、4-2-T-2・3G、4-3-A~F-1~5Gに第2洪水層で埋まった畝を検出した。この区画は概ね畝方向が共通する区画で9区画とした。9区画内の形状は8区画の復旧溝と類似するが、土層断面B-B(付図3)にあるように、畝は第2洪水層で直接埋まっており、復旧されないで残された部分と考えられる。9区画は西半分と北東部分で若干の畝幅の差があり、西部分を9a区画、北東部を9b区画として記載する。

検出できた9a区画の全体規模は東西長16m、南北長9.6mで、西部は調査区外に伸びる。区画内の畝の畝幅は畝間溝の芯心間で0.48m、畝頂幅0.36～0.42m、畝間溝の深さ0.11～0.18mで、畝の方向はN-10°-E、18条の畝を検出した。

検出できた9b区画の全体規模は東西長19m、南北長15.6mで、北側・東側・南側は産業廃棄物の穴で壊されていた。区画内の畝の畝幅は畝間溝の心芯間で1.0m、畝頂幅0.54～0.68m、畝間溝の深さ0.04～0.09mで、畝の方向はN-10°-E、18条の畝を検出した。9b区画の北西端は西から北に回り込む区画溝状になっていた。9a区画と9b区画の畝形状の違いは作物の違いを示す可能性もあるが、不明である。土壌の植物珪酸体の分析は実施していない。

9区画の出土遺物は、掘り下げの時に土師器21点、陶器2点、磁器3点、軟質土器6点が出土した。陶磁器は時期不詳の破片もあるが、ほとんど江戸時代のもので、近現代の磁器破片2点も含まれていた。

銭貨(第187図6)は洪水層上層で出土した。



第187図 4区低地部第2洪水層下面出土遺物

(2) 第3洪水層下面(付図3 第188・189図 PL113 ~ 115)

4区低地部の3 - 92 - M ~ T - 5 ~ 14 Gで、第3洪水層に埋まった遺構面が検出された。遺構面にはアゼや水路は検出されなかったが、土壌分析では第3洪水層直下で3000個/gの比較的高い密度のイネの植物珪酸体が検出されており、水田あるいは畠等の生産域である可能性が高い。

遺構面を覆っていた第3洪水層は、厚さ16cmほどの灰色砂層である。洪水層は、4区低地部の東南部、谷幅40m分ほどのみに堆積しており、遺構面を覆っていた。洪水層の堆積時期は不明であるが、1108(天仁元)年に降下した浅間Bテフラより新しく、前述した第2洪水層より古い。また4区東端に検出された女堀排土の上位に第3洪水層が堆積している(付図3の4区低地部共通土層断面・第226図女堀土層断面E - E')ことから、第3洪水層の堆積は女堀より後出する。出土遺物は、混入と考えられる土師器破片が8点出土したのみで、遺物から堆積時期を決めるのは困難であった。

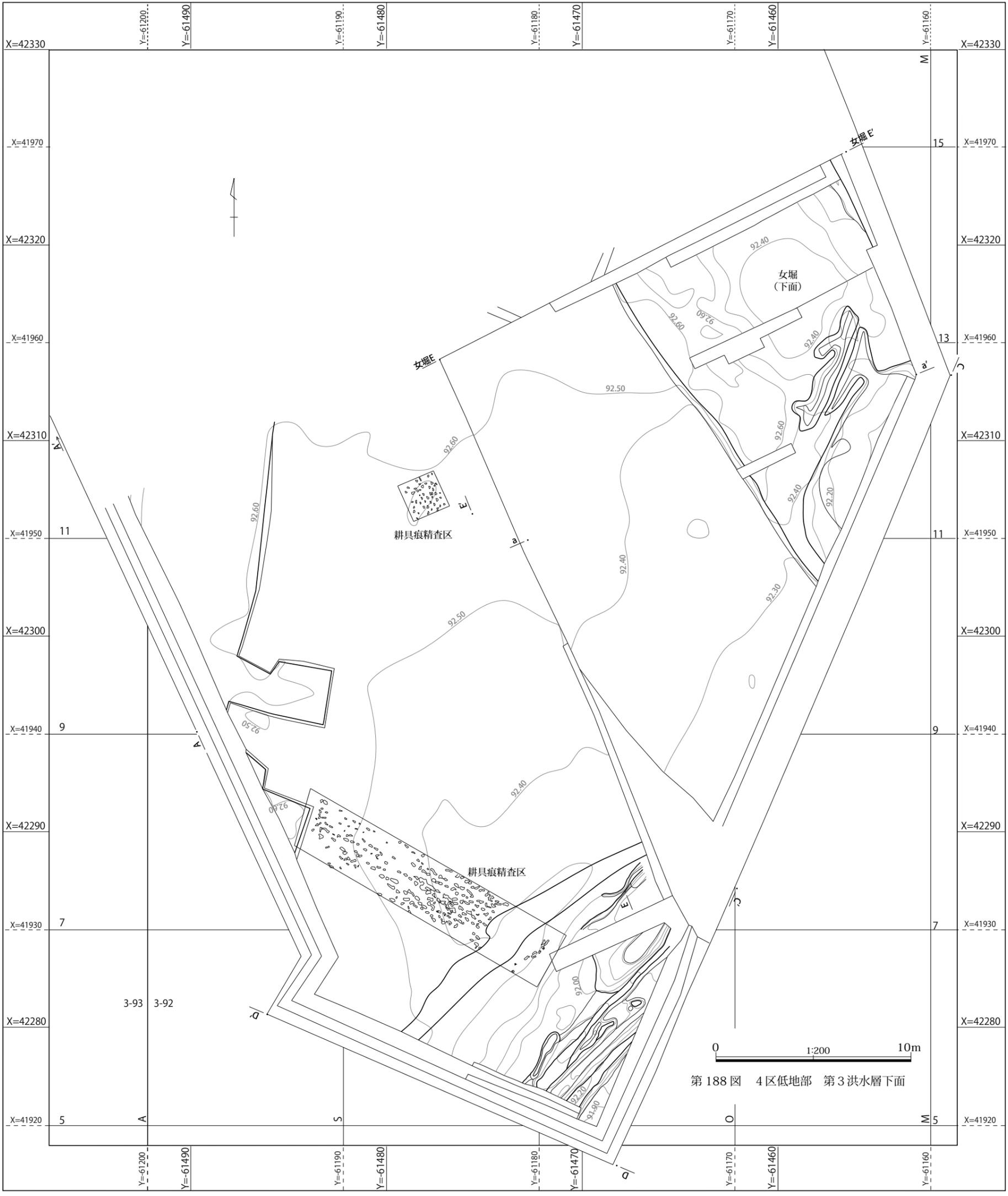
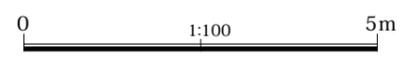
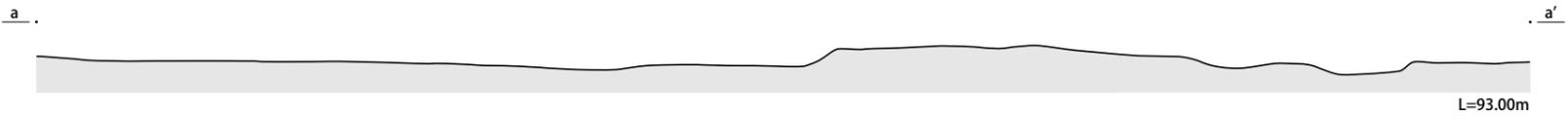
第3洪水層下面では、平坦面、段による区画、耕具痕跡と見られる小穴や、2 - 3区低地との境にあ

る谷斜面が検出された。平坦面は、その東端が女堀排土の裾部をほぼ直線的に造成している。筋状の耕具痕跡は写真(PL114-1)のように第3洪水層下面ほぼ全体に検出された。細部を見ると円形や半円形の小穴が連続する筋となっていた。平面図では、2カ所を選んで図示している。低地部東南端には2・3区低地部に連続する凹地があり、下位は帯状の谷になっていると推定される。

(3) 浅間Bテフラ下面(付図3・5 第190図 PL115 ~ 118)

4区低地部では、ほぼ全域で浅間Bテフラに埋まった遺構面を検出した。この遺構面では発掘区中央部やや北寄りで畠跡、北西部で溝2条、土坑5基を検出した。畠は浅間Bテフラ直下、溝および土坑はいずれも浅間Bテフラより新しい遺構である。4区低地部南半には不定型な凹地3カ所以外は、遺構は検出されなかった。ここでは浅間Bテフラ直下層の土壌分析を行ったが、イネの植物珪酸体は検出されなかった(4区第5地点)。

遺構面を覆っていた浅間Bテフラは、浅間山から1108(天仁元)年に噴出したもので、上位に厚



第 188 图 4 区低地部 第 3 洪水層下面



第189図 4区低地部第3洪水層下面耕作痕跡

第6章 4区の遺構と遺物

さ5cmほどの赤紫色火山灰、下位に厚さ10～20cmほどの灰白色軽石の堆積が認められた。テフラ層は産業廃棄物の攪乱部以外の4区のほぼ全域に堆積していた。ただし北東部の共通土層断面F-Fでは女堀埋没土の下位で浅間Bテフラの純層は確認できなかった。ここでは、荒砥川自然堤防に向かう緩斜面で浅間Bテフラ下面の標高が高いために、女堀の掘削によって除去されたものと考えられる。また北端部の自然堤防上にも浅間Bテフラの純層は確認できなかった。

南半部は南東部に向かって徐々に傾斜し、南東端では浅間Bテフラより新しい凹地に切られていた。(付図3の4区共通土層断面D-D)

遺物は土師器破片4点が浅間Bテフラ直下で出土しているが、混入である。

4区浅間Bテフラ下畝(付図3・5 PL115・116・118)

浅間Bテフラ直下面で、3-92-Q～T-17～20G、3-93-A～C-17～20Gに、浅間Bテフラで埋まった畝を検出した。浅間Bテフラは畝間溝だけでなく、畝の上部も覆っていた。検出できた畝の全体規模は東西長28.0m、南北長21.4mで、同じ畝方向の一区画である。北辺部は産業廃棄物の攪乱坑で壊されていた。畝の畝幅はサク溝の芯心間で0.80～0.96m、畝頂幅0.32～0.42m、サク溝の深さ0.02～0.09mで、畝の方向はN-88°-W、検出された畝は22条であった。

浅間Bテフラ直下の畝の上部で実施した土壌分析では、イネの植物珪酸体が800個/g検出されている。

遺物は出土しなかった。

4区2号溝(付図5 第190図 PL117)

位置 4区3-93-D・E-19・20G

4-3-D・E-1・2G

重複 3号溝に先行する。

形状 緩やかに彎曲するが、ほぼ南北方向の溝。北端は3号溝と重複し、その延長は確認できなかった。

南端は調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は北端が南端より0.04m低い。

規模 調査長 16.4m 最大幅 1.2m

最小幅 0.96m 深さ 0.31m

断面形 浅い皿形

埋没土 灰黄褐色砂下位を含む暗褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 浅間Bテフラ下面で確認・写真撮影・測量図化を行ったが、浅間Bテフラより新しい遺構である。機能は不明。

4区3号溝(付図5 第190図 PL117)

位置 4区4-3-D～F-2・3G

重複 3号溝に後出する。

形状 ほぼ直線の東西方向の溝。東端は4-3-D-3Gで立ち上がり、西端は調査区外に伸びる。底面は東端が0.3mほど落ち込んで凹地状になっていた。南側には深さ0.24m、幅2.8mほどのテラス状の掘り込みがあるが、溝との関連は不明である。

規模 調査長 10.0m 最大幅 3.12m

最小幅 1.62m 深さ 0.56～0.73m

断面形 西端は箱形。東端は中央がやや深い椀形。

埋没土 灰黄褐色砂下位を含む暗褐色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 浅間Bテフラ下面で確認・写真撮影・測量図化を行ったが、浅間Bテフラより新しい遺構である。機能は不明。

4区1号土坑(付図5 第190図 PL117)

位置 4区3-93-D-18・19G

形状 楕円形

重複 無し

規模 長径1.0m 短径0.87m 残存壁高0.07m

長軸方位 N-81°-E

断面形 浅い箱形

埋没土 粘質の暗褐色土で埋まっていた。

2. 4区低地部の遺構と遺物

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 浅間Bテフラ下面で確認・写真撮影・測量図化を行ったが、浅間Bテフラより新しい遺構である。

機能は不明。

4区2号土坑(付図5 第190図 PL117)

位置 4区4-3-E-1G

形状 西部が調査区外に伸びているため全形は不明であるが、隅丸長方形と推定される。

重複 無し

規模 長軸 1.87 m以上 短軸 0.92 m

残存壁高 0.12 m

長軸方位 N - 85° - E

断面形 浅い箱形

埋没土 砂質の暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 浅間Bテフラ下面で確認・写真撮影・測量図化を行ったが、浅間Bテフラより新しい遺構である。

機能は不明。

4区3号土坑(付図5 第190図 PL117)

位置 4区4-3-E-1G

形状 西部が調査区外に伸びているため全形は不明であるが、隅丸長方形と推定される。

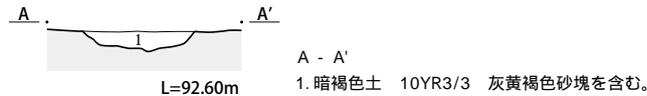
重複 4号土坑に後出する。

規模 長軸 2.48 m以上 短軸 0.81 m

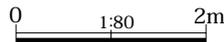
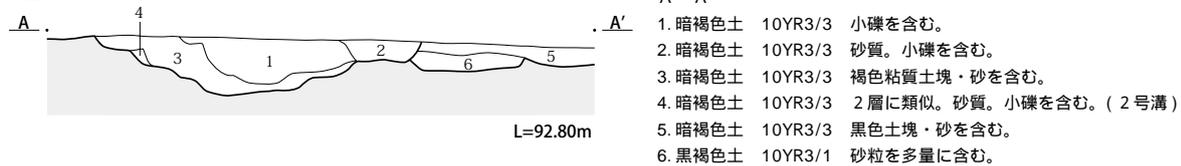
残存壁高 0.11 m

長軸方位 N - 92° - E 断面形 浅い箱形

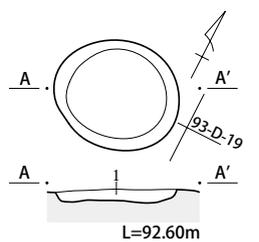
4区2号溝



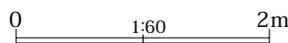
4区3号溝



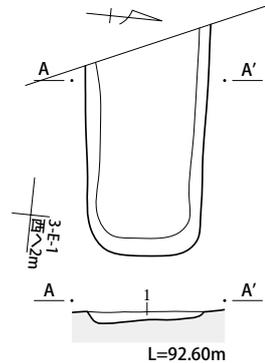
4区1号土坑



A - A'
1. 暗褐色土 10YR3/3 粘質土。
わずかに軽石、鉄分を含む。

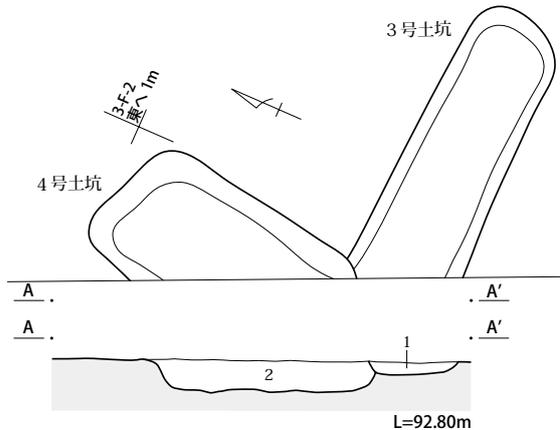


4区2号土坑



A - A'
1. 暗褐色土 10YR3/3 砂質土。

4区3・4号土坑



A - A'
1. 暗褐色土 10YR3/3 砂質土。
2. 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色シルト塊少量含む。小礫含む。

第190図 4区低地部浅間Bテフラ下面確認遺構

第6章 4区の遺構と遺物

埋没土 粘質の暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 浅間Bテフラ下面で確認・写真撮影・測量図化を行ったが、浅間Bテフラより新しい遺構である。

機能は不明。

4区4号土坑(付図5 第190図 PL117)

位置 4区4-3-E-1G

形状 南部が調査区外に伸びているため全形は不明であるが、隅丸長方形と推定される。

重複 3号土坑に先行する。

規模 長軸 1.94 m以上 短軸 1.10 m

残存壁高 0.28 m

長軸方位 N - 11° - E

断面形 浅い箱形

埋没土 黄褐色シルト塊を少量含む暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 浅間Bテフラ下面で確認・写真撮影・測量図化を行ったが、浅間Bテフラより新しい遺構である。

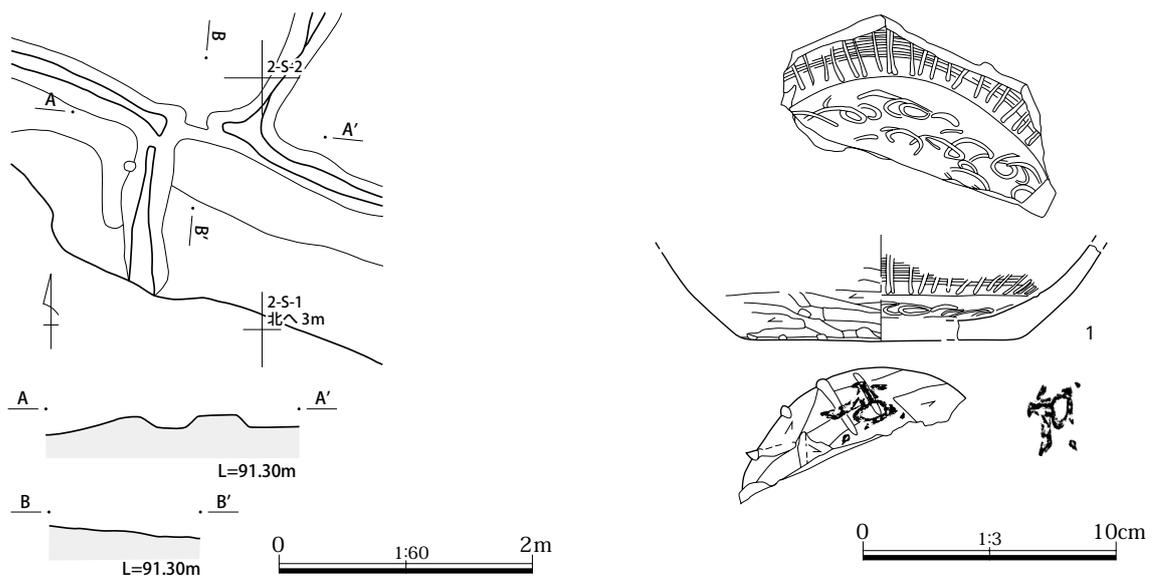
機能は不明。

(4)第5洪水層下面(付図3 第191・192図 PL119・120)

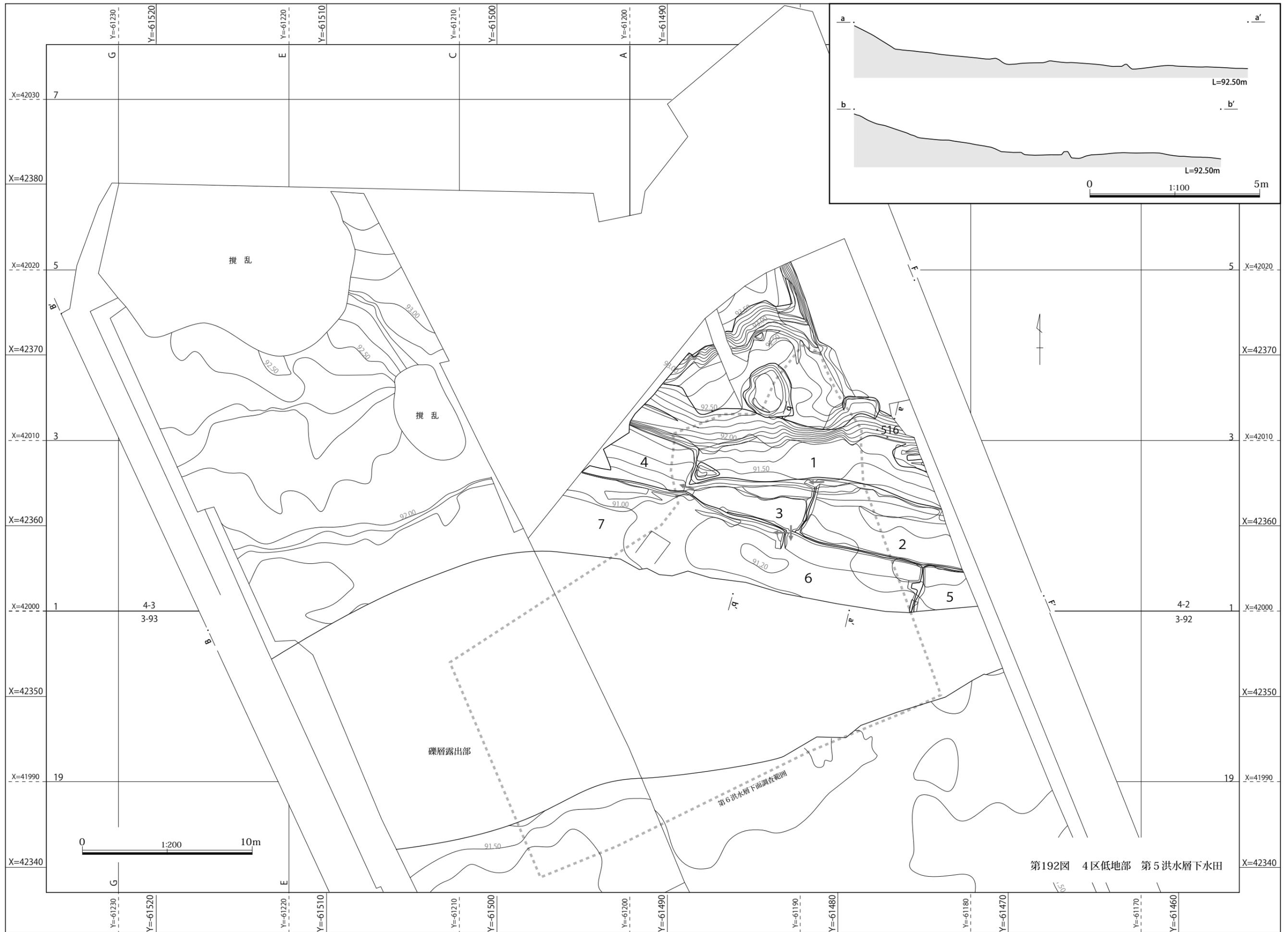
第5洪水層は4区低地部全体で検出されたが、遺構が確認できたのは北東部の低地部北端のみである。ここでは、等高線に平行した細長い水田区画を検出した。遺構を覆っていた第5洪水層は灰色～褐灰色の細砂・砂礫層で、0.5～1.0mの厚さで堆積していた。検出した水田面の南側は、幅3～18mの帯状に礫層が露出した部分があり、第5洪水層は検出されなかった。さらにその南側は第5洪水層がほぼ全面に検出されたが、その下面で遺構は検出されなかった。そこで第192図には17ラインより北側の水田遺構が検出された部分のみ掲載した。これより以南の第5洪水層下面はほぼ平坦で、東南部に向けて緩やかに傾斜していた(PL119-2)。最南端は第5洪水層より新しい凹地が4区共通土層断面D-Dで確認されたが、全形は不明である。

4区第5洪水層下水田(付図3 第191・192図 PL119・120・177 遺物観察表P.510)

4-2-Q~T-1・2Gおよび4-3-A-2Gで第5洪水層下水田が検出された。水田があったのは荒砥川自然堤防の台地東裾部、4区低地部の北



第191図 4区低地部第5洪水層下面水口と出土遺物



第192图 4区低地部 第5洪水層下水田

端にあたり、等高線に平行して細長い7面の水田面が検出された。水田面長軸の方位は概ねN - 75° - Wである。水田面のうち1区画は南西方向にやや傾斜しているが、これは原地形に影響を受けた経年変化と考えられる。1区画も他の水田面と同様に洪水層が入り込んだ小穴が見られ、様相は同じであったことから、7面を水田面と判断した。

7面の水田区画のうち、全形を把握できたのは3区画のみで、底辺2.40m、高さ6.64mの三角形で、面積8.4m²であった。3区画の西端は上幅1.6～0.8m、深さ0.05～0.07mの溝状に凹んでいた。「温め」と考えられる。このような溝状の凹みは2・7区画にも施設されていた。

アゼは概ね上幅0.1～0.2m、下幅0.3～0.52mで、やや細い。1区画と2・3区画の間や6区画と7区画の間のアゼは明確ではなかったために図化していないが、痕跡は確認できた。2区画と3区画の間、3区画と4区画の間、3区画と6区画の間、6区画と7区画の間にアゼの途切れているところがあり、水口と推定される。給排水は懸け流しで行われているが、水源および用水路は発掘区内では確認できなかった。

水田耕土は暗灰色～黒色の粘質土である。土壌分析では第5洪水層直下の耕土からイネの植物珪酸体3800個/g、ヒエ属型の植物珪酸体が700個/g検出されている。

出土遺物は、土師器14点、須恵器2点が出土したが、図示したのは8世紀第2四半期と見られる土師器坏の破片(第191図1)である。出土位置は4-2-Q-3Gの1区画北法面で、直接第5洪水層が覆っていた。破断面の摩擦はほとんどなく、洪水で運ばれてきたという印象はない遺物である。第5洪水層は浅間Bテフラより古い層位であることが

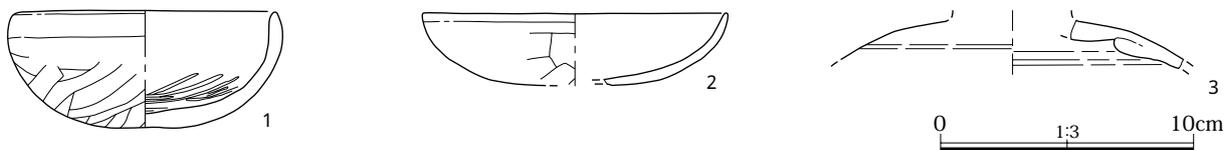
ら、下面の時期を考える上でも矛盾のない重要な遺物である。他の破片遺物は、小破片がほとんどであるが、上記坏破片と同時期と考えて問題がない。ここでは第5洪水層下水田を8世紀中頃のものと考えておきたい。

(5)第6洪水層下面(付図3 第193・194図 PL120・177 遺物観察表P.510)

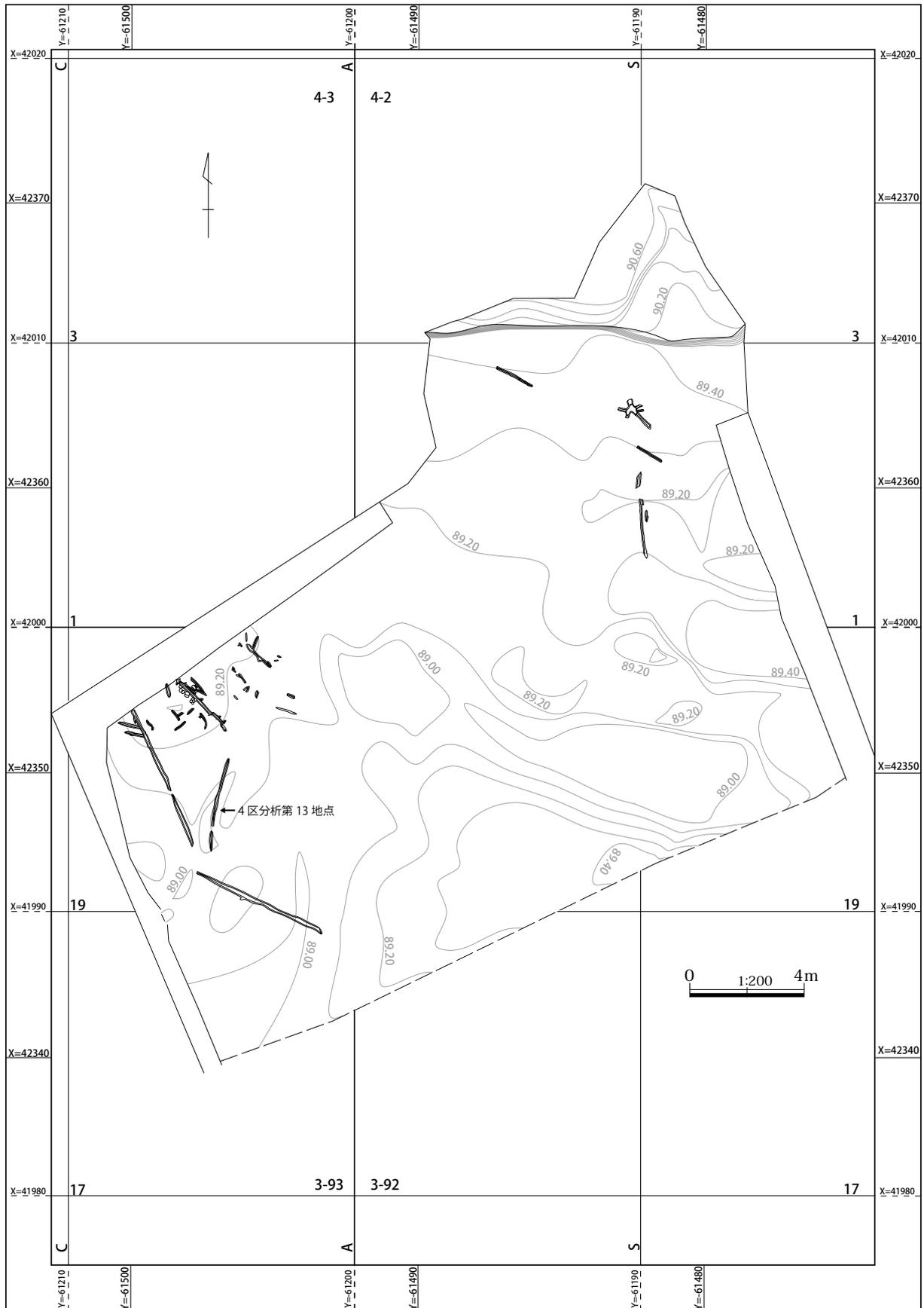
第5洪水層の南側に露出していた砂礫層は、その南北で、第5洪水層下黒色土の下位に潜り込んで堆積していた(付図3の4区共通土層断面F-F)。そこで、西側の自然堤防の台地部を含む幅16mほどのトレンチを設定し、第6洪水層下面の調査を行ったところ、遺構は検出されなかった。遺物は、第6洪水層下の黒色土上面から土師器17点、須恵器破片2点、2カ所で流木群が集中して出土した。このトレンチ調査で遺構が検出されなかったことから、トレンチ以南の第6洪水層下面の調査は実施しなかった。

出土した土師器・須恵器破片は、摩耗があり、洪水砂とともに流されてきた可能性もあるが、なかには土師器坏(第193図1)のように半完形のものもあり、台地上の包含層からの崩落とも考えられる。時期は概ね5～6世紀の土器破片である。

第6洪水層下面の年代は、出土した土師器・須恵器破片から古墳時代後期以降と考えておきたい。なお流木についてはC¹⁴年代測定をおこなった。第6洪水層の下位の土層については未調査であるため、榛名二ツ岳火山灰や浅間C軽石の有無は明確でない。また、谷を埋めた第6洪水層は4区共通土層断面A-AやD-D(付図3)で第5洪水層の下位に認められた砂礫層と連続する可能性があるが、調査区を広げることはできなかった。



第193図 4区低地部第6洪水層下面出土遺物



第194図 4区低地部第6洪水層下面

3.4区台地部の遺構と遺物

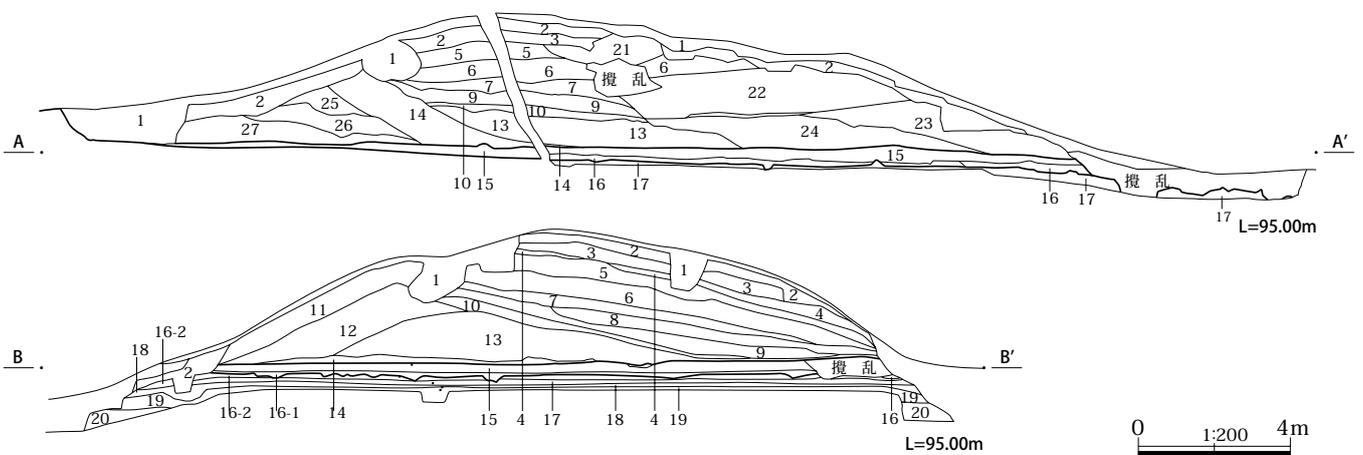
(1) 権現山 (付図6 第195～198図 PL121・178・179 遺物観察表 P.510)

4区台地部のほぼ全域に、通称「権現山」という土山が現存していた。権現山は昭和10年8月に調査報告された『群馬県古墳総覧』に「荒砥村第334号権現山」として記載されており、古墳として認識されていた。

『群馬県古墳総覧』には「全長70m未満の前方後円墳？」で、「後円部に権現社、前方部に八幡社」があると記載され、出土遺物には板碑があるとされている。また昭和49年5月に刊行された『荒砥村誌』では古碑の項に「権現山古碑」として記述があり、「これは円墳で、この墳の上に古碑がある。長さ二尺、巾六寸三分。秩父青石で、蓮華座と梵字があり、下に建武 と刻んであり、年月日不詳。」と記載さ

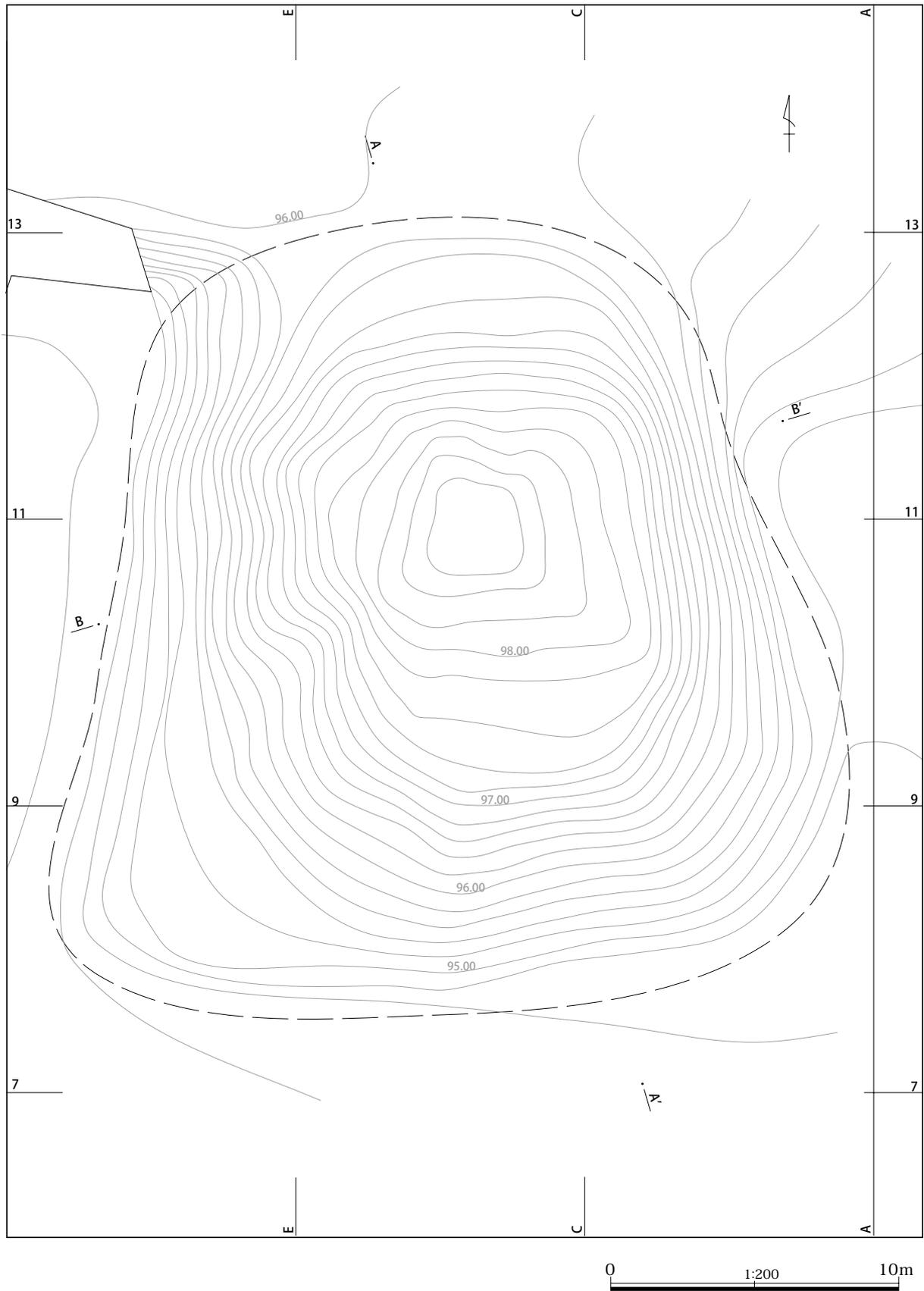
れている。前橋市の遺跡台帳にも「前橋市遺跡番号00281第334号権現山古墳」として記載されていることから、古墳としての調査も意識して現況測量を実施した(第196図)。

権現山の現況は不整形な隅丸方形で、やや南辺が長い台形を呈する。南北長27.9m、北辺幅20m、南辺幅27.9m、現地表からの高さは3.7mである。1981(昭和56)年に実施された荒砥南部圃場整備事業に伴って行われた女堀の発掘調査では、この権現山の北東側に隣接する堀部分が調査された(荒口地区前田1区・第224図)。このときの権現山は「高さ3m、幅25mの土山が50mに渡って続いている。前方後円墳と考えられてきたが、その位置からは女堀と関係する可能性が高い。」と報告されている。圃場整備事業に伴って権現山の南半に排水路が造られた際に、権現山の規模は南北長50mから30m弱に削られたものと推定される。

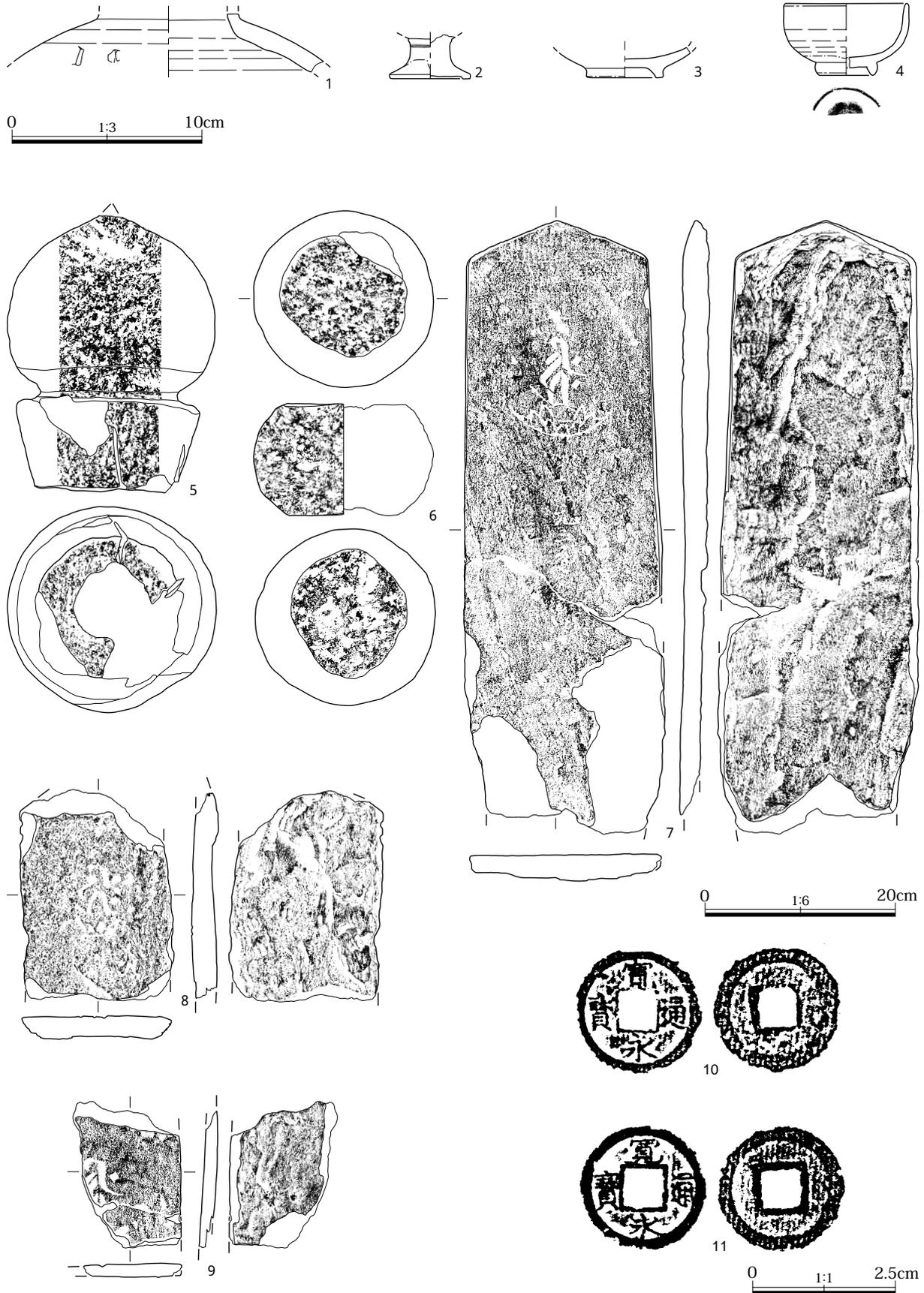


- | | |
|-----------------------------|---------------------------------|
| 1. 褐灰砂質土 10YR6/1 表土および攪乱土。 | 15. 暗灰色砂質土 白色軽石を含む。 |
| 2. 褐色土 | 16-1. 灰色砂 |
| 3. 暗褐色土 黄灰色土塊を含む。 | 16-2. 黒灰褐色土 黄灰軽石・白色軽石を含む。 |
| 4. 暗褐色土 黒灰褐色土塊を含む。 | 17. 黒灰褐色土 黄灰軽石を含む。 |
| 5. 黒褐色土 黒灰褐色土塊を含む。 | 18. 暗灰褐色土 |
| 6. 暗灰褐色土 上層は黒味が強い。暗灰色土塊を含む。 | 19. 褐色土 |
| 7. 暗灰褐色土 黄灰色砂層塊を含む。 | 20. 暗褐色土 |
| 8. 暗灰褐色土 灰色砂粒・塊を含む。 | 21. 暗灰褐色土 黄灰色土塊・暗灰色土塊を含む。 |
| 9. 暗灰褐色土 灰色砂塊を多く含む。 | 22. 暗灰褐色土 黄灰色砂粒・塊を含む。黒灰褐色土塊を含む。 |
| 10. 黒色土 黄灰色軽石を含む。 | 23. 黒灰褐色土 暗灰色土塊を含む。 |
| 11. 褐色土 | 24. 黒灰褐色土 灰色砂粒含む。 |
| 12. 暗灰褐色土 白色軽石を含む。 | 25. 暗灰褐色土 灰色砂塊含む。 |
| 13. 黒灰褐色土 灰色砂を含む。 | 26. 黒灰褐色土 黄灰色砂塊を含む。 |
| 14. 暗灰色砂質土 黄灰色土及び暗灰褐色土塊を含む。 | 27. 黒灰褐色土 黄灰色土・暗灰褐色土塊を含む。 |

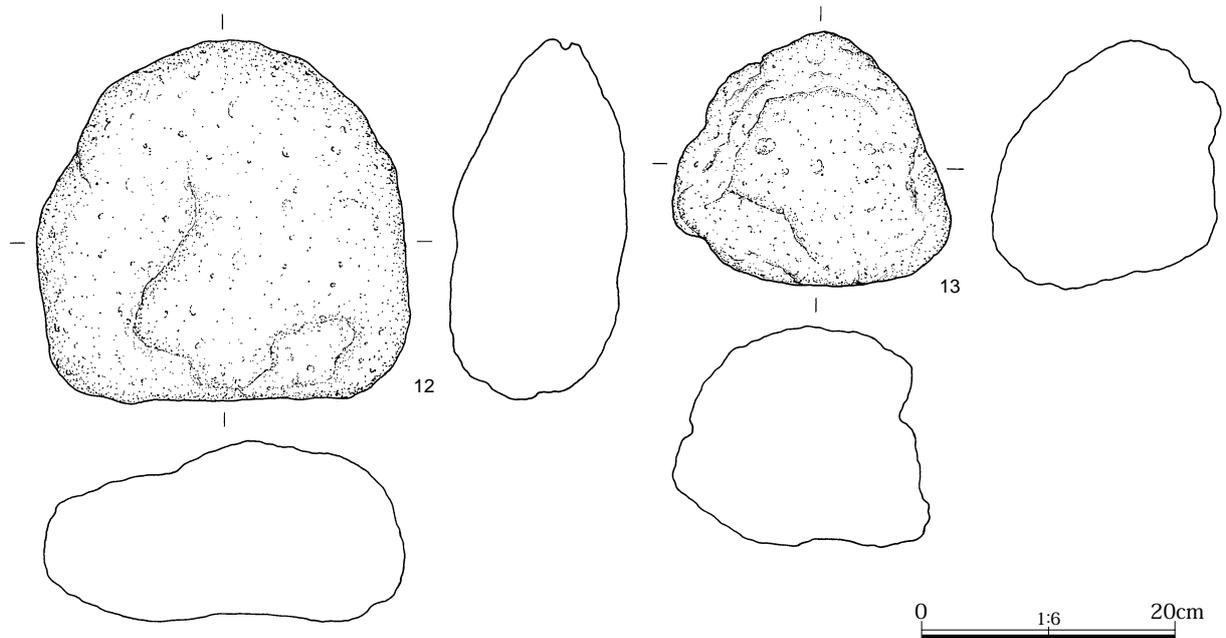
第195図 4区台地部権現山土層断面



第 196 図 4 区台地部権現山現況図



第 197 図 4 区権現山表土出土遺物 (1)



第 198 図 4 区権現山表土出土遺物 (2)

このような状況のなかで、権現山の調査を実施した。現況測量後、南北 - 東西 2 方向の土層断面が観察・記録できるように土層観察面を残しながら掘り下げた。その結果、権現山は旧地表面の上に斜めに土砂を積み重ねた結果できた土山であることが判明した(第 195 図)。女堀の堀部分は権現山の東側にあり、土層断面 B - B の B 方向から B の方向へ土砂を積んでいる。したがって、この土山が女堀掘削排土であることは明白であろう。4 区全体の調査によって、南側の低地部にも排土山が連続して検出された。権現山は、1981 年の圃場整備事業も含めた後世の土地利用のために削り残されたのである。なお、女堀については、3 区で検出された部分も含めて、第 7 章で報告した。

権現山の表土を除去する段階で、多くの遺物が出土した。これらの遺物は時期的に混在していたので、表土一括で取りあげた。土器は土師器 192 点、須恵器 28 点、陶器 30 点、磁器 13 点、軟質土器 11 点が出土した。土師器・須恵器は混入であろう。陶磁器類は、江戸時代のものが多く、近現代のものまで含まれている。図示したのはこのうち、須恵器壺(第 197 図 1)、江戸時代のものと見られる磁器仏

飯器脚部(2)、18 世紀中頃から 19 世紀初頭のものとして推定される陶器肥前碗(3)、江戸時代のものと見られる瀬戸美濃系小碗(4)である。また五輪塔破片 2 点(5・6)、板碑破片 4 点(7~9)大型礫(第 198 図 12・13)、銭貨(10・11、礫片 5 点)が出土した。出土した板碑には「建武」の刻字はなく、『荒砥村誌』に古碑と記載された板碑とは異なるものである。これらの遺物の出土から、権現山は墓地として使われたことが予想されたので、表土除去後に、表土下面の遺構確認作業を実施した。

(2) 墓地(付図 6 第 199 ~ 209 図 PL121 ~ 127)

権現山の厚さ 0.15 ~ 0.30 m の表土を除去したところ、女堀排土上面にかけての層位で、小礫が集まった地点を 23 カ所検出した(付図 6)。これらをここでは集石と呼ぶ。これらの集石は、周辺に五輪塔や板碑が出土することや、遺構内に人歯骨が少量残存するものがあることから、墓と考えられる。女堀排土の周囲が削られ、土山として残存した権現山が、墓域として使われたのであろう。

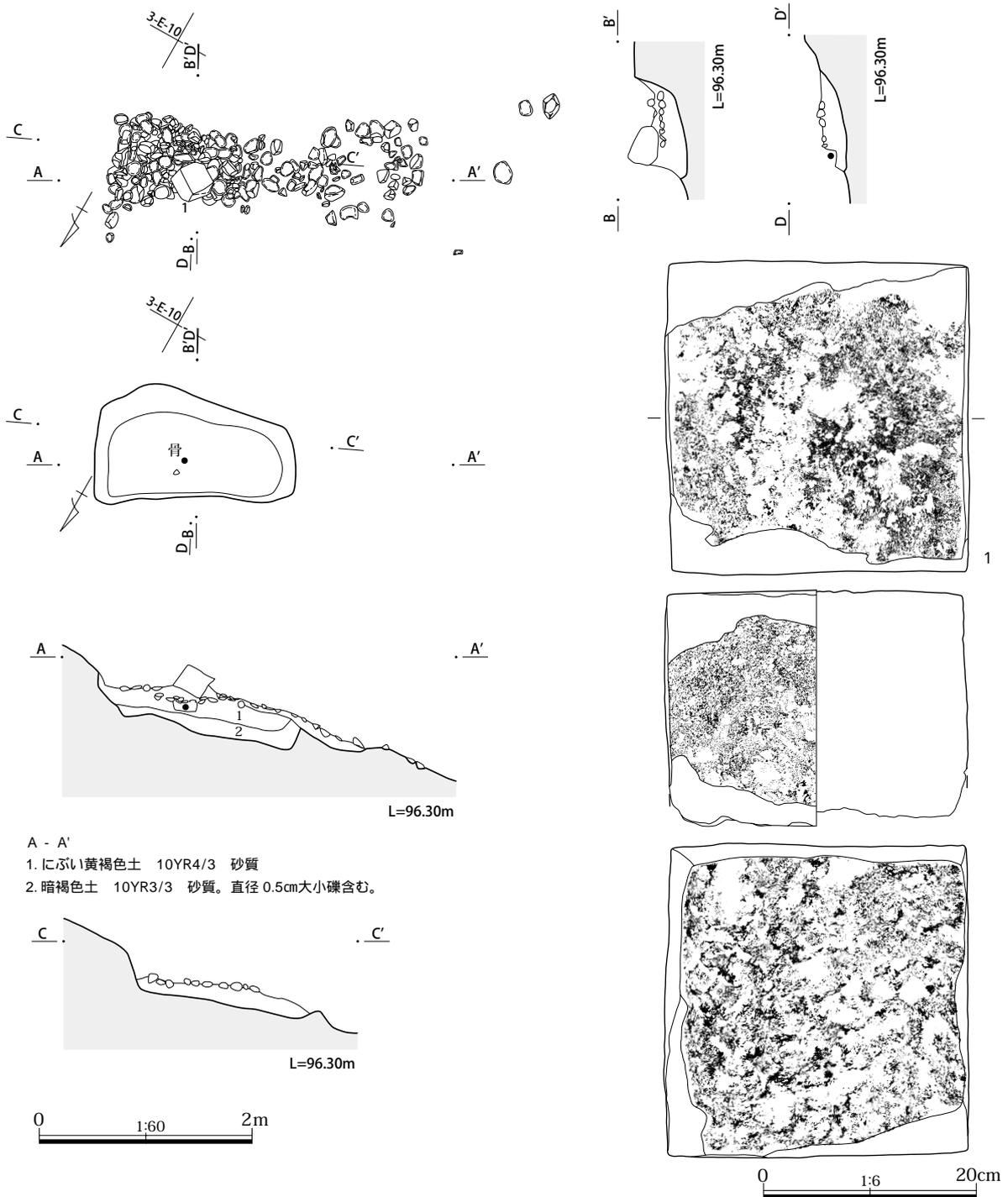
集石はその集中状況や下層の遺構の有無によって、a:長方形の集石で下位に土坑が伴うもの、b:

2. 4区低地部の遺構と遺物

集石は少ないが下位に土坑を伴うもの、c：下位に掘り込みがなく礫や遺物が散在するだけのものの三種類に分けられた。本報告では、集石aとbを個別遺構として扱い、cは後世に崩れたものが残されたと推定して、集石cは付図6に平面図のみ掲載した。集石aは、長軸方向は一定でないが権現山の南東部

に集中して分布している。集石bは権現山の北斜面および西斜面に分布する。集石cは権現山の北西裾と南裾に集中しており、崩落によるものと推定させる。5号集石は位置的には集石cであるが、銭貨と骨片が出土していることから、集石遺構と考えた。

墓地の時期は、板碑や五輪塔があることから、中



第 199 図 4区2号集石と出土遺物

第6章 4区の遺構と遺物

世に遡ると推定される。土器は墓地全体で陶器5点、磁器1点、軟質土器7点が破片で出土しているのみである。18号集石から中世と見られる常滑甕底部破片が出土しているが、その他の多くは江戸時代のものである。また銭貨に寛永通宝が混在していることから、墓域としての土地利用は江戸時代まで継続されたのであろう。

集石 a

4区2号集石(付図6 第199図 PL122・179 遺物観察表P.510)

位置 4区4-3-E-9・10 G

形状 集石部:長方形 土坑部:隅丸不整長方形
重複 無し

規模 集石部 長軸30m 短軸1.5m 厚さ0.18m
土坑部 長軸1.90m 短軸0.92m
残存壁高0.40m

長軸方位 N-60°-E

断面形 最上位に最大で厚さ0.18mに小礫が堆積し、その下層に浅い箱形の断面形状をもった土坑が掘られていた。

埋没土 下位の土坑は、砂質のにぶい黄褐色土と暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸があり、権現山の傾斜に沿って傾斜していた。

遺物と出土状況 小礫の直径は0.1~0.15mで小礫層の上には五輪塔地輪(第199図1)の破片が、斜位で出土した。五輪塔の真下にあたる位置の、底面上12cmには焼人骨片5点が出土した。また、埋没土中から混入の土師器破片2点が出土した。

所見 墓の時期は中世と推定される。出土した人骨は焼骨であったが、土坑内には炭化材や焼土は出土しなかったことから、本集石内には別の場所で焼いたものが埋葬されたと考えられる。また、五輪塔の下位はやや小礫が五輪塔とともに沈んでいたことから、焼骨は土坑埋没土内に掘り込んだ小土坑内に埋葬されたと推定される。

4区3号集石(付図6 第200図 PL123・179・180 遺物観察表P.511)

位置 4区4-3-D・E-8 G

形状 集石部:長方形 土坑部:西側が斜面によって削られており、立ち上がりを検出できなかったが、隅丸長方形と推定される。

重複 無し

規模 集石部 長軸1.84m 短軸0.90m
厚さ0.22m

土坑部 長軸1.92m 短軸0.40m以上
残存壁高0.18m

長軸方位 N-22°-W

断面形 最上位に最大で厚さ0.22mに小礫が堆積し、その下層に浅い箱形の断面形状をもった土坑が掘られていた。

埋没土 下位の土坑は、砂質のにぶい黄褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや中央が凹んでいた。権現山の傾斜に沿って傾斜していた。

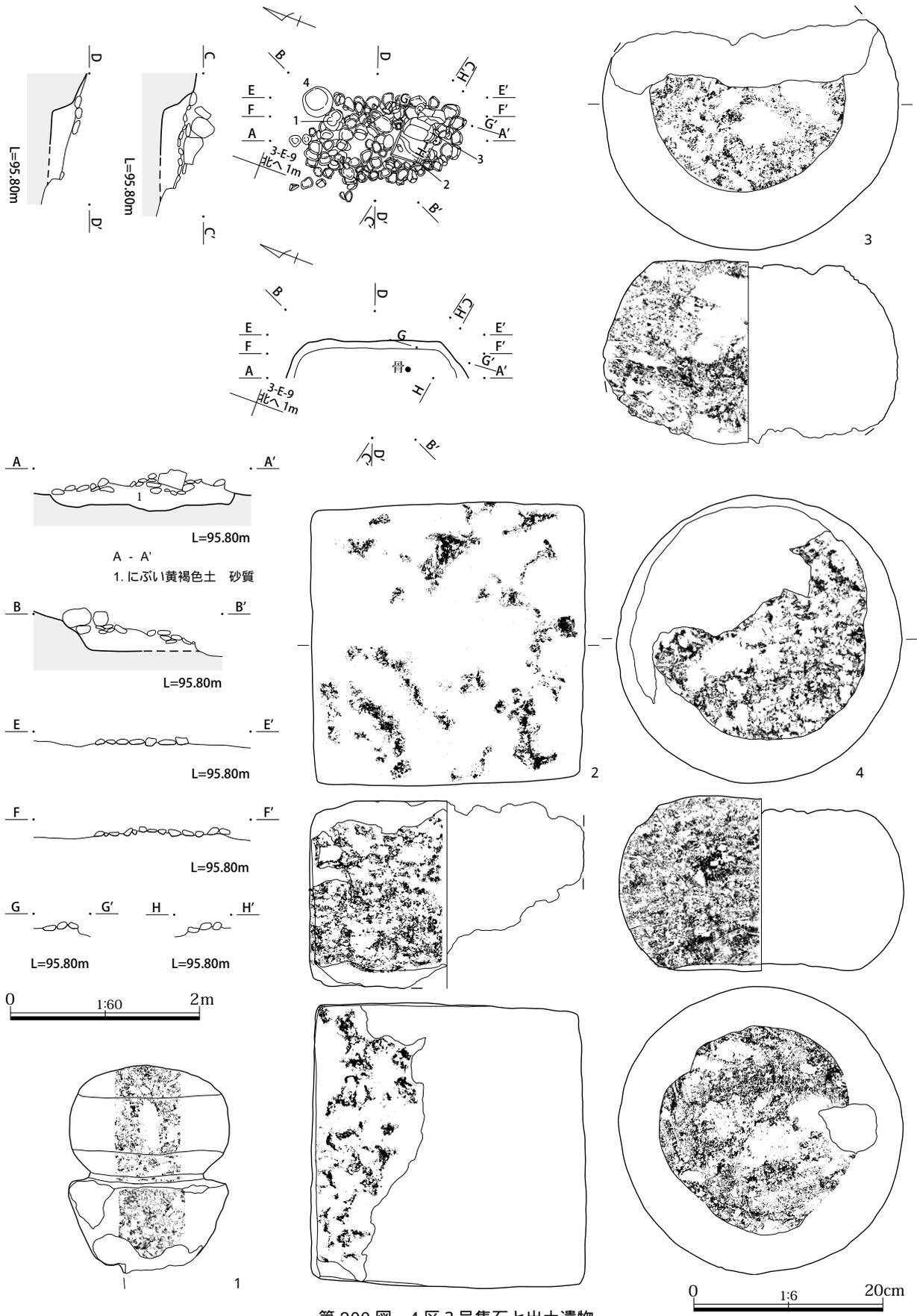
遺物と出土状況 小礫の直径は0.1~0.20mで小礫層の上には五輪塔の空風輪(第200図1)、地輪(2)、水輪(3・4)の破片と大型礫が散らばって出土した。五輪塔地輪の真下にあたる位置の、底面上16cmには焼人骨片3点が出土した。埋没土中から混入の土師器破片2点が出土した。

所見 墓の時期は中世と推定される。出土した人骨は焼骨であったが、土坑内には炭化材や焼土は出土しなかったことから、本集石内には別の場所で焼いたものが埋葬されたと考えられる。また、五輪塔の下位はやや小礫が五輪塔とともに沈んでいたことから、焼骨は土坑埋没土内に掘り込んだ小土坑内に埋葬されたと推定される。

4区4号集石(付図6 第201・202図 PL123・180 遺物観察表P.511)

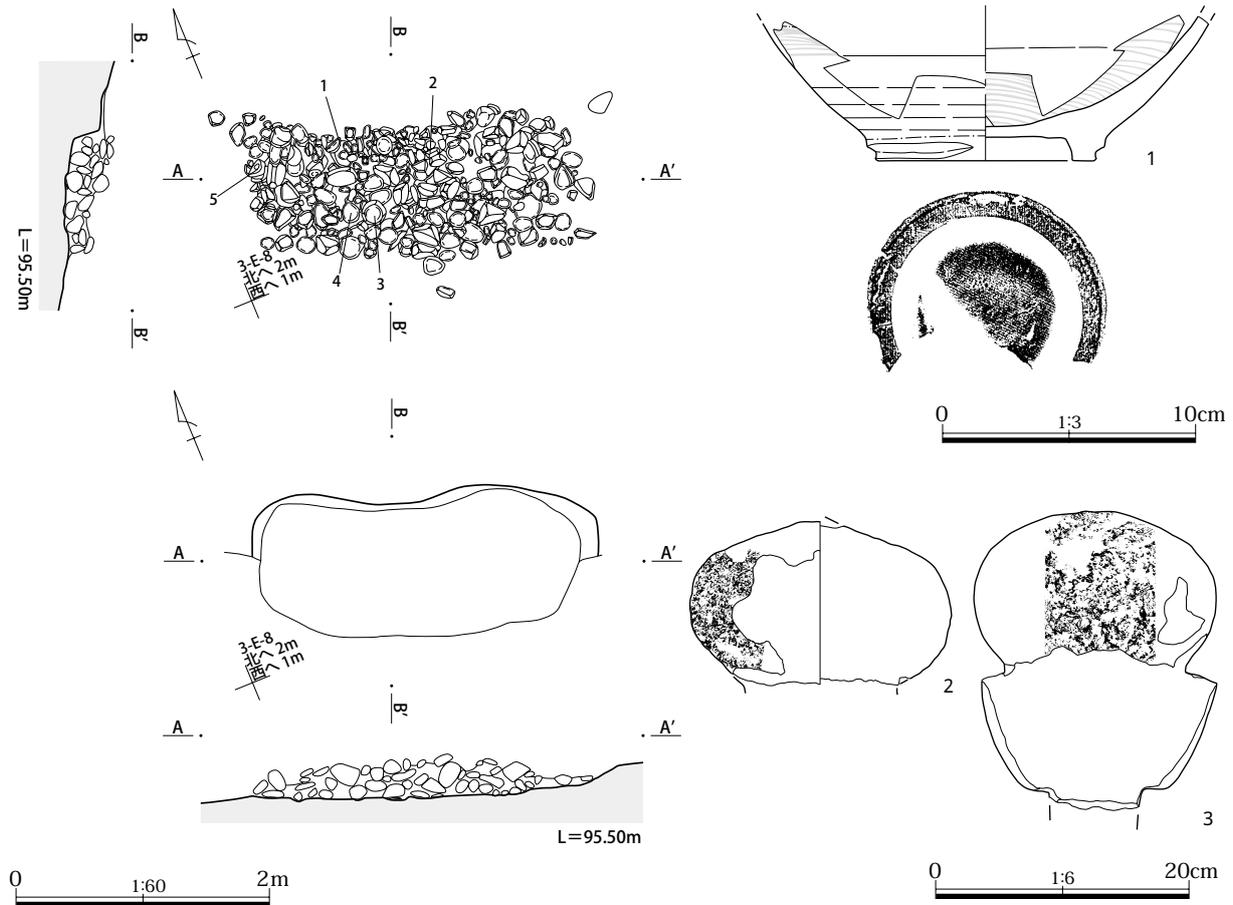
位置 4区4-3-D・E-9 G

形状 集石部:長方形 土坑部:隅丸長方形
重複 無し



第 200 図 4 区 3 号集石と出土遺物

第6章 4区の遺構と遺物



第201図 4区4号集石と出土遺物(1)

規模 集石部 長軸 2.65 m 短軸 1.08 m
厚さ 0.36 m
土坑部 長軸 2.73 m 短軸 1.20 m以上
残存壁高 0.28 m
長軸方位 N - 68° - W
断面形 浅い箱形の断面形状をもった土坑内に厚さ
0.36 mに小礫が堆積していた。
埋没土 土坑内は直径 0.1 ~ 0.25 mの礫で埋まっ
ていた。
底面 底面はほぼ平坦であった。
遺物と出土状況 小礫層に混じって、五輪塔の空風
輪(第201図2・3)、五輪塔破片3点、板碑破片2点、
大型敲石(第202図4・5)、擦石(6)や、陶磁器
破片5点が散らばって出土した。また混入の土師器
破片も8点出土した。図示した陶器肥前鉢(第201
図1)は17世紀末~18世紀中頃のものと思われる
が、18号集石で出土した破片と接合した。

所見 本集石は2号・3号と異なり、土坑内がすべ
て小礫で埋められていた。礫層の下位には骨は検出
されなかった。しかし、小礫が長方形に集められて
いること、礫の中や上部に五輪塔や板碑の破片が出
土していることが共通することから、同列に扱った。
時期は中世と推定される。

4区5号+17号集石(付図6 第203図
PL124・180・181 遺物観察表P.511)

位置 4区4-3-D-7G

形状 集石部: 礫が散在しており、帯状に連なって
見える。 土坑部: 不明

重複 無し

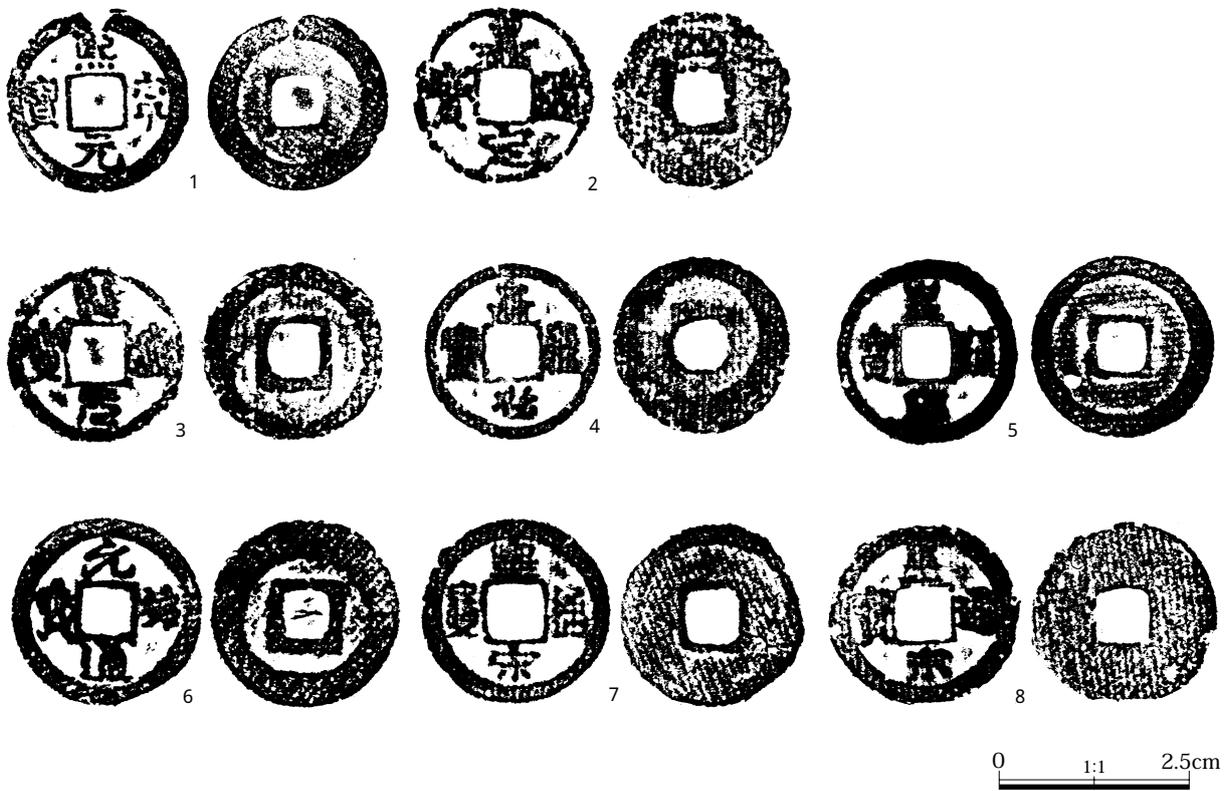
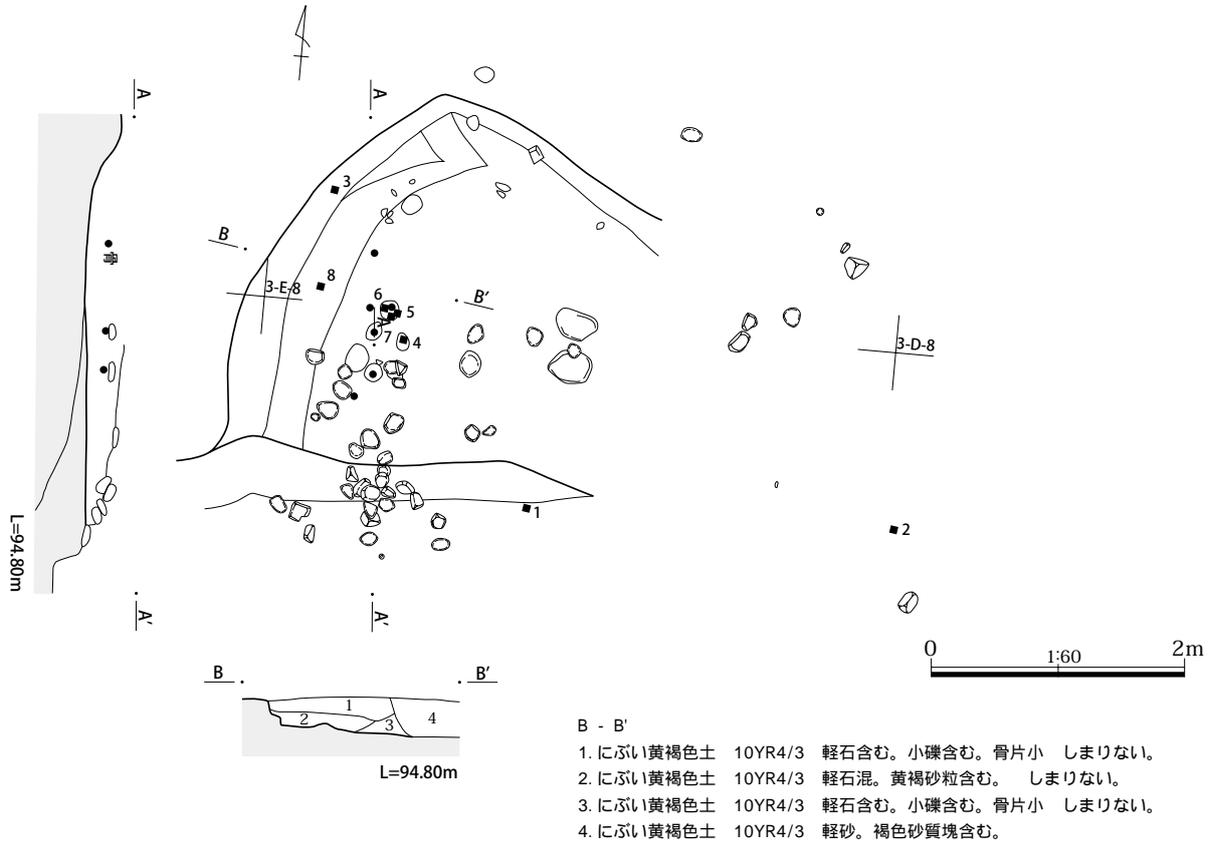
規模 集石部 長軸 2.00 m 短軸 0.70 m
厚さ 0.16 m

土坑部 長軸 不明 短軸 1.0 m以上
残存壁高 0.30 m



第202図 4区4号集石と出土遺物(2)

第6章 4区の遺構と遺物



第203図 4区5号+17号集石と出土遺物

長軸方位 N - 4° - W

断面形 台地縁辺の浅い箱形の断面形状をもった段差内に厚さ 0.15 m に小礫が散在し堆積していた。

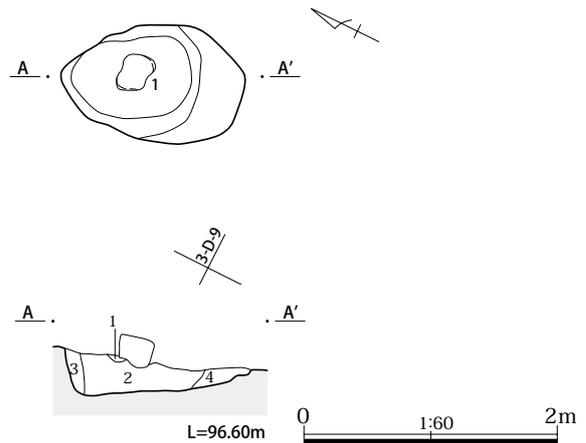
後世の攪乱によって、土坑の形状は不明である。

埋没土 直径 0.1 ~ 0.25 m の小礫や黄褐色土粒、骨片を含むにぶい黄褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 小礫のなかには石製品は出土しなかったが、小礫に混じって 7 枚 (第 203 図 1・3 ~ 8)、やや離れた位置から 1 枚の銭貨 (2) が出土した。また礫の出土層位よりやや下層で人骨片が出土した。土器は出土しなかった。

所見 本集石は 2 号・3 号集石とは異なり、礫層および下位土坑が明確にとらえられなかったが、銭貨および人骨片が出土したことから、集石 a として扱った。土坑部の形状は明らかでなく、記録した掘り方は後世の削平を反映したものである。墓坑の本体は土層断面 A - A' を中心とする部分であったと推定される。時期は中世と推定される。



- A - A'
- 1 黒褐色土 砂質土。
 - 2 にぶい黄褐色土 しまり有り。
 - 3 黒褐色土 As-B 含む。黒褐色塊含む。
 - 4 にぶい黄褐色土 黒色土塊含む。

集石 b

4 区 11 号集石 (付図 6 第 204 図 PL124・181)

遺物観察表 P.511)

位置 4 区 4 - 3 - C - 9 G

形状 集石部：礫がほとんどなく、五輪塔破片が土坑埋没土上層で出土した。土坑部：楕円形

重複 無し

規模 集石部 無し

土坑部 長径 不明 短径 0.95 m

残存壁高 0.43 m

長軸方位 N - 27° - W

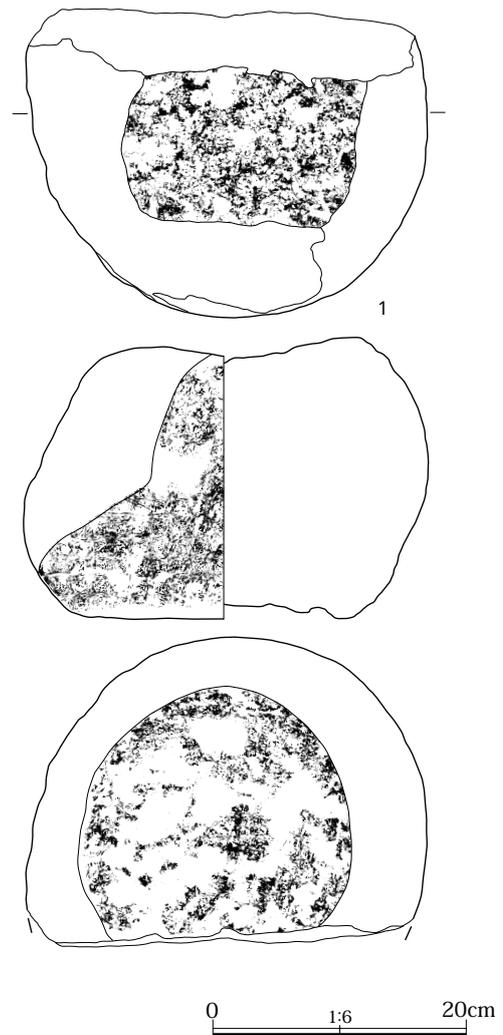
断面形 浅い箱形

埋没土 しまりのないにぶい黄褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 埋没土上層から五輪塔水輪破片 (第 204 図 1) が出土した。埋没土中から板碑破片が出土した。人骨や土器は出土しなかった。

所見 本遺構は集石がほとんど検出されなかったが



第 204 図 4 区 11 号集石と出土遺物

第6章 4区の遺構と遺物

下位で土坑が確認できたので、集石と同列に扱った。
時期は中世と推定される。

4区13号集石(付図6 第205図 PL125・181
遺物観察表P.511)

位置 4区4-3-D-9G

形状 集石部：五輪塔の破片を含むやや大型の礫が
散在していた。土坑部：楕円形

重複 無し

規模 集石部 長径 1.34 m 短径 0.32 m
厚さ 0.20 m

土坑部 長径 1.97 m 短径 0.71 m
残存壁高 0.50 m

長軸方位 N - 8° - W

断面形 浅い皿形 埋没土 不明。

底面 底面はほぼ平坦で、北側がやや高く傾斜して
いた。

遺物と出土状況 集石に混じって五輪塔地輪破片
(第205図1)が出土した。埋没土中から混入の土
師器甕破片が1点出土した。人骨は出土しなかった。

所見 他の集石bに比べると、短径の短い細長い楕
円形である。時期は中世と推定される。

4区14号集石(付図6 第205図 PL125)

位置 4区4-3-E-9G

形状 集石部：五輪塔の破片を含むやや大型の礫が
散在していた。土坑部：楕円形

重複 無し

規模 集石部 長径 1.34 m 短径 0.32 m
厚さ 0.20 m

土坑部 長径 1.97 m 短径 0.71 m
残存壁高 0.50 m

長軸方位 N - 5° - E 断面形 浅いボール形

埋没土 小礫を含む褐色土で埋まっていた。

底面 底面はやや凹凸があり、南北両側が高くなっ
ていた。

遺物と出土状況 集石は南側に偏在して埋没土中位
で出土した。人骨片が底面上31cmと3cmの2カ

所で出土した。土器は出土しなかった。

所見 他の集石bに比べると、やや丸い土坑である。
時期は出土遺物が無く不明であるが、他の集石遺構
と同様であれば中世と推定される。

4区15号集石(付図6 第205図 PL125)

位置 4区4-3-E-8G

形状 集石部：やや大型の礫が埋没土上層に散在し
ていた。土坑部：不整楕円形

重複 16号集石に先行する。

規模 集石部 無し

土坑部 長径 1.88 m 短径 1.18 m
残存壁高 0.33 m

長軸方位 N - 36° - W

断面形 浅い箱形

埋没土 軽石粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 集石はほとんど無く、埋没土上層
に散在していた。埋没土中から混入の土師器破片
13片が出土した。人骨片や陶磁器は出土しなかった。

所見 時期は出土遺物が無く不明であるが、他の集
石遺構と同様であれば中世と推定される。

4区16号集石(付図6 第205図 PL125)

位置 4区4-3-E-8・9G

形状 集石部：やや大型の礫が埋没土上層に散在し
ていた。土坑部：不整楕円形

重複 15号集石に後出する。

規模 集石部 無し

土坑部 長径 1.96 m 短径 1.08 m
残存壁高 0.20 m

長軸方位 N - 46° - W

断面形 浅い箱形

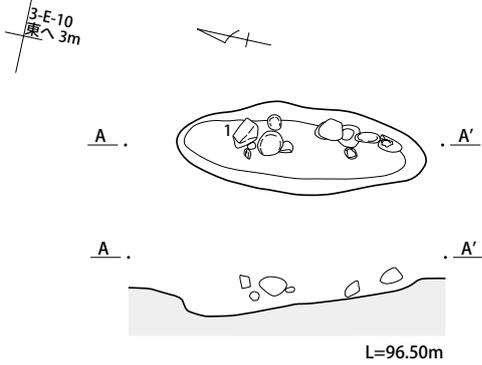
埋没土 浅間C軽石を含む黒色土塊を含む褐色土、
しまりのない褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

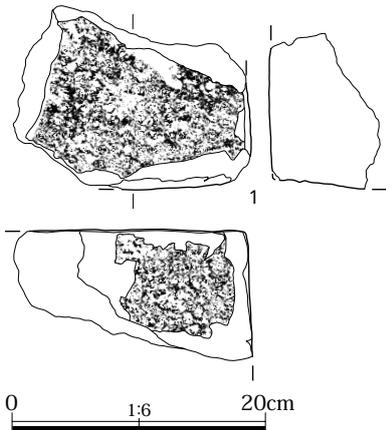
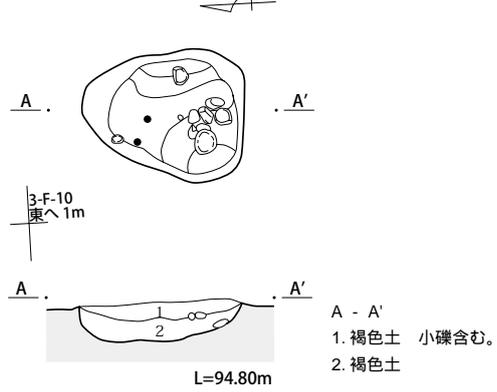
遺物と出土状況 集石はほとんど無く、埋没土上層
に散在していた。埋没土中から混入の土師器破片

3. 4区台地部の遺構と遺物

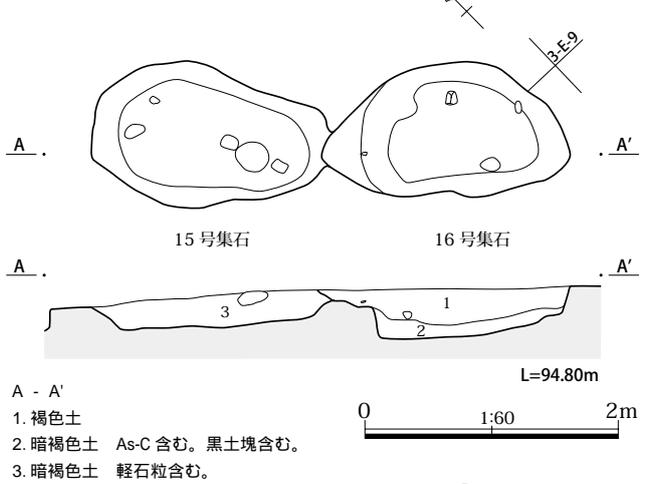
4区13号集石



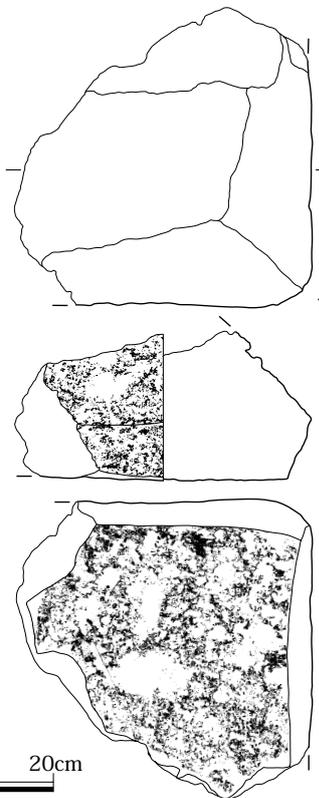
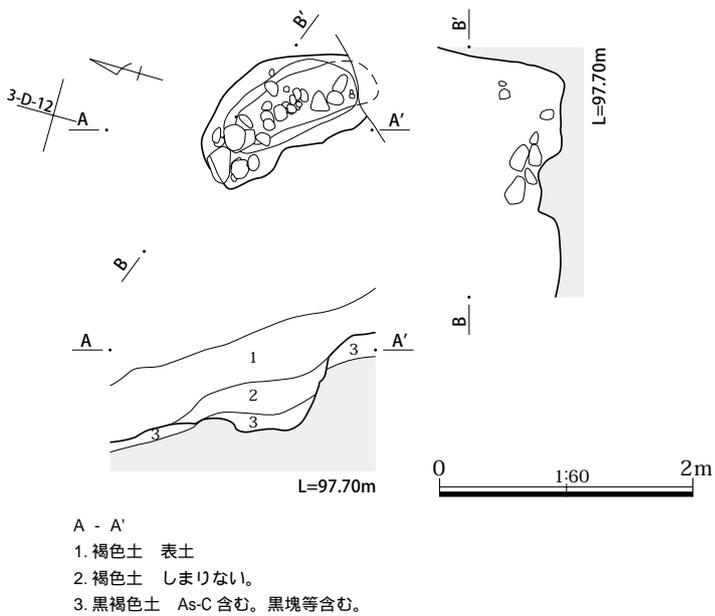
4区14号集石



4区15・16号集石



4区19号集石



第205図 4区13・14・15・16・19号集石と出土遺物

第6章 4区の遺構と遺物

12片が出土した。人骨片や陶磁器は出土しなかった。
所見 時期は出土遺物が無く不明であるが、他の集石遺構と同様であれば中世と推定される。

4区19号集石(付図6 第205図 PL126・183
遺物観察表 P.511)

位置 4区4-3-C・D-11G

形状 集石部：やや大型の礫が土坑内に集中していた。土坑部：不整楕円形

重複 無し

規模 集石部 長軸 1.35 m 短径 0.44 m
厚さ 0.30 m

土坑部 長径 1.50 m 短径 0.80 m
残存壁高 0.80 m

長軸方位 N - 45° - W

断面形 箱形。北端は斜面で切られており、ほとんど立ち上がりがないほど浅くなっていた。

埋没土 浅間C軽石を含む黒色土塊を含む褐色土、しまりのない褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 集石は土坑内に落ち込んで出土した。集石に五輪塔火輪破片(第205図1)が混じていた。人骨片や土器は出土しなかった。

所見 時期は中世と推定される。

4区20号集石(付図6 第206図 PL126・181
遺物観察表 P.511・512)

位置 4区4-3-C-11G

形状 集石部：やや大型の礫が土坑内に集中していた。土坑部：不整楕円形

重複 無し。北側は斜面で立ち上がりが浅くなっていたが、別の土坑が重複していたかどうかは確認できなかった。

規模 集石部 長軸 1.16 m 短径 0.45 m
厚さ 0.66 m

土坑部 長径 1.20 m 短径 0.71 m
残存壁高 0.92 m

長軸方位 N - 16° - W

断面形 不整U字形。北端は斜面で切られており、浅くなっていた。南端の下場がやや抉れていた。

埋没土 しまりのない褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 集石は土坑内に落ち込んで出土した。最深部には五輪塔空風輪(第206図1)が底面上17cmで出土した。集石内には大型礫(2・3)や五輪塔破片2点が混じていた。人骨片や土器は出土しなかった。

所見 時期は中世と推定される。北側にはさらに楕円形の掘り込みがあるが、集石部と一体のものかどうかは判断できなかった。上記の計測値はそれを除いた集石部のものである。

4区8号+21号集石(付図6 第207図
PL126・182 遺物観察表 P.512)

位置 4区4-3-C-11G

形状 集石部：やや大型の礫や小礫が土坑内に落ち込んでいた(21号集石)。また西側に小礫が集中していた(8号集石)。

土坑部：21号集石下位に掘り込みが土層断面で確認できたが、土坑の全体形状を検出・記録することができなかった。

重複 無し

規模 集石部 長軸 0.70 m 短径 0.20 m
厚さ 0.38 m

土坑部 長径・短径不明
残存壁高 0.58 m

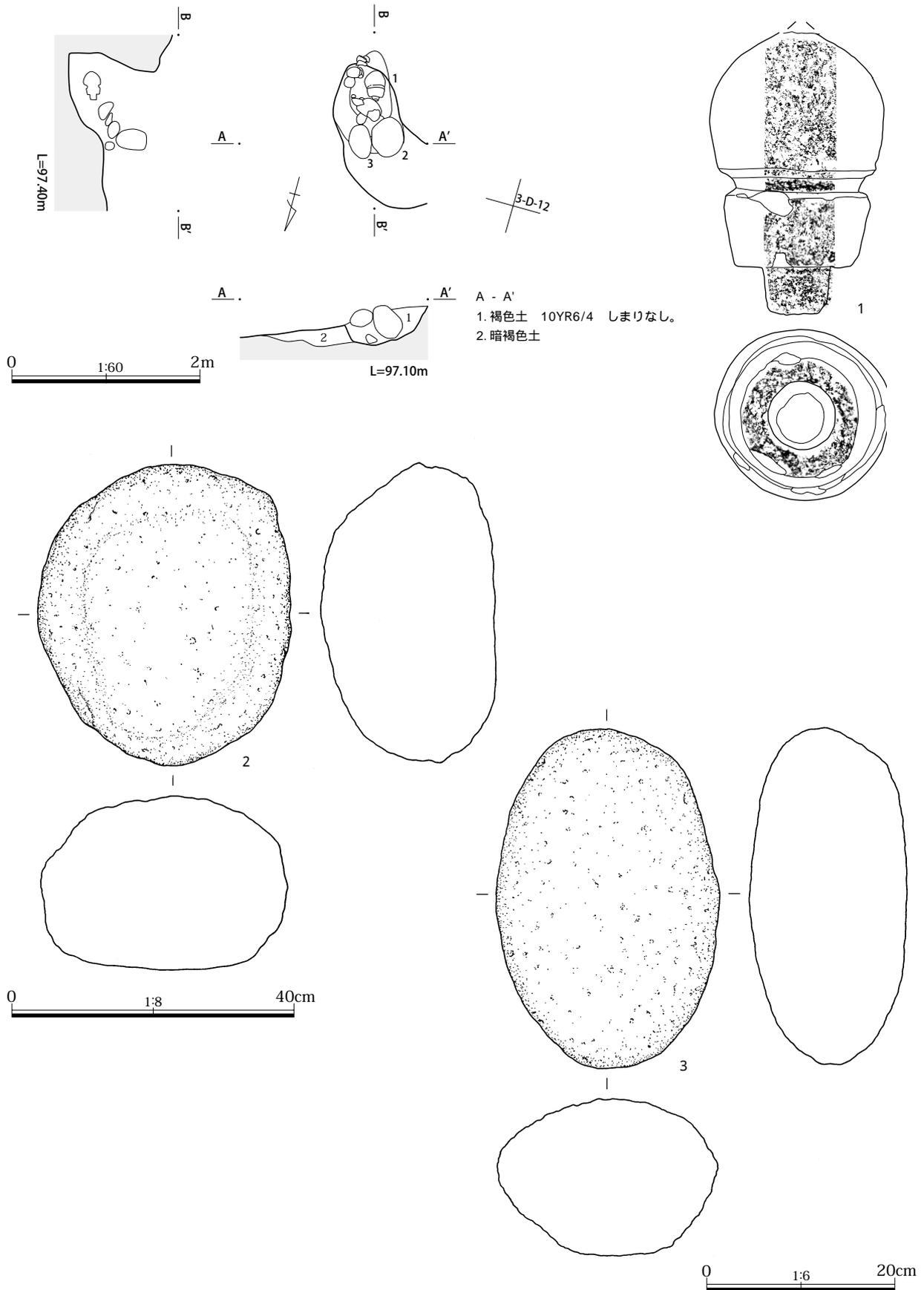
長軸方位 不明

断面形 箱形。東端は斜面で切られており、浅くなっていた。

埋没土 黄褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

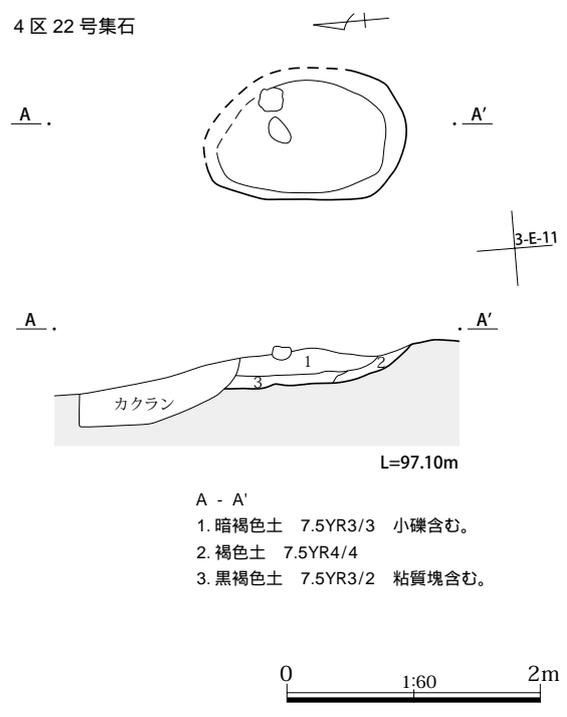
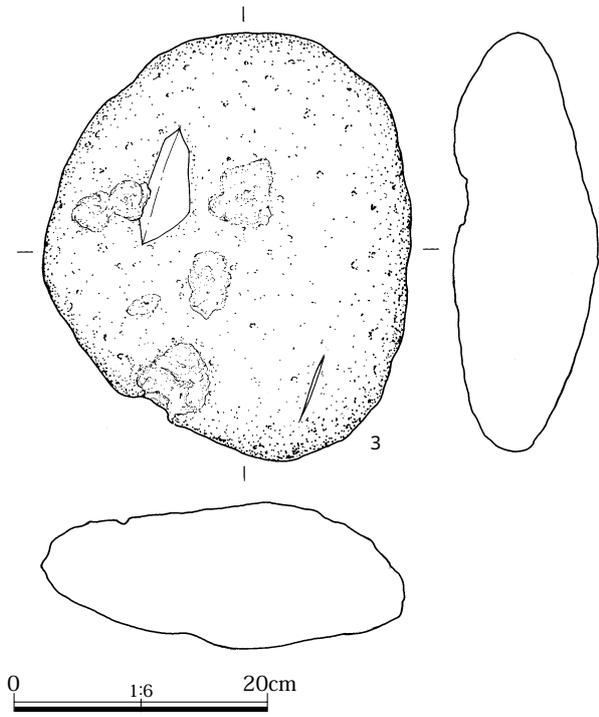
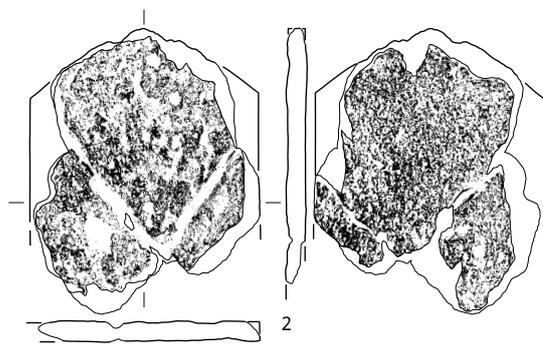
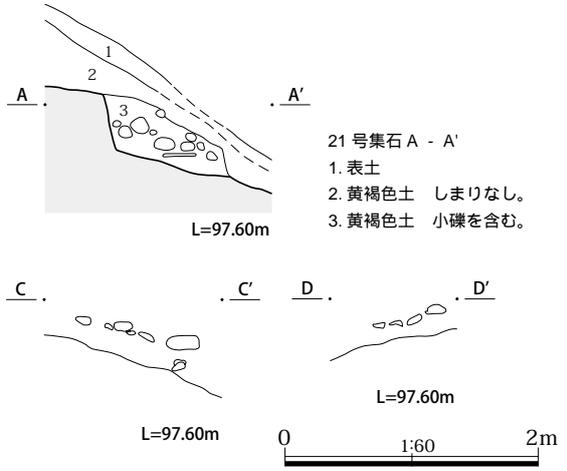
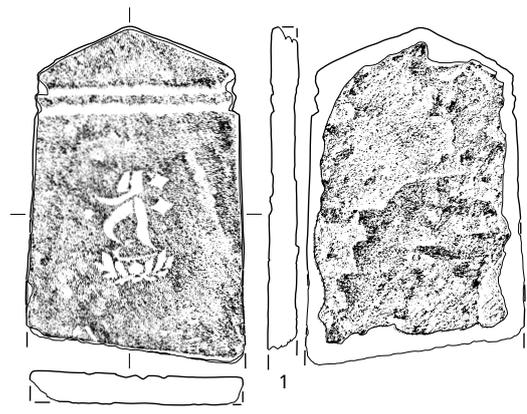
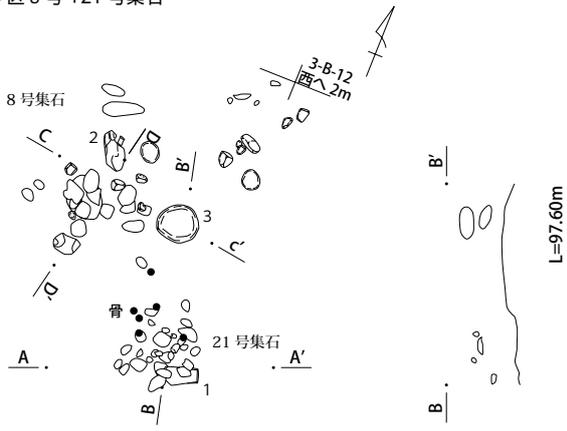
遺物と出土状況 集石は土坑内に落ち込んで出土した。最深部には板碑(第207図1)が底面上13cmで出土した。集石内には板碑破片(2)や大型凹石(3)が混じていた。また9号・23号集石出土の五輪塔地輪(第208図3)に接合する破片も出土し



第 206 図 4 区 20 号集石と出土遺物

第6章 4区の遺構と遺物

4区8号+21号集石



第207図 4区8号+21号・22号集石と出土遺物

3. 4区台地部の遺構と遺物

た。21号集石南端では、礫に混じって人骨片7点が出土した。この他に8号集石の埋没土中から板碑破片14点、21号集石の埋没土中から五輪塔破片20点、板碑破片1点、礫片2点、混入の土師器1点が出土している。

所見 時期は中世と推定される。当初は8号集石を検出・調査開始したが、下位に土坑が検出できなかったことから、本体は21号集石と判断した。

4区22号集石(付図6 第207図 PL127)

位置 4区4-3-D-11G

形状 集石部:礫2個のみが埋没土上層に出土した。
土坑部:北縁を攪乱によって壊されているが、楕円形と推定できる。

重複 無し

規模 集石部 不明

土坑部 長径 1.60 m 短径 1.10 m

残存壁高 0.24 m

長軸方位 N - 6° - W

断面形 浅い皿形。北端は斜面の攪乱で切られており、不明である。

埋没土 小礫を含む暗褐色土や褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 集石は礫が2点埋没土中より出土したのにとどまる。埋没土中から五輪塔水輪と板碑破片が出土した。人骨片や土器は出土しなかった。

所見 時期は中世と推定される。

4区9号+23号集石(付図6 第208図

PL127・182・183 遺物観察表 P.512)

位置 4区4-3-E・F-10・11G

形状 集石部:やや大型の礫や小礫が土坑内に落ち込んでいた(23号集石)。また西側の斜面裾部に小礫が集中していた(9号集石)。

土坑部:23号集石下位に楕円形の掘り込みが検出された。西端は傾斜によって切られており不明であるが、楕円形と推定される。

重複 無し

規模 集石部 長軸 1.70 m 短径 0.68 m

土坑部 長径 1.44 m 短径 1.05 m

残存壁高 0.45 m

長軸方位 N - 10° - W

断面形 ボール形。西端は斜面で切られており、浅くなっていた。

埋没土 しまりのない黄褐色土で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦である。

遺物と出土状況 集石は23号集石下位の土坑内に落ち込んで出土した。北東壁際で五輪塔火輪(第208図2)が底面上15cmで出土した。また中央部で五輪塔地輪(3)が底面上23cmで出土した。この五輪塔地輪には9号・21号集石出土の五輪塔地輪破片が接合した。9号集石には五輪塔地輪破片(第208図3)、板碑(4・5)が混じっていた。人骨は出土しなかった。この他に9号集石の埋没土中から五輪塔破片7点、板碑破片3点、混入の土師器3点、23号集石の埋没土中から五輪塔破片1点、板碑破片5点、混入の土師器1点が出土している。

所見 時期は中世と推定される。当初は9号集石を検出・調査開始したが、下位に土坑が検出できなかったことから、本体は23号集石と判断した。

集石c

4区1号集石(付図6 PL127)

位置 4区4-3-D-10G

形状 やや大型の礫6個が集中していた。

遺物と出土状況 礫のみが出土した。人骨片や土器は出土しなかった。

所見 特に無し。

4区6号集石(付図6 PL127)

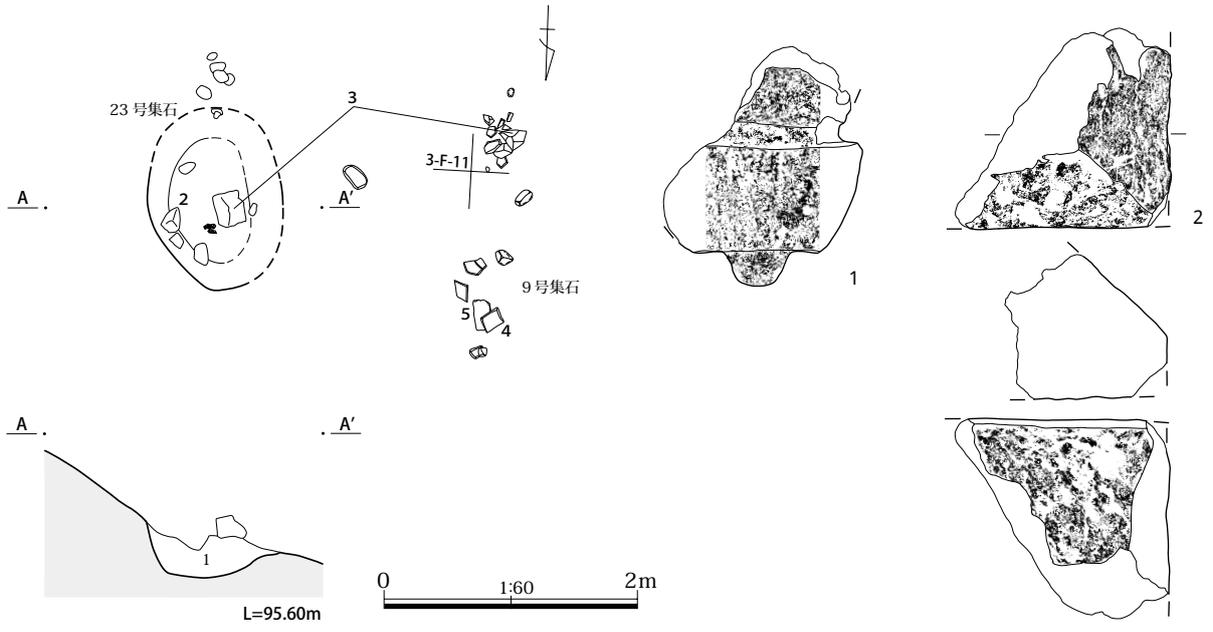
位置 4区4-3-C-8G

形状 やや大型の礫が列状に集中していた。周囲には高さ0.3mほどの段があり、攪乱されていると推定される。

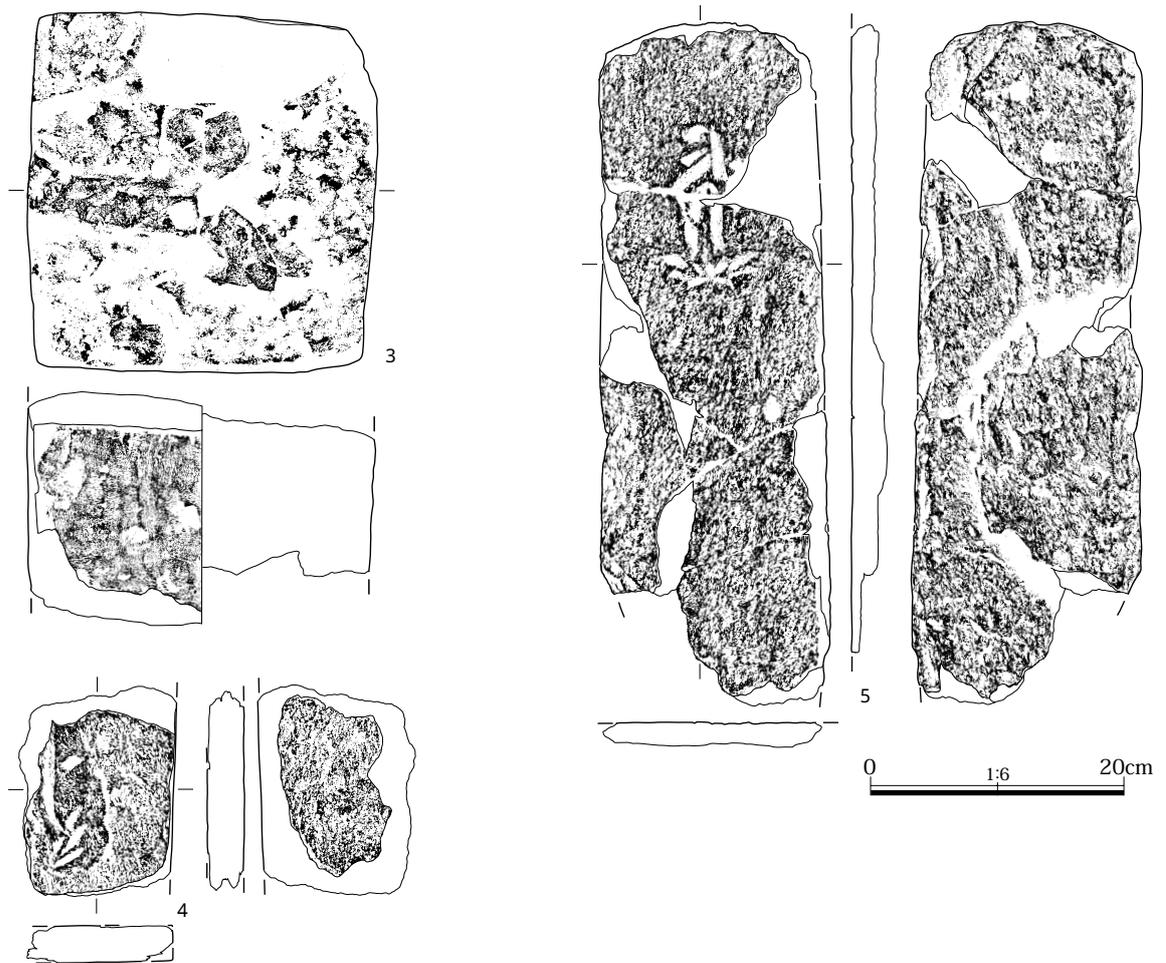
規模 集石部 長軸 2.10 m 短径 0.90 m

厚さ 0.15 m

第6章 4区の遺構と遺物



A - A'
1. 黄褐色土 しまりなし。



第208図 4区9号+23号集石と出土遺物

長軸方位 N - 10° - W

遺物と出土状況 礫のほかに混入の土師器2点が出土した。

所見 検出時は列状に礫が並んだことから遺構として調査を開始した。石製品や人骨の出土や下位の土坑も検出されなかったことから、礫の散在と考えたい。

4区7号集石(付図6 PL127)

位置 4区4-3-B-8G

形状 やや大型の礫が方形に集中していた。

規模 集石部 長軸 0.58 m 短径 0.50 m
厚さ 0.15 m

長軸方位 N - 8° - W

遺物と出土状況 礫のほかに江戸時代の軟質土器焙

烙破片1点、混入の土師器1点が出土した。

所見 検出時は方形に礫が並んだことから遺構として調査を開始した。石製品や人骨の出土や下位の土坑も検出されなかったことから、礫の散在と考えたい。

4区10号集石(付図6 第209図 PL182.
遺物観察表 P.512)

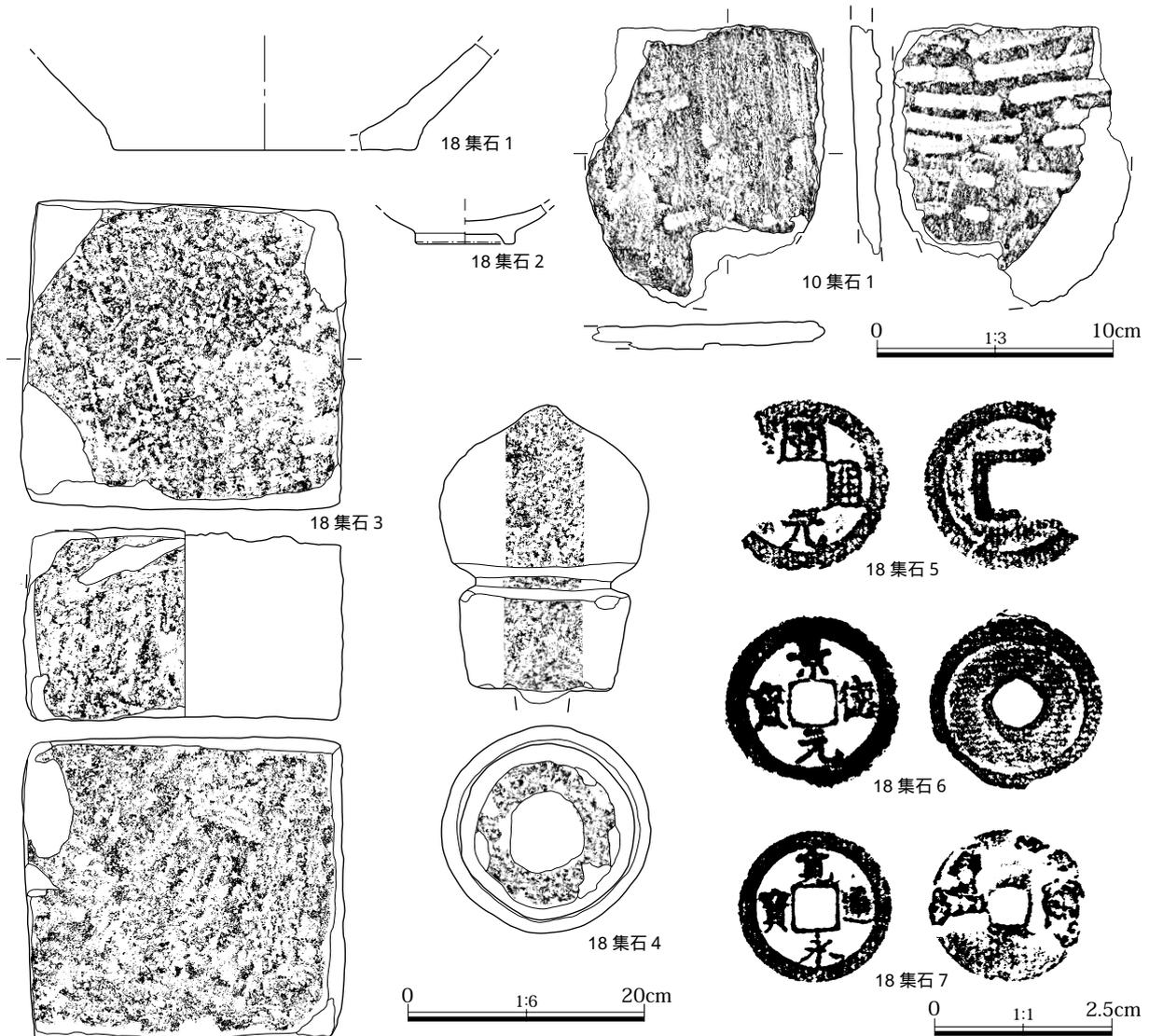
位置 4区4-3-B・C-8G

形状 やや大型の礫が列状に集中していた。

規模 集石部 長軸 2.90 m 短径 0.98 m
厚さ 0.10 m

長軸方位 N - 84° - W

遺物と出土状況 礫のなかには板碑破片(第209
図10集石1)が混在していた。ほかに混入の土師



第209図 4区10号・18号集石出土遺物

第6章 4区の遺構と遺物

器1点、礫片1点が出土した。

所見 検出時は方形に礫が並んだことから遺構として調査を開始した。人骨や下位の土坑が検出されなかったことから、権現山裾部に上位から崩落した礫の散在と考えたい。

4区12号集石(付図6)

位置 4区4-3-C-7G

形状 やや大型の礫が集中していた。

規模 集石部 長軸 1.14 m 短径 0.8 m
厚さ 0.15 m

遺物と出土状況 礫のほかに江戸時代肥前染付小碗1点、混入の土師器1点、礫片1点が出土した。

所見 検出時は方形に礫が並んだことから遺構として調査を開始した。人骨や下位の土坑が検出されなかったことから、権現山裾部に上位から崩落した礫の散在と考えたい。

4区18号集石(付図6 第209図 PL124・183

遺物観察表 P.512)

位置 4区4-3-C・D-7G

形状 やや大型の礫が、権現山の南裾部に帯状に集中して出土した。

規模 集石部 長軸 8.0 m 短径 2.0 m 厚さ不明
遺物と出土状況 権現山南斜面裾部に高さ0.4～0.5 mの段があり、その下位に比較的大型の礫が散在していた。礫の中に五輪塔空風輪(第209図18集石4)、地輪(18集石3)、中世の常滑甕底部破片(18集石1)、18世紀中頃～19世紀中頃の瀬戸美濃系灰釉碗(18集石2)、銭貨(18集石5～7)が混じっていた。ほかに江戸時代肥前皿1点、4号集石出土の破片に接合した肥前透明釉鉢破片1点、軟質土器焙烙2点、混入の土師器44点、礫片1点が出土した。また埋没土中から縄文土器1点、打製石斧1点が出土した。打製石斧は遺構外遺物の項で報告した。(第235図65～74)

所見 人骨や下位の土坑が検出されなかったことから、権現山裾部に上位から崩落した礫と考えたい。

(3)洪水層上面

4区台地部では女堀排土である権現山を除去すると、暗灰色砂質土の女堀掘削時の旧地表面が検出された。この旧地表面では遺構は検出されなかったため、厚さ0.24 mの暗灰色砂質土を掘り下げたところ、厚さ10～16 cmの灰色砂がほぼ水平に堆積していた。荒砥川の洪水層と推定される。この洪水層の堆積時期は、上層の暗灰色砂質土中に浅間Bテフラ降灰層準があることから、浅間Bテフラ降下以前である。また下層には古墳時代中後期の土器の包含層があったことから、それ以降ということになる。洪水層堆積の具体的な時期は不明と言わざるをえないが、洪水層直下で第212図に示したような土師器が出土している。この洪水層を切る遺構として4号・5号・6号溝、7号・8号土坑を検出した。また、この洪水層を切った畝間溝列を検出した。畝間溝列は台地部全体に広がっていた。

4区4号溝(第210・213図 PL128)

位置 4区4-3-D・E-8～13G

形状 やや東に傾くほぼ直線の溝である。北端は発掘区域外に伸びる。南端は4-3-F-8G内で視認できなくなる。底面の標高は北端が南端より0.21 m高い。

重複 北部で5号溝に先行する。南部で6号溝に重複するが、新旧関係は不明である。

規模 調査長 25.2 m 最大幅 0.8 m
最小幅 0.24 m 深さ 0.29～0.41 m

走向 N-20°-E

断面形 北部では逆台形、南部では箱形。

埋没土 小礫を混じる黒褐色砂質土で埋まっていた。
遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片3点が出土した。

所見 掘削時期は、出土土器から判断することは困難である。層位からすれば洪水層堆積後、女堀開削以前である。

4区5号溝 (第210・213図 PL128)

位置 4区4-3-B~E-12・13G

形状 ほぼ東西方向の直線の溝である。東西両端は発掘区域外に伸びる。底面の標高は西端が東端より0.11m高い。

重複 西部で4号溝に先行する。洪水層直下畠に後出する。

規模 調査長 11.4m 最大幅 2.0m
最小幅 1.48m 深さ 2.40~2.67m

走向 N-79°-E

断面形 下半は幅0.6mほどの細い箱形で、上半部は大きく広がる。

埋没土 下層は褐色あるいは黒褐色砂質土で埋まっていた。中位には厚さ0.1mほどの黒褐色土が水平に堆積し、上層はにぶい黄色砂や黄褐色砂質土で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片74点、須恵器破片4点が出土した。

所見 出土土器は破片が多く、下層からの混入と見られることから、掘削時期を判断することは困難である。層位からすれば洪水層堆積後、女堀開削以前ということになる。

4区6号溝 (第210・213図 PL128)

位置 4区4-3-D~F-8・9G

形状 北西から南東にかけて緩やかに彎曲する溝である。北西端は発掘区域外に伸びる。南東端は4-3-D-8Gで確認できなくなる。底面の標高は北西端が南東端より0.12m高い。また中央部の底面標高は94.13mで最も低くなっている。

重複 北部で4号溝と重複するが新旧関係は不明である。洪水層直下畠に後出する。

規模 調査長 12.32m 最大幅 0.84m
最小幅 1.48m 深さ 2.40~2.67m

走向 N-30~50°-W

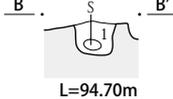
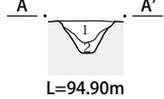
断面形 浅いボール形

埋没土 黄褐色砂で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片20点、須恵器破片1点が出土した。

所見 出土土器は破片が多く、下層からの混入と見られることから、掘削時期を判断することは困難である。層位からすれば洪水層堆積後、女堀開削以前ということになる。

4区4号溝



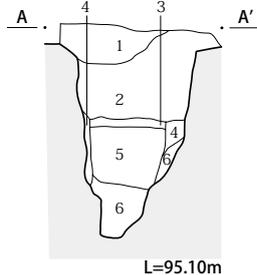
A - A'

1. 黒褐色土 10YR3/1 砂質。直径0.1~0.2cmの小礫を多量に、直径2cmの黄褐色砂塊を含む。
2. 黒褐色土 10YR3/1 砂質。直径0.1~0.5cmの小礫、ローム粒を含む。

B - B'

1. 褐色土 10YR4/6 砂質。しまり無し。

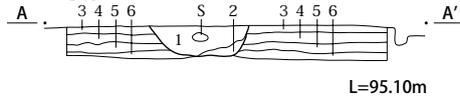
4区5号溝



A - A'

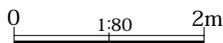
1. 黒褐色土 2.5Y3/1 直径2~3cmの砂塊を含む。
2. にぶい黄色砂 2.5Y6/4 直径0.1~1cm大の川砂を多量に含む。
3. 黒褐色土 2.5Y3/1 2層より黒味が強い。
4. 暗灰黄色土 2.5Y4/2 直径2cm大の黒褐色土塊、オリ-ブ褐色土(2.5Y4/6)塊を斑状に混じる。
5. 暗オリ-ブ褐色砂質土 2.5Y3/3 明黄褐色シルト(10YR6/6)塊混じる。直径0.1~0.5cmの小礫を混じる。
6. 黒褐色砂質土 2.5Y3/1 直径0.5cm大の小礫を混じる。地山(2.5Y5/3)粘質土塊最大直径10cmを含む。(下層に多い)

4区6号溝



A - A'

1. 黄褐色土 2.5Y5/3 砂層。直径0.1~0.2cmの小礫を含む。
2. オリ-ブ褐色土 2.5Y4/3 砂質。少量の小礫、褐色砂塊を含む。
3. 黒褐色土 10YR3/2 As-C、黄褐色砂質塊を含む。
4. 黒色土 10YR2/1 As-Cを混じる黒色土
5. 黒褐色土 10YR3/1 少量のAs-Cを含む。
6. にぶい黄褐色土 10YR6/4 砂質粘土



第210図 4区4号・5号・6号溝土層断面

第6章 4区の遺構と遺物

4区7号土坑(第211・213図 PL129)

位置 4区4-3-B-11G

形状 楕円形 重複 無し

規模 長径0.95m 短径0.83m

残存壁高0.12m

長軸方位 N-0°-E

断面形 浅い箱形

埋没土 灰色砂層で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明であるが、層位からすれば洪水層堆積後、女堀開削以前ということになる。

4区8号土坑(第211・213図 PL129)

位置 4区4-3-B-11G

形状 楕円形 重複 無し

規模 長径0.80m 短径0.72m

残存壁高0.11m

長軸方位 N-55°-E

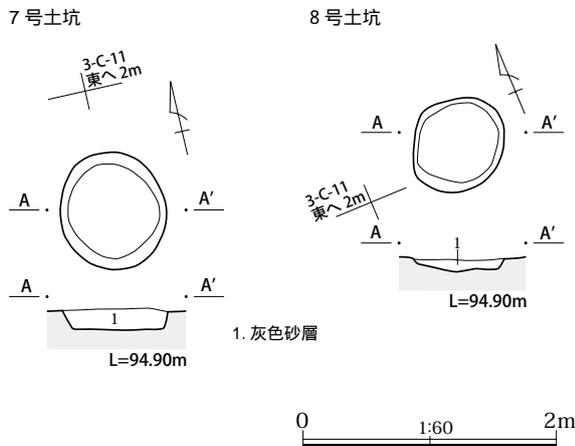
断面形 浅い箱形

埋没土 灰色砂層で埋まっていた。

底面 底面はほぼ平坦であった。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 掘削時期は不明であるが、層位からすれば洪水層堆積後、女堀開削以前ということになる。



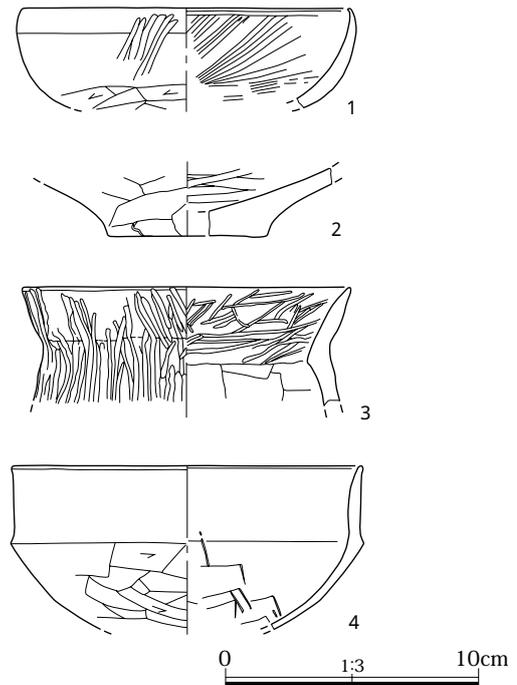
第211図 4区洪水層下面7号・8号土坑

4区台地部洪水層上畝

(第212・213・214図 PL129 遺物観察表P.513)

女堀の排土を除去し、下層の暗灰色砂質土を掘り下げたところ、荒砥川の洪水層と推定される洪水層を検出した。この洪水層の上面で遺構確認作業を実施したところ、微かな溝状の土質の違いを検出した(PL129-1)が、明瞭でなかったため、5mグリッドに沿った土層観察用ベルトを設定し、明瞭な遺構確認面まで洪水層を掘り下げた。洪水層を除去したところで畝の畝間溝群を台地のほぼ全域で検出した。検出された溝群は畝間溝の下半ということになり、不明瞭であったのは、下層の砂と黒色土がともに洪水層上部に盛りあげられた作付け面畝頂部であった可能性が高い。耕土の植物珪酸体分析は実施していない。

畝間溝群は9ラインを境にして北側は東西方向に、南側はほぼ南北方向に掘られていた。北側は、心芯間2.1mあるいは1.1mの間隔で8~12条の畝間溝が検出された。B-9・10G周辺では間隔が狭くなっている。平面図の図化は洪水層下面で実施している。図化した面での溝の規模は概ね幅0.40m、深さ0.1~0.12mである。

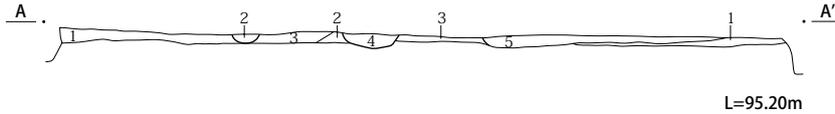


第212図 4区洪水層下面出土遺物



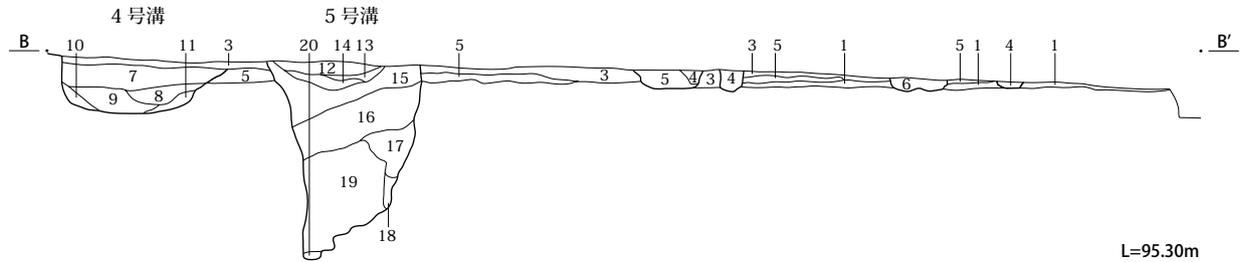
第213图 4区台地部洪水層下畝と4号・5号・6号溝

3. 4区台地部の遺構と遺物



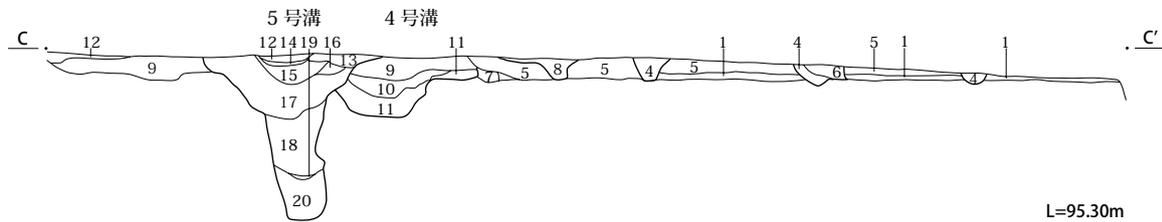
A - A'

- 1. 黄褐色砂 2.5Y5/4 直径0.1cm大弱の川砂を多量に含む。
- 2. にぶい黄色砂 2.5Y6/4 直径0.1～0.2cm大の川砂を多量に含む。
- 3. 黒褐色土 2.5Y3/1 1層に砂を混じる。
- 4. 黒褐色土 2.5Y3/1 直径2～3cmの1層砂塊を含む。
- 5. にぶい黄色砂 2.5Y6/4 直径0.1～1cm大の川砂を多量に含む。



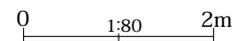
B - B'

- 1. 黄褐色砂 2.5Y5/4 直径0.1cm大弱の川砂を多量に含む。
- 2. にぶい黄色砂 2.5Y6/4 直径0.1～0.2cm大の川砂を多量に含む。
- 3. 黒褐色土 2.5Y3/1 1層に砂を混じる。
- 4. 黒褐色土 2.5Y3/1 直径2～3cmの1層の砂塊を含む。
- 5. にぶい黄色砂 2.5Y6/4 直径0.1～1cm大の川砂を多量に含む。
- 6. 暗灰黄色土 2.5Y4/2 黒褐色土塊、オリ-ブ褐色土(2.5Y4/6)塊、直径2cm大を斑状に混じる。
- 7. 暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2 灰褐色砂塊を含む。直径0.1～0.5cm大の礫混じる。
- 8. 黒褐色砂質土 2.5Y3/2 灰褐色砂粒を含む。直径0.1～0.5cm大の礫を含む。
- 9. 暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2 褐色土粒を多量に含む。直径0.1～0.5cm大の礫混じる。
- 10. 黄褐色土 2.5Y5/3 地山粒を多量に含む。
- 11. 黒色土 2.5Y2/1 As-C混黒色土塊を混じる。地山(2.5Y6/6)粘質土塊粒を混じる。
- 5号溝
- 12. オリ-ブ褐色土 2.5Y4/3 少量のAs-Cと直径2cmのにぶい黄色土塊を含む。
- 13. 黒色土 2.5Y2/1 As-C混黒色土(2.5Y5/3)塊を含む。
- 14. 暗灰黄色土 2.5Y4/2 黒褐色土(2.5Y5/3)塊を含む。
- 15. 黄褐色土 2.5Y5/3 As-C混黒色土塊を含む。褐色土塊を含む。
- 16. 黒褐色砂質土 2.5Y3/2 As-C混黒色土塊、女堀排土、砂層土を多量に含む。
- 17. 灰オリ-ブ色砂質土 5Y4/2 直径0.1～0.5cm大の礫混じる。直径3cmの土塊(2.5Y6/6)を含む。
- 18. 暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2 砂礫を含む。
- 19. 暗灰黄色土 2.5Y5/2 地山(2.5Y6/6・2.5Y3/3)土塊を含む。
- 20. 黒色粘質土 2.5Y2/1 明黄褐色土塊(2.5Y6/8)を含む。



C - C'

- 1. 黄褐色砂 2.5Y5/4 直径0.1cm大弱の川砂を多量に含む。
- 2. にぶい黄色砂 2.5Y6/4 直径0.1～0.2cm大の川砂を多量に含む。
- 3. 黒褐色土 2.5Y3/1 1層に砂を混じる。
- 4. 黒褐色土 2.5Y3/1 直径2～3cmの1層砂塊を含む。
- 5. にぶい黄色砂 2.5Y6/4 直径0.1～1cm大の川砂を多量に含む。
- 6. 暗灰黄色土 2.5Y4/2 黒褐色土塊、オリ-ブ褐色土(2.5Y4/6)塊、直径2cm大を斑状に混じる。
- 7. 黄褐色土 10YR5/6 しまりなし。
- 8. 黒褐色砂利 2.5Y3/2 直径0.1～2cm大の川砂を多く含む。
- 4号溝
- 9. 暗灰黄色砂 2.5Y4/2 直径2cmのオリ-ブ砂(5Y5/4)塊を含む。
- 10. 暗灰黄色砂 2.5Y4/2 直径2cmのオリ-ブ砂(5Y5/6)塊を混じる。
- 11. 黒色土 2.5Y2/1 オリ-ブ砂を少量含む。4溝Bの2
- 12. 褐色土 10YR4/6 しまりなし。
- 5号溝
- 13. 黒褐色土 10YR3/1 直径3cmの砂質土(10YR5/4)塊を含む。直径5cmのAs-C混黒色土塊を含む。
- 14. 黒褐色土 10YR3/1 As-C混黒色土を多量に含む。土塊(5Y5/4)を含む。硬化。
- 15. にぶい黄褐色土 10YR4/3 土塊(10YR5/4)、As-C混黒色土塊、砂塊(10YR6/6)直径2cm大を斑状に混じる。
- 16. 黒褐色土 10YR3/1 As-C混黒色土塊を多量に含む。
- 17. にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3 直径0.1～0.5cm大の小礫混じる。直径10cmのAs-C混黒色土塊を少量含む。砂塊(2.5Y5/4)混じる。土塊(10YR5/4)混じる。
- 18. 暗オリ-ブ褐色砂質土 2.5Y3/3 明黄褐色シルト(10YR6/6)塊混じる。直径0.1～0.5cmの小礫を混じる。
- 19. 黄灰色粘質土 2.5Y4/1 直径0.1～1cm大の小礫を含む。川砂を含む。
- 20. 黒褐色砂質土 2.5Y3/1 直径0.5cm大の小礫を混じる。地山(2.5Y5/3)粘質土塊最大直径10cmを含む。(下層に多い)



第214図 4区4号・5号溝・洪水層上畠土層断面

第6章 4区の遺構と遺物

9ラインから南側では、芯心間2.1～2.2mの間隔、N-25～27°-Eの方向で、6条の畝間溝が検出された。こちらも畝の高まりを明瞭に検出することができず、平面図の図化はやや掘り下げた段階で実施している。図化した面での溝の規模は概ね幅0.32m、深さ0.03～0.07mである。

畝間溝の埋没土は黒褐色土や暗灰褐色土であるが、にぶい黄褐色砂や砂利が埋まった部分もある。畝下部にある洪水層が崩れたためと推定され、本畝は洪水被災の後につくられたものである。

出土遺物は土師器1070点、須恵器20点である。この出土土器の多さは、下層にある古墳時代中後期包含層を畝耕作によって鋤き込んだ結果と推定される。畝の時期は特定できなかった。下位に古墳時代中後期土器の包含層があることから、古墳時代中期以降であり、上位に浅間Bテフラ降下が確認されたことから1108(天仁元)年以前ということになる。

(4) 古墳時代遺物包含層(第215～220図 PL130・184～186 遺物観察表 P.513～515)

洪水層上畝の耕土である浅間C軽石を混じる黒色土を掘り下げたところ、古墳時代中期から後期を中心とし、一部8世紀の遺物を含む遺物包含層を検出した。ここでは主たる遺物の時期から、古墳時代遺物包含層と呼んでおく。

遺物の分布は4区台地部全域におよぶ。遺物が出土した層位は浅間C軽石を混じる黒色土とその下位の褐色土層上面である。厚さ0.2～0.4mの浅間C軽石を含む黒色土に多くの土器が包含されていた。褐色土上面になると遺物出土数は少なくなる傾向があったが、3-D-9、3-B-11、3-A-9グリッドでは褐色土上面の出土量は多かった。

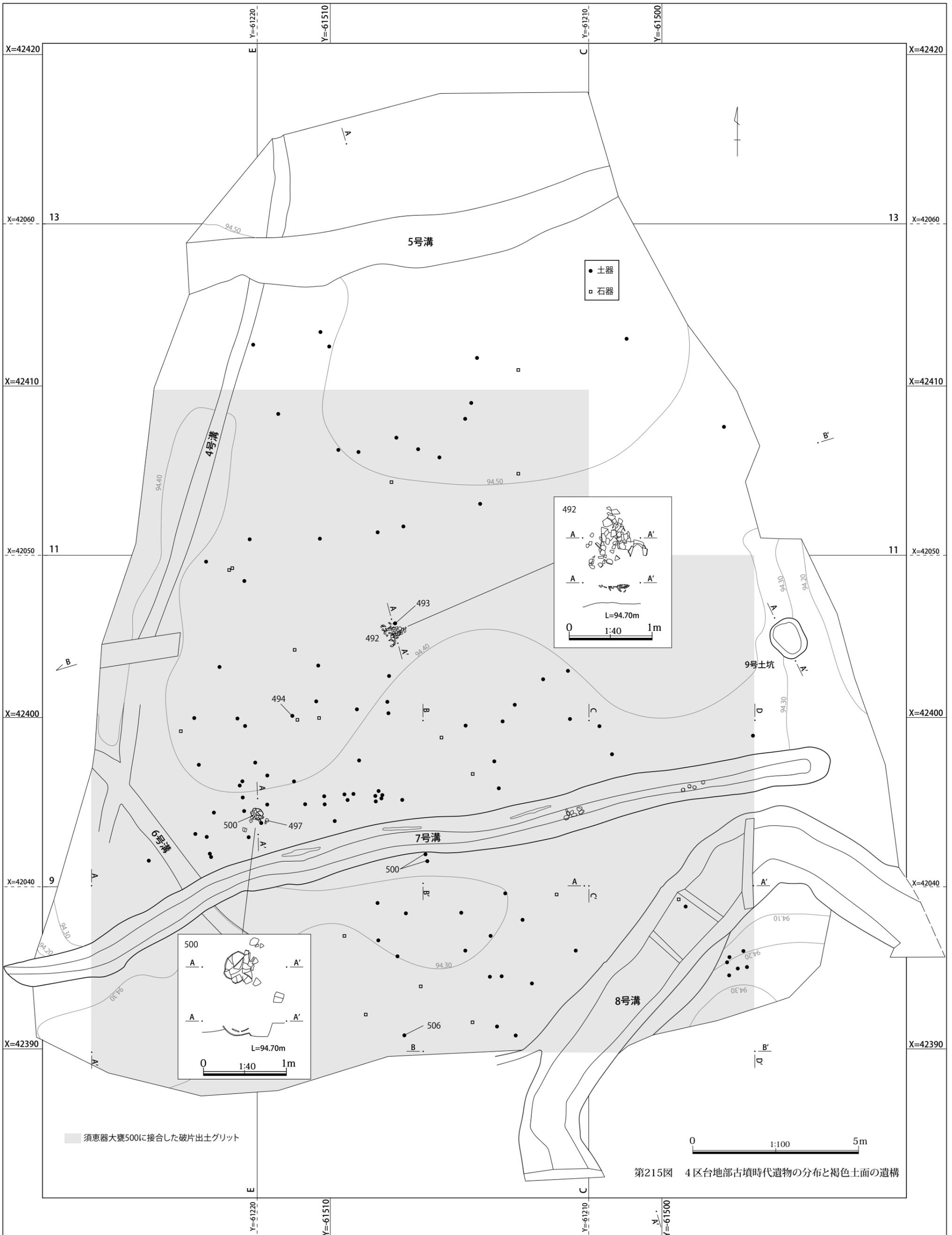
遺物の出土位置は、褐色土面に近い一部の遺物のみ出土位置を記録してとりあげた(第215図ドット)が、多くの遺物はグリッドごとに取りあげた。したがって、遺物には比較的長い時間幅があるが、時期や器種等によって、遺物の地点や層位に偏在があったかどうかはグリッド単位以上の分析は困難と

言わざるを得ない。

出土した遺物の総数は8946点である(第10表)。内訳は縄文土器106点、弥生土器20点、土師器8709点、須恵器69点、剥片・礫片36点、石器6点で、圧倒的に土師器が多い。包含層の主体をなす土師器・須恵器の時期は、5世紀後半から7世紀代で、一部に8世紀のものが混在していた。

土師器は壺・甕・埴・鉢・高坏・有孔鉢・手捏ね土器等が出土した。器種別では甕と坏の破片が最も多い。甕の破片は5566点で全体の62%を占める。個体数ではないので実態は不明であるが、一定量の甕が出土したことは確実である。時期は6・7世紀のものがほとんどである。小破片が多く、実測できた個体は少ない。第218図34の土師器大型甕は、台地部ほぼ中央で密集して出土した破片から、半完形に復元できたものである。胴部を丁寧に磨いており、平底である。胎土は地元のものと思われるが、器形は在地ではない。6～7世紀のものとして推定されるが、今後比較検討の必要な土器である。坏の破片数は甕に次いで多く2241点で全体の25%を占める。内斜口縁の坏や須恵器模倣の坏、口縁部が短く直立する坏等、5世紀後半から6世紀にかけての特徴をもった坏(第216図11～17)が多く認められたが、18～26(第216・217図)のような7世紀代と見られる坏も混在していた。高坏は127点と少なく全体の1.4%であった。脚部を縦方向に削る・あるいはなでる型式のもの、横方向に横なでする型式のものが混在していた。鉢や有孔鉢もそれぞれ61点、42点が出土したが、小破片で図示しなかった。なかでも有孔鉢は4-3-A-9Gと4-3-E-9Gに集中して出土している。手捏ね土器は小型・大型があり、3-D-8・9Gに偏在していたが、破片数は18点と極めて少なかった。図示した3点はいずれも底部に木葉痕が残る。

須恵器は破片数では全体の0.8%とかなり少ないが、完形に近く復元できる土器が多く出土している。出土した須恵器は、6世紀後半～7世紀前半代のものと8世紀代のものが混在していた。器種は大

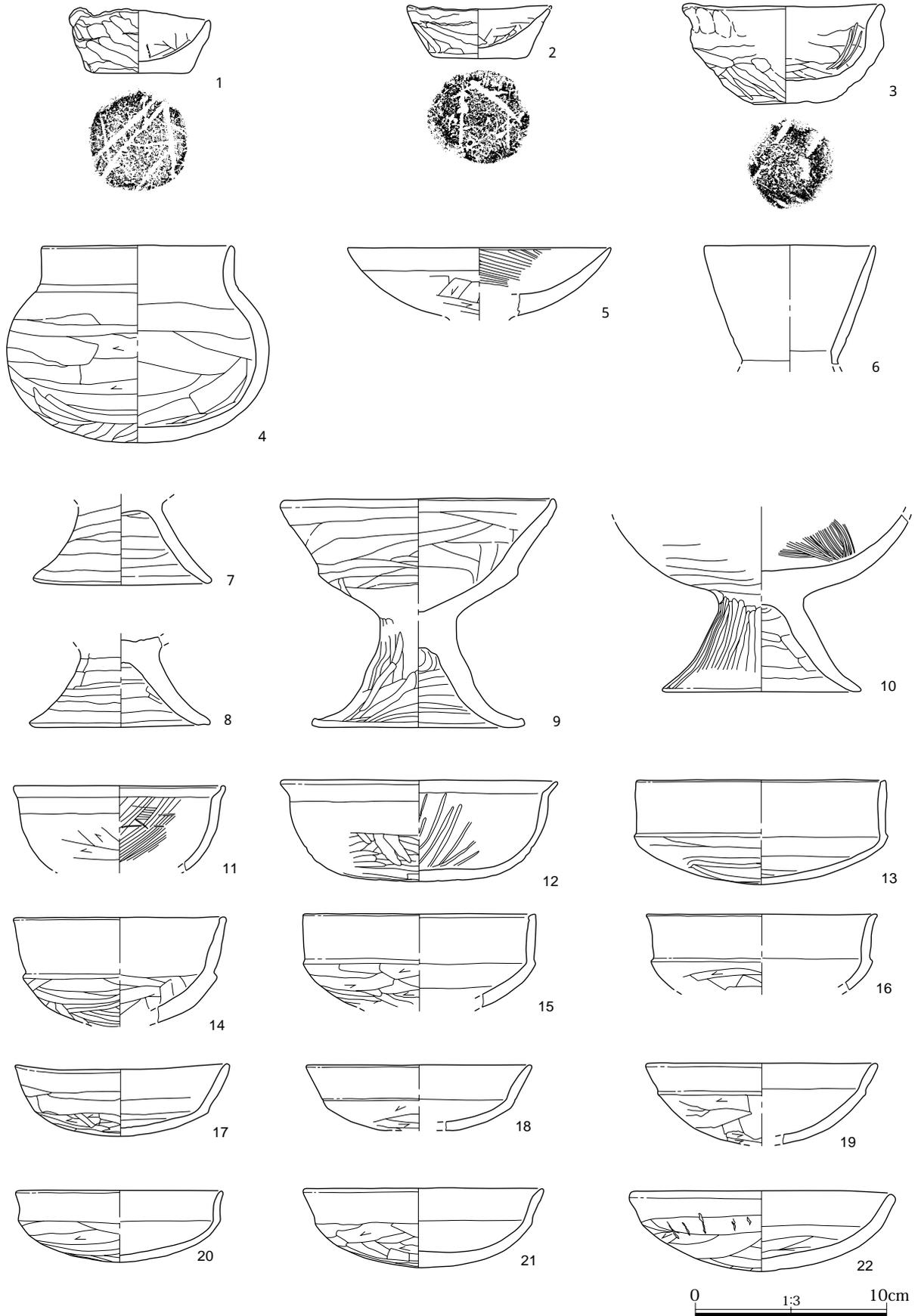


第215図 4区台地部古墳時代遺物の分布と褐色土面の遺構

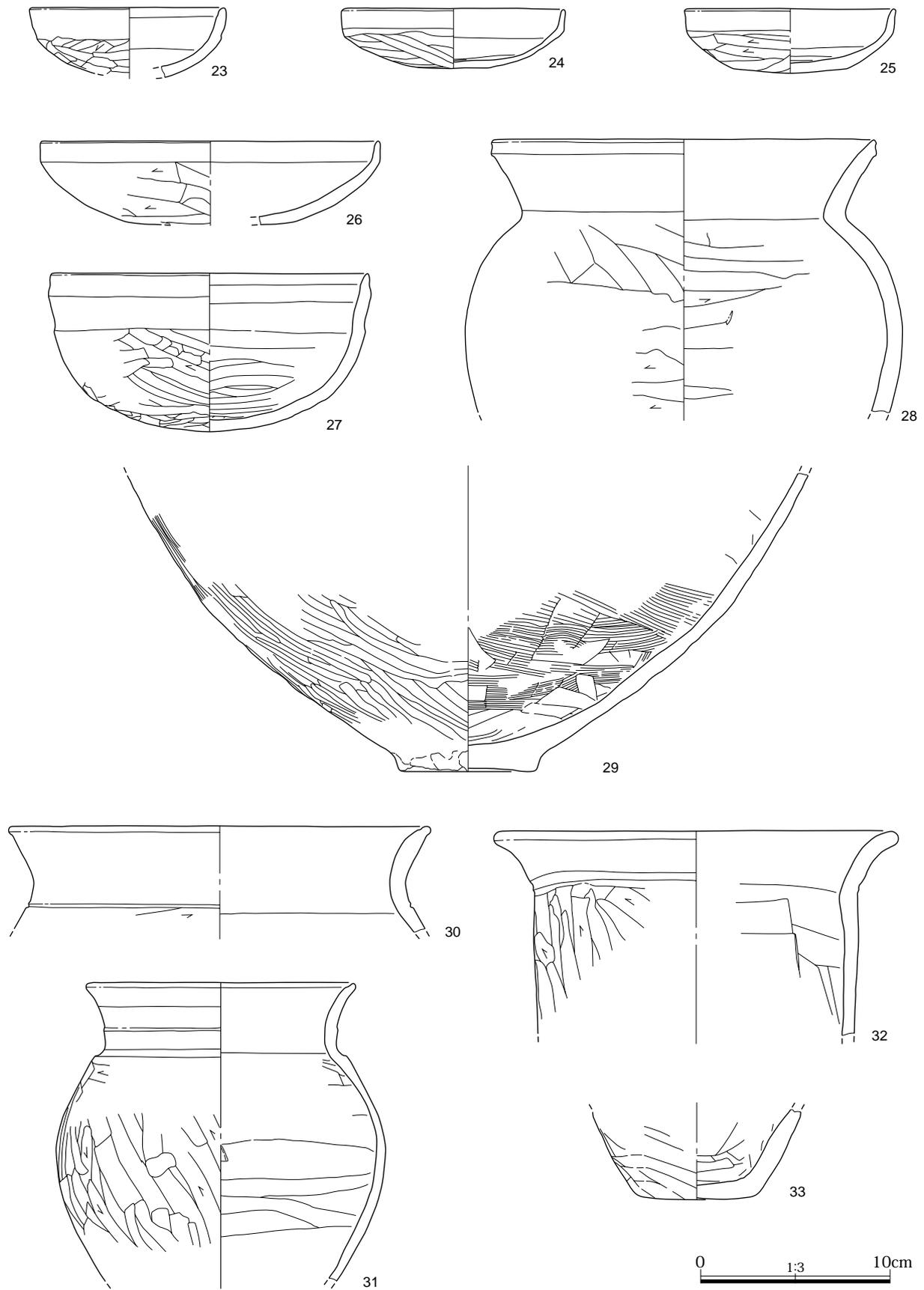
3. 4区台地部の遺構と遺物

第10表 荒砥前田 遺跡4区古墳時代遺物包含層出土数一覧表 太字：実測図掲載遺物数 その他：非掲載破片数

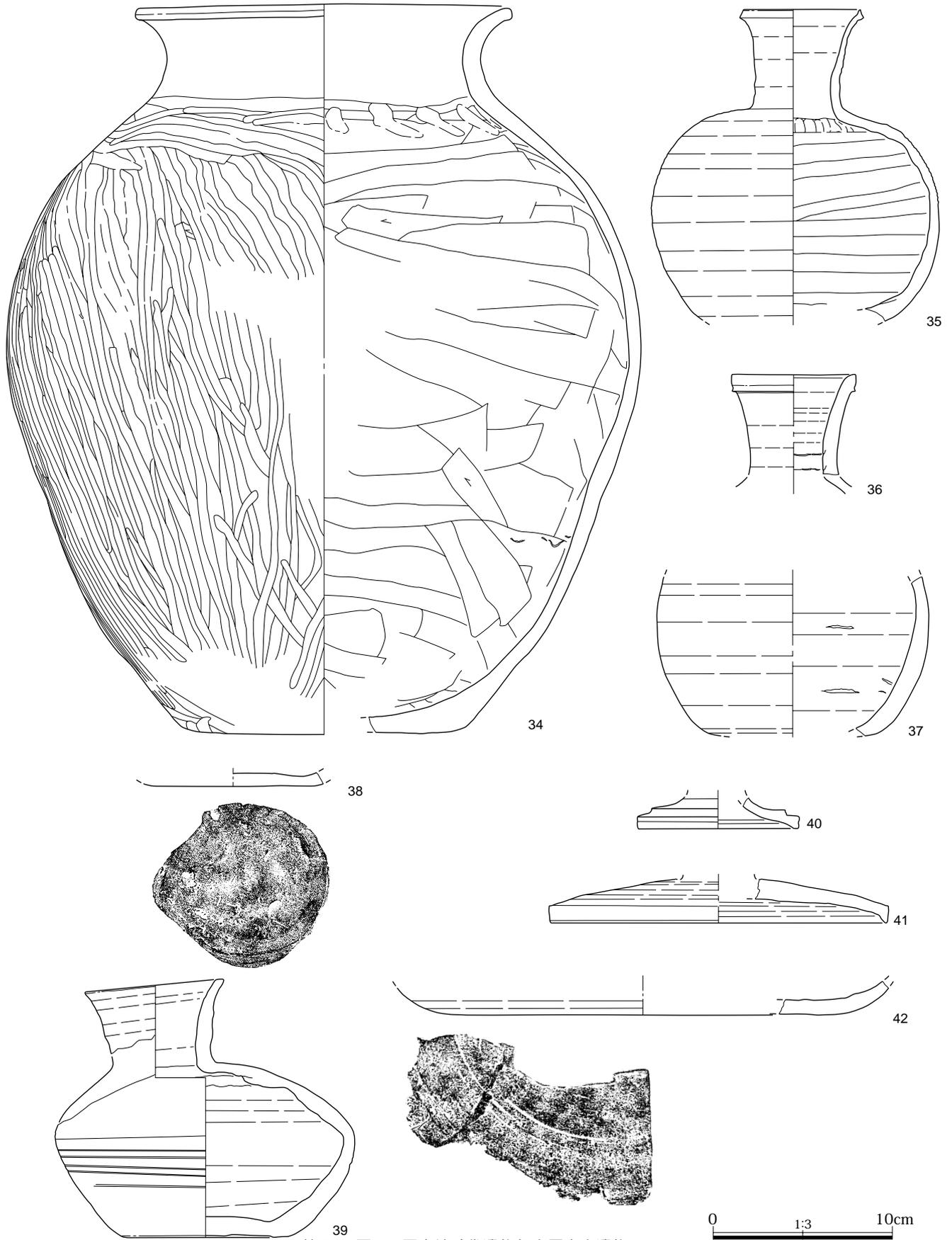
グリッド	層位	縄文土器	弥生土器	土師器										須恵器						石				実測数								
				壺	甕	小型甕	台付甕	埴	鉢	高坏	有孔鉢	坏	手捏ね	坏・椀	甕	高坏	壺	瓶	盤	蓋	碎片	剥片	礫片		礫	石器						
不明																													2	2		
4 3 A 8	C混黒			7	14									1															3			
4 3 A 9	C混黒			6	25									3	12																	
4 3 A 10	C混黒				7										3																	
4 3 B 8	C混黒			11	61									1														2	4			
4 3 B 9	C混黒			8	162									3	50														5			
4 3 B 10	C混黒	10		62	271									4	13													1	1			
4 3 B 11	C混黒		1	8	201										13																	
4 3 B 12	C混黒			59	123									2	11														2			
4 3 C 8	C混黒	10		33	167									5	6														2	1	2	
4 3 C 9	C混黒	3	3	20	508									5	2																	
4 3 C 10	C混黒	4	1	51	342										5																	
4 3 C 11	C混黒	13		44	365										7																	
4 3 C 12	C混黒	5		105	174										1	9																
4 3 C 13	C混黒	1	1	27	83									2	2																	
4 3 D 8	C混黒	3	1	16	223																											
4 3 D 9	C混黒	2		3	598									12																		
4 3 D 10	C混黒	2			416									1	6	13																
4 3 D 11	C混黒	9		23	196	1								1	1	20																
4 3 D 12	C混黒	5		24	66										5																	
4 3 D 13	C混黒		4	46	113																											
4 3 E 7	C混黒				7																											
4 3 E 8	C混黒			3	177										1	3	1															
4 3 E 9	C混黒	1		5	464										7	4	27															
4 3 E 10	C混黒			1	47	1	1							8	3																	
4 3 E 11	C混黒	1	1	9	87	1																										
4 3 E 12	C混黒	13	8		7																											
4 3 E 13	C混黒				14										1																	
4 3 F 8	C混黒				14																											
4 3 F 11	C混黒				2																											
4 3 A 9	褐色土上面				51																											
4 3 A 10	褐色土上面				3										2		1															
4 3 B 8	褐色土上面																															
4 3 B 9	褐色土上面			1	1																											
4 3 B 10	褐色土上面	5																														
4 3 B 11	褐色土上面			34	94										1	3																
4 3 C 8	褐色土上面	11																														
4 3 C 10	褐色土上面			1	5										2																	
4 3 C 13	褐色土上面			1	1																											
4 3 D 9	褐色土上面			33	465											2																
4 3 D 11	褐色土上面	8			5																											
4 3 E 10	褐色土上面				1																											
合計		106	20	643	5566	3	2	6	61	127	42	2241	18	14	19	2	20	3	1	10	6	10	12	8	6							
				8709										69						42				50								
8946																																



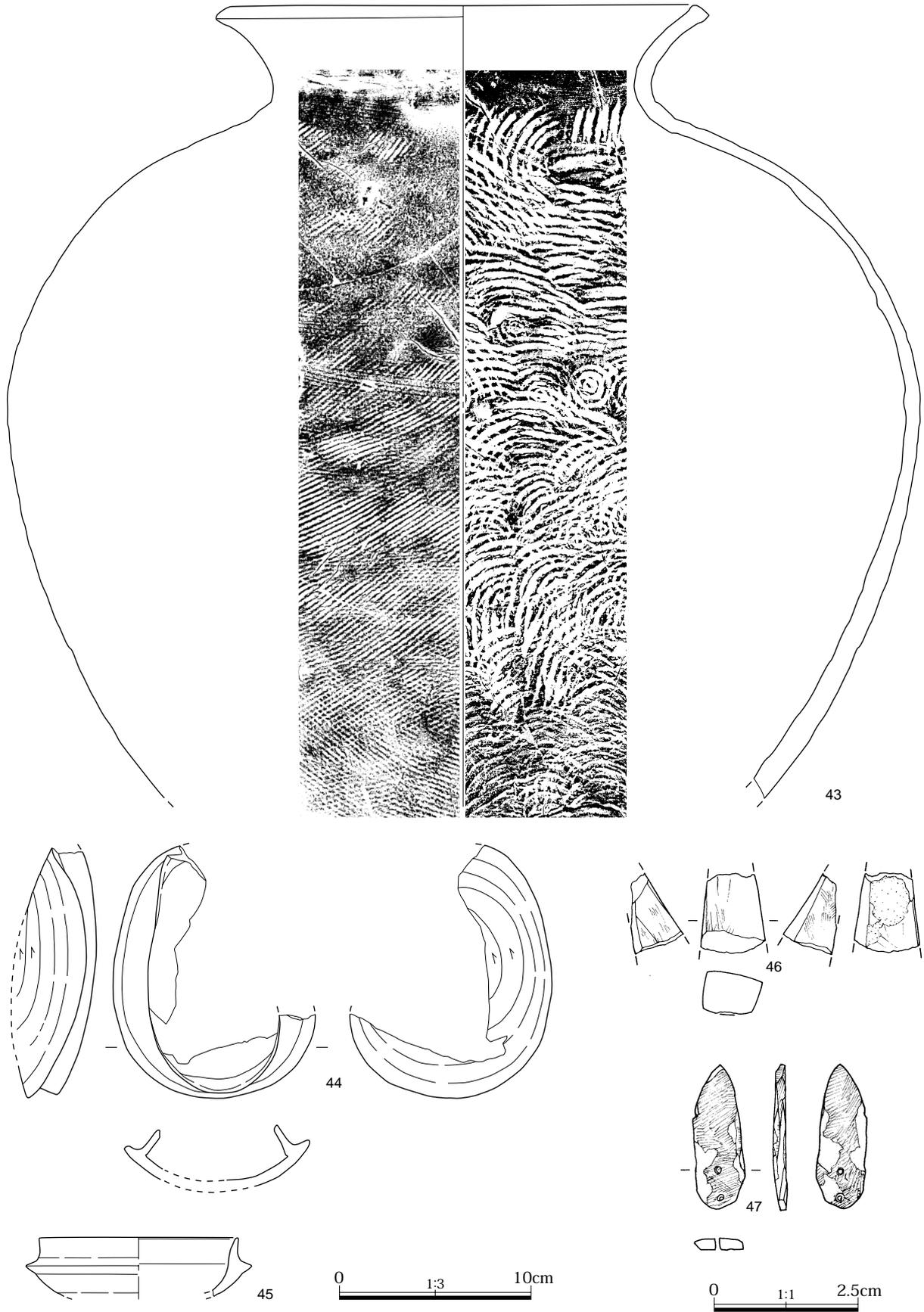
第216図 4区古墳時代遺物包含層出土遺物(1)



第 217 図 4 区古墳時代遺物包含層出土遺物 (2)



第218図 4区古墳時代遺物包含層出土遺物(3)



第 219 図 4 区古墳時代遺物包含層出土遺物 (4)



第220図 4区古墳時代遺物包含層出土遺物(5)

甕・長頸壺・横瓶等が含まれていた。須恵器大甕(第219図43)は3-D-9G西端で倒立して出土した。第215図に示したように、台地部のほぼ全体から出土した多くの破片が接合した。時期は7世紀後半、胎土の特徴から東海産と見られる。壺類(第218図35・36・38)や盤(42)、坏(第219図45)は6世紀後半から7世紀後半代とみられ、大甕ほど広範囲ではないが、隣り合った複数のグリッド間で接合した例が多い。一方、坏(第218図38)や蓋(41)は8世紀前半のもので、上記の甕・壺類とは时期的に異なる一群が混在していた。須恵器産地の多くは在地太田金山古窯跡群と見られるが、胎土の特徴から東海産のものと思われる土器(第218図36・37、第219図43)が含まれている。

以上のように、包含層の土器はひとまとまりに見えるが、時期や種類から少なくとも三種類の土器群の集まりと見ることができる。三種類とは、5世紀後半代～6世紀前半の土師器、6世紀後半～7世紀前半の土師器・須恵器、8世紀代の(土師器)・須恵器である。この時期にも須恵器の出土は予想されるが、出土した遺物のなかには検出されなかった。

これらの土器がここにある背景については、調査で明確にすることはできなかった。しかし、4区台地部には前田遺跡の調査で古墳時代後期の竪穴住居が検出されており、古墳時代以降の集落が存在することは明らかである。前述したやの土器群は、集落内の土器集積の結果と考えられる。特に、この時期の須恵器器種は坏・高坏・盤などの食膳具もあるが、長頸壺・大甕など祭祀の様相もうかがうことができ、出土位置は不明であるが剣形石製模造品(第219図47)も1点同層位で出土している。また、後述する8号溝埋没土中からも勾玉形石製模造品(第221図1)が出土しており、このが集落内の祭祀に関連する遺物群である可能性がある。なお、この存在からは8世紀代の集落もこの地点周辺に想定が可能である。

後述する7号溝や8号溝との関連は、溝の掘り込み面が不明なことから、つかめなかった。

(5) 褐色土上面(第215図 PL131)

多量の遺物を包含していた浅間C軽石を含む黒褐色土を除去したところ、褐色土面を検出した。この褐色土は台地部の原形面と推定され、荒砥川の左岸自然堤防と推定される。この台地部南端に当たる土壌分析4区第12地点では、浅間総社軽石とその下に浅間板鼻黄色軽石を確認した。したがって総社軽石降灰時にはすでに台地化していたと推定される。

この褐色土上面で遺構確認をおこなった(第215図)。上層の浅間C軽石を含む黒褐色土層中で土器が比較的集中して出土した中央部では遺構は確認されなかった。発掘区南部で7号溝・8号溝、東端で9号土坑が検出された。

7号溝は自然堤防を東西に横切る方向に掘られた溝である。また、8号溝は一辺10mの方形部分を囲む溝の一部が検出されたものと推定され、周溝墓あるいは古墳の可能性はあるが、全形を調査できなかったことから、溝として調査した。

4区7号溝

(第215・221図 PL131・186 遺物観察表P.515)

位置 4区4-3-A～F-8・9G

形状 やや北に傾くほぼ直線の東西方向の溝である。西端は発掘区域外に伸びる。東端は4-3-A-9G内で立ち上がる。底面の標高は西端が東端より0.01m高い。

重複 西部で6号溝に先行する。

規模 調査長 26.5m 最大幅 1.2m

最小幅 0.92m 深さ 0.66～0.77m

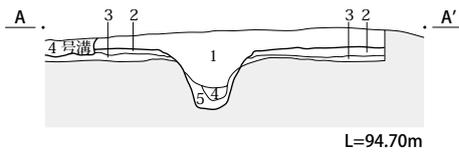
走向 N-78°-E 断面形 逆台形

埋没土 下層は褐色土塊や黄褐色シルトを含む黒褐色土で、上層は浅間C軽石を多く含む黒色土で埋まっていた。上層の黒色土は遺物包含層があった上位土層が溝内に落ち込んだ状態で堆積していた。

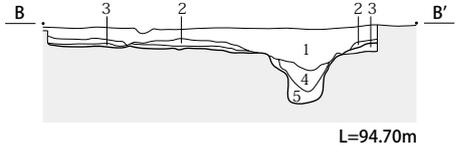
遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片110点、須恵器破片6点、勾玉形石製模造品1点(第221図1)が出土した。

所見 掘削時期は、層位や出土遺物から古墳時代と

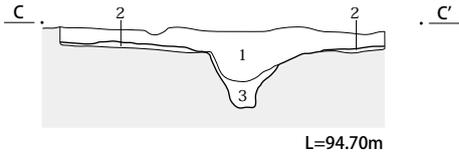
第6章 4区の遺構と遺物



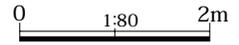
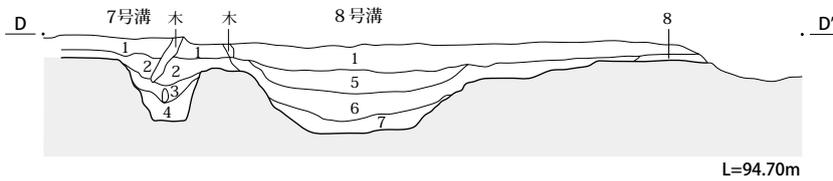
- A - A'
1. 黒色土 As-Cを多量に含む。
 2. 黒色土 As-Cを少量含む。
 3. 褐色土
 4. 褐色土 少量のAs-C、直径5cmの褐色土塊を含む。
 5. 黒色土 黒色土塊・褐色土塊を含む。



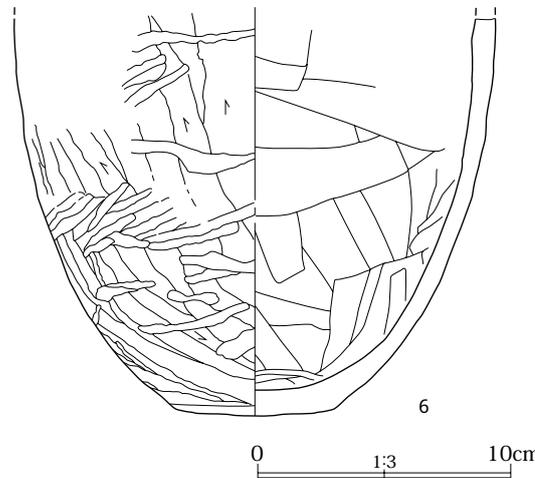
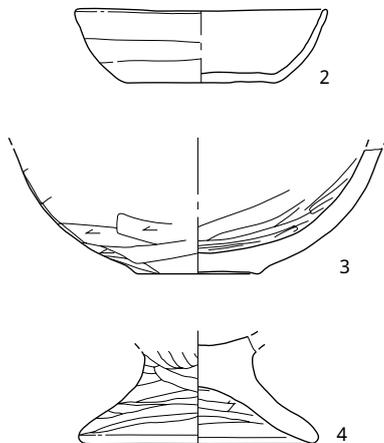
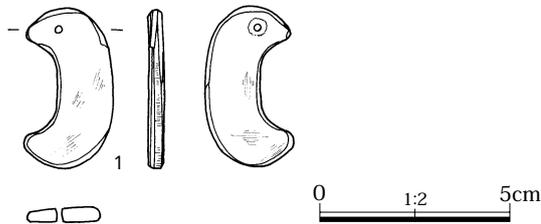
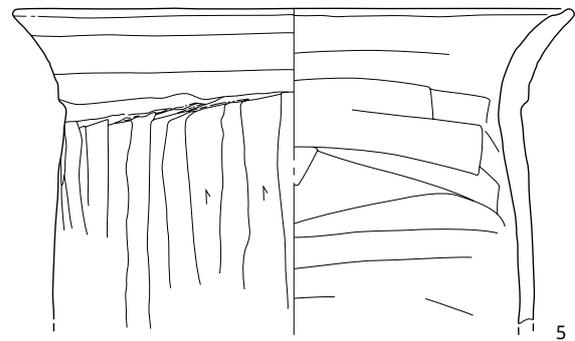
- B - B'
1. 黒褐色土 10YR3/1 多量のAs-C、直径3~5cmの暗黄灰褐砂塊を含む。
 2. 黒色土 10YR2/1 少量のAs-Cを含む。粘質。
 3. 黄褐色土 2.5Y5/4 シルト質。
 4. 黒褐色土 10YR3/1 少量の暗黄褐色砂塊、黄褐色シルト塊を含む。
 5. オリーブ灰色土 2.5Y4/3 直径0.1cmの小礫、直径3~5cmの黄褐色シルト塊を含む。



- C - C'
1. 黒色土 As-C・褐色土粒を含む。
 2. 黒色土 少量のAs-Cを含む。粘質。
 3. 黒色土 As-C・黒色土塊・褐色土粒を含む。

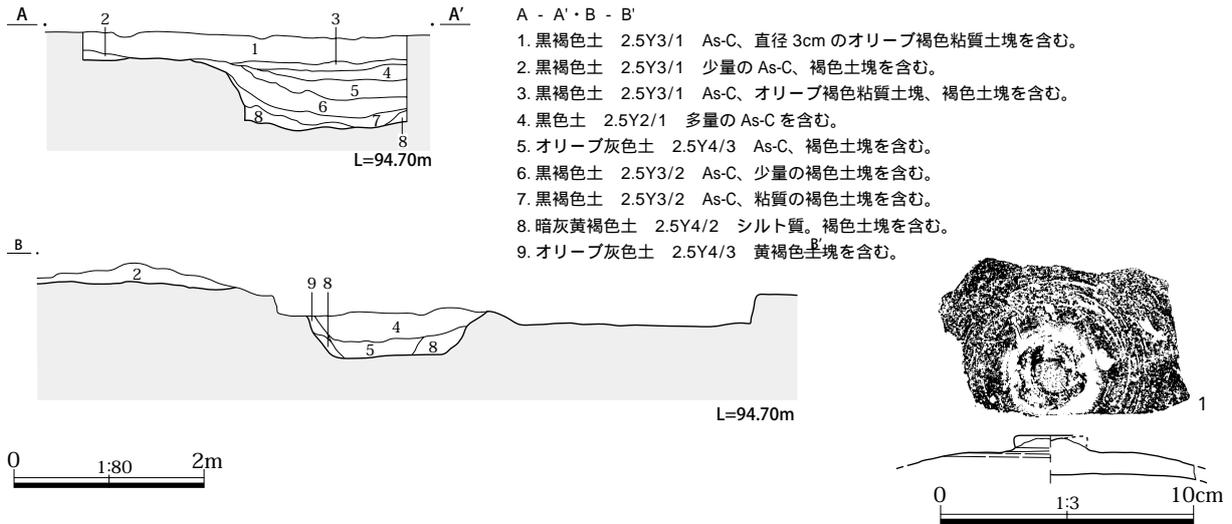


- D - D'
1. 黒褐色土 2.5Y3/1 As-C、直径3~5cmのオリーブ褐色粘質土塊を含む。
 2. 黒色土 2.5Y2/1 少量のAs-C、褐色土塊を含む。
 3. 黒色土 2.5Y2/1 微量のAs-C、褐色土塊を含む。
 4. 黒褐色土 2.5Y3/2 褐色土粒・塊を含む。As-Cを含まない。粘質。
 5. 黒色土 2.5Y2/1 As-Cを含む。
 6. 暗オリーブ褐色土 2.5Y3/3 As-C、直径2cmの褐色粘質土塊を含む。
 7. オリーブ褐色土 2.5Y4/6 微量のAs-C、多量の褐色土粒・塊を含む。
 8. 黒褐色土 2.5Y3/1 微量のAs-C、多量の褐色土粒を含む。



第221図 4区7号溝と出土遺物

3. 4区台地部の遺構と遺物



第222図 4区8号溝と出土遺物

推定される。溝の機能については不明であるが、埋没土中には砂礫層の堆積はなかったことから用水路というよりは、区画の溝と推定される。

4区8号溝

(第215・222図 PL131 遺物観察表P.516)

位置 4区4-3-A~C-7~9G

形状 北東辺の北半部と北西辺、西隅の一部をコの字状に検出した。内辺10mほどの方形を区画する溝と推定される。東辺・西辺とも南端は発掘区域外に伸びる。底面の標高は北隅・西隅ともに93.3mで、北西辺中央はやや低く93.2mであった。

規模 調査長 19.6m 最大幅 2.52m

最小幅 2.08m 深さ 0.67~0.80m

北西辺方向 N-40°-E 重複 無し

断面形 上方に広がる浅い箱形

埋没土 下層はオリブ灰色土あるいは暗灰黄褐色土で、上層は浅間C軽石を多く含む黒色土で埋まっていた。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器破片24点、剥片1点が出土した。図示した須恵器蓋(第222図1)も埋没土中から出土した。

所見 掘削時期は、層位や出土遺物から古墳時代と推定される。形状からは古墳あるいは方形周溝墓である可能性があるが、区画内側に墳丘盛土と考えら

れる堆積物は検出されなかった。南東部は権現山裾部にあたり、削平された可能性も考えられる。出土した須恵器蓋は7世紀後半から9世紀前半の間で考えられるものである。

4区9号土坑(第215・223図)

位置 4区4-3-A-10G

形状 不整隅丸方形 重複 無し

規模 長軸1.17m 短軸1.0m 残存壁高0.22m

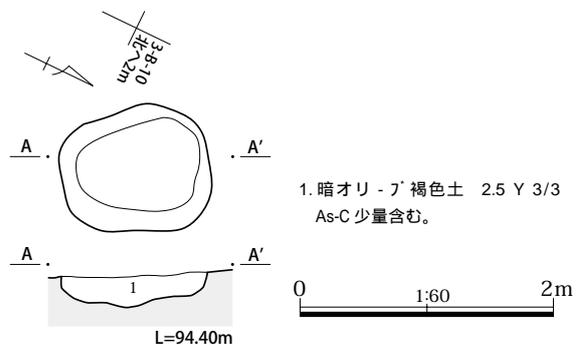
長軸方位 N-35°-W 断面形 浅い箱形

埋没土 浅間C軽石を少量含む黒褐色土。

底面 底面はやや凹凸が著しい。

遺物と出土状況 埋没土中から土師器壺口縁部破片2点が出土した。

所見 掘削時期は不明であるが、古墳時代中期以前の遺構と推定される。



第223図 4区9号土坑

第7章 女堀

1. 概要

女堀は赤城山の南麓を東西 12.8km にわたって掘削された中世初期の用水路である。1979 年から 1982 年にかけて、県営圃場整備事業等に伴って 7 地点が発掘調査され、掘削時期や工事状況、開削意図、開削主体等が解明された。1983 年には国指定史跡となり、5 地点が現状保存されている。

発掘調査で判明した女堀は、上幅 15 ~ 30 m、深さ 1 ~ 4 m で、段堀工法により底面中央に幅 5 ~ 6 m、深さ 1 ~ 1.5 m の通水溝を設けるのを基本形とする。掘削排土は北および南側に堤状に置かれており、北側より南側に高く排土が積まれていた。

女堀の掘削時期は、この排土の直下で検出された畠と、その畠のすぐ下位に堆積していた浅間 B テフラとの関係から、浅間 B テフラが降下した 1108 (天仁元) 年より新しい、12 世紀中葉と考えられている。

また、複数の調査地点で堀底に小間割が残る工事途中の状況が確認され、女堀は未完成のまま工事が中断され放棄されたことが判明した。調査地点のなかには中央に通水溝が掘られて掘削が完了した部分もあり、計画された全線を 150 ~ 200 m を単位とする工区に分け掘削されたこと、工区内は小間割して掘削するという工法が採られたことが判明した。

女堀は分水構造をもたない終末点送水を目的とした用水路と考えられる。通過地点である赤城山南麓や、終末点である大間々扇状地地域の農業発達史的視点にたった遺跡分布調査と発掘調査によって、女堀は火山災害で被災した乏水地帯に、河川から用水補給することで水田経営を拡大しようとして掘削されたと考えられている。また文献史学の成果では、開削者は淵名氏であったと結論された。

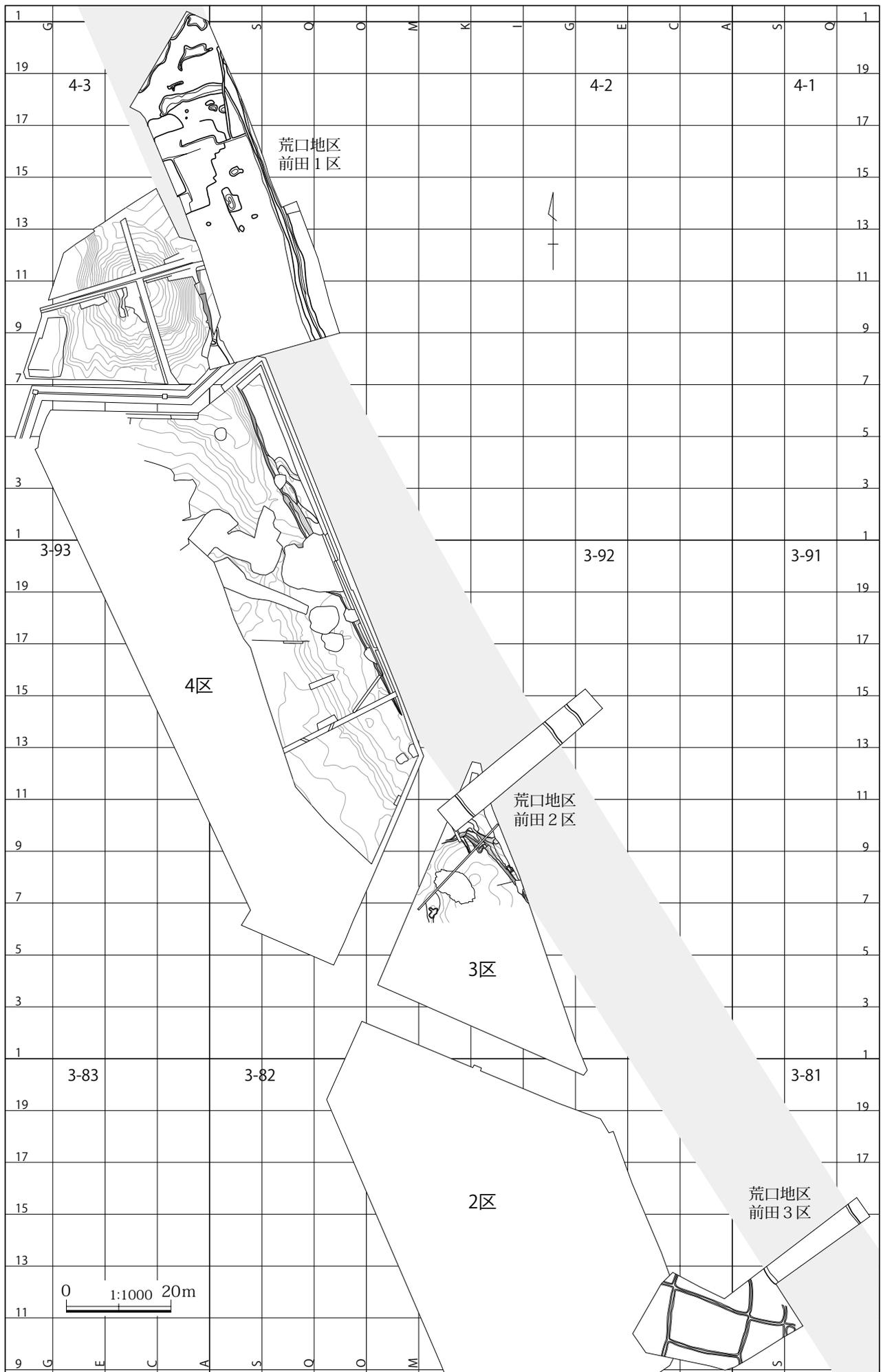
発掘調査された各地点の堀底レベルには想定された勾配と矛盾するところがあり、工区境では掘削方

法の違いや、通水溝のズレが生じていた。女堀の工事中断と放棄の原因は、このような堀底レベルの誤りや工区境の乱れなどに見られる技術的な問題と、通過地や通過地対策などの政治的・社会的問題の両面が指摘されている。

今回の荒砥前田 遺跡の女堀の調査は、1981 年に県営荒砥南部圃場整備事業に伴って発掘調査された女堀の「荒口地区前田」地点に隣接する位置で行った (第 224 図 PL132)。1981 年の調査では、荒砥前田 遺跡 4 区の権現山の北東裾に女堀の堀部分が検出されており、3 区北隅および 2 区の東側でもトレンチ調査がおこなわれている (荒口地区前田 2・3 区)。今回の調査では、1981 年調査の 1 区と 2 区をつなぐ女堀西岸の調査がおこなわれたことになる。なお、前回調査では荒砥前田 遺跡 2 区に接する部分で女堀掘削以前に降下した浅間 B テフラの下位にある洪水層直下の水田が検出されていたが、圃場整備事業が完了した今回の調査時点では深く削平が及んでいたために、同層位の水田面を本遺跡 2 区で確認することはできなかった。

今回の 3 区の調査では、4 区低地部にかかる部分の女堀西岸と薄く残る排土の堆積を検出した。特に 3 区西壁の低地部の土層では、厚さ 0.55 m の女堀掘削排土が確認でき、その下位には浅間粕川テフラが薄く堆積していた (巻頭カラー図版 4)。女堀の調査で浅間粕川テフラが確認されたのは初めての所見である。これにより、女堀の掘削は浅間粕川テフラ降下より新しいことが確認された。

4 区の調査では、荒砥川左岸自然堤防部分にかかる女堀排土山と、低地部に係る女堀西岸と薄く残る排土の堆積を確認した。低地部では排土の山は低くなっているが 4 区南端まで連なっており、3 区の排土まで連続すると推定される。この調査によって、これまで古墳と考えられてきた権現山が女堀の排土山であることを確認することができた。



第224図 荒砥前田 遺跡の女堀と1981年調査区

2.3 区的女堀

(1) 女堀 (第 225・227・229 図 PL132 ~ 134・186・187 遺物観察表 P.516)

3 区では、4 区低地部にかかる部分の女堀西岸と薄く残る排土の堆積を検出した。発掘区が狭かったため、女堀全体の堀幅や深さを計測することはできなかったが、低地と交差する地点での埋没状況を記録することができた。また、本調査区は 1981 年度に調査された荒口地区前田 2 区と重複している。荒口地区前田 2 区では堀全体をトレンチ調査しており、「確認された堀の上幅は 22.2 m、底幅 21.0 m であった。」と報告されている。

3 区的女堀調査区は、微高地部分から低地にかかる部分にあたる。微高地部分の女堀の上端は 3 - 92 - J - 9 G で 1.6 m ほど南に広がるが、その東側は N - 39° - W の概ね直線であった。この上端の広がり、地形の変換点にあり、工区境である可能性もある。3 区では南岸に近い部分のみの調査であり、最深部は不明であるが、調査範囲の深さは旧地表面から 0.3 ~ 0.45 m である。底面には、幅 1 m、長さ 3.3 m の小間割の痕跡が残っていた。小間割の最小単位は長さ 1.3 m である。排土は南岸で最大幅 17.5 m、厚さ 0.6 m、長さ 7.5 m 分が残存していた。

西側の 4 区へ繋がる低地部では、女堀は谷を掘り込んでつくられていた。3 区西壁の共通土層断面 C (第 168 図) では、微高地西裾の平坦部に女堀排土が置かれ、その下層の沖積土内には浅間粕川テフラと浅間 B テフラが堆積しているのが確認できた。しかし、ちょうど排土と堀の境目にあたる西壁 C 以北については、1981 年調査区 2 区と重なったこと、北端部は掘削深度が深くなるので土留め工事を施したことから、観察および記録することができなかった。

低地内に設定された 1981 年調査荒口地区前田 2 区の土層観察では、土層断面 A - A で、女堀底面を砂礫層が直接埋めており、南岸にも重層する砂層の堆積が認められ、「北側、南側ともに排土、築堤

を確認することはできなかった。」と報告されている。この部分では女堀底面を埋めていた砂礫層が低地内にも入り込んでそのまま同様に埋めていた。

一方、隣接する位置にあたる 3 区女堀土層断面 H - H (第 227 図) では、最も低い部分は荒口地区前田 2 区の土層観察トレンチに重なり観察不能であったが、それより東側では全体に排土が置かれていたことが観察された。この低地部に置かれた排土の続きは 4 区女堀土層断面 F - F (第 227 図) で確認されていることから、荒口地区前田 2 区土層断面 A - A 部分にも排土が置かれていたと推定される。しかし、荒口地区前田 2 区では排土は確認できなかった。部分的に女堀を埋めた洪水で流されたか、後世に排土堤を切った可能性がある。

堀の低地部での深さは旧表土から 0.5 m、下半部は 0.3 ~ 0.4 m の灰色砂・黒褐色砂で埋没していた。底面は平坦で、小間割の痕跡はなかった。中央部の通水溝も発掘区内では確認できなかった。

出土遺物は、埋没土中および排土中から、陶器 28 点、磁器 9 点、軟質土器 5 点が出土した。図示した中国青磁碗 (第 229 図 4) が 13 ~ 14 世紀のものと思われる他は、江戸時代から近代までの遺物で、攪乱された状況を示していた。

(2) 女堀排土下面 (第 228 図 PL134・135)

女堀排土を除去すると、3 区低地部への緩斜面があらわれた。排土が残っていた部分は微高地西端を深さ 0.5 m 掘り下げて段状に造成されていた。段下の東端には 8 号溝が検出された。8 号溝は女堀排土で埋没しており、女堀掘削時点に崖下にあった水路と推定される。8 号溝の北縁に沿ってアゼ状の高まりがあり、南端では西に曲がっていた。このアゼ状の高まりに囲まれた 3 - 92 - L - 6・7 G は平坦であり、水田面の可能性もある。しかし、これまで女堀排土直下での水田の検出は無いことから、畠作も含め、慎重に考える必要がある。近接する西壁土壌分析では、女堀排土下面でイネの植物珪酸体が 2300 個 /g という比較的多い値で検出されている。

8号溝の西側では7号溝が検出された。7号溝も女堀排土で埋まっていた。上記の水田面を切るように掘られているので、女堀掘削時の工用排水溝の可能性もある。7号溝の北西側は斜面であり、水田面とは考えにくい。ただし、近接する地点で採取した西壁土壌の分析では、女堀排土下面でイネの植物珪酸体が比較的多い値で検出されていることから、イネが栽培されていたことは確実である。畝立てのない畠の可能性もあるが、調査ではどのような土地利用が女堀掘削以前にあったのかを明確にすることはできなかった。低地部の排土下位には、厚さ0.35～0.4mほどの褐灰色土と黒褐色土を間に挟んで、厚さ1cmほどの浅間粕川テフラ、間層を1cmほど置いて厚さ3cmほどの浅間B赤紫色の火山灰・12～15cmの浅間B軽石が堆積していた。浅間粕川テフラは途切れ途切れではあるが、3区西壁の土層断面に7mの長さで連続して認められた。これまでの女堀の調査のなかで、浅間粕川テフラが排土下位で純堆積層で認められたのは、今回が初めてのことである。他地点ではその下位にあった浅間Bテフラまで鋤き込まれていたことから、浅間粕川テフラも残らなかったものと推定される。

3区7号溝(第228図 PL135)

位置 3区3-92-I~L-7・8G

重複 無し

形状 3区微高地北端にほぼ平行に低地部に掘られた溝。緩やかに彎曲する。東端・西端ともに調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.07m高い。

規模 調査長 16.0m 最大幅 0.46m

最小幅 0.24m 深さ 0.25～0.34m

断面形 逆台形

埋没土 女堀排土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 同じ女堀排土で埋まった周囲の水田面やアゼ状の高まりを切って掘られていることから、女堀掘削工事に関連して掘られた排水溝の可能性がある。

3区8号溝(第228図 PL135)

位置 3区3-92-I~L-5～8G

重複 無し

形状 3区低地部南端に、微高地裾に沿って掘られた溝。微高地北端に沿って緩やかに彎曲する。東端・西端ともに調査区外に伸びる。底面はほぼ平坦で、その標高は東端が西端より0.12m高い。

規模 調査長 17.0m 最大幅 1.40m

最小幅 1.00m 深さ 0.19～0.23m

断面形 皿形。東側は比高0.4mの微高地法面である。

埋没土 女堀排土で埋まっていた。

遺物と出土状況 遺物は出土しなかった。

所見 微高地崖線下の水路である。西側にアゼ状の高まりがあり、その西には部分的に平坦面があることから、用水路の可能性が高いと考えられる。

3.4区的女堀

(1)女堀(第225~227・229図 PL136~138・178・186・187 遺物観察表P.516)

4区では、荒砥川左岸自然堤防の台地部にかかる女堀排土山(権現山)と、低地部に係る女堀西岸と排土の堆積を確認した。現況では権現山部分だけが山状に残っており、『群馬県古墳総覧』にも荒砥村第334号墳として掲載されていた。しかし、4区全体の調査によって、低地部にも低い排土の堆積が残存して4区南端まで連なっており、既存道路のため間に未調査部分を挟むが、3区の排土まで連続していることほぼ間違いのないと思われる。今回の調査によって、権現山が女堀の排土山の一部であることを確認することができた。

今回の4区の調査で検出された女堀排土山は、総延長128m、最大幅17.3m(第226図土層断面B-B)、最小幅10.5m(土層断面D-D)、最大高は3.7m、最小高は0.5mであった。最も高く排土が残っていたのは台地部権現山で南北長27.9m、北辺幅20m、南辺幅27.9m、現地表面からの高さは3.7mである。

第7章 女堀

土層断面 B - B 地点では、まず堀縁から 14 ~ 15 m ほど離れた地点に排土を置き、13 層を山にしてその向こうに 11 層・12 層を置いてから、手前に 2 ~ 10 層を置いている。掘削深が大きく土砂量が多量になる台地部では、堀の端から離れた位置に最初の排土を置いて山をつくってから、順次手前に積んでいったことが、土層断面から観察された。台地部排土(権現山)の頂上は、中世以降墓地として利用されていたこともあり、第 226 図のようにほぼ平坦であった。今回の調査でも渡河に関わる遺構や測量台のような施設は検出されなかった。

一方、低地部の排土山は後世の土地利用によって上部が削平されているが、土層断面 F - F (第 227 図)の堆積傾斜からすれば当時の高さの 2/3 程度は残存していると推定される。低地部の掘削深の小さい地点では、堀端から 5 ~ 10 m ほどのところから排土を置いている。堀部分は、1981 年度に調査された女堀荒口地区前田 1 区で明らかにされている。ここでは権現山の東側の堀部分 67 m を調査し、堀の規模は「東端で上幅 17 m、底幅 15.0 m、深さ 1.5 m」と報告されている。底面の西半には小間割や排水処理溝が残されており、工事途中の様相を示していた。荒砥川の渡河方法の解明も期待されたが、遺構としては確認できなかった。

今回の調査では、堀部分最大幅 4.6 m ほどを 4 区低地部北端部で調査したが、これは全体幅の 1/4 ほどで中央までは調査できなかった(第 224 図)。底面はほぼ平坦で小間割等は残っていなかった。4 - 2 - Q・R - 1 ~ 3 G には不定型な溝状の落ち込みが検出されたが、底面を流れる流水の痕跡と判断した。1981 年調査の荒口地区前田 1 区でも「東端から約 30 m の間は、ほぼ平坦な底面であり、わずかな凹凸以外に遺構は見られない。」と報告されており、今回の調査所見と矛盾しない。

堀内を埋めていたのは、下半部は砂礫層、上半部は褐灰色砂質土である。下半部の砂礫層は厚さ 0.3 ~ 0.35 m で砂と砂礫の互層になっており、直接女堀底面を覆っていた。縦断面および横断面の両方とも

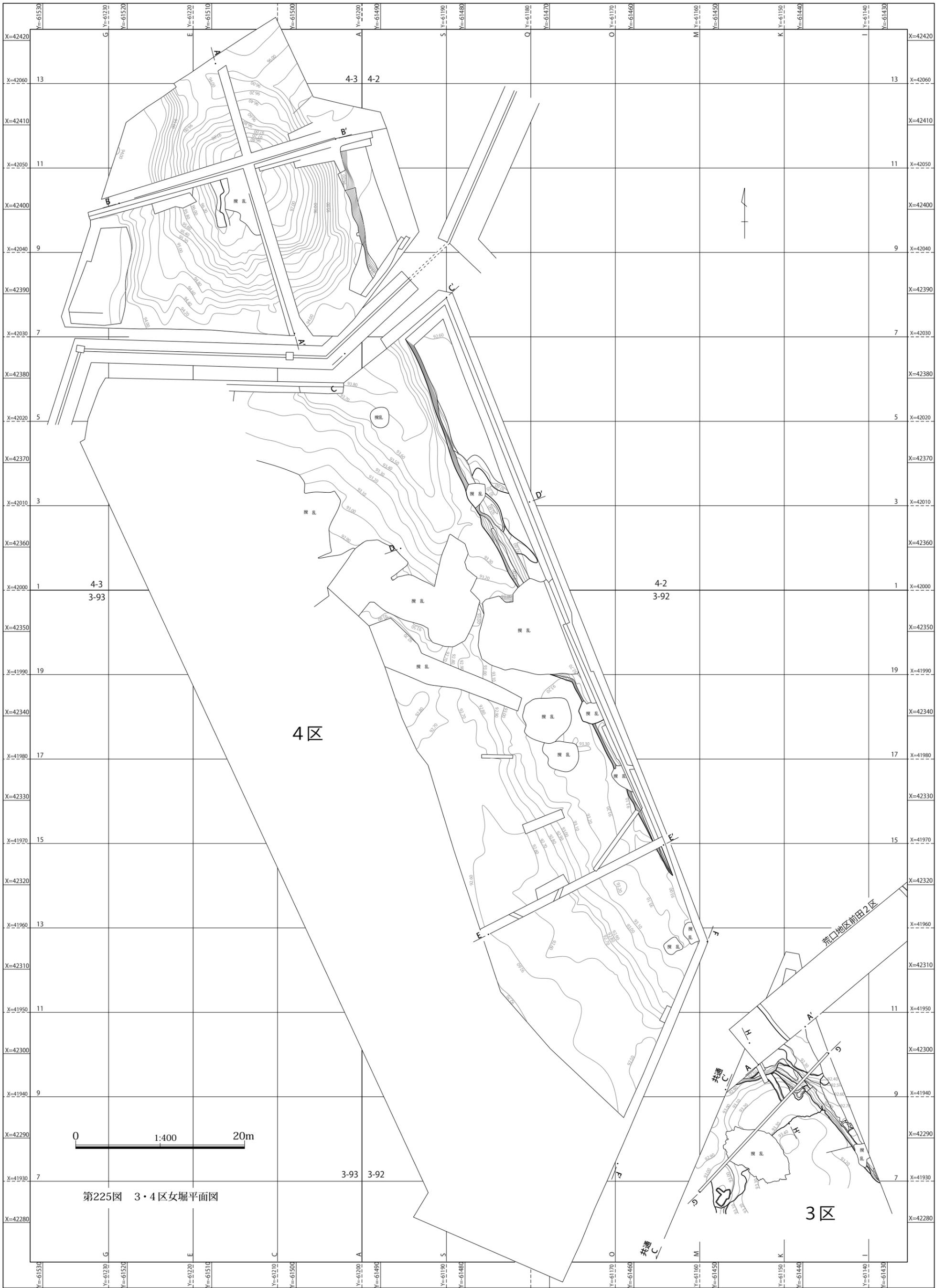
水平に堆積しており、水性堆積であることが分かる。荒口地区前田 1 区でも同様な砂礫で埋没していたことが報告されている。また東方に設定された荒口地区前田 2 区・3 区では第 1 次埋没土の砂礫層が薄くなっていることから、西方にある荒砥川からの洪水堆積物で一気に埋没したことが推定されている。

出土遺物は、埋没土中から須恵器 4 点が出土したが混入と思われる。排土中からは、台地部(権現山)では土師器 27 点、須恵器 11 点、陶器 6 点、磁器 7 点、軟質土器 1 点が出土した。低地部では土師器 814 点、須恵器 26 点、陶器 27 点、磁器 4 点、瓦破片 1 点が出土した。多くの土師器・須恵器破片が出土しているが、これらは混入と考えられる。陶磁器のなかには中世と見られるものが含まれていた。中国青磁碗(第 229 図 6)は 12 ~ 14 世紀、中国白磁碗(7・8)は 12 世紀、9 は 12 ~ 13 世紀、青磁碗(10)は 13 世紀、青磁碗(11)は 14 ~ 15 世紀のものである。その他の陶磁器類は江戸時代から近代までの遺物である。図示した瀬戸美濃系天目碗(15)、瀬戸美濃系灰釉皿(16)は 17 世紀のものと思われる。いずれも排土の中から出土したもので、攪乱された状況を示していた。

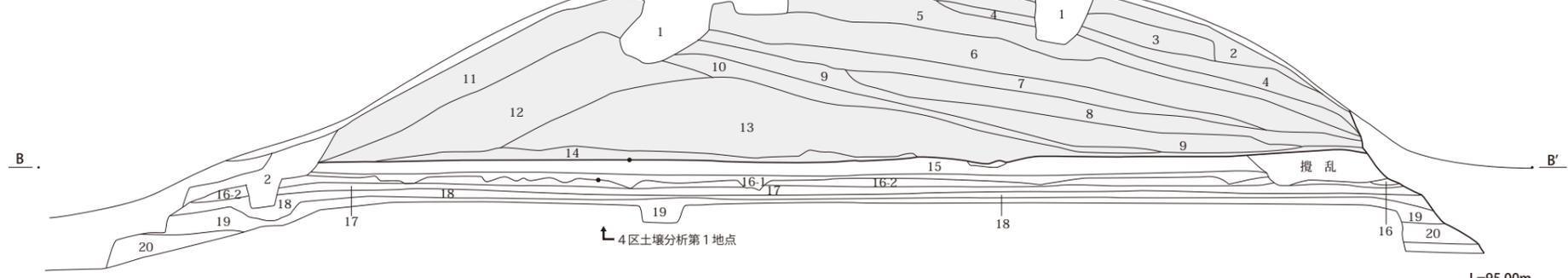
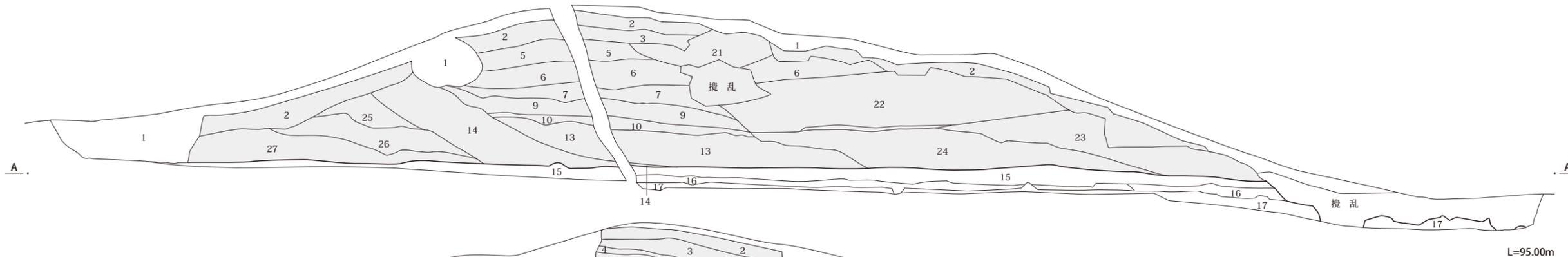
(2) 女堀排土下面(第 228 図 PL138)

台地部の女堀排土(権現山)は四分割しながら掘り下げた。最初に掘り下げた南西部は、排土下面の遺構が検出されなかったことから、下位の洪水層上面まで掘り下げた。南東部は、排土下面で遺構は検出されなかったが、写真だけを撮影して(PL138 - 8)、洪水層上面まで掘り下げた。北半部も排土下面の遺構が検出されなかったことから、排土下面より下位の洪水層上面まで掘り下げた。

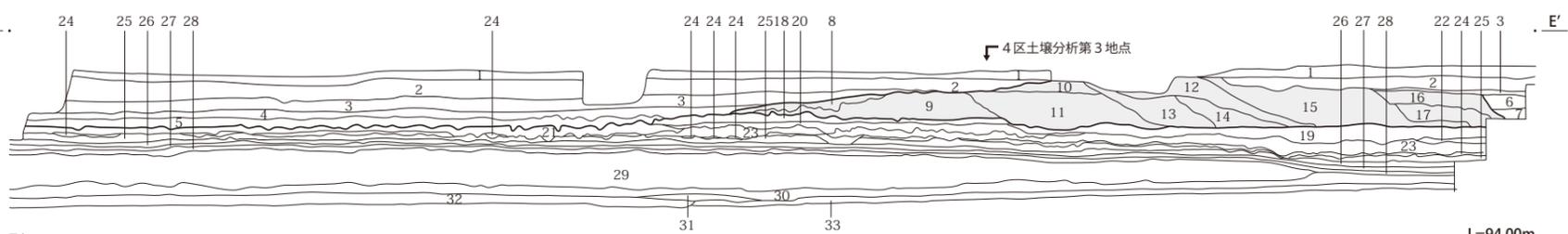
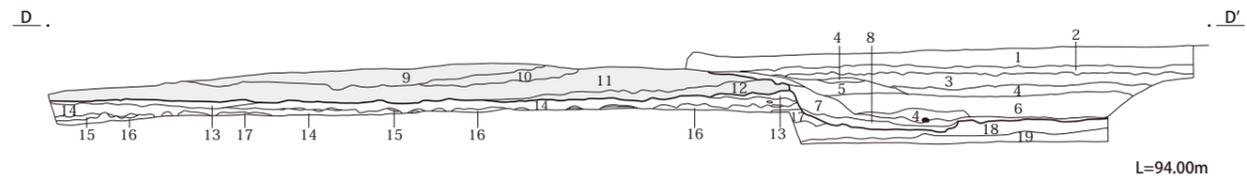
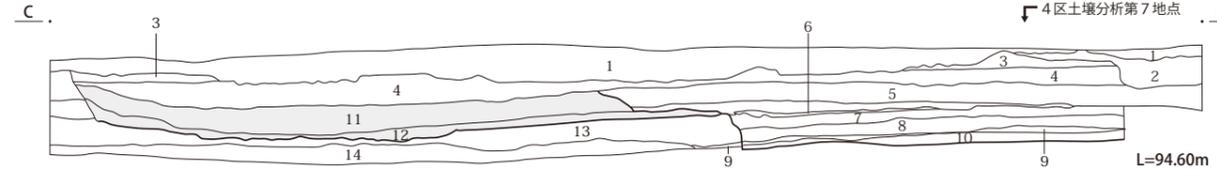
低地部の女堀排土下面は、若干の凹凸は検出されたが、畠等の遺構は検出されなかった。第 228 図では下面の西半分が、やや下がって平坦になっているのは、女堀より新しい第 3 洪水層で埋まっていた面が、女堀排土裾部を掘り下げていることによると思われる。排土下面では遺物は出土しなかった。



第225图 3·4区女堀平面图



- C-C'**
1. 褐灰砂質土 10YR6/1 表土および攪乱土。
 2. 褐色土
 3. 灰色土 白色軽石を含む。
 4. 暗灰褐色土 白色軽石を含む。
 5. 暗灰褐色土
 6. 暗灰褐色砂質土
 7. 灰褐色砂質土
 8. 灰色砂礫
 9. 灰褐色砂
 10. 灰色砂礫
 11. 灰黄褐色土 10YR5/2 直径0.5～2cmの軽石、少量の黄褐色土粒、鉄分凝集塊、炭化物粒を含む。
 12. にぶい黄褐色土 10YR5/4 直径0.1～0.5cmの軽石、黄褐色土粒・塊を含む。
 13. にぶい黄褐色土 10YR5/4 軽石と、黄褐色土粒を少量含む。
 14. 灰黄褐色土 10YR5/2 砂層。第3洪水層堆積物。



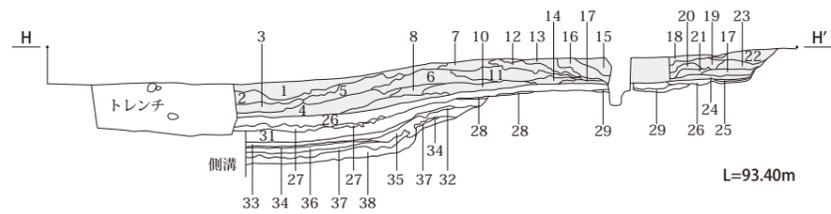
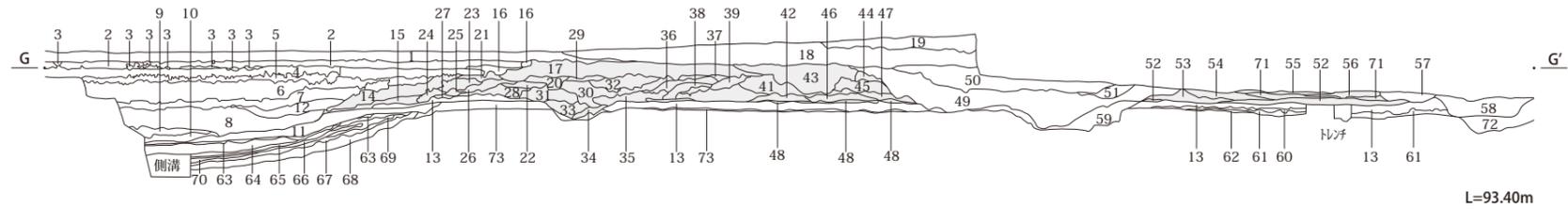
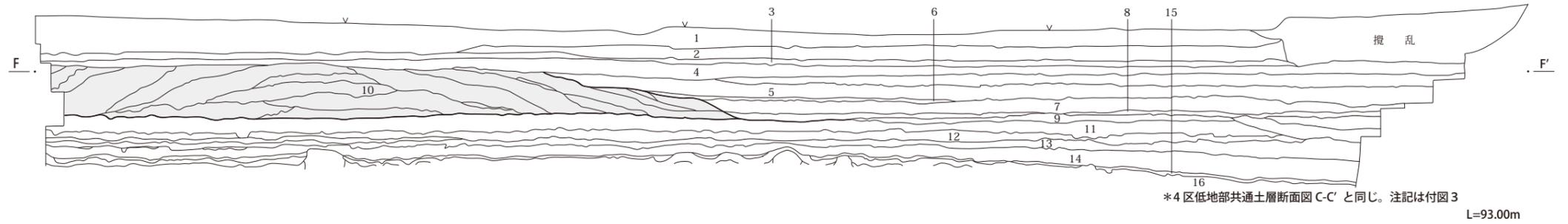
- E-E'**
1. 黄灰色土 2.5Y5/1 直径0.5～1cmの軽石及び直径0.1cmの砂利、炭化物粒を含む
 2. 灰黄褐色土 10YR5/2 直径0.5～2cmの軽石、少量の黄褐色土粒、鉄分凝集塊、炭化物粒を含む。
 3. にぶい黄褐色土 10YR5/4 直径0.1～0.5cmの軽石、黄褐色土粒・塊を含む。
 4. にぶい黄褐色土 10YR5/4 軽石と、黄褐色土粒を少量含む。
 5. 灰黄褐色土 10YR5/2 砂層。第3洪水層堆積物。
 6. 灰オリーブ色砂 5Y6/2 砂層。下層に10YR4/6色のノロが1cmの厚さで堆積。
 7. 灰色砂 5Y5/1 砂層。直径0.2cmの白色砂のラミナ堆積。
 8. にぶい黄褐色土 10YR5/4 直径1～2cmの明黄褐色土塊、直径1～5cmの褐色軽石混土塊、直径1～8cmの灰褐色シルト質土塊を含む。
 9. 灰黄褐色土 10YR4/2 多量の軽石、褐灰軽石混土塊と、少量の直径2cmの黒色粘質土塊、川砂塊を含む。
 10. 褐色土 10YR4/4 軽石、直径10cmの赤褐色軽石混土塊、直径5cmの灰黄褐色軽石混土塊、川砂を含む。
 11. 褐灰色土 10YR4/1 軽石、多量の直径5～10cmの褐灰軽石混土塊、直径1～10cmの黒色軽石混土塊、直径5cmの赤褐色軽石混砂質土塊、川砂塊を含む。
 12. 黒褐色土 10YR3/2 軽石、直径5～10cmの黒色軽石混土塊、直径5cmの明黄褐色洪水砂塊、川砂塊を含む。
 13. 褐灰色土 10YR4/1 11層に類似するが、塊の大きさが小さい。
 14. 褐灰色土 10YR4/1 軽石、多量の褐灰軽石混土塊、直径3cmの赤褐軽石混土塊、少量の直径3cmの黒色土塊を含む。
 15. にぶい黄褐色土 10YR5/3 少量の軽石、多量のシルト塊、直径5cmの褐灰軽石混土塊を含む。
 16. 黒褐色土 10YR3/2 軽石、直径0.1～0.2cmの川砂利、直径1cmの黒褐色軽石混土塊、直径1cmの暗褐色土塊を含む。

17. 黒褐色土 10YR3/2 多量の軽石、直径1～5cmの黒色土塊、直径1～3cmの黄褐色砂質土塊、少量の直径3cmの黒色軽石混土塊を含む。
18. 褐灰色土 10YR5/1 軽石を含む。シルト質。
19. 褐灰色土 10YR5/1 18層に類似する。軽石の混入は微量。
20. 褐灰色土 10YR5/1 少量のAs-B、洪水砂を含む。
21. 灰黄褐色土 10YR5/2 As-Bを含む。
22. 不明
23. 灰黄褐色土 10YR5/2 As-B、As-Bピンク火山灰塊、As-Kk塊、洪水砂塊を含む。
24. 灰黄褐色土 10YR5/2 少量のAs-B、多量のAs-Bピンク火山灰塊、直径3cmの軽石混土塊を含む。
25. As-B純層
26. 黒褐色土 10YR3/1 粘質。
27. にぶい黄褐色土 2.5Y6/3 洪水砂。
28. 暗灰黄褐色土 2.5Y4/2 洪水砂。
29. 灰黄色土 2.5Y6/2 洪水砂。直径0.5～1cmの川砂のラミナ堆積。
30. 暗灰黄色土 2.5Y5/2 洪水砂。きめ細かい砂層。
31. 黒褐色土 2.5Y3/2 洪水層。きめ細かい砂層。浅黄色洪水砂を含む。
32. にぶい黄褐色土 2.5Y6/3 洪水砂。30層と32層の間には厚さ0.5cmの黒色土の帯状堆積がある。
33. にぶい黄褐色土 2.5Y6/3 32層が鉄分凝集により固く締まる。

- D-D'**
1. 褐灰砂質土 10YR6/1 表土および攪乱土。
 2. 褐色土
 3. 褐灰色砂 10YR6/1
 4. 暗褐色土 10YR3/4 砂礫を含む。
 5. 黒褐色土 10YR3/2 黒色土塊・褐色砂質土塊・黄褐色土塊を含む。
 6. 灰黄褐色土 10YR5/2 砂礫を含む。
 7. にぶい黄褐色土 10YR7/4 シルト塊を多く、黒褐色土塊を少量含む。
 8. 暗褐色土 10YR3/3 にぶい黄褐色シルト質土塊を少量含む。
 9. 褐色土 10YR4/4 軽石、直径10cmの赤褐色軽石混土塊、直径5cmの灰黄褐色軽石混土塊、川砂を含む。
 10. 灰黄褐色土 10YR4/2 多量の軽石、褐灰軽石混土塊と、少量の直径2cmの黒色粘質土塊、川砂塊を含む。
 11. 灰黄褐色土 10YR5/2 直径0.5～2cmの軽石、少量の黄褐色土粒、鉄分凝集塊、炭化物粒を含む。
 12. 黒色土 黄灰色軽石を含む。
 13. 暗灰褐色土 白色軽石を含む。
 14. 褐色土
 15. As-Bピンク火山灰
 16. As-B軽石
 17. 暗褐色土 10YR3/3 シルト質。
 18. 黒褐色土 10YR3/2 灰黄色洪水砂粒を含む。
 19. 暗灰黄色砂質土 2.5YR5/2



第226図 3・4区女堀土層断面(1)



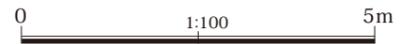
G-G'

1. 灰色土 直径0.5～2mmの白色軽石を少量含む。ややしまる。
2. 黒色砂質土 直径0.5～1mmの白色軽石、直径1mmの黄色土粒をごく少量含む。ややしまる。
3. 灰色土 直径0.5～2mmの白色軽石を少量含む。ややしまる。
4. 黄灰色土 直径0.5～3mmの白色軽石、黄色土粒、小石が多く混入する。ややしまる。
5. 灰色土 直径0.5～1mmの白色軽石、黄色土粒をごく少量含む。ややしまる。
6. 灰色土 直径0.5～10mmの白色軽石を少量含む。黄色土粒、小石をやや多く含む。ややしまる。
7. 暗灰色土 直径0.5～3mmの白色軽石をごく少量含む。黄色土粒、小石、灰色砂を少量含む。ややしまる。
8. 灰色砂 黄色砂、黒色砂が互層状に混入。粒子こまかい。しまりない。
9. 暗灰色粘性土 黒褐色砂（粒子粗い）が少量混入。しまりなし。
10. 黒褐色砂 粒子粗い。小石、砂利が混入。しまりなし。砂礫層。
11. 灰色粘性土 女堀底面。
12. 灰色粘性土と灰色砂の混土 ややしまる。
13. 灰色土
14. 灰色粘性土
15. As-C混土と灰色土の混土 掘削排土。
16. 灰色土 直径0.5～2mmの白色軽石を少量含む。しまりなし。
17. 灰色土 鉄分を斑状に含む。しまりなし。
18. 暗褐色砂質土 表土。しまって固い。
19. 灰色砂質土 表土。しまって固い。
20. 灰色粘性土 直径0.5mm以下の白色軽石を少量含む。しまりなし。（1号溝埋土）
21. 灰色粘性土 C混土が少量混じる。しまりなし。
22. 灰色土 直径2～5cmのAs-C混土と黄色砂質土の塊を少量含む。しまりなし。
23. 黄色砂質土 直径5～10cmのAs-C混土と灰色土の塊を多く含む。しまりなし。
24. As-C混土 直径2～3cmの褐色土と灰色土と黄色砂質土の塊を少量含む。しまりなし。
25. As-C混土 直径5cmの灰色土と黄色砂質土の塊を多く含む。しまりなし。
26. 黄色砂質土 直径0.5～1cmのAs-C混土と灰色土の塊を多く含む。しまりなし。
27. 灰色土 直径0.5～1cmの黄色砂質土の塊をごく少量含む。しまりなし。
28. As-C混土 直径0.5～1cmの灰色土と黄色砂質土の塊をごく少量含む。しまりなし。
29. As-C混土と褐色土の混土
30. As-C混土 直径5～10cmの灰色土の塊を少量含む。
31. 直径2～3cmのAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊の混土 ほぼ同量ずつ。
32. 灰色土 直径2～3cmのAs-C混土と褐色土の塊をごく少量含む。

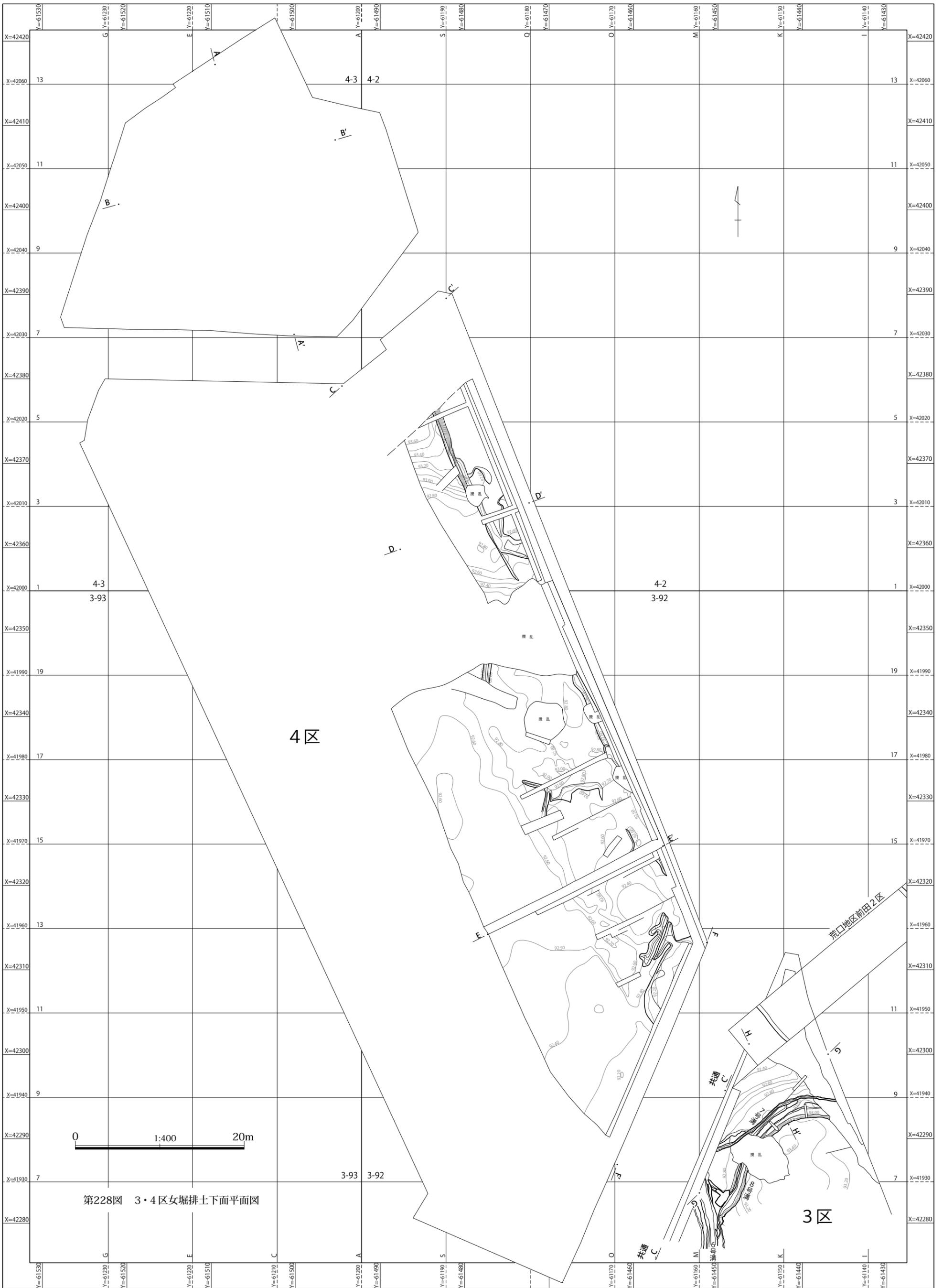
33. 灰色土 直径2～3cmのAs-C混土の塊をごく少量含む。
34. 直径10cmのAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊の混土 ほぼ同量ずつ。
35. 直径2～3cmのAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊の混土 ほぼ同量ずつ。
36. 灰色土 直径1～2cmのAs-C混土の塊をごく少量、直径2～3cmの黄色砂質土の塊を少量含む。
37. As-C混土 黄色土粒を少量含む。
38. As-C混土と灰色土の混土 直径10cmの灰色土の塊をごく少量含む。
39. 直径2～3cmのAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊の混土。
40. 灰色土 直径10～15cmのAs-C混土の塊を少量、直径1～2cmの黄色砂質土の塊をごく少量含む。
41. 直径5～10cmの灰色土と黄色砂質土の塊の混土
直径2～3cmの褐色土の塊と、直径1～2cmの黄色砂質土の塊をごく少量含む。
42. 灰色土と黄色砂質土の混土 直径1～10cmのAs-C混土の塊を少量含む。
43. 灰褐色土 直径1cmの黄色砂質土の塊を多く含む。
44. 灰褐色土 黄色土粒を少量含む。直径1～3cmの灰色土と黄色砂質土の塊をごく少量含む。
45. 直径1cm以下のAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊が互層状になっている。黄色砂質土がやや多い。
46. 灰色土 直径1cmのAs-C混土と黄色砂質土の塊をごく少量含む。灰色土がやや多い。
47. 45層と似る。
48. 黄色砂質土
49. 暗灰色土と灰色土の混土 小石、砂利を多く含む。（攪乱土）
50. 明灰色土 小石、砂利を多く含む。（攪乱土）
51. 黒色土 直径10cmの灰色土塊を少量含む。（攪乱土）
52. As-C混土と灰色土と黄色砂質土が版築状になっている。やや灰色土が多い。非常に固くしまっている。
53. As-C混土 直径10～15cmの灰色土の塊を少量含む。（盛土）
54. 灰色粘性土 砂、直径0.5mmくらいの砂利を多く含む。（低地部地山）
55. 白色砂 色は異なるが、58層と同質。
56. As-C混土 橙色砂が多く混じり込んでいる。（58層よりは粒子が粗い。畦の土。）
57. 灰色粘性土 直径0.5～1cmの砂利を少量含む。非常にもろい。（新しい溝）
58. 橙色砂 白色砂と灰色粘性土が互層状に入り込む。（水田面を埋める砂と同じ。畦わきの溝の埋土。）
粒子が非常にこまかい。55層と同質。鉄分の影響により、色が変色したものか。
59. 赤灰色粘性土 白色砂、砂利を少量含む。（攪乱層）
60. 黒色砂と黒色土の混土
61. 黒色土と黒色砂、小砂利の混土 小砂利を多く含む。
62. 黒色土と黄色砂の混土 新しい畝。
63. 淡黄色砂 第4洪水層
64. 黒色粘性土（第4洪水層下面耕土？）
65. 黒色粘性土と白色粘性土の混土
66. 粕川テフラ青色灰層
67. As-B黒灰色灰層
68. As-B軽石層
69. As-B混黒色土 As-B軽石が多量に混入。
70. 灰褐色粘性土 As-B灰層と粕川テフラとの間層
71. 黒色土 黒色砂を少量含む。
72. 灰色シルト 灰色砂を多く含む。
73. 黄色砂質土（地山）

H-H'

1. 褐灰色土 直径0.5～1mmの白色軽石を少量含む。しまりなし。
2. 灰色砂
3. 灰色砂と黒色土の混土
4. 直径1～5cmの灰色土と黒色土と黄色砂質土の塊の混土 やや灰色土が多い。
5. 灰色土 直径10～15cmのAs-C混土と灰色土の塊を少量含む。直径1～2cmの灰色土の塊を少量含む。
6. 直径1～2cmの灰色土と黄色砂質土と黒色土の塊の混土 直径10cmの黒色土の塊をごく少量含む。
7. 黄色砂質土 直径1～2cmのAs-C混土と灰色土の塊を多く含む。
8. 灰色土 直径1cmの黒色土と黄灰色砂質土の塊を多く含む。
9. 黄灰色砂質土 直径1～2cmの黒色土の塊をごく少量含む。
10. 黒色土 直径10cmの灰色土の塊を多く含む。直径5cmの黄灰色砂質土の塊を少量含む。
11. 黒色土 直径8～10cmの灰色土の塊を多く含む。直径1～2cmの灰色土と黄色砂質土の塊を少量含む。
12. 黄色砂質土 直径1～2cmの灰色土の塊を少量含む。
13. As-C混土 直径1～2cmの灰色土と黄色砂質土の塊を少量含む。直径10cmの灰色土の塊をごく少量含む。
14. 灰色土と黄色砂質土の混土 直径1cmのAs-C混土の塊をごく少量含む。
15. 直径1～2cmのAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊の混土 黄色砂質土がやや少ない。
16. 直径1～3cmのAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊の混土。
17. 灰色土
18. 直径1～2cmのAs-C混土と灰色土と黄色砂質土の塊の混土。
19. 黒色砂 直径1cmのcの塊をごく少量含む。
20. 灰色土 直径0.5cmのAs-C混土と黄色砂質土の塊をごく少量含む。
21. 灰色土 直径0.5cmのAs-C混土と黄色砂質土の塊を少量含む。黒色砂を少量含む。
22. As-C混土 直径1cmの灰色土と黄色砂質土の塊をごく少量含む。
23. 灰色土 直径2～5cmのAs-C混土と黄色砂質土の塊を多く含む。
24. 黒色砂質土 直径5～10cmの淡灰色粘質土塊を少量含む。
25. 黄色砂質土（掘削排土下、溝埋土）
26. 灰色土
27. 淡黄色砂（第4洪水層）
28. 黒色土と黄色砂質土の混土
29. 灰色砂
30. 黒色土と灰色砂の混土 畝の畝間の土。
31. 灰褐色砂質土（第4洪水層下水田耕土）
32. 31層とAs-Bの混土
33. 黒色粘質土と灰白色粘質土の互層
34. 粕川テフラ
35. 崩落したAs-B 褐色土塊を含む。
36. 灰白色粘質土
37. As-Bピンク灰
38. As-B軽石

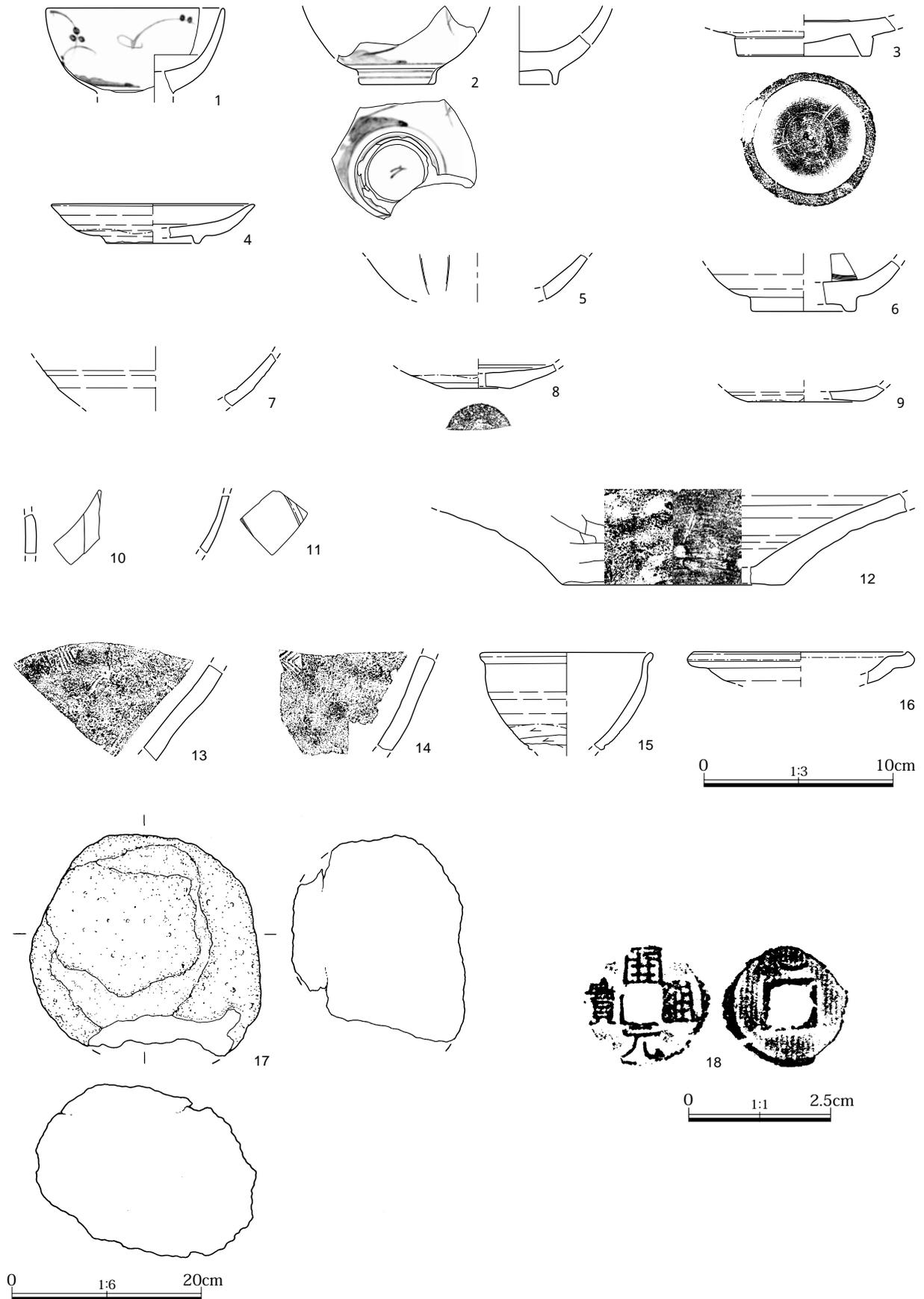


第227図 3・4区女堀土層断面(2)



第228图 3·4区女堀排水下面平面图

3・4区の女堀



第229図 3・4区女堀出土遺物

第8章 遺構外の出土遺物

1. 概要

荒砥前田 遺跡の調査では、遺構に伴わないで出土した遺物を、区・グリッドごとに表面採集遺物として取りあげた。その出土数を第11表に示した。

1区では縄文土器11点、弥生土器3点、土師器272点、須恵器2点、陶器8点、磁器2点、軟質土器9点、石器4点が遺構確認作業中等で出土した。このうち弥生土器3点は破片であるが、中期後半と見られるものである。また、第4表(P.55)に示したが、1区谷部北谷地内でも後期樽式土器破片2点が出土している。

2区は古墳時代前期の竪穴住居が検出されたが、その遺構確認作業時に多数の土器等が出土した。ほとんどが竪穴住居の時期である古墳時代前期のもので、土師器の数は1826点にのぼる。他に縄文土器18点、弥生土器6点、須恵器3点、陶器8点、軟質土器4点、石器7点が出土した。

3区では縄文土器6点、弥生土器3点、土師器77点、陶器2点、軟質土器1点、石器2点が遺構確認作業中等で出土した。低地内の埋積土から出土した遺物が多い。

4区では土師器47点、須恵器7点、陶器18点、磁器5点、軟質土器8点、石器4点が遺構確認作業中等で出土した。面積に比して出土数が少ないのは各地点・各遺構面で別途出土数を記載したことによる。第10表(P.305)に示したが、4区古墳時代遺物包含層には9000点弱の遺物が出土しており、縄文土器106点、弥生土器20点も含まれている。

本章では、遺構に伴わない形で出土した遺物と、遺構から出土したがその遺構に伴わない遺物を合わせて、図示した。第230図(PL187・192)が弥生時代以降、第231図～第237図(PL187～192)は縄文時代の遺物である。

また、遺構外で出土した古墳時代の土師器は、そ

の多くが2区竪穴住居に伴う土師器と同時期のものであることから、そのほとんどは掲載を割愛し、外来系土器の破片を中心に選択した。須恵器は小破片であることから掲載しなかった。陶器・磁器は時期および窯の明らかな特徴的なものを選んで掲載した。弥生時代・縄文時代の遺物については、次項で遺構内から出土した遺物も含めて、記述報告した。

2. 弥生土器について

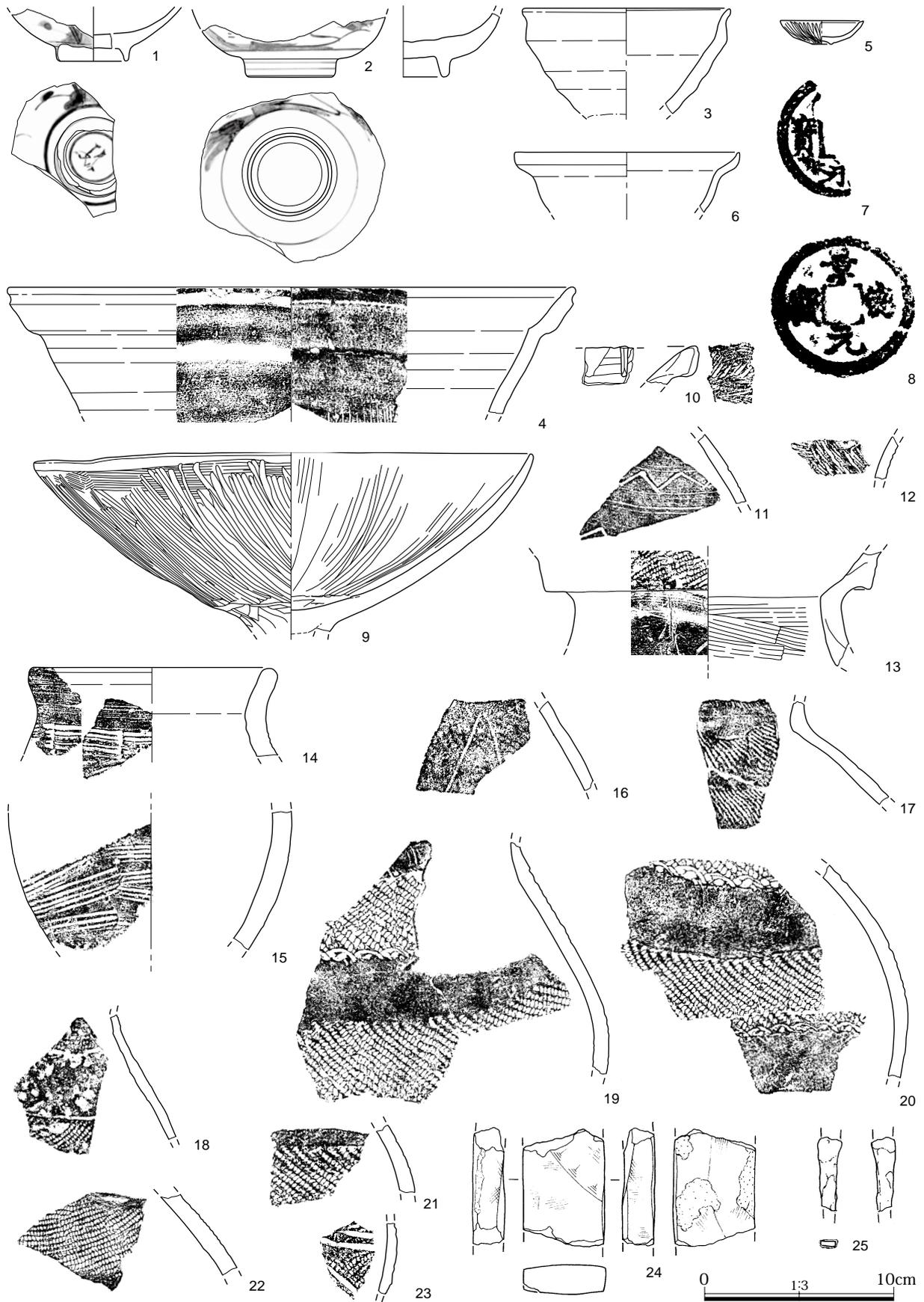
荒砥前田 遺跡では、弥生時代の遺構は検出されなかったが、その存在は重要であるので遺構外出土の破片12点全点を掲載した。この他に古墳時代初頭の住居や溝の埋没土からも弥生土器が出土しており、全体では65点の弥生土器が出土している。その内訳は、中期中葉～後半の土器が22点、後期39点、不明4点である。

中期中葉～後半の土器22点のうち、2点は中期中葉と思われる土器で、1点は斜縄文を地文に2本単位の沈線で幾何文を描く壺破片(第230図23)、もう1点は縄文地文に沈線の間に列点文を付した破片である。

中期後半と推定される土器は20点が出土したが、群馬県地域の中期後半竜見町式に比定できる土器は8点で、4区に偏在している。このうち頸部に簾状文、胴部に乱れた羽状に構成された条痕を施した土器は3点の破片から器形を復元実測した(第230図14・15)。これらの土器は接合しないが、胎土や器厚に共通性が顕著に見られ、同一個体と思われる。胴部整形は条痕文の可能性もあるが、竜見町式の甕に見られる羽状文と推定した。他の5点は簾状文や入れ子文を施した破片である。

また、中期後半と考えられる土器に帯縄文を施す土器が複数出土した。これらの土器は1・2区の微高地上に分布の偏りがある。2区1号住居・4号住居・12号住居の埋没土からそれぞれ出土した3点

第8章 遺構外の出土遺物



第230図 遺構外出土遺物(1)

3. 縄文時代の遺物

は同一個体と思われる破片(第230図19~21)である。これらの住居は古墳時代前期の住居であり、土器は遺構に伴うものではない。縄文原体は後期赤井戸式と同様の単節RLであるが、頸部から下が緩やかに膨らむ器形であることから中期後半と判断した。他の破片(18・22)も帯状の縄文施文と沈線区画、器形の特徴から中期後半と判断した。ほかに中期後半と思われる破片が3点出土した。沈線あるいは波状文で施文されているが、全体像を示せるような破片ではなかった。

後期の破片は39点出土した。このうち、19点は樽式の最終末に位置づけられると見られる破片である。小破片であるので確定は困難であるが、少なくとも後期前葉あるいは中葉の土器ではない。これらの樽式土器は1・2区の微高地にある古墳時代前期集落の住居や溝、周辺のグリッドから多くが出土しており、遺構出土の土器実測図は各遺構の挿図に掲載した。遺構外出土の樽式土器については分類状況のみを提示し実測図掲載を割愛した。樽式期の遺構は検出されていないが、周辺に存在した可能性あるいは、樽式土器を使用した遺構の存在を考慮しておきたい。2点は吉ヶ谷・赤井戸系の土器で、縄文は欠落している。残りの18点は、他地域の器形や

文様要素が見られる土器で、後期末に位置づけられる。

後期の破片は1・2区の住居や溝から出土したものが多く、14点が遺構内出土である。これらも各遺構の土器実測図に掲載した。第230図に示したのは遺構外の外来系土器である。第230図10は擬凹線と棒状貼付文のある東海系の壺口縁部、11は鋸歯文と赤彩のある東海西部系の加飾壺の胴部である。14は山陰系と推定される器形の壺口縁部に縄文(LR)が横位に施された破片であり、変則的な破片である。

遺構内出土の遺物を含め、弥生時代後期末の外来系の土器は、第12表にあるように、集落のある1・2区に偏在している。このうち18点中10点が東駿河系の壺であり、この時期の地域交流を示している。発掘区内では弥生時代後期末の遺構は検出されなかったが、周辺に東駿河を中心とした東海地域と交流した集落があったことを想定しておきたい。

3. 縄文時代の遺物

荒砥前田 遺跡では、2区で縄文時代の可能性のある土坑2基を検出した他は、明確な縄文時代の遺構は検出されなかった。しかし、前述したように2区3-82-I・J-17・18Gでは、加曽利E3

第12表 荒砥前田 遺跡出土弥生土器一覧表

時期・型式	遺構出土実測																合計	実測数	
	遺構外実測		1区	2区	3区	4区													
中期中葉																		2	1
中期後半 竜見町式																		8	3
中期後半 縄文+沈線																		2	2
中期後半 縄文																		7	5
中期後半 沈線																		2	
中期後半 波状文																		1	
後期 樽式																		19	9
後期 吉ヶ谷・赤井戸																		2	2
後期 東関東系																		1	1
後期 相模~東京湾																		2	1
後期 東海東部~南関東系																		1	1
後期 東駿河系																		10	8
後期 東駿河~西遠江系																		1	1
後期 東海西部																		2	1
後期 山陰系?																		1	1
不明																		5	0
																		64	36

第8章 遺構外の出土遺物

式の土器や打製石斧がまとまって出土し、4区権現山下位の褐色土面でも縄文時代中期から後期の土器や時期不明の石器が出土した。縄文時代においても何らかの活動が行われていたことは推定できる。荒砥前田 遺跡の縄文時代の様相は不明な部分が多いが、出土した土器の時期別一覧と、選択して図化した遺物図を掲載して、報告とした。

(1) 縄文土器

荒砥前田 遺跡で出土した縄文土器は第13表に示したように、グリッド出土土器・表面採集土器・古墳時代以降の遺構埋没土から出土した土器も含めて157点である。このうち46点が小破片であるため、時期や型式を分類できなかった。分類できた111点の時期は前期から晩期にわたっており、後期の土器が64点で時期の判明した土器の58%を占めている。前期は1～4区で偏った分布は見られないが、中期は2区の出土量が34%と多くなり、後期は4区の出土量が58%に及んでいて、時期ごとに偏りが見られた。晩期は千網式土器の破片が1点、4区3-D-8Gから出土している。出土地点

は荒砥川自然堤防上である。また、3区には前述した加曾利E3式に加えて、諸磯c式の土器も集中して出土していた。

本報告書では、このうち57点を実測・掲載した。実測遺物の選択は、全時期および型式を網羅するとともに、文様や器形の特徴を表現できる遺物を中心におこなった。

第231図1は加曾利B2式の深鉢上半部で、4区3-C-8Gの褐色土中から8点がまとまって出土し、接合した資料である。同図2も加曾利B2式の深鉢で、4区3-E-12Gで出土した。接合しないが、周辺のグリッドでも破片が出土している。第233図49・50も同様の破片である。この土器は、内外面とも丁寧な成形により平滑面を形成したのち、施文が加えられている。あらためて観察すると何点か特徴が認められる。

表面にはLR横位が施される。1条ごとに条径に相違があることから、2段撚り時に一方の条にのみ撚りが強くかかった原体を使用している。また、節内には、0段時の繊維痕が明瞭であり、やや粗い繊維束が用いられたことがわかる。2段時の不均衡な

第13表 荒砥前田 遺跡出土縄文土器一覧表

時期・型式	実測																合計	実測数
	1区	2区	3区	4区														
前期																	1	
前期前半																	1	1
諸磯a式																	6	
諸磯b式																	8	6
諸磯c式																	6	
前期末																	1	1
阿玉台式																	1	
加曾利E式																	3	
加曾利E3式																	18	9
加曾利E4式																	1	
称名寺1式																	1	1
堀之内1式																	10	6
堀之内2式																	12	12
加曾利B式																	3	3
加曾利B1式																	14	14
加曾利B2式																	3	3
後期																	21	
千網式																	1	1
不明																	5	
																	22	
																	18	
																	157	57

撚りは、このような繊維束の性質によるものかも知れない。口縁には1cm前後の無文帯をもつ。口縁部には7cm前後の縄文帯が形成されるが、この縄文は1幅3cm前後の横位施文により施される。なお、内面の沈線文帯の施文に伴う影響は認められないことから、内面施文後に縄文を施した可能性が高い。内面文様は、7条の平行沈線文帯により構成される。沈線文帯の幅は、口縁下3.5cm程度であり、この部分は輪積み部とも一致し、最下沈線文が接合部に沿った位置に加えられている。なお、沈線文内の一部に赤色塗彩とみられる痕跡が観察される。微細のため、明確ではないが沈線文帯に赤色塗彩が加えられて可能性が高い。

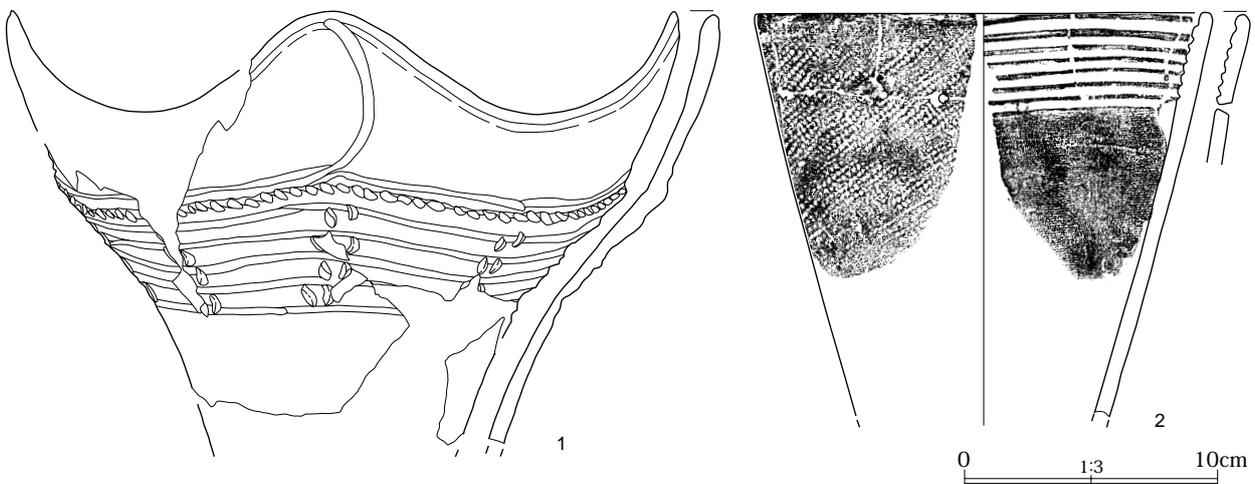
第232図22～24は加曽利B式期の底部破片である。底部外面には網代痕跡が観察できる。また21も加曽利B式期の底部破片であるが、内面の一部に縄の痕跡とみられる圧痕が確認できる。第233図57は千網式土器と見られる深鉢上半部破片である。周辺では晩期の遺跡は少ないが、南方800mにある今井道上遺跡で、浮線網状文のある千網式鉢破片が出土している。

(2) 石器

荒砥前田 遺跡で出土した縄文時代のものと見ら

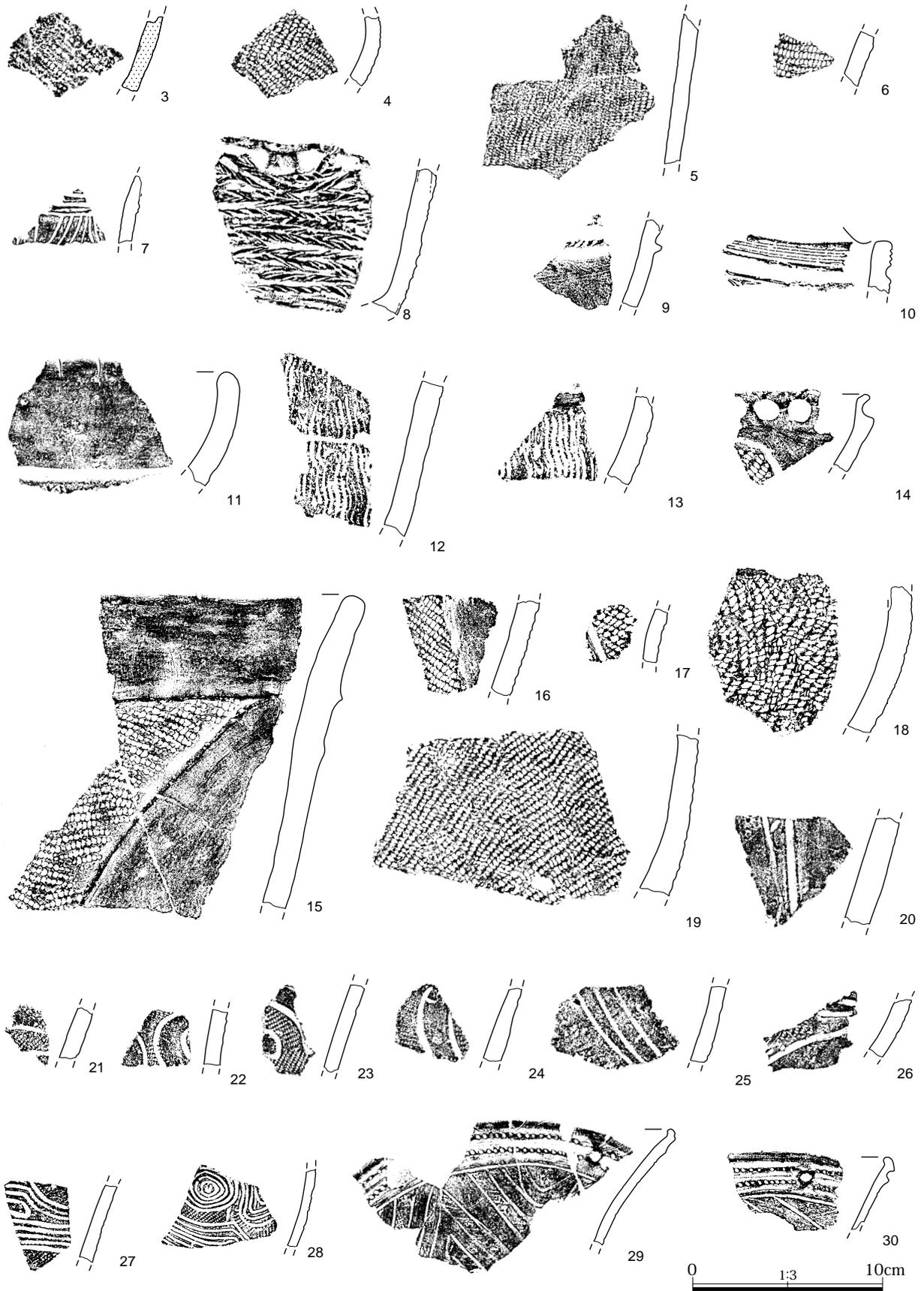
れる石器は46点である。このうち器種および形態を網羅して35点を実測し、実測図を掲載した(第236図～第237図58～92)。残りの11点については、遺物観察と写真のみ(PL190～PL192-93～103 マ-ク)を掲載した。これらの石器の時期は厳密には明らかにできないが、縄文土器と同様な時期の石器と考えるしかない。石器の特徴は、全体として赤城山南麓通有の器種・石材構成を示していると考えられる。なかでも打製石斧は使用過程にあるものが多く、製作段階を示すものはほとんどない。石鏃は完成使用状態にあるものと推定される。また、これまでの赤城山南麓の諸遺跡の動向からみれば、加工痕ある剥片や使用痕ある剥片は、遺跡内の剥片生産により素材が供給されていると推定され削器以下の小型の石器は遺跡で生産されているであろう。

第235図71の打製石斧は2区3-82-J-18Gで加曽利E3式の土器(小破片のため掲載無し)とともに出土した(PL98-6)もので、中期の石斧と考えられる。第237図92の多孔石?は、やや偏った位置に敲打痕による凹部がある。中世の大型砥石とも類似するが、ここで報告した。また、2区9号井戸で出土した大型礫(第54図1)が縄文時代の多孔石の可能性もある。

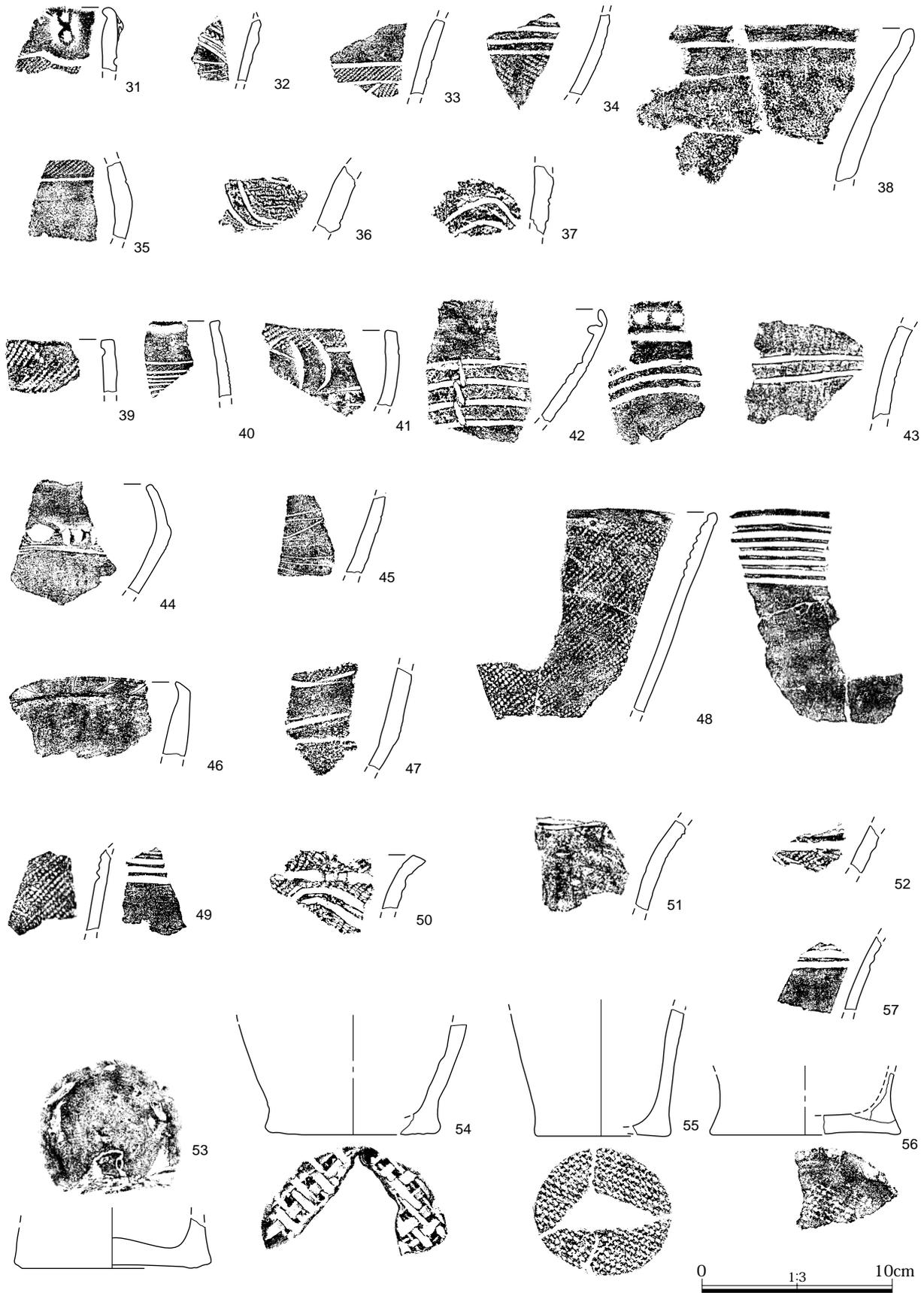


第231図 遺構外出土遺物(2)

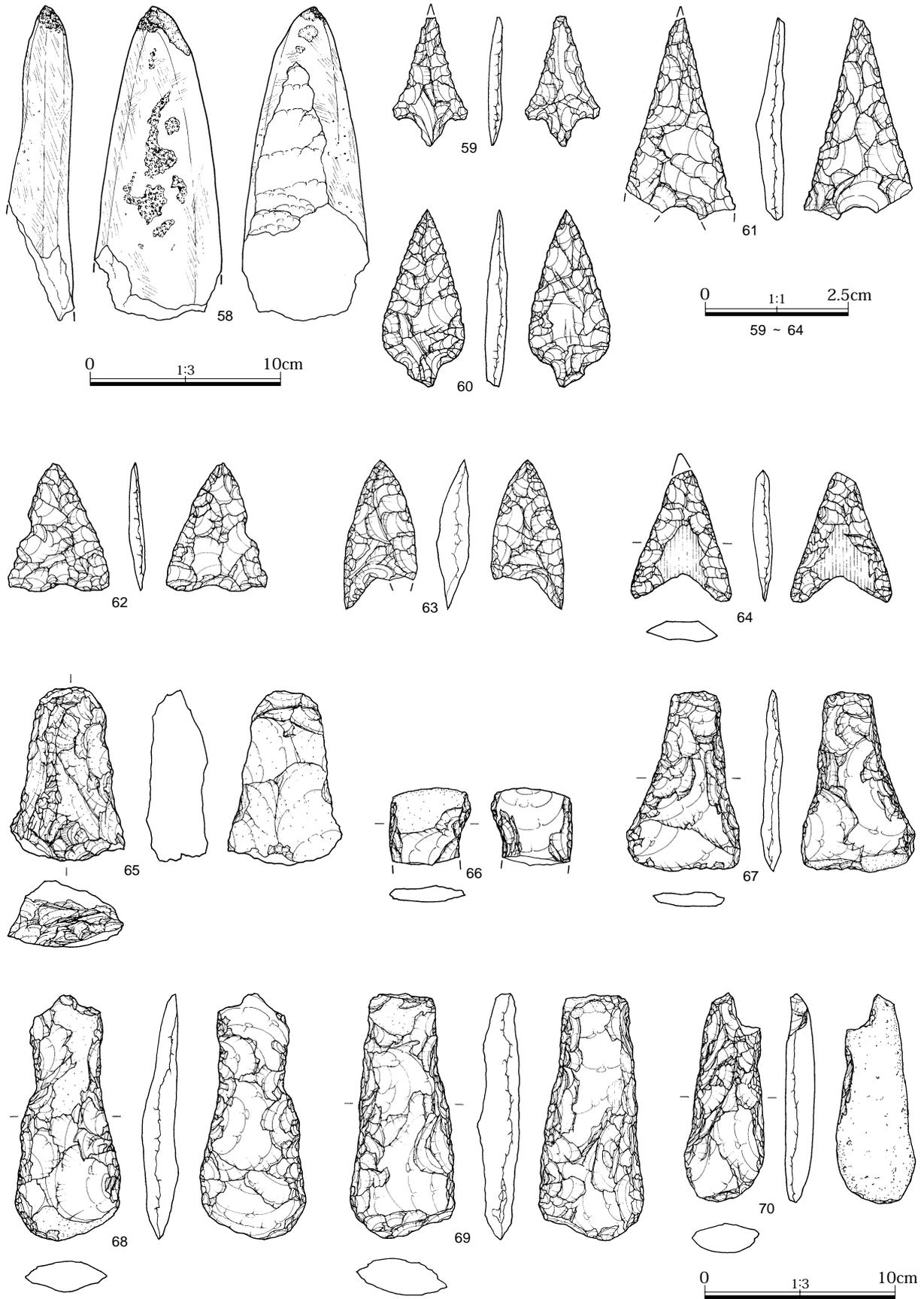
第8章 遺構外の出土遺物



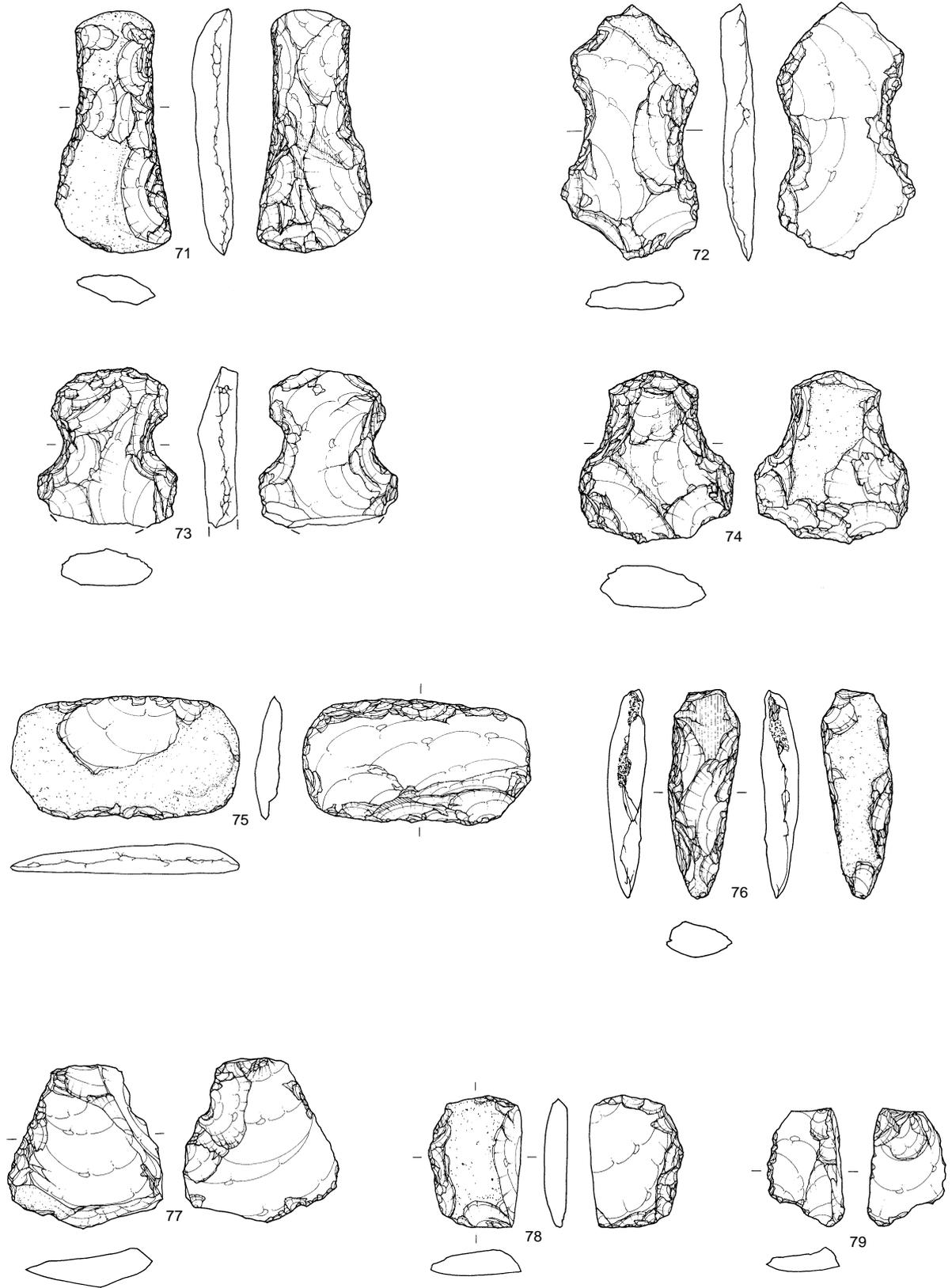
第232図 遺構外出土遺物(3)



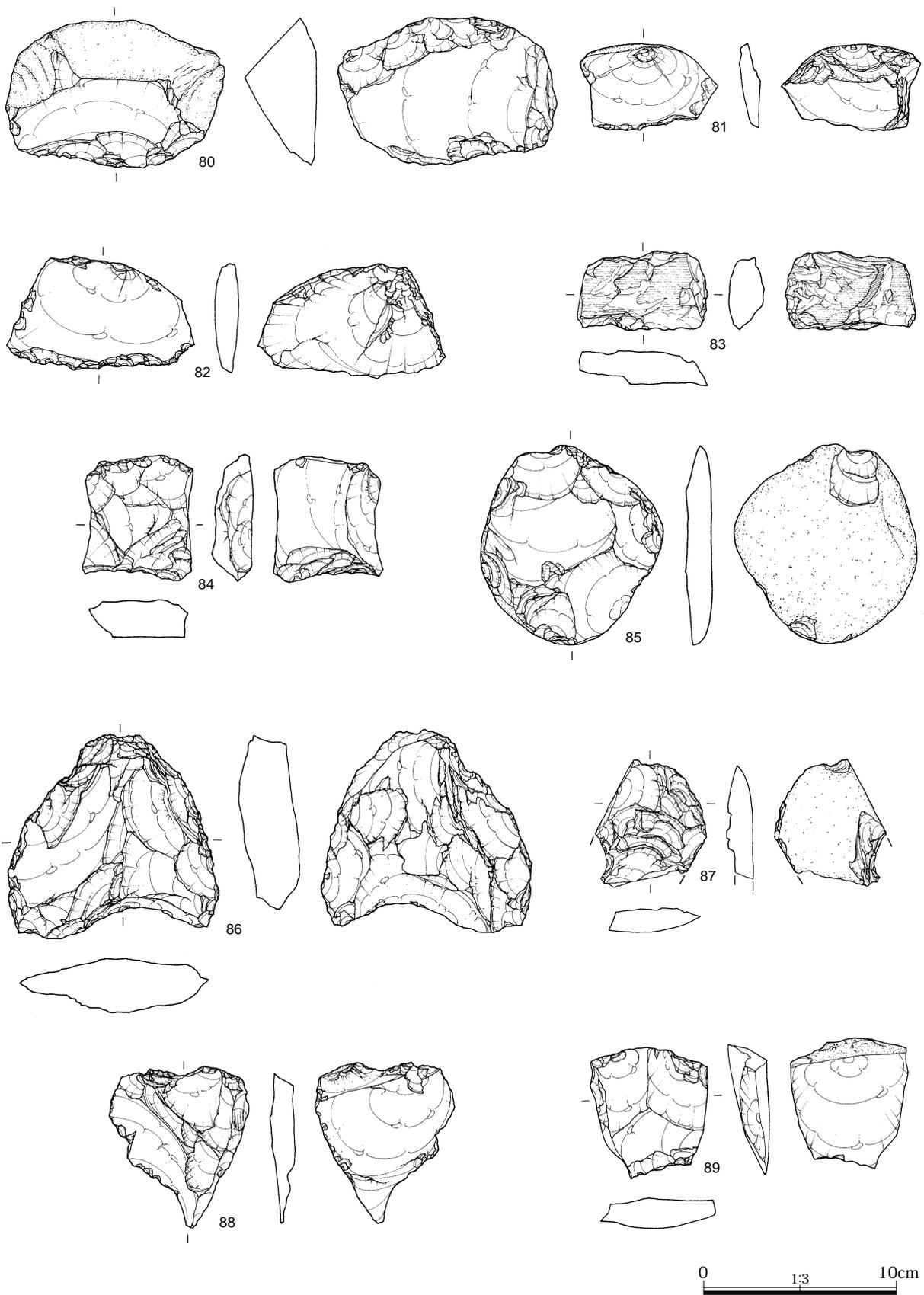
第 233 図 遺構外出土遺物 (4)



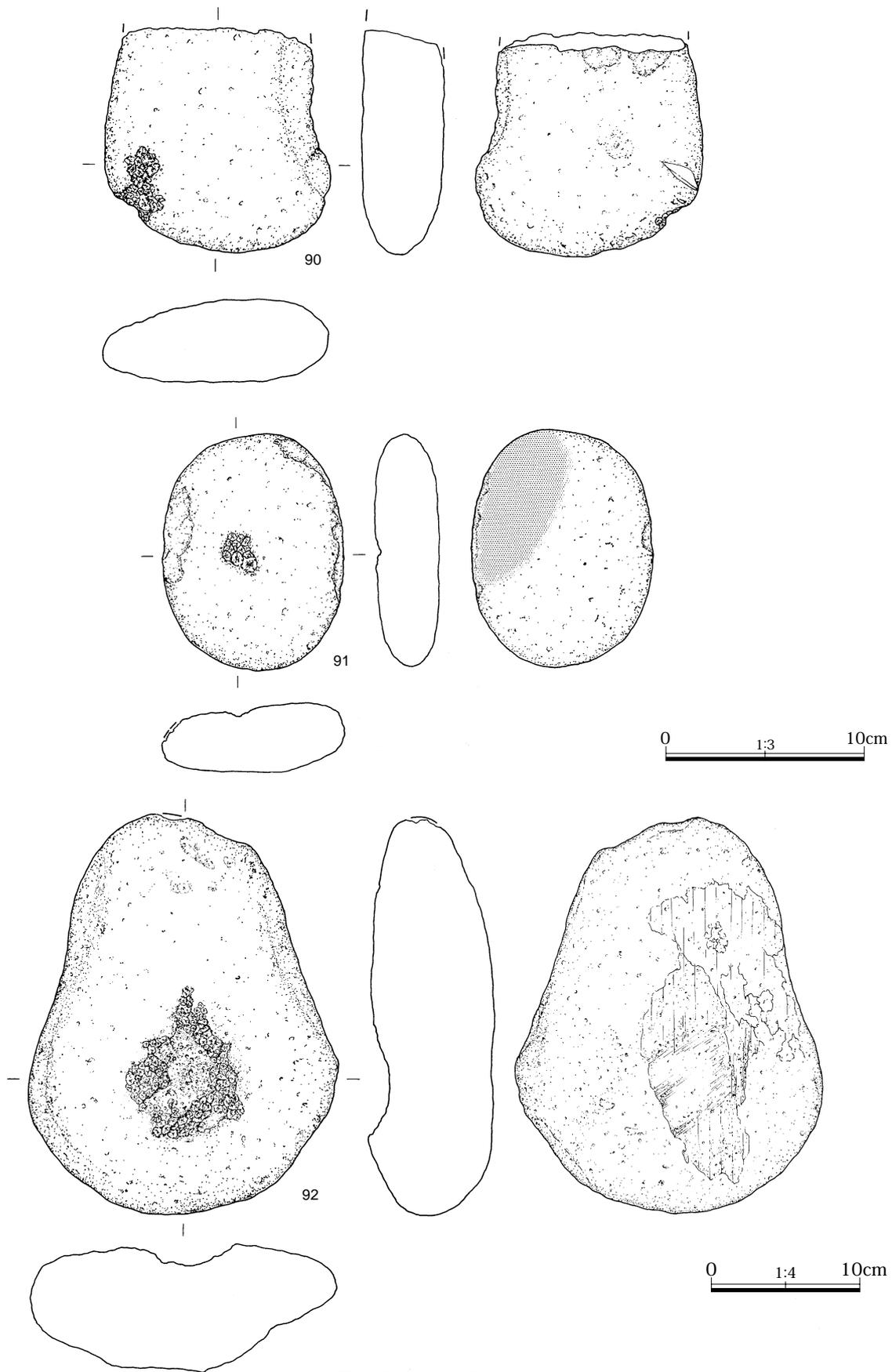
第234図 遺構外出土遺物(5)



第 235 図 遺構外出土遺物 (6)



第236図 遺構外出土遺物(7)



第 237 図 遺構外出土遺物 (8)